女子文壇

第八年　七月特別號　第七號

明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可（五日印刷納本）



東京　女子文壇社發行

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

文の活力は最も新しき形に在り

逍遙坪內文學博士序
大町桂月先生校閲
山下寂水先生編著

作法作例 新しき抒情文

舊套墨守は文章の死滅なり

讀者をして一擧手一投足の勞なく座ながら數十の大家に師事して、親しく作文の指導を受くるの感あらしむ。是れ本書の特色なり。

全壹册
四六洋裝
三二〇頁
定價五拾錢
送料六錢

作法作例 新しき敍事文

體裁定價
送料同上

近刊

發兌元
東京市神田小川町一番地
電話本局三〇六四番
振替口座東京二一四二六番
尙文館

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女子文壇七月特別號目次

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

口繪

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第五回內國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

壽美禮おしろい

登錄商標

◎壽美禮白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及藥店特製の化學的炭水素の新成績等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顏肌を艶麗ならしめ清々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「菫おしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨むに衞生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方東京橫濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◎西洋皮膚艶麗劑 壽美禮あらひ粉の特價

鐵、鹽、紅彩蝶番ひ鑵詰入 八錢
別製鑵詰 五拾錢
大袋 二錢
小袋 一錢

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及藥店が多年研究の上へ製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美くしくなす◎壽美禮あらひ粉は御髮洗に御用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチ！ーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性ありて◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろし水又は温湯に溶し又ぬかに混ぜ浴入浴の際用ふるをよしとす

登錄商標
西洋白色くなるあらひ劑
SUMIRE
WASHLNG IOWDER
壽美禮あらひ粉



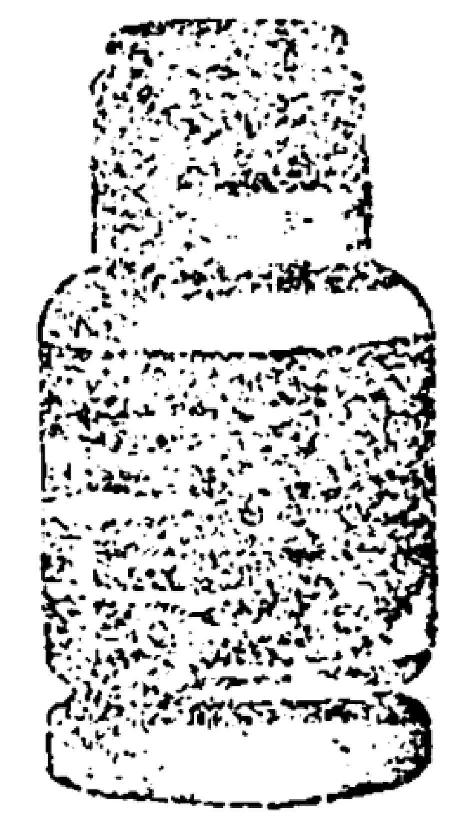
製造本舖 東京兩國元町（兩國橋際） 壽美禮堂謹製
（電話本所四百十一番）

販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店及藥種店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

五二會
功牌
賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴアイオレツト煉製
錫蓋附乳白硝子器入



壽美禮おしろい

ヴアイオレツトホ製

ぬり製 大壜二十錢 小壜十二錢
水製 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢
玉製
粉製
肉色各種
錫栓附乳白硝子壜入

湖畔



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

窪田通治氏著

評釋 伊勢物語

好評再版發賣

橋口五葉畫伯裝幀
四六判函入頗美本
定價金八拾五錢
郵税金八錢

注意
特別割引券
此の割引券を切抜き注文書に貼附し申込む時は郵税は弊館にて負擔す

一、『伊勢物語』は源氏物語と共に平安朝に於ける創作の雙璧で御座います。……けれども

二、源氏は大きすぎて一寸讀む譯に參りません、が『伊勢』は極く手頃で、而も源氏以上に現代的の親しみと、溢るゝ許りの若い情緒とを持って居ります。……本書は即ち、

三、『伊勢物語』の全文を掲げて、一々懇篤な註釋を加へ、且つ著者特有の優婉な詩想と、艶麗な才筆を以て『趣味深き批評』を加へました。……凡そ現代の

四、『文』と生れて、源氏を讀まないまでも『伊勢』は必ず讀まねばならぬもので御座います。

五、此頃の小説を讀むよりも、尚ほ深刻な或る感興を與へる」と文壇の評語でございます。

第參版發行

吉江孤雁氏著

旅より旅へ

小杉未醒畫伯裝幀

新式三六判型
携帶用瀟洒なる
美本全壹冊
定價金四拾五錢
郵税金四錢

自然を愛する者は『旅』に出でよ、『旅』に出づる者は本書を携へよ。若き／＼情緒に溶かされたる大自然の大景を見んと欲する者は本書を繙け。……而して清新なる筆致と著者獨特の境地との間に、其の若きローマンスの影を見るべし。……

中澤臨川氏著 露西亞印象記 定價金八拾五錢 郵税金八錢

窪田通治氏著 空穗歌集 定價八拾五錢 郵税金八錢

發行所 東京神田區表神保町 振替東京四一二三番 中興館書店

THE GIRL'S GRAPHIC

少女畫報

（第一年第七號定價拾五錢郵稅壹錢五厘）六冊稅共九拾錢 十二冊壹圓七拾五錢

編輯顧問 高島平三郎先生 倉橋惣三先生

◉口繪 伊豆の海 中川八郎 よき朝 竹久夢二

畫報

▼朝の窓▼子猫▼歸省▼庭球の姿勢▼海水浴

▼白孔雀▼女學校遠足▼勇敢の少女▼讀者會

▼御前講演の二少女▼お嬢樣の惡戯▼お汁粉

●二十四頁三十有餘の鮮明美麗なる寫眞版は

●悉くこれ少女諸嬢が天眞爛漫なる活動振!!

讀物

- ゾットする話…高島平三郎
- 末頼母しい女學生…三輪田元道
- （少女小説）養女…尾島菊子
- 土耳古イソップ…佐々木邦
- （小説）店前…國木田治子
- 女學生の通學姿…たき子
- （小説）白鳥行…堀内新泉
- 新着の白い孔雀…黒川義太郎
- （小説）お土藏の二階…みゆき女
- 文子さんの腹痛…手塚かね子
- （小説）京子の死…みどり

●私は蟇口…花うつぎ
●虎の門修學旅行お供……
●忘れぬ人…夢二
●女學校小學校參觀記……
●果物の菓子 指原乙子
●童話「かごめ」……
●通學用紙入 蓮子
●月見草と紫陽花……
●少女ノート……鈴子
●懸賞 習字綴畫和歌作文一口
●噺判じ繪習字其他色々…

◉第一回少女畫報愛讀者會の記◉

東京麹町區飯田町四丁目四番地 東京社 電話番町二三三九 振替貯金口座東京一一八一八

THE LADY'S GRAPHIC

婦人畫報

七月一日發行 七月卷一冊廿五錢 郵稅二錢五厘 三冊八十錢 六冊一圓五十三錢 十二冊二圓九十四錢

畫報

◎(附錄)ゆふ月（中川八郎氏筆 二頁大三色版）

◎お茶水高女七里濱行 ◎福島中將の邸宅

◎愛らしき子供 ◎高い〳〵 ◎赤十字大會

▼皇后陛下 女子高等師範行啓

▼皇太子妃殿下 女子大學行啓

▼閑院宮妃殿下 台臨

▼東伏見宮妃殿下 台臨

◎花房博士の家庭 ◎少女畫報大會……

◎名家十數令孃 ◎千家表茶懷石

◎田邊遠州氏夫妻金婚式

▼時代の髪形

◎黒須岡崎新代議士夫人

▼海水浴場にて

◎二十年前の女學生

▼伯爵の一家夕涼

◎第三高女同窓會……

▼聲樂家と愛猫

◎いづれあやめか……

▼德川時代上﨟風俗

讀物

◎避暑地と感化……横井博士

◎なぜ人は衣を着るか……久保學士

◎濁流中の子孫……遠藤博士

◎不完全な日本住宅……佐藤學士

◎様々な女の氣質……高島平三郎

◎鞠の教訓……久留島武彦

◎一番美しい女の姿……田邊學士

◎旅行は面白いもの……岸夫人

◎凉しさうな夏の姿……岡田三郎助

◎體に似合ふ着物……長谷川時雨

◎男まさりの女……春鄰

◎山本藏相夫人多惠子の君

◎この頃流行の髪……關口ぶん

◎金婚式の祝ひ……三宅花圃

◎避暑地はどこがよいか……

◎英雄の妻に寄せた優しい手紙……春風

◎子供の庭……倉橋學士

◎小說 ある女に與ふる手紙……島崎藤村

東京市麹町區飯田町四ノ四
東京社
電話番町二三三九 振替東京一八一八
（全國各書店に販賣す）

中元の御進物

として最も適當せるものは、左の如し

(一) 体裁のよろしきもの。 (二) 携帯に便利なるもの。

(三) 誰にも直段丈けに見ゆるもの。

(四) 贈られたる方にも役に立つもの。

右の品々は目下盛に賣出しいたし居候間、御下命被下度候

東京 駿河町

三越呉服店

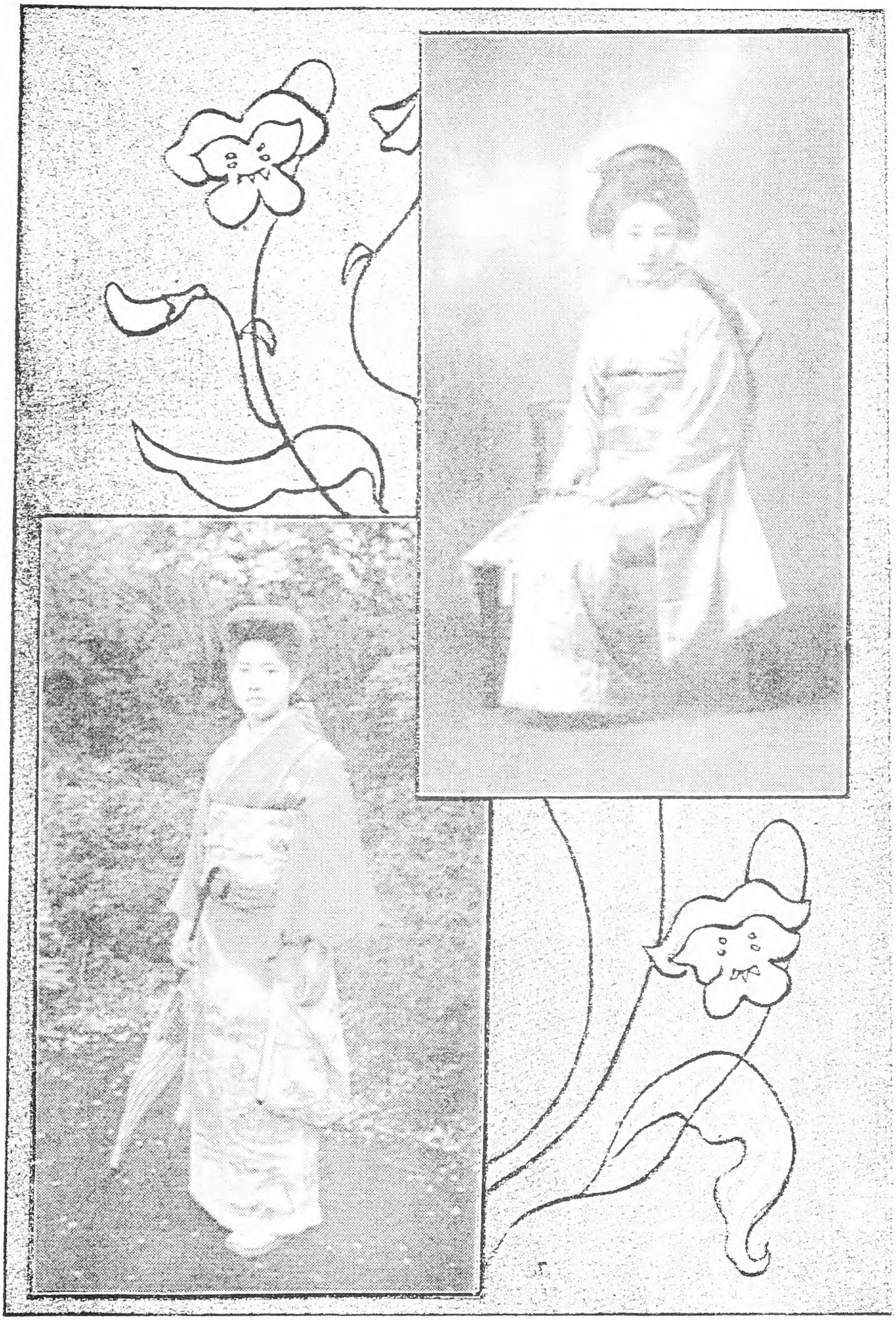
露臺



（滞欧中に撮影せられしもの特に本社へ寄せらる）

男爵三井八郎右衛門氏令孃寛子

薫風



侯爵木戸孝正氏令嬢春子

東宮武官武富邦鼎氏令嬢朗子

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

滋養強壯グリコナール錠

▼北里博士指導佐伯氏發見の方式に由り製出したる本品は卓越廣汎の用途を有する滋養强壯劑にして特に肺結核慢性胃腸病及一般病後産後等の營養不給に適應す



各地有名藥舖にあり
定價百錠入金壹圓
外送料金八錢
說明書御申越次第郵呈す

發賣元 東京市日本橋區室町三丁目 三共合資會社

本劑と同一なる消化効力ありと稱し粗惡品を强賣する向あり信用厚き藥舖より御買上を乞ふ

タカヂアスターゼ

類似品數多あり
高峰博士發明品と
御指定を要す



本劑の試驗報告
御申越次第進呈す

發賣元 東京市日本橋區室町三丁目拾番地 三共合資會社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

銷夏的艶文學の二大異彩

沸騰せる熱狂的歡迎は重版又重版
旬日して第三版既に盡きんとす!!!

花柳情話 紳士と藝者

都新聞記者 吉見蒲州遺稿
伊原青々園序
遲塚麗水序
大谷聽濤序
井川洗厓繪

口繪表紙木版
鳥子彩色濃艶
コロタイプ寫眞
木版百餘個入
定價各金五十錢
郵税 各金六錢

昔の戲作者の化身は今の新聞の艶種記者である。魯文と種彦が兩大關で其下にいろ／＼な子分が居た。魯文派では橋塘。貞爾などの子分があつたし種彦派には篁村が居る寅彦が居て魯文派より文筆上の効果が多い。我吉見君は此孰れの派にも屬せぬ後進の人で而も大なる異彩を放つて居た云々（青々園序文の一節）蒲州君の文狹斜の風流を寫して儂紅依綠の情趣を盡す。（中略）綺句吻を衒ひて出で麗語紙に落ちて走り西鶴春水皆顧ふに任せ一九三馬驅使に從ひ艶冶清婉讀む人をして恍惚として紅燈綠酒の銷金窩裏に逍遥するの想あらしむ（麗水序文の一節）

人情本 むかし

都新聞記者 平山蘆江 伊藤みはる 共著

綿々の情。胸をそゝり血を沸かし。洒脱の筆頤を解き頬を染む。此著や當代得易からざる珍書にして。春水種彦を地下に喚び起したるものなり。銷夏綠陰の好讀書として薦むるに愧ぢざる也。

發行所 東京神田區末廣町十八 啓業館 ◎ 賣捌 東京神田表神保町 上田屋

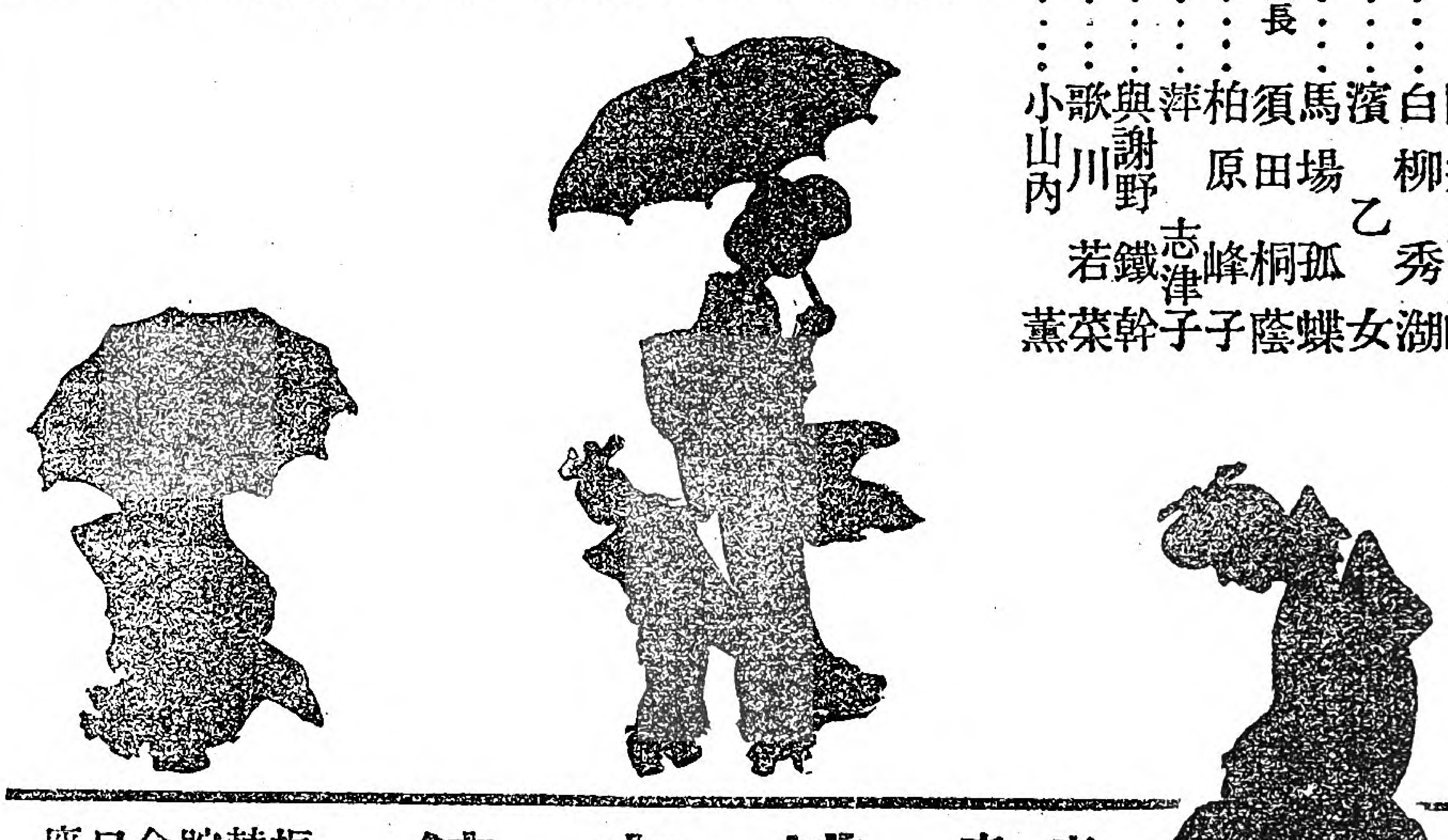
Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第拾二卷第十號　七月一日發行

女學世界

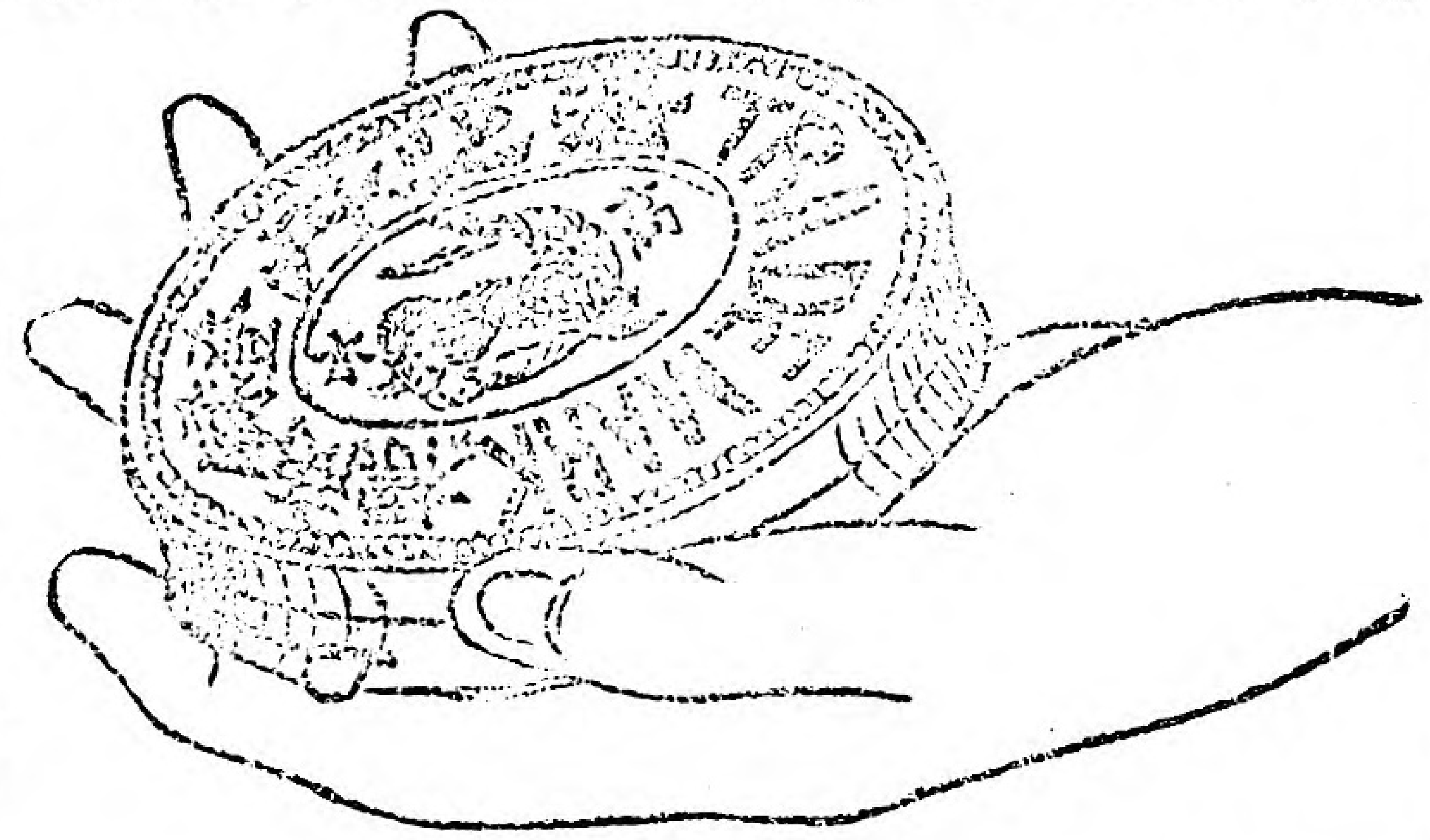
□菊版紙數二百八頁
□口繪原色刷壹頁
□石版寫眞版十頁餘

正價廾錢
郵税二錢



東京本町　博文館　振替貯金口座東京二四〇

人若し藥を需めんとせば須く撰擇を要す
清心丹の三大特色は
一、効能の確實
二、品質の善良
三、價格の低廉



主治効能

心思鬱憂、頭痛眩暈、胸痛腹痛、過飲過食、惡心嘔吐、溜飲宿食、中暑中寒、下り腹疝痢、舟車不快、喀痰咳嗽、咽喉不調、齒痛口臭、

定價
壹圓箱入　五拾錢箱入　參拾錢罐入　拾五錢罐入
拾貳錢瓶入　貳拾錢紙包　拾錢紙包　五錢紙包

本舖　東京市日本橋區元大坂町八番地　高木與兵衛

山十印
銚子の犬吠岬と君が濱と共に
最上醬油



釀造元　千葉縣銚子港　岩崎重次郎
（電話銚子三〇番　振替口座五七二番）

三井合名會社鑛山部理事團琢磨氏家庭



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

聯珠



富士屋ホテル山口正造氏夫人及令妹

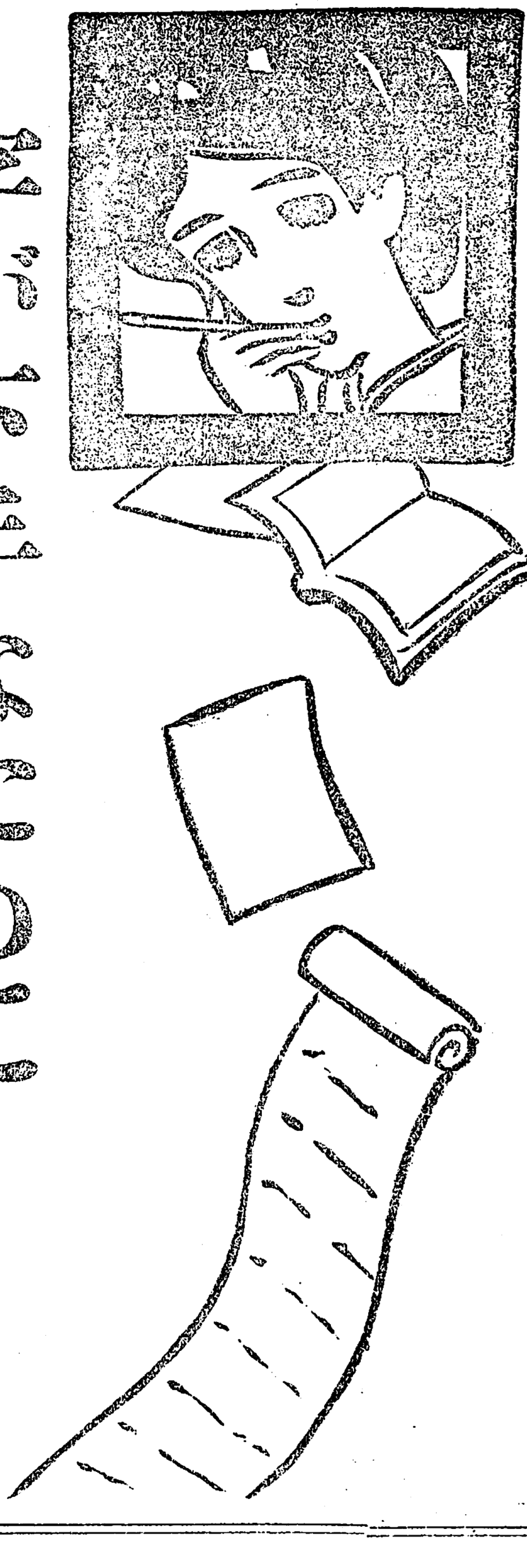




高橋醫學士夫人、秋月秀子、高橋富子

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

字が下手なために



生涯どれだけ恥を掻き、損をなさるか分りますまい。立派な御婦人でも釘の折れたやうな字をお書きなされるのを見ると何だか急に御身分や御品格が疑はれるやうな氣が致します。併し如何に字の拙い方でも近頃評判になつて居ります、専賣特許の習字速成法で練習なされば僅かの間に驚くほどの能筆家となられますことは既に四拾萬の實行者が證明されて居ります。殊に手本の書者は有名な小野鵞堂先生であります、この珍らしき方法を御存じない方は東京本郷區大學正門前帝國習字速成學會（電話下谷三三一〇番）へ「ハガキ」で御申込みになれば見本附き會則を無代で直ぐ送つて來ます。

貴婦人達はナゼ美しいでせう!!!
▲其れはこの樣にしてみがき立てるからであります

美顔と化粧法

定價送料共
金三十七錢
切手代用は
金四十錢

目次の大略▲色白くなる方法▲赤き顔を櫻色にする方法▲シワのよらぬ方法▲キメを細かにツヤを出す方法▲日にやけるを防ぐ方法▲歯を白くする方法▲手の色を白くする方法▲髮の毛を黒くする方法▲毛のぬけるを止める法▲毛をのばしつやを出す方法▲ふけを去る方法▲ちゞれ毛くせ毛赤毛を直す方法▲あるべき所に毛なきを生ずる方法▲やせる法ふとる法▲鼻を高くする方法▲髪をよくする方法▲入浴の方法▲化粧品の撰び方▲おしろいのつけ方▲衣服の模様と縞柄▲衣服の縫方▲衣服の着方
此外いろ〳〵の事が書いてありますが皆どなたにもすぐ出來る事ばかりで其効果も面白い程あらはれます。私方へ二錢切手十五枚又は一錢五厘切手二十枚御申越し下されば一千部限り特別に御分ち申上げませう
本書著者　東京神田錦町三ノ二　高柳孝子

色白くなる

色黒き方、青き方、赤すぎる顔の御方は郵便切手二錢封入御手紙下さい、必ず色白く美しくなるよい藥を御知らせ致します、わけて日に燒けて黒くなつたなどはすぐ白くなります。皆樣に御實驗を願ひました所、澤山の御禮狀をいたゞいて居ります。
東京神田錦町三ノ二　高柳こう子

東宮侍講本居豐穎先生題詠
文學博士小杉榲邨先生序文
下田歌子先生題詠
國文學士 小森松風先生編

好評

女子美文作法

▲全一冊大判二百卅頁　賣價貳拾錢郵税四錢
美文の作り方を最も明瞭に解説し、加ふるに大家の名文を模範として擧げたれば文章を作り、文章を愛する諸孃には寸時も座右を離すべからざる良書なり

報知新聞記者中村木公君編

好評

實地精査 女子遊學便覽

▲全一冊中判洋装　賣價拾五錢郵税四錢
子女を東京に遊學せしめんとする父兄も之を讀め自ら學校の選擇に迷ふ諸孃も之を讀め一讀釋然として東京女學校の消息を知悉するを得む

出版元　東京市京橋大鋸町　女子文壇社　賣捌到處書店
（振替口座東京壹七貳九番）

リン病自宅療法

▼二大靈藥 ▼自宅療法 說明書 郵券二錢封入申込 無代進呈▲▲

藥價 田中博士處方

内服 淋治丸 輕症壹圓 重症貳圓 送料八錢

四條家秘傳藥 外用 淋治劑 輕症半圓 重症壹圓 送料四錢

『内服藥』は田中博士の處方に基き調劑したる最新發見藥にして如何なる重症も直に偉効を奏する一大靈藥也『外用さし込藥』は四條家秘傳藥にして安全且つ簡便自宅療法にて偉大の効能あるは營利的賣藥の比にあらずと賞讚せらる詳細は說明書

東京神田裏猿樂町九 齊仁堂藥房 振替東京二〇四一六

るいれき（頸腺結核 淋巴腺腫）

▲本病は古來不治症と稱せらる、現今本病の治術としては先づ局所切開摘出するを通例とす、然れども十中の八九迄は再發す、眞に治療上の一大缺點なりとす。

▲金線草丁幾は此の缺點を救はんが爲め多年の研究により發見せられたる理想的内服藥にして病症の輕重を問はず本藥の服用により治癒せしむるのみならず體質を一變せしむるが故に後日再發せざるに至らしむ

▲本品の分析試驗並に多數の實驗報告は申越次第呈す

▲代價一ポンド入參圓、二分一入壹圓五拾錢、三分一入壹圓の三種あり送料六十五錢、中小拾錢

東京日本橋區本銀町四ノ六 東光堂 三田幸藏 振替口座東京七六六七

◉十ケ月卒業

和歌講義錄

入會金免除す

◎本會は眞面目に短歌を研究試作せんとする初學者の爲に現代詩歌壇の名家が特に講演せられたる平易簡明なる和歌講義錄を發行し、懇切なる作歌の指導と、短歌に關する專門的知識を供給する、短歌に趣味を有する人、短歌を眞面目に試作せんと欲する人、現に作りつゝある人の入會を待つ

▲見本つき會則往復葉書にて申込次第無代進呈す

東京神田旅籠町一丁目廿三 大日本短歌會 電話下谷四八一九

大學方局 胃腸の藥

口は萬病の門にして胃腸は命の基なり世の中には永年の胃病や慢性下痢でお困りの方は隨分多い様です、僕も久しく胃病で難儀をして居つたのですが福岡大醫の御發見にかゝる頓服胃腸藥を連服してからは全く病を忘るゝ様になりました運動不足とか常に胃病などでお困りの方は御遠慮なく送費封入御申越下さい全治の御禮として無代送藥いたします。

東京下谷車坂五五 ◉三光堂方 御前政一郎

◉試藥無代進呈、輕症分五拾錢、慢性症壹圓

涼しき綠蔭の好讀物

巖谷小波先生作
山村耕花先生畫
少女對話選
上装美本　定價金八十錢　郵税金八錢

新刊圖書目錄進呈

巖谷小波先生閲
小野美智子女史作
姉妹の書簡
（新刊續々發賣）

▼四六版洋装美本　定價金四十錢郵税四錢▲
春は散る花の行方を偲び、秋はゆく雲の流を望んで、云ひ知らぬ胸の痛み、わけもなく涙含ましう。遣瀬ない悶の、たゞ一人忍ばしには、餘りの小さな胸の堪え切れませんもの、訴へずにはゐられませんもの……。此の思ひ、此の悶、知るはたゞおなじ心の姉妹よ！。懐しい、床しい、偽りない、その頃の純情は、若者も一度は味つて來ました。再び歸らぬ此の春の趣しうて、思出にまと染めました此の『姉と妹の書簡』、願くは世の少女姉妹の友なれ！。

巖谷小波先生
沼田笠峰先生　共編
日本少女寶典
（空前の大歡迎）

▼三六版上製函入頗美本　特價金壹圓廿錢郵税八錢▲
少女の友評　本書は教科書以外の参考用、または自修用として、少女に必須な學藝ならびに日常の心得を平易簡明に記述したもので、本欄には、小學校及び高等女學校に於ける必須科と隨意科とを適宜に按排して掲げ、上欄には趣味の涵養に資すべき少女美談を始めとして、日常の心得、讀書法その他の事項を網羅してあります。現代少女の學修用書として多大の利益あるものと信じます。

沼田笠峰先生著
山村耕花先生畫
少女家庭物語
（好評續々増刷）

▼三六版上製三色畫入美本　定價金五拾錢郵税六錢▲
愛する少女諸子よ、諸子は楽しき家庭團欒の席で趣味あるお話を聞きたいとは望みませんか。父母弟妹とゝもに平和な空氣に醉ひながら、互ひに清いお話を語り合つたら、どんなに愉快なことでせう。この書は、即ち家庭に於ける優しい少女の物語を集めたものです。家庭の花、平和の光と稱へらるゝ少女諸子は、この書を座右に備へて、かゞやく團欒に一しほの興を添へ給へ。

河井醉茗先生序
溝口白羊先生編
續少女模範文集
（好評忽ち三版）

▼四六版洋装美本　定價金三拾五錢郵税六錢▲
新しい佳い文章を作らうと思つたら、どうしても新しい善いお手本に就かねばなりません、此『續少女模範文集』は方方の少女雜誌の中から模範とすべき優等の文ばかりを選んだものですから、少女方の作文のお稽古には、最も適當した本であります、前の『少女模範文集』が、羽の生えた樣に盛んに賣れて行つたのを見ても、此等の本が、どんなに皆樣に歡迎されて居るかゞ分るでせう。

沼田笠峰先生序
溝口白羊先生編
少女模範文集
忽ち四版　定價金卅五錢　郵税金六錢

往復端書にて申込

發兌元　東京市神田區南乘物町　振替口座東京六九九番　誠文館

白百合



書家加藤松香女史

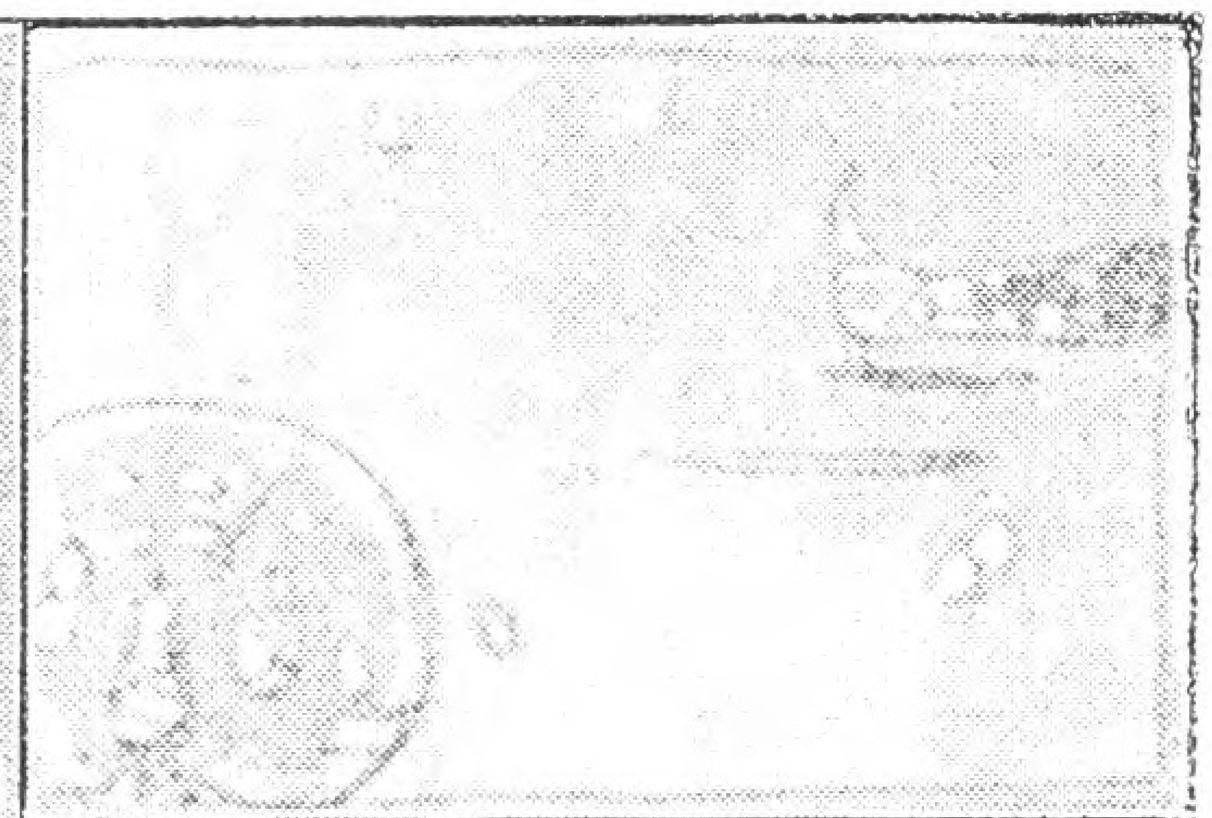


河村宮內次官令孃總子

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

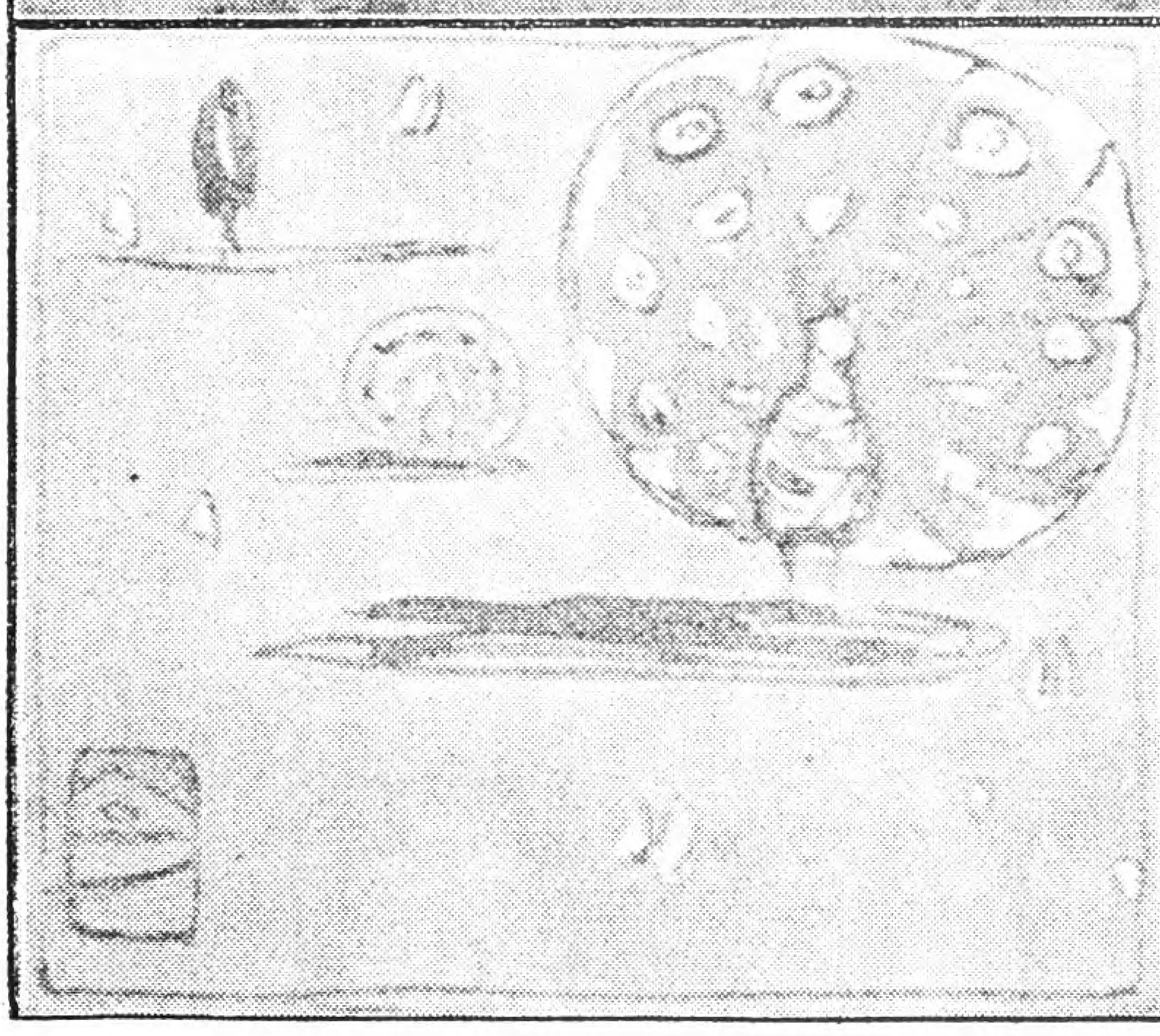
睡蓮





長谷川時雨女史





江木欣々女史

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

本會員帽章

第二回新學期開始

實物三分ノ一大

實物二分ノ一大

本會員徽章

會員大募集

入會の最好期來る

此際入會者に依り種々の大特典を與ふ

本會員及本會卒業生の特典

本會員には大家の所論を載せ會員の作品を滿載せる文學雜誌を無代進呈す◎本會員には文章其他の無料添削の特典を與ふ◎本會員には事情に依り無料講習の便あり◎本會卒業生には學資貸與の特典あり◎本會卒業生には各新聞雜誌記者に就職紹介の便宜を與ふ◎本會卒業生を會友とし種々の便宜特典を與ふ

初等文學講義錄

教授科目　文典。論文。小說。書翰文。記事文。新聞學。和歌。俳句。新體詩。國語。漢文。文學概論。日本文學。西洋文學。雜科（各科講師は專門の學士文士）

講義錄見本附き　規則書　無代進呈す

五ヶ月卒業　會費一ヶ月金廿五錢　全學期壹圓廿錢　東京神田區西小川町　電話本局四五四七番

大日本文學會

第三回新學期開始

入會の最好期は今なり

此際入會者に限り種々の特典を與ふ

通信教授科目

梅の花、忘れな草、八重櫻、つゝじ、藤の花、桔梗、朝顔、すみれ、南天、庚申ばら、菊、撫子、百合、牡丹、スウヰトピー、チユーリツプ、葡萄二種、其他種々花數種、材料の製法等本會獨特の技術に近來更に歐米の通信教授法を參酌して改良を加へ其上器械、材料見本まで一々添へてありますから誰でも容易に出來ます

會員募集

美術造花通信教授

本講義の特色

花瓣の裁ち方、造り方、葉の造り方、花莖の組立方等總て造花に要する染色法並に器械の使用法に至るまで一々圖解を施したる新工夫の說明がしてありますから直接教師から習ふと同一であります全く素人の方でも前記器械を以て形を造り見本と比べて組立つる時は至つて容易に熟達しまず

製品見本並に規則書郵券十錢送れば送呈す

速成二ヶ月卒業　會費金三圓也 全學期分　東京神田西小川町一ノ一　電話本局四五四七番

美術造花講習會

梅どく　りん病　ぢ疾　わきが　生殖器諸病　神經衰弱症　婦人科

東京淺草瓦町廿八淺草橋通瓦町電車停留場横◎朝八時より夜九時迄　中央醫院

色の黒き人　にきび　子宮病　月やくとまりたる病　子なき婦人

梅どく諸病　りん病消渇　わきが　ちゞ　た　皮膚病　蟲等

生殖器神經衰弱症遺精發育不　諸病神經衰弱陰萎早漏發育充分　記憶力減衰　聽力減衰

病症を記し郵券貳錢を送らば其病を速治する專門醫中央醫院々長處方の特効新藥說明書を送る

▲東京淺草區瓦町廿八番地淺草橋通瓦町電車停留場横　中央藥院

第十四回新學期　開講

產婆　看護　會員募集

目的　本會は家事忙がしくして學校に入る事の出來ない人や邊僻な地方に在つて專門家の教に接する事の出來ない人々の爲め自宅獨習で產婆學及看護學を學ばしめ一人前の產婆及看護婦を養成するを目的とす

產婆科六ケ月
看護科四ケ月　卒業

規則要郵券三錢

東京市四谷區内藤町ホノ七
東京產婆看護講習會

第二巻七號

青鞜

七月號

金二十五錢

青鞜研究會

ダンテ神曲(火曜)　阿部次郎氏
モーパッサン(金曜)　生田長次氏

● 社員外の婦人にも聽講が出來ます。
● 毎週火、金の二回午後二時より五時迄
● 會場は本郷區駒込蓬萊町萬年山勝林寺
● 會費五拾錢

發行所　東京本郷區駒込蓬萊町萬年山内　青鞜社　電下谷三七七六　振替東京一一六〇

發賣所　東京堂　東海堂　北隆館　盛春堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第二版發賣

▼報知新聞評

著者は筑波根詩人として知られ詩壇唯一の異彩なる研究者として十年一日の如く常陸大寶湖畔より自然の聲を霑らせる第一人者なり、痛ましき病軀を撫して興到れば筆を採り詩によつて活き文によつて慰むもの總てこれ名利の他にあり即ち著者が多くの知己を有する所以たらずんばあらず、本篇收むる處の散文十九篇は一面著者の人生觀を語るものにして哀艷の詩を讀むが如く又常陸平野の大自然を叙しては鄙歌淋しき田園の旦暮を詳かにせり、徒らに動搖し易き文壇の一劃に著者を得たるは大に歡ぶべく茲に純化せられたる自然の啓示をこの一本に盛せるは正に〳〵賞すべき也

▼國民新聞評

夜雨は天成の詩人也自己を飽まで其煩惱の出立點とする處は夜雨の先天的境遇已むを得ざるに出づる處夫だけ狹けれど深し陰鬱にて且つ沈痛也殊に此集には戀に對する執著の影に人間としての詩人の現世に對する苦悶を描いて多恨の胸を撲つて痛恨せしむ文藻の豐麗と相俟つて彼の詩に醉ふものに無限の感銘を與ふ新調と否とは早や問題に非らず。

好評如湧

横瀬夜雨先生著

夜るの筆

全一冊

紙數三百卅頁

上製 上等紙印刷本綴總クロース製天金頗雅裝 定價八十錢 送料六錢

並製 洋裝美本 定價五十錢 送料六錢

▼大阪毎日新聞評

筑波山下の病詩人夜雨が清寂なる境界に居つて筑波根の自然を歌ひ又感想をありの儘に發露せる新詩と文と十九篇を集めて一冊としたものである「いつぞやの日記」「峠より麓まで」「雀鳴く野より」の三篇は著者の詩才の凡ならざるを窺ふに足るべき名篇で清澄最も吾人の感興を惹いた清新の味に富む好著。

▼萬朝報評

著者は今筑波山麓に不斷の坐禪にあらざるべからざる薄倖の青年詩人にして坐禪の夢と想との凝つて成れるもの即ち此集なり詩、小品、紀行、日記、隨筆、手紙等集むる所凡て十九篇、新しいロマンチツクな幻影は獨特の筆致と相集つて自ら一種の色彩をなし紀行日記最も見るべし装釘又瀟洒なり

第二版 七月十日發行

發兌元 東京市京橋區大鋸町 振替口座東京一七三九 **女子文壇社**

東京○東京堂、至誠堂、東海堂、北隆館、上田屋、良明堂○大阪盛文館外全國到處書店取次販賣

五十ポンド限り

女子文壇顧問
化粧問答
藤波芙蓉先生
實驗發明

日やけ止め

日に焦ける季節が來ました、けれども本當に日に焦けるのを防ぎ、且つ焦けたのを除る方劑を調製するのは中々手數のかゝるものださうで、それが爲め藤波先生も、從來去る高貴の御方、外二三の或る貴夫人だけには據ろなく調製して差上げてあつたのを、この季節に際し、わが愛讀諸子のためにと、先生に願つて只一回、五十ポンドだけを調合して頂き、この五十ポンドを限り、皆樣に御わけ致します、使用法は極めて簡便で、朝夕郊外の散策、海邊の漫歩の折、これを御顏に御つけになつて出られ、御歸りになり又御つけになれば、日に焦けることは決してありません、化粧水の代用としても結構です。

定價　壹瓶特賣　金四拾錢
送費　市内四錢　地方八錢　清韓臺樺三十錢

專賣元　東京市京橋區大鋸町　振替口座壹七貳九番
女子文壇社代理部

早いが勝利です

これ新進作家植松美佐男氏が苦心慘憺せる最長篇小說である覺めたる心のさびしさ、さびしい戀の悲さしは全紙に滿ちてゐる

植松美佐男氏著（四六版三二〇頁洋裝箱入美本）

小說 さびしき戀

定價七拾五錢
郵稅八錢
七月上旬發賣
（著者寫眞肖像入）

『過渡時代の思想界に生れた僕等は不幸の兒である。不具の兒である』とうら若い著者は云ふ。現實に立脚して飽迄も自己を僞らない著者の眞實の叫びであり、且つ痛ましい過去の告白である。敬虔な信仰心と無賴の放蕩心との衝突は悲しい矛盾を作り、遣瀨ない近代人の悲哀を生む。著者は遂にデカタンである。二十歲の若さで既に十數册の著書を有する天才的作家が純文藝壇に叫ぶ第一聲である。若き煩え、若き悲しみ、若き誇を知る人々は必ず此の若き著者の懺悔錄に一掬の涙を注いでくれる事であらう。

（發行所）芝區芝公園十一號地ノ七番
安岡珠江堂

女波



水澤文子　　福岡こみ子

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

幼き夢



在米スアンゼルス　澁谷操子と愛孃



長谷川鐵五郎氏夫人と愛兒

涼氣横溢の二大快著

(最新刊)
遠山博士序　濱野學士跋
村田學士　齋藤院長 (共著)
(好評激甚)

青年男女と性慾は如何なる關係を有するか?

性慾と人生

本書は性慾と人生に關する諸問題を說く事頗る詳密、而も敢て社會を毒し、人生の行路を誤らしむるものと異り、寧ろ向上の一路に向つて光明を與ふるもの也、現代青年人士が最も煩悶せる諸項に就き一々醫學上より剴切にして而も穩健なる解決を下したり、乞ふ青年の士よ、諸子の前途に横はれる人生發展の根本問題―性慾上の諸問題の確立を慾せば須らく本書を讀め、そこに初て人生の趣味を湧出せしめて將來の希望は悉く光明に充さるべきや疑ざる也、遠山博士序文の一節に曰く：：「性慾教育は利刃の如し、大にしては國家の消長に參し、小にしては一家の盛衰に與る、其源泉は青春期にあり」云々と以て內容を知れ

菊判洋裝總クロース金文字
頗美裝釘函入
總ふりかな付
正價壹圓
小包送料八錢
清朝臺樺廿錢

(好評如飛)
榊原松籟　村山君羊　兩先生合著
(發賣八版)

生殖器健康花柳病豫防は青年刻下の大問題!

生殖新論

本書は上下二篇に分ち男女生殖器作用より姙娠不姙娠の原理花柳病豫防法及び治療法等三百數十項を極めて詳細に鮮明なる密圖を以て說明せるものにして姙娠不姙娠を好む人士は勿論花柳病に苦しむ青年男女は速かに本書を一讀せられよ、

◎上篇◎子孫の意義◎生殖作用論◎生殖器狀態◎男女の差異◎男女生殖器一般◎泌尿器◎勃起及受胎◎姙娠及其經過◎姙娠と母體の變化◎姙娠と胎兒の發達

◎下篇◎生殖器衞生◎花柳病◎梅毒下疳痳病◎男女生殖機能障害◎陰莖の異常◎早漏及遺精◎子宮及月經の異常◎女子淫慾の缺乏◎生殖器の調節◎交接過度の害◎結婚期◎早婚と晩婚◎血族と系統等十一章三百卅項詳細密圖說明內容豐富

密圖廿餘個入
四六判洋裝上製三百五十頁
總ふりかな付
六拾五錢
小包送料八錢
清朝臺樺廿錢

發兌　東京神田區裏猿樂町九　(振替東京一三一七五)　文湖堂書店　(本誌讀者に限り送料不要海外半減)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第十二巻 七月號（第三特別號）

秀才文壇

（海內唯一）

◎現代作家の文章……德田秋聲

◎自然描寫の傑れたる作品……中村星湖

創作と飜譯

芽（小說）　水野葉舟

風雨の夜（小說）　田中介二

長篇小說 慰安の花（ソログーブ）　米川正夫譯

玫瑰の花（小說）　新妻莞

死の幻影（小說）　服部嘉香

△現文壇に對する提議……後藤宙外

△斷片語……岩野泡鳴

夏の自然

オックスフォードの夏の思ひ出…内ヶ崎作三郎

海は我が故鄉なり……相馬御風

高原の夏……窪田空穗

湖の自然の極致……河井醉茗

△影（ニコライ・テレショフ）……中村白葉譯

發行所　東京市神田區旅籠町一丁目　文光堂　電話下谷一八四一九　（振替口座東京一九五五五番）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

青年文藝の生粋を見よ ☞

秀才文壇

（青年伴侶）

▲メーテルリング及び彼の家庭……MK生譯

▲『ゴルギー』の死……赤い喉鳥

小品五篇

快き夏……青花

淺草の塔……月城

時間前……さかえ

九歳の頃の印象……三郎

山の春へ……草笛

● 小説

痕……露河

●むかしの人……愁琴

詩歌

雨のTone……山村暮鳥

朝の雨……梶秀也

青ざめた瞳……西宮藤朝

草の上……中村琢郎

毒草の芽……近藤元

宮澤といふ女

宮澤××子は、一部文學青年の心を、海綿の水を吸ふが如く吸集しつゝある若き閨秀作家である。彼女は自らノラを以て比す。その複雑にして不可思議なる性格を以て、多くの文學青年を掌中に揶揄翻弄するは彼女の家常茶飯事である。本篇は小説にあらず、しかも小説以上の興味と暗示とに富む事實の描寫。………

右の外 青年文壇 百數頁 滿載 本號に限 金參拾五錢 送料二錢

特約販賣（東京市）東京堂、東海堂、北隆館、至誠堂、上田屋、良明堂〇大阪盛文館●其他到る處の書店取次販賣す

わきが及皮膚病

最も完全なる治療法

夫れわきがなるものは腋下の分泌液より一種不快なる惡臭を發する病症なり凡そ人として此病有時は全身常に惡臭を帶び殊に暖季より暑季に向ては惡臭一層甚だしく人をして近接に堪ざらしむる實に人間として耻づべき惡病なり又婦人の如きは外面如何に美なりと雖も此病有る時は人皆之をさけ應對談話するも快とせず故に良緣を妨ぐる等實に悲み憐むべき惡病なり然れども未だ是れらに確實なる良藥を認めず爲に當主其の患者に治癒の目的を達せしめんと西川醫學士と共に多年研究苦心の後ち玆に一大良劑を發見し數多患者をして實見するに偉大なる効力を有し愈々確實なる一新藥となれり依て同病者に弘く傳へん爲内務省に向て出願したるに當省に於ては本劑を試驗の上(第一六八二一九號)を以て官許せるものなり藥名淸腋散と名く同病者は輕重に拘らず本劑にて完全なる治療をせらるべし又本劑はたむし、水むし、いんきん等の皮膚病は如何なる痼疾と雖も速に治癒す

藥價 五十錢、一圓、二圓、送料八錢
本舖へ代金を添へ御注文なれば直に送藥す

製劑本舖 東京神田錦町三丁目三 中村寶珠堂藥局

●御申込の際は女子文壇の廣告に依る旨御書添を乞ふ

毛ぬき 新劑

從來脫毛劑の類頗る多きも之が製劑の原料は洋の東西を通じて硫化劑を配合して發賣せられつゝありと雖も皮膚に有害にして惡臭を有する不利あり先年所主數種の脫毛劑を研究して皮膚に無害なる一新脫毛劑ヘールピンを發明せるに多數の實驗成功者を生じたり本劑は皮膚に害なく脫毛せしむる唯一の良劑なり毛深き人毛多くして苦む人達は速に本劑を試用せられよ

原名ヘールピン
定價 壹圓
特製 參圓
内地送料 十五錢
海外 三十五錢

飲 色白くなる藥

近來美白劑としては外用的化粧水の類頗る多きも其確効あるものなく色黑き人の種々なる藥劑に迷ふの時代は過去り日進の醫藥學は一日も休止する事なく美白劑の製法も已に一變し内服劑應用の時代となれり當所製藥の惡液排泄劑ピオール錠は極て强度の淸血劑にして一般惡血惡液性の人本劑を服用するときは血液を淸淨となし惡液を排泄して皮膚を艶麗美白ならしむる美白劑なりあらゆる賣藥に外用的化粧水を用ゆるも目的を達せざる人速に本劑を愛用して天賦の美白を保存せられよ

藥名ピオール錠
壹劑 壹圓
參劑半 參圓
内地送費 十五錢

東京市牛込區北山伏町壹番地 百合園製藥所

白日

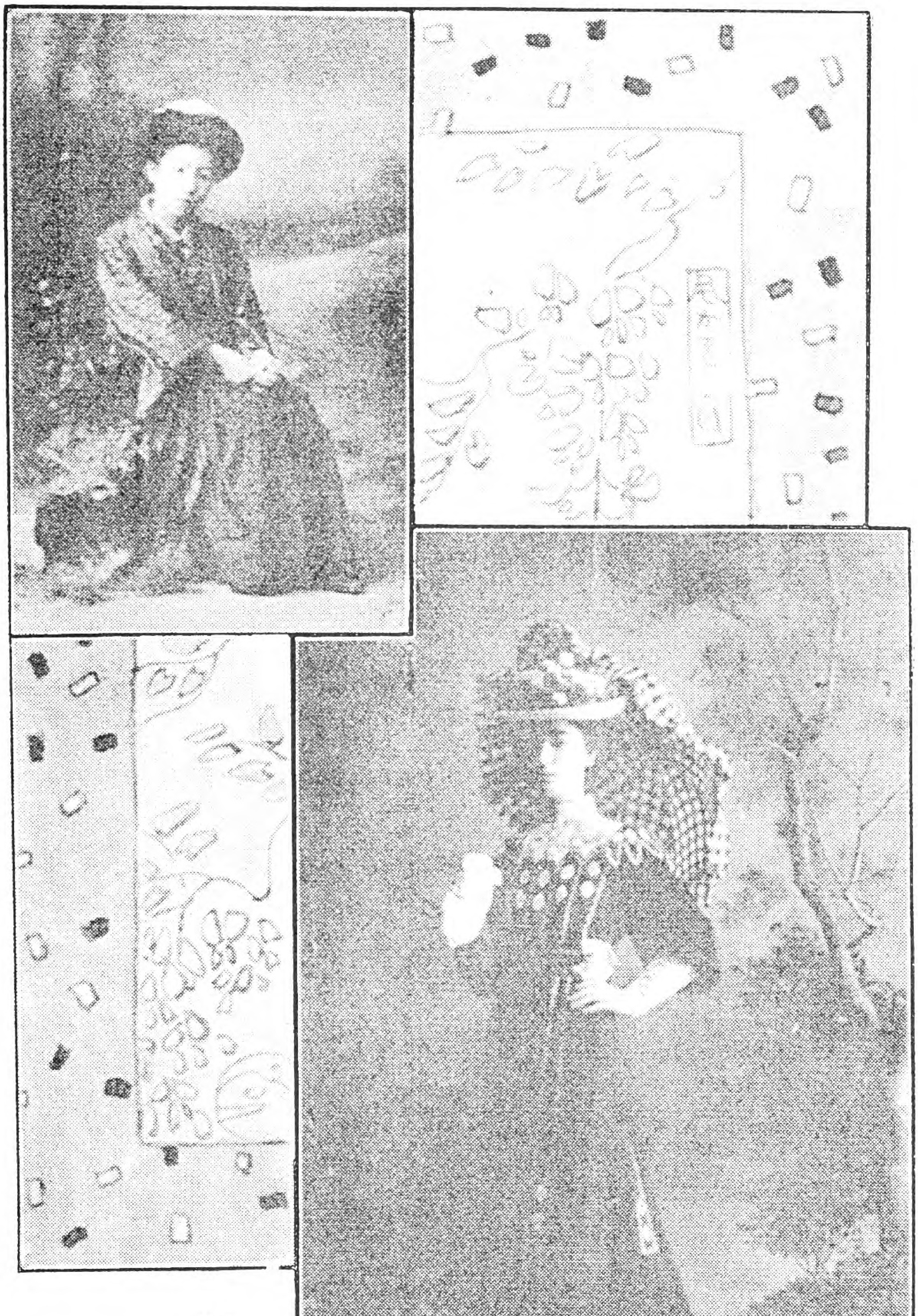


小嶺龜子　楠見八重子

小川悦子

山本國子　佐々木野菊子

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



多田正一氏令孃正子（在米）

清水輝子孃

新樹

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

詩集

森川葵村著

夜の葉

◎（新刊好評）

抒情詩人として著者は永くその清純なる詩風を以て稱せられたり。譬へば吹き過ぐる微風のそよめきの如く、合歡の花の疲れたる情趣の如く、常に著者の聽くものは生の陰影に潜む哀愁と追憶となり。そは雨に濡れたる夜の葉の吐息にも幼き情緒の噓唏をうかゞふべき優しき悲哀なり。詩に生の寂しみを希ふものは宜に著者の詩に就きて始めてその心の求むる聲をうべし。

◎瀟洒たる詩集

▲四六判二百二十頁
定價六十錢送費六錢

清新なる文藝書

北原白秋著 歌集 桐の花 定價金八十五錢 送費六錢

木下杢太郎著 戲曲集 和泉屋染物店 定價金一圓 送費八錢

石川啄木著 歌集 悲しき玩具 定價金五十錢 送費六錢

土岐哀果著 歌集 黃昏に 定價金五十錢 送費六錢

小山內薰著 論集 演劇新聲 定價金八十錢 送費八錢

石川三四郎著 評傳 哲人カアペンター 定價金八十錢 送費八錢

三木露風 北原白秋 共作 詩集 勿忘草 ザムボア六月號 三十錢送費二錢

發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目 （振替貯金口座東京五六一四） 東雲堂

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして生來色黑き男女にても平素之を用ゆれば本劑の主成分たる皮膚漂白性作用により漸次**白色**となり肌を滑にし皺を伸し艶麗**美**の肉體となる效果を有す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏效なき人は速に本劑を試みよ偉大なる奇效完全に顯る價並製壹劑壹圓廿錢特別製壹劑貳圓貳拾錢

色白飲藥

英國及墺國輸入二種の全身淸血劑にて飲んで體内の惡血毒血惡液を體外に排泄し血液を淸淨にし完全に肉色を**白色艶美**ならしむる奇效顯著藥なり價英國製壹劑貳圓九拾錢墺國製壹劑壹圓九拾錢双方併用せば偉大の奏效を易く顯る着金即刻送藥す

わきが 腋臭根治劑

本劑は腋臭症に對し最近の學理と實驗とにより研究發見せられたる**斯病唯一**の理想的卓效新藥なれば他藥にて全癒せざる患者は早く試み病原を去り**苦惱を脫**せよ難重症は特別製を用ゆれば必ず全效を奏す 藥價輕症用九拾錢重症用貳圓拾錢頑固慢性症用特別製分五圓卅錢 小包密送

陰萎病 特効新劑

(藥價)拾錠入一劑壹圓九拾錢郵券貳割增し

本劑(藥名トニチン)は瑞西國ウヲルフエンスベルゲル社の發見に係る最新藥にして歐米及日本諸大家の實驗報告を綜合し其主治適應症を擧ぐれば。一般の**生殖不能**即ち老衰性陰萎。精神性陰萎。重性痲痺性陰萎。神經衰弱症。射精無力早漏。生殖機能障害。勃起力減少。遺精。元氣衰弱。老衰無力腎虛。早老者。不姙娠。冷症發育不全。快美感覺缺乏等に**奇効**あり精力を增進し生殖器を强健ならしめんと欲する人は早く試みよ偉大なる特効顯著なり

月やく通經劑

本劑は胃腸を害せず子宮を痛めず月經とまりを容易に**通經**す長き滯り及び血塊には特に**流經**製分を用ひよ極安全に快通す且つ月經不順より起る子宮病血の道を治癒し惡血古血を一掃す患者は早く試み偉大なる**特効**を知られよ近時無効類似僞藥多し御注意を乞ふ價は壹劑七拾錢貳劑壹圓廿錢參劑壹圓七拾錢 特別製分貳圓卅錢郵券代用貳割增し

謝狀 拜啓愈々御盛榮の段奉賀候さて御發賣の妙藥通經劑數年前愚妻に服用致させ候處御蔭を以て今日まで滯りなく身體も壯健に相成候段之れ實に貴館の御賜と存じ深く奉感謝候との謝狀を四十五年六月五日附にて寄送せしは岩手縣遠野町字一日市町佐々木萬吉氏也 其の他如斯謝狀如山來り見よ示す

(奇効顯著藥)

毛生新藥

本劑(藥名ヘアーグロース)は多年研究實驗の結果發見したる**毛髮發生藥**なり即ち男女共禿頭病の人各種の病氣にて脫毛する人頭髮及はゑぎわの薄き人陰部毛なき人まゆげ口ひげの薄き人其他總て毛のあるべき所に毛なき人用ゆれば毛髮早々と**發生**する**特効**あり本劑は世にありふれたる種々雜多の毛はへ藥とは其效大に異なるに付幸に玉瓦混同視することなく速に試み偉大なる奇效を知られよ價小瓶壹圓廿錢中瓶二圓卅錢特別製分五圓卅錢 着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增しの事

やせる藥

壹劑參圓廿錢貳劑六圓二十錢特製九圓拾錢

本劑(藥名ヨードチリン錠)は學理實驗に徵したる唯一の**瘦身劑**にて血ぶとり。酒ぶとり。あぶらぶとり。顏赤くほてり。のぼせ症、卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脫し**美容康健**を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたる諸君は速に本劑を用ひ其偉大なる特効を知られよ

以上七藥專賣

日新館藥房

東京市神田區五軒町十九番地

電話下谷五百四拾六番

振替東京壹九貳四六番

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

少女

▲美しき七月號 一日發刊

東京京橋區大鋸町十一

女子文壇社發行

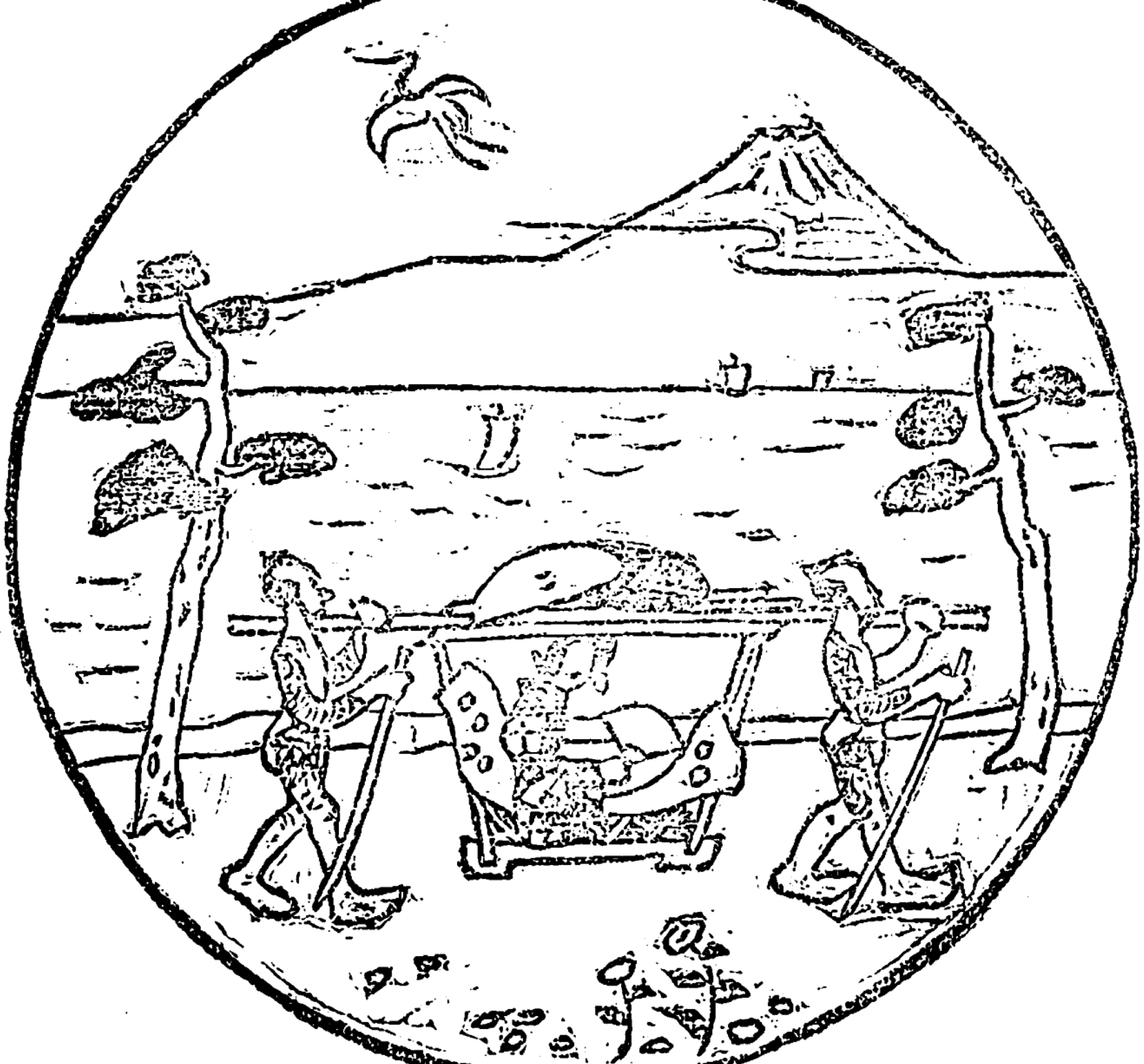
一冊金十錢 郵税金一錢

全國到る處の書店取次販賣せり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

夏の讀物

夢二畫集



繪草紙 春のかはたれ　定價四十五錢　送料四錢

繪草紙 見知らぬ世界　定價五十錢　送料四錢

- 春の卷　定價五拾錢　送料八錢
- 夏の卷　定價五拾錢　送料八錢
- 秋の卷　定價五拾錢　送料八錢
- 冬の卷　定價五拾錢　送料八錢
- 花の卷　定價四拾錢　送料四錢
- 旅の卷　定價七拾錢　送料六錢
- 野に山に　定價七拾錢　送料六錢
- サヨナラ　定價七拾錢　送料六錢
- 京人形　定價四拾錢　送料六錢
- 小供の國　定價卅五錢　送料六錢
- 都會スケッチ　定價五拾錢　送料六錢
- 櫻咲く國（白風の卷）　定價四拾錢　送料四錢
- 同（紅桃の卷）　定價廿四錢　送料四錢
- 都會の卷　定價五拾錢　送料八錢

發行所　東京麴町二丁目二番地　振替東京二〇一九四番　洛陽堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

冷泉



櫻井まさじ子
天羽民恵子

高木いし子

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

眞晝の光



（福井縣北利子寄）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

八月一日　初號　發刊

「少女」吹題

お伽世界

お菓子を買ふよりお伽世界を買へ

▲毎月一回一日發刊

密畫澤山

『お伽世界』は八月一日から新たに出る世界一の少年少女雜誌です。價が廉くて、綺麗で、爲になつて面白い、こんな雜誌は外にありません。

定價壹冊七錢です

之を讀めば、知らず識らずの中に、賢い立派な人になれます。論より證據、最寄の本屋にて實物を見て御買ひ下さい…………………（營業部小僧より）

▲定價

壹冊金七錢　送料五厘

半年送共四拾五錢

壹ヶ年送共八拾錢

發行所

東京市京橋區大鋸町
振替口座壹七貳九番

女子文壇社

◎賣捌　東京堂、北隆館、東海堂、上田屋
至誠堂、良明堂、外繪草紙各店

女子文壇化粧問答顧問
藤波芙蓉先生
實驗發明

クセ毛なほし 美髮劑（びはつざい）

婦人の頭髮は、婦人に取りて何よりも大切です。此美髮劑は十有三種悉く人體皮膚並に毛髮の攝養となる純植物性のものより成り、どんなくせの多い毛でも之を使用すると直る事妙なり 譬へクセ毛の人でなくとも毛がやはらか過ぎて、ハエギワが藤のやうに下つたり、ビンも、タボも下り易い毛髮でも、之を防ぐことが出來ます。又毛髮が硬くて自由の利かない人でも、此の美髮劑を用ひておけばすなほな好い毛髮となります、加ふるに毛髮の色澤を美しくすることは驚くべき程で之を常用すれば漆の如くつや〱となることは保證致します。毛髮に限らず此美髮劑が如何に皮膚を美しくするかは、試みにアレ性の人が少計り手さきにでも塗抹すれば、直に皮膚滑澤となり其効果は顯著に分ります。只天性ちゞれ毛の人は此美髮劑を用ひて二時間位は其のちゞれ毛を直すことが出來ますが根本的に直すことは出來ないのです、前に述べたくせ毛なら何んな困つたくせ毛でも直ります。

定價
小瓶 金參拾錢
中瓶 金五拾錢
大瓶 金壹圓
送費 市内四錢、小包八錢 清韓臺樺各參拾錢

女子文壇化粧問答顧問
藤波芙蓉先生
發明實驗

美髮香油（びはつかうゆ）

定價
壹瓶 金壹圓五拾錢
送費 市内四錢、小包八錢 清韓臺樺各參拾錢

「美髮劑」のすべての効能を具有してある外に、一時的にチヤレ毛を直し、毛をフクラマス力をもつて居りますから如何なる毛の薄い御方でもこれをつけて髮を御結びになればフックリとして澤山の毛のやうに見えます、それに攝毛料たる純粹の晒椿油と頭皮及び毛球に勢力を與へ脫髮を豫防するアルニカ油と、此等美髮の料となるものを深く毛根に吸收せしむるの媒をなす精製オリーブ油とを適度に混和してあるから、皮膚が剥脫してフケが出たり毛髮が赤く細く枯瘦したりすることなく、又斯くなつたのを直す權威を備へて居ります、既に特許局審査官の上席に居らるゝ先生の御友人が是非專賣特許を受けなさいと切に御すゝめになつて居らるゝに見てもこの美髮香油の如何に先生が苦心精練の結果に得られたものであるかゞ御わかりになるでせう。

▲注意——先生發明の特賣品は冗費を省くため、わざと他の化粧品の如く一切粧飾を施さず、極めて實用向にせり、之を諒せられよ。

專賣元 東京京橋區大鋸町十七番地 振替口座東京第壹貳九番（電話京橋六〇七番）女子文壇社代理部

女子文壇化粧問答顧問
藤波芙蓉先生
實驗發明

コールドクリーム

コールドクリームの美顔料として最も有効なことは、世人の夙に認めて居る所、現に女子文壇の化粧問答欄に於いても、藤波芙蓉先生も屢々これが有効なること且つ其調製方並に原料までも御紹介になつて居らる、程の化粧料ですけれど、歐洲に於いて露がれて居るコールドクリームは至つて高價なために、日本にはまだ輸入發賣されて居りません、偶々同名のものがあつても、似つかぬ粗製の贋造品で、そんなものを用ゐても何の益にもなりません。従來藤波先生は皆様方の中の御希望者の御依頼によつて調製して差上げて居られたのでしたが僅かづゝ何度にも原料を買ふと自然高價になり、矢張一度に澤山調製した方が雙方の便宜ですから、これも本社に於いて同好の皆様方に御わけすることにしたのです。コールドクリームの効用は既に御承知のこと、存じますが、第一はこれをお化粧なさる上によく御顔なり御手なりに摺込み紙か軟かい絹で拭き取りますと、アブラ性の方は、

アブラの出るのを防ぎアレ性の人はアレを直し、皮膚を艶麗ならしめ光澤を出し、おしろいを翌日までも剝げずに落付かせ殊にシワを延ばし、色を白くさせる力を持つて居ります。

但し「コールドクリーム」は美顔劑で、世のクリーム類の如くお化粧下の用には立ちませんお化粧下用としては「艶肌劑」が適當で「艶肌劑」と「コールドクリーム」とは艶肌美顔の姉妹劑です。

定價 金壹圓 五十瓦入
送費 市内四錢 地方八錢 清韓臺灣三十錢

女子文壇化粧問答顧問
藤波芙蓉先生
實驗發明

艶肌劑

文明とは時間を倹約することです、「何か一品で、顔のシミやオデキの痕を取り、キメを細かにし、皮膚のツヤを綺麗にし、化粧下にもオシロイの下にもなり、而してオシロイのノリをよくし、お化粧を落付かせる、有効にして簡便な化粧料を考へて下さい」との某侯爵夫人よりの御依頼で藤波芙蓉先生が永らくの苦心と實驗とを費して、見事に御創出されたのが此艶肌劑であります、右の某侯爵夫人の御望みは夫々御一人の御望みでなくあらゆる文明婦人の等しく御希望なさる所と存じ本社は特に先生に請うて、皆様方に本劑を御わけして差上げることにしたのです。

定價 金六拾錢 五十瓦入
送費 市内四錢 地方八錢 清韓臺灣三十錢

專賣元 東京京橋區大鋸町十三番地 振替口座東京第壹七貳九番 電話京橋（六〇七番） 女子文壇社代理部

音聲どもる人に告ぐ

美音となる獨逸博士ローマン氏最新發見自宅療法藥説明書呈す

（貳錢切手封入申込あれ）

東京市牛込區赤城元町

好生藥院

あざ

●なまず●そばかす●ほくろ●いぼ●にきびの奇藥説明郵券二錢送附あれば進呈

やせる藥

多血症●脂肪過多●中氣●便秘●酒ぶとり●凡てふとりすぎて御困りの人に害なくやせて●中肉美容となる新藥なり試みたき方に郵券二錢送れ詳細報知す

東京市牛込區赤城元町三三

池田製藥部

有効保險 前代未發 秘傳奇術

全壹冊正價郵税共參拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

（目録大要）神經衰弱の新療法●陰萎病を必治する新法●陰○の爛れを治する法●消渇を必治する法●頑癬の必治法●人造麝香の製法●上等香水製法●香袋製法●美顔クリーム製造法●音聲を清良にする法●齒痛即治●製法●髪の脱落するを止むる法●化粧石鹸製法●西洋白粉製法●毛髪染製法●西洋臭汗治法●白髪を染むる法●毛髪の光澤を美にする法●新藥●齒磨粉製法●西洋流油製造新法●にきび即治法●はくろを落す法●ビットル酒製法●夏日室内を爽涼にする法●縮紗類を汚せるインキ玫瑰痕を除く法●白瓜を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●氷を即時製造する法●百年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中より海の底を見る法●百日眠らず體變へざる法●脇毛劑新法●寢入たる者に答へしむる法●禿頭病必治法●寢入りたる男女の心中を知る法●白なまず即治法●五十の老婆を二八の娘に變ずる法●脚氣病必治法●妖怪變化を見顯はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●惑人を見顯はす神術●女に○れらるゝ藥法●硬き毛髪を柔軟にする法●思ふ女を○○かす藥法●堅き女の氣○○○す藥法●陰○を長大にする藥法●そばかす必治法●女を○○にて泣す神藥●夢に戀人と語る秘術●見染めし女を手に入れる神法●待人來る神術●一生戀中變らぬ秘術●悋氣深き女を治する藥法●閨中の秘藥●即座に男精を増す法●毒蟲に螫れたる時腫れぬ特効藥●避食の仙術●神速に精力を強む法●即座陰身術●人を眠らす秘法即ち催眠術●顔赤く吹出物生ずるを治する法●過房を治する妙法●多情を抑制する秘法●色慾なき女に情を○せしむる法●記臆力を増進する法●女孕みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦覿破の奇術●黒字夜光の奇術●老人終身鬚取りの奇術●腋臭を治する法●色を白くする内服劑新法●寶丹の密製法●腹痛速治法●疥癬病の藥は●生きたる鯉を遠國へ送る法●眼瞬を治する法●黄疸を治する法●鮫肌を直す秘法●味噌の損益はたるを直す法○痳病の治法●月經の不順を治する法●疝氣の妙劑●痛を治する法●陰部の臭きを治する法●陰部の虱を去る法●にきびを去る新法●頭髪を長くする法●毛生藥の最新法●梅毒必治の新法●便毒必治の新法●下疳を治する奇法●胃病の新法●百日咳の妙法●胎毒必治の最新藥●中風豫防の新法●面瘡の妙法●衣服に酒のしみたるを洗はずして落す法●火傷即治の秘法●シヤクリ即治法●聲を能くする新術●白髪染け新生●十歳の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●寢小便を治する秘法●頭瘡を治する法●耳だれを治する法●いぼを取る法●おざを拔く新み●乳の出る妙藥●陰部の諸瘡治する法●虎列拉病療治節易法●梅毒豫防の奇法●思ふ時目を覺す法●年齢により房事の度數●疾病氣前知の奇術●男女全體の色を白くし且つ艶美ならしむる法●葡萄酒を製造する法●富を造るの秘法●一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法●夏帽子洗濯新法●壁の汚染を落す法●新しき鍋釜の鐵氣を止る法●簡易美顔術新法●衣服に油の付たるを落す良法▲以下數拾法略す（合計壹百四十法あり）着金即刻送本す

專賣元 **日新館商店**

東京神田區五軒町拾九番地

少年少女達の評判最良の讀物

東京市京橋區大鋸町十一 振替東京壹七貳九 女子文壇社出版

どこの本屋でも取次販賣して居ます

佐々木邦先生著

▲再版發賣▼

滑稽
奇抜
珍本

二人やんちやん

全一冊

▼中判美裝 武田壽氏石版彩色畫 木版色刷挿畫六葉入

定價金参拾五錢 送料金六錢

目次 二人やんちやん。あまのじやく。仙ポコ。お猿さん。昔と今

大人にも、小供にも面白い書物です。世の中に出ると、到る處評判になつて、何處の家庭でも爭ふて購求され。近頃の好著として、持て囃されて居ります。速に愛讀あらんことを乞ふ。

若き婦人の誇

女子文壇増刊 好評

新文章

紙數二百頁美装
特價拾錢 郵料壹錢五厘

◎一呼吸

◎七色の虹

△生の斷片
△覺め際の淋しみ
△自ら警める記
△學生の都會
△初夏の人々
△寢息

○男子の手紙に迷ふ
○不縹緻な私の哀愁
○父と娘が別れの涙
○尼になつた若い女の記
○楊子江畔の新婚生活
○落日のかなた
○私の心は破れてゐる
○更衣室

◎轉宅 小説

◎淋しい道 小説

◎溫泉宿 小説

△梅雨日記
△姉の家
△心の離散
△黒き洋傘
△別れてゐる間

◎呪ふべき時代
◎年のあぢはひ
◎生立のつらさ
◎解けし謎
◎五月の水邊
◎繪筆

◎課題
△顔 △髪 △浴場
△山 △海 △劇場

◎和歌、俳句

執筆婦人

服部貞子　早川花子　長曾我部菊子　小川夢の女　小笠原ゆり子　太田喜志子　若杉はま子　河野槇子　加藤華子　高橋りう子　田中港の女　内藤千代子　野村きやう子　山田邦枝子　八代やゑ子　松田梅子　松田妙子　前島優梨子　松村らく子　月盟子　江森美子　佐藤滿壽子　佐分華影　木村あやの　夕はし　三宅やす子　三島よし子　平塚白百合　ひなげし　鈴木春子

發行所 東京市京橋區大鋸町十二番地 女子文壇社 （振替口座第壹貳七九番） 賣捌全國書店

▶文字に現れたる娘時代の表情◀

女子文壇増刊

娘時代

二百頁美装
執筆者寫眞入
特價拾錢
郵税壹錢五厘

（小説六篇）

- 本郷の兄……前島優梨子
- お奈津……さかえ
- 伯母……加藤筆子
- 海水浴場の女……千鶴子
- 最後の日……月草
- 初舞臺……若葉

- あらしの夜……神近市子
- 夢二式の眼……初雁
- 火影……若杉濱子
- 義太夫を聴く夜……珠野すゞ子
- 破れたる友情……初鹿野道子
- 月の出るまで……かうほね
- 現實から離れたい……ふさ子
- 薄明……港の女

- **白き手の謀叛者**……望月野薔薇
- **たゝかひの跡**……小宅てふ子

- 若きやすらひ……ひざくら
- 男の手紙……梨花
- 面白い月日……胡蝶

- 生きた人形……波の花
- 十六の娘心……藤田きく子
- 誘惑に勝つ……しうん子

- **娘時代の純潔無邪氣なる日記**……拾三篇
- **生氣潑溂たる女の和歌**……數百首
- **課題** わが故郷……わが親友……わが手文庫（散文）……

發行所 東京市京橋大鋸町 女子文壇社

【振替東京壹七貳九番】 賣捌全國各書店

女子文壇叢書

新しき時代の産める新しき女の集りとして、隱然たる勢力を養ひつゝあるは、わが女子文壇なり、女子文壇を舞臺として自由に歌ひ、自由に舞ひ、且自由に語る彼等若き女の群集は、刻一刻其視野を擴大し、其心眼を開きつゝあり。本社此處に見るところありて其中の或る人々の作物、即ち或は小説に、或は告白文に、或は詩歌に、各自其長所とする作物を一冊に集め、女子文壇叢書と名づけ逐次刊行せんとす。之れ蓋し暗黒なる婦人界の要求に應じて、新しく投げられたる一炬火なり、乞ふ、其光に照らして或は悶え或は激する若き婦人達がありのまゝの姿を見よ。

第壹編

前島優梨子著

町むすめ

◆全讀切寸珍美装　**正價金參拾錢**　送料四錢

八月上旬出版

女性の作物と云ふ事を最も明かに示せるものは前島優梨子の小説となす、優梨子の小説には女性らしき同情あり、女性らしき理解あり、彼女の作れる多くの短篇小説は、其一篇毎に、それぐ異りたる人を引きつける力ありて、讀めば讀むほどしみぐと人生の味ひを感得せしむ、世に閨秀作家を以て標榜する者少からずと雖、多くは其名ありて、其實空し、此處に其名は知られずとも、其實力の充實せる若き婦人作家、前島優梨子の處女作を一般の讀書社會に推奬するの機會を得たるは吾人の誇とする處なり。

東京市京橋區大鋸町十二番地　**女子文壇社出版**　(振替口座東京壹七貳九)　全國書店取次販賣

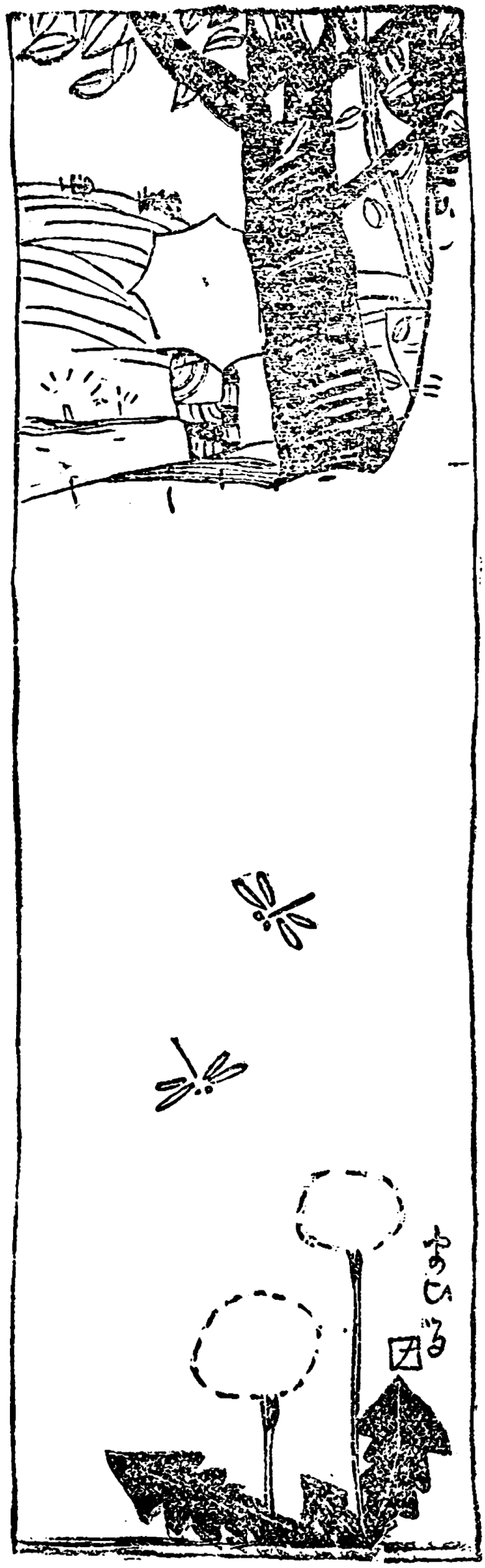


女子文壇

七月特別號

（第八年第七號）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



誤られたる個人主義

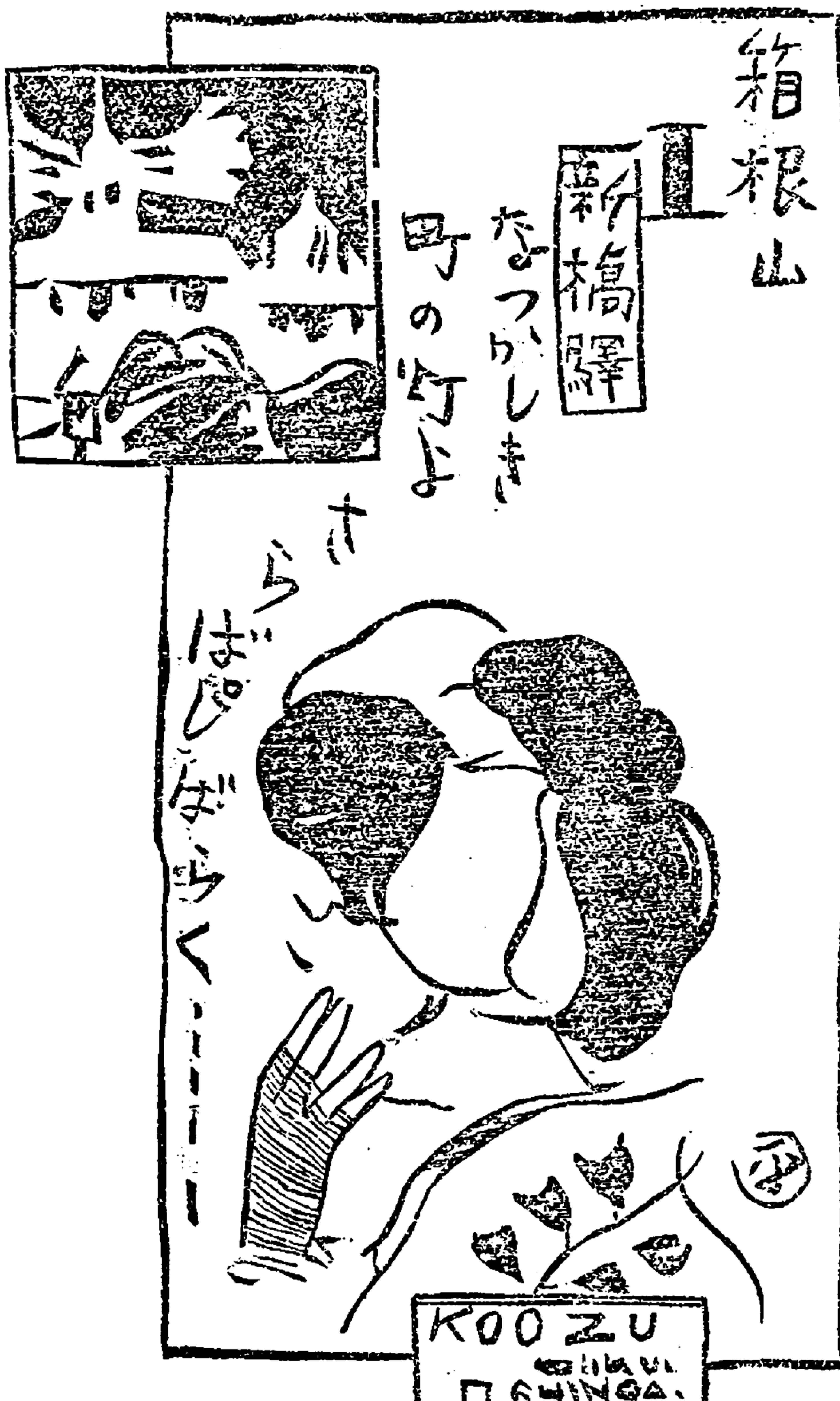
早稻田大學教授　金子筑水

近頃は箇人主義と云ふ事がしきりに世間の批評の材料となつて居る。然れども是れについては見渡したところ大分様々な誤解がある様である。

箇人主義と云へば一口に我儘主義、主我主義の意味と思ひ、然う云ふ意味の箇人主義が西洋での流行ものであるかの如くに云ひはやされて居る。殊に男子のみならず、西洋には女子の世界にそんな意味の箇人主義が流行で、しかも其れが西洋の近代的婦人であるかの如くに考へられて居る。是れはあまりと云へば無法な誤解である。

勿論箇人の人權を重んずる西洋の事ではあり、また國民性にもとづいて箇性の主張の強い彼の地の事であるから、唯柔順一方の習慣を守つて居る土地柄と比較して、一見我が儘に見える樣な傾は西洋に多いかも知れないけれども正當な意味で箇人主義と云ふのは決してそんな我が儘の主義ではない。

正當な意味の箇人主義と云ふ事は、頗る込み入つた問題であるから、此處で說明するかぎりでないが、まあ一口に云へばほんたうに自分の人格を高めて行く、強めてゆくと云ふ樣な意味合である。



だから我が儘主義、他人を他人と思はない主我主義は實は正當な意味の箇人主義の弊に過ぎない。其の弊害だけ見て、それが西洋の箇人主義だ。それが西洋の近代的婦人だなどゝ云ふのはあまりに無法な誤解だと思ふ。

西洋人だとてやはり同じ人間ではないか。それは互ひの間に深い愛情もあれば思ひ遣りもある。人權も重んずるだけに他人の人格を尊敬する度合も一段強い。其の邊の事情を察しない



で、唯の我儘主義が近代的だなどゝはあまりに大きな誤解と云はなければならない。

然ういふてみいつたむづかしい問題は別として、現に近頃世評に上つて居る西洋の近代劇等についても、樣々同じ樣な誤解がある。近い話がイブセンと云へば近代の最も大なる箇人主義的態度の人である。其の箇人主義的と云ふ言葉に迷はされて、イブセンの社會劇は、みだりに我が儘主義または主我主義を描いたものだなどゝ云ふ誤解が多い。

勿論イブセンの芝居の中には隨分主我的な人物殊に女主人公がある。けれどもイブセン其の人を純粹の主我主義の人であると云ふは間違つた見解である。

私などの理解してゐるところから云へば、イブセンは一方に於いて強く人格主義を主張した人であると同時に、他方に於いてはもつとも強い犧牲——他の爲めに自分を棄てると云ふ大なる犧牲——を主張した詩人である。

先日文藝協會で公演した「ノラ」を見ても此の事はわかる。世間では「ノラ」と云へばたゞ我が儘な主我的な自分の爲めには、子をも夫をもかへりみない無法な女の樣に考へてゐる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

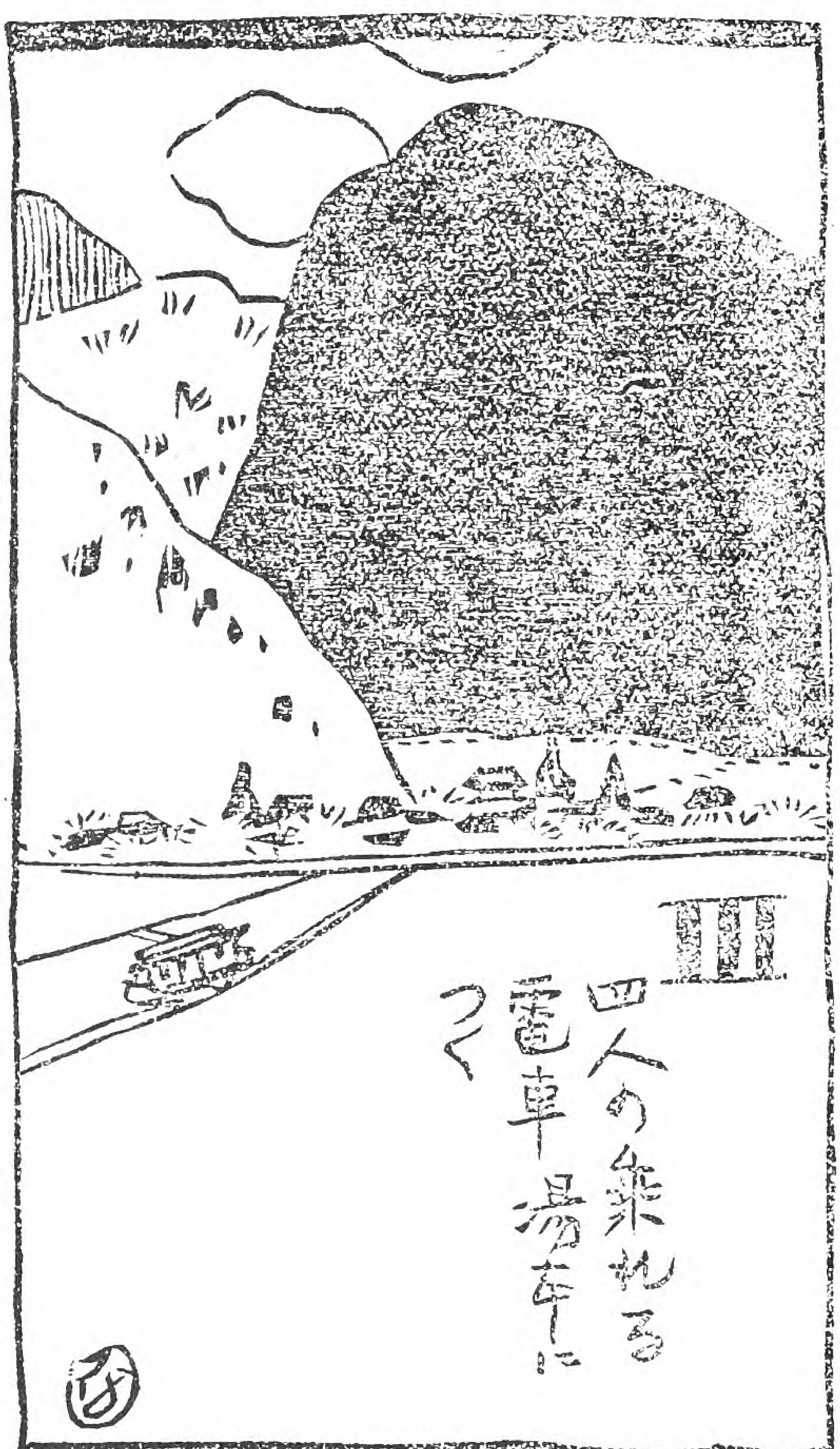
是れがそもく誤解ではないか。元來「ノラ」は夫の爲めに自分を犧牲にまでした女ではないか。大なる犧牲と云ふ事を奇蹟とまで思ひ込んでゐた女ではないかあの女をたゞの主我的な人物と解釋する根據がどこにある。

能く世間では自覺して家を捨てる前までの「ノラ」がよい等と云ふ。其れは劇を知らない人の誤解である。

イブセンはあの劇で夫を捨て子を捨てる樣な女性を見せ樣としたのではない。たゞ「ノラ」の强い自覺をねらつたにすぎない。其の强い自覺を舞臺の上に見せるにはあの場合「ノラ」をして夫をも子をもかへりみないと云ふ結末に終らしめざるを得ない。

「ノラ」が子を捨て夫を捨てたと云ふ事は舞臺の上の効果を强める爲めの技巧に過ぎない。或ひは「ノラ」は決して夫や子を捨てない女かもしれない。然れどもそれをそう書いたのではあの自覺の力が無くなつて了ふそう云ふ譯であるから「ノラ」は一面に於いて强い自覺の人、そして他面に於て强い愛情の人卽ち犧牲の人と解釋されなければならない。

序にも一つ例を取つて見ると同じ作者の「ロスマースホルム」である、此の作の中にリベッカ、ウエスト



ンと云ふ女主人公がある。

此の女主人公に就いては世間様々な批評がある。或は近代的婦人の標本であるとも云へば、或は近代婦人の假面をかむつた古い女であるとも云ふ。私は次の様に解釋して見たい。

元來リベッカと云ふ女は非常にハイカラな主我的な自分の思ひ込んだ事は是が非でも通して見せると云つた様な強い意志の女、そしてまた怜悧な才の勝つた女である。此の女が牧師ロスマーと云ふ男主人公を戀ひしたゝめ、様々の奸策を用ひて、其の妻女の「ビイタ」までも死におとしいれてしまつて、自分の戀のためには他人をも顧りみないと云ふ強い主我的な女であつた然るにだん／＼深くロスマーに親しんで居る中、リベッカは次第にロスマーの立派な人格に化せられて來た主我主義一點張りで世間が通れるものでないと云ふ事を深く悟つて來た。それと同時に自分は他人に對して大なる罪惡を行つた事をも強く意識して來た。

自分がロスマーに對する愛情は益々深くなつて行つたにも拘はらず、又現にロスマーから、吾が妻になるやうに懇望されたにも拘はらず、彼の女は今となつては甘んじてロスマーの妻となる事が出來なかつた。而して遂にロスマーの爲めに自分の生命まで捨てたと云ふ女である。

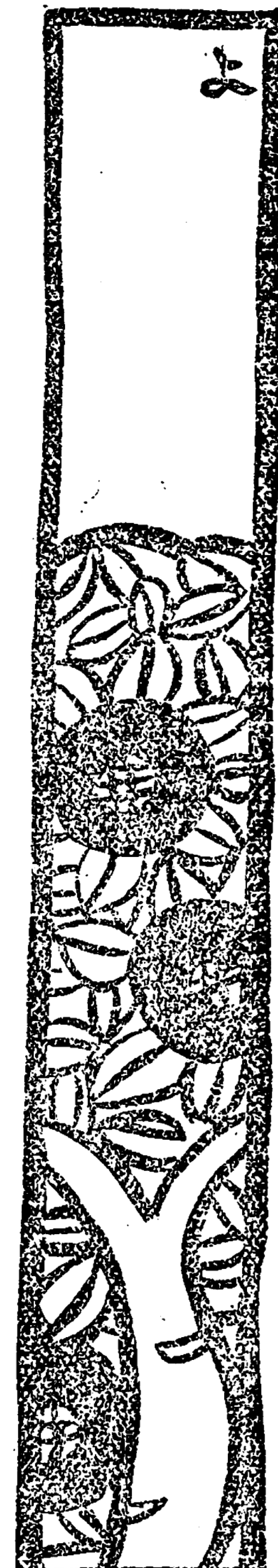
つまり最初は強い主我的の女であつたのが、後に大なる犠牲と云ふ事をさとつた女である。勿論そこにイブセンの直接の主張はないかも知れないが、此の作を讀むものから云へば、イブセンは一方に於いて強い犠牲の最大事と云ふ事を說いたものとも解釋される。

此の外云はでもの事である。有名な「ブランド」の中には此の作家が明らかに個人主義と對して犠牲の更に大なるものである事を示して居る。

こんな例を見ても個人主義と云ふ事が如何に誤解されてゐるかゞわかる。誤まられたる個人主義とでも云ひたい。

只其個人主義と云ふ言葉に迷ふて、淺い解釋を勝手にして、勝手に擧動ふのは宜しくない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



肉食と菜食との優劣

農學博士　澤村眞(談)

◆肉食の人と菜食の人◆

肉食と菜食とどちらがよいかと云ふ事は、今迄多くの人に考へられた問題である。

從來日本人は菜食に傾いて居つたが、西洋と交際をする樣になつてから、總ての方面に於て西洋の眞似をするので、食物の事まで、西洋人の樣に肉食をしなければならぬと云ふ考を持つて居る人も出て來た。

然し西洋人が肉食をすると云つても、實際を見ると左程肉を多く食つて居るのではない。下級の人民は無論菜食の方で、中流以上の社會が日本人より肉食をする事が多いと云ふ位である。

偖て、肉食と菜食とは、どちらが可いかと云ふ事になると、是れは種々な點から考へて見なければならない。

先づ世界で、最も多く菜食をしてゐる人種はと云ふと印度の佛敎信者である。又比較的肉を多く食つて居るのはヨーロッパ人である。そこで、印度人とヨーロッパ人とを比較して見ると、現今の狀態ではヨーロッパ人が世界に勢力を得て居つて、印度人は衰へて居る

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

どうも肉食者の方が進んで、菜食者の方が後れて居る樣に見えるのである。

然しながら是れは食物から來た原因ではなくして、他の方面から來たものだと考へられる。

次には未開人種の中で、肉食を專らにして居るのと菜食を專らにしてゐるのとがあるが、是れを比較して見ると、肉食をして居る方が猛烈であつて、菜食をしてゐる方が、温和しい樣である。それで肉食は、人を活潑にし、猛烈にする樣に考へられる。

然れども私の思ふところでは、肉食をすれば、從つて其の肉を獲るために、獸を狩り、魚を取る間に隨分種々の危險を冒す。殊に生き物の命を取る事故勢ひ人心が獰猛になり、殘酷になるのは免がれがたい事である。肉食をするが爲めに、活潑になり獰猛になるのではなくして、捕獲る方法の爲めにさうなるのではないかと思ふ。

それであるから實際、肉食をし、菜食をしてゐる人間について、其の優劣を見出さうとする事は出來難い事だと思はれる。

▲肉食の害▼

日本人が西洋の眞似をしようとする間に於て、西洋人の中には此頃菜食を主張する人が多くなつて來る樣である。ロンドンやベルリン等に、野菜ばかりを料理する料理屋があるのを見ると其の傾向を窺ふ事が出來る。

然し西洋人の云ふ菜食論は、佛教から影響せられてゐる菜食とは少し意味が違つてゐる。それで全く動物を食はないと云ふのではない。卵とか牛乳とかは用ひてゐる。野菜料理屋の料理にも、卵、牛乳、バタ、チース等を用ひて淡泊な調理法でもつて可成繁昌して居る。

私の出逢つた人の中で、菜食論者が少なくない。ベルリンで、獨逸語を敎へてくれた先生であるが、此の夫婦は一切肉を食はないで、植物質ばかりを食つて居るのである。肉を食べると腫物が出來て困るから食は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ないと云つて居つた。

それからブラッセルの萬國食物會議に出席した時に、そこにベルギーの婦人で、菜食會を組織して會長となつてゐる人があつたが、肉食が人體によろしくないと云ふ事を論じ出席會員に、其の意見書を印刷して渡した。其の肉食排斥の理由として、肉は腸でたまつて腐り易く、腐ると毒物が出來て、中毒するからいけないと云ふのであつた。



それから今一人其の會議に出席してゐた英吉利の醫者で、ドクトル、オールセンと云ふ人に近付になつた。此の人は本國で養生院を持つて居つた。其の養生院の養生法を聞くに、肉と酒と茶とを一切禁ずると云ふ主義で成功をしてゐるのであつた。其の人の出して居る『健康』と云ふ雜誌に其の後、私は、日本人が菜食をして居ると云ふ事を書いて送つた事がある。

其の次の號に、日本に在住してゐる西洋人と見え、

投書したものがあつた。其要旨は次の如くであつた。
私の説は面白く讀んだ。然るに此の頃日本人の中には西洋を眞似て肉食をしなければ身體が太くならないと信じて居る人がある、自分の家にある日本の婦人が來訪れた時に、其家内が肉食料理を作つて、此の樣なものはお口にあはないかも知れぬがと云ふと、決してさうではない。大變に好きであると云つて食べた、此の樣に日本人の間に肉食がはやつて來るのは悲しむべき事だと思ふ、と書いてあるのであつた。

▲菜食の益▼

其の外、イギリスの食物學者の書いたものを見ると肉の中には尿酸になるべきものがあつて、肉を食べて居ると其の尿酸が身體にたまつて來る。隨つて疲勞を感じ易くなる。運動の競技等をする者等は別して、尿酸の出來ない食物を食はなければならない。尿酸の出來ないものは牛乳、或は穀物である。故にパン等を食つて居る方が力業をする事が出來ると云つてゐる。

猶外に齒の形からから云ふ説を立てゝゐる人もある人は天然に菜食をするものであるか、肉食をするものであるかと云ふ事を定むるには、其の齒の形によつて知る事が出來る、ところで人間の齒の形は、肉食をする猫とか犬とかと違つて居る。また草食をする馬や牛の齒とも違つて居る、猿の種類で猩々の齒に一番似寄つて居るので、猿の類が果食動物である樣に、人間も果食動物である。果物と云つても柿や栗には限らぬ、穀物をさすのであつて、肉食よりも此の方をいゝとしてゐるのである。

一體、味と云ふ方から見ると肉の方が遙に野菜よりはいゝ。それに野菜の樣に不消化な纖維がなくて、極く少量な食物で澤山な養分を取る事が出來る。此れが肉食の優つて居るいゝところである。

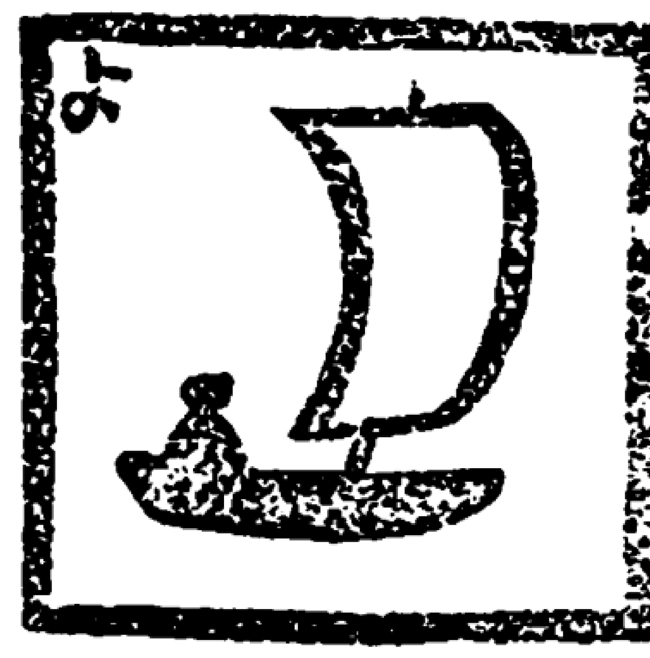
更に野菜の方から見ると、肉の樣に胃にいつまでももたれて居ないで早く消化する。此れが肉食よりも菜食の優る一つの所以である。

此の間死なれたロシア人のニコライ氏は殆ど獸肉を

食はなかつた。朝はパン、晝は魚肉を取るばかりで牛肉等を一切近づける事がなかつたさうである。其の理由と云ふのを聞くと、肉を食べると腹にたまつて、もたれて困ると云ふのであつた。頭をつかふ人に取つては腹の減るのが都合がいゝのである。

菜食にはまだ都合がいゝところがある。それは價の安い事である。菜食をするのと、肉食をするのとではどれほど人が生活するのに土地を要するかと云ふ事を勘定して見ると、菜食をするには一定の土地から米なり麥なりの果實を取つて食物とするので、一反歩も土地があれば十分一人の一年の食物が得られる譯であるところが肉食するのであると、先づ其の土地に草を作つて家畜を養つて其の家畜の肉を食物とするのであるから、草の中の養分が家畜の肉になるには其の間に養分の損失がある。此の養分の損失を見積つても、どうしても、米麥よりも三倍以上の面積が無いと一人の一年の食料が得られないのである。一國の上からは斯う云ふ事も考へなければならない。





北歐旅行

カトリン湖上に泛ぶ

花山院貴美子

五日――十時――昨夜茲へ着いた時は、冷たい暗い雨の中に、魔の樣な高い建物も、電車の音――自動車――の響も包まれて、赤――黄――樣々の電燈の光は高く低く、星の樣に流れて、遉がの大都會も靜かに眠つてゐたが、それに引かへ今日の快地宜さ。

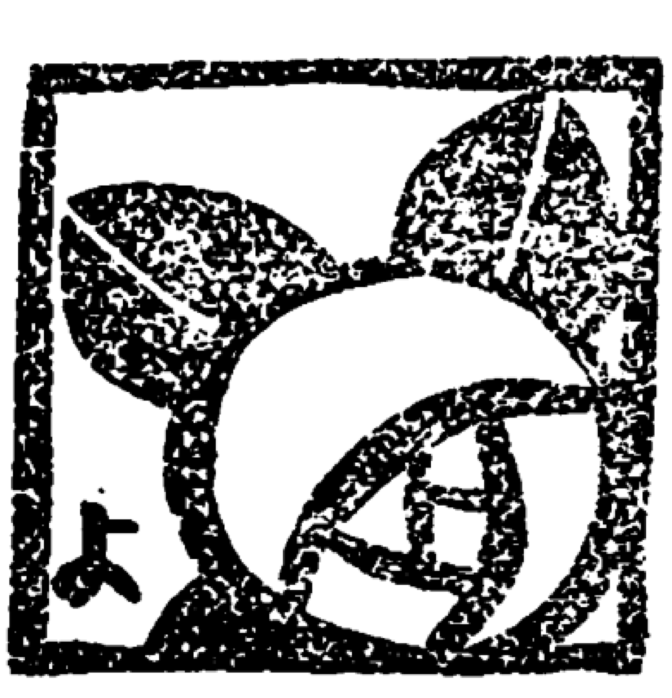
五月の日光は、柔らかい温い光を送つて全市街は、今や春――酣である。

午後私達は何所か目先の變つた所を觀樣と、茲グラスゴーで名高い寺院を見る事にして、汽車の疲勞と睡眠不足とで、暫らく休んで居られる母樣を殘して、兄樣と私に、從姉のミスプリングリー媬姆メーラを案内者にして、一行は自動車を驅つてホッテル前の廣小路を左へ、ハイストリートの方へ曲ると監獄がある。左側に添ふて坂を上ると其處に黑い寺院がある。

やゝ小高い丘の麓から、つゞいた建物の絶えた所は一面芝生になつてゐる。芝生の中には墓地を區切る鐵柵を周らして、其の中央に、古代ゴシックの尖頭多き建物が空高く聳えて居る。

自動車を下りて柵外から、鐵格子の門を這入ると、其所は廣い墓場で、一面に平盤なる墓石が敷石の樣に並んで居る。一基づゝ讀んで行くと墓銘の多くは、幾百年となく雨に打たれ風に晒されて、殆ど磨滅して了ひ、苔を拂ふても容易に見出し難い。

其の中に稍明らかに讀み得る、古代文字で記したのを發見した、ミスプリングリーは聲高く讀み初めた。



「此の地下にはレックスの伯爵レイ眠れり。永久の安

息と神の惠は…死して後も萬民の…この老僕の上にあれ、千五百九十四年十月十五日薨」所々判り兼ねた文字を綴り合せて、大抵の意味は相像されたが、三百年間の歴史を語るべきこの墓標よ。如何に尊きものではないか。

漸やく其所を通り抜けて塔の傍へ佇んだ。厚い石疊の壁の中には、細長い窓を切つた外、何等の彫刻も色彩もないが、折柄の西日を受けた部分は黒い石を灰色にぼかして、光――と蔭――は、その輪廓を明白にして、實に力?が表現すべき唯一の感を與へて、質素簡易なる古代ゴシックの精神は、寺院特有の宗教的威嚴を調和して、純然たる北國の美を現はしてゐる。

小門を潛つて內部へ這入る。二三段の石段を下りると廣い本堂へ出た。高い細長い窓には主基督の一代記を描いた所の、繪硝子が嵌り、夫れを透し通した光線は漸やく影の見分がつく位堂內を照らしてゐる。

薄暗き壁の隅から、劍で象りし紋章、或は楯の圖を描いた旗が幾條となく懸つて、赤!黃!紫!!一樣に燻ぶつて重なり重なつた微塵は、世の終りまでも、靜かに過去、現在、未來の死?の恐れを示して居るのではあるまいか。

右側の年古りて、木は朽ち果てし厚戸を開きて石段を下ると、一つの土牢がある。異樣の臭氣と、濕つぽい氣がゆるやかに動搖して、戀の恨か、氷なす劍か、信仰の迫害か、石壁に刻まれたる文字は、一句一句、古き幽閉の跡語り顏に、紀念にのこりて、觀る人をして古き苦悶の樣を偲ばせる。

聖壇の奧の左側に、祈禱室がある、嘗てクロムエルが使つたと云ふ椅子があつた。堂內を一廻りしてから、表へ出ると夕陽は彼方に落ちて、見上る塔の十字架は金色に輝やく…。

八日。ダムバートンで乘換へた汽車は、北へ北へと進む、カラリと澄み渡つた空には雲一つ見えない、青青とした草原や、銀絲の樣な小川、が來ては去り、去つては來る。三々五々、白い服に脛を露はした可愛らしい少女の群が珍らし相に此方を見てゐる。紅薔薇の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

樣な頰、白エプロン、青い草の配合も美くしく、其の面には何所となく平和の氣が漲つてゐる。

八時。パロック着、從姉の父方の叔母に當る、茲の富豪K夫人の別莊で一休みして、夫れから所有の船を借りた。普通の快走船よりは稍大きい。全體白く塗られて英國々旗がかゝげてある。

船は快く湖上を走る。冷こい風が強く吹いて波は魚鱗の樣に躍る。水際には枯蘆が一面に生ひ茂り、前方に一つの島がある。船は其の中を縫ふ樣にして行くと丁度島で、湖面は二分され直ぐ近くは岸になる。細い李の樣な花が咲いて小さい一軒の家がある。その後は高い山で、ラスの棧橋から爪上りの坂道になつて、其所に白い家が並んでゐる。左手に數多の小島が浮き出した樣に散在して、鬱蒼たる樹木の間から、蔦の絡まつた古き城の址が、堅く閉ざした窓が僅かに見えて……。

ラスからロワルデナンに近づく頃、湖水は幅一哩程に窄くなつて來た。左にベン、ヴエーンを望みつゝ、ベン、ロモンドの直下になると、仰ぎ見る嶺には雪がある。二三人の輕裝した紳士らしい人が騎馬で、だんだんと頂上へ登るのが、手に取る樣に見える。

寫眞機とり出した兄樣は、巧くカメラに納まらないとあせつて居られる。その中姿は消えて了つた。

其の直ぐ傍に、ロップ、ロイの獄屋がある。スコットの小說を讀んだ者は點頭くであらう。劍を硏ぎ、盾を磨きて互に爭そひし頃の物語を……。

湖水は北へ、四五哩に渡りその尖端まで行かれるけれども、茲で上陸した一行は砂地を登りながら、次第に山路へと差しかゝつた。處々若草の萠え出した所もあるが丈の低い灌木は、印度人の髮の如く、チリ〳〵と縮まり、未だ去りやらぬ冬の光景そのまゝで、茶褐色の枯草地の彼方此方に、灰黑色を帶びた塊がむくむくと動いてゐる。何だらう、じつと見つめてゐると、何ぞ計らん、山の羊であつた。本や話では知つた山の羊?。幼いときの記憶が朧氣に浮んだ。

餘程來たかと思ふ頃、急に眼界が開けてロック、モ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ントの三分の一位な、小さな湖がある。鹿や棲むか、猪が隠れてゐるか、スコットの詩によりて千載に不朽の名を止めてゐるこの地よ、雲を摩して高く聳ゆる峰々は、鬱蒼たるその影を湖面にうつして、檜、樅、の木立から、白館が見える。

稍大いなる建物はストロナハラツヘルホッテルで入口の下に石段があつて棧橋が突き出てゐる。茲で軽く午飯を濟ませ暫らく休んだ後、私達はサー、ヲーター、スコット號といふ、汽船でカトリン湖を渡り初めた。時々名しらぬ鳥が啼く。檜や樅に交つた白樺の美くしい並木のエレン島を左に、船はスースーと滑る様だ。片手を船べりに近く身をもたせた従姉は半美くしい瞳を閉ぢて、恍惚と青天共の空を仰ぎながら、靜かに、靜かに歌ひ出した。曲はかの有名なる、愛蘭島の曲。



三崎の臨海實驗所で研究して居られた峯子さんのお兄いさん。一週り仕事が終つたといふので来られるのを大平台にまで迎ひに行く

Rn on the sea rn on the sea
I an wher I would ever be;
With the blue aboue, and the blue below;

And silence wheresoe'er I go;
It a storm shauld Come and a wake the deep,
Wbat matter? I shall ride and sleep.

高く—ゆるく—低く—長く—所々、裸姆メーラが高音をいれるので、寂かなる湖面に響く、肉聲の美は碧玉の瞳、金の髮と調和して、かつては、聖彼得寺の唱歌隊女兒の一人——今なほ、歌劇ロイドの最高音の歌女たる有名な、從姉の——天才と讃へられしその聲はいよく冴えて、歌ふも聞くも齊しく、醉へるがごと恍惚として、詩さながらの此の景よ。……。

少し往くと兩岸は急に狹くなつて、船は崖に倚つた棧橋に停る。茲から又馬車にのり換へて、浪漫的な傳說に富む有名なトロサックになる。

兩側に密生したる樺の間を、轍の痕が新らしくついて行く、此の茂みを越すと、再び新らしい湖水へ出た其の岸に沿ふて馬車は勢よく走る。幾群かの羊は黑—白—灰色—樣々に、親と子、子と親、ひとかたまりづつ居て、ピーピーと兄樣が口笛を吹くと、ピーと眞似をする、ピー、又、ピー、暫らくは彼方此方で賑はしい。遙か向ふの北の空は、波打つ如き峯々が奥深く雲間に入つて、其の先は潮の洗ふて氷の山につゞくかと思ふと急に寒氣がしてきた。

顧みる今私達の來た方は、羊腸たる山路でところどころの、森蔭の白い家並つゞきの百姓家から、紫の煙縷縷として立ち昇り、實に心地よき一幅の名畫である。

アベフオイルへ下りて、一泊、翌朝七時で倫敦に向ふた。思へば樂しかりし蘇格蘭の旅よ、私は再びあの樣な旅をして見たい……。

かとりん海に　小霧罩めゆく
櫂とりし　筑波根の
ゑれんの君が　尾上を照す
面ざしは　夕月を
露もわが身に　痛める胸に
備へねど　鑄つけて——

夜雨

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



文藝協會劇『マグダ』の印象

のり枝

まだ早さうだからと云つて、銀座通りを一廻りして來て見ると、丁度六時でした。白い建物の内に、たゞわけもなく紫色がふらついて居る樣な場内に、釣り合つたベルがジヤラン〱となると、ドヤ〱といふ間にデモ紳士と、デモ淑女の顔がずら〱となだれに並んで仕舞ました。私の伴の男は、後を振り返つてプーッと吹き出しました。あつちこつちに植ゑつけた樣にキチンとすます、おしろいの化物、「オイ此處は見に來る處だぜ」。

ピリ〱スル〱で緞帳が上ると舞臺一面が退職中佐シユワルツエの、客間の處なんです、初めからおしまひまで全四幕この同じ場所で通しなのです。

林千歳さんのマリーが、左の端でミシンをかけてました。あの千歳さんといふ人を、只の素顔で見た時には、隨分美くしい人だと思ひました。そうして役者にでもなつたらば、きつといゝ男になれるだらうと思ひました。

けれども今あの人が、あゝして舞臺の上に立つたのを、こゝから、かうして眺めて居ると、只でみる程美くしいとも見えません。一ッは脊が低い爲に、目に立たないせいかも知れません。

大きい目と、大きい口と、大きい鼻とが、小さい身體に不釣合なのです。小さい身體には、大きい外のすべてが似合はないんです。つまり無邪氣な可愛いマリーとしては、あんまり悧巧すぎる顔に出來て居ます。



それから聲です。乾き切つた喉から、かすれ出る樣

な聲に聞えます。も一つ、あの目付が、おとなしいマリーの目使ひじやあとてもありません、舞臺で使ふ媚びた目付をする人です。もつともあの人のふだんのがそんなに愛らしいといふのでないから、かう愛らしくすると媚びて仕舞ふのかも知れません。まあ初舞臺としてはよくやつたと思つてます。或人達は、あの芝居らしい芝居をして居るのが、きざだからあの女が出るんなら、もう文藝協會は願ひ下げだ、と云つてよしたが私はそれ程嫌じやありません。

第一幕がすむでから舞臺のはしに、はり紙が出ました。「讀賣新聞記者〇〇樣、〇〇常香樣、木戸まで」とよし町の藝者までが、來て居るんだと見えます。

松井すま子さんは、第二幕から出るのです、私は、はじめてなんです、ノラの時は、都合があつて參られませんでした。マグダが戸を押して入つて來た時、なんてみすぼらしいと思ひました。よくみてゐる內にはまああの位のものなんだらうとも思はれて來ましたがマリーが云つた「春のすらりとした、目の大きい」といふ文句をきゝ、その通りを想像して居た目には、みすぼらしくうつつたんです、私はかうしたらよからうと思ふんです。すま子さんの顏をマリーにやつて、千歲さんの顏をマグダにやつたら、丁度いゝんだらうと思ひます。

天才だとか、何だとか云はれて居るすま子さんの演りぶりを、私は大きな目でみはつて居ました。

新聞には、少しおしばゐをしてる處があると云つてあつた樣でしたが、私にはそんな穴は見付かりませんでした。聲もあの位で結構と云つても、さし支へあるまいと思ひます。

少し生意氣な人間は、猫でも、釋氏でも、松井すま子々々々と云つてほめちぎつて居ます。すま子さんをほめない人と、こないだの熊野をほめる人とは、劇をみる目のない人として除け者にされるのが、こはさにたれもかれもほめもしくさしもしてるんじやあないかと思ひます。人があんなにはやしたてゝ、そうしてあんな役をすれば、どうしたつてよく見えてしまひま

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

す。たゞ今迄に誰もやらない、しぐさをあの位にこなしたそこの天才には、この上もなく敬服して居ます。

それから臺詞の中の「けれ共」といふのが、ことに際立つて、目や耳に流れ込むで行く印象に、ポチン〳〵と點を打つて行く樣な氣がしました。かうして居ても、あの叫ぶ樣に「けれ共」と高く云ふ聲が、耳の邊にふわついて居ます。

他の二人の女優のことは、云ふのをよします、何だか面倒臭いから。

私はもつゝ澤山に、世間の人が東儀さんを賞めればいゝと思ひます、文藝協會の内では、一番東儀さんが好きです、あの自然でそうして實のある演り方が觀客の氣を、ふわりと、そうして夢中にさせて、いつの間にか其の人の顏の前に引ぱられて、行つて仕舞つた樣な氣持にさせます。



文藝協會では、多く女の方を引立てゝる脚本許り、擇むでる樣ですが私はこの東儀さんをまん中にした芝居が見度もんだと思つて居ます。

フオンクレブス夫人、以下三夫人になつた男の方達は、どれが何だかさつぱり分りませんでしたが、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

西洋の女には男の顔立や、身體つきの方がチヨゲ〳〵して居て、よく似て居ります。

土肥さんは、やつぱり土肥さんです、舊道德を守る頑固一徹な退職中佐も、可愛い娘の爲にはあれ程までに讓歩もし、あれ程までに恩愛の絆でぐる〳〵娘をまきつけた、心の苦しさも、よくあらはれて居ました。この芝居の後で、なほ頭に殘つて居るのは、私はマグダよりも、この父のことでした、死ぬ今はのきわまでも、安心する娘の言葉をきかずにしまつたシユワルツエのことでした。

一體シエクスピアのでも、ズーダーマンのでも、イブセンのでも、太いものがだん〳〵細くなつて來る樣でおしまひが、枯れしぼむ樣になつてみた後で、氣持のよくないものが多い樣です、日本でも此頃そんな眞似をして、死んでしまつたり、氣狂になつてしまつたりして、おしまひになる悲劇といふのがありますが、昔の樣にどんな悲しい幕でも、後は目出度〳〵のチヤキチヤキで幕になるお芝居の方が、快よい印象を後に殘します。

片方はぢつとりと、筋道を考へ込ませるだけの、ねうちはありますが、色彩といふ樣なものは、少しも目に殘らないのです。あの花やかなマグダのモーニングドレッス、イブニングドレッスも、ちつとも考へ出して見樣たあ思ひません。片方は美くしい役者の顔や、衣裳や、それからしなやかな身振なんかゞ、目にちらついてはなれないんです。

云つてみれば前のが耳の劇としたら、後のは目のおしばゐです。

先の人形の家の方が、澤山泣かされたと人が云ひました。今度のは無理にこらへて居れば、泣かなくともすむで仕舞ます。たゞ妹が姉を慕つて居るいぢらしさと、父がマグダにふりかける恩愛の言葉の節々、そんな處が、溫い心の人達をぞつくりさせる處です。

マグダはよくしやべります、けれ共しむみりと物を云つて、人を泣かせる樣な女じやありません。

十二年、荒い涙や風にもまれて蓮葉な、高慢な、す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れた女となつて歸つて來たのです。けれどもやつぱり女は女でした。昔の戀人、フオンケラーに會つて恨をいふ處は、どうしても弱い女の本性です。

「小供の爲に、私は人の前に立つて歌もうたひました大道もさまよひました……この衣物一枚こしらへるのさへ、どれ程苦しむだか……」マグダの云ふ臺詞の内でこゝだけに涙が出ました。

マグダは、自己心の強い女だと皆は云つて居ます。けれ共私はそう許りとは思ひません。たゞく小供の爲に、しひても



自己心を強くして居るんだらうともとれます、小供の爲となれば、自分を捨てた男にてさへも、從つて、もとの鞘にもどらうとしたではありませんか、あれ程な華やかな舞臺も捨てゝ、世話女房にならうとしたではありませんか。そうして其の子を當分かくして置いて後に養子にすると聞いた時、マグダは狂氣の如く、怒り出したのです。けれ共マグダがもつと落ち付いて考へて見たらば、なにも其れがそんなにたけり狂ふことなんかしないでもいゝことだらうと思ひます。

マグダが今こゝでおこつてしまつて、フオンケラーのとめる手を、振りもぎつてしまつたなら、それ程愛する小供は、やつぱり女優の私生兒として、かくれた一生を送らせなければなりません、そりやあ、愛い小供を手許からはなすのはつらいにちがひないでせうが、僅かの我慢じやありませんか、マグダ程の悧巧な女とそのやり方が何だか矛盾してる樣に思はれます。

でもそうマグダを悧巧にして仕舞つちやあ、西洋の芝居にならないのかも知れませんが、東の方の人はとかく圓滑に、幕を下してもらひ度のです。

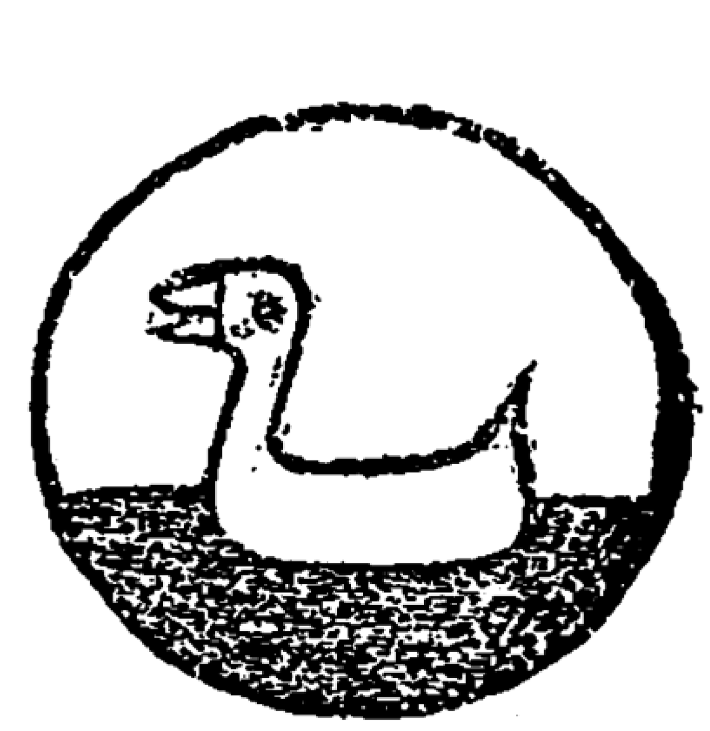
一番おしまひの「あゝ歸つて來なければよかつた」とマグダが叫ぶ處はなんだか氣違じみて居ました「あゝ歸つて來なければよかつた」いゝ言葉です。いゝ言葉をあゝいふしてなしでは、すつかりこはして仕舞つた樣なものです。一番おしまひで、みつしりしめる處を、惜しいことをしました。マグダの樣な女は今の日本にも、珍らしかありません。「故郷」は日本の現代と、あんまりかけへだてのない劇なんです、そうしてからいふ芝居を盛んに若い女に見せたら、不如歸の浪子の樣な女、しつかり夫につかまつてる樣な女は、全くなくなつちまうだらうと思ひます。

年頃の娘を持つた親達は、あゝいふ劇の流行るのを苦々しく思つて居るらしう御座います。

中佐も歩みよつたんです、マグダもあゆみよつたんですけれども、まだ其の間に距離があつて、シツクリと合ふことが出來なかつた爲、父は父、娘は娘でなく別れて仕舞つたんです。ヘツターデ、ヰングは、日本の芝居に出て來る、お家の忠臣の樣な人間です。

歸りに一緒に電車に乘り合はした向う側の人も、隣りの人も皆故郷の筋書を持つて居ました。

「オイ君、ね、彼女はそれだけの力があつて、あんなに威張りもし自己も主張するんだからいゝけれど、日本の女は、そんな資格もないくせにあゝなんだから、始末が困らあねえ」あつちの隅に腰かけて居た男の二人は、こんな事を話し合つて居ました、私は水をあびせかけられた樣な氣になつて、その人達の顏をぬすむやうにみました。



顔の色を白くしたいのが一生の願ひ

悲しみ草

何も恥も申さねばなりませんが、妾は産れ付きの丸顔で、その上色が黒いのです。お母さんの體毒を受けたとかで、小兒の時から色が黒かつたのです、女で色が黒いその上丸顔のお多福相……悲しくてなりません尋常學校を卒業して女學校へ這入てから妾は初めて色の黒いのを恨みました。父と母は妾を愛して下さる程妾は妾の醜いのを悲しんで止みませなんだ。校門を揃ふて並んで出る時、近所のお連れと共に歸る時、呉服屋の硝子戸に映る皆の影の中に妾の姿の交つて居る時何時も妾は悲しく思ひました。

妾は他の人より早く白粉を用ひました、毎朝毎朝の化粧に妾は殆んど一時間を費しました、十六になつた時妾は物の恥しさを知り初め、最も苦しかつたは十九の時代でした。

二百三高地髷なんかゞ流行しだして、庇髪の世になつた時、妾は天へも登る嬉しさを覺えました、丸い顔の妾には島田髷は不格好で庇髪が餘程妾に對する福音でありました。夜店や人の澤山集る處へ行つては妾は髷の形なんかを研究しました、丸い顔にはどんな髷が好いでせうか、妾のやうな形のものにはどんな髷が好いかと、それに從つて下駄帶着物までに氣をつけました。

それと共に香水や簪や櫛にまで心を止めました、丸顔を白粉で白く塗り口紅を着けました、お針習ひのお友達に群れて、裁縫に行きます、着物の評も出ます、下駄の評も出ます、帶の評なんか毎日出ました。妾はこれ等の人と共に習ひに行くのは厭でしたけれど（女で針が持てなんだら、什んなに損やら解らせん、今の内若い内に習ふが好い）と云はれて、來て居る身で他の人達とは餘程暮しにも迫られて苦しい方でありまし

た、着物の評、身を切らるゝ程な思ひが胸に迫つて、そのまゝ逝きはせぬかと思ふ位でした。

お針を習ひに行つて居る内に悲しい事は澤山ありました、針のお師匠さんはまだ二十七位の若いお方で、習ひに行つて居たのは妾一人で、最と淋しくも又平和で樂くムいましたが、その內に花さんと云ふ造酒やさんの娘さんが來られました。白い顔の上に痩せ方でどんなにか美人でしたらう。妾は十九でしたが、その人も十九でした、白い顔を美しく紅でぼかした薄化粧、それにお金が有るので思ふまゝに着飾つて居られました。その內一人ふえ二人ふえするに從つて妾の心の苦しさは嵩つて來ます、學校時代からそも〱苦にした妾の面影は、苦しみ苦しまされて肥つた昔は夢の樣に今はモウ痩せて妾乍ら什うしてこんなに細くなつたのでせうと思ふ許り、然してこの痩せたのが妾のために餘程幸福で、妾はいくらか美人形に見えました。小供離れをすると痩せると云ふ妾はそれでした、妾は幾分か嬉しくムいましたけれど、色の黒いのが何より苦でした、一寸出るにも、家に居るにも白粉の用意、什うして妾はこんなに〱天の神樣もあんまりな致し方と及ばぬ恨を日毎夜毎に繰り返して、大切に顔を化粧しました三時が鳴ると(お師匠樣左樣なら)と聲を揃へて出て行きます、五人程並んで歩いて居ても、妾が一番色が黒いが、今はこんなにして居ても白粉を剝がしたなら見違へる程黒い妾の顔、歸る途中に呉服屋がありますその硝子戸の前に立つて美しい衣を見て居る時、妾の姿が映ります、白粉を用ひずに居てさへ美しいあの人人の顔、妾は白粉を……何につけてもこれが氣に掛ります。

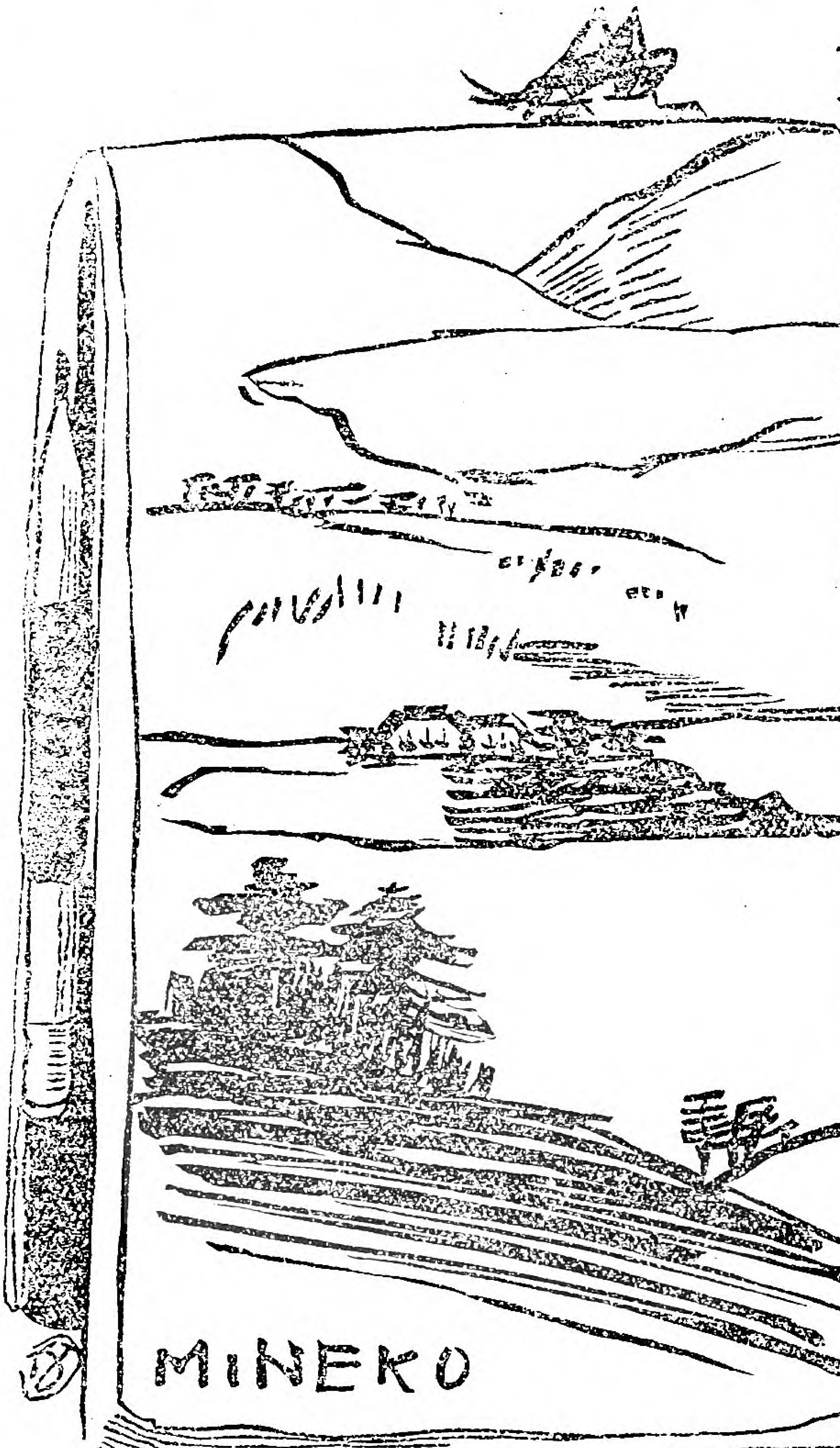
男の方なんか妾等を指して評をせられます、二番に居る女は什うのからのと妾はそれをきく度毎に悲しくなります、妾は妾は飽くまで世を僞り通さねばならぬが……。

白粉をぬつて充分に庇を出した髪を結つて居ると一寸人目を惹きます伏目勝ちにコウ俯向て足早に歩くと若い男の方なんか注意をして見られます、妾は斯かる時、悲しい中にも嬉しさを覺えます、こんな事の毎々重なるに從つて、妾は化粧に心を置きました。お友達の咲子さんが東京から戻つて居られる姉さんに習つたとて、歌留多を妾にも進めに來られました。妾はそれを二月許り習つて居る內に上手に早く取る樣になり、その面白味を感じて居る時、咲子さんに連れられて、

歌留多會に出席した。席には若い血の漲つた男の方が居られました。妾と咲子さんと並んで居るつひ横へ頭髪を美しく分けた男の方が坐られて、その夜は十時頃まで遊びました。若い女が若い男と夜遲くまで遊んで居る何とした事でせうと恐ろしく思ひましたなれど、妾產れてからこの夜程花やかな夜を知つた事はありませなんだ。

（咲子さん歌留多取るのなら女達許りで遊びませう）

と注意がましく云ふもの丶、一枚の札を取るに五六人の手の摑み合ふ面白さ、男の方と視線の合ふた時の心地、黒い町を歸つて來ると後の方から雜談し乍ら來る男の方の下駄の音、忘られぬ印象となつて前後五六回も行つた內妾は二十二になりました。その時の夏の或る夕暮れでした、妾は湯上りのほてりがましき姿を店の柱に凭せて絹團扇を口のあたりにあて丶涼んで居りますと、母が一寸と呼びますので妾は奥へ行くと緣先の伊豫簾の下



江戸の湖を望む（峯子さんのスケッチブックの一葉）

に岐阜提灯が燈つてあつて藺で拵へた敷物が二枚並べてありました「お母さん何です」と尋ねると母は「お前も年頃だしモウいつまでも内に許り居る譯にも行かず、恰度好い話があるが」と宛然小說か芝居で見る樣な話なので妾はたゞモウ敷物のほつれをいぢり乍ら、夢の樣に聞いて居りました。

翌日奥座敷で裁縫をして居ると母が來て、昨晩と同じ樣な事を云ふので、妾は取りあへず（考へて置きます」と云ひました時、暫らく忘れて居つた色の黑い事を思ひ出しました。胸に響く悲しみの身となりました母はその後每々尋ねます、妾は「何れお嫁には行きますが、今度のだけは斷つて下さいなア」と云つて色々とその夜から物思ひに沈みました。お針友達であつた花子さんや、その外の方も二月程前に嫁に行かれた事をゆくりなくも思ひ出して、今我身に及ぶ是非なき人生の神のしわざと恨み喞ち泣きました。

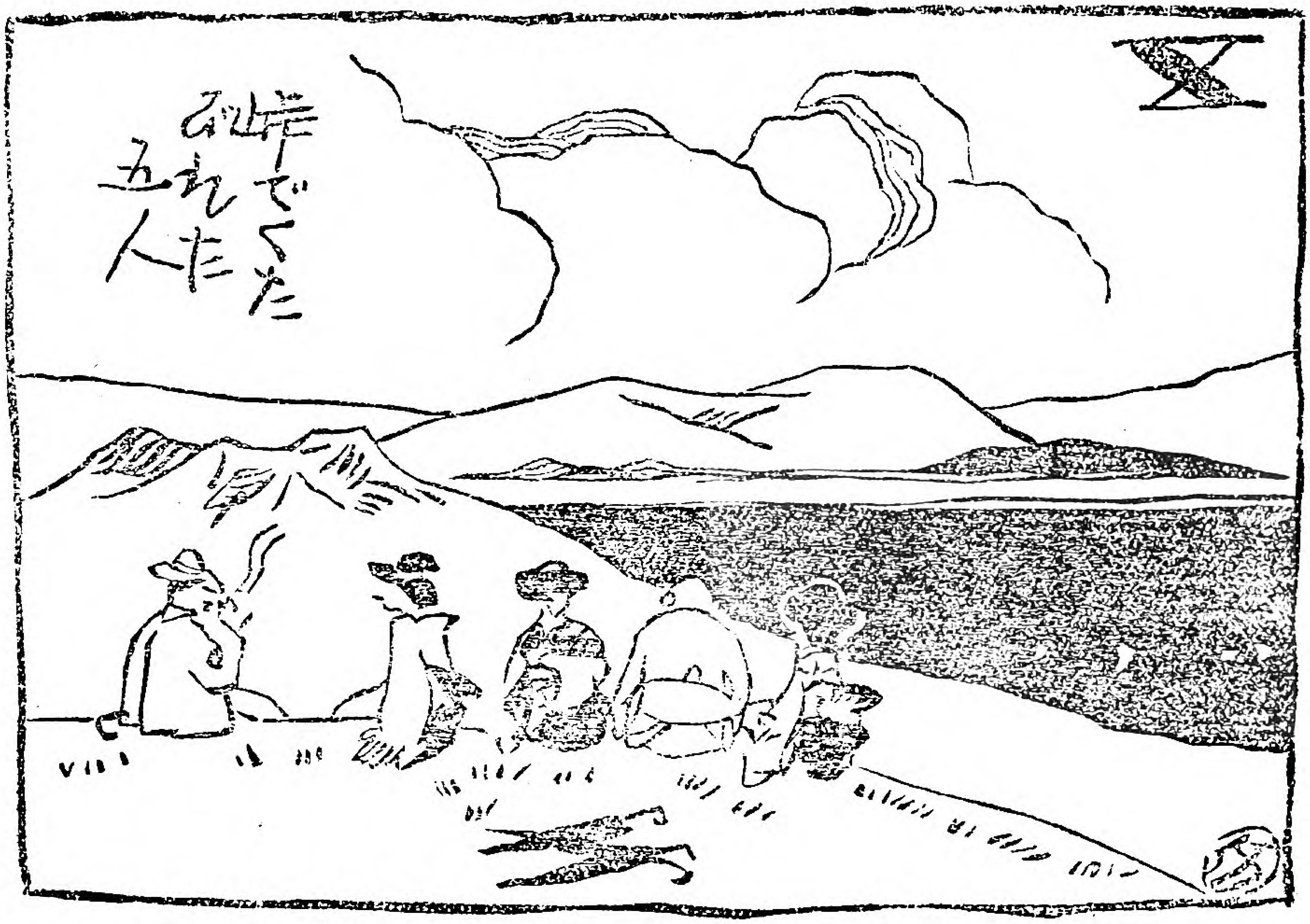
去る日、岡崎に遊んで丸髷姿の御友達を見た時の心の悶え、その羨ましき境遇を吾れにもと神は母よりして告げ來られる時、妾は妾の云ふべからざる悲しみ。

若し心かなひて目出度嫁入りの祝も濟んだならば、苦心に苦心をして癖を付けたての庇髷も解かねばならぬか、丸髷に結つたら什うだらう、庇髪ならこそ丸顔も愛嬌あれど、前髪出した丸髷では什んなに姿が替るやら、朝な〳〵の厚化粧、夫に知らしともないての顔の色（黑い色は白粉ぬればよい）と申さるゝ夫ならば神樣の樣なれど、何れは朝の亂姿も御目に入れねばなるまい、初めて妾の色の黑きを見給ひし夫は、何と心に思召さるでせう。それが爲めに悲しき離緣……一度嫁いだ汚れた身となつたら什うだらう、お嫁さんになつたとてこのまゝにして永く居られゝば結構の、さりとて無理な妾の願、不如歸の浪子さんが去られて歸つて來た時、倒れる許りのあの悲しみ方、驚き方、妾も去られたらあの樣な憂き悲しみに逢はねばならぬか然し人間は飽くまでかうして居られるものにあらず、夫に仕へて兒を育て母や父を喜ばす、これが女のいえ兒としての道じやないか、（はいお嫁に行きます）と云ひ切事の出來ぬ妾の悶え、神樣よ、妾は死ぬまで斯う白粉をして斯ら花やかな生活が續けたいです。去られる事もなく、色の黑きも人に知られず飽くまで……死んでも妾は白粉をして、そうして御淨土へまでも行きたい、あゝ悲しい妾の心……

あとさきの考へもなき事澤山にペロ〳〵と書きをは

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つた時、妾は前文を繰り返し讀んであゝ罪なことを書いたと筆を投げて兩の袖で顔を覆ひ机の上にひれふしました、小さい枕時計のセコンドを刻み行く音が、かぞへらるゝ樣にきこえて來る、庇髪が机に觸れて居ります、これが妾のかりそめにも(僞りのなき告白)です
斯んなことを告白するのはお恥かしいのですが、でも言つて了へば胸がすうつと致しました、これで私はもう二十を過ぎた女なんです、無論嫁には行きますけれど、秘めてある私の苦痛を言つてしまはないと、胸の塊りが溶けません、溶けても亦塊りは出來ます、ほんとに私は不運です。



むちやう

ほどけかゝりしきぬのひも
ゆるきくつもてあをうめの
みきはよづるにかたければ

まゆふりかくすをばなりの
あねなるひめはたけのびて
あぐるかひなのしろきかな

そでをかゝへてしきいしに
かゞみおはせし二のきみの
まろきひとみのやさしきが

とこにおきけるしろがねの
むちをおろしてはしりくる
にはゝこだちのみどりして

むちはみじかしえだたかし
をどりあがりてしたつえを
はらへどちるはわかばのみ

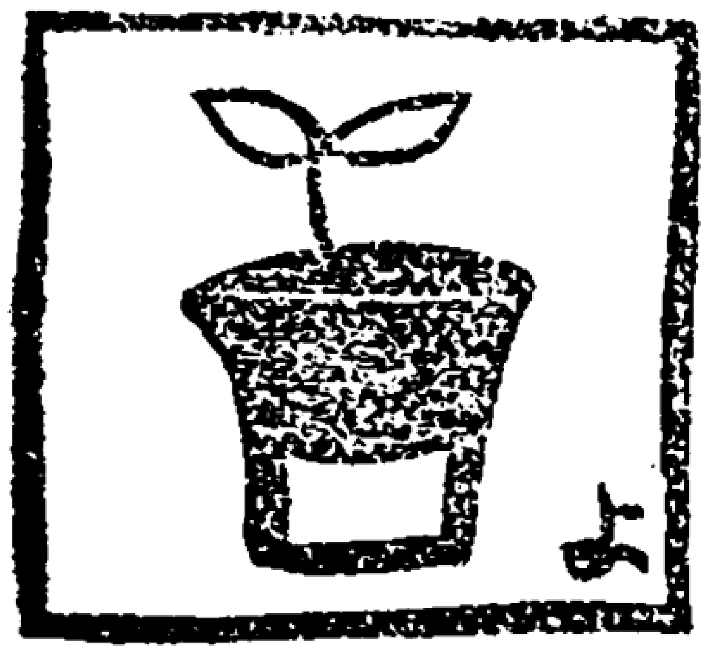
おもやのやねにはとなけど
ふたりのひめはものいはで
そのゝまひるはしづかなり



歩きながら

（地方に及ぼせる生活難の聲）

譽田順子



すいかつらの匂が甘く胸に流れる。左手の崖の上を見上げると、大きい松の根本にいくすぢもからんだ、きやしやなかづらのふしぶしに白い様な、黄なやうな細い花が群れてゐる。まるい玉の様な、あせびの花は白く崖にこぼれて、眞赤な岩つゝじと交つてゐた。山の方からこぼれ落ちる土が崖の凹みに溜つて、其處から群をして生えてゐる實をこぼして終つた雜草は力なく白けてゐた。それにまじつて芽をふいた淡草色のしほらしさ。

正午過ぎの太陽の光は、峯にさえぎられて私の新しい草履の下にはじめ〳〵としめつた朽ち葉が侘しい色を重ねてゐる。チヤリン、チヤリンと歩く度に鳴しながら、いくつかの山の端をめぐつた、私の頭の上を歸つてゆくらしい、白い頬冠の圓い頭と、馬の背に飾つた赤い木綿とが、縱横に組み合つた白い鱗のやうな雜木の皮膚や綠の濃い葉蔭から、チラ、チラ見えかくれ登つてゆく。

右手は低く谷になつてゐる。重り重り轉がつてゐるいくつもの黒い岩の胸から胸へ澄みきつた水が細く太く長く落ちてゆく。チロ、チロ、チロ流れの音が耳の鼓膜を濡らして、乾からびてゐた頭の壁にしみ〳〵と軟かな濕がにじむ。

谷の向ふには低く杉が多い林が擴がつてゐる、其向ふの燒跡の黒い山の腹を這ふてゐる白い道を、脚袢の眞白い旅人が一人急いでゆく、肩にかけた油紙にしみ〳〵とした旅の匂が流れてゐる。處々ぼつりぼつり伐り殘して松の美しうこえた幹に美しい光があか〳〵と燃えてゐる、旅人は其間に抜けぬけ、スタ〳〵と馴れた足取で遠ざかつて行つた。其邊りのうすくなつた山肌はどれもこれも日にさらされて赤く深い谷間の暗綠との山ひだがハッキリ際立つてゐる。平かな林には、木立の一つ一つの奥へまでしみ〳〵と溫い光が溶け匂ふて軟かにふくらんでゐる樣にふんはり瞳にうつる。

山の麓の平地には小屋掛の軒が、蕉茶色

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に群がつてゐる。美しい小鳥の聲が靜かに徹ると、すぐ賑かに反響する。山はザワ〳〵鳴つてゐるのに、私を吹く風は眉毛の毛穴に沁むのさへ覺えらるゝ程の靜けさである。道の上にさし出た小枝を傳ふ細い紅い足が時々柔かい新芽をけをとす。

足元に添ふてゐた谷川とはいつのまにか別れてしまつて白く切り拓いた樣な崖になつてゐた。左手にくつついてゐた山と自分との間には可成瀨音のする青い水の流れが白く光つてゐた。川傍の水が殘してゆく砂土堆い中には嫁菜や、芹の美しい芽が、淡く濡れてゐる背の黒い小魚がスイ〳〵流れる。河に添ふた背丈の揃ふた松の林をまぶしく輝かした光は梢や葉間を洩れて紫だつた光の縞を、ボーッといく筋もまばらな木の間に横へてゐる、崖をしぼつて滴る水と雲母や石英の混合物がチラ〳〵光る、此邊は何となく廣くなつた樣だ。仰ぐと、りんどう色に澄んだ空の色は不規則に劃ろうとする、ゴタ〳〵並んだ林の先にも山の凹みにも木の間にもさへ同じ樣にまろ〳〵緩かにひろがつてゐる

崖と崖とを切り拔いて通路にあてた狹い坂路の上り口に「一そく二せん。」と消え炭で付木の裂いたのへ書いたのをつけて、草履を五足程竹切にさして吊つてある、此上に家があるのかと見上げると一人の若い巡査が下りてきた、今にも頭の上へ轉がりかゝりさうな氣がする。上はやゝ平たくなつてゐるらしい、いくつかの茶褐色のさゝやかな屋根が地へへばりついてゐる樣に低くみえる。淡い煙が迷ふてゐた、蛇の樣に巧に曲りうねつた松がヌーッと崖を拔け出で鎌首をもたげてゐた、重々しい水車の響が聞える。

私は此處から此巡査と道連れになつた。

高知市を離れて十何里の山奧である。「夜十時頃から廻るんです、此道からもう一つ北の山を越えてぐるつと一廻りすると大抵夜明けです、それでも夜中頃、ボツ〳〵通つてるんですからなあ、誰何するとよく嫌ふてドン〳〵逃げ出す、昨晩だつたか、此少し先の草原ですつかり眠つてると、ゴソ〳〵云ふです、僕まだ夜中の心意で。誰だ誰だと云ふとドン〳〵逃げ出す、かれこれ半里程追ふて押へたら何でも無かつたんです、ハヽヽヽ。」「ハヽヽ、なか〳〵職務に忠實でゐらつしやいますね、だが職務に忠實などほめられるのと人民保護とは何處やらに矛盾しとる點がありやしないかしら。」「それはちつと極端ですなあ、然し何です、僕、此前△△に居たんですがなあ事故が無いのを僕の不性とはき

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

違へてこんな山奥へ追はれたんです。」「ふ、ふ、人さへ見れや泥棒ですか。」「然樣、まあ、ほじくる者程、えらい樣な理由でしてなあ、まあ敵打ちみたいでさあ、實際此邊でゞ探したら限りが無いです、料理屋のある土地ですと少いですがね、こんな處になると亂雜なもんです。私生兒を生まぬ女は先づ無いですよ、先日も妹の許にや若衆が泊るが自分の處へは來ないつて、妬けて女子だてらに刄物三昧をやらかした娘がありますよ四十前後やら若い女子で死ぬのは大抵××でやりそこなつてるんです、だが、思ふてみりや彼等はこれが唯一の樂しみなんですからなあ――。實際可愛さうですよ、盆をどりは取上げられ、お祭り騷ぎはできず、物價は騰いし、働く精が無いつて、なへきつてますからなあ。」「矢張り此邊りでも郵便貯金にやせめられてるんですか。」「さあ、學校同志で競爭してるんですからなあ、何誰は何十圓、何誰は何十錢なんて、讀み上げられちや、少い子は親に泣きついてせぶるですな、親は親で先生樣のお云付だからとて高歩で借金してまでもどうやらかうやら入れてる、だから、學校は耐らん何も働きもしねえで一文も取れんに貯金だの何だのと無暗に錢が入つて耐らん」なんて云つてくるんです、實際此邊りの暮しは酷なもんですよ、せめて米の飯か野菜の新しい煮物で食してやつたら全快るだらうつて云つてる病氣があるんですよ、粟やら稗やら木の芽やら甘諸やらまあそんな物です、實際から上下の差か甚しくちや末ですな、早ら調節しなくちや。」「××濱なんかでは鹽が專賣になつてから隨分慘な境遇に落ちたんですつてね。」「○○村には朝飯を食はん生徒やら、晝飯の出來ない生徒があつたさうです、實に慘めですな、僕なんかも、一日も早ら妻帶しろ、しろつて上官に進められるんですが、これぢやとても、二人の親と、三人の妹弟等の上へまだ背負されちや身動ぎもできん。小役人も小作人も慘めな者です、僕だつてこれでまさか、このまゝ死なうとは思はざつたが、なあ、――。」「何にしろ今は機會に投ずると云ふ事が大切だから――。好い機會を與へられた人が勝利ですね、勝利つたら、專横な振舞のできること――ほんとに不公平なもんだ。」「このまゝが續いたら田舍者だつていつまでそう眠つて居るもんですか――。神も佛もちつとも有難かない何樣したら腹が張るかと考へんならん恒産無ければ恒心なしだなあ、」私は巡査と別れて、又單調な山路を歩いて行つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



十六歳の少女が丑の時參りをした實話

小畑はる

頃は霜月半、昨日よりの時雨空はまだ晴れやらで、雪を含んだ灰色雲の低う漂ふ間から、十七夜ばかりの月が、わづかにあらはれては、またかくれる。折々すさぶ木枯に梢の雪が、バラ／＼落ちる氣味のわるい夜である。夜遊びの若い衆も、通ひなれた女の家に落ち付いたと思はれる十二時少し前、眞黒な鎭守の森にちらと火光が見えた、と鋭い物の音が、カツ、カツ、カツ、間をおいては四度五度、やう／＼夢に入つたばかりの枕にひゞく。老の身の耳さとく、鳥居際の、作造爺さんふと起き上つて、火打石打ちながら「何づらあな婆さん？」「呪ひ釘だあよ、爺さん、はて誰か罪作りな――」枕元の煙草入引きよせて「人を呪へば穴二つといふだにのう――」その時であつた「誰か來て呉れや――大變だあぞ――」二人共、思はずとびおきる、たしかに彼聲はお宮さんの森、「婆さん提灯を早うや――」おど／＼する婆さんを叱りとばすやうにして、表へとび出すと、隣の甚太の家でも今の聲をきゝつけて宿り合せた若い者共が、八九人鎌やら、鍬やら、各手にもつて出て行くのに、ぴたつと逢つた。隨神門の處まで來ると、さすがの若者もたぢ／＼とした、とみる呪ひ杉の下に白衣の女とゝり組んだまゝ、たふれてゐる人がある。女の頭に立てたろふそくが、今消えやうとして、うす青い火光にあたりを照らしてゐる。

それでも、どうか、かうかして爺さんの家まで二人をかきこんだ、男はすぐ息をふきかへしたが、女の體は氷のやうに冷え切つて、朱の唇の何時、ひらきさうにもみえないが、さけるばかりに見張つた目に恨みの光、物凄う、燃えて、人々がどう手をつくしても瞑ぢなかつた、女が養の親も來て、何や彼やさわぎの中に、亡骸を引き取つて歸つた。大路葬式の用意もとゝのつた翌日の午後四時過、それまで爺さんの家に人心地もなう寢てゐた彼の男――隣村の吉三といふ――は

ぶらりと女の家に入つて來た、新しい佛に向つて、長い事、何やら獨言してさて玄關に集つてゐる人等に向つて、なが〳〵と話し出したのはかうである。

吉三とお園――彼の女――とが關係してゐた事は誰も知つてゐた通りであるが、一月餘り前久し振りで逢つた時、お園は同村のお久とあやしいといつてさんざん恨みをのべた、吉三は思ひもかけぬ事なので、つひ二言、三言、云ひ爭そつて別れたが、氣になるので母親が病氣で出にくいのを、何とか云ひつくろつて、其晩やう〳〵來て、裏口で樣子を伺つてゐると、やがて忍びやかに出て來たのは、白衣に、髮を長うたらして、胸に鏡をかけた呪ひ姿のお園であつたので、聲をかけようとしたが、だまつて後をつけて行くと、お宮さんの呪ひ杉に向つて、何やら久しく祈つた後、打ち込む釘の音に、我に返ると、お園は彼のお久を呪つてゐるのであつた。つまらぬ思ひ違ひから、とんだ罪を作らせると思ふと、我にもあらず「おそのさん！」とよんで、釘打つ手を止めたのであつたが、お園は人なしと思つてゐる處に、耳近く聲をかけられたさへあるに、その聲をかけたのが、吉三であつたので、張りつめた氣がゆるむと同時に、おどろきと失望――呪ひ場をみられて、これ迄の苦心が水泡となつたといふ――のためにであろう「恨めしい、吉三さん」といふや否や氣を失つて、たふれかゝつたので、思はず人を呼んだまでは、おぼえてゐるが、今度、正氣になつたのは爺さん家へつれられてからであつた――長いこの話は人々から多大な興味をもつてきかれた、戀する女の心の强烈なのにおどろいた人々は、それにしても十六やそこらの小娘が――と只呆れ返るばかり、お園はまだ十六の肩揚深い少女であつたのである。

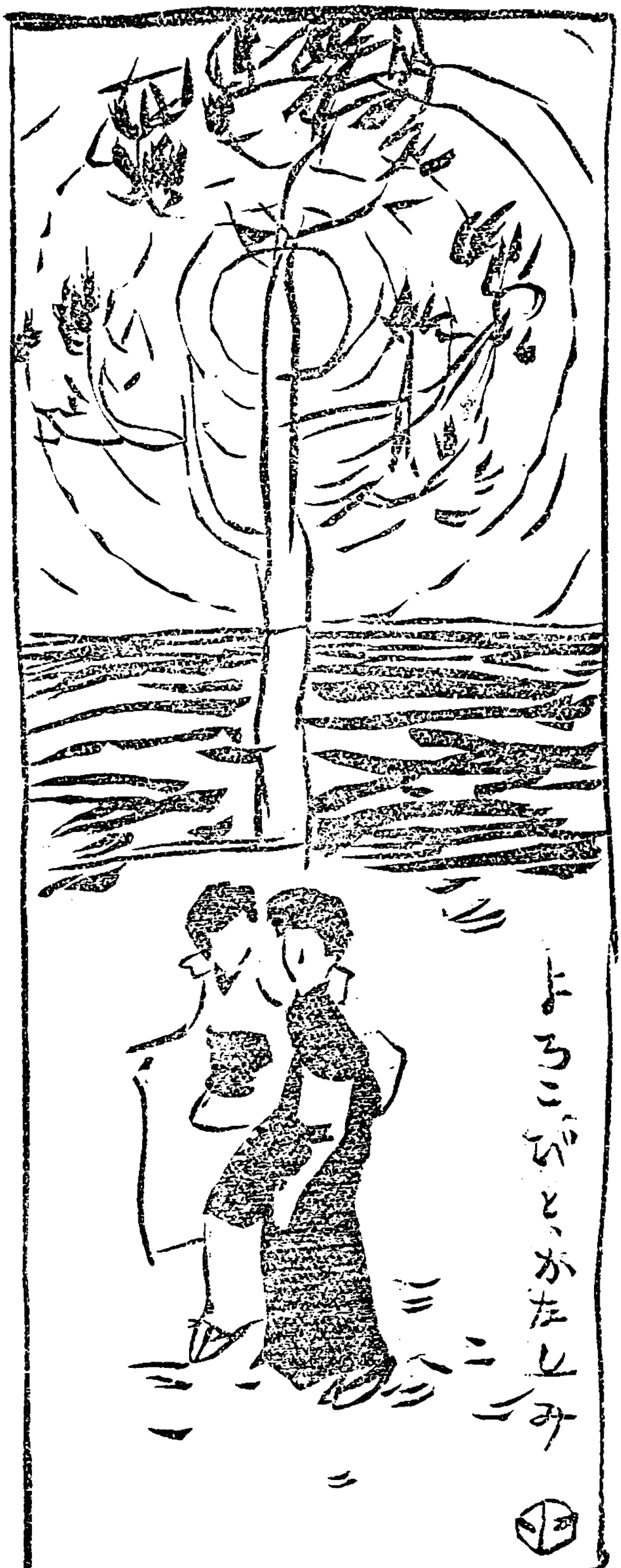
彼女の母はこの里に名高き美人であつたが、ある身分高き人を垣間みて、夜となく晝となく戀くらし、遂に物狂はしうなつた、彼の貴人は何と思つてか一夜この狂女を館に召した、しかもそれは永久にこの土地を去ろうといふその前夜であつたといふ。

狂女は「いづれ迎をよこす」と云つた人の言を信じて、貧しい家に只一人、はかない約束の日を待ちくらしたが十月の後、玉のやうな女子を生みおとして、つれない人の名をよびつゝ逝つたのであつた。生れた子は姉なる人に引き取られて養育られた、貴人の血を引いたゞけに年毎に美しう、眉のあたりなどそのまゝだと評された。それが乃ちお園である、父の氣性を受け

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ついだ彼女は、村中でのきかん坊であつた。

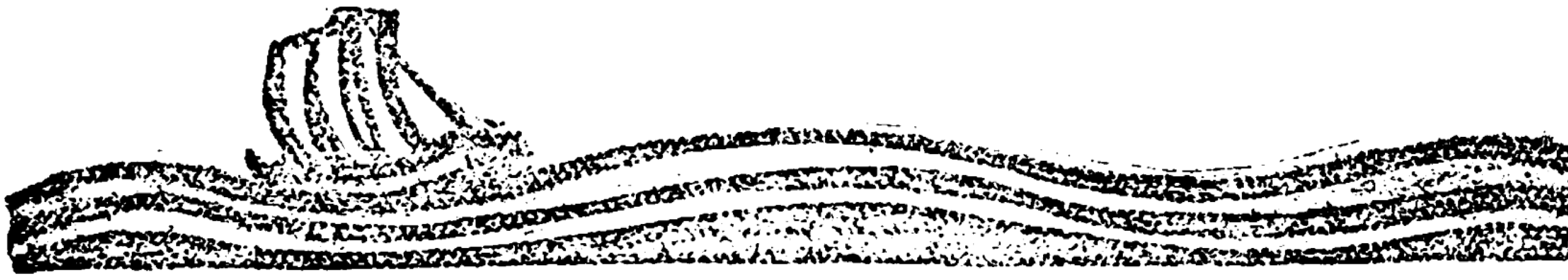
母は戀に狂つて、いぢらしうも死にいたるまで戀人を信じ、娘は思ひあやまりたる戀の仇を呪ひ殺さうとしたのである、戀に生れて戀に死したる少女の一生―○○寺の南の隅に、俗名その、行年十六歳としるされたる小さな石碑も、まだそれほどに古びてゐない。今から約二十年前の話である。



あやしきは、火にぞありける、うちしめる、時こそありけれ、もえたてば、けつすべもなし、世の中の、人の思ひも、おのづから、しかこそあるらめ、よのつねは、外へも出で得ぬ、たをやめの、たつや心を、黒髪の、思ひ亂れて、いたゞきに、ともし火さゝげ、むなさかに、ます鏡かけ、左り手に、かなぐきもたし、みぎりてに、金つちもたし、ぬばたまの、闇のよふけの、丑すぎて、うしとも言はず、神のます、杜のしめ繩いきのをに、かけつゝずゐて、おひしげる、並木の松に、左手の、釘とりおさへ、みぎり手の、つち振り上て、ねたましや、あなねたましと、かきみだり、逆立髪に、さかだてゝ、角をさゝげし、ほのほも、鏡にうつり、鏡はも、胸にたく火の、恐ろしき、姿てらして、とこひ打ち、音もとゞろに、山彦の、どよむ響きぞ、よそにきく、身にもこたへて、身の毛さへ、いよたちにける、たをやめの、いかにもえたつ、心なるらむ(橘庭巒)

たをやめのとこひのろひとうつ釘やいづくの誰が身にひゞくらん

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



山上の瀬畔より——

妹に與へて女の所謂同情を疑ふ手紙

水野葉舟

東京にて。
お澤さま。

二十五日晝

今、此處は實に氣候のいゝ絶頂と言つてもいゝ時、朝起きると、涼しい、少し冷たい風が頬に當る。家の周圍には微かに目にそのが遮る程の水蒸氣が立ち籠めて居る。靜かで、しつとりとして、何か深く思ひ込んだ事のあるやうな心持がされる。僕はこの日光の奥の湯本でこの三四日を暮して東京に歸らうと思つてるんだ。

全くは一昨夜は、あの長い手紙を書くと昂奮して、しまつて、夜が白々となるまで眠れなかつた。それで氣が何となく疲れて來ると、次の日にも、彼方此方と歩き廻る事がつくづく嫌になつて了つて、何はともあれ、何處かに行つて、落ち付いて三四日暮さうと思ふと早速此處に來る氣になつて來てしまつた。

で此處に來て、この湯の湖の湖畔を歩いて居ると、この周圍の靜かな、穩やかな自然の力が、深く胸の中に沁み入つて來るやうで、一種の幽玄な、力の籠つた呼吸が、この胸の底に沁み込んで來るやうに感じられる、同時に、僕は深く思ひ込むやうな心持が籠つて來る。

僕のやゝ疲れて居た心持が、次第に同復されて來るやうだ。僕は今口を開けては、どんな人にも、一言もものを言ひ度くない

今、もしこゝで僕の傍にお澪ちやんが居たら僕は恐らく目の表情で自分の心持を傳へようとするだらうと思ふ。僕はきつと、少し萎へた、しかし、喜びがその底にひそんで居る目をしてお前の顔を見るだらう。その時にお澪ちやんは何と思つて、この僕の心持に答へてくれる事だらう?!

しかし、僕は今の自分の心を弱い寂しさに慄えて、訴へようとして居るものだとは決して思はない。又決してさうでは無いんだ。僕はむしろ、今の心持では、あらゆる人の同情を退けてしまひ度く思はれる。



しかし、この感情は、まだ直接に澪ちやんには話されない。年の若い心の柔かい澪ちやんは、まだ暖かく美しく軟かく生きて居なければならない境涯に居る人だ。だが、澪ちやん、僕は今、自分のこの心持から出發して、同情と言ふ事について、少し書いて見たいと思ふんだ。

世間では同情と言ふ事程美くしいものはないとされて居る。人間の心の中で神に近いものは愛である。同情である。とされて居る。

それは全たくそれに違ひない。人の痛みを、身を以て感じると言ふ事は、美くしい尊い事であるに違ひな

い…だが、僕が持つてゐる智識で考へて見ると、この人間の種々な心持に對して見ると、この同情と云ふ言葉程、解らないものはない。この言葉程、恐ろしい罪を作つて居るものはないと思はれる。この言葉は決して一概のアイロニーではないんだよ、僕は心底思つて言つてるんだ。この同情と言ふ言葉の下に行はれた種々な行爲を聞くと、僕には實に人間の弱い心のはかなさを思はずには居られないのである。同情を求める心の憐れな姿を思はずには居られないのである。

これを感じた譯と云ふのは多くの同情と稱するものが、少しも人間を理解した心で爲されて居ないからなのだ。たとへば大抵の人が心を動かす時には、たゞその感情を刺激した、その場、その儘のものである。その自分の心に向つて、少しも反省した跡と言ふものがない。かう言ふ場合に起る同情と云ふ事は宗敎的に言ふと、罪惡である事さへある。

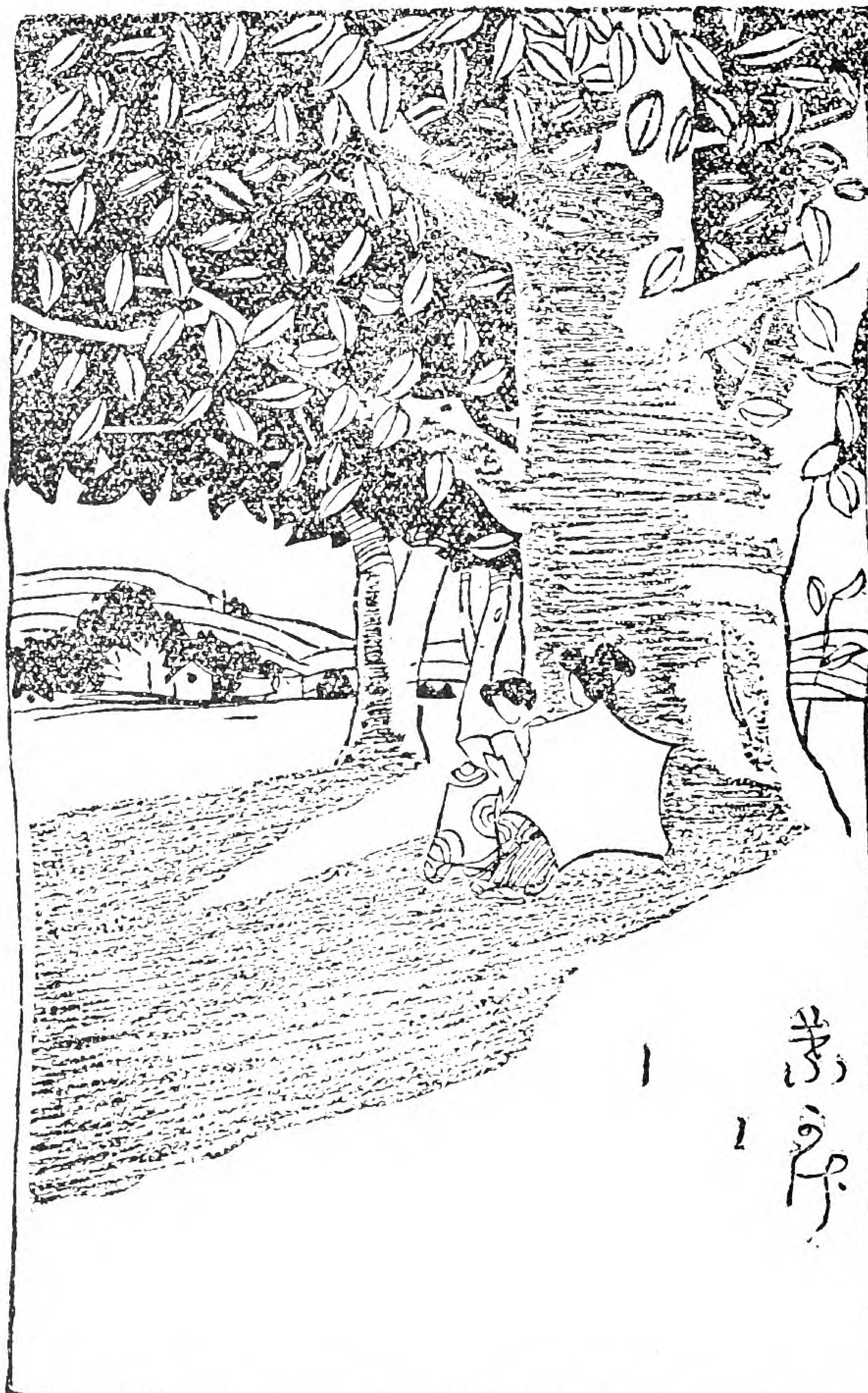
一體、同情と云ふ事は「思ひやり」と言ふ事なのだ人の心持になつて見て、その人に同感し、更に一歩進んで此方の心を相手の心に力をそゝぎかけると言ふ事なのだ。それが同情の根本の第一の要件なのだ。で、それにはその此方がなつて見ると言ふ相手の人の心持を餘程よく理解出來るやうでなければならない。それが第一に大切な條件ではないか。處でこの理解すると言ふ事が言葉ではかうやつて一口に言へる事だが、さて實行するとなると、さう簡短にはゆかない事だと思ふ。

だから、立派な同情と言ふ事が中々出來るものではないと思ふ。

僕はまづ同情が出來ると言ふまでには、一番初めには、理解が出來ると言ふ事から考へなければならないと思ふ。自分の心で、人の心をよく味ひ、解るやうに成れると言ふ事が第一に大切な入口だと思ふ。第二には、その心が無頓着で居ないやうに、ものに共鳴する力を持つて居るやうになる事が次の境であると思ふ。理解から同感に移ると言ふ事なんだと思ふ。で第三にはそれに情熱の加はつたものに成る。これが同情なん

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

だと思ふ。から言ふ事は決して大變むづかしい理屈つぽいものの言ひ方ぢやないんだ。實際さう成らなければ本當に同情でもなんでもないと思ふ。それは本當に僕はさう思ふんだ。今の世間で、同情だ〳〵と言つて居る事には、たゞその人の感情が刺激を受けたと言ふ事をして居る人に少しも反省した跡が無い。單純に「かあいさうだ」「いた〳〵しい」「氣の毒だ」と思つたゞけに過ぎない同情になつてゐる。自分の心が痛かつたとだけ感じて居るやうな事しかない。さう言ふ、子供が自然と大人になつて了つたやうな、單純な、何にものを考へない心持で萬事をやつて居る。



僕は殊に女の心がさうであつてはならないと思ふんだ。その中でもとよりわけで、お溶ちやんはさうではならない。如何なる場合でも、もの事を正當に見て、正當に判斷が出來、同感が出來るだけにその心がなつて居なければならない。さて、人の心はこゝから先が分れ目に成るんだ。これから先が人間として、惡魔にもなり、天使にもなるんだ。

それまでにならない人間は野蠻人だ。同情と云ふ事は、この上にも一歩出たものであつて欲しいと僕には思はれる。

僕は實は今、この自分の心をしつかりと理解して、同感してくれる人が欲しい、と思つて居る。ある時などは饑えて居るやうにそれを願ふ事がある。しかし、僕はそれについて、何時でも必らずひどい失望を感じさせられて來た。僕の知つて居る人達——殊に女の人達は、さう言ふ事については、餘り無頓着すぎると思はれる程だ。

これ程、この世界が寂しく感じられる事はない。何と言つても、これ程、憐れな見すぼらしい世界はないと思はれる。ほんとにさう思はれる。それだから、その心持を今、思ひ出してこの手紙を書いたんだ。

お澪ちやん、僕が今言つて求めて居る心持は、たゞ僕一人の心持ではないよ。今の世間で少ししんみになつて、心の豐かな生活をしようとして居る人は、皆さう言ふ「饑え」を感じてゐるに相違ない。僕は此處の點を、澪ちやんが聞いて、心にしつかりと感じて欲しいと思つてるんだ。

僕等の今、住んでる世界の周圍が野蠻である事を、澪ちやんも感じて居るだらう。たゞ漠然と流行に押されて居る。智識や、道德があるだけで、眞實に生きて行かうとする——人間としてもつと立派に生きて行かうとする上から考へた事が、實に乏しいじやないか。僕はそれを思ふだけでも、この世間が寂しく思はれるよ。(溫泉宿の二階にて、兄より)



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



傳說の興味

文學士 高木敏雄

◎傳說と文學

童話や傳說の興味と云ふものは民衆一般の思想や風俗がよくわかると云ふ處にあります。

元來ある文學者の書いた小說とか、其の時代時代の歷史とか云ふものは、極くはつきりしたもの、正確なものであります、彼の西行法師の書いたもの、紫式部の源氏物語と云ふ樣なものは版にすられて今に殘り、正確なと云ふ所に疑をいれる餘地はありません。

然し下層のもの丶口から口に傳へて來た、ぼんやりしたもの丶童話や傳說の方が、正確なものよりも吾々から見て却つて、はつきりして居るのであります。それは何故かと云ふと高尚なもの、歷史とか文學とかが傳へてゐるものは偶然の事であつて、童話や傳說が後世に傳へてゐるものは必然の事であります。即童話や傳說は其の時代の民衆全體の精神によつて作られた總合の作物であるが、歷史とか文學とかは單獨の精神の產んだものであります。單獨の精神の產物である歷史や文學では、どうしても其の時代の民衆一般の思想や風俗がよくわかりません。多くの人が集まつて團體を形作つてゐる所から總合的に產れたものは、石に書かれてはなくても、文字に書かれては居らずとも、歷史や文學よりもより多く、民衆一般の思想や風俗を知る事が出來るのであります。もとより其れが全體とは云へないが、童話や傳說がたしかに歷史や文學よりも吾吾に民間全體の思想や風俗を理解させる、そこに面白



味がある様です。

例へば田舍を歩いて居ても、一寸した山、川、木等にはよく何等かの傳說があります。而して其の傳說をよく味つて見ると、其の地方全體の思想によくあてはまつて居る。餘程必然的なものであります。

さて此れらの傳說や童話が何から起つたかと云ふと矢張もとは歴史から起つて居るには相違ない。けれども歴史は偶然のものであつて、其の時代と人間との關係が非常に深いけれども、童話となり傳說となると一般的になつて來て、其の時代の思想にあてはまる様に變化してまゐります。ある一個人に限つてあてはまるのでない。何處へでもあてはまります。

◎妻爭ひ

此れ等の傳說は大抵普通以上の偉いものに關して居るので、婦人と云ふものは多く主となつて取りあつかはれて居りません。而して、傳說や童話はやはり交通の盛んな、人事の繁雜な都會にはない。交通が盛になれば段々に消えて行く様な傾きがあります。矢張山間僻地、海岸などの村に珍らしいものを發見する事が出來ます。

傳說や童話について考へれば興味の多い事は澤山ありますが此處に傳說ともつかず童話ともつかず、其の癖、日本到るところに、妻爭ひと云ふ事が傳へられてをります。

萬葉集にもある耳梨と香具山との妻あらそひ。眞間の手古那の歌の様に、女が一人であつて多勢の男に慕はれて、しまひに女が死ぬと云ふ様な話であります。彼の竹取物語の赫耶姫が多くの貴公子に慕はれたのも矢張この妻あらそひであつて、唯あれには、男の方が失敗る事になつて居ります。

此の妻爭ひは大和物語にもあります。一人の美しい女が二人の男に慕はれた時に、生田川にゐる鳥を射あてたものに女は嫁かうと云ひます。そこで其の鳥を射たところが一人は頭にあたり、一人は尾にあたつたので、女は何方をも捨てるわけに行かず水に身を投げた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とあります。此の外の妻爭ひには、女が死ぬのもあるがまた片方の一人に身を寄せるのもあつて、隨分地方地方で多く傳へられてゐる樣であります。

彼の古事記にある大國主尊が其の兄君達と爭はれたのも矢張妻爭ひであります。應仁天皇の御代に、伊豆志袁登賣と云ふ美しい神樣があられたのを兄弟で妻爭ひをすると云ふ事があります。兄の方は秋山、弟の方を春山と云つたが、二人が、誰が早くあの女を得るかと云つて賭をします。遂に弟が勝つて、女を得たと云ふ事になつて居りますが、どう云ふものか傳說には此の樣な場合に弟が兄に勝ち、最後に出たものが成功すると云ふ場合が多い樣であります。



◎神婚の傳說

傳說の中に蛇が女の許に忍ぶと云ふ種類のものも無數にある樣であります。然し忍んで來た男の着物に針をさして、其れで後から蛇であつたと云ふ事を知るのは、朝鮮には、蛇が蚯蚓となつてゐて、他の國にはあまり無い樣でありますが、日本には實に多く聞く樣であります。

彼の三輪山の話、媼嶽明神の話が是れであります。神樣が蛇となられて女の許に通はれる。此れを私達は神婚と云つて居ります。怪婚と云ふ字は昔から使はれてゐた樣であります。

朝鮮にあつた其の傳說を申しますと、ある英雄の傳記を書いた一節にあるので、百濟の國に昔一人の金持があつて、それに一人の美しい女があつた。此の女に毎晩一人の紫の着物を着た男が通つて來て一緒に寐ます。女がそれを親に話しますと、親は、其の男の着物に絲を通した針をさして置く樣に云ひました。女が其の通りに着物の裾に絲をとほして男を歸し、すぐ其れを尋ねさせて見ますと、その家の北の垣根の下に其の絲が見付かつたので探して見ると大きな蚯蚓が居たのでありました。後で其の女が孕んで出來た子供が大層豪傑になつたとあります。

日本で有名な此の種の傳說では、足利の末、德川の初め頃に出た天若彦の物語が面白いものであります。此れは三人の美しい女の姉妹があるところへ、蛇が其の一人を妻にしたいと求めてまゐります。ところが外の二人の女は、厭だと云つてことわりましたが、末の娘は、其れでは親に祟りが恐ろしいと考へて、承知をして行きます。然し夫にした蛇は實際は天の人であつて、後で天に歸ります。女もそれを慕ふて居る中に同じく天に行く事が出來たと云ふのであつて、此の傳說は、どうもギリシヤ、ローマの噺が日本に傳はつたらしい系統の傳說であります。

一體日本の傳說には三種類あつて、日本の歷史が始まつた時代と、支那朝鮮の影響を受ける樣になつた時代と、西洋から影響をうける樣になつた時代とにわかれて、傳說も自然區別を認める事が出來る樣であります。

その歷史の前は——古事記などにある樣に——どこから來たともわからぬ傳說がある樣であります。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

わが手に

巴里にて　よさの、ひろし譯

わが哀れなる諸手よ、げに、汝こそ遠からぬ日に在るならめ。
　打濕りたる墳墓の中に。
人の世の萬の願を然ばかり強く握り緊めたる汝さへ、
　打弛み、はた、硬張りつゝ。

汝は見守らん。汝が秘密なる手筋を、
　また、汝が蕭やかなる靜脈を、
野原と園と森との好き香を、
　また、苔草の冷たさを。

汝はまた禮ある指をもて、眞夜中の花冠より、
　あまたの涙を採らんとし、
汝は常に在るならめ。草の下に、花の下に、
　青ざめて、動くこと無く。

わが諸手よ、戲れたる愛撫と、
　BAISERSとの痕のみ留むれども、
汝は最早擁き掩ふ光明に觸れじ、
　汝は最早熱も有らじ。

いと熱き抱緊の、樂しさと、
　尊き痛さとを知りし汝よ、
汝は會得せん。頑なに、むごたらしく、
　望も無く、畏怖も無き孤獨を。

あはれ、如何なれば斯く、我は、汝が上に歎くや。
　なつかしき、現身のわが諸手よ。
汝が、物待顏に、わが膝の上に、
　靜かに組るゝ時。

斯くしつゝ、汝は何を待つぞ。汝は取らんと願ふか。
　攫むことの難き「夢」を。
汝は唯ひとり滿すならん。近き「未來」に、
　砂の輕き小粒を。

幻像

剝げたる黃金の枠の古き鏡の前。
　其處には美くしき幾人の貴婦人等が、
幾度か、そのめでたき顏と、
　その秀れたる風情とを見詰めけん。

われは幻として現れしむ。陰翳の中に調ぶる、
　はれやかに、雅びたる、優しき三人樂を。
いと氣近に、女の衣を、薄やかに纖細き足を、
　笑みてゐるゝ黑き瞳を。

品貴き風流士等は、梳き調へたる髮の下に、
　皆、誇らしき風貌をなし、
黃金の鐶に緣飾りしたる女達の帽を受取りて、
　後の方に投げ遣る。

彼等は足踏み鳴らし、なつかしき女達の組に、

　見好げに會釋しつゝ、
一人一人に愛想よく飛廻り、
　美しき「西班牙の肌」を華咲かす。

彼等は秘密の戀を耳元に囁く。
　また、面白き無駄言をも‥‥
一人の子爵夫人は少し控へ目なる樣子ながら、
　併し、その目は輝けり。

此處に、一人の侯爵はいと近く寄る。
　一人の侯爵夫人の傍に。
さて、われは聽く。不平げなる、また、撫づる如き口調にて、
　「君よ、な戯れそ」と。

併し、一人の男爵は少し疲れたる風をなしぬ。
　恐らくは、その隣ゆゑ。
勿論、一人の公爵夫人は、彼の表示せる願を、
　少し蔑に受流せり。

そは恕せかし。たとへ彼等が躍りながら、
　如何ばかりの戯れ言を云へばとて。
行きずりに路の花に物言ふは罪なるか。
　さばかり美しき女に。

われは常に眺む。時を空に過す代りに、
　すべて是等の遊樂の群を‥‥
BOUCHERよ、MATTEAUよ、LANCRETよ、永久、君達の興味を、
　わが夢こそ追ひ行くなれ。

さは云へ、朝の神は現る。彼は我等を途切らしむ。
　節會の終末として。
すべての輕やかなる幻像は、打傾きながら、
　われに會釋す。「いざさらば」と。

――バロンヌ・マリイ・ド・ブロネイ――

註。巴里の詩人ブロネイ女史の新詩集「過去の收穫」より此二作を譯せり。前者には女史の厭世的傾向を窺ふべく、後者には其繊愛觀を彷彿ずべし。ブッセエ、ワットウ、ランクレエの三人は共に十八世紀の佛蘭西畫家なり。

伊豆鐵道

加藤白光女

東海道を旅行する人々は、沼津に近く、熱海、伊東、修善寺、その他いくつとなくある温泉場の、宿屋の廣告の高く聳つてゐる一小驛、三島を思ひ浮べることが出來ようか。そしてこの廣告の中に挾まれて、少し上の方を南へと向つたレールの在るのを見るだらう、また小さな汽車の停車してゐるのを見るだらう。

これが北豆の中間まで、全長二十哩に足らない、伊豆鐵道である。三島を分岐點として、大仁を終點として、其の間踏切番の小屋のやうな小さな停車場が五つある。

二十錢で赤切符を買ふと　純然たる土音の伊豆人の、なまりのある、そして强みを持つた音調を聞くことができる。だあよ、べい、といふ特殊の言葉は別としても、話してゐる中には、何となく、ふつくりとした味がある。日常は半分程の乘人しかない、一二等は大方空で、温泉にでも來る人々がまれに乘る位のものであらう

客車は大方は四つ位、貨物車と、機關車とを加へて、七つか八つを止めとしてゐる。それが山の峽間、それから春の暮れる頃、秋の頃、麥や稻の黄に染むその中を走るのを、遠くから眺めてゐると、狸の化物見たやうで、何となく幼い時の思ひ出をそゝる。今でも折り〱本當の汽車と衝突しなければよいがなど〻考へる。しかし單線なので、そんなことはしたくも出來ないが……。

近づくと相當に早いやうに思ふけれど、乘つてみると、その遲いのに、いち〱して了ふ。そればかりでなく枕木の惡いのか、どういふ加減か、上下左右動搖がはげしくて、ことに終列車などになつて、人か少くなると、がた〱馬車のやうで、とても沈着いて讀書などしてはゐられない。終列車に乘つて、一番心よく感ずるのは、火の粉の中を分けて行くことが出來る。不完全な煙突と、石炭の惡いのとであらうが、まつしぐらに走るその勢で、火山の下にいつたやうに火が飛ぶ、降る。風の烈しい時、冬から春の初めへかけて、よく停車場に近い人家を燒く。

停車場々々の、短い、そして狹いプラットホームにはそれ〴〵、櫻や、コスモスや、鷄頭などが植ゑてあつて、自然のまゝに時がくれば咲く、そして僅に客の目を喜ばせる。

名所案内中、やう〱汽車の中でみることの出來るのは、反射爐と中學校位であらう。どれも左側の山の中程に立つてゐる。山は京阪地方のやうに丸味をもつてはゐない。小さくて、しつかりしてゐるともいはうか。天城の餘脈の城山の洋畫趣味なのに、箱根の分れの弦巻山の日本畫らしいのも面白い對照で、一つは眞紅の夕陽の沈むとき幻燈像に浮き、一つは影畫のやうに朝日に沈む。それらの裾は一面に平で、秋は稻の穗が充ちて、よく晴れた日の眞晝時は、いかにも靜かで、また長閑で、油然と野人のやうな心になる。

山がいよ〱迫つて狹間になつたところに、大仁の停車場がある。改札口を出ると、新井、菊屋の休憩所があつて、一寸コーヒーや、ビール位は出す。

乘合のがた馬車が、幾臺か汽車の發着ごとにまつてゐる。近頃高等馬車といふものができた。四人乘りで、それに母衣がかゝつてゐる。普通の馬車賃が修善寺まで、十錢。これはその二倍そして乘る人は大方、二等を降りた位で、すべてにいくらか立ちまさつた、風采の人がのる。それで高等馬車といふ、この馬車は修善寺の客が目的である。

溜りの様な此所を出ると、下田街道で、南北に向つてゐる、大仁の町はこの道に沿ふて發展したもので、戶數百二十、商八分の、田中村の一字としては上位にある。電燈もあり、電話もある。

かうした土地の常として、やゝともすれば浮薄な風習に流れるが、こゝは珍らしいほど人氣がよい、昨日鍬をもつた人が今日珠盤をはぢくといつた樣で、極めて質朴である。一般伊豆は世間でいふやうな人氣の惡いところではない。

田中村は大仁でつきる。大仁は天城山を源として發する狩野川によつて、修善寺村に隣りしてゐる、狩野川の水は紺が深い、そして鮎が棲む。

白く塗つた橋の欄干外へ出たところで、夜更けて釣るともし火は、しんみりとして夜の氣分に合ふ。

どこも彼處も、七時四十分の終列車が過ぎると秋から春の初めへかけて、もうひつそりとして了ふ。小さな停車場を取り巻いて、北豆の中央の家の群はかういふ姿である。

割合に他所から人が入り込むけれども、容易に風俗の變遷はない。それは交通の不便で、出入も一部に限られてゐるからであらうか。

伊豆は二十哩の鐵道が唯一つきり、これも近近電車になるといふ、下田までの道が開けるのはうれしいけれど、狸の化物は消えて了ふ、がた〱と夜の氣をふるはせて、山に響く汽車の音のなくなる時を思ふと、發展がむしろのろはしく思はれる。

＊　＊　＊　＊

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

浴室の青葉

太田きし子作



高砂さん、電話ですよ！

ハアイ、只今、ちよいとお貞どん、妾ね、今お湯にゐるからさう云つて頂戴な、あのね、今すぐ行つてよあとはひとりでとのやうに、

金泉さんからだらう、あの人ならちつとはまつてくれたつていゝわ……。

鬢かきをくはへて、すこし上目づかひしながら鏡に對ひ鬢をなほしてゐる。

壽さん、相生さん、操さん、などゝ呼び合ひながら、他の五六人も白い丸い曲線をぽッとさせる湯氣の中に、腕、脛など自由自在に動かして、何やら勁い香料ををしげもなくこぼしてゐるらしい、ザラリと戸を開けた時、ツンと目に泌みた。

まだ日もくれないのに薄ぼんやりとしてゐる、浴室の中には灯がついて隅の柱の投げこみには何花か眞紅な仰山な花が挿されてある。

筆ちやん、ゆふべ妾のところはさわぎだつたでせう妾もうんざりしてしまつたわ、久しぶりで底ぬけさわぎしちやッた、つひづるづると、一向骨ぬきどじやうさアね、その上、これッ、こんなにしどい事をされたの、ずゐ分亂暴な客よ、しどいでせう。

と腕の爪あとをつまんで見せて、

あゝ痛い痛い、

筆の助はタオルに泡を立てながら

さう、ゆふべはそんだつたの、ちつとも知らなかつてよ、何だか妾、ゆふべが一番辛かつたの、明日は檢査の日でせう、それだのにまだぐず〳〵とお部屋に下つてゐるんでせう、氣が氣でなくておとなりのさわぎなんか遠い國のラッパ位とも思はなかつてよ。

まア、しどい人、この人はア、

とつんとして見せてくるんと後ろ向きに、美しいえりすじをみがきはじめたが、また向きなほつて、

ね、筆ちやん、でもあんたは明日からまたお職が張れてよ、きつとよ、そしたら、ほらそしたら……ネ、……ホホヽヽヽ相生ひに、松は操をことぶきて……

エーエ、渚につゞく……白濱や……千代もといのる……るーウ……筆の助さア……ン……ム……ム。

ハハ……ホホ……。

まア、小式部さんの甘い事。

筆之助さん、何かおごつてもいゝでせう。

おめでたう、おめでたう。

やアよ妾、妾おくびでもおごりませう、

そんな事きゝたくもないわ、白濱や、千代なんて、ぞつとする、あんな人!!

いづれまた、お禮はそのうちにたくさん、ネ、左樣なら、おさきに……。

つんとすました身のこなし、ザラリ、バタンと閉めた玻璃戸透けて筆之助が白い美しい立ち姿は、パッとつぎの廊下へ消えて行つた。

中には、小萬といふのもゐた、もう三十顏のお婆さんで、いやに口ばかり達者であるが、小式部は、年はしてゐるもの丶小づくりのためかまだ美しい、彼はひるからの醉がまだ醒めぬらしい、何か鼻唄の調子で、さかんに流してゐる。

向ふの廊下を、パタリ〳〵と重い草履の音がせわしなくなつて來て、新造衆も夜の姿をして出て來てゐる

パッと黄色い夕陽が中庭の若葉に映えたかと思ふとすぐ暗くなつて青くしめつたやうな、おいらん衆の部

室になまめかしい色ものがちら〱見えはじめた。
また一きは明るくなつた。

湯槽の中にじつとしてゐる自分の肌も清らかにやはらかい氣持になつてゐる。

長い廊下を、部室の衆部室の衆と呼びあるく妓夫のこゑ、紙屋、菓子屋かんざし屋などもうおなじみになつたおいらんにふざけ散して、しどろもどろになつてゆく姿がなつかしい何ものかを捉へさせずには置かぬ。

すーすーと湯氣の逃げてゆく高い玻璃窓からは、若葉の梢がゆら〱と、葉がくれにはもはや丸い青梅がすゞしく風をあびてゐる

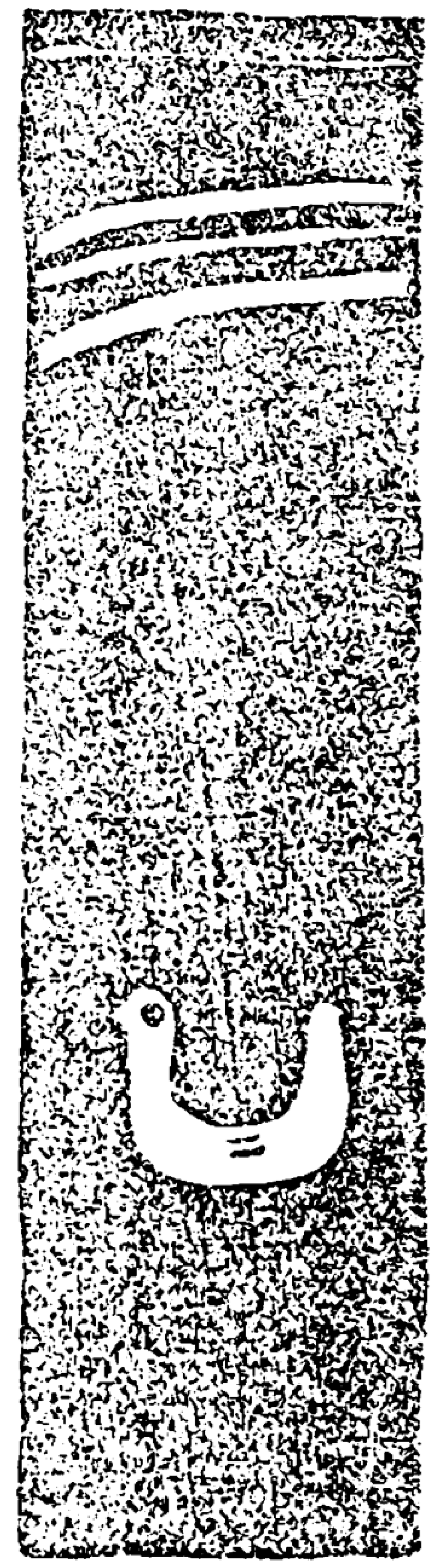


がそれを透いてなほ向ふ三階からは、誰れやらの白いえりあしが、腕が、青い艶の鏡面が、……まア、何といふ美しさ、なまめかしさであらう。

サラ〱サラ、とやさしい葉づれがした。

廓内には、絶えず〱一脉の唄の調子が何ものより何者かへ傳つては、消えずに、ほろびずに、つゞいてゆく事をしみじみ思はせられた。

様はさんやの三日月さ
まよ宵にちらりと見た許
り葉うら葉おもて葉おも
て葉うら萩の葉うらに啼くきり〱す
親は他國に子は島原に櫻花かやちり〱に



赤い椿

夕暗

☆

「おりうさん久々御無音にうちすぎました。御地は花盛りでせう、當地の寒さもしのぎよくなりました。私も變りなく暮して居りますから他事乍ら御安心下さいませ、貴女様にはさぞかしお忙がしい事とはお察し申ますがお暇の時にはお手紙下さいな御願ひ申ます、〇〇村谷野いし」。文字も文章もおぼつかなげな、エンピツの葉書一枚。又かと手にとつてひろひよみしまゝ心にもとめずに、其きまりきつた文意を葉書と共に投げすてたが、ふと其友の身の上を思ひ出すと懷しい、すまない思ひがして又、とりあげてよみかへした。そして其毎度同じな、書かなくともと思はせるあつけなさをも、却つて懷かしく感じた。あゝおいし様！お石様は私の幼な友達である。私の十二三の心も身も純潔な美しい時代の友であつたのだ。十四の時に女學校を退かされて、〇〇村の湯の宿の養女となつた。夜毎に枕を洗ふ波の音にも、獨り覺めて、千鳥の聲をきゝ、かき曇る灰色の空を見、月に踊る兎波をみた時には彼女には、故郷の母を思ふ外には、あだし涙の混ずる時はなかつたのである。十四の時から八年間、友としいへば、昔の年賀状の他に出さぬ、此自分一人を思うて都會の渦も知らず、恐しき悲しき變化の多い友の胸も計り知らず、たゞ針と庖丁をもつて八年前の心と身とをのばしつゝ來たのである。一月に一度は必ず來る其ハガキ、同じ文句の、甘みも辛みもない、其中に彼女の滿腔の思ひがこもつてるのである。己のもてる感情によりをかけて、誇張したがる虚飾に包まれたる現代の女の中の、此人も若き一人であるかと思ふとあまりな距離に驚かずには居られぬのである。既に〳〵幾多の胸にもすみわびて、あつけなさに、ものを求むる御身の友は、幾年か前に早や御身をすて去つたのにー。あゝされど、今、我すむべき胸は、友にも戀人にも何物にもないのである。

熱しもせず、冷えもせぬ、幾十年かの昔の女のやう

な御身が胸にたゞ安らかに、疲れたる我魂の羽をいこはせやうか！不斷の泉わく三軒の人家の世界にすめる御身。瞳の輝も、肌の白きも自覺らぬその胸に一あゝ友よ、若きも、老いも、波の音も、御身には響なくたゞ安らかに來りて去るのであらう。ドドッードドーッとくだくる波響も御身と、其岩にきざまれたる十六の羅漢の夢を破る事は永久にないのであらうか。

☆

此一瞬、私は凡ての現在を忘れて、情死ゆく人の情を思つてみた。

「此世でそはれぬ二人が惡緣、死なうと覺悟をきはめし上は、少しも早く、なむあみだ佛、なむあみだ佛。と西に向ひて合す掌も……。ざんぶと入るや水鳥の浮名をあとにとゞめけり……。」

何といふ幸福な男女であらう刹那から刹那迄、ぴつたりあつた、心と心、冷い水も二人の熱い一つの胸にはくひ入らぬのであらう、些の疑ひもなく、かたい信を抱いてあの世とやらに急ぐ人はどんなに幸福な人であらう。――さうだ、既に囚はれたる此世である、二つない身！あゝふたつない身は、潔よく現在に服從してあくまでも忠實に終つて、そして來世は、來世はきつと〳〵。きつと！と我をたしかめるやうに力を入れてつぶやいた時、心も身ものぞみに輝いた。噫！何物ぞ、其刹那かゝる、思ひの傍に、嘲笑ふのは。

「形をなせる現在でさへきのふ海ゆくとさゝやき、けふ山に住む御身。ありやなしやの來世とやらをたのみにしてまつ愚者がどこの世にあらう。御身が詞は既にたえたり」……と總身の力が急にぬけた樣にがばと枕に伏した。………「戀しゆかしは昔の事よとはいひ乍ら春每……」やけに唄つてくるりとねがへりをうつと雨戸のふし穴から朝の日光が、なゝめに床の間のお琴の袋の、黑地に赤い渦卷に射しこんで、生血のやうな赤い渦はぐる〳〵と毒々しくまはつて、私の頭から胸へと……。目をつぶつても、目をつぶつても渦が。赤い生血の渦卷が――。

あゝ我胸をさへ信ずるあたはざる憐れな女よ！、

☆

人は寢沈んだ。天地に我たゞ一人とより思はれぬ星の高い秋夜に汐の遠なりが……。

噫……あの人も今は若い妻君と新生涯をつくつたと

いふ……あの人も、あの人も消息は知らぬが既に人の父となり、夫となつて居る頃だらう……。いふやうなき淋しさに胸をうたれて、ふと我を顧た時、自分のぬけでたふとんの中に小さい〲呼吸が私の孤獨な心をあはれむやうに聞えた。

……私も母となつたのだ……。若き憧憬の世は既に我前を去つたのである。我々がかたちづくるべき實質の自由の天地は廣く我前に横たはつてるではないか。ゴー〲と汽車の響が夜の天地を呑みつくすといふやうに、轟いて彼方へ去つた……。と、私の心は急に、少しのゆるみもなく、きつとひきしまつた。

☆

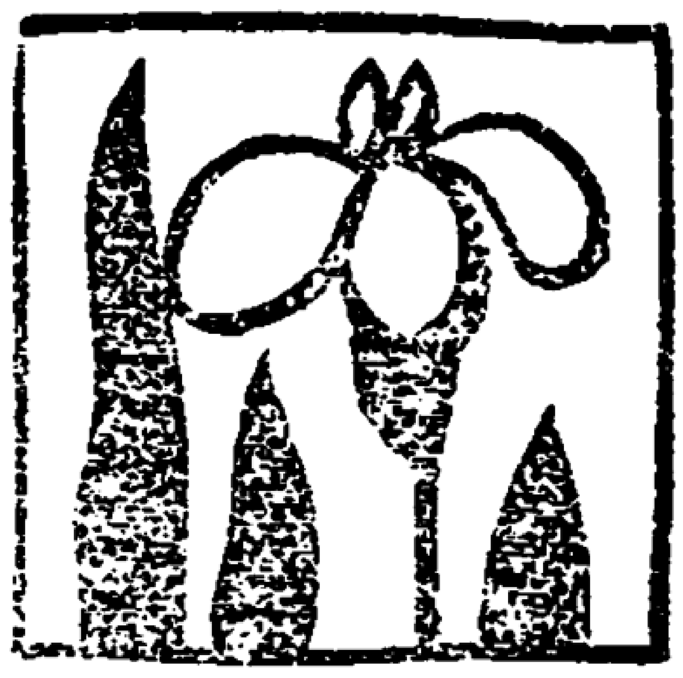
細かい〲雨が音もなく〲ふつて、周圍はしつとりともの音もない。むかふの藪の中に赤い〲椿の花が、一イ二ウ三イ四ッ五ッ……までかぞへ來つた時、急に人懷かしい、誰といふ事はなくすがつてみたい氣がして、「兄樣ッ」と力のある聲でよんだ。机に向つて本をよんでゐらした兄樣は「なあに」と此方をおむきになる。と、何だか自分の行爲が僞りのやうで馬鹿らしいやうな恥かしいやうな感がした。だまつてじつと又赤い椿の花をみた。兄樣も其まゝ御本の上に目を落す。暫時すると又いひやうない淋しさに「兄樣!」とよんだ。

「なあに」此度は「ホヽヽ」と笑つてしまふ。

又……「兄樣!」「何だよ、をかしい人だね、うちやんは、矢張昔のくせがとれないね、用もないのに兄樣兄樣て……。氣になる程前髪の毛をかきあげる人。襦袢の襟をあはせる人。用もないのに人の名をよぶ人……。」「あらいや。だつて〲から淋しい氣がしてたまらないんですもの。何故でせう。昔のくせ……なつかしいわ」何となく涙ぐんでしまつて又むかふの藪の赤い花をみつめた。

△戀と咳は隱されぬ。
△鏡を見る女は家を見ず。
△往來に草は生えぬ。
△視て居る鍋は早く煮立たぬ。
△夫に順ふ妻は夫を從へる。
△無用な者は盲人の妻の化粧。
△戀は逐へば逃げ逃ぐれば逐ふ。
△妻を擇ぶは目より耳を用ゐよ。（西洋の諺）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



虚榮の爲に二百圓の金を取出せし令嬢の懺悔

要司村ふく子

私は世にも恐ろしい罪を犯しました。

身には絹をまとひ、日常何の不自由もなく暮す少女が、とんでもない罪を犯しました、只今では夢の様な當時を忍び、自分で自分の罪を告白しませう。

忘れも致しませぬ、冷たい秋風がぴゆう〳〵と吹く朝でした、一寸した着物と着更まして、其上から荒い大島お召の羽織をきてベールで顔を被ひ、例の車帳場へ自分で出かけまして

「今日は土曜日だから大急ぎで行つておくれよ」

と云つてひらりと乗りましたが、其實後から引つぱられるやうな心地がしたものですから我を忘れて斯ういつたのです。

三日三夜考へに考へた末が、こんな恐ろしいことでした、晝は考へながらうと〳〵とし、夜は皆が寢靜まつてくると、彼方へね返りし此方へ向きなほりして、

「おゝ恐ろしい止めやう」

と思つても、是より外に手段がない、心を鬼にして實行せう、おゝさうだ、こんな思ひが電光のやうに現はれて、すぐ消えるのでした。心の長閑な時は「まあ何とよく走る車夫だらう」と思ふ程氣に入りですのに、其日は胸が前につき出て、高い洋館の屋根が目につくと、あれではないか等と全つきり心も空に浮いて夢心地で有りました。

「まあ美くしい人一寸御覧な、」

「をやハイカラな方」

等と賑やかな處を通るたびに耳に入るのであるが、どうして美くしいでせう。外面は美くしくつても心に針あるバラの花にも似て居ます、手にはかたくオペラバツクを持つて、其中には、通と印形と此月のお小錢の殘り四圓餘が入れてあります、車夫は只誇り顔にチリン〳〵とベルを鳴らしては、返り見する人を後に走つて行きますが、私は人々がじつと見てゐる度に、も

しかし此心を知つてやしないだらうか、
「女の身で親の通を盗んで銀行へ行くのだらう、あんな顔してゝも油斷がならぬ」
とあきれて見てゐるのぢやないかしら。こんな事を思ひ出すと氣もおろ〳〵してじつと車に乘つて居られぬ「これ車夫戻しておくれ」と胸の先まで出た言葉も三日間も考へた手段を止すと云ふのか、弱い精神だねと取消すものがあります。惡魔でせうか、すぐ嘲笑ふ言葉が耳にきこえるのです、かうしてとつおひつ走るがまゝに乘つて居りました、一條通りに來た時は××銀行の一筋みちで、遠くから屋根がよく見えて居ます
　身は追々銀行の方へ運ばれて行く、往來は益々はげしくなつて氣も心もぼんやりして顔計りほてつて居ました、もう此上は尋常に支拂口へ行つて
「二百圓出して下さい」
といふより仕方がない、こんな事を考へてゐる間に車は大きい銀行の前へ梶棒を下しました。暫くはじつと考へて居つたが目前を、紳士、奥樣、商人、女中ハイカラな人、さては藝者迄が、引つきり無しに勢よく出入してゐるので私も氣を取りなほし思ひ切つて車を下りました、二三歩あるき出して打ふるふ左手にバックを持ち、通と印形とをしッかと右手に握つて入口のドアーの前迄進みましたが、如何に大膽な私でも此重いドアーを事なく押す勇氣が出ませぬ、あゝ此時、私は狂女の如くいきなり車夫の前へ戻つて、是ね、御苦勞だが二百圓取付けで來ておくれ、今出川樣といつたら返答しておくれよ」
　死の宣告よりもつらい言葉を夢中のうちに叫んだ。
「へイ此印形を押んですね」。
「今か〳〵と幾度か行戻りしつゝ、走馬燈の如に現れる二百圓と虚榮の幻影大道を通行する人なんかちつとも眼に入らない。
「お待遠でがした、一應お改めなすつて……。今日は此まゝ歸りますか、」
「あゝ大急ぎで歸つてをくれ」
　へいと梶棒を持が早いか韋駄天走り、さあ斯なると私は否應なしに盜棒でムいます。親の金とは言ひ乍ら一言もいはずに取つけたのですもの純然たる盜人です車夫も誇り顔に走つて居るが盜人を乘せて居るのだ、母樣は知らずに食前のお藥召上つて被居るでせう、兄上樣もまつやも誰一人此恐ろしい美子の心は御存じないでせう。あゝ少女十八、何不自由のない子のする仕

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

業でせうか、けれど歸りは惡度胸が坐つてホク〳〵笑ひ乍ら歸りました。

「お孃樣斯なに戴いては不可ません、」

「いゝえお使ひだてしたから納めておくれ」

此盜人の私もいさゝか心祝をしたのです。

　歸つて參りますと何の事もありません、やはり母上と下女です、

「何處へ行つて被居いました、今日は音樂會へ被入る日では御座いませんか」

「あらさうだつたかねえ」

「おや大お好きの音樂會をお忘れ遊ばしたのですか」全くです、いつも音樂會へ行く日は朝からやい〳〵云ひますのに、外出したり浮たゝぬ顔して居ますから氣の早いまつやは悟つたらしいのです。



＊　＊　＊　＊

夜。ゴム輪の銀輪音もなく、中立賣御門から御苑内をぬけて青年會館へ轅棒おろす。

　罪ある少女が音樂會場の眞中へ座をしめた時、幾多の人の目をひいたでせう、晝は罪を犯してをき乍ら、夜はひるにも劣らぬ電燈の下にレデー然として、すましてゐる私の態度は、自分乍ら憎らしいほど冷やかで有ました。

　ケリー樣の獨唱、大村樣、吉田樣、我師野村先生の合奏は餘りの手際に適當な讃歎の言葉も出ませんでした。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

十一時過ぎる頃私と蘭子樣と迎ひに來て下すつた、晋樣と車を連ねて歸りました。

醉つた如な眼ざしで、晋樣と共に衣桁のそばで帶をといたとき、さらりと落ちた赤鹽瀨地の吾紋のついた金入、眞赤になつて拾ひ上げた。

餘りの恐ろしさに夢であれと願つた罪も、夢でない證據に今尙ちやんと二百圓は仕舞つて有ります。

＊　＊　＊　＊　＊

幾日か經て家邊德の軒をくゞつた。キラ／＼と光るダイヤのリング一個は、私の二十枚の紙幣を二枚殘して交換しました。明暮嫌な形の小さい錢入もポッチリ止まつてさつぱりした心地でした、それから一ケ月過ぎての或日、茶湯日で有ますからオペラバックに食パン入れて朝から出かけました、恰度始めが私の番に當つてお運びをすました時、

「母上御病氣で早速お歸りになるやう」

と車夫の迎ひに取物も取敢ず。母の居間へ飛んで行き

「御病氣は如何。」

と尋ねましたが、母上は本家の兄上と、行儀よく對座して冷やかに此方を打見て被居います。

「お前の御機嫌は如何か」

やゝあつて母上は斯申されます、何が何やら解りませんが、きず持つ足の、良心は忽ちにして眞赤な顏と化しました、あゝ私は歸る時餘り狼狽たものですから左手に二個と右手に一個のリングをはめたまゝ居つたのです、夢にも忘られない右手のリングは母上の前でキラリと光つた時、斯く顏を赤めたのです。

あゝ忘られられぬあの時のこと。悔の淚にすゝり上すすり上泣ました。母上と兄上は交る／＼問ので有ますが、右手のリングをぬいたまゝ打伏して泣きました。其夜母上と兄上とひそ／＼と夜更まで話して被居いました、時々すゝり上る母上の聲、机に伏して前後不覺に泣いて居つた私の耳にも、其お聲がつんざく如に聞えました。

それからと云ふ物は一寸門先へも出る事を許されませぬ、勿論いづれの師の元へも明る朝缺席屆をまつやが持つて參りました。あちらでもこちらでも音樂會だの、茶の湯會だの、生花の會だのと催ほされて、毎日のやうに案內狀が來ますが、私は所謂、幽閉の身分で何處へも出る事が出來ませぬ、虛榮の夢からさめて日日悔の惱みに悶々と苦んで居ます。（美子記）



女行商人

（油斷のならぬ都會生活の一面）

白百合

雨上りの朝の地表には細い雜草をふるはして、陽炎が燃えてゐる、雨に誘はれたものか落椿が一晩の中におびたゞしく片隅に散らばつて、山吹の花は輕い眩暈をよび起させる、春にしてはめづらしい程空の色が澄んで、不自然な底冷のある風が吹く。

今、急勾配でも下つた後のやう、夫の出勤を見送つて、せわしく後かたづけを終へると、私は安心と、休息との中に、暫くは物も考へず見る事もない。

すると不意に水口が開いたらしい音がして、升本屋の御用聞が、のぞき込んだ。

私は手あぶりの上に兩手の指をそろへて、水に浸つた白ずんだ指の先を見ながら受け答へした。

下總や、三河屋、相模屋、魚又、八百勘、三枝、前後して、根氣よく御用聞きが絶えずにくる。

新聞や雜誌をよんでゐるときなど、上の空で受け答へする事も度々あつた。さうして夕方になつてから思ひ付いても外出は出來ず、まるで孤つ家にでも住むものゝやうに、苦心しながら觸れ歩くもので間に合せるやうな事もある。

お夏――一月ばかり前嫁入つてしまつた――のゐた頃は、御用聞に一々私が云ふ事もなかつた。朝身じまひ終ると獻立書を渡して、記入は品物がない外には何の指しづさへ要らないのであつた。

讀みかけた時、書きかけた時、耳を立てねばならぬのは、折角一つのイルユージョンに這入つてゐた私の心をメチヤ〳〵に頽してしまふのだ。直又見つゞけても、一度逸したものは追ひにくかつた。それでも一言で歸つて行く者はよい。越中の藥賣とか、支那商人の執念さには優しい言葉も續かなかつた。續ければ尚長引く許りなので、最後には障子を立てゝしまふ。其外

に孤兒院とか、雨降神社とか、何とか、彼とか、日に四五組も寄附を申し込んでくる事がある。苦學生もくる。癈疾者もくる。

あるとき——それは先月の中頃だつた——お召の羽織に荷包背負つて、京風に髮をかいた若い女が入つて來た、女は薄化粧してゐる。私は初め下女の目見えかと思つて格子を開けてやつた。

女は素直な指先を揩り合せながら、角のない京ことばで、化粧品の購入を求めた。さうして玄關に上つて其處に否應なしに包をひろげた。すると、帶の間から紙を出して、「昔から藝妓はんの使やはるお白粉やさかい」私は押しうりされるのがいやだつたので、一應はことわつて見た。女は、「ほんの見てもらふだけでようおまつせ」から云てしまはれたので私は女の手許に見入つた。女は粉白粉を小さい銀さじで一掬ひして、紙をひねつてそれに火をつけた、やはらかなお白粉の香は靜かに閉め切つた三疊の間にくゆつて行く——。女は小さい皿の中に燃えて落ちてくる鉛の小さい結晶を、誇らしい目をして見た。

「昔の幼稚な時のだからね——」私は云つた。「いゝえ、御園白粉でも皆これやしなー、無鉛〳〵云うても燃えぬやうに火止めがしておますもの、素人衆には分りまへんが、顏が荒れたり、ふきものがしたり、皆鉛のせいですがなー、」「さうかねー」商人は、すべて他をくさして自己の物の價値を上げやうとするのが通有性なのを私は知つてゐた。

女は私に水を求めた、化粧して見せるのだ。

白粉下を塗つて、粉白粉をポットではくのをじつと見てゐると女は普通の女が化粧する時、人目を忌むやうなそんな羞ひもなく、くど〳〵と白粉の廣告をしやべりながら馴れた手付で忽ち斑なく塗り上げて、さうして紅を唇から眼瞼にぼかして、

「こんなどすえ、のびがようおますやらう」

不意に私は、「お前は眞の京都者ぢやないねー、」と云つた。女は目で微笑しながら、甲府生れだと云つた。氣長にすゝめる女のこと葉をきゝながら、持合せも充分あるしそれに京都の化粧品を何となく好かないので濃い笹紅色の口紅許買つた。

女は殘り惜しさうに「おほきに」と立上つた。

女が歸つてから小一時間程して、巡査が入つて來た「京都の化粧品屋だといふ女が來ませんでしたか」

「ハー參りました……何かでございましたか」私の心は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

輕微な恐怖に戰慄した。

「ウーム、」巡査は薄くほゝゑみながら、「實は胡散な奴なので、近頃物價騰貴の結果、彼樣な風な女が、日中家の樣子を見て、いろ／＼な仕事しますからな、それで種種取調べたところ、此家へはよく來るといふのですが、……何か紛失物はありませんか」

「イヽエ何もございませんが、初めて尋ねて參りましたのでございます」

「何にせーお氣をつけ下さい」

「ぢや別にこれといふ事もないから放免してやりませう」巡査はガチヤ／＼、サーベルを鳴らしながら歸つて行つた。



私は今更ながら世間の押しせまつた生活を目の前に壓し示されたやうな氣がして、晝間ながら格子戸に掛金をかけて置いた。

緣に立つと、あかるい麥の綠に瞳は吸はれてあるかないかの風に薄い光が這ふ。

しづかに瞳を移してふと見たあるものに私の瞳は暗くなつた。

花とも見えない竹の花が三四本の蕋をたらして穗の形に頭を垂れてゐる。

故鄕にはこんなうたがあるのだ。

竹に實がなりや米穗は空虛よ……

夕やみの中に子供がうたふのをきく事がある。今年も不作であらうなら、工業の一つもない我故鄕はどんなに苦しむ事であらう

ぬれ衣

ふゞき野

午後迄霧の樣にとんで居た雨は名殘なく痕を納めた夕方の如何にも初夏らしい日ざしが窓にかげつて行く私はまだ見殘した夢のあとを追ひたい樣な思ひが未練がましく浮んでくるのであつた。

十八の年から泪と云ふ泪を味つて來ながら、なほ前途に光明があるかの樣な氣がしてならなかつたけれど、あゝすべて空想だつた、暗黒であつた、ゆけどもゆけども道は限りなく、さぐれど〳〵暗黒又暗黒!!!

あゝ光にあこがるゝ我魂は、つひに淡い光をも求めずして疲れきつてこゝへたふれて終つたと心づいた時の淋しみ悲しみ──ふつと吐いた息は現世のあらゆるものを呪はずには居られなかつた。

あゝ世にたよりない敗殘の身も、バラ色の朝の光にふれてはよみがへり、寂しい夕日を浴びては寂しい夜のまくに葬むられるかうした單純な日をくり返し〳〵送つて居るのだ。

あか〳〵と今一瞬の夕日がさして、ホテルの窓硝子がチラ〳〵と光り、建物がきは立つてはつきりと見える、私はとり止めもない限りない感想を抱いてそれを見つめた、左の丘の上に大きな雲の峰が夕日に照らされて金色をして居る、それがだん〳〵動いて形がかはると共にあせてゆく、あゝ何と云ふ淋しさだらう……

時鳥の聲をほがらかに聞いた十四日の夜!!!

長い〳〵そして誰がかいたか知らぬ手紙を示されてさんざせめられた、けれど身には何のおぼえもない事こんな汚らはしい手紙等私の許へくるはずがない、ねみゝに水とはこんな事をたとへたのだらうか──?、自分の身は清いちり程の曇りもないにと思へばつらいつらい八つ裂にあふより苦しい、たくまれたのは知つて居るけれど……。

どうせ自分は病ある身!此吉川家を去るのは苦しくない、けれど人妻としてあるまじき罪をきせられて、其まゝでどうして去られよう、我身のあかりをたてたいばかりに、あらゆる言葉を以てしたのがことごとく疑のもとゝなつて終つた。あゝ一度かゝつたうたぐりの雲は容易に拂はれない、怒りに猛つて席をけたてて廊下に出た夫の後を追ふてすがつた時白痴奴!行け

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ッと聲は暗を破つて利刄の如く胸を刺した。

あゝつらい、情けない、被せられたぬれ衣をのがれやうのがれやうとあせればあせる程うたがひはますばかり…何と云ふあさましい人間であらう、病に苦しむだにつらい私をかうして〳〵苦しめる人の心は鬼だらうか、蛇だらうか…何も知らぬ夫の心は恨むまい、否え弱き者をけおとして愛をうばはうとするあさましき女の心も恨むまい、すべてあたへられし運命とあきらめやう双手で胸をしかと抱いたまゝ自分の室へはひつた。早鐘をうつ樣な心臟のどうき、いたいのか重いのかじつとおしつけられる樣な何ともたとへられぬはげしい頭のなやみに堪へかねて、其まゝたふれた。暫は何を考がへ樣すべもない、たゞぼうと夢の樣な氣がして居た、それがやがていろ〳〵の事を考がへずにはゐられなくなつた、口惜しさ、腹立しさがまたしてもつよく込上げて泪は止度なく流れる、心はいら〳〵して堪らずぶらりと外へ出た。

靜かな月の光は中空にかゝつて居る。

あゝしつとりした夜の色!!! 心は何とも云へぬ深い淋しさに誘はれて行く、あゝ靜かなる哀愁に滿ちたる月光よ…私は長い吐息と共に空をあふいだ、星の空を見ても、地上を見ても、黒い冷めたい空氣が滿ち渡つて、其青白い月光のうちに心は溶け入つてしまひさうになる、其暫が私にはせめてものなぐさめであるのだ。

青葉のかすかな囁をきゝつゝ櫻並木を足のむくまゝにふら〳〵とからだを運ばして居ると、カッと強烈な電燈の光に目の底までぐら〳〵とした。四邊はなほ寂然と靜まり返つて居る、とこゝも自分のゐるべきところでない樣な氣がして、又ふら〳〵とあてもなく歩るき出した、御院殿下を通る汽車の音が遠く近く響き渡る。

波の音の絶えず聞えるこゝにたよりない日を送つて居るのも今日で八日になる、丁度村の祭禮だと云ふので、昨夜からの雨にしよげ返つて居た若者や、子供等は夕方からの天氣に急に景氣づいて樽御輿をかついでわい〳〵往來をねつてゆくあゝ何と云ふさわがしさだらう…隅の方でまじ〳〵暗い心で見て居た私は思はずつぶやいた。

こゝからは四五丁もあらうが、八幡神社の太皷の音が風に送られてかすかにきこえる、ねむれぬまゝに往來に立つて家並について居る御祭禮の燈灯を見るとも

なく見て居た私は行くともなく、太皷の音にひかれて其方へあゆんだ、木の間をもれて赤く黄ろくきらめく灯の影、群集のどよめきが一種異様に感じられてならない、そしていつか私は群集の中に交じつて居た。

よく話にきいた村のまつり…。

かうした夜に幾多の罪惡は行はれるのであらう！血に燃ゆる若い男女の群は青葉を背影として狂うて行く

あゝこれらはすべて私をはなれた別世界のことである、木にもたれたまゝ空を仰いだ、空には星がふる樣にきらめいて天の川が流れる樣うな夜だ。

歸らう――!!!

急に一種のおそそかなる寂寥と戰慄とに追はれて元來た道へとかけ出した。

「まあ奧樣ですか――私どんなにおさがしゝましたか」それは私と一所にこゝに來て居る春だつた。

「あの東京から御便りなんで御座いますよ」

「さう」私はまたしても新しいけだるさを覺えた樣な氣がして力なく家には入つたそしてかすかにわなゝく手先に封を切つた：：：

奧樣――御口惜しう被居いませうきつと〳〵春が身にかへてもどうにか致しますと、恐る〳〵横から首をのべて見て居た春はないてくれた。

あゝすべて我があたへられし運命よ!!!

弱き女――自分の胸に深く〳〵刻みつけられてあつた妻てふ文字は、無慘〳〵ふみにじられて終つたのだ、柱によつたまゝ茫然と暗い庭に目をそらした。

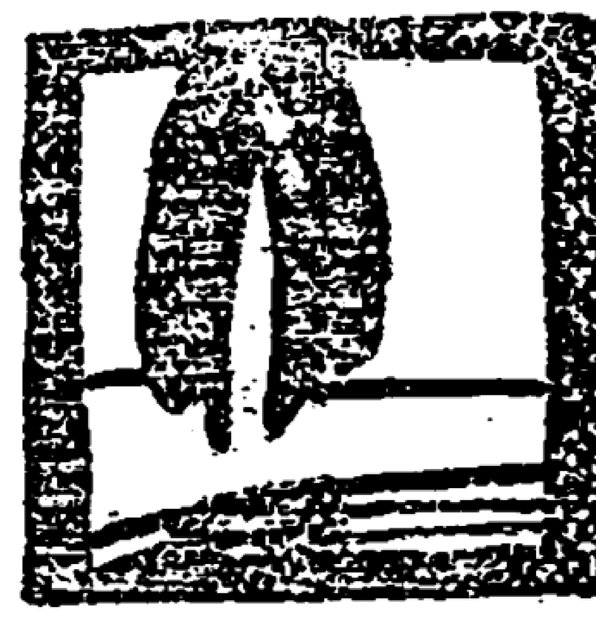
波の音と、遠い太皷の音と、暗い空氣の中を織るかの樣にきこえてくる。

よしやわざくれみはあさがほの、日かげまつまの花のいろ、恨みられしも恨みし人も、ともにもえゆく野邊の露。（かゞ節）

須磨と明石は、どれが月やら名所やら、どうやらかうやらわきて、いろわかちなく、どれが月やら名所やら、どうやらかうやらわきて。（わきて節）

こがれ〳〵てもろこし船の、袖にみなとのよる〳〵はそりや逢ふ、よる〳〵は、袖にみなとの夜ばかり、そりやあふ。（長崎節）

逢ふは別れとかねては知れど、今朝のきぬ〴〵いつよりつらや、袖は血しほの涙となりて、恨みこがるゝ身は戀でろぞ、せめて一夜はきてもみよ。（捨小舟）



氣まゝ者

宇田菅

山に近い田舎の家へかへつてからは、平靜な、淀んだ沼水の樣な日は幾日もつゞいた、これから又どの位つゞくだらう、私はいやになつた。

新に日記なりとつけ初めようとしたが、まもなく嫌氣がさしてきた。筆とる事が出來ないのではない、書うとすることがいやだ、それを讀みかへして自分が何物であるかを檢閲るのが苦痛なのである。

私は一體我まゝすぎる、自分と云ふものを殺して人に義理を立てようとはしない、家族間にあつては殊にそうである、勝手な時か新聞よむ時の外はめつたに父と話をせぬ、朝から晩まで一つ家に居つて母とは用事の外言葉を交へぬ日さへある、日曜日などは妹と若いはなやかな話をすることがあるけれど、十五だのにませくれて私でもよう云はないことを平氣で語るので何だか私はいやになつて急に中止する。

川原へ出るんでもない、野原を散歩するでもない、けだるい事此上なし、此の間お宮樣の大きな松を泉南の木師に賣つたとかで倒す時、村の若衆等は綱を引張つてエイサ〳〵力んで引いて居るのを見た。そばに見て居る子供や子守の上へ松が倒れたら、三日や四日は村中大さわぎで一寸面白いのに、ふとこんな事を思つたけども、無事太平。

まさか面白半分でもない、根も葉もないことでないが、和歌山の義兄樣に「いよ〳〵上京します」と書いて行つたら、びつくりしたお手紙をよこされた。

一體、お前は餘計なことを仕すぎますつて母樣にしかられた。此頃は母は大方臥つて居るので家の仕事を一日てく〳〵とやつて居るためか、氣うとい心は幾分かまぎれて居る、でも昨日裁板からつと立つて鏡臺の前で帶を結びなほしてゐると、臺所へ藥のみにいらしつた母樣は落ちこんだ目をだるさうに向けて、

「どこかへお行きかい、どこへ」

「母樣そんなに、こはい目をなさらんでもよいことよ一寸大西のお嫁さんを見てくるの」

「よいことはありません、向樣ぢやみな仕事をしてるんぢやから、今日はおよし」

母にさからうて大西へ行き新しい從兄の嫁と話した

が格別おかしい事も面白い話もなかつた、一時間ばかりしてかへつて來た時、母様は何んだか泣いてゐらした様子、私のきまゝと驕慢がいたく母様の胸を苦しめたと告げられた、私は人に缺點を指される程いやなものはない、私は澁面を作つて何も答へません。

あゝ母様よ、私だからつて何も知らんのではない、一しほ感傷のするどい性、けれどもけれども、母様の日々おとろへゆく様を見るたびに何物にとも分らぬ反抗心が潮のやうに湧いて、それに我儘が手傳つて心がいら〱して、八つ當りしたりつまらん意地を通さうとするのです。

自分の此の性質を矯正せねばならんことも知つてゐる、無論此のまゝの狀態で何時までも居ようとは思はない、「ある惡癖にさへ打かてば可成愛すべき性質を具へてゐる」と義兄は被言つた。

私は祈ることを好みません、どうかして我身をたのします閑を得よう得ようと苦心する、是が私の常態であることを卒直に白狀せねばなりません、何物かの前に跪いて骨髓に徹る程泣いて自己の惡癖をなげかねばなりませんけれども、

不定不安の狀態に在る私にでも、若芽の如くあたらしくやはらかに、おそらく人の目で見えない信仰をもつてゐて、それが發芽せないまでゞ、他日必ず繁茂する大樹となるべき素質を具へてゐる、とある人は云つたがほんたうだらうか。

「區別も條件もおつけになりません、只求めよと宣ひ給ふ」

私はたうてい、信仰することも出來ない、祈ることも出來ない。

「死、何時の日來るか計りがたければ、汝等常に守るべし」

私は此言葉が憎らしくて仕方ない、苦しい疑惑と苦い反省とにあへぎ〱息のつくまもないものを、人は私共に聖句とか警言とかを、一時に投げ出してゐるではないか、止めなければ私共は多分發狂するか知れません、血汐ながるゝ傷口に相當の手當をせない先にどんな良藥をつけたとて、どうして全治りませうか。

私は此頃人のために費す涙や情を惜しみ、悲しい人の胸をも察せずに知らんかほする樣になつたのは、自分ながらあやしいと思ふ。時には若くして逝つたBの事、悲慘なるSの病狀、過去の追憶と現在の悲劇とは私の胸を壓する時はあるけれども、生來の跳反力はた

だちに轉倒して夕立後の空の樣にケロリト忘却せしめる。

「おすがさんを奧樣にもらつた方は、冷淡で可愛さうだ」と西風の姉樣は笑ひながら被言つた。

「私なんかの手紙は一度よんだらもう放ちらかしてしもう樣な方だわ・きつと」と香鶴さんは恨む。

從兄のSは「人をどつていゝくさしよる、」いかない奴だと云ふ。

私は笑つてますのよ、みな樣の被言ることはみなあたつて居りますつて、

學校を出て一年ほどの間、私の緣談の樣なことも四つ五つ位ありました、猫の子でもあるまいし左樣しからばで定めることもならず、まだ嫁かずに居ります。

此頃は又妹の話を耳にすることがあります、父と母とで秘かに談ずる樣子を見た時は、私の心ははげしいねたみにもえます。

父樣、母樣、むごいではございませんか、芳枝より四年も先に生んだすがの在ることと忘れましたか、こんな時には、父も母も妹も、くしやくしやにしてしまひたい樣な心持になる。

同じく歩をはこんで來た友の幾人、艶子樣も、朝鮮へ行つた、都田樣も、かずさんも、前後してはや人妻となつた、及びなき凡人の出來心の淋しさに、ふと丸髷や赤いテガラを想つて見たりすることはある、けれどもまあ云はせて下さい、理に合はないでも。

學校時代には先生より、妻と云ふ名の如何にやさしく美しきか、母てふ職の聖く貴きを、敎へて頂いてよく存じて居ります、そしてよく友とよつてオールドミスを極端に攻擊しました、夫を持ぬ女は人間でないかの樣に思つてしまひました、而してこれが單に無法な壓制を彼等オールドミスに甘んずべく餘儀なくされた剛腹にした行爲にすぎなかつた、今から思へば。

私は深い意味も、深い理屈もさておいて、私の思つたことを云はせて下さい。

往來の行きずり、錢湯の中、電車の中、腹の見にくくふくれた女をごらんなさい、あさましいぢやありませんか、あれは子と云ふものを產むのださうだ。

さくら色のほゝもやゝにやつれて髮もうすくなり、桃のつぼみの如かりしあいらしき乳房も、桑の實の毒血色となつて、あれごらんなさい、肩でする苦しさうな息を、あさましいではありませんか。

あゝ、私はいやなんです、思ふこと、云ふこと、書

くこと、矛盾して居たつて仕方ない。

　親にすてられ、夫にすてられ、子にすてられて終に逝くべきあさはかなる、あさましい女の運命よ。

　けれども此家は私の永久も住むべき家ではありませぬ、此家で死すべき私のみではありませぬ。

　慈愛深い父様や母様の朝夕私を見守る愛の眼に、私を一日も早く家の外にながめんことを望める色のありありと見ゆるではないか。

　生の叫びの強烈な都、うづまきの都會へと、さすらひの旅に出る藝術にあそぶ棍をもつた方はうらやましくてならぬ、昇る坂路は險くしてタラ〳〵流るゝ油の汗、いばらで引かいて足は血だらけになつてもよい、虚僞の都へ、塵の都へと私の心はたえずあこがれて居ります、けれども今はそれさへ否定せねばならぬ今の自分、あゝ實力も、自信もありませぬ故。

　私は今さら自分の不自然な獨身論をとなへとほせることの出來ないと云ふことを知つてる。

　今さら女と生れしを悔ゆる樣なおろかはなしませぬ只二人の 妹と、一人の 弟 の先に生れたことのみを、殘念でなりませぬ。

　どれほどもがいても仕方ないのだ、空さわぎにすぎないのだ、と云ふ觀念は、あらゆる方面に火花を散らさんとする心を、辛じておさへてゐる樣です、此頃は何も望みません、私は今何も仕たくない、戀したくもなく、食べたくも、散歩したくも、湯に入りたくも、話したくもないのです。

　人前ばつかりで、口ばかりで、強いことを云つて居ても私はやつぱり弱い〳〵女だ、私は氷にも火にもなれない心をもつてゐる。

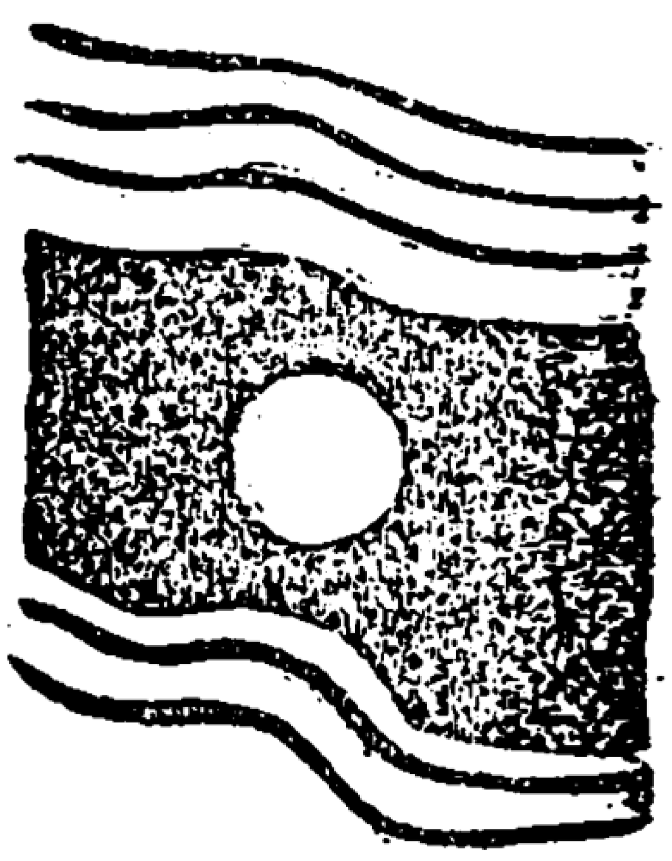
　私は全く、悲しいさびしいあはれな姿を自分でぢつと見守つてゐなければならない、こんなみじめな運命は又とあらうか。

　私も自分の感情につれて、狂奔して歩るいて行つたら、それは却つて今より幸福でせう、心も少し平でせう、此の家にかへつて一月ばかり、私はじつとそのなさけない姿をながめて暮してゐる、親の許、妹弟のそばへかへつて、一度に年とつた樣に思ふ。

　惑溺して、全身の血汐ぐらつく樣な酒もよう飲まず夜半の夢しづかにさめて考へることも出來ない。

　私の心は終にくさるでせう、くさつて、臭い泥池のそこ、色々の蟲や魚の死骸と一所に沈んでしまふのでせう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



私の心持を顛覆せしめたる大いなる動機

毒だみ

五月の朝風はしなやかに垂れた窓の若楓、可憐の赤い蝶形の實をゆるがしてすうと流れた。今しも地平線を離れた新しい太陽は、活々した光線をその楓の一葉一葉に送つて纖細な葉脈が紗の樣に透いて居る。冷い水で濕したタオルで汗ばんだ額をふきながら化粧の間に這入つて來た私は、立ち寄りざまに膝をついて、淺黄地の蔽を取ると、いさゝかの濁もない大きな鏡、水銀色の輝さへ新鮮な心持だ、はらはらこぼれた前髮を、黄楊の小櫛でかきあげて、淡紅の粉白粉をポットに含ませ淡くはきつける、すがすがしさは少しぬいだ單衣の襟にも漲つて、それは綺麗な大理石の大きな盥に半身をひたし、睡蓮の花の香を嗅いでる樣な、何やら、うつとり物に疲れ氣味の——片手を疊についた儘深々とふけ行く秋の夜半、一穗の孤燈のもとに明鏡を立てゝ、我と寫つた姿を見入つたなら、きつと凄い、恐ろしい淋しさがあらう、今朝はもの皆清い初夏だけに重苦しい感は少しも浮かない、輕い嘲笑に似た氣分を持ちながら、じつと鏡の中をみつめた。

秀れた美女ならばかゝる時押へ得ぬ誇があらう！

醜女ならばこの刹那を涙するのが當然であらう！

私の現在はその何れでもない、靜かに自分と鏡の我とをはなして具さに點檢してみる丈けである、眉、眼鼻、口、顏の要素のなべてに於て、私は平凡に出來上つて居る、何處にだつて大きな特徴もなければ、際立つた異相もない、むしろ穩やかにつく可き處に通常の線を以て通常の擴りのものがあると云へば足りるのだ

顏の輪廓でもそうである、長きに失せず、短からず、しやくれもせず歪みもせず、透き通るばかり明るい皮膚の色ではないがさりとて耻しいほどの暗さでもない只髮のみは並より光澤があつて長いと云へ樣、肩も胸乳も四肢も皆通常の型をはなれない、だからもとより、美を以て許す可らざるも、私は醜を以て自分を呼びたくない、そうだ考へて見れば私はすべてに於て平凡だ顏や體格の平凡なるが如く、境遇も平凡たゞ境遇の平凡なるが如く私の心的作用のいづれも、平々凡々月並の域をはなれない、確かに何處も彼處も月並たる以上は、常識といふ固い殼を破つて、何處までも自我を通すといふ執着なんか私にないのは當然であらう?! てゝに私に正直に經歷を云はせて下さい。

私は相當の地位あり資產ある學歷ある人を父とした一人の兄と二人の弟と一人の妹とが私の周圍に小鳥の如く、賑やかに生ひ立つた、父母の愛は一人で專らにすることの出來ない代り、いづれをも等しく沾ほして餘りあつた。父母は世の父母のそれよりも冷靜な思慮ある無事な人なのだ「はゝゝ世間の事に眞面目に腹立つて七面鳥の眞似なんかするのは野暮だよ、私なんぞは若い時氣に喰はない奴の前では、口の中で馬鹿馬鹿つて三度繰り返して御辭儀したもんだぜ、向ふぢや知らないから、長い間くびをさげてゐるから丁寧に敬意を表して吳れるつもりで居るんだ、はゝゝ」から云つて卒直な後進をさとして居る父の言葉を私は聞いた事がある、父はこの主義で手段で贏ち得た敏腕のほまれと、金モール燦たる禮服と、木立深い玄關のある邸宅と。

お蔭で私は世間からお孃さんと呼ばれた、お孃さんなる故にお孃さんの通ふ學校に紫の絣、二尺に餘る袖を振つて朝每に通つたものだつた、敎壇に立つて敎ゆる人の口吻をそのまゝ、暗誦し記憶して四年五年の月日が立つたが、婦人としてはほゞ完全な敎育をうけた婦人と云はれる私といつかなつてしまつた、然し學校時分に於て、學科にしろ日常の生活の上にしろ、我から自動的に疑問を起した事件は、幸にして一事も出

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

遇はない、敎へらるゝまゝに從順にうけ入れたと云へば、一言にして盡きるのだ。

まあお芽出度かつた女で專攻科なんて入らない事ですこれからお家庭に居てお裁縫とお茶と生花とお琴のお稽古をおしなさい、と二年前の春、女學校を卒業した時、母から云ひ渡された、愚な私は何故女は兄さんの樣に中學校から高等學校と進んで勉强す可きものでないか、生花や點茶は何故必要かと疑ふ餘地さへも無かつた。二七と五十の日菊だの葉蘭だのと一種の型にはめて瓶に立てる技術や、さらさら音たてゝ苦い飮物をつくることも敎はつた…、このまゝこの心持をぼんやり何の刺戟もなしにもちつゞけて居たら、私は今時分、遲蒔にこんな氣まづい思をしなくつてもすんだ筈だ。



私は一人の友があつた春の夕を白う咲く梨の花の樣

た冷艶な、少女盛りに似氣ない淋しさが華奢な肩に、まつはつてるかの女だつた、月並等し並の私がこの女と殊に親しかつたのは、寧ろ奇蹟に近い位と云へ樣、その女は多少詩を解することも藝術を愛することをも知つて居たし、淺薄ながらも哲學的な思索も、その柔胸に往來してゐるらしかつた。うす紫の暈を天地に置いた色紙型の表紙のついた雜記帳に、隨筆めいたものをよく書いて居たが、その中には人生の歸趨だの意義だの價値だのと云ふむづかしい文字が散見して居たから、――女學校を卒業してから後もよく往來した。

丁度それに前栽と庭との間の中門に、纒繞した連翹の花が夕やみにほんのり浮く三月の末の一日、何氣なく緣側に立つて私は暮れ行く春の日を惜しんで居ると、美佐子さんと聞き馴れた聲。あら小夜樣、いついらしつてたの?。ほゝゝゝそつと忍んで來て垣間見てたのよ何考へてゐらしつたの、柱になんか靠れて、ほゝゝゝと賑やかに笑つたが、連翹の中をすらりとぬけて私の前に立つた麗人の姿、水色の袂、細い指を胸の邊でくんでじつと白絹で包まれて行く邊の光景を見て居たが、小夜樣貴女こそ何を考へて被在るのと覗き込む私を、細いけれど綺麗な威のある一重瞼で見やりながら美佐子さん貴女なんかお氣樂でいゝわ、女は單純な方程幸福ね、ねえ美佐子さん、貴女は何時迄もそうしてゐらしつてね、何もお考へにならないがいゝ事よ。あら私見たいな愚者は何も考へることがないんですものもつと怜悧になりたいわ。いゝえ美佐子さん、貴女位お怜悧なら澤山よ、現今よりお怜悧におなんなすつたらきつと後悔なさる事よ、そのまゝでゐらしつてね――あら私こんなことと云つて失禮だわねえさもさも知つた風の――ほゝゝゝまた來ますわよ、夜になると家庭で心配しますからほゝゝゝと飛燕の樣に輕ら身をとりなして、止むる間もなく歸つて行つた。

お孃樣、お孃樣、大變で御座います小夜孃樣がお死去なさいましたさうで、えッ、うそ!?。いえどうして私が僞なんか、今方お女中さんが來ましてそうと申して

參りました昨夜とか毒を召上つたんだとかで、お身體中紫色にはれ上つて、それはもう悲慘な——まあ小夜樣が……後を云はんとしてぴり〳〵口許が痙攣けられたまでは意識して居るけれど、氣の付いた時は白いシーツの床に横はつて熱ある額に氷嚢がとけつゝあつた。

＊　＊　＊

「一體現代の女は考への置き所が間違つてゐる生意氣に親に楯つく事許り考へてゐる、自覺か四角か知らないが經驗のある親に任せて置けば惡い樣にはしないのだ、中山の小夜子なぞも、可惜い、容色で金滿家からもらはれたのに、氣に入らないなんて、親に面當に自殺するつて何の事だい」。

「そうで御座いますとも小夜子さんも可愛想は可愛想ですけど、大恩ある親にそむいて自殺する樣な、空恐しい事がよく出來ましたね、優しい顏して居ても案外な」、私の父母はかく小夜子の死を評した、私は彼女の最後の言葉、女は單純な程が幸福だと云つたのを、再三再四反覆して見た。縺れた糸が少しほぐれて來た樣でも、又依然もつれもつれてゐる樣でもある、小夜



子の死因は決して世間の皆が取沙汰する樣な簡單にてつとり早く片付けられる事ではない樣だ。はかり知られない彼女の胸にはもつともつと深い原因があつたであらう、死ぬつもりで辛抱すれば何だつて容易ぢやないかと世間の人の云ふ事だけれど、死ぬより辛い生があるのではなからうか、現に美しい小夜子はこともなくこの世を見捨た、彼女の死によりて私は初めて、權威ある死と云ふことに想到した、何故人間は生きて行かねばならないのか、人生の眞の意義、歸趣、いかにして送る人生が最も價値あるものか、幼稚な私はこんな問題に日夜思をまどはした、思餘つてこれを髯白い敎會の長老に聞くと、靜かに十字を切つて、

　神樣の御旨に添へ。

如意を手にする紫衣の御僧に問へば珠數つまぐつて

　御佛に縋れ。

フロツクコートいかめしい倫理の先生に伺へば、自分の持てる天分の限り、智も意も情も發達せしめて、人生の爲め貢獻せよ、努力せよ、と被仰つた。

さうして長老も御僧も先生も、貴女の現在の身分では父母に從順なれ、これが貴女の最上の手段だと、重ねて被仰つた、でももうその時は私は悲しい眼を瞠いて居た。父母長上の命とあらば無我夢中で享受した昔の私とは隔りが出來てゐた、父母の云ふ所、行ふ所欲する所、虛僞多しと知つた、方便多しと見えた、自利のみはかる卑劣な策略もあると覺つた、錦の裏のきたなさを見る心地がした。形而下の名譽權勢、美衣美食は蜃氣樓樓閣の船いそがする愚人の業としか思はれない、私は再び苦しんだ、初めて世の中の片端を見た、私は何も彼も否定したかつた、何うおしだえ、妙に此頃は沈んでるぢやないかと聞かれた時、母樣、一生の御願ですからもつと勉强させて下さい、何にも今の儘では分解つてませんもの、後生ですからとせがむのを輕くうけながして、もう澤山です、お手紙も書けるし御本も讀めるぢやないか、ね、いゝ娘だからお裁縫をし、おとなしくして居ると今に好い事がありますよと笑ふばかり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一つそ一つそ、何物にも囚へられない、親もない家もない女となつて、あらゆる境遇に出來るだけ自ら出遇つたなら、初めて謎が解もしよう、人生も眞に解することが出來よう、家出——漂泊——と日毎に幻はゑがいて見るけれど。

さりとていつしか發達した常識の自分は、この思に裏切つて、その無謀を嘲笑する、愚なる女よ、自ら求めて悲境に沈淪して何になる、只默せ、只かくしてあれ、自然と展開する人生の波瀾は嫌でもお前を見舞ふであらうから。

奔らんとする心、止めんとする心、一つにをさめて私は靜かに運命の前に額づいた、運命の糸にあやつらるゝ自分をば、私は手をつがねてみつめて居る、蓋し何處までも平凡に出來上つた私の取る可き方法として此より外に出樣もないからで。

鏡に寫る自分の影をじつとみつめて居るが如く運命の前に泣く笑ふかなしい自分を、じつとじつと何時迄もながめて居るだらうか……。

女子文壇叢書

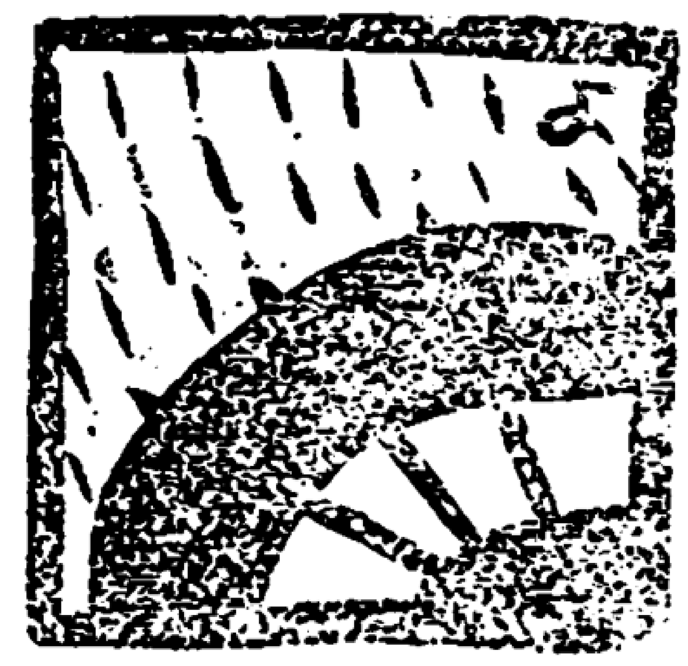
第一編『町むすめ』

前島優梨子さんの小說が
一册の書物と成る

今回本社で企てた『女子文壇叢書』の第一編には、前島ゆり子さんの小說『町むすめ』が出版されます。前島さんの作は皆樣も御承知の通り、初めは家庭を中心とし、後には世間を中心とし、而かも着々として取材の範圍を擴くし、幾度讀み返しても飽きないと云ふ牽引力のある作物です、本社が若き婦人達の作を集めて叢書を刊行する第一着に、此作者を選んだ理由も其處にあります、同好の皆樣方よ幸に發行の時をお待ちください！

若き婦人の創作

八月初旬出版



日記 晴雨二日間

近松秋江

不意の夏——博文館——田山花袋氏——雷同されたる自然主義——ナポレオンと群集　丸善——トルストイの譯——早稲田の若い人——西洋料理——森田草平氏——待つ人のない家——雨の日——十七枚の戸——足駄の新調——國技館の一等席——相撲と藝術

五月二十日。夢現に何だか寢苦しい氣持で寢てゐた處を、寢間の三疊の戸の外から、

『近松さん、近松君！ もう起きたらどうです。日既に三竿ですよ。』と呼ぶ者があるので、ハッキリ眼を覺した。その聲によつて想像すると、島田賢平君である。

今日は朝から暑苦しい。私も島田君も呼吸を壓迫されるやうな樣子で太息を吐いて、餘り話すこともない——初夏の頃には、時々斯ういふ不意に盛夏を思はすやうな氣まぐれな日がある。さうして、それが盛夏よりは堪へ難い。やがて島田君、出社するとて歸る。

一昨日、一葉女史の日記の紹介を「文章世界」に書いて持つてゐて置いたので、甚だ苦しがりのやうで氣耻かしいけれど、記者達も、私のそれは知つてゐる事。

午前より家を出る。最早一人になつてから、やがて三ケ月になる。出入ともに氣樂である。まだ綿入を着てゐるので蒸暑くつて氣持が惡い。

博文館には前田君ゐなくつて、田山花袋氏に會ふ。用事の辨ずるまで、例の應接室で種々な雜談をする。藝術の事。女性の事など。此の人とは、先月の十六日にも此室で暫く振りに會つて話をした。その時は、多分小一年目であつたらう。此の人がまだ今のやうに文壇の重要なる勢力にならぬ以前には、うるさいほど氏の自宅を訪れたものだ。その時分の氏はその風貌に似ずたゞ懷しい人であつた。さうして私は新しい文學に就いて鮮からぬ益を得た。自分は確かに斯う信じてゐる。早稲田の文科出で、最も早く田山花袋氏などの自

然主義に感化されたのは自分である。けれども、段々色々な人が後から出て來て、一も二もなく氏等に附和雷同するやうになつてから、私は雷同者の多い自然主義に反感を抱いた。さうして一夜漬の自然主義哲學の論理上の缺點を批評して獨りで痛快を感じてゐた。けれども田山氏は無數の雷同者を得なかつたならば、今の盛名は得られなかつたらう。氏に限らず、何樣な人物でも盛名を得るには無數の雷同者を要する。

ナポレオンが以太利と戰つて凱旋した時、無數の群衆が狂呼して路傍に歡迎した。その時ナポレオンと馬車に同乘してゐた侍臣が、「さぞ御滿足でござりませう。」と祝したら、「ナニ、馬鹿を言へ。此樣な奴等は、若し俺が戰に劣けて戻つたら、寄つて集つて、俺を斷頭臺に上す奴だ。」と答へたさうな。乍併ナポレオンも是等の群衆がなかつたら、あれほどの成功はしなかつたのだ。

兎に角雷同者を得た以後の自然主義そのものは、何だか厭である。花袋氏その人も以前ほど懷しくなくなつた。氏は今山ならば頂上に立つてゐる人だ。私は、私自身の境地に就いても、また氏の地位に對しても七八合目にゐて、少數の知己に持囃されてゐるやうな文學的生活が望ましい。など思ひながら話してゐた。けれど昔の通りに、惡い人ぢやない。

其處を出て、一寸丸善に寄つて見た。買ふべき品はなくとも此處に時々入つて見るのは好い氣持である。歸途、駿河臺の國民書院に立寄り、トルストイの「生ひ立ちの記」も青年時代まで譯了出版したれば、あと何か出したい相談をする。全部完了の上は出版するとの返辭。それでは生活に困るけれども、何か勇氣を鼓して譯する氣になる。「マイ・コンフェッション」にせんか、「コサックス」にせんかなど考へながら歸る。「戰爭と平和」は別に計劃を立てゝ譯る心算である。「アンナ・カレンナ」も、既に他に着手せる人があるけれど、これも自分の藝術上の道樂として何時かは譯して見るつもり、そんなことを思ひ耽ける。

もう三時も過ぎたらうが、胃腑がつかへて、一向食

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

欲を感じない。寺町のM君の處に寄つて見る。M君は早稻田の文科の一年。其處には同じクラスのMA君もゐる。此の頃知つた矢張り同じクラスのS君もゐる。H君、MI君、I君、U君、種々な若い人達が集會して、まるで倶樂部のやうだ。若い人が牛込の奧の方に住んでゐて、讀書に倦み、夕飯を食べてから、獨りで靜としてゐるのが、何だか物足りなく寂しくなつて來ると、神樂坂へ散歩をしに出て來るのだ。さうして文明館傍のM君の下宿へ足を停める。それがさうして一同、根性がケチ臭くひん曲つてゐないで、ノンビリとしてゐる。默つて他人の缺點を睨み探さうなどゝしてゐるやうな處がない。此處等になると早稻田の人にも餘裕のある上品な人が多い。藝術の話や女の話をしてゐるのが私にも面白い。年齡や境遇が違ふけれど、私は時々此の人達に交はつて話をするのだ。

今日は——いや今はM君一人眠さうにしてゐた。私は其處で丸善に書を注文する手紙を一本書いて、サイダを命じて飮み、M君を誘ふて、自宅に歸る。

M君はフランス語の試驗の準備に、近松さんの處に行つて勉強するのだと言つて本を二冊持つて來たが、家に來ると、私の仕事部屋兼食堂たる四疊半に寢轉んで二人で夏蜜柑を食べて話しをする。さうして「お腹がすかないねえ〱」といふ。其處へH君がやつて來た。今M君の處へ行つたのだといふ。あとから矢張り一年の北川君が來る。北川君は今日は寒暖計が八十二度でした。と知らす。道理で暑つたのだ。段々晩になつて、少しづゝ好い氣持になり、腹も減つて來たので自分で洋食を命じて來る。四人で話しながら食べる。八時過H君が、森田草平君の處に連れてつてくれといふので立出でる。M君は歸り、あと三人森田君を訪ふ森田君は昨日初めて本場所の相撲を見たといふ話しをする。それから小川未明君が「魯鈍な猫」に書いた僕の讒謗の話などをする。一時間ばかりゐて辭す。また三人で神樂坂を歩きH君は手の字の立食をするとて誘ふ。僕はその氣になれぬ。北川君とH君と行つたやうであつた。自分は獨り家に歸つたが、さて夜も少し更

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

けて自家に歸り行く時、歸つても待つ者が無いと俄かに寂寞を意識する。殊に今日は晝間暑かつたのと、平常知つた人とは言ひながら種々な人と對談したとて、妙に神經が亢奮して、床に入つてからも一人では何だか物足りない感がした。

明日は西の海と鳳とだ。之れは今歳の夏場所中での好取組である是非見たいが今日晩方號外で翌日の取組が分るまでに、晝間博文館で受取つた小使を無くして了つたので、見るとすればまたそれだけの分別をせねばならぬ。など思ひながら寢入る。



二十一日　雨。久振りの雨にて却つて氣持がいゝ。一體に此の頃は身體の加減が惡くない。例年ならば、食慾が減じて身體の具合の惡い時分であるが、三ヶ月も一人薪水の勞を取つてゐるので、むくりと起るが早いか、凡てゞ十七枚の戸を明けねばならぬ。井水を汲まねばならぬ。その爲に、朝飯が快く食べられる。朝床の中に眼覺めても五體が氣怠くない。

雨！北側の裏縁に立つと、護國寺あたりから一圓に雙眸に入る青葉が薄墨を潑したやうに煙つてゐる。相撲はどうしても見たい。昨日の蒸熱で身體がベタ〲して氣持が惡いので、朝湯に行く。歸りに足駄を新調す、朝飯を濟してそれを穿いて新潮社に赴き、佐藤氏に會ひ、小使を借りて直に兩國へと急ぐ。

一等に席を買つて、下など歩いてゐたら、國民新聞の小島君に會ふ。「何處か君等のゐる處に近い處はないかねえ？」と聞くと、「あるです。」と言つて江戸兒で氣の利いた小島君は、自分の新聞記者席を周旋して入れてくれる。本場所は何年か見てゐるけれど、いまだ斯樣な間近で見たことがない。誠によく見られる。幕下響矢にフレー〱と、學生の應援が盛だ。が、彼れは遂に宇都宮の爲めに吊り氣味に持ち出された。段々興味が熱狂して來る。千歳川と玉椿との取組も好い。自分はかねて千歳川を好いてゐる。彼れは精悍にして豪放勝敗を度外に置いてパツ〱と取つて除ける處が誠に胸が透くやうだ。藝術に趣味のある人には相撲に趣味を持たぬ人が多いが、自分は不思議に相撲を好む。唯單純な角力と言へばそれまでゝあるがあの隆々たる肩肉の附いた偉大なる身體は正に肉體上の英雄である。英雄は愛すべく崇拜すべきものである。自分は彼等の偉大なる肉體を先づ崇拜せずにはゐられない。さうして相撲によつて其の態度、技術、成敗の上に、瞬間的にではあるが、種々な性格を發揮する。豪放、小膽、卑怯、醜惡、清潔、知識、魯鈍、敏捷、精悍、華麗——複雜な趣味がある。

鳳と西の海とは遂々引分となつた。あと梅ケ谷と相生とを殘して歸る。幾千の群衆が充滿してゐる、その底の方にゐて緊張した注意力を續けてゐたので、神經が疲れて頭がヅキン〱痛くなつた。

帶をやりたれば、しならしの帶とて、ひなんをおつしやる、帶がしならしならば、そなたのはだも寢ならし。
やぶれ菅笠しめ緒が切れて、さらにきもせず捨てもせず　（以上二つとも隆達節）



なやましい風

兒玉花外

すゞしい〳〵夏の風が女の赤い羅物の裾を吹く。薄い葉の如な裾がヒラ〳〵とうれしさに泣く。

情を含んだ熱い風が女の白い柔かい臑を撫でる。白蠟の如な細い丸い肉柱に觸れて、夏の風はなやましい悦びに毒の如に落ちて死ぬる。

勢ひよく大空から吹おろして來た夏の風が、女の腋に夢の如に忍び、その溫かさと匂ひに醉つて、若い血に蒸した如な圓い脹んだ乳房に泣き、昔希臘の宮殿に棲んだ白鳩も羞づる胸を捲き、狂つてその深い底に消え失せる。大空を行方なくさまよつた風は、女の香ふ腋に入つて爰に思知らぬ隱處を得て、ひそかに羅物の懷の中で死のよろこびの歌をうたひ、夢の如にしかし溫かい肉に消えて死ぬる。

すゞしい〳〵夏の夕の風が、女の黑い水々しい髮を吹く。雲を吹き、葉をふき、あらゆる物を吹いた夏の風は、はじめて強い力

のある女の髪に觸れて、玆に黒い毒の如な魔氣をおびる。若い女の光る髪毛にふれて、風はその一筋々々に嚙入り、光る妖魔の熱と力に化して、世界の鳥の巣に優る髪毛の中に碎けて、女の戀に充ちた血の腦の熱に消えて死ぬる。夏の夕の風は歌つていつた、我は無限の空間に亙吹いたが、未だこんな女の黒い美くしい力ある髪を見なんだと。そして風は可愛ゆい小櫛を枕にして夢みつゝ死んだ。

　夏の熱のある風はいろ〳〵の女を吹き、そして驚いて歌つた、あゝ人間の女の白い柔かな肉の熱よ力よ、我はかつて斯く美くしき生命ある物に觸れなんだと。夏の妖熱を含んだ風は狂ひながら、もだえながらに、あはれ女よ、其の愛らしの手よ足よ、又隱れたる圓形の柔味の熱と力ある乳房よ、我はこの空の雲よりも底深き…人間戀と情の源なる血の泉の乳房に、この滑かなる白艶肉に觸れて、無限永劫のなやみは消えぬと――。

＊　＊　＊　＊　＊

卯の花

　わたしの庭の向ふに白い卯の花が咲く、卯の花は白い花と知るけれど、眼にはその花が赤い血の色に見える。

　赤い鮮やかな血球の花は、茂るいろ〳〵の青葉のまはりに半面を出して、蒸すやうな梅雨の日の中に咲いてゐる。

　熱い曇りを帶びた太陽は魔の色をして、空に動かずにかゝつてゐる。亂れた六月の白と黒との雲が、淫邪なる心をひろげて蔓つてゐる。

　赤い狂人の血の如な卯の花が、數は百千ともしれずに咲いて見える。

　暗い〳〵眞晝の空から、今眞赤な血の雨が降出して來た。卯の花は蒸せてます〳〵赤く咲いて見える、わたしは白い花と知るけれど…。

　赤い梅雨の雨の降るなかに、赤い血の色の卯の花が咲いて見える。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

☆柳はみどり花はくれなゐ 色づくし見立角力

和田信次郎氏所藏

御免

次第不同

行司

紫式部
黒ぬし
赤松圓心

生類

青さぎ
黄色虎
赤イうし
白狐

勸進元 熊野權現 からす

差添人 住吉つかわしめ 白さぎ

大關 婚禮は 白むく
關脇 だるまは 赤頭巾
小結 熊谷は 墨染衣
前頭 坂田 金時
前頭 ふろからでたむさし 赤からだ
前頭 與一兵衛 茶の布子
前頭 おこまは 白木屋
前頭 元服あたま 青あたま
前頭 鐘馗の繪は 赤姿
前頭 節分は 赤いわし
前頭 寄進 白涙
前頭 こしは 白かべ
前頭 むしもの 赤はん

同 のぼせは 赤目
同 かうやく 赤まん
同 はうた 黒かみ
同 かん兵衛 赤がいる
同 芝居の血 赤わた
同 あかし名物は 赤めばる
同 おとがひ 青ひげ
同 とんび 白いふん
同 有馬細工は 白いたけ
同 紺やは 青い手
同 京都 黒木うり
同 砂もちせん物 黒いはな
同 早ぞめ あいぬき
同 すいもの 赤ゑ
同 わきざし 赤銅づくり
同 名さく 青イ下坂

世話人

黒はなべのしり
黒はめいのゆでしる
黒はくらがりからうし
赤はたこのゆでしる
赤はさるのしり
青はなのゆでしる

頭取

近江 白ひげ明神
所々 辨ずり
江戸 白子觀音
舞姫 白拍子
すが原 白太夫

大關 本家きせるは 赤じばん
關脇 日蓮宗木像 白綿ぼうし
小結 あつ盛は 青葉笛
前頭 渡邊のつなは 金札
前頭 宮本にまけたは 白倉
前頭 定九郎は 黒衣
前頭 お七は 八百屋
前頭 親仁は 赤あたま
前頭 ゆうれいは 白姿
前頭 打出すは 白豆
前頭 竹馬 赤銅
前頭 ざしきは 赤かべ
前頭 家うつりの夜は 白かい

同 二すじたれる 青ばな
同 丸子は 黒丸子
同 手ほどきは 黒いはをり
同 神教丸は 赤だま
同 雪の場は 白紙くず
同 たいは 白ラ子
同 あたま 白髮
同 鼠は 黒ふん
同 茶方の火つぎは 青竹
同 かぢや 黒い貌
同 江戸すそはき 青從壹
同 ざくろばな 赤ふなる
同 お前は 墨流し
同 かまぼこ 白やき
同 長刀は 青貝摺
同 古い刀は 赤いわし

世話人

白は雪を喜ぶ白犬
白は美女の雪のはだ
白はそうめんのゆでしる
黄はたれながしのしり
黄はおうだんやまひ
黄はさつま芋のゆでしる

頭取

京都 青光明寺
宇治 黄ばく山
中山 紫雲山
あたご 白雲山
京都 黒谷



妙な手紙

佐々野旅夫

幾日となく鬱陶しい五月雨が續いて、色の褪せた樣な太陽の影さへも見る事は稀であつた。着物の濡れて居る所には、麹の樣な重く潤つた黴が生えて居た。甘つたるいクリームの香りのする靴は、其滑な光澤さへも失つてしまつて、內も外も皆少し黄色みがゝつた黴が粘り強くついて居た。

此樣な、泣き倒れたヒステリーの女を思はせる樣な幽鬱な日が續いて居たとある夕の事である。

郵便配達は低く漂つて居る靄に濡れながら、ぬかるみの深い、門から　餘程離れて居る私の家の內玄關に一つの手紙を配つて來た。そして、

「番地が少し違ひますがお宅に佐々木春子と云ふ方がお居でになりますか」

と尋ねた。

私はそれは、自分の名に少しは違つて居るけれども隨分、いたづらな友達も居なくはないから、もしかしたならば或る友人の戯れであるかも知れぬと思つたので、餘り危懼する事もなしに受取つてしまつた。

配達が歸つてから、私は其差出人の名を檢めた。其名は曾て會つた事もなし、聞いた事もない女の名で、よく無智な女が書く樣な不思議な字體をして居たのである。

宛名は私のによく似た女の名である。

私の心は一種云ふに云はれぬ不安と好奇心とに滿されたのである。遠慮なしに云ふならば、私は未見の女から、何か云ひ寄られた樣な心地がした。そして封を切つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

手紙は表の字と同じ人によつて書かれて居たと云ふ事は、其書法が同一な事によつて明瞭であつた。此事は餘程以前の出來事であつた。其手紙の精しい內容は忘れてしまつたのである。けれども其六尺にあまる手紙は、下婢にでも住み込んで居るらしい二十前後の無敎育な女から、同じ年位の同輩とも思はれる女へ宛てた手紙であつた。

そして、何か情夫にでも關係して居る事らしく、其手紙全體は殆呪咀の言葉に滿ちて居たのである。私の心は宛然惡寒を覺えた樣に慄へた。そして終りに近くと白い人形の樣に切つた紙片があつたのである。其一枚の紙片の間には、稍黑ずんだ味噌が入れてあつた。

私は屠牛所の傍を流れて、重い腐れた脂血を臭いだ時の樣な心持になつて此手紙を讀み了つた。

黑い髮を狂ほしく亂れさして居る無智の女の呪咀はそれが他の女を呪つて居るにしても、私には自分が呪はれて居るとしか感じられなかつたのである。私の心の臓深く、醜い女の憎と云ふものが食ひ入つた樣に感じられた。

又私が、人の信書の秘密を犯したと云ふ事はいたいけな童貞であつた私の心を苦しめたのである。

然しながら、私の心は、醜い憎に呪はれながらも、私が此呪咀の手紙を受取つた事は、眞の宛名の人が受取る事よりも、其人にとつては何の樣に幸であつたらうと思つて、自分で自分を慰さめたのである。そして捨てゝしまつた。無智な女の醜い呪咀！　憎み？

夫れは數年を經た今に尙忘れる事が出來ない。此頃自由劇場の『道成寺』の內で鬼女の現はれた邊りの感じは、私が此手紙に接した時の心持を、如何にも適切に現はして居たかの樣に思はれてならないのである。

短夜や二尺落ちゆく大井川
酒十駄ゆりもて行くや夏木立
葉かくれの枕さかせよ瓜ばたけ
言葉多く早瓜くるゝ女かな
　　　　　　　　　　蕪村



犧牲の花

紅衣

×月—×日、落日は黄金色に顫ひて偉人の弱滅を示す時、大なる自然に捕へられたる犢の價幾何、或はスカーレットに、或はビンクマダーに、血を以つて染めし犧牲の花よ、夫れに晨に凋む朝顔の儚さに似し定めを持つて居た、若さに憧憬るゝ子は血の色に胸を傷めて遂に笑はずになつた、大なる宇宙に唯一時憩ふ者にも負はさるゝ責、前の人から前の人から、任を果しては斃れるみじめな狀を、おそる〳〵額越しに眺めて、若い子は如何に悶えた事であらう、深く〳〵鏑矢の根もて彫り付けられたる謎を解くべくそと胸に手をあつれば、若い子の若い血潮は胸の奥深く、靜に、然も、黄金の尊さにとゞろいて居た。

×月—×日、硝子越しに眺めやるモチの一本、大空から眞正面に投げられた日の光りに、葉の面はキラキラと輝いて、風も無いのにかすかに顫へて居る、何處からともなく淺い霧の樣な煙が流れて來て、丸く作りなされた木黑に絡んで消えた、名知らぬ鳥がチーと鳴つて百日紅から柿の枝へ飛んだ、おそろしい執着に見惡うしがみ付いてる柿の蔕二ッぶる〳〵と顫へて然も未だ落ちやうとしなかつた、不圖私は幼い時分に讀んだ物語の中に魔法遣の老婆を思ふた。

見惡い執着の最後の姿よ!、あゝ吾前途よ!、私は心にかすかなゆらぎを覺えた。

×月—×日、黑い絲と銀色の針と、まんべんなく動く手元とに目はまぶしく照して居る、顏へ亂れ掛る洗ひ髮をさつと拂へば後の障子に聲あつて、若く誇の黑髮の曲を心惡い程さわやかに傳へる、陽炎の立つかとばかり暖い靜の日の緣に我若い魂は吸はれて!、手を休めてじつと見入つた其果に不圖青い天鵝絨の樣な二葉を見付けた、長い〳〵冬中の苦しい努力を終へて、萬象は甦らうとする如月の天地よ、白帆の夢の樣に辷る荒川の水の面にも、若草萌ゆる武藏の野にも、歡樂の音に滿さるゝ時、我若い魂は何處を彷徨ふ、獨り頑固な心を抱いて!。

×月×日、珊瑚の樣な沙硃根の實を細長い嘴にくはへて振り仰いではクッと呑む、何と云ふ鳥か知らないが先から同じ事を幾度も〱くり返へして居る、おど〱と絶えず何物かを恐れて四方へ氣をくばりながら綠ゝ葉影から燃ゆる樣な紅の實をついばむのは丁度戀する手のものに恐れて忍ぶ態度に似ても居やう、追はうと思つたが止めた、紅の記憶よ！、若い日に於いて思ふ儘に味はしめよ、私は小鳥にのみゆるさう幸福と云ふ言葉を、不圖美しかつた、淸かつた、然も靜寂だつた二十年の我春秋を」、と思ふと、ホロ〱と涙がこぼれて！、今人に賣られんとする身の――「立派であつたぞよ、過去のお前の態度は」、と自らに感謝の意を表しつゝも、私は夫れを誇らしくも、嬉しいとも思へないのだもの。

彌生空の樣な穩やかな風が流れて來て、硃沙根に隣つた絲檜葉がはらりと亂れ掛かつたので小鳥は逃げたあはれ歡樂の夢覺まされて、可愛い幸福の手は何地へ行きし、さつと見上げた臉は曇つて痛かつた。

翠黛八里、關を越えた彼方の彼方、西の果には狂奔の都がある、其所には七才少女のあどけない思ひ出もあるものを！。

友へ

あるものゝイリユージヨンを追うて野に山に、何處迄も何處迄も遂に永久に馳け廻らうとしたのは夢でした、見果てぬ夢の永ければ永い丈私の憾みは深うムいます。

黄金の王冠の前にも跪かぬと誇つた私が、世の掟と云ふに脆くも破れて遂に額づきました、二十年にして今更何をか申上げませう、夫と云ひ、婦と云ふ、夫れに何の權威がムいませう、何の誇りがムいませう、皆ゴッドの敎へた戲れ事に過ぎないのですものを、眞面目に受け次ぐ人間は寧ろ滑稽です。

先日三年ぶりでお目に掛つた折、私が此樣な事を申すとは夢にもお思召さなかつたでムいませう、いゝえ私自身すら恁麼事を申上げるつもりはムいませんでしたもの、然し不穩當な、破壞的な文字を使ふのは今に始まつた事では無いのです、健實な思想をお持ち遊した、眞面目な方から御覽になりましたら定めし眉を顰められる事でムいませうけれど、夫を知つて書く、私は何て大膽者でせう。

私が處女としての最後の筆に今日は何事をも皆申上

げて仕舞はなければならない樣な氣がします、夫れ故お蔑みも返へり見ず、お笑ひも思はず、思ひ切つて筆を取りました、何者にも囚はれず、何物にも憚らず、私の主觀を其まゝ筆にするのもおそらく之が最後でムいませうから。

彼記念碑嚴な校門に袂をお別ち申した折には、私も恁麼女ではありませんでした、年毎に、月毎に、あらぬ方向に曲り行く私の性情はもう止めやうとて止まりません、墮力をかつて之から後も何處迄曲つて行きますやら、然し師の敎へを辱しめませんでした、親の名を傷けませんでした、私は之から後も私の良心のゆるす限りに於ては曲つて行くにも敢へてとがめやうとしないつもりです。

思へば思へば、如何なる場合にも冷然として保持して來た心操を投げ打つて、不孝の子と云ふ名から逃れた不甲斐なき、我身自らを嘲つて笑ふ冷笑を、お芽出度うとは何事でせう。

あさましき我此心自らを嘲り笑ふ我此心。

私の肉體は遂に私の靈の反謀者となりました、自ら自らの反謀者となつて私はまあ之から先を什うするつもりでムいませう、遣瀨なく心の苦悶を忘れやうと縁の柱に凭れると、入日は靜に西の隅から金箭を四方へ走らせて此世の果から果までを燒盡さでは止まじとの樣に輝いて居ます、凭うした場合には何時も好んで口荒れた夕陽の歌も今のいら〱した氣分にはそぐはないので、口を閉ぢたまゝ私は默想に耽りました、不圖しよんぼりとした自分の影が細長く縁側に印して居るのを見ると、無性に悲しくなつて冷たい涙が知らず知らず熱した頰をつたうのでした、其下から浮ぶ淋しい微笑みは矢張り自らを嘲る自棄の姿に外ならぬのです

M樣お笑ひ下さいませな、やがては來るべき運命と豫期しながらも今更の樣にうろたへ惑ふ私を、ですが然し別るゝ者に執着を持たぬものが世に幾人ムいませう、再び來らぬ春を送るとて涙する子を嘲笑ふ人あらば、それは人間普通の情を知らぬ人と云つてもいゝでせう。

兎に角私は人間一生の繪卷物に何色をか塗らうとて遂に繪筆を取つて立つ覺悟をいたしました、赤い靑い夫れは私の知つた事ではムいません、唯繪の具を與へらるゝまゝに！。

窮しても尙通ずる道が無ければ遂に愚痴も云ひたくなります。

長くとくだらない事を申上げましたねえ、御面倒でも仕舞ひまで御覧下さいませな。
末筆ながら皆様によろしく。

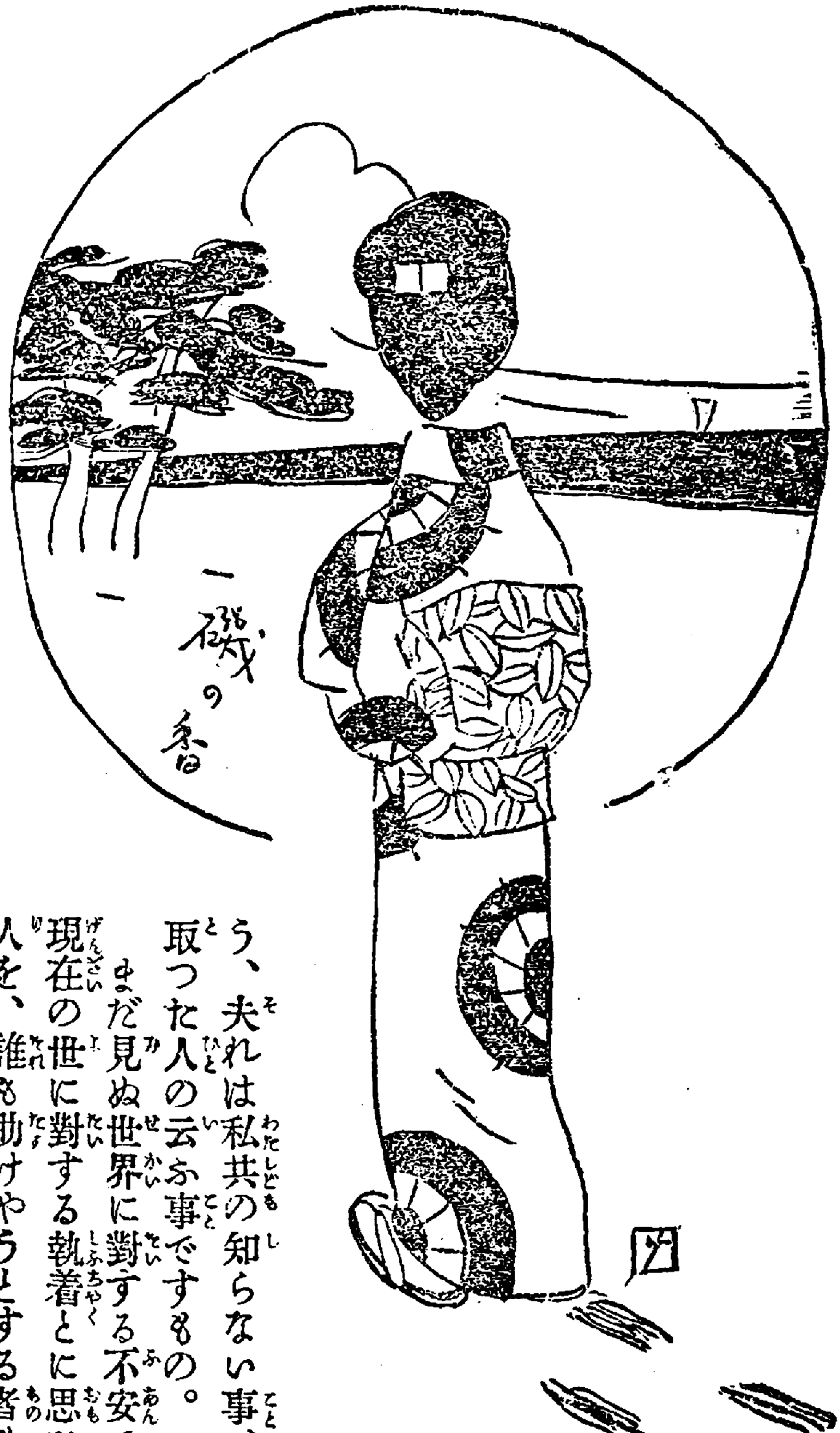
さらば

×月××日

M様お許に

H様前以つてお願ひして置きました悔狀をとうく頂く樣になりました、喜怒をも、哀樂をも、萬事を萬事を葬つて立つ勇氣が私に厶いませうか。

後から後からおされくて歩むともなく歩いて來た二十年の過去はまるで夢の樣でした、此道を眞すぐに辿つて果は什麼處へ出るのさう云ふ事も考へない中に不圖見ると、私は斷崖に立つて居ました、此處を飛び下りるのですつて、人間一生第一番に來るべき難所、其所を越して始めて完全な人間の資格がつくかの樣に人は云ひます、天にも地にも恥ぢなかつた之までの私の行爲をあくまでも純潔なるを矜つて居た私は、何故に完全な人間と云へなかつたのでせう、夫れは私共の知らない事、ずつと年取つた人の云ふ事ですもの。



まだ見ぬ世界に對する不安で、恐怖で現在の世に對する執着とに思ひ惑ふ女一人を、誰も助けやうとする者もなく皆面白さうに見て居ます。

人の世の掟と云ふものは凭うしたものでせうか、是非も厶いませぬ、子は親に從ふべきものだと云ひます、

然も〳〵一人子なるが故に、私は私の代りに奉るべき贄も持ちませぬ。

父や母の跡を踏んで、同じ様に老いて、又私の様な子が出來たなら、私は父や母の樣な態度を又くり返へすので厶いませう、思へば〳〵つまらないもので厶いますね、ノンセンス〳〵と叫んで私は目をつぶりました、何物をも放り出して淋しく歡念した、此私の態度を貴女はそちらから御察し下さいませな。

何だか腦が怪しく亂れて書けなくなりました、又此次にゆつくり申上げませうね、今日は之で筆を置きます。

さやうなら

×月××日

H様お前へに

若山牧水氏の

路上より

をり〳〵は見えずなれどもいつかまた巣に歸り居り軒の蜘蛛の子

芝居見て泣ける涙を人知れずぬぐはむとして身をはかなみぬ

山を拔く君がちからのおとろへかなざさ落ちゆく汝のひゞきか

山かげの小川の岸にのがれ來てさびしやひとり石投げあそぶ

あはれまたねむりたまふかたま〳〵に逢ふ夜はわきてみじかきものを

ふるさとの濱によるなる白なみの繪葉書をもてかへり來よといふ

山越えて入りし古驛の霧のおくに電燈見ゆ人の聲きこゆ

たひらなる武藏の國のふちにある夏の山邊へ汽車の近づく

あを草に降りくる露をなつかしみ大野に居れば圓き月出づ

別れたる女が縫ひしものなりき古き羽織を盜まれにけり

おもひいでゝ寢ぬ夜しもなきあはれさの二年を經てなほつゞくらむ

山あひの小さき停車場やゝしばし汽車のとまれば雲降り來る

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



癈兵院を訪ふ

みさを

いつの間に、廻りはてけむ時雨の雨の、紅葉そめざる山の端はなし。朝から、からりと晴れた好いお天氣之では紅葉もきつと美しからうと思つて、勇む心を押しつけながら用をして居る。ともう九時半、十時、大いそぎ電車にかけつける。乘る。水道橋の乘換場でなか〳〵來ない。十時、十一時。遲くなる〳〵と獨りで癇癪を起して居る。やつと乘る。

終點迄來ると、さも待ち兼たといふ樣な桃割の被布姿早くも見つけて莞爾。「お待ち遠樣」「貴女きつと遲いと思つて今來た許り！」オヤ〳〵心から待たせて氣の毒と思つて損してしまつた。

「夫はさうと、十一時はすぎてよ。光子さんはお待ち兼でせう。早く行きませう」とせき立てゝ白山の坂を上り吉田屋の前に來て見たが影も見えない。「まあ、如何してゐらつしやらないのでせうか」「あんまりねあんなに慥に行くと仰つたのに、構はない御內まで行きませうか」「でも何か御用でも……」「否、他所に行くならこつちに來ないつてひどいわいゝから押かけませう」

「さうね」と之も行く氣になつて青物市場の前る出る漬菜や大根の賣殘りが散つて鷄が遊んで居た淺嘉町から「薔薇新」の前迄來た。お國さん道を知つてるなんてきつと知らないのだと思つたから曲り橫町の處に來て、默つて先に步かせると、「ほんとにひどいわ」と言ひながらづん〳〵先に通りこす。私は曲つて澄まして行くと、あわてゝ追かけて來る。「私いやよ、貴女呼んで頂戴」といつて私は畑の前で、コスモスの枯れかゝつたのを無意味に眺めた。方寸社といふ瓦斯燈が靑い空をうつして居る。「御免下さい」まあ太い聲ねつと思はず獨り言してしまふ。暫くして「ゐらつしやらないのひどい」と言ふ聲。と桃割が顏出して、「今行くつて」「やめるつもりだつたの、惡かつてね。」格子の前の八ツ手の花が盛り。變な殼を冠つたのもある。木戸の陰から。にこ〳〵した幸ちやんの顏猫を大事さうに抱い

て來た。「猫？私に拜借な」猫は一つ睨めて手の中をすぽつとぬけて逃げてしまふ。追かけて捉まへる。又脱け出す。「駄目よお國さん、貴女が嫌なのだから」「嘘よ貴女が夏入らした時に一つぶつたの覺えて居るのよ」猫はとう／＼屋根の上に逃げてしまつた。「お待遠樣」三人そろつて出かける。曙町でお國さんは登志さんを誘ひに行た。私と光子さん「構はないからどん／＼行きませう」「此道を眞直行けばいゝのね」「巣鴨の病院も通り越して眞直ゆくのだと言つてよ」其間もどしどし歩く。時々後をむいては「まだ來ない。鈍い人」と繰り返す。いつの間にか停車場に來てしまつた。柵によつて暫も待つてる方々の樹は美しく染まつてしまつて線路側の家に赤い布を張つた板が並べてある。

「まだ來ないわ、もつと行きませう。何でも左側だとの事よ」砂のひどい事、埃がドッ／＼と立つ。

一町か二町來たと思ふと左に癈兵院入口といふ札「左を見ればすぐに紅葉の墜道だなんて、そんなら知らないで通りこしてしまふわね」と光子さん「眞實にね、それにしてもまだ來ないのね少し中に行つて見ませう」と道から見える處迄いつて切株に腰をかけて居る五分も立つたと思ふ頃、入口の方に二つの姿。「あ、入らしてよ、よかつたわ」と云ふ聲二人並んでやつて來る。大分對照がおもしろい。何方もソマトーゼの肥た方――いや然しあれ程ではないが少し誇張していふと――背高に背低なんて思つてると「まあ貴女方どんなに搜したか……もしか曙町で迷つてるんぢやないかと思つて」「まあ、あんまり馬鹿にしてるわ御心配下さつたのは有難いがまだそれ程箱入ではないのよ。東京中大凡は見當位存じて居ります」と言ひたかつたが、餘り眞面目に心配してねらして氣の毒で默つてしまつた。

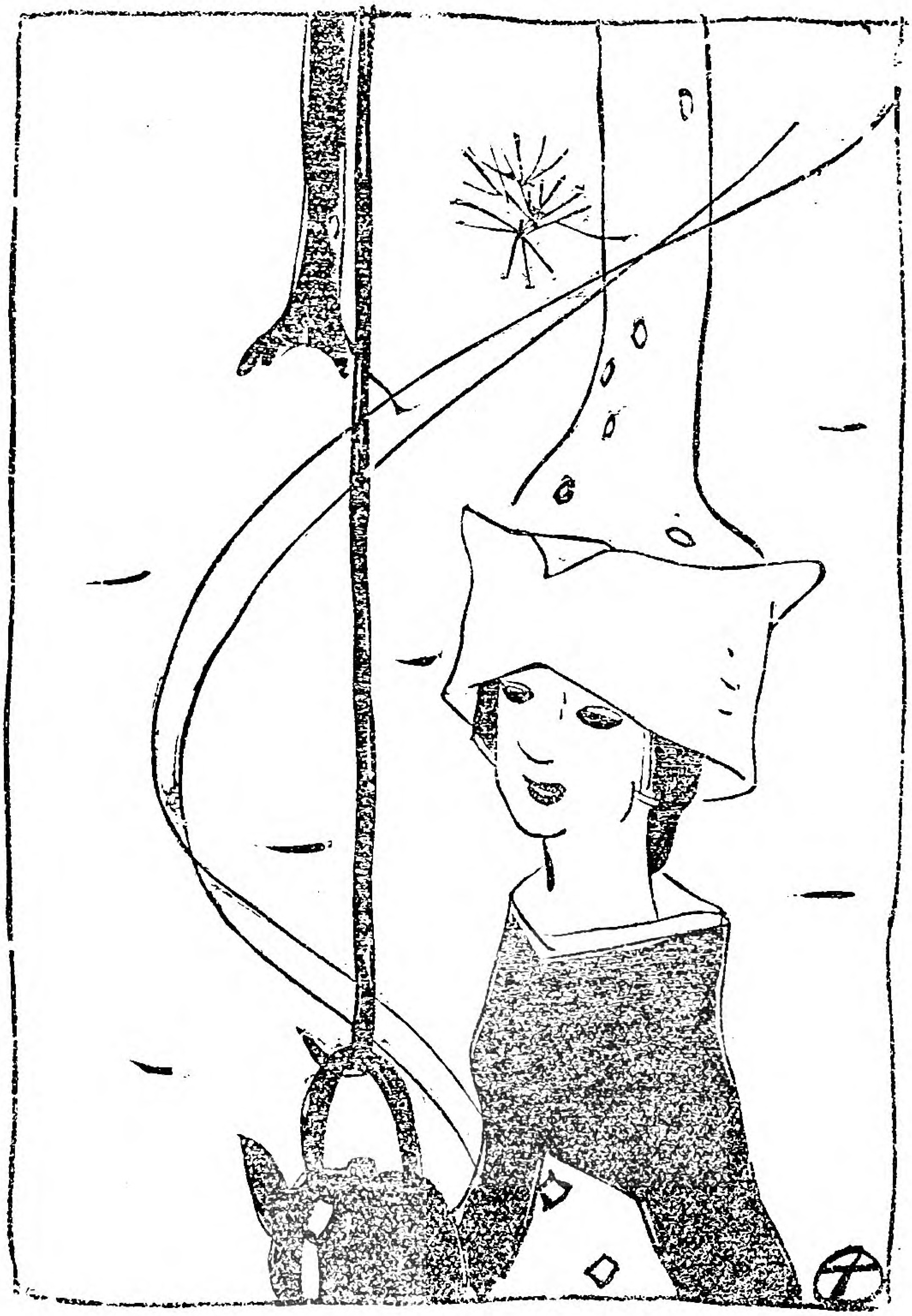
「貴女方御二人の例の御氣質、必ず先に入らしたとは思つたけれど……」私と光子さんとは顏見合して苦笑

「何しろもう揃つたからいゝわ、もうよしませう。いふのは。」柔順なしい登志樣の御說御尤。扨紅葉の墜道に差かゝつた。今年はいつもより色が惡くてよとの御說明、龍田姬樣少し筬の取り方が惡かつたと思ふ。行け共／＼紅葉又紅葉、自然の天蓋を差かけて吳れる樣だ、洋館の前に來た時先に行た國さんは玄關から招く

砂利を踏んで其處に行くと中を見せて貰ひませうねとの事ハイ／＼と應接室に這入る。小使が御茶をついで來て、食籠を眞中に出して行く。朱がゝつた、木彫の器、大層古雅を物であつた。蓋はしつかりしてある

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

見た處立派な上等の御菓子でも入れてありさうだ。何が這入つてるかしら中が見たいと此時四人の頭に一樣な感念があつたと思ふ。「あけて見せうか」一人が云ふ。御行儀の惡い御客樣、然しほんとに西洋間の殺風景な卓の外何一つ装飾のない室に、又かういふ癈兵院といふ場所に釣合はないので開けて見たいと思ふのは無理もない。時に足音高く入り來つた人。「や、よく入らつしやいました。こんな處で何も御座いませんが煎餅でもお上り



下さい、之は煎餅です。器許り立派ですが中は」といつて、いきなり蓋を取る。時も時。皆ドッと吹き出してしまつた。目鏡の紳士も「アハヽヽヽ」と高笑ひ。院内を案内して下さるとの事、其時軍曹位の人が一人來て居た。「君失敬だが一所に」と紳士が云ふと、「いや女の方とでは恐縮ですな」とついて來る。長い廊下、娛樂室にいつた時洋琴の音がして居た。中庭には恩賜の鶴兎が澤山ゐる事々。此時氣がついて見ると案內して下さる人も跛。いろ〳〵の話の摸樣で之も

癈兵となられた將校の一人であらう？磊落に種々の事を云つては笑ふ「癈兵もなかく馬鹿には出來ませんよ。今醫者の、試驗を前期も後期もうけて及第した者も居ます。中央大學に通つてる者も居ます之は左りで書いたのですよ」と指ざゝれた、書畵中には口で書いたといふのもある。嗚呼人間は窮境に陷れば何でも出來る。やらうと思つて出來ない事はないとつく〴〵思つた。とある室の前で之丈けが一人の手當でと云ふ。至れり。盡せり。煙草もある。切手や葉書の細い物から、毛布、蒲團、机、本箱、座蒲團、火鉢硯箱、卷紙實に何から何まで……一所に來た兵卒は座蒲團の上に坐つて見て「よん、なか〴〵暖かいな。此シヤツは私達の貰ふよりずつといゝや。地もよしね」「夫が上下で一圓三十五錢だもの」部屋は六疊で床の間押入れがあり爐迄切つてある。將校のは八疊六疊の二間。床も本式になつて居て全く立派である。手のない人と足の無い人と御互に足を貸して歩かす。煙草をつけてやる。涙がこぼれる樣だ。足のない人の運動する樣に自由に動く車が出來て居る。此人達は皆人民の爲めに、犧牲になつたのではないか。戰爭は平和の敵を思ふとなさけなくないてしまふ。いやに空が暗くなつて來た、そして風が吹出して來た。厚く御禮を云つて又トンネルの處に行く。小洞天とある門から池の邊に行く。島の上に竹の皮が二つ投げ出してあつた。何と云ふ公德心のない人達だらうと。いやあな感じがした。一枚〳〵見れば枯れた葉もある。さめた葉もある。遠くで見ると其美しさ。白服の癈兵が紅葉の落葉を焚いて居る。畑に、黃菊が二つ三つなよ〳〵と伏して居る。秋にふさはしい取合せだと思つて暫らくは其のゆる〳〵登つてゆく烟の行衞を見つめて居た。紅葉許りの中にたつた一本黃葉したもの銀杏かしらといふと光子さんが「否、かへでよ。きつと」傍にゆくとかへでだつた。色のよい葉を二三枚拾つて家づとに。さらば健在なれ。癈兵の君達よ。

東京

子規

車道狹く埃捲くなり夏柳

涼しさや上野の見ゆる町はづれ

日盛りや八百八町炎立つ

猶の塚お傳の塚や木立闇

草市の草のにほひや廣小路

不消化な料理を夏の祭かな

花あふひ上野の森は曇けり

椎の木の茂りてみえぬ上野かな

夏痩としもなき象の姿かな

吉原の火事うつる田や鳴く蛙

佐久の野

世良田優子

蕨やく…おゝもう山は蕨が出たのかしら、あの聲は確に翁の聲だ、よく達者でゐた事、何とはなし私は懐かしい氣分になつて眼を閉ぢるとあの時分の事が思ひ出されて其時分の心持になつて來る、そして此眸に寫つて來るのはあの佐久の平野と山と森とがかはるがはる浮き出て其背景に十五の私の姿が見出されて來る、此野、森、山には私の十五の時の夢の跡と足跡とが深く〳〵鮮明に印されてある、私の黒髪は丈に餘る程此綠の野で伸びたのだ、碧い空にすつと連なる綠の山その麓から切り開かれた佐久の原野、この野の端に街道が白く北と南へ連いて、夏などよく御嶽行者の白い着物を着けたのが杖ついてあつき〳〵通つた。

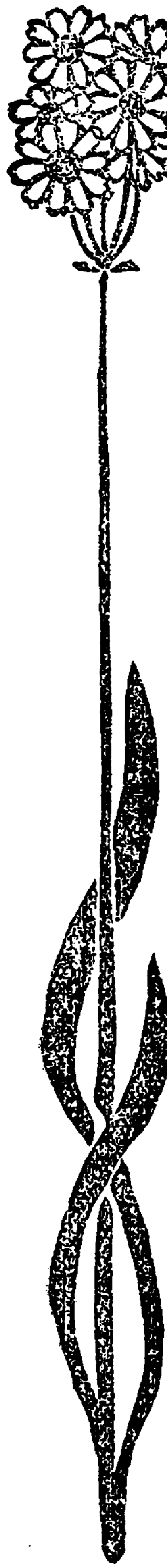
私はよく綠の野に寢にいつた、半里餘行くと望月の駒で有名な三牧が原が有る、此原青草の廣い〳〵原今は森林が立並んで行けども〳〵はてしなくうす暗い、シーンと靜まり反つた空氣はぞつと寒氣を催させる此森に淋しく鳴く鳥の音をわざ〳〵聞きに行つたこ

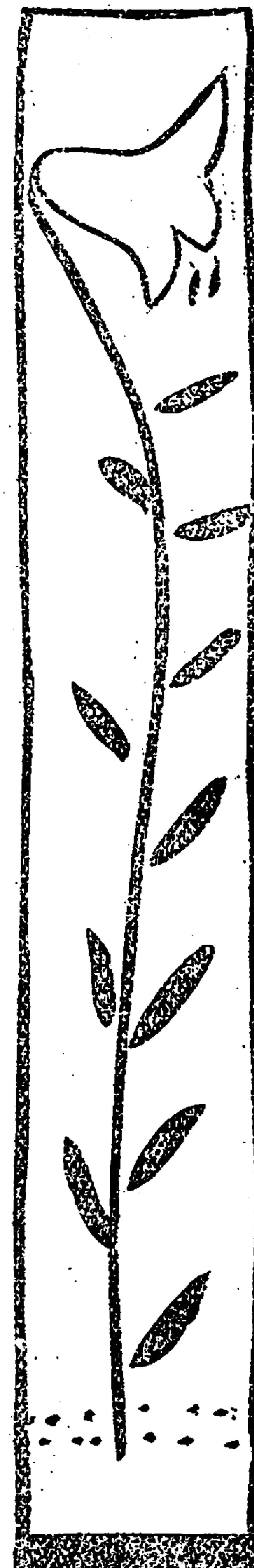
秋は此森の落葉がはげしいその落葉からプンーと初茸が香ふ、それをガサ〳〵取りに行つた。

かうして野に森に育つた私十五といへど髪上げる事も知らずに着物を短かく着て紅を帶を小さく貝の口にきちんとしめてゐた。けれど黒髪丈は房々と手に餘るので何時も母樣がとかして三つに編んで下げて下すつた、あゝけれど――けれど――自然の勢力は何時迄も此少女心を少女心では置かなかつた、やがて處女のライフに遷る時が來た、何時知らず、少女の心はキラキラ光る夏の砂ほてりする街道をゆく旅人の、その疲勞れた足を引づり〳〵行く後姿を見た時、その旅の寂しみ、悲哀の情を思ひやる樣になつた、そしていつか涙を誘ふ樣になつてしまつた、それからと云ふもの今迄に一度も味はつた事の無い一種の妙な何とも云ふ事の出來ない情が小さい胸を廻る樣になつた、そして母以上に友が欲しくなつて來た、今迄一人も友など無くても平氣だつた子がやたら淋しくなつて來た唯つた一人でよいから欲しいと痛切に思ふ樣になつたそれからはおとなしい母に從順だつた子は妙に心がいらだつて母にすねては心にも無い事云うては困らせたお前は妙な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

子になつたね此頃は母は私の顔を透かして見てはかう云はれる様になつた其時私は何か母に云はうとするけれど言葉を知らなかつた、自分で自分の心を解する事が出來なかつたのだ母様許して下さい背かないと思つても自然と、或物が來て背かせる様にさせます私は弱い〳〵子で御ざいますと暗やみの戸にしがみついて泣いた、全體私は此頃どうしたのだらうと自分で此心を捨てゐました、そして何處かへ此心を捨てゝしまつたらさぞ清々するだらう此淋しい物足りない心を早くどうにかしてしまひたいさうすれば再び母様にも從順な子になる事が出來るのだ。人の生涯に味はふべき事ながら始めて發した場合どうしてそれを知り得よう、野に生れて野に育つた此小女未だかつて小説一つ讀まなかつた子にどうして此心の狀態が計り知られやう、今迄何事もなく聞いた森の鳥の聲みどりの草に寢た夢はすつかり破られてしまつた、快活だつた子は何を見ても淋しい何を聞いても悲しい一寸の事にもやたら隱れては泣いた、眞實に刺戟の強い子になつてしまつたけれど今思つて見ればまだ〳〵可愛ゆかつた自分ながら‥‥矢張り短かい着物に細い帯で平氣であつたのだそして此心何物にも傷けられずに翌年は上田に來た、佐久の野は私にかうした情を始めて知らしめた第一歩として生涯わすれられない懐かしい思ひ出となつた、上田へ來てからは進んで小説もよみ多くの友と交る様になつた、そして始めて自分の心を解する事が出來る様になつた、と共に髪も美いに上げる事を覺え着物も裾長く着る様になつた、又それに伴なふ不安、自分で自分の責任をどこまでも負はなければならぬといふ事を痛切に感ずる様になつた、そして今は小さな花のゆらぎにも蟻のはふにも何物かそこから見出さう新らしい意味を探さうとして耐へず心をあせつてゐる、もう野に居た時の様なやたら悶える子でない――上田に來て二年は過ぎた――。





無名婦人傳

(一)父と夫の間に挾まれて恩愛に傷けざりし誠實なる文士の妻

壽賀子(京都)

婦人といへば今までに隨分多くの人にあらゆる階級の人、種々の人に接して來ました中に、もつとも感心した奧樣が御座います。

この方は京都文壇で以前多少名を出された××××さんの奧樣です。この奧樣の家と、私の家とは垣一重でした。よく少さい頃遊びに行く私にお離れの書齋でいろ〳〵のお話をしたり、可愛がつて下さいました。

お父樣は昔氣質のお醫者さんでした、たゞ一人つ子のことゝて、孃樣〳〵と育て上げられて、琴や何かと敎へられてゐられました。その頃から終日讀書にふけつてゐられることも御座いました、まだ何も知らぬ幼い私にいろ〳〵のことを敎へて下さいました。――ある時は月や星を仰いでお離れの緣で細い聲で讃美歌を歌つてゐらつしやいました。奧樣はその後同志社女學校を卒業して、三四年の後御養子として××さんをむかへられたのでした。その頃××さんは×××新聞社に出てゐられました、やさしい美くしい心の夫人は、よく良人につかへられました。さうしてスヰートなホームの人となつても、よく勉强してゐらつしやいました、間もなくお二人のお子供さんをもうけられました。

けれども幸福はいつまでもつゞきませんでした、昔氣質の父上には××さんはお氣に入りませんのでしたそれがため××さんは放蕩とか、收入が少ないとかいはれて離縁となりました、離れ難い袂を別ちて幾夜となく泣き明かし、幼ない二兒を見ては、行末を思ひては思ひ病ひ、それともなく父上を恨まれました。

夫人はかたいクリスチヤンでした、親のため離縁となれど心は變るまいと誓つて父上にやさしうつかへてはさとされました。良人の君にも幾度となく、去つた夫人の住居の邊をさまよつてゐられたことも御座いました、夫人を思はるゝ情を何かの雜誌に御書きになつた時も御座いました。何事も知らぬ門邊に遊ぶ二兒に美くしいおもちやを與へては去り「母ちやんに川村の伯父ちやんがよろしくといつておくれ」といつては淋しい横町にその姿の消ゆるのを幾度となく見ました。奥さんは一方父上の昔氣質のむづかしい上に、半身不隨の母上につかへ、二兒を抱いて尙勉學をつゞけてゐられました。

夫人の美くしい眞心でなだめらるゝ中に、父上も幾分かは理のわかる人となられました。さうして苦しい悲しい中に三とせをすぎました。

美くしい心の高い婦人はいろ〳〵と再縁をすゝめられました、けれども夫人は再縁するなれば獨立して二兒を立派に育て上るといつて通されました。

晝は一家の主婦として母として働き、一方家業の藥局を受持つて、一人の下女を使つてよく落度なく、夜は齒科醫學校に通つて專心に勉學遊ばされました「あれが××の孃さんか」と人にいはれても自分の風姿にもかまひませんでした。

さうする中に父樣も夫人の誠心にほだされ、つひに再び××さんの出入が許されました。

間もなく父上は急病にたふれました。夫人の誠もてさとさるゝ心に父上も逝く日の三日前に洗禮をうけて美くしい心の善人となつて安らかに眠られました。再び××さんは家に戻られました、父上なき後は一家の責任はつひに夫人の肩にかゝつて來ました、弱い女なれば自分の志す業も捨てゝしまひましたらうけれど、夫人は一家を理して、尙二兒の將來を案じて勉學をつづけられつゝあります。この間の幾年かの風波の中に夫人の專心の奮鬪は普通の男子はとても及びません。

一家の主婦としてまたかけたことも御座いません、良人の君にはやさしく、別々の姓を名のつてはゐられ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ますけれど、安らかに暮してゐられます。

半身不隨の母君を慰めらるる眞は他から見ても涙がこぼれる程やさしう御座います。

母君への孝養と、二兒の敎育と、良人へのつとめを全うして、一家をさゝへつつ尚勉學をつゞけらるゝ夫人の身には、やがてはいつか花咲く春もめぐり來ましやう。

美くしい夫人の心はいつまでも消えず香うでしやうことしはおはや三十二三にもおなり遊ばしたでせう、二人のお兒達は小學に通つてゐられます



母上の氣質をうけてまたどこまでもしつかりしてゐられます。

私はいつもこの夫人に逢ふ度に、いつもこの夫人のお心がけに敬服して居ります。

(二)世の荒波に揉まれ揉まれた七十九年間の經歴

曉　子（東京）

門外に大きな柳の木のある、黑塗の門に白壁をめぐらした奥深い邸宅に、祖母は、幸福にみちた七つまでの年を、華やかな夢のうらにすごしました。

二つ違ひの姉のおまきと、乳

房にすがる弟との三人姉弟。無口にして威嚴のある父と、優しうてゆきとゞいた母とのうちに、無邪氣に育つた幼子にも、父母の氣性は充分ふきこまれてゐました。かうした月日が永久に續いたのなら、祖母の一生は平和に終つたでせうけれど…。人間には見えぬ魔のひそみ！。父はふと床にたふれて、永くもない一と月の病に、疲れ細つて骨立つた手に、いとしい可憐兒のゆく末を指さしながら、祖母が七つの晩秋を、つひに果敢くなりました。人の出入りに兩手上げて喜こぶいたいけな末の子と強い悲しみに血の氣の失せた姉妹とをかゝへて、悲嘆に沈む母の心にも、あわて氣味はなかつたと云ひます。恰度三十の若い身を、一夜ぶつつり切つた黑髪を佛前にそなへて、老さき永い子等の先々をいのり、もち上つた離縁話をすつぱりとはねつけた

人には負けじの武士かたぎ、女手にはもちあまる手擴い交際にも、それ〴〵充分つけ屆けして、さて百ヶ日を終つた時、母の手に殘つたものは、三人の大切な遺兒と、賣り殘した日用具と、五拾圓のお金とでした。親身の少ない父の家には、これぞと云ふ相談相手もなく、たゞ、父の老父母の情に、おすきはその手にひきとられ、母子はその離家に住う身となりました幼子かゝへてのすゝぎ洗濯。乳房含んだまゝ、邪氣もなく寢いる顏みては、過去をしのび、未來を案じ、ふと、又現在に心がはしると、そつと起きて行燈のもとに、昔ならつた針の道、十二時まへに寢られた事などはないと云ひます。

義親とはいへ、父なきのちは母とは他人。父母の扱は、決してよくはありませんでした。

引き取つたまきには、これみよがしのなりふりさせて、子供心に見つめる、羨みの交つた眸をいじらしいとは云はでさもしいと云ふ。

チラリ〳〵とさす針の褥に、母は妹弟の愛兒を守つて五年、六年と、瘠せやつれつゝも、過しました。

祖母が十三の或る日、「あした清正公樣のお祭に、おれようも一緒につれてゆくから、支度してくるやうに。」と、いつにないめづらしい言づてに、祖母の心はをどり立ちました。「いゝ子だから、今日は耳が痛くていけませんから、と、おことわりしておいで、ゆきたからうけれど……よ。」何から何まで、思ひとゞいた母のやはらかいさとしにも、ほろ〳〵と泪こぼしたきり、うつむいて返事ができませんでした。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

今思へば罪深い、どうしてあんなにわからなかつたんだらう。と、祖母はよく私の母に、私は母からきゝました。その時、じつと見てゐた祖母の母は、「お前はそんなにゆきたいかへ?。行きたからうねえ。子供だもの。」と。やがて、コソ〳〵、ふろしき包をかゝへて外へゆかれましたが、その夜はてつ夜で衣縫ふて、あくる日云はれた時間までには、雨しぼりの絹ちゞみの袷と、紅に白くおかめを染めぬいた帯とが、お良のまへにはこばれました。刹那、ハツとして幼ない心にも氣づきました。とんでもない、私がむりを云つたばかりに、かうした心配を母にかけた。すみませぬ、と、心に詫びて、その日、きつと、決心したのが御奉公と云ふ事でした。私が一人居なかつたら、母の心も少しはかるからう。母さへよければ、私はたかゞ女の身、幸一さへ出世してくれたら…。と、ニツコリ、ある日母の前に手をつかへて、願ひとお詫とを一しよにしました。じつとして聞いてゐた氣強い母も、女心につひ抱きしめて、「あゝあ、世が惡い、人が惡い、父様さへ御存世なれば、まさか、こんな事にまで氣はつきもしまいに。けれ共まだお前は小さい。それはよく又、私からおぢい様にお話しておきませう。」と、おつしやつてから三年目、おぢい様のお世話で、初めて御殿に上りました。



小さい指にかぞへて待つた弟の年が、やつと學齢にたつした頃、祖母は高島田に緋のふり長く、靜やかな奥づとめに餘念ありませんでした。

半衿の紅がだん〳〵とうすらいだ二十一の年。どこまでも祖母は不幸な人でした。淸淨無垢の初縁を、姉のあとの、しかもまゝ子の三人もある、義兄の妻になほらなければなりませんでした。失せた姉のあとを、てころよくひきうけて、乳ばなれしたばかりの末の子を五つまで育てた時、初めて男子を生みました。

それから、女、男と、合せて八人の母となつて、眼の悪い姉と、意地の悪い妹との、二人の小姑に仕へる身は、二六時中苦勞がたえませんでした。

明治十年、馬喰町に移つて間もなく全燒けになり、つゞいて總領の兄が脚氣衝心で倒れました。

それから末の女の子がなくなる、力落しのあまり、良人はまた、最愛兒のあとを追ひました。

重ね〴〵の不幸つゞきのうちに、年月はゑんりよなく明け暮れして、祖母が五十二の夏、又もや二男が死にました。嫁けた四人の娘はのけて、その時家には、死んだ息子と妻と、末の弟と、昔乍らの小姑だけでした。妻は末期の離縁して、家事はすべて、若い末子にまかせて、祖母は再びのぞまるゝまゝに、元の御殿に上りました、それから今に二十餘年。

神も、あまり祖母には辛うでざいました。

十年まへの夏半ば、大森沿岸の荒くもない波は、泳ぎに名を得た末の子の身體を、うばつていつてしまつたもの。祖母の家には男氣がたえました。いくら強くても女の事、氣の狂はないのがふしぎでした。

それから後の祖母は、あゝ、思ふさへいたはしい。口には出さねど烈しい苦闘と悲恨とに、なやみやつれた生の形骸、心をたゞ、家運再興にかたむけて、今年十七になる末子の遺兒と、不縁になつた娘の一人とをかぼそい腕で養なつて、細々乍ら田沼家はたつてゐる祖母は今年七十九歳。

それでまだ、安心を、得られないのです。

(三)眞情より繼子を愛し、繼母を慕ふ美しき一家族

松亜紫花(徳島)

私の父の生家の伯父の家では伯母が早く亡くなつたので、伯父は再び伯母を迎へました。その二度目の伯母といふのは、私の母の妹、即ち私の眞實の伯母なのでございます、伯母は名を繁子と申しました、當時伯父は四十、伯母が二十位であつたのでございます。そ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れに以前の伯母の殘した二人の男の子は兄が九つ、弟が三つ位でございました、其内伯母にも一人の女の子が生れました、然し伯母は三人の子を少しも區別はつけず隔ても置ず皆一様にいたはり育てなしたので、彼の世にいふ繼子根性などいふ淺間しい空氣は少しもございませんでした。そしてそれは決して世間へ對しての體裁ではない、それが伯母の眞の行爲、即伯母の眞情でございました、遲く生れた私などは二人の從兄も矢張伯母の實の子と計り思ひ込んで居ました否、私どころではない現在娘の從姉さへも二人の兄を腹異ひである事を久しく知らなかつたと申してゐました。



私は今まで數多い世の繼母繼子を見渡した中でもこの伯母程繼子を眞實に愛し、又繼子の母に焦れ慕ふ有様は曾つて見受けません、それ計り

でなく、伯母は姪の私にまで何くれとなく心をかけて呉れました事實の數々は決して筆にもつくせません、十四で母を失つた其後の私といふものは、着類一切から髪飾までも何一つ伯母の情に據らないものはございません。世の中に母のない娘ほどみぢめなものはございませんが、私は幸ひ深切なこの伯母がございましたので、二八の春、二九の秋も身分相當のものを身につけて、二度とは來らぬ妙齢の花の春を華やかに送る事が出來ました。花ならば蕾の私を殘して死んだ母も此の伯母がある事を思つて幾分か冥し安かつた事と思ひます、私は母の墓參をする度に伯母の厚意を墓につげて、せめては靈魂の慰めとするのでございます。

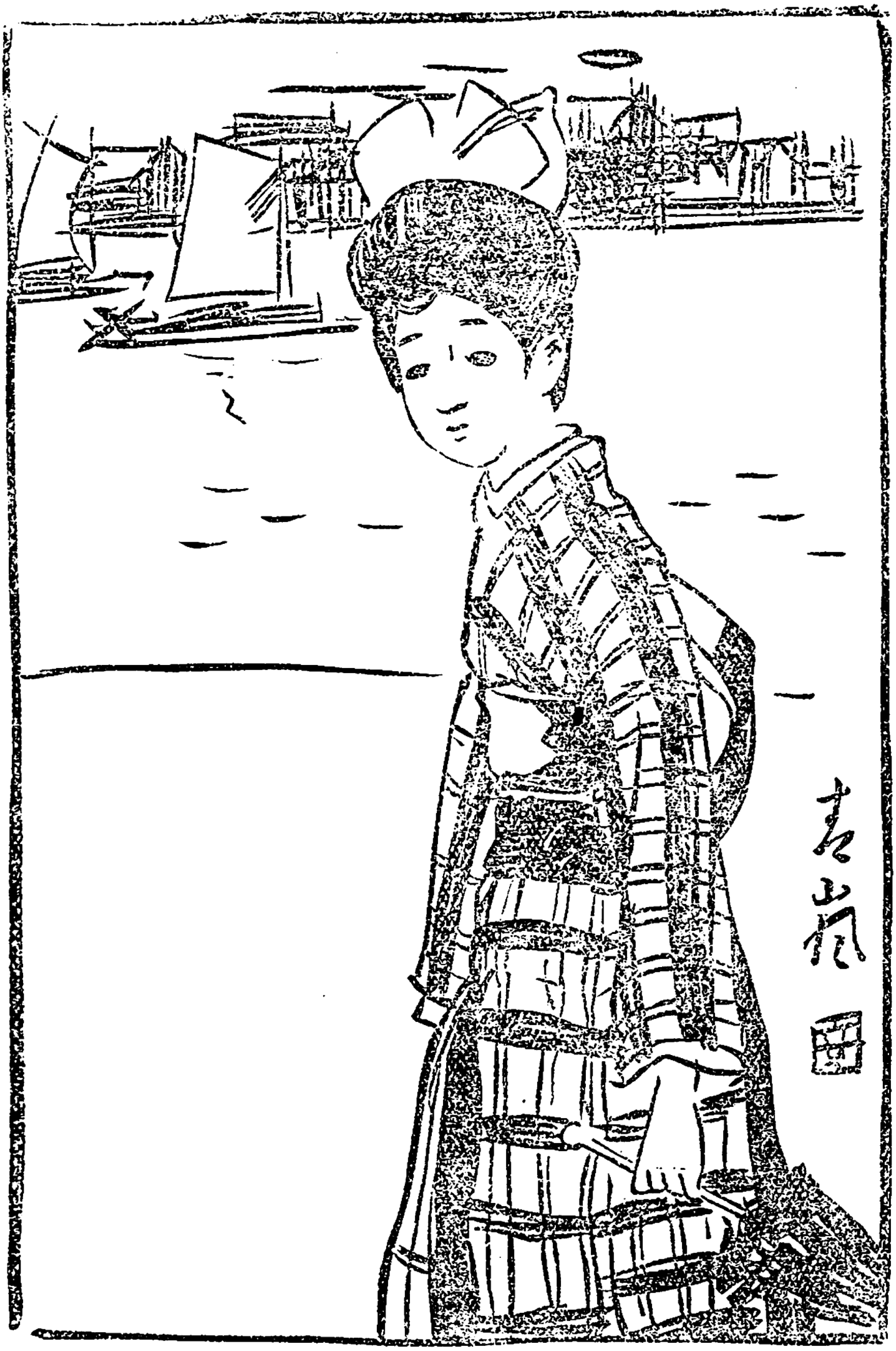
其後醫學校へいつてゐた私の兄が病氣で岡山病院へ入院した時には、田舎に生れて汽車にも汽船にもあまりのつた事のない伯母は、德島から岡山まで只一人で介抱にいつてくれました。そして兄は伯母の行くのを待ち兼ねた樣に、伯母が行くと間もなく、伯母の膝に成功の日を思つては幾度かさすつた希望の腕を投げかけたまゝ安らかに永眠しました、狹い、小さいながらも情あつい伯母の膝を、兄は故郷の德島と思つて死んだのでございませう。又私どもゝ兄の死を悼む中にも、せめて伯母が行つてゐてくれたので幾分か思ひ開くのでございました。

伯母が入嫁後十年程すると從兄に嫁樣を迎へました伯母は三十で早姑となりました、丁度姉妹の樣な嫁と姑との親密な美しい間柄は又他人の羨むところでございました。尤も嫁なる從姉も大變心がけの好い人でございましたので、所謂兩々相俟つて一言の小言、一片の不平も起りません、私などは始終參つて居りましても、どちらのかげ口をどちらからも聞いた事はございません、（お母樣が若いのが妾は何より幸福ですのよ）とは從姉が私に、（今の内姉と精出して置いて年が寄つたら二人がはう〴〵へお參詣に行くつもりよ）、とは伯母が私に、この位が互のかげ口なんでございます總て從姉には、女の子が出來ました、世の婦人達の中には三十やなんぞで祖母樣など云はれるのを恥か何かの樣に云ふ人がございますが、伯母は少しもそんなそぶりはなく、むしろそれを得がたい幸福として祖母さん祖母さんと呼れて喜んでゐました。

然し伯母は其の幼い時から手しほにかけて育て上げ殘る半生の安樂の全部を托してゐた總領の從兄は日露の戰役の時國難に殉じたのでございます。其戰死の報

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の達する四五日前夜、滅多に夢を見ぬといふ伯母がふと夢を見た、それは伯母が非常な熱病を病んで悶絶してゐると從兄が母樣〱氷上るよ、氷――さア氷、早う、手が千切れる樣なと手の中の氷を左に移し右にうつしニコニコと持つて來て呉れたので喜んで急ぐ口に入れると



なぜか一向冷つていてとはなくて、反つて古綿をかむ樣なので、あわてゝ吐き出したと思つたら儚ない夢であつた。激烈しい沙河の會戰に四十三聯隊の旗手として、敵彈の的に立つ雄々しい子の譽を願ふ思ひ寢の夢であつたのでございます。やがて間もなくその戰死の報に接したのでございます、千里異域の戰場に家を

忘れ身を忘れて戰ふ忠魂義膽の魂は、暫故鄕の母の胸に歸つて來たのではあるまいか、それが生の親子でないだけにかへつて聞くものは涙がこぼれます。

伯母は不幸にも其後三年にして又々やさしい嫁に死なれました、母が若いからと喜んで、今に共々年寄になつたら手を引いて遊びに行かうと云ひ交してゐた嫁は宿痾起たず、只一人の忘れ形見を祖母の手に托して逝つて仕舞ひました、當時十歲にも足らぬ可憐の孤兒の堯子は情あつい祖母樣の手によつて、今年は早二八の少女となりました。

それから伯母にはまだ重荷がある、それは伯母の家と二三丁程隔つた所に三十餘戶程の新平民の部落がある、其の部落の女達と伯母とは最とも親密の間柄でございました。親密などいふと妙で可笑いけれど、つまり彼等の仲間に何事が起つても大抵の事は伯母に決斷をつけて貰ひに來る、親子の爭論を始めとして夫婦喧嘩、隣家との仲違ひ、親類との不通、金錢貸借の事から出稼の事に至るまで、夜に日に次いで間斷なく起る事件の悉くを殘らず訴へて來る、その累らはしい事件を伯母は一々氣長く聞きとつて、懇切に理非を說いて慰めてかへすのでした。其間には古着の無心、味噌醬油梅干などを貰ひに來る、それを一々同情すべき境遇のものにはそれ相當に親切に與へてゐました。

或時丁度私が行つてゐる時でした、矢張り新平民の常から特に情をかけてゐる女が双兒を生んだといふのを聞くと、伯母は竈の火を私に托して置いてそつと產婦を見舞ひに行つた、やがて歸つて來た伯母に私が產婦も子供二人も共に無事ですか、と尋ねると、伯母はうなづいて、マア〳〵育つ時にはあれでも育つものか一人產んでさへ手がはりがないでは困るのに二人も生んでどうしてゐるかと思つて見に行つたら、寒中に赤ん坊二ッ座板の隅にころがして、自分はゆふべ產した今朝、早起きて火を焚いてゐた。マア〳〵それがどうなるぞと產後の養生の大切な事を話して歸つて來たといはれたが、奧へはひつて何かしてゐると思つたら小さい衣類の古着を二ッ三ッとボロの布などを風呂敷に包んで、竹の皮に味噌を包んだのまで添へて又持つてゆきました。その產婦は常々非常な吃で、何か感情の烈しい場合には全く言葉が出なくなる、此時にも只嬉しさのあまり舌は動かず、奧ッ奧ッ奧ッ――樣と云ふ計り、泣き入るので、產後に上氣せてはと思つて、エーエー〳〵解つた〳〵、と云ひ殘して歸つて來たさうで

す、世の虚榮に魅られたる輩の僞善を辱とせざるに思ひくらべては、潔き伯母の面影を仰ぎ見て、益々額は垂るゝのでございます。

それは是程情深い、天の女神の化身の様な伯母にして、滅多に涙を出さぬ事は寧不思議の一つでございます

實に若い時から血縁に、家族に、幾多の人々に死に別れ〱た伯母は遂に只一人腹を痛めた娘までも花の盛りの十九の年に先だつたのでございました、其時にも伯母は、あの娘の死んだのは惨いけれど、まだ兄が二人もあるから心細い事はないといつて決して泣きませんでした。從兄の戰死は其後の事でございましたが、娘の時に涙一滴こぼさなかつた伯母は從兄の戰死の時計りに泣いた、然しそれは美しい〱嬉し涙なのでございます。之程眞心の美しい伯母の性にして、斯く涙にかたいところが、即ち人にゆづらぬ動かすべからざる伯母の性格でした萬一悟りの惡い人であつて、ヤレ一人娘が死んだと云つては泣き暮し、息子が戰死した、引續いて嫁も死んだ、年寄つて孫の世話をせねばならんと云ふ樣



に、乞食が礫で粉を振りまいた時の樣に悔みたふれるのであつたなら、誠に不幸續きの伯父の家は、遂に愁雲軒低うめぐつて、忌中日に雨降る樣なみぢめな家庭になり終つたでございませうが、幸にも、花も實もある伯母であつたために、伯父は左の手に藥匙を握り、右の手に教鞭を採り、左右共に全きを得て四十餘年をその村の學校にのみ育英の功を積んで今年七十の高齡を迎へ老いて益々健全であるのです。

伯母も早五十の夏となりました。

伯母の生涯を思ひますと丁度芥子の花の樣な感じがいたします、その花盛りは實に儚ない短かいもろいものでございましたが、その脆く花瓣の散つたのは決して無意味ではございませんでした、軈て其の後には美しい美しい千萬無數の種子を結びました。

幼少の頃には火箸と仇名される樣に細く瘦せてゐた伯母は、あれやこれやと勞苦を厭はず體をつかつた適宜の運動と、丈夫も及ばぬ大悟の心――、安心立命の精神の慰安とによつて生れ變つた樣な健康體となりました。

伯母の長壽を眞情から祈つてゐるものは少なくはございません、まだ〲餘命長き伯母は此後尙つらき人々のために溫い情に美しい歷史を山と重ねる事でございませう。只々伯母の尊き美しき花輪の樣な生涯の事蹟のみ多くて、私の筆のあまりに拙なきをうらむのでございます。

(四)孝貞二つの道を全うしたる武士道の權化妹尾みね子刀自

重村百合子（東京）

刀自は舊因幡藩士妹尾家に生る、幼い時から聰明で非常に學問がすきであつた。父君は武人の典型として仰がれた方であつた。深く刀自の才智に望みを囑し教育に心を盡された。かやうな賢父の教育を受け、俊傑市井に充ちて大義を唱ふる維新前の空氣に成長した刀自の、孝貞の精神を全うしたのは決して怪しむに足らぬのである。

刀自十八歲の時、かねて約婚であつた同藩士垂水某の息と華燭の典を擧げた。しかも其夜！最も幸福に充ち充てる其夜、刀自の一生をして多恨ならしむべき悲劇が起らうとは神ならぬ身の知るよしもなかつた。目出度輿入濟んで歡聲は家の內外に滿つる時、突如とし

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てさわがしい聲が起つた、抑何が起つたのであらう？と人々の眉を顰めると同時に新婦たる刀自は父君に連れられて生家へ歸つた、人々は驚き呆れて言葉も出ない…其中に甲から乙、乙から丙に傳へられた譯はかうである、式中新郎の歌ふべき謠曲を、熱狂な因幡人の通弊加ふるに世は亂れ天地暗澹として風雲急なる時！志士は東奔西走して一般の士氣は立つてゐる、況んや血氣に充てる青年氣躍り血湧く今日、此の祝宴、勃勃たる意氣を抑へる事ができず勇壯な詩に代て歌つた醉ひても益々禮儀正しき父君は忽ち色を作して『かやうな不作法な禮も辨へぬ者に我最愛の娘は與へる事は出來ない』と言ひ張つて百方あやまる人を押しのけて娘を連れて歸つたのである。其後もいろ／＼とあやまり、又宥める人もあつたが、武士の一言は金鐵より重う御座る。の一點張りで多年の赤繩全く絶えた、ア、刀自の心はどんなであつたゞらう。しかも刀自は決して女々しい振舞はしない、謹しんで父君の命に從ひ學問に餘念のない樣は以前と少しも變らなかつた、けれども心には一度定められた以上、わが夫は彼の君の他にはない、しかし一旦の誤りから父君の御心に反して仕舞つた人。父の心に背いて夫とすることは決して出來ない。孝貞の人となるには生涯を獨身で送らうと堅く決心し、以後良緣があると勸められても堅く斷つて同市淳風小學校の教師となり傍ら漢學を教授した。其後神戸に遊學し學成りて鄕里にかへり間もなく岩見郡浦富村小學校に又教鞭を取つた。金錢に恬淡な刀自は俸給などに目をかけない、當時僅六圓の俸給！食客は常に二三人あつて此上刀自は劇しい神經痛に罹つたので生活はたとへ方なく苦しい。後年人に語つて曰く『彼の時は實に困りましたよ』と！生來如何な病氣にかゝつても、又どんな困難が迫つても、苦しい顏を一度もしなかつた刀自の此言は、どんなにくるしんだか當時の有樣を想像する事が出來るであらう。

其後但馬國美方郡八田村から熱望されて裁縫教師として赴任したが、實は職員に漢學を教授してもらうことであつた。此頃刀自の病氣は益々重つてきたが不撓不屈刀自はどんなに長い時間も倦む事なく、苦痛を忍んで深切に敎へられたので、德を慕つてくる人は益々多くなつた。又同地方は非常に風儀がわるく、殊に青年はたとへ方のない程であつた。それを深くなげいて自ら青年會長として改善に力を盡し、後には模範村となつた。其の苦心そもどんなであつたゞらう、無智

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

蒙昧な彼等はどうして女の言に從はう、中には危害を加へる者さへあつた、それが生佛として尊敬され、病氣等の時は晝間の疲れも忘れて終夜看護に心を盡す樣になつたのは、大なる誠の力である。刀自は又非常に慈善の志の厚い方で、貧しい者、病める者のあるを聞くと、五里六里の道を厭はず、又どんな山の中でも行つて惠んだ。其の爲めにいつも自分は髪は引きしめて竹切を削つてかんざしとし、衣服は破れたのを繼いだりはいだりして着てゐるといふ風に、勿體ない程節約してゐた。

刀自は一見貧家の婦の樣な風をして居たが、頗る威嚴のある風貌で、どんな傲慢な人も、自然頭が下り、又口元には一種の愛を湛へ、いかな惡人も自然感化されて善人となると云ふ風であつた。

特に記すべきは夫君の其後である。一旦の過ちから幸多かるべき人の一生を不幸ならしめた事を深く悔ひ、自分も一生妻は持たぬと誓つて、七年間女に接しなかつた。後一家を作るにあたつて、始めて妾をおき一男一女を擧げて夭死した。其處で刀自は二子を夫君として育て、一女は嫁ぎ、一男は朝鮮に官吏となつて居る、其の子女四人を手許において奈良の地に靜に餘生を送つて居られる。年は七十幾歲。

昨年三月。八田村に永く厚き御恩を傳へようと弟子一同紀念碑を建てた。

（五）氣の弱い母と無慈悲な親類の爲に奉公に出された下女おまつ

のぶ子（大和）

おまつは今年二十四になりました。おまつの家はおまつが十歲の頃までは、可成暮らしてゐたのださうです。所がおまつの父といふのが、病氣勝であつたものだから、父が死ぬと間もなく、門構の家も破されて了つたさうです。おまつの母はおまつを私の村の寺へ子守にやつて、弟を抱へてその家の小屋に棲んで居つたのだといひます。おまつの母は、極内氣な弱い女で夫が死んで了ふと、家の處置などについては、まるで親類の人の成す儘になつてゐたさうです。

「お豐さんは、辨吉とあの小屋へ這入んなせれ。ほておまつは子守にでもやつて――一先そうやつて暮してみることぢや。」

人の良くない遠縁の四十男がかう云つた時も、母は默つてゐた。おまつの叔母さんもあまりやさしい人でないのだらうです。叔父さんは又温良なしい人だと云ひます。

「おぢさんがも一寸しい、い、つかりしてゐてくれましたら、どうにか成りましたのでございましやう…その時お母さんも遠慮せずに、云ふてくれましたら——ほんとに、お母んも叔父さんも氣が良すぎますで…」

おまつはかう云ふて涙ぐみます。

おまつが十四五の時、齒が非常く痛みだして、それが妙な工合になつた、醫師に治療してもらふやうになつたのださうです。それで一時、小屋の家に歸つてきたと云つてゐます。

「其時こゝがこねんなりましたので。」

と云つて、頰の下の凹んだ所をなせました。

おまつの顔は見よくはありませぬ。

おまつは、夜など一人で泣いてゐるとがあります。何故だと聞ても、何んでもないと云ふて何にも云ひませぬ。おまつはほんとに、涙弱い女です。一寸した事でも、すぐ涙をこぼします。

此頃おまつはこんなことを云つて泣きました。

「い、い、おとつさんが死にましてから、もう十四年程にもなりますが、まだ石碑一つ立てゝないのでございます。來年は丁度十五年になりますから、どうかして小さいもんでも立てたいと思つてますのでございますが…」

お婆さんがこれを聞いて、

「弟も大分大きくなつたから、給金も這入るだらうし。」と云ひました時、おまつはすぐかう云ひました。

「辨なんか、何にもなりまへん。」

おまつの母は四五年前に、叔父さんの家へ引き取られて、辨吉は奉公するし、おまつは私の家へ來ることになりました。そして毎年一二度づゝ、二人して母の養料を、叔父さんの家へ送つてゐるさうです。

所が叔母さんは、よぼ〳〵したおまつの母を、よく取扱はんさうです。それでおまつは、いつもそれを云ふては泣きます。「お母んも年を老つてからいろ〳〵と苦勞します。」おまつは口癖のやうに、かう云ふのです叔父さんの事を賞める事がありますが、叔母さんはいい人だと云つた事はありませぬ。

おまつは此間も、かう云ふて泣きました。

「實家はありませんし、叔母といふても、あんな人だつさかい、便りにする人は誰れもありまへん、叔父さ

んはあつても、男の事だすから、ほんまに私、つまりまへん。」

おまつは、しばらく默然つてゐましたが、

「これから、給金を貯めて、一枚でも多く着物を作らへて、お嫁に行く用意をしなけりやなりまへん。私ももう今年二十四になりました。もうう か〲してたら三十になりまんが、私等の事を思ひますとお孃さんなんか、まだほんの赤ちやんでございますわねヽ。」

から云ふて又淋しく笑ふのでした。

靜枝さん

美鈴

靜枝さんの生れた家は土地十里内でも名代の舊家であつた。白楊樺等の植ゑられた稍高い岡を背にして、建て連ねた白壁の土藏と晝も薄暗い程廣い母家は、道行く人も目を見張つて見たものであつた。

下男下女合せて二十何人といふ多數の人の中に育つた所謂箱入娘で名前を知つてゐる人はなかつた。

土用干の時などは孃さんの衣裳は廣い外庭に、赤に青紫に光つて、見に來る人々はお祭り騷であつた。

孃さんは斯の樣にして幸福な月日を送つた。

二十歳の年、綿帽子の羞かしい姿は同じ國の資產家に嫁入つた。靜枝さんは美しい女だつた。

郎君の資產蕩盡姑の壓迫のみならず實家までもその餘波は脫し得ず、悲痛な狀に白壁は取碎されて只二三のみ殘れた、廣い屋敷の後は大根などがまかれて白い花をつける。嫁入つて六年、郎君の死は妻としての悲しき幕はとぢられたが、寡居の悲しみと肺病は新しく身を苦しめた。實家に歸つた身は老父母の親しき介抱に暫くさゝへたが、日露の役に二つ上なる兄の戰死の電報の來た日の午後四時喀血と共に命終つた。兄は陸軍大尉遺骨に依つて葬式されたる日は丁度、七七の日であつた。

後二年、葬の日、白衣に稚兒髷のよく似た十二の少女、位牌持つた可憐の妹は京の名所に舞ひ袖長々と榮華の日覺えたそれに助けられて、昔を偲ぶ舞扇に泣く身となつた。

無名婦人傳原稿募集　無名婦人傳は每號掲載するを以て、廣く世間の隱れたる婦人の略傳逸話の投稿を希望す（每月十五日締切、振假名つき百行まで、報酬五圓乃至一圓呈上）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



見立祝ひ

前島優梨子

拜啓來る十八日長女艶子結婚見立祝ひとして粗酒進呈仕り度候間御足勞樣乍當日午前十時御光來被下度奉待上候　敬具

三月　森山榮一

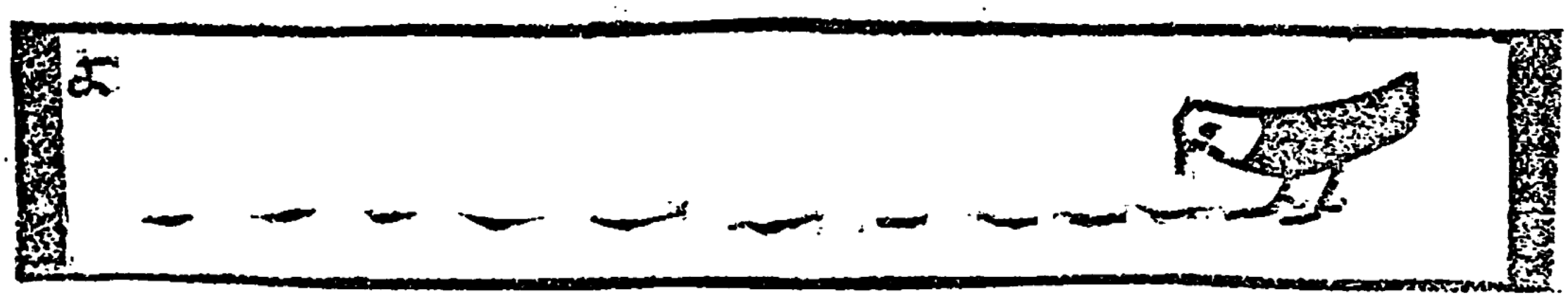
大西千代子樣

天井にガラスの明り窓がとつてある明るい中帳場で、字の上手い番頭の淸吉が、大奉書を四ッ切りにした紙へ落着きのある堅固した字で斯う書いて、白い大きな封筒へ入れて丁寧に上書きをしたそして傍にある名前の拔き書きらしい小さな紙へ鳥渡記をつけると、すぐまた次の紙へ同じ事を書いては、別な人の名を書き〳〵して、もう幾枚も〳〵書いた。

お艶はそれを先刻から呆然と、左手をついてだれた樣な恰好をして見て居た。

何だか自分とは別に關係のない事の樣な氣がして居た。けれど××田鶴子樣、××春子樣、などと大きく書かれた友達の名を見ると、急に忘れた事を思ひ出した樣に胸が波立つた、そしてもう其間に一寸の隙もなく、すぐ立派な結納や幾重ねかの紋付や派手な裲襠を思ひ出して、そつと莞爾した。

ゆとりのある大きな家に我儘に育つた未だ十七のお艶には、恁麼事より外何も考へる事がなかつた。



東京の大きな乾物屋、お艶に其家へお客に招ばれて行く樣な氣がして居る。

「お艶さん、あのお內儀さんが呼んでお居でになりますよ」と奥の用たしをして來たらしい小僧の信治が店へ來しなに黄色い大きな聲で云つた。

「さう」と、お艶はとび上つた上調子な返事をすると一緒に、ぐいと立ち上つて、あわたゞしさうに奥へ驅けて行つた。そして茶の間と座敷の間の腰高な障子を遠慮なくぐいと明けながら、

「何ですの母さん？」と甘える樣な聲で云つた、そして鳥渡きまり惡さうに顔を赤くした。座敷にはいつも來る大金の正さんが澤山な半襟を廣げて居た。

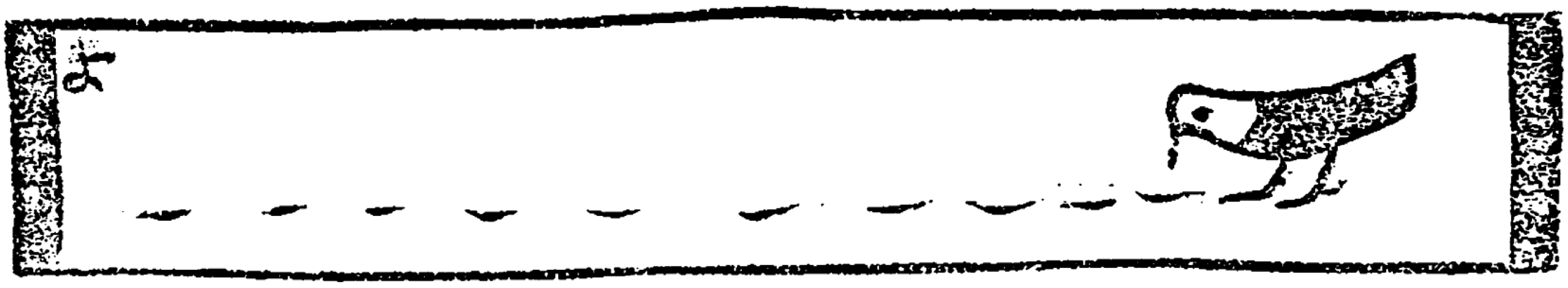
「鳥渡來て御らん、お前まだあの板締めのも友禪縮緬の一つの方のも半襟がかゝつて居ないぢやないの？　眞實に母さんが氣づいてやらなければ鳥渡も氣にしないんだもの」と母のお奈津は奇麗な半襟を引繰り返しながら、小言がましさうに云つた。けれど何處にか、もう可愛くて堪らない樣な心持があり〳〵と見えて居た。

正さんはお艶の顔を見ると鳥渡會釋して默つて笑つて居た。

「どれでも好う御座んすわ、母さんのお氣に入つたので」とお艶は矢張甘える樣な小さい聲で、斯う云ひながら、お奈津の傍へ摺り寄る樣に坐つて、それでも好いのを見つけ樣とするらしく、あち此方と引繰り返して見た。そして三筋ばかり紫つぽい派手なのを取つて、お世辭の好い正さんを歸した。

中帳場の清吉は其間に四十ばかりの招待狀を皆書いて終つた。書き好ささうな細筆をカチリと大きな硯箱の中へ投げる樣に置くとほつとして、少しの間左手に崩れかゝつた樣に重ねてある澤山な封筒の上書きの字を見るともなく昵と見詰めて居た。そして上のから順に皆拔き書きの名前と合せて見て、別に書き落ちもなかつたので鳥渡安心した樣な顔をして、キチンと二つに重ねて拔き書きの紙と一緒に、店の奥まつた、先格子の高い薄暗い帳場へ持つて行つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



「フン書けたかね、御苦勞」と輕い老眼鏡をかけた主人の榮一は大帳調べの手を休めて嬉しさうにそれを受け取つた。そしてすぐ二人の小僧にそれを配らせた。

それから五日經つた十八日の日は、もう暗い內からお艶の家はでたく／＼して居た。朝飯が濟むか濟まない頃から、もう親類の人々出入の男衆も皆

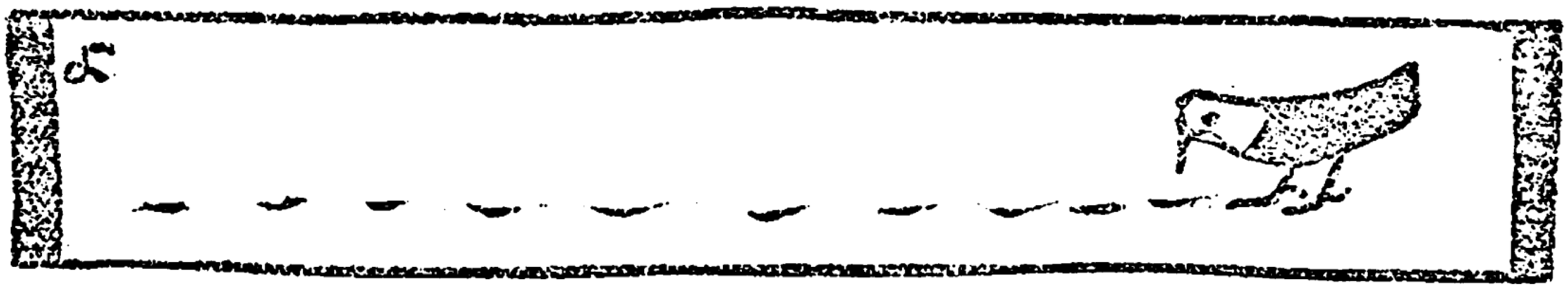
「どう〱遲なはりまして」と言譯をしい〱ぞろ〱來た。男衆には皆店の者と同じい新らしい印袢纏を着せた。茶の間や座敷や廣い勝手の板の間には、着物や足袋の汚れるのを氣にする樣な風をした女の人が皆帶の間へ手拭ひかハンケチを挾んで大勢でたく／＼して居た。

湯殿から上つて來たお艶は他人の家の樣な氣がした。何だか自分の居る處ではない樣に思はれて、そつと避ける樣に急がしく二階の六疊の小間へ這入つた。其處には白い上張を着た髮結のお糸が、先刻から所在なさゝうにぽかり／＼と煙草を吸つて居た。そしてお艶の顏を鳥渡見ると、すぐ急がしさうに片附けてしまつた。

「御苦勞さん」とお艶は優しく云つて莞爾しながら、靜かに大きな新らしい鏡臺の前へ坐つた。

お糸はすぐ後へ廻つて、昨日結つたばかりの高島田を惜し氣もなくプツリと根元に剪を入れて毀し始めた。お艶は明るい鏡の面へ寫つた自分の艶々した白い顏と、汚のある淺黑いお糸の顏とを睨と見くらべてそつと莞爾した、そしてそゝり立てられる樣にわけもなく嬉しさが込み上げて來るのを凝と我慢して居る樣な、くすぐつたさうな顏をして居た。「お糸さん、一番始めにどれ着るの？すみれ鼠の」とお艶はもう嬉しさが耐えきれない樣に莞爾々々しながら、鏡に寫つて居るお糸のしかめ顏してきゆつと元結をしめて居る顏を見て聞いた。

「へエあのお振袖で御座いますよ、其次がお結納ので、それからあの桔梗納戸にお着更へになつてそして藤鼠、黑となるので御座いますよ」とお糸は其度々に自分が着更へさせてやる忙しさを思つて、矢張り嬉しさうにそは／＼して云つた。そしてすぐ、



「どんなにまアお奇麗におなりなさるでせう、おてしらへ申す私までが眞實に嬉しう御座いますよ」と眞實にさう思つて居るらしく云つた。

「またお糸さんてばあんなてと‥‥」とお艶は心持顏を赤くして伏目になつて云つたけれど、もう嬉しくて堪らない樣な心持が判然と顏に見えて居た。

「お糸さん、もう髮が始まつて居るの？」とお奈津は上草履をバタ／＼と音をさせて廊下から斯う云ひながら、あわたゞしさうなせは／＼した風をして這入つて來た。

そして鳥渡も落着いては居られなさうに、

「心持ち根を上げ目にネ、廻りは思ひきりゆるめてお呉れなすつてネ、どうせすぐ毀すんだから見だてのある方が好う御ざんすから‥‥、どうかまア一つ上手くネ」とお糸には何も云はせないで一人で忙がしさうに云つて、お糸が落着いた聲で返事をして居る中に

「仕度の時はまた手傳ひに來ますから、おや何分お願ひ申します」と云ひながらもう出て行つた。

其中にお艶の高島田は好い恰好に出來た。もう一度湯殿で顏から頸をよく洗つて、まだ少し早いけれど、と云ひながらそろ／＼お化粧にかゝつた。お艶はたゞ人形の樣になつて何でもお糸のする儘になつて居た。

好い鹽梅に鳥渡のむらもなく奇麗に散つた濃化粧が濟んで、口紅までさゝれた人形の樣な顏が、判然浮き出た樣に鏡に寫つて居るのを、お艶は幾度も／＼自分の顏かしら？　つと思ひ／＼しては見て微笑んだ。

十一時頃からそろ／＼お客が見えて、二間打通しにした三十幾疊の二階座敷には、たま／＼謹ましい話聲と優しい笑ひ聲がして居た。

八分ばかりお客の揃つた頃からお艶はお糸とお奈津とまだ二三人の親類の女に、好きな樣にいぢられたり見られたりして仕度をさせて貰つた。糸錦の派手な丸帯を高いお太鼓に結んだ上へ紋綸子

の品の好い裲襠を着せられて、昵と俯向いて立つたお艶の姿を、お奈津は昵と見詰めて居る中に、もう耐えきれない程胸が一杯になつた。お艶は別にどうとも思つて居なかつた。

「仕度が出來たら早く〳〵」と叔父の誰かゞ障子から顔だけ出してせき立てる樣に云つた。

「此紋附ですぐ親子盃なんですネ」とお奈津は聞きながら自分も手早く小紋に着更へた。

仲人に連れられて其座敷へ這入る頃からお艶は何だかぼうつとしてもう夢中だつた。田鶴さんや、千代さんが居るかしらなんてそんな事を思つて居る暇など鳥渡もなかつた。冷酒が廻されて、少しすると羽織袴の榮一と小紋の母とが皆に挨拶をして靜かにお艶の前へ坐つた。さうして三ツ組の木盃が其前に出されると新宅の義叔父が、

「親子別れのお盃を」と低い聲で云つた。

お艶は急に胸が一杯になつた。父からの盃を仲人に持たせられた時は。手が小さく震へた。母から受ける時はもう耐えきれない程涙がせき上げて居た。

「今日限りお前は此森山家を去つて、明日からは深美家の人となるのである。どうか今までとは心を入れ變へて、親には孝に良人には貞節に、兄弟は友愛……」と榮一が靜かに落着いた聲で別れの敎訓を聞かせると、お艶はもう堪らなくなつて、すゝり泣きした、廣い座敷がひつそりとしめやかになつた。

親子盃が濟むとすぐお艶は着更へをする爲に仲人に連れられて坐を端した。

六疊の部屋へ這入つて母の後姿を見るとお艶は張りつめて居た氣がゆるんで、人目もわすれて犇と縋つた。そして聲を立てゝすゝり泣きした。

お奈津はもうきゆつと抱き締めたい樣な氣がしたけれどもすぐ思ひ返して、

「何ですよそんな泣いたりなんかして、さアすぐ着更へさせてお貰ひ」と優しく叱る樣に云つて涙をふいてやつた。お糸は云ひ樣もなくて困つた樣な顔をして紋附を持つて立ち膝になつて居た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

祭禮

村井たへ子

私が父母へかくれて、吉河樓の房ちやんを訪ねた。それは六月の中旬で、まだ白地の浴衣がチラチラと新らしく目立つて感じられると云ふ時分だつた。私は水色の洋傘をさして、薄い、ちり除をきて、明るい日光の充ちた、午前の街を微な風に吹かれ乍ら氣持よく歩いて行つた。神奈川の終點で電車を下りると、もうそこは、遊廓に近い、A町と云つて、矢張同じ祭禮の町内だつた。ほうづきや、アイスクリームの、細さな露店が、狹い處に場所をとつて押並んでゐた。どつからか、だるさうな神樂ばやしの音もきこえてゐた。お揃ひらしいうしほ染のゆかたをきて、唐人髷を重さうに結つた女兒が、紅をぬつた唇に、ほゝづきを含んで立つてたり、萬燈かついだ男の兒が向鉢巻に、廐だすきの鈴をならし乍らかけ出して行つたりする樣な街を通りすぎると、同じ構造の妓樓が軒を連ねて並んでゐる。その有名なTと云ふ遊廓地へ出られるのだ。以前學校に在る時分から時々內々で遊びにきてるから、吉河樓も私はよく覺えてゐた。裏門のくゞり戸をあけて、打水のしてある、石の上を輕い駒下駄の音をさせて踏んで行つた。其の入口の格子の處に、新らしい紺の印半纏をきた。俠健な若衆が立つてゐた。私の姿をみると、一寸會釋して、格子の內側へ顏だけ入れて！「お女將さん。お房さんのお友達ですよ。」と大きな聲で知らせてくれた。

それで、私は默つて格子際に立つて待つてゐた。そして房ちやんの出てくるのを待つてゐると、間もなく——「どなた？」と云つて顏を表はしたのは、房ちやんではなくつて、眉を落して、髮を粹な格好のおばこに結んでゐる、房ちやんのお母さんであつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「オヤまあ。時枝さんでしたの？よくおいで下さいました。さあ、何卒マア此方へ。」お母さんは眞から嬉しさうな樣子で斯う云つた。

「さあ何卒、あのお房は只今一寸髮結がきてをりますので‥‥失禮ですけどあなた少しこゝでお涼みになつてゐらしつて下さいな。本當にお房も待かねてをりましたの。よくおいで下さいましたね。」お母さんは欣々として、もてなしてくれた。そうして小じんまりとした、風通しの好い室で私は待されてゐた。

「めつきりとお暑いぢやありませんか。今日はどうぞ終日おゆつくりとお遊び下さいよ。午後長唄のお師匠さんが來る筈ですし、夕方から藝者と幇間連中で何かをどりがあるさうでね、それも恰度私共の三階から正面によくみえるのですよ、まア何にしてもゆつくりなすつてね。」お母さんは齒切れの好い詞付でいろ〱な話をきかしてくれた。色のまつ白な、きしやな姿で、帶のしめ方でも、着物のきかたでも、何となく、しなやかで、同じ年輩かと思ふ私の母なんぞとは餘程趣がちがつて、房ちやんのお母さんには、どつか「女性」らしい、軟かな艶氣が感じられた。私は何となく此麼女を、「實母さん。」と呼んでみたいと思つた。暫くすると向ふの室から「お女將さアん。」と女中の聲が呼んだ。「何だらう。一寸失禮しますよ。」と云つてお母さんは立つて行つた。

昔から、濃い色調で、艶の深いお芝居がよく仕組まれてきた、遊女屋、そこの女將、そこの娘、私には何となく、面白い謎の樣な感がされた。斯うした家の獨娘である、美人である、房ちやんの運命と云ふ樣なものも、何となく、意味があり想に思はれた。

それから間もなく、

「どうも失禮しましたわね。かにんしてね。」

上草履をパタ〱引づつて、忙しさうに這入てきた房ちやんの姿を一寸みて、私は何となくおどろかされた、鬢もたぼも、ふつくりと張つた、大きな島田に、疋田しぼりの淺黄の布を結綿にかけ

て、透ぼりの、銀の平打を、後の方へ重さうにさし込んでゐる。恐ろしく變つた姿に私は思はず、眼を見張つて了つた。

「あら、時枝さん。いやねエ。そんなにみちあお可笑しいでせう？」恥かしさうに少し赤い顔を俯けて、前髪のあたりへ白い手をやつた。——江戸時代の浮世繪でみる樣な姿だと思つた。

「まア、本當によく似合ふのよ。好いわねエ。私もそんな髪に結つてみたい！。」私はじいつと眺め乍ら、沁み〴〵羨ましさうな聲をして了つた。

「本當に結ひたいの？そんなら今お結ひなさいよ。まだ髪結がゐるんだから、ね、うちの祖母さんは此の髪が大好な人ですつて。」と房ちやんは眞顔になつて勸めた。

「あら、冗談よ。私なんかそんな髪に結へば叱られて了ふわ。お母さんが野暮なんですもの。充らないのね。」私はつひ淋しさうな調子で斯う云つた。「でも島田つて下品な髪ぢやないつていふけれどでも矢張り束髪の方が好いのね。」

房ちやんは思ひ直した樣に斯う云つたが、それも淋しい調子だつた。「あなた、今日は本當にゆつくりして行つて頂戴よ、私今朝寢坊して了つて、まだ着物も替へない始末なの。」そう云つて房ちやんは笑ひ乍ら、薄い單衣の胸のあたりをかき合せた。全くまだ着替もせぬらしく、狹い博多の夏帯を男の樣に結んでゐた。

「あなた、自家の娼妓をみた事あつて？」

少したつと房ちやんは、突然と這那事をきいた。「娼妓」と云ふ詞が私には何となく異樣にきこえた。「否え。きれいでせう。見度いわ。」と云ふと、房ちやんは笑乍ら「否え、藝者の樣に粋でなくつて、厭な感ひするものよ。後でみせて上げませう。澤山でらんなさい。」と云つて笑つた。其娼妓について種々な話をしてきかした。可哀想なもの、厭なものだと云ふ實例も話してきかしてくれた。つひ此の間、一番美女だつた、小里と云ふ妓が、お寺の坊主に落籍て、一晩中泣いてゐたと云ふ事

や、お客の中に情人が出來ると、他の客への勤が身にしみぬと云ふので、其の客を斷る樣なこともあると云ふ事や、まだ種々と、暗い人生の劇を思はせる樣な話を、私は好奇心の深い心持で面白くきいた。「お房さん！何にもないけど、あちらで時枝さんに一口さし上げたら好いでせう。」とお母さんが呼びにきた。それから先へ立つてゆく房ちやんについて、私も廣い、スベ〳〵光る廊下を步いて行つた。疊の綺麗な、客間の樣な座敷がチヨイ〳〵と澤山ある樣にみえた。「あゝ一寸。彼女、小紫つて妓よ。今顔洗に出てきたんだからごらんなさいよ。房ちやんは庭を、隔てた向うの廊下を指してみせた。大きな島田に結つた、小作りの女が、楊子を咬へて、だる相に立つてゐた。派手なゆかたみたやうなきものを引ずる樣にきて、淡紅色のしごきを、グル〳〵まきにしめてゐた。「ね。厭なものでせう、さあもうよしませう。後で又二階へゆけば澤山ゐるのよ。」

房ちやんは私の手を引ばる樣にして其の室へ這入つた。粹な丸髷に結つた年間の女中頭が、お給仕に出てきた。それはおたけさんと云つて、此の土地の一寸幅利の鳶職の娘だと云ふ事も、後できかされた。御飯を了つてから房ちやんと、風呂屋の樣にひろい湯殿でお湯をつかつた。あかるい湯殿で、綺麗な身體を巧みに磨く〳〵、房ちやんの姿に私はしみ〴〵見惚れた。——、午後には長唄のお師匠さんがきたので、皆二階のひろい座敷へ集まつた。

おたけさんはお茶を運んだり、果物を進めたり、まめ〳〵しく取もつてゐた。其の中に若い其のお師匠さんの三味線で、房ちやんの八景だの、京鹿子だのをきかされた。お母さんは時々後へまはつてお師匠さんの脊中を、團扇であほいだりしてゐた。房ちやんはのんびりとした好い聲で、しつかりと唄つた。濟むと、

「ご苦勞樣！　あゝ面白でござんしたよ。本當にいつきいても好い。」と云乍ら、お母さんは三味線をうけとつて調子をゆるめ乍ら、お師匠さんの後の方へたてかけた。「お房さんはもうすつかり咽喉がきまりましたね、お樂しみですよ。」とお師匠は指輪の光る細い手で小い扇子を動かし乍ら、お母

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さんの顔をみた、「何ですか、まだ慾がなくつてこまりますの」、とお母さんは、それでも嬉しさうな色が浮んでゐた。

「宗十郎さんの總見は什うなさつて？」

「仕方がないから入りましたが、手前共ぢや皆帝劇がきらひでね、隱居なんぞてんで行きたがらないんですよ。」

「さうですとも、私なんかも矢張り昔風でね、其組なんですの、第一花道がない芝居なんて……」と云つてお師匠さんは高い聲で笑つた。お房ちやんもお母さんも一緒になつて惡評を仕乍ら笑つた。

「まア何ていつても、私しあ木挽町ですね。お房ちやんは二長町びいきでしたわね、そう／＼播磨屋さんだつたのね。おほゝゝ若い中はね。

お師匠さんは賑やかによく笑ふ人だつた。親も娘も一緒になつて、斯うした艶のある話題に興じ合ふ、捌けた家庭が私には不思議な位に思はれた。だが全く羨ましいと思つた。

「お房ちやん、藝者の手古舞が通りますよ。」

女中が知らせてきた。遠くから金棒を引く鈴の音と、陽氣な木遣の聲がひゞいてきた。

皆して、毛氈を敷いた二階の廊下へ出て外を眺めた。友禪ちりめんの單衣をきて、厚化粧の、巻帶の娼妓が、二三人あくどい白粉の香をさせて、私たちの傍へも立つてゐた。

外を歩く、澤山の群集は、皆目をそばだてゝ此の二階を眺めて行つた、私は何となくお房さんの後へかくれる樣にして小さくなつてゐた。



素足

江森美子

ある時は天地の間に浮き出づる鏡に我をうつしみるかな

暫くはをとこをんなの世を別ちまた新しく歸り來らば

白き手も涼しき瞳もくれなゐの唇さへも武器となるかな

ある日より五つの命ならばせてなほ素足にて眺め居るかな

生日足日生身の如く常盤木の森はみどりのやはらかき葉よ

朝より夕に入りてたゞ默す我が遊行の價なきかな

素足にてまどろむひまに柔かきあをき韈はかせたまへな

我れ今年黄金の城をつくるべき大くはだてによみがへりけり

あさましや父と母との起き伏せる家をたのまぬ日も交り來ぬ

語らへど觸るれど見れど人妻は遂に解き得ぬ謎の生もの

母はなほ偶像のまゝ我抱きわがまへに來て悲みたまふ

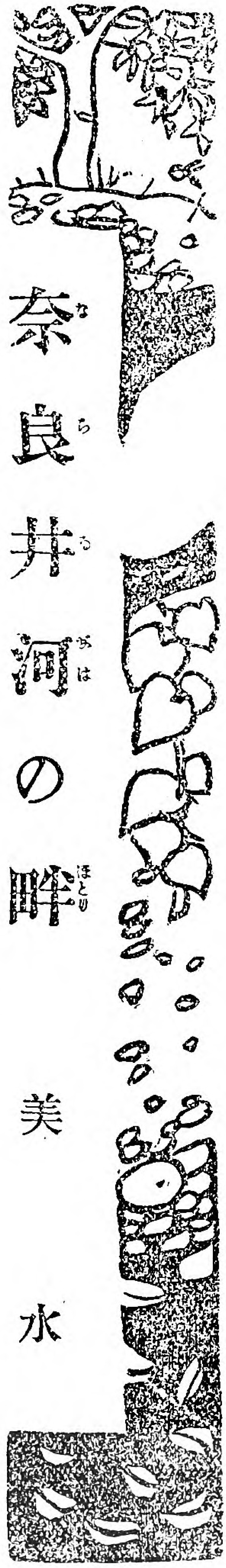
我まゝのかぎりまできてはしなくものがれんとする親の家かな

停車場の鏡にちらと殘し行くあかき帶せる旅姿かな

しづ〴〵とひゞきもたてず春は早青葉若葉の陰にわかれぬ

玻璃越しの赤きにほひにむせびつゝ湯氣の中より見る椿かな

驚きはダイナマイトを抱けると敎へられにしその朝より



奈良井河の畔

美水

私の住家は、人家に遠くはなれた奈良井河畔の一つ家である。

私は、明け暮、雲雀の聲と千鳥の聲と、川瀬の音とを聞きながら河畔の畠で仕事をしてゐる。風の吹く日麥畑で働くのは實に愉快だ、さら〳〵と爽やかな音を立てゝ綠の波を打つ、靑海原のやうな中に突立て、汗の體を風の方へむけると、懷へ颯と涼しい風が入る。疲れた體を芝草の上へなげだすと、ぷんとすみれの匂ひがする、綠の芝生に交つてうす紫のすみれの花が、一面に咲いてゐて、空色の小さい蝶々が低うひら〳〵ひら〳〵とたくさん舞つてゐる。軟かなすみれの香に包まれてじつと靜に、雲雀の聲、川瀬の音に耳を傾けてゐると、何時とは知らず、うとうとゝする、と、突然耳もとで飛びたつ雲雀の聲に驚き醒める。

眞晝時は、すみれの匂が一層高い、いまにこの花も皆散つて仕舞ふが惜いものだ、この間、鎌をとぐ水の中へすみれの花を入れておいたら一日中よい匂がしてゐたからすみれの香水を取つてみようと思つて、私は早速洗面器へ水を入れて、その中へすみれの花を山盛に入れておいたら、實によいすみれの香水になつた。

私の家より四五丁北の方に八幡原農園といふのがある、桃の花の眞盛りの時、私の方でみると、赤い雲が棚引いたやうである、私はそのとき、桃の花を見に行つた、裏門が閉てあつて入れなかつたから、表へ廻るのは遠いので園の破目をみつけだして、そこから中へそつと入つた。數百本の桃の花が燎爛と咲きみだれ、蝶、蜂、虻等が、ぐわん〳〵とうなつてゐる、横へはつてゐる枝の間をくゞつて奧へ入つてゆくと、もう見える限りは桃花ばかり。私はたゞもう夢のやう、美しい美しい花の中を、心ゆくばかりさまよふた。人は皆

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

今、晝寢の夢か、この廣い農園に人氣がない、私は桃畑をぬけ出て園内の大道へ出た、道の兩側は、すべて桃も梨も苹果も、垣根作りである。その中で桃の垣根が一番多く、今を盛の花の垣根の美しさは、たとへるものもない位美事なものであつた。

私の家の前には大昔、長者の屋敷の跡とか、四角に土手がある、去年その土手の中で競馬會をした位だから隨分ひろいその眞中に石地藏の堂があつてその光るトタン屋根の上に一本の老松が枝をさしのべてゐる、この松より外には、藪蔭はあるけれども木蔭はさらにない。疊を敷いたやうな芝生の中には、紫のすみれと、空色の龍膽が花が一面に咲いてゐる、土手の柳は藪のやうになつてゐて、吹く風に綿がパツ〱と飛び、眞赤い鬼つゝじの花が青い中に咲いた。私は顏を洗つたり、水をくんだりするには、龍膽の花をふんだり、又は土手の上を歩いたりして、急な坂を奈良井川へ下りてゆく。さうすると、すぐそこに淸水をたゝへた池がある、本瀬は遙か彼方にとう〱と流れてゐて、その水が別れてこゝへわき出るのだ、それでこれは泉



とはいふ、此泉の水は實に清い水で、どんなに暑い時でもひやりとするほど冷たい。雨後、本瀬へは水が增して濁水とう／＼と流れてゐる時、この泉はやはり、砂石の間から水晶のやうな水がブク／＼とわき出てゐる。ある時は、水際の細かい砂の上に可愛い小鳥の足跡が、列をなしてついてゐることがある、二三匹の水すましが終日水面をまはつてゐる外には、塵一つもない實に綺麗な綺麗な泉である。

晝食後、二時間位休む「晝やすみ」の時は、私は何時も／＼河原で暮す、急いで飯をすまして河原の方へ土手の上を歩きながら遠くをみまはす、こゝは大層見晴しがよいところ、松本市はおほかた見える、兵營や天主閣はわかるが外はたゞゴチャ／＼してゐる。南は鹽尻を越してトンネルへ入るまで、北は田澤の停車場に停つてゐる、汽車の煙がみえる、田澤、松本、村井鹽尻と四つ驛を過る迄、汽車の煙がみえるのである。風あたりは烈しくても、見晴しがいゝので嬉しい。河原の畔には、黄ろい蛇苺と、毛莨の花が、今盛りに咲いてゐる、躑躅もある小梨のやぶもある、藤もある、わらびも出てゐる、私は、川風をあびながら、千鳥の聲を聞きながら、小梨やぶの陰や毛莨の花の中で、ある時は本をよみ、ある時は歌を歌ひ、あるときはわらびをつむ。私はいつも柳の大木の五本ある所へゆく、二本は岸にあるが三本、三角になつてゐる所へ瀬が向いて、つき當つてうづをまいてゆるやかに流れ出る、青々と青淵になつて如何にも深さう、石を投げこむとどぶーんと深い底へ沈んでゆく、岸の柳にもたれて流をみてゐると、水の上を燕がかけつてゐる、千鳥は白い腹をみせて頭上を鳴いて飛ぶ、むかうをみると、石ばかり唯白く、海濱を思ひ出す、幾所にも堤防がたくさん入れてある、去年は堤防がなかつたため大層河畔をかゝされて、なまづ崖の所が多い、石をなげつけると、ザラ／＼と砂石がくづれおちて、あぶなくてそばへはゆかれないのである。

二三年前にかけた所の上の方に藤づるが引懸つてゐる、今にもとけてしまひさうに根があらはれてゐる、それでも紫の房がたくさんついてゐて、ゆらん／＼とゆすれてゐる、危ないとは思つたけれど、欲くてたまらなかつたので、やゝなゝめになつた赤土の崖をかき上つてやうやく一枝折つた。が皮が強くて中々困難だつた、足の下がザラ／＼とくづれ落ちるので一生懸命で藤づるにつかまつて、なほ欲張つて四五枝折りとつて

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

土と一所に、すべりおりた。堤防と堤防の間に水がわきでてゐる、私はそこへ腰を下した、丁度四方へ石垣きを作つたやう、その水のすんでゐることと底がすつかりみえる、底の美しい小石を覗いてゐた時、ふと、日にやけた私の顔と、紫の藤の花とが見えた。

天を相手の仕事はなか〳〵よういでない、七度葡萄の霜除けをしたうちで、大霜が一度に露霜が一度、五度は無駄であつた、宵の中は雨がポツ〳〵落ちてゐても、夜中になつてすつと晴れて仕舞ふ事がある、それで温度が華氏四十五度以下であればどうしても、霜よけをしなければならない。私等は何よりもこの霜よけが一番辛い。靜まりかへつた夜中はさすがに寒く、冬仕度でなければゐられない。空は晴れ渡り、幾千萬の大星小星の微かな光をたよりに、葡萄畑で霜よけをしてゐると、唯、川瀬の音が響いてゐるばかり、靜寂さがひし〳〵と身に迫る。かうしてかけた霜よけも多くは無駄になつてしまふのである。ある時は風よけ、雨よけ、霜よけの三つをやる事がある、風が吹くとむしろが舞ふ、雨が降ればぬれる、夜になつて霜がきさうに晴れ渡る、切角かたづけたのを出して、霜よけをしなければならないのである。

葡萄の芽が早や三四寸のびたもの、一霜あはせたなら取返がつかない、葡萄はならないのである。それで毎夜〳〵注意し、心配してゐる、夕方霜よけをしておくと、夜の中に風がおこつてむしろがばた〳〵して芽がかけてしまうので、霜よけは大抵夜と定つてゐる。私の心配は唯、此霜除けの心配限り、折角霜よけをして霜のない時は實に口惜しい、が、眞白に土の表面が凍つて、吐く息が白くみえる時は本當に心持がよい。私には、心の苦しみ、悲しみなどといふものは少しもない、否、悲まない、働いては青草の上に休み、汗を流しては涼む、小鳥と共に歌をうたひ、胡蝶と共に花蔭に眠る、自然の神はわが目を喜ばせ、耳を喜ばせ、わが心を喜ばせる。見るもの、聞くものすべて美ならざるはない、神と共に働き、神と共に休む、私は、ただ、毎日うれしい、面白い、愉快である。

私は、河畔の崖の藤を、毎日〳〵折つてきて、新らしいおほがめに雨どよの水が溢れてゐるその中へ入れるので、大きなかめも、藤の枝で埋つてしまつた。ぐるりへ藤の房がずらりと下つて、ゆら〳〵とゆれてゐる、花がだん〳〵咲いてきた。今にみんな咲いてしまう、そしたらなほ綺麗なことだろう。つくしのたくさ

んでゐる芝原がある。私はつくしの色が大好き、形も好き、そしてつくしは、たいてい美しい所へ出る。私の家の前を、南から北の方へ、川のよこに凹んだ芝原が長くつゞいてゐる。そこへは一面に芼莨が黄金色に咲いて美事なもの、葉はない位なもので、細い長い莖のさきへガラ〳〵と咲くので、途中に花ばかり浮いてるやうで何とも言へぬ美しさである。そこへ坐ると丁度、花に埋つたやう、たゞぴう黄金の花ばかりである。希くは、毒のかはりに好い匂があつてほしいのである。卯つ木藪の蔭で、月見草を一株みつけた。誰かに取られさうなので私は、こいできて表のさきへ植ゑた。野ばらが、石塚に一面にはひ廻つてゐる。それに交つてごく小さい、可愛らしい綺麗な小花が咲いてゐた、つる草で花びらが五つ、始めは淡い赤紫で、だんだん桔梗色に變つてくる、この花は、こゝより外にはどこにも咲いてゐない。何といふ花だらうか。青草の中をよく調べてみると、草の種類は實におびたゞしいその中には珍らしい花がさいてゐる、不思議な形の草や花や、花よりも美しい草、目に入るやうな小さい花色々の蝶々もゐる、無數の小蟲が生てゐる。私は、草叢を調べるのが何より樂しい、面白い。

此頃は風ばかり吹いて、すべてのものがかわいて仕方がない。私は、血潮のやうな夕べの雲をみながら、水を汲んで、蔬菜の苗床へかけるのがこの頃の毎夕の仕事である。甘藍、玉葱、南瓜、胡瓜、梨胡瓜、西瓜トマト、花椰菜、西洋南瓜のデリシヤス、など、みなのんびりと、芽をだした。葉の蟲をとつたり、寒い晩には暖かにむしろをきせてやる。そうして間もなく畠へ移植しなければならない。天の惠と、私等の力とで今年は、目方一貫目もある早生甘藍や、血の滴るやうなトマト、カステーラのやうに美味なデリシヤスや、淡黄白色の美しい梨のやうな味のする梨胡瓜、直徑二尺もある大丸形の淡綠色の外皮、眞綠色の肉、口に入れゝば自然に溶けるかの感がするアイスクリーム等を收穫するのである。葡萄も成らせる、西洋梨もともすることなる、あゝ早く立派な品を作つて東京の人達の前に捧げたい。



詩人と哲學者 英米二ケ國人の眼に映じたる京都の女

加藤朝鳥

此の頃京都の南禪寺境内の慈氏院にはウヰルキンソンと云ふ若い英國の詩人が滯在して居る。詩人は今年二十六歳の青年であるが、既に世界の大半を漂遊した極めて吟遊詩人式な性格をもつた男で、何でも外國風な異端的なものなら悦んで迎へると云ふ態度である。

僕は京都に遊んだ序に、島華水氏から此の詩人の事を聽き、直に俥を馳せた。南禪寺には文學士の松本氏が居て、ウヰルキンソン氏に禪學の談話などして居るのであつたが、島氏と僕とは先づ松本氏を訪ねて、此の漂泊人の近狀を尋ねたのであつた。

松本氏の談によれば、純粹な倫敦子であるから、其の點が此の漂泊詩人の自ら誇として居る處であり、何人に對して、無作法で無口であると云ふのであつた。

僕は其の時直に想像した、彼は必ずや沈思冥想に耽り勝なのであらう。世に所謂名聲を博さない若い詩人ほど孤獨寂寥の感を抱くものはあるまい。異國の山水に憧憬れて來て居る身の、何を好むで會ふ人每に饒舌を振り蒔かうぞ。よしウヰルキンソンが無口なる程、沈默勝なる程、必ずや會うて何等かの深みのある會話も出來得やう。僕は心ひそかに禪學を修養すると云ふ是の漂泊詩人に對して胸のうちに躍る血のあるを感じたのであつた。

會つた時ウヰルキンソンが語つたのは、日本特に京都の女性から見出す興味であつた。加之彼の語る言葉は決して沈默勝では無かつた。一語一語を選むで語るのが何となく誠實な愛嬌さへ添へて、かの徒らに握手

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を求めて快談を誇るやうなのと比較すれば慥に滋味のある話振であつた。彼は日本の女性が殆んど想像に絶する位に古典の型に嵌まつて、雅致そのものゝ權化であるとしか見えないのに無限の嘆稱を惜まぬと云つた彼は日本の建築物特に神社の屋根が裝飾として日本ならでは發見することの出來ぬのと同樣に、京都女の髮の形に、云ふ可からざる慰藉の感を抱き得たのであつた。慈氏院と云ふ小さい一坊に靜に日本服を着て日本の生活をなす此の詩人の心を思へば、所謂新代の日本の女性なるものが、如何に過激な勢で舊來の日本の淑女の型を壞しつゝあるかを思はずに居られぬ。果然。ウヰルキンソンは滅びゆく舊日本の哀悼者であつた。

僕は又京都滯在中ウヰルキンソンと同じく、舊日本の哀悼者で、又矢張禪學の研究者たる米國の哲學者ラッカー博士と語ることが出來た。都ホテルの窓から此の舊都の全市街を見おろしながら、日本の風致が漸次に歐洲化されるのを悲しむだ博士の心を諒とせざるを得なかつた。博士の東洋研究は殆んど十年來の努力で

六年前に日本に來た事もあり、昨年の冬は印度に來り佛敎哲學に深く心を潜め、日本に來てからは坐禪の硏究に價値を認め、その工夫をなすうちに、建仁寺の管長竹田默雷師のことを聞き、六月一日の朝はやく建仁寺を訪れたのであつた。博士は元來童顏の無愛相者であるが、默雷師との對面は什麼であつたらう。二日に再び建仁寺に行つて默雷師から無盡燈論提唱を聽聞した時は、僧堂に端坐してさながら大悟したやうな顏附であつたと聞いた。博士は又禪と同じ心持で茶道挿花を宗匠桐山清月氏に稽古して貰つて居る。

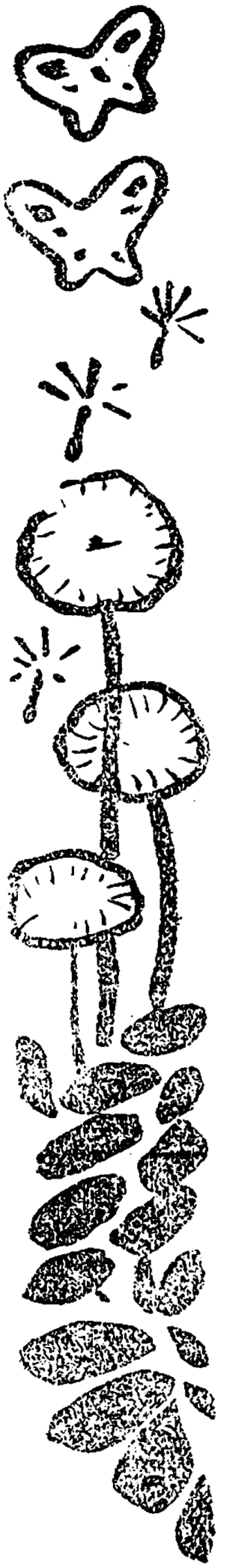
僕が博士を訪ねた時、禪に關するその意見を强ねて問ふたが、博士は一切を語らず、たゞ茶道と云ひ禪と云ひ、日本を解する上に最も中心に觸れた關係を摑で居るらしく見えた。更に談は博士の京都女の批評となつて、再び僕は京都女が如何なる力を以て外國人の心を魅しつゝあるかを驚き知る事が出來た。

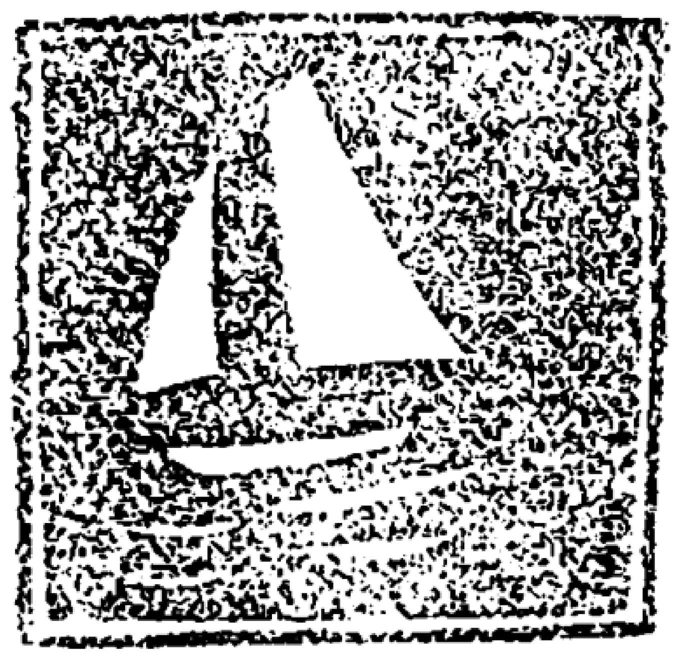
博士夫妻は京都市街を散歩の序にある袋物を賣つて居る店に立ちよつて、書籍を容れる信玄袋を購ひ求め

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ようとしたが、萬事六ヶ敷屋の博士のことであるから一向氣に入つたのが見つからぬ、何んでも二時間ばかりも雜せかやした後に、何も買はずにフイと出てしまつた。その袋物屋の店には女が一人店番をして居たのであつたが、始めから終まで博士夫妻を心地よく歡待して、何例買はずに逃げられても一向嫌な顏をせず、京都女特有の至極雅かな愛嬌を湛へて送りだした。店を出て暫の間博士の心は全くこの京都女の爲めに占領されてしまつた。何故日本の女性はあのやうに愛嬌があるのであらう。殆んど神秘的に思はれる程に不滿の心を表情に出さない。此の樣なことは英國にも米國にも斷じて無い。日本の女の斯う云ふ親切は無下に濟ますことが出來ぬ。氣に適つた品がない以上は、別に新調すべく注文をしようと云ふので、博士は翌日又其の袋物屋に行つて、新しく注文しかけたが、其の店では製造が出來ない。注文の品は一々大阪に云つてやらねばならず、時日も非常にかゝると云ふのであつて、博士は又止むを得ず空しく店を出た。すると其の京都女は又前日に變らぬ親切と愛嬌とを以つて此の珍客を送りだした。玆に博士の心は再び京都女の眞實人を魅魔する力を感せずには居られなかつた。博士の踵は、又店の方に向けて返され、たうとう氣に入らない信玄袋を買つてしまつた。

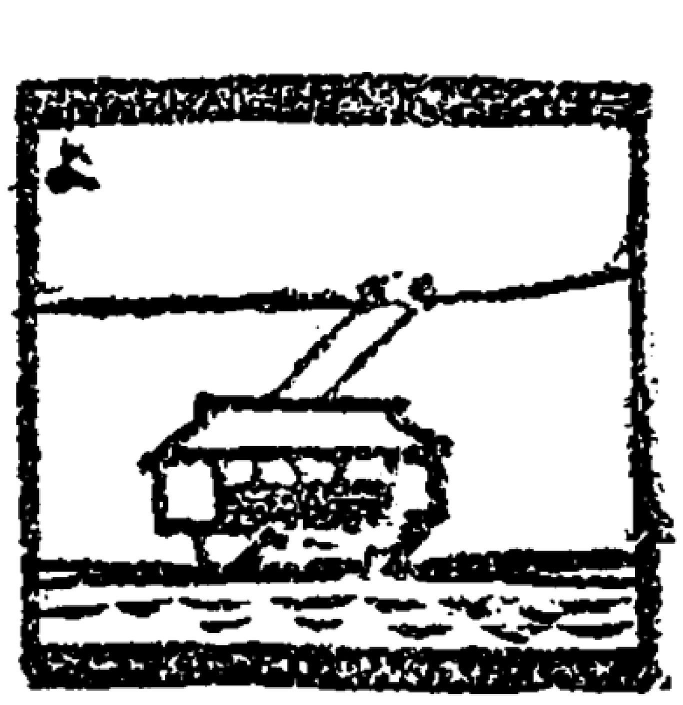
　博士は尚ほ此の型の京都女を、竹細工屋の店にも寶石屋の店にも見たと語つた。あゝ人を魅魔する日本の女性……恐らくラッカー博士が嘆美するやうに世界に比類のない愛嬌のある女かも知れぬ。詩人のウヰルキンソンは日本の女の三ッ指主義を好個の詩題に想ひ、哲人のラッカー博士は不滿の苦痛を一切殺し得たる日本の女を禪や生花やと同じく偉いと嘆美した。





婦人に旅行を勸む

岡落葉



女子と旅行と云へば、直樣新婚旅行を聯想する、女子は結婚せねば旅行をせぬものと決つて居るのではないが、社會と云ふ大灘への進水式であるから、女子の誰れもが、一度は是非共經驗せねばならぬ最もホープフルなチャンスで、考へて見るといろ〳〵面白いものであらうが、私は今極めて一般に旅行といふものが與へて呉れる、畫的趣味に就いて考へて見たいと思ふ。

凡べて旅行は、人生の縮圖だと謂はれる如く、出發點から、道中から、終極迄個人性格により、時機により、事情によりいろ〳〵に分れる。御附きの人を澤山伴れて、白切符で見送人の團體から盛んな祝詞を受けて立つ旅行もあらうし、暑い間の休暇を利用して海から山に、極めて自由な、快活な空氣を求めて飛廻る青年者の旅行もあるし、また揃ひの浴衣に、手拭を腰に、脚絆草鞋の打扮、何々講中の旅行もあるし、誠に複雜な樣式がある、然し此樣式こそ各人各樣で何うでも構はない。私は出來る丈け旅行から饒かな趣味を濾過し得ればよいと思ふ。女子は殊に萬事に消極的な、控目勝なものであるから、一倍此の趣味慾を發揮して貰ひ度いと思ふ。

或時は寫眞機が流行つて、猫も杓子もカメラやコダックを携帶するし、水彩畫の熱のある頃は、誰も水彩畫のスケッチをやる。蓄音機が流行れば、此が旅行の必需携帶品かのやうに心得て何人も此を買求める。此等は勿論、只淺い〳〵道樂で問題にはならぬ、私は汽車の中でも、夜分なら格別、晝間でも窓を締切つて、

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ツマラナイ雜誌を覩たり、物を食べたり、ソシテ眠るでもなく目を眠つて、如何にも其旅行の大儀な億劫なといふ表情をする人があり、また其樣云ふ事を口に上す人があるが、私は此は旅行の根本を謬つた人と思ふ。元より女子は男子と違ひ、一般にも或は特に其時の生理上から何時でも、又何人でもソウとは謂はないが、私は旅行は先づ其道中道筋を愉んで貰ひ度いと思ふ。避暑と云つた所で、健康狀態にある人が、何も日本の



樣な溫和な氣候の國の夏を懼れるやうでは仕方がない此期を利用して山翠に水明らかな土地へ旅行し滯在するといふ、其事を愉しまねばならぬと思ふ。今一歩進んで謂へば、停車場で發車を待合する時間が、長かつたら長いのを愉しく待たねば旅行の完全な趣味を味ふとは謂へないと思ふ。待合室の時間の實に待遠しいものではあるが四邊の光景や話聲やを觀察すると、色々の興味が湧いて來る。旅客の容貌や、其荷物の鹽梅や、

擧動や話振や、各種各樣な意味を吾々に說明して呉れる。

汽車の窓も此と同じで、私は觀て居て飽くを知らない、隨分度々往復した地方の景色でも、晴に雨に夕と朝と、其光景に幾多の變化がある、或時戸塚邊であつたと思ふ、夏の暑い日盛りに、人も見えない田舍の田圃路を大きな荷車か何かを曳いて、五十位の親爺らしいのと、前に十一二位の息子らしいのが肩綱をかけ兩人とも汗を流して通るのを、チラと窓から見て色々と其れに聯想が湧いた。親子傍はり合つて懷かしく平和に勞役をしつゝあつたと、極めて平凡な圖柄ではあるが、四邊の景色と對照して、閃電のやうな短いローマンスを胸裡に描いて非常に愉しかつた事もあつた。斯う云ふ類の事は澤山ある事で、一度の旅行には必ず三四にして止まないと思ふ。凡て汽車の窓は、何時でも突然に豫想しない、思議しない光景を刻々に吾々の目に與へて呉れる、此程良い、實際の繪卷物、短篇小說が又と他にあらうかと思ふ。

ソレカラ私は、旅行した土地では、最初のイムプレツションから、告別する最後迄の感想を綜合して、其土地に對する概念を早くグラスでする事に於てまた一段の興味を覺える、概念と云へば甚だ妙な引例であるが、私は算術の最少公倍數を想ひ出す、アレダ、其土地の最小公倍數を取るのである、例へば鎌倉ならば鎌倉といふ總體の感想の中には、雪の下や長谷、七里ケ濱の光景も含まれて居り、また、右大臣實朝、公曉、靜御前や、又護良親王、新田義貞等といふ歷史上の人物も事蹟も織りなされて、言ひ難い美しい鎌倉と云ふ一個の感想を形造るので、以上の何の項でも此感想は愉快に解釋が出來る。

今一ツ私は要求がある、其れは繪の描ける人なら寫生が出來るが、ソウでない人は頭で繪が描いて貰ひ度い、全く頭で描く繪なら誰にでも出來る筈である。水彩繪具も要らなければ、寫眞機も要らない、而して其色彩や、形容は繪よりも、寫眞よりも一層鮮やかに一層美化されて實際よりも面白い繪がキット澤山に出來る

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

お伊勢參り

鈴蘭

暮れ徂く春の蒼穹は、心殘りなきまですつきりと、晴れ渡つて、草雲雀は屈托のない人の笑ひ聲のやうに高らかに快よく鳴いてゐる。スイ〳〵と吹く朝風はもう中春のやうに生ま溫い感を起させない、初夏の涼味がたつぷりと含まれてゐる。かるい袷に着換へた私は身も心もかる〴〵と、何處までゞも飛んで行けるやうな輕い氣分になつて、汽車に乘りこんだ。豐かに穗をふくんだ麥田や、新綠の衣きた連山の面白さ、アウトラインを夢中になつて眺めて居た。併しそれは貴生川といふ驛を發車て深川、大原と來る迄の事で、それからは眼がもう疲れて急がしく來る物皆を送迎するに堪へられなくなつた。退屈のやり場がないので結果ノートをだして車中の人を寫生しかける、コクリコクリやつてる人や、新聞みてゐる人等を四人計描いた時柘植に着、是れからいよ〳〵伊勢路に入るのだ。がやくと山田行きに乘り換える、荷物で席をふさげてゝ澄ました顏してるヱゴイストが、小憎らしくて、又例のその荷物を一つ宛、搖られ乍らスケッチしかけた、と「そのお荷物は上へ揚げて此方等におゆづりになつては？」と云つた人があるので、ヱゴーは苦い顏をして荷物を取り退けた、何のこと？大人三人も悠くり掛けられるのに……世間には斯う云ふ事をして態々他人に憎がられて歩く人が有る……阿呆らしい――閑話休題、鈴鹿山脈の、のつぺりした山姿、徒らに高い耳で樹らしい樹もなく若草で蔽はれた風は三笠山を大きくしたやうなものだ、等と思つてると、ピュー……、隧道にゐる、サア眞暗やみ、火の點かんのも却つて面白い、と思つたのは初の中で、長い暗の中を走るのだから三分の二邊りからそろ〳〵氣味がわるくなり出す、姉樣は、ほう……と吐息して居られる、昵と瞑目てる中蒼皇しく窓を開ける音がするから、ぱつちり開いて見たら、あゝ、吾が汽車は光明界を走つてる、名高い加太の隧

道を出てからの目に入る山々は追々樹が生えて居る、加太驛に着いた、此處では降りる人が少ない。線路近くの山に、紫の色も美くしく藤が咲いて居る、たまらなく良いので、默つて見てゐると「誰かの裾模樣にしたいでせう」と肩を叩かれ、圖星を指されて、否え、とも云へず知らぬ顏をきめても、クス…と忍び笑ひする姉さま――。あらお人がわるい、とは云つたものの私も、終果わらつて終ふ。この間に汽車は、早や關近くへ來てゐる。左の方の窩みに關の地藏さんのお堂が見える、「あゝ奴の小萬は彼處にまつゝてあるのね」と唐突に言つて笑はれた…けど奴の小萬は私の好きな女だもの…。何か知ら懷かしい。關といふ驛の名を思ふ時、私は直ぐ元祿袖の美くしい小萬の姿を聯想する。小萬は聲も大層美くしかつたと云ふことだ。往時の上り下りの旅人達は、奴の小萬の客引きの聲に什奈に魂を奪はれたことだらう、然かも小萬は泉の如く純潔な女であつた。より來る馬子衆や、旅の人の情を、右、左にと外らして、勇氣ある彼は終果不倶戴天の親の仇を打ち果した、と云ふ健氣な女である。關の小萬か、小萬の關かとまで讃へられた名物女の俤を、此關に來て私は、一層こく見るの感がした。關驛では賣り子がそれは、美くしい聲で小萬餅を賣つてゐる…又しても私の心は小萬を追想する、姉樣は小萬餅を買はれた。汽車が憧憬れ多い關を發車てから、遠く茫と煙つたやうに見える伊勢海の方を眺め乍ら、先の竹皮包を開いて味はうてみた、小萬餅は私の美くしい追想には餘りにふさはしくない味であつたので、遺憾であつた。

關の小萬の米かす音は
　たびとよれ〳〵よれとかす。

と云ふ唄を何度も、口誦んでゐる中汽車は、只もうひた走りに走る。伊勢の海はます〳〵私等の眼ちかく展開される、何驛、何驛と過ぎて、宇治山田に着、いよ〳〵下車だ『吾が汽車よ、お前とも此處でアッヂスよ』構外にパラソルさつと開いて立つと、伊勢の神風は淸がく〳〵しく、ほてつた面を吹く、あゝその快よき

ことと……、思はず顔見合せて、微笑んだ、少し歩くと直ぐ豊受大神宮の、鳥居にさしかゝる、緑の奥もはかり知れぬ神の森、無言のうちに、我が二千有餘年の尊き歴史を物語つて居る、嗚呼何といふ崇嚴……。オーゾンの氣、ゆたかな森の中を通つて、すゝむと神の廣庭に出る、御たらしで清めて、正殿の前に額づいた。あまりの尊さ、あまりの忝けなさに、私の心は何の曇りもなきまで、すみ渡る。神代とは斯うしたものであつたらうか、と想像ふ程に、あたりは靜まり返つてゐる。たゞもう何といふこともなしに、頭が下がる、『何事の在しますかは知らねども、忝けなさに涙こぼるゝ』あゝ眞にこの通りだ、私の此の時の氣分は、ぴつたり此の歌に合ふ神苑の何處でか、コケツコーと靜やかな、あたりの空氣を、搖がせて鷄がなく、その晴れやかな聲音……。その上の岩戸開きのことなどが想ひだされて、心ゆくまで耳を傾けた。私等は再び三度拜して後、元の道へと引き返した、先刻の鳥居をすぎると、其所には電車の待合所がある、外宮の森の初夏の色を、沁々眺め乍ら暫く待つと、かるい轣りの音をさせて内宮行きのが來た、私等は早速それ



に乘る、京都のとは乘り心地が惡いので弱つた、何處を什う走るのか知らんが、電車はずん〳〵運んで行つて呉れる、內宮——內宮で御座います、オ、來たのね……と又新らしい樂みにいそ〳〵と降りる、お土產召しませ、と八釜敷云ふのを、聞き捨てにして、ずんずん進む。午後四時に近い初夏の日光は氣持よく、わが脊を照らす、姉さまのパラソルの色が光澤かに美くしい。名高い宇治橋を、コト〳〵と輕く下駄の音をさせて渡る、コツ〳〵と云ふ靴の音は、この純日本風な上品な、橋には、あまりに殺風景だ、と言ひ度いのを、我慢して思つたゞけに止めて、海の國を、低く歌ひ乍ら步くと內宮の神苑に來た。片方は美くしい白砂の庭で、常綠木に交ぢつて、黃、白、紅の躑躅が咲き滿ちて、柔かい、床かしい香を、まづ旅人の疲れた心に滲みこませて呉れる、片方はこんもりとした森で、折々吹く、そよ風に、楠等は白い葉裏を見せる、奧の杉の大木のあたりだらう、春蟬が、なだらかな聲して鳴いて居る、外宮でもないて居たのか知らぬが、私は氣付かなんだ、進むにつれて、日光しも透らぬ森の中の道となる、何百年を經過した、とも知れぬ太い杉が數知れず立ち並んでゐる、偉大なる品格の人の前に、でたやうな一種改つた氣分になる、此處で澤山の參宮の人に遇つた、什の人も皆愼ましげに、擧動ふて、道を下つてゆく、我が同胞といふ言葉の意味が一層力強く頭に浮ぶ、急に森が右に開けた……と思ふと右に、だら〳〵と坂を下りる、と五十鈴の川がサラ〳〵とゆるやかに流れてゐる、何時の世より流れそめたか——時時たてる水音は、永久の流れを思はする、水を掬ぶと、冷んやりと、手から頭——胸へと沁み渡る、その心持の良いこと……それから又坂を、トコ〳〵と登つて行くと、御社の大前に出る、持物は皆悉り投げ出しておいて、正しく跪坐づいて三拜する、拍手の音は、我乍ら嬉しい程に、力強く響く。

森のある部分から、這入つて來る光線が、お社の上い、のちぎに射して、云はうやうなく輝く。

あゝ比類なき、吾が國光よ。國の幸いや永久にあれ

かしー

時計をだして見たら、既う五時をさしてゐる、二見行が、おくれては、と最後の拜をして、スタ〱と下つて來た、姉さまはお神符を受けに社務所へ・・・その間に私等はお馬の所へ行つてお供をした戰利品の備へ付けてある所で姉樣に追つかれる。惜いけれど時間がないので、歩み乍ら大きな砲を見上げて車止めまで來た疲れたので　幸　此處に數輛の俥が有つたので、それに乘て內宮停留所に向つた、音もなく走るゴム輪の氣味の良さ・・・直ぐに內宮停留所に着く、二見行きの電車は直ぐ來た、乘客が多いので乘り外れては、と、大急ぎにとび乘る。空は大分に曇つて來た、淡らさむい暮方の風は、身に沁むことが甚だしい、畑の中や、小さな町の横や、海は何處へ行つて終つたのかと思ふやうな所許り通る。電車の速度は益々加はる、風は冷たく窓から這入る、疲れは出てくるといふ有樣で、私は眤と眼を閉ぢて居た。はたーーと前へ引くやうにして電車は留まつた。夕の色空より落ちて、四邊はもう淡くかすんで居る、停留所には電氣が幾つとなく點つてゐた、もう旅宿へ行つて休むのだ。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



比叡登山記

壽賀子

明星がキラ〱と空高く輝く頃家を出た。夜明がたの戸外の空氣は冷たくしつとりとしてゐた、Mさんを誘ふ、まだ幼さいMさんは昨晩嬉しがつて寢られなかつたといふ、後弟の敬さんも驍さんも五時までといふのにまだ來ない、三條通り東へ道をとつて行くと敬さんと驍さんと袴つけて太いステッキをもつて來るのに逢つた。東の空はしら〱と薄く明けて來た、町はまだ靜かに眠つて辻電燈が淡い光を投げてゐる、大橋を渡つた所で巡査がじーつと見てゐる、敬さんの太いステッキに大きい袋を掛けてかたげたところは犬とりに見えるつて大笑をした。

加茂川を越すと白河から來る花賣女に澤山あつた、清い白河の流れに自然に化粧した少女、頭にはみづみづしい露のしたゝりさうなつゝじや桃や切りとつたばかりの美くしい花を重い程のせて行くのは、いつも町の中を「花いりまへんかあ——」と賣り行く時よりもはるかに〱美しう見えた。吉田の大學の横より白河路に向う、ヴエールを被いだ少女のやうに、美はしう霞につゝまれた比叡の峰は、今しがた上つた朝日に照されてパット眼の前に現はれた、比叡山、私はどんなゝつかしみを持て朝夕に眺めて居たらう、これから上り行くのだと思ふとうれしい、上り口の茶店で草履を買ふ、私等の前へ信心家らしい爺さんがテク〱と上つて行く、靜かな〱山の中で敬さんと驍さんと蠻聲をはり上げて歌う詩吟の聲が反響して來る、ハーモニカに合して歌ひながらずん〱上つて行くMさんはすみれを摘むのに一心になつてゐる。

「今からとつては可愛さうよ」といつたけれど一つとつて見たら何ともいはれぬいゝゆたかな香りをもつてゐた、何となくうれしくつて澤山摘むで髪にさした、比叡山菫といへば名高いといふ、葉のうらは海老茶色をしてゐる。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

三十町ばかり上つた所で一團の人に逢つた、私等が一番早いのかと思つてゐたのに、私位の娘さんが赤い裾よけを出してくるつと着物をまくり上げて草履にあとがけをしてゐる、敬さんたらい〻スタイルだねえ、すつくり京都式だつていふ、驍さんの吹くハーモニカに合して大きい聲で唄ふ、四十町目から大分けはしい道になつて來た、一休みする、夏蜜柑を四人して三つむいてしまつた、また上る。



五十町目から琵琶湖が見えた、畫筆があれば水彩畫にでもしたいと思つた、絶景だといつたら上へ登つたらまだ〳〵い〻といふ、道はだん〳〵けはしくなつて來る、大分足がいたんで來た、後から來る人に追ひこされては追ひこし、やう〳〵辨天堂についた、普通の人は大方ここから大津へ下りるか、來た道にもどるのだそうな。

「今から足が痛いなんていふたら駄目だ」つていふ「私でも上れるとよ、上れるまで行くわ、元氣をつけて草履とかへる、頃はよし日曜學生や兵士の登る人が多い、敬さんの學校の方に三人逢つて一所に登る。

「君たうてい駄目ですよ登れませんよ」「い〻え上れますわ」えらさうなことをいつたけれど隨分苦しい、Mさんは下駄のまゝにくらしい程ずん〳〵上つ

て行く。
延略寺、中堂、講堂、辨慶の釣鐘を引ぱつて登つた所歴史的な、ローマンチックの感じを起させた、山法師の元氣などを思ふ。道はだん〳〵けはしい、たまらない程くるしい、足が動かない「エヽ先へ上つて頂戴、私ぼつ〳〵登つて行きますわ」といつたので、他の人はずん〳〵上つて行く、二丁程先へ登つては、オーイ、ハヨー〳〵つていふ、「一寸まつて頂戴、一ぷくしますわ」つて一人坐り込んで林檎をむく、ハヨー〳〵とせきたてる程ゆつくりしてやる、驍さんが下りて來てステッキにすがりついて上つて、やつと一緒になつたけれど、ぢき私だけおくれてしまふ。
もう四明ヶ嶽まで二丁といふのに、一寸も上れぬ、さつき追ひ越していつた人が、じーつと上から見てゐる、にくらしい、誰か引づり上てほしい、皆先へ登つてしまつた、もう泣きたくなつて、終に一つ二つ足の數をよんで登る。
やつと上までついた時のうれしかつたこと、山頂に登つてひろ〴〵と開展した自然の景を瞰下した時、今までの苦しさも忘れてしまつた。
短かい草の軟かい芽を吹いてゐる山頂に足を投げ出して、ひろ〴〵とした湖を瞰下した。空はどんよりとして湖畔の家も田畠も遠い連山も一やうにぼうつと霞んで見える。湖面は靜まりかへつて滑らかな油を流したやうな水は、どこまでも〳〵果しなく連續いてゐる、日光の反映の無い湖面は、強い陰影がないけれども、どつかに強い輝きがある。
小蒸汽の吐く煙は、はつきりと湖面にうつゝて居る細かく紙片を撒き散したやうな帆船は、霞の中にいつまでもじつとして動かない、こちらの岸を走る小蒸汽ばかりが、水面に尾を引いて鈍ろいあゆみをつゞけてゐる、對岸の水ぎわから山麓へつゞゐてゐる野は、一面菜種の花と麥の畑らしい、近い山の面は藍青色の間にチラ〳〵と細かい赤土の肌が表はれてゐる、山も畑も美くしゐ油畫のやうだ。北東の連山は、靄の中に重疊つてゐるのがよく見える、あの連山は私がいつも山國ときいて、神秘な思ひに沈む美濃飛驒信州へかけての山脈であらう。
私の居る山頂は靜かだ、むかうの山頂に唄ふ聲が寂靜の中に強く響くのと、湖面を走る蒸汽の笛の音が時時如何にも濃やかな霞をおしわけ〳〵來るやうな、鈍い響をたてるばかりだ。山頂はめづらしく風が無い、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ずッと南を見渡すと湖の水を平野に流出する宇治川の源と、湖尻との間に丁度堰のやうになつて瀬田の橋がかゝつてゐる、宇治川の水は二うねり程してぼッとして山にかくれてゐる。

大津の町は丁度積み重ねてあつた小さい玩具か何かがくづれたやうに、山の方から水ぎわまで重なつてゐる、山がぐつと一ゆらぎでもしたら、すぐあの町は湖の底に溺れてしまひさうだ。



京の町はと見るとたゞうじ〳〵と黒くかたまつた中にキラ〳〵と光るものと、うつすりと煙が上つてゐるのと、その黒い中を加茂川が白くまつすぐに線を引いてゐるのが見える。

南の方は小さい湖水のやうに巨椋の池が見える

それからうね〳〵と幅廣くいくうねりもして果はぼうッと消えてゐるのが淀川だらう、そのぼうッと消えてゐるあたりに大阪の都があるのだらう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

他にもいくつも河がうねつてゐる、河の白い光と黒味を帶びた山々が見えるばかりで、南の方はぼうつと霞んでゐる、このパノラマの樣な景色を私は立たうともせず、夢のやうに眺めてゐた。お辨當をすませたら皆が、デッカンショーなんてどなる、果は敬さんの學校の方が「七ッとや、ながい耳の校長さん、兎か驢馬か山猫か」なんて唄ふ、驍さんたら私しがじーつと瞰下してゐる姿をスケッチしてしまつた、歸り路は坂本に下り、唐崎に寄り、大津まで滋賀街道を徒歩にて行く、ふり返つて見たら、比叡の峰は遠く高く離れて見える、まあよくあんな山を越して來たことゝ驚ろいた道の小さい家で水を乞ふたら、湖水の水だつてのどへとほすことは出來なかつた、疏水の船でつていふのに皆が歩いてつていふのでまた小關越てかへる、如何にゆつくり歩いてゐた春の日も大分かたむいて來た。

　つゝじ咲く小關峠に日くるゝ

皆笑つてゐるのに私は笑ふことも唄ふこともうるさい、たゞ足がいたい、やうやく電車で歸る、一日歩いた道は十二里程――。

　ぼけの咲く比叡の麓や春夕

＊　＊　＊　＊　＊

柳の芽

加藤爲子

古柳やはらかき芽をふく頃は物とはなしに思ひわづらふ

雨の日はよもぎに似たるたきものしほの遠人を呼びも起さむ

かさ〳〵と蠶の葉かむ音に似て小雨するなりすゞなすゞしろ

短きも何なげかじよつとすりしマッチの火こそめでたかりけれ

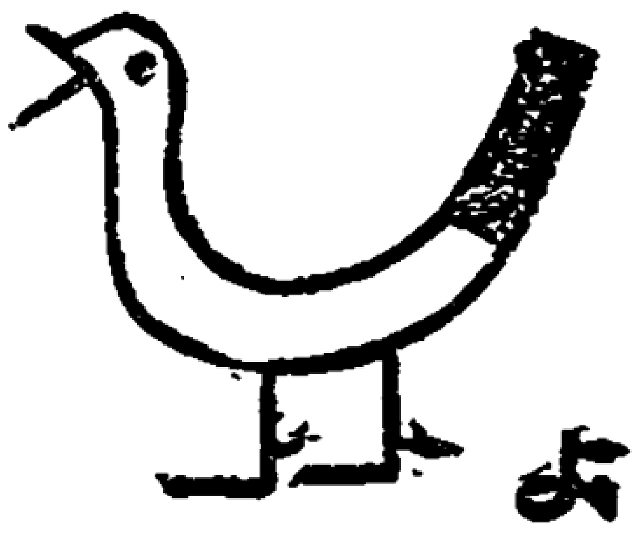
命をばなみしつまたもあさましきこの戀心とらはれでころ

たばかられたばかりかくて終るべし極惡外道あさましき世に

豐かなる心といふや變心の人とし呼ぶや吾れあづからず

いつしかと超ゆべからざる大いなる垣つくられぬ君と吾とは

きぬ〴〵の路にかもさくあねもねの白き花びら赤き花びら



女性の發情期

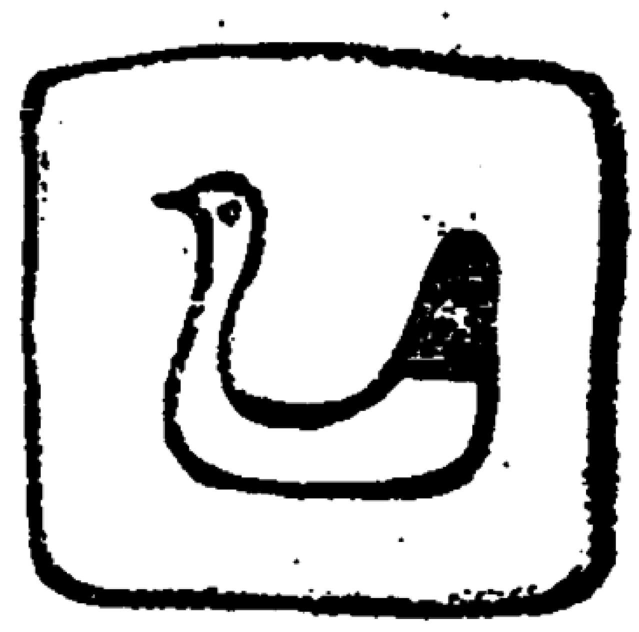
大阪高等醫學校敎諭　田中祐吉

女性の發情期とは、未成熟の狀態に在りし卵巢が始めて生殖素たる卵子を製出して之を排出すると同時に朱鷺色の月經を潮する時期である。身體の脂肪は增加して肌膚は豐膩圓滿となり、眼は玲瓏として輝き、音聲は金鈴を振るが如くに淸く、青春の血潮脈管に漲りて胸に波をうたせ、美に憧がれ、情を解し、花に戲むる胡蝶を見ては思ひを惱ませ、猫の戀を聞きては腸を斷ち人耻しき思ひの中に、おぼろげながら將來の運命を描きそむる時期である。科學的に言へば、女性生殖機關の成熟すると共に身體も一變し、骨盤大となり、乳房腫大し、恥毛發生し、異性に對する愛情の發動しそむる時期である。

此の如く女性が天授の妙機に感じて身體及び精神上に一大變化を來たす所の發情期に達する年齡は、氣候人種、體質、生活法、社會的關係等の如何に由て一定しない、今、これに就て聊か述べてみやう。

(一)氣候。　は月經の初潮と主要の關係を有してゐるものである、熱帶國では處女の初めて經血を漏らす年齡は平均十一歲より十四歲までの間であるが溫帶國に於ては之よりやゝ遲く、十三歲乃至十六歲位である、(吾邦では平均十四歲八ヶ月である)寒帶國に於ては最も遲く現はるゝもので、平均十五歲乃至十八歲である。

(二)人種及び氣質。　も多少の關係がある。例へば猶太の處女は平均十四五歲頃より、獨逸の處女は十六歲乃至十六歲六ヶ月頃より、露國の處女は十六七



歳頃より月經が始まる、又、多血質で、氣性の活潑なそして身體の强健なるものは、否らざる者よりも月經の始まることが早い。

(三)生活法及び社會的關係。　上流社會の女性は貧困なる勞働社會のものよりも、月經の發現することが早く、キッシュの說に依れば、上流の女性の四分の一は、既に十四歳頃より月經の初まるものであるが、之に反して下等社會のものに於ては、其の六分の一が漸く十四歳に至つて經水を見るとのとである。これと同樣に、都會に生活せる者は片田舍に住めるものよりも早く思春期に達する。例之ば佛國に就て之を觀るに、巴里の如き大都會に住める者は、十四歳九ヶ月にして月經の初潮を認めるが、田舍娘にては之より一ヶ月遲れるとのことである。

(四)遺傳。　早く月經の現はれた母親の娘は、同樣に早くから月經を見ることが多い、クーチーは十一歳より月經を潮した一婦人の生んだ八人の娘が皆悉く母親と同樣に十一歳から月經を見た一實例を記述し、チルトも亦た同樣の事實を認めたことがある。キッシユは五十八人の女子中、四十一人に於て、月經初潮の時期と遺傳との間に一種の關係あることを確定し叙上の事實を證明した。併し、必ずしも之に限つたことはない故、遺傳の關係は、決して確實と謂ふことは出來ぬ

プロッスが世界諸國の都市に於ける女性に就て月經初潮の平均年齡を調査したことがあるが、今之を一の表にしてみると次の如くである。

クリスチアニア	十六歳八ヶ月二十五日
コツペンハーゲン	十六歳九ヶ月十二日
ミユンヘン	十六歳五ヶ月十二日
ゲツチンゲン	十六歳二ヶ月二日
ウイーン	十五歳八ヶ月十五日
ベルリン	十五歳七ヶ月六日
ストツクホルム	十五歳六ヶ月二十二日
マンチエスター	十五歳六ヶ月
ワルシヤウ	十五歳一ヶ月二十三日
ロンドン	十五歳一ヶ月四日
パリー	十五歳七ヶ月十八日
モンペリエ	十四歳二ヶ月
マルセーユ	十三歳十一ヶ月十一日
カルカツタ	十二歳六ヶ月
埃及	十歳

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

月經の初潮するに當つては、之に先だつて種々の徴候が顯はれる、之は生殖機關に於ける血液輸入の增多するが爲であつて、其の徴候は、薦骨部の疼痛、腰部の牽引せらるゝが如き感覺下腹部就中子宮卵巢部に於ける壓重の感覺、下肢の輕度の倦怠等であるが、之と同時に屢々顏面の潮紅或は蒼白、輕度の體溫亢進等の如き全身徴候が現はるゝともある。而して多くの場合に於ては尿通、便通の障碍胃腸の違和を感じ、又た神經系の刺戟に對する興奮性が強くなつて、何となく悲哀の感に沈み易い傾向が起り、頭痛、全身倦怠、眩暈、心悸亢進等を感ずるものである。クーチーは月經初潮の前驅徴候として、乳房の腫張、知覺過敏、下腹部の充實、壓重の感覺、中等度の腹部緊滿、薦骨痛、膣の水樣粘液性物質の分泌、生殖機關に於ける搔痒の感等を擧げ、此等の徴候が屢々病的の性質を帶びて高度なる腹痛、全身倦怠、消化不良、下痢、頭痛、神經痛、精神異常（就中、道德上の錯迷）等の如き現象の起ることを說いた。而して初回の月經が終ると、其後二三ケ月間は月經の來潮するとなく、凡そ一ケ年を經過すると月經は斷えず且つ規則正しく反覆するやうになる。



凡て女子の發情期に達すると、其の身體の大さ及び體重は著しく增加するものである、キッシュの說では貧民社會の處女は、十三四歲に至つて其の身體の發育が顯著となつてくるが、上流社會の處女では、既に十二三歲頃より著しく身體容積の增加を示すものである。

パグリアニーは女子に於ては、發情期に先つて、身體の著明に發育するもので、例之ば、十二歲より月經の現はるゝ處女に在ては、十一歲にして其身體の著しく大となるものであると言つたことがある。元來女子の發育は、ロンブロソー、プロッス等の說くが如く、十一歲乃至十二歲の頃までは、男子に於けるよりも大であるが、十四歲に至つて突然發育の停止するものである。之に反して男子に於ては、十六歲に至るまで絕えず、身體の發育成長するが常である、母胎より出た當時に於ては、男子の體長は女子よりも凡そ一仙迷許長いが、發情期に達する際には、女子の體長體重は男子と同等であるか、或は之よりも少しく超過してゐるプロッスの說に依れば、十六七歲の女子は、十八九歲の男子と同等の體長を有してゐるものである。

此の如く發情期に達せる女子が、男子に反して、其身體の早く發育成熟することは、凡ての人種、あらゆる階級に於て認めらるゝ所であつて、之を統計に徵しても、左記の如き關係を認めることが出來る。

	女子	男子
體重の著明に增加する時期	十二歲乃至十四歲	十四歲乃至十七歲
體長の著明に增加する時期	十二歲乃至十三歲	十二歲乃至十五歲
身體容積の增大する時期	十二歲乃至十五歲	十五歲乃至十七歲
筋力の强大となる時期	十二歲乃至十四歲	十四歲乃至十五歲

以上述べた所は、普通一般の事實であるが、併し之れが破格と稱すべき者も決して尠くはない。元來女性生殖腺たる卵巢と神經系とは交互親密の關係を有し、卵巢の成熟する時は、身體の諸機關の發達を促進すると同時に、神經系の刺戟は、亦卵巢に影響を及ぼして其の作用を興奮せしめ、月經期を早めるものである。花柳社會の少女が、良家の少女よりも早く發情期に達するのは、つまり淫猥なる慣習、野卑なる談話等に因つて神經系の刺戟せらるゝ結果である、又た印度の如き熱帶國に於て女子が既に七八歲にして色情を解し、十一二歲で結婚するが如きは、氣候其者の影響よりも、寧ろ熱帶國に於ける淫靡野卑なる風俗が自然に性慾の發生を促がすに因ることが多いのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

黑衣の人

廣江曉子

誦經の聲が終ると、うす闇の廊下に靜な足音して、やがて現れたのはその人であつた。淋しい微笑を見せて次の間の敷居際をそのまゝ庫裡の方へと去つた、高い脊丈を一入高く見せる黑の素絹の下から裾長く着た白衣が、薄闇の中に殘る光を吸ひ集めた樣に、悲しく何時迄も眼に映つた。人々の後れた夕餉のこしらへに急がしい間、書院の縁にで、柱にもたれたまゝ、私は又淋しい瞑想のとりことなつた、淋しい微笑と、白衣の光りをその儘に我が夢は遠き十年の昔に落ち行く、遠くより物の映ぜし如く浮びいづる梅もどきの蔭、同じよわひの寺の子と遊びに餘念なき私の振分髮はまだ肩にもとゞきかねた、物を卒塔婆や、立ちならぶ墓や、片側の杉の生垣やらでおのづと圓陣なしたその蔭ばかりは風も鋭いづばさを納めて行く、錦繡の色彩の樣な梅もどきの紅に誘はるゝ幼な心よ、冬の日の二人の遊び場は何時も其處に定められて居た、しかし又樫の實ひろいや、鬼ごつこやに思ひいたれば、何の苦もなくそこをはなれて二人は又新らしい方へと馳せ行くのであつた。それからそれへとうつり行く遊びの果てに夕暮の急しい庫裡の方から、我が友を呼ぶその母の聲がきこえると、又明日もよとかろくちかつて、めい〳〵の母の方へと別れ行く、執着うすく、うつり安く戀るゝに早き幼い二人はさながら小鳥の樣なものであつた。遠ざかり行く幼い日を夢とも思ひ、幻とも思ひ、又手ずれた色あやも定かならぬ古い繪とも思ふ、夢の日を無數に重ね行く中に、何時か私には追憶と云ふ物ができて、險しい斷崖に面白いやうな、苦しい現實にかけ惱まさるゝ心は、そのうすれゆく面影の抱擁にしばしのやすらいをもとむる樣になつた。

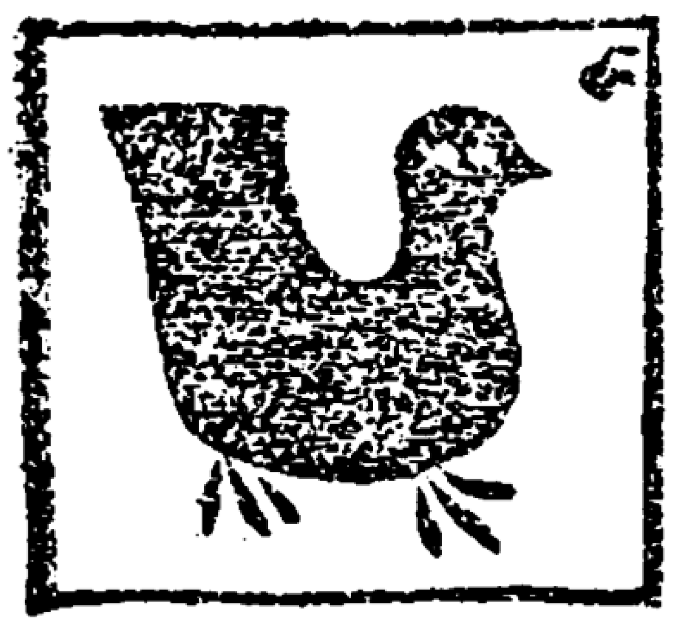
美味なる食物と、面白い遊びの外に思ひなかりし幼い日の戀しさ、十四の春に父を失ひてより、私は一入同じよわひの人々の歩みゆく道をはなれて、はかない指さきの業に辛くも活計の道を立てゝ行かねばならなかつた。その月日の中に我が幼な馴染の友は、圓頂黑衣の身となつたのである、惱みしげく、涙多き若き日、ゆたかに育ちしその人の心も、そゞろ眼ざめし如く次第に暗き苦惱の巷へと落ちて行つた、美なる物聖なる物をあこがるゝ若き心は辛きみにくき現實に堪へかねて、高潮なうけ歩みに夢の國を辿れど、人の世の荒風は容赦なく我等が夢をさまし行く、遠き昔より人の心を支配し來りし宗教も又我等が心を根本より動かすには足らぬ、憂愁や疑惑にふけりながらその威嚴と魅力を失ふた宗教を捧げて立たねばならぬ、我が幼な馴染の友家と家との往來こそ絕えね、情を異にする悲しさは長ずるに從ふて自づと疎遠になりしこの年月、男の國、女の國と道は次第に別れ行けど、私はなほこの友の心を明らかに讀む事ができる、その眉の曇れるも、暗き心、葬られし世等云ふ文字を人に秘した日記の中にかけるも知る、されど人にはさすが足らへる如くよそほはねばならぬ義理の拘束の苦しさ、せめて新らしき詩歌に心やると云ふ哀なる人よ、まとへる黑衣は消し難き憂愁の色とも見えよう、七尺の袖に紅の襦袢の袖は重ねたれど、我も又憂愁の黑衣まとへる身、ふと人の立ちよる氣配、ふり返れば、素絹をぬいだ人の白衣が又悲しく闇の中に光る、私ははつと柱をはなれて、長い緣側を靜に〳〵歩きだした、東の山に月さして、やう〳〵深うなつた闇の底に又やはらかい物なつかしい薄明が漂ふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



小町問答

澤田撫松



（一）

『小野小町て、眞實に美人であつたでしやうか』

『さうね、誰でも美人と言へば直ぐ小野小町か衣通姫と言ふんですもの、美人に違ひないでしやうよ、でもね、小野小町は確に美人なりと書いたものは何もないぢやありませんか、古今集の序に小野小町を衣通姫の流と書いてありますけれど、あれば唯和歌に就て言ふた丈で容姿を衣通姫と比較したのでないでしやう。その外の正史にも小野小町は美人なりと書いてないのですもの、小野小町は確に美人とも言はれませぬわ、でも別にこれと言ふ確な出所がないにしても小野小町は美人の標本になつて居たのですから、まあ美人として置かうぢやありませんか』

『さうだわね、小野小町は美人に非ずと言ふ證據もないのですから、美人と言へば美人にして置いた方がいゝね、だけれど、小町は一人の女を指したのでしやうか、それとも幾人も小町と言ふ女があつたのを一人の女の樣に言ひ傳へたのでしやうか、分らないわね』

『全く分らないのね、菅茶山が小町の事蹟を調べて分らないと嘆息したんですもの、新井白蛾なんかは小町は幾人もあつたのだと言ふて居るわ、牛馬問を讀むと昔は國々から美しい女を後宮へ采女に獻じ、この采女は後町に居たからそれで小町と呼び、その采女が宮仕を止めて古鄕で死ぬと、その墓を小町塚と呼むで、美濃、尾張なぞに其の小町塚が幾個もあると書てあるぢやありませんか、斯うなると小町は人名だか、地名だか、職名だか、さつぱり分らなくなつ

てくるわ』

『さうも言へないことよ、群書類從の六十二卷に小野の系圖が出て居るわ、小野小町は出羽守小野良眞の次女で、小野篁の孫となつて居るんですもの、抹殺することは出來ないわ、小野小町は良眞の娘とすると、平城天皇大同四年に、出羽國雄勝郡字桐の木田と言ふ所に生れて、お母さんは大町子と言ふんです。小町は生れながらにして美しく、その上才智があつて、十三の年には歌は固より、絲竹管絃の道に至るまで何一つ出來ないものがないので、草深い片田舍に置ておくが惜しいと言ふて、嵯峨天皇の弘仁十二年に父さんが都へ伴れて來ると美人の評判が高くなり、十五の歳に采女となつたんです、それから十九の歳に父に死別れ、二十一の歳に兄に死別れ、二十三の歳に弟に死別れて、それから後は戀と歌との生活をして、醍醐天皇の昌泰三年に齢九十二で死んだんです、これが小野小町の略傳だわ』



（二）

『さう言へばさうだわね、小野小町は美人で、天才で、學問があつて、歌が上手で、眞實に傑い人だわね、全く理想的の婦人だわ、』

『だけど隨分艶聞のあつた人ね、小野小町は全く本能主義の人だと思ふわ』

『それは小野小町程の美人ですもの、甘いこと言ふて集つて來る男の多いのは當然だわ、でも小町は斯う言ふ男の要求を容れたか如何だか疑問だわ』

『深草の少將なんか隨分惱まされたわね、小野小町も罪な人だと思ふわ、深草の少將が、小野小町に戀をしたら榻を出して、この上で百夜寢たら其の戀を叶へようと言ふと、男は馬鹿な者ね、深草の少將は毎晩々々其所へ寢に行たんですて、九十九夜通ふて今一夜で約束の百日と言ふ時に、折惡しく少將の親が死んだんで、百夜目には榻の上に寢ることが出來なかつたんです、小町も隨分人が惡いわね、少將のところへ、

曉の、榻のはしかき、百夜かき、
君が來ぬ夜は、我は數かく。

と言ふ歌を送んなんて、眞實に罪だわ』

『深草の少將て誰でしやう？』

『深草の少將は僧正遍昭でしやう、僧正遍昭は仁明天皇に寵愛されて、備前介左近衞少將として深草の里に住むで居たから、深草の少將は僧正遍昭に違ひないわ

嵯峨天皇の弘仁六年に生れたのだから、小町よりは七歳齡が下ですけれど、小町は美人ですもの七ッ齡下の遍昭と戀の成立ないことはないわ』

（三）

『でも僧正遍昭は賢德の高僧ですもの、そんな艶つぽい話はないでしやう』

『さうでないことよ、僧正遍昭にも隨分艶聞があつてよ、

霜雪の、ふる屋の下に、獨り寢の、
うつ伏しそめの、あさのけさなり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と言ふ歌を添へて、五條の女のもとへ袈裟を洗ひにやるなんて言つてるでしやう、五條の女て言ふのは、僧正遍昭の戀人で、未だ出家しない前、良峯宗貞と言ふて居た時、五條のあたりを歩いて居ると俄に雨が降つて來たので、何所か雨宿りをする所はないかと四邊を見ると、五間程の檜皮ぶきの家があつたのよ恰度よいと思ふて入つて見ると、庭に梅が咲て居て鶯も鳴いて居るの、そして濃色の衣の上に薄色の衣を着た髪の長い女が居て、



　蓬おひて、荒れたる宿の、鶯の、
　人くと鳴くや、誰とかまたん。

と獨り言を言ふて居たので、宗貞は思はず、

　來れども、言ひし馴れねば、鶯の、
　君につげよと、敎へてぞ鳴く。

と吟ふて、それから睦じく語り合ふたんですて』

『隨分だわね』

『小町は在原業平や文屋康秀とも戀があつたんですて』

『マア』

『…………』

　思ひつゝ、居ればや人の、見えつらん、

夢と知りせば、覺めざらましを。

と言ふ歌は、小町が業平を思ふて詠むだんだわ』

『だッて、おかしいわ、小町は業平より十六齡が上じやありませんか』

『十六齡が違うても、小町は萬年新造ですもの』

『さう言へばさうだけど』

(四)

『文屋の康秀て知てゝ?』

『知てるわ、百人一首のむべ山の歌を詠むだ人でしやう』

『さうよ、六歌仙の一人だわ、康秀が文慶五年三河の掾に任せられて任地へ赴く時、小町を誘ふて共に行かんかと言ふたら、

わびぬれば、身を浮草の、根をたえて、
さそふ水あらば、いなんとぞ思ふ。

と詠むで、三河へ伴れて行つてくれと賴むだんですて』

『小町と言ふ人はなか〱自尊心の强い人だと言ふじやありませんか、それがそんな弱いことを言つたんでしやうか』

『だつて、その時は小町はモー七十なんですもの、夫はなし子はなし、便るところが無いからでしやう』

『幾許小町だつて、七十のお婆さんを誘ふなんて、康秀も物好きだわね』

『斯う言ふ說もあるのよ、小町が若かつた時、康秀に無情であつたのを怨むで、康秀がこの歌を贈つて、そして伴れて行かないで小町に失望さして昔の怨をかへしたんだとも言ふわ』

『小町程の美人でも、然うなつては駄目ね』

『全くだわ』

(五)

『小町はどうして夫を持たなかつたんでしやう』

『小町は夫を持てよ』

『アラ、さう、小町はお嫁になつたの?、誰の?』

『大江維章のお嫁になつたじやありませんか「愚見抄」

に『小野小町大江維章が妻となり筑紫へ下りけるが後に尼になりて近江國關寺のほとりにありける』とあるんですし、古今集の序にある、

色みえで、うつろふ物は、世の中の、
人の心の、花にぞありける。

と言ふ歌は、小町が維章の妻となつた後、維章が心變りがして藤原朝行の婿となつた時、維章の薄情を怨むだ歌なんですよ、「榮雅抄」にも其の事が書てあるわ』

『小町程の美人で、學問があつて、歌が上手でも夫に棄てられるんでしやうか、そして最後はのたれ死なんか振はないわね』

『小町の悲劇は虚榮心からでしやう、小町は自分の美貌と才學とを鼻にかけて、多くの男を惱まし、そして身の程を知らずに女后にならうと言ふ野心を懷いて居たんですが、そこは人間ですもの、ふとした事から大江維章なんて、餘り名の知れない人の妻となつたんだわ』

『小町に歌の才がなかつたら、大江の妻で一生を終つたでしやうね』

『そらさうよ、小町に歌がなかつたらのたれ死もしないわ』

『して見ると藝術と幸福とは一致しないわね』

『さうだわね』

餘録

▲七小町。七小町とは卒都婆小町、鸚鵡小町、通小町、關寺小町、草子洗小町、雨乞小町、清水小町を云ふ。

▲芭蕉の句。名月や湖水にうつる七小町。

▲荷兮の句。おく露や小町が骨の見事さよ。

▲あなめ〳〵。『和歌童蒙抄』巻七に曰く、あきかぜの吹くにつけてもあなめ〳〵小野とはいはじすゝき生ひたり、小野小町集にあり、昔、野中を行く人あり、風の音のやうにて此歌を詠める聲聞ゆ、立よりて尋ねきゝければ、白くされたる人がしらの中より、すゝき生ひ出でたるが、ながめけるなり。そのすゝきを取すてゝ、其かしらを清き所におきて歸りぬ、其夜の夢に我はそれ昔小野小町と云はれし者なり、うれしく恩を蒙りぬると云へりけり、さて此歌を彼の集に入れけるとぞ。

▲小町の傳説。右の話はさま〴〵なる傳説となりて謠曲などにも作られたり、場所は大抵奥州になつてゐる、或は奥州八十島と云へる場所のことゝせり。

▲小町の出所。或る書に曰く、小野小町は出羽國郡司女也云々。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



都下女學校花競べ

鬼あざみ

△●●●●●●學習院女學部

まことやな昔ならば、黒塗金紋散しの御乘物の内深うまし〳〵て、花の御姿拜むさへ容易の業で出來なかつたやんごとなき姫樣達が、時世ならばこそ勿體なくも、御身輕ういで立ち給ふての學校通ひ、退校時の午後三時はげにや百花一時に降り來るの時として、都下幾十の女學校中優にやさしく、美はしきは、櫻花の容姿の婉麗なるにも例へんかな、されば皇太子妃殿下を始め奉り、竹の園生のやんごとなき御方々、扨は星と輝く姫君や令孃達の多くは此校門をくゞらせ給はざるはなし、下田歌子の君は澁谷の奥深く閉ぢこもり給ひたれば、今は武人の鑑なる乃木將軍が校長と戴くにより、其眞卒なる淵容人格もて自から訓陶の任に當り給ふときく、國母陛下にも度々行啓遊ばされて、篤學なれやと宣まはせらるゝ此校の光榮何物か之に及ぶべき、いとも〳〵有難きことゝこそいふべけれ。

△●●●●●●●●お茶水附屬高等女學校

我國女子最高の學府たる、茗溪河畔の女子高等師範に附屬する此女學校は、中流以上の良孃の學ぶところ、其校風の清洒たる校規の振肅なる、常に鶴群の一鶴として、徽章の輝きと共に、つひぞはしたなき世評の口や筆の端に汚されし事なき此學校、他日女流教育家として全國各地に散り行く師範生等が、教授法研究の臺紙となんなり侍るなどゝ、夢にだに思ひなし給ひそ。都下女學校の重鎭として、世にもうらやまるゝお茶水高等女學校こそ、花ならばそれよ、雪の內より蕾を孕み寒中に清香を薫ずる白梅の氣高さにやなぞらへん、ハイカラ靴に小砂利を蹴つて歩むダンス式は、「お茶の水だわね、」とうけたまはるこそ盛んなれ。また先つ頃よりは虎狼にひとしき無識者などの電車内にはびこり行くらんを防がんとて、婦人專用の電車さへ鐵道院にて運轉せしむるときく。込み合ふ車の內にて之等令孃が釣り華に下り八百屋店頭の鮭をきめ込み給ふがいとしさに、立ちて座席をあけしかど一顧だに呉れでいみじくも玉の腕あらはに信濃町迄立ちつゞけし方もありと知人は語り申しぬ。

△●●●●●●目白臺女子大學

「早稻田よいとこ目白を受けて、まかぜ戀風そよく〳〵と、」青春とか申す小說、一度讀賣紙上に掲載されてより、何處の誰が口ずさみけん、かかる俗謠のはやり申しぬ、堀部安兵衛が仇討に其名も高き高田の馬場も遠からず、熊本侯細川邸の鶴龜松に近き此校舍、赤煉瓦の宏壯なる大建築、皇國否東洋唯一の女子大學、さればにや此處を望みて笈をおひ集る生徒引きも切らず、第二の維新は妾等婦人の掌中にあり、イブセンの作、人形の家のノラと同じく「私、自覺してよ」との自信顏もしく、オークスフオルド、ケンブリツヂ、に肩を比すべき意氣込みも盛にて緣房付の角帽こそ被らね、多數の男子なんぞ物の數とも思し給はぬ、何れも拔山蓋世の確信深き篤學の姫御前の朝に夕に學藝の研鑽怠りなき此學府、姨捨山とはいはれなき申分には候はずや。オールドミツスの集容所とは何處迄も冷酷なる言葉ぞや、此校生れ出てよりまだ十星霜、毀譽中傷は世の習ひ玉石混交の今の世なれば、ゆめ〳〵悲觀なし給ひそ、奮闘努力最後の勝利をこそ得給ふべれ、されば三伏の炎暑にもおめず怯せぬ日廻り草の大輪のあでやかに咲き誇りたるに似たるかな。支那革命の前途や如何に、多年纏足の惡習に苦しみたる清國の女性は、はや〳〵も女子參政權運動に着手せりとなん聞き侍る、などゝピンクのローズの口唇に討論し給ふなるべし、無禮多謝。

△●●●●●虎の門女學館

「不如歸」の浪さんが母校といへば誰もしる、學習院と肩を並ぶる女學校の一つ、語學とダンスに堪能なる出身者の多きが此校の特色とかや聞き及ぶ。見るからにうす暗さうな赤瓦煉の建物、田舍者ならでも繪などにて見る外國の寺院

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

らしとは一般の評、今日社交界に羽振よろしき令夫人達の多くは此校に學びの車をまげられしとぞ、今も盛んな一流の實業家紳士紳商の令孃多く、姫御前の美はしくいとろうたけて見ゆるもむべなるかな。クリーム色のラケツトサツク打振り〳〵三吋のリボンを風に吹かせつゝ、登校する令孃の多き事よ、げにや色香清けれども手折るに難きバラの花に見立つるこそいといとふさはしけれ、女流ハイカラ校の唯一とは誰が目にも見え申すぞかし。

△跡見女學校

小石川柳町に三十年餘の昔設けられたる我國最初の女學校、白丈長に桃割れの日本髪、木綿の黒紋附に紫メリンスのあんどん袴、質素順朴の美風が特色にて、淑徳圓満出藍の譽れも高く卒業生中には竹の園生の御方々或は上流の夫人令孃の多きことも異彩を放つところ、さるにても近くは女優となりし森律子のレコード破りも今は御勘氣もとけて、同窓會裡の花形ときく、一體の評はおとなしき日本流の孃樣奥樣多く、何れも書畫の御たしなみ淺からぬとは、上の好むところ下之に赴くの理なるべしと覺ゆ。さるにても女子あんどん袴の元祖たる此校は、ゆかりの色おだやかなるゆかりの花にたとへ申さんかな。

△三輪田女學校

多年教育界に貢獻せしかどにより勳六等寶冠章を得られたる女流教育家の明星三輪田女史の設立する所、學校として生れ出てよりはまだ若木なれ共行末の榮へぞ今よりまたるゝ、元來私立學校は官公立校の落武者の集ふところとの世評に反し、大發展の一着には入學試驗は官公立のそれと同日に行ふときく、勇ましきことにこそ。場所柄とて官公吏軍人などの子女多く、或は地方富豪大地主などの令孃も多しときく、「私の學校の生徒は皆粒が揃つて居ますよ、」とは同校某先生の御自慢とうけたまはる。敎頭文學士三輪田元道先生は何れの雜誌にも御名の見えぬ事なき八方式の御方、また同校に籍を置きしものは何れも純白無垢の淑女のみとは實にうらやましき校風とこそ申すべけれ。

「成績がよくてお家がよかつたら、校長さんがお嫁の世話を引受けて下さるんですつてね、」とは正直なる生徒の評、さらば此校は時雨に色ます秋の紅葉か、かざしの花の白菊か二つながらに世の人の好みのまゝになぞらへ給へ。

△女子商業學校

當代新進の女流敎育家、嘉悅女史の熱誠こめて設立したるところ、商業と名の付くところ一寸毛色變りしが如く覺ゆる、女史は學校を良人と思ひ生徒を愛子と見て、朝夕の行ひも自から簿木取りて立働かるゝとかや、應用理化學の理屈のみ多くて、お飯一つ炊き得ぬ今時の女學校出の若夫人と事變りて、此校出身の孃達は經濟的頭腦も明らかにて、應接振りも如才なくさらりとしたる其振舞、流石にとうなづかるゝ堅實なる中流家庭の家婦として申分なき令孃達は、花のみ美はしくて實の無き八重櫻山吹はものかは、花も實もある桃の花が、其清らかなるは百合にもなぞらへつべけんか。

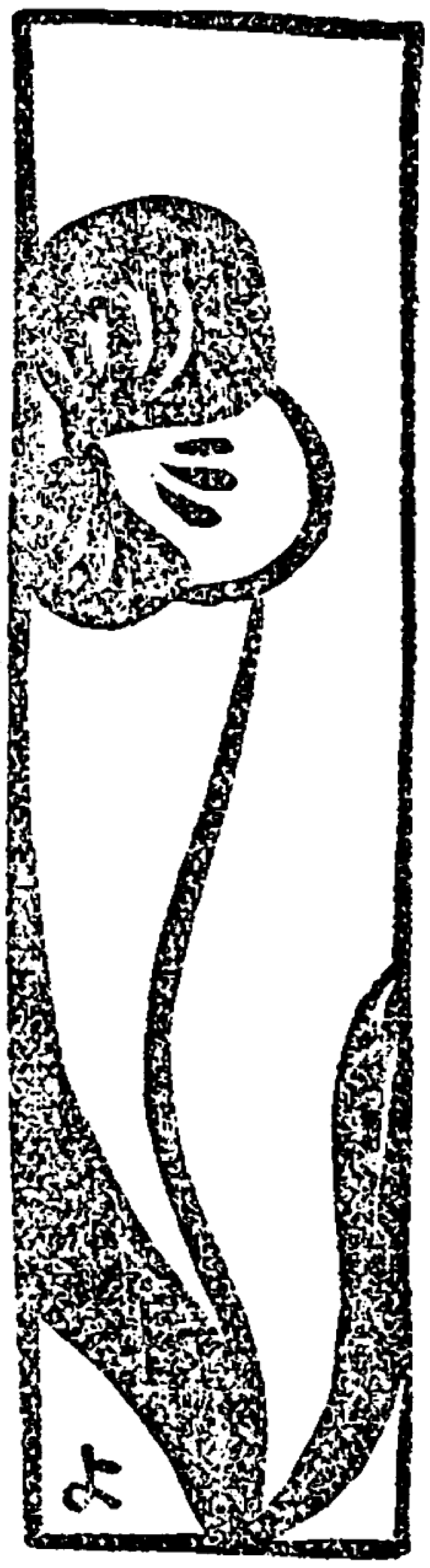
△音樂學校

上野の森の奥深く、帝國圖書館とは脊中合せ朝に夕に歡樂の調悲哀の曲、或は高く或は低く和洋音樂の朗々たる上野の木立、吹き來る風も今頃は花の吹雪、雨後の朝月の夕眺め多かる此學校よ。我國唯一の男女混交の學府、上野の西太皇と評されし幸田延子姉妹を始めとし、神戸絢子天野初子姉妹、近くは獨唱家として名高き柴田環女史、皆此校の出身なり。げにや我國音樂の叢淵ともいふ可き此校の生徒等は、人に知られぬプライドも持ち給ふ可し、いやにアーチスト振り給はゞ臭味たつぷりなどゝ申し上ん、お山の大將己れ一人などゝはなきこゝみ給ひそこれ烈々たる九夏三伏の炎暑をものともせで、誇りにほこる罌粟の花なるべし、あはれ一聲世に啼く時鳥をこそまち申すべけれ。

△市立第一女學校

未だ神田橋の時代より、十年一日の如く溫厚なる伊藤校長を戴くだけにも、其校風の一端ぞしらるゝ、身を以て範を示し賢母良妻の養成につとめ給ふ熱心、此良校長は生徒は父となつき申ときく、卒業生の多くは中流家庭の主婦女流敎育家など學校の古きだけ其人々の榮えて亦府立なる故にや校規素より正しく、何等世上に噂の種子蒔かぬは幸ある學校よと覺ゆ、瀟洒なる水仙花他にも持ち行きがたき心地なんし侍るを。

＊ ＊ ＊



ニコライ會堂の禮拜

神近市子

今夜はミスGの先導でニコライの禮拜を見物に行つた。私達の級丈だと思つたら一年の人や豫科の人やで寄宿舍から丈も三十人位は有つたゞらう。

Kさんと二人で甲武線でお茶の水迄行く。私達が一番早かつたので中に入つて待つた。

ルネサンス式の會堂は可成廣い。市中の何處からでも仰がれるあの高い塔の裏迄は何もない。ずつと高く灣形をなして反響する樣になつて居る。一寸ハッと云つてもガーンと反響しさうだ。

樂器を用ひない聖歌班の頌歌は全く天下の一品。ピッチの高い律と幅廣いフールな呂とがしつくりと合つて、肉を象る地より起つて、塔裏で響いて返つて來る「聖なる〳〵」と方々の壁にかゝつて居る繪の中の人達迄が、歌つてる樣な感がする。

セントポールの本山を象つて建てられたあの宏壯な建物に、瓦斯や電氣や文明の燈は一個も用ゐてないと聞いて驚かぬ人は有るまい（但入口は知らず）。中世紀に法王達が司つて居た頃の敎會を覺え樣とてか、合せては百本餘も大形の蠟燭をともしてある。

至聖所の扉は金色燦爛として美しい。兩方に開く樣になつて居て、一方の戸の上には光まばゆき日輪を彫つてある。時をおいて其戸を開閉する度に、黃金の十字架が高い壇に、立つて、其前に蠟燭の輝いた至聖所の一部が見えて、聖歌班は新しい頌歌にうつる。

氷の如き眼光、隆準にして頰の鬚深きセルギー主敎の長髮肩にたれて立つた姿を見て、私はペテロを思ひ出さずには居られなかつた。「三度彼を知らず」と云つたにしても遂に岩の上に神の宮を築いた彼ペテロ、とうしてもペテロはあんな體格を持つて居たに違ない。

大主敎逝いて漸く旬日、此人は心はどんな思にみたされて居るだらう。必ずや自分より前に去つた聖徒の至誠の生涯で有らう。比較的世に後れた宗敎による人の行く道は至誠より外はない。

市内の信者もぞろ〳〵と入つて來ては床にひれ伏し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て禮拜して居る。何か口の中で云つては胸に十字を書いて居る。比較的に中以下の階級の人達が多い。

僧職の人らしい何か白つぽい明るい色の大きな着物を着た人が、丸形な香爐の紐の樣なものをつけて、至聖所の内外から兩側に並べて掛けられた聖像の前をジヤン〳〵と振つて歩く、うすい煙がそれから出て、なつかしい香がよせて來る。

聖像はキリストのが一枚丈判然と見えた。マドンナらしいのも有る。その外のは十三四枚聖徒達らしい。十二人の弟子達にポーロやステパノの樣な人達で有るべきだと私は思ふ。

その次には尊い聖書に接吻する儀式が有る。聖書が至聖所の方から出て小さい机の上にのせられると、お燈明然と蠟燭が備へられて、白髪の老僧が其側に立つそれを皆の者が交る〴〵行つて接吻しては歸つて來る。

一度ある老僧が私共の方に手をのべて「すべてのものに祝福あーれ」と云つた。すると聖歌班からも唱く。が如くに起つて「すべてのものに祝福あーれ」と反響した。地に起つて天につげるもの丶樣にひゞく聖歌を聞いて、私も衷心より「すべての苦しめる悲しめる者に祝福あらんことを」と唱へずには居られなかつた。

時間が足りなくなるからとお說敎丈は聞かずに歸つた。學生と見てか故大主敎の記念の爲にあまりものでは有るけれど受け取つてくれと云つて、皆に美しい菓子の箱を送られた。カステラの臺に十字架と梅の花をおいて、それに「ニコライ大主敎記念」と出して有つた出掛けに賽錢の箱を思ひ出したものもミスGだつた私は銅貨を五錢入れて、私の「レプタ二枚」とした。

（三日二日）

私は今も未だ昨夜の物悲しい印象からの氣分を樂しんで居る。シト〳〵と雨が降つて木の芽吹く頃から、初夏にかけてはウロ〳〵と町をさまよふて泣き度い時がよくある。之れからそんな氣分の時には私はあの殿に行き度と思ふ。信ずる信ぜぬではない。あの淸い崇高な感想を得たいからで。（×日朝）

私の心は日に〳〵凡の人を離れて行く。肉親も戀人も仲のよかつた友達も、あらゆる人が離れて行く。それらの人が再び何時歸つて來るだらうか。私は早く歸らせる樣に確然とした解決點に達せねばならぬ。

一時學校と云ふものに對して持つて居た信仰も愛着もそんなに根底あるものではなかつた。それでも無意

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

識にしても私は矢張り賢い事をして居た。家庭や社會が安全と見て自由を與へて私共若い女を勝手にさせておく處は外にないから。（×月×日）

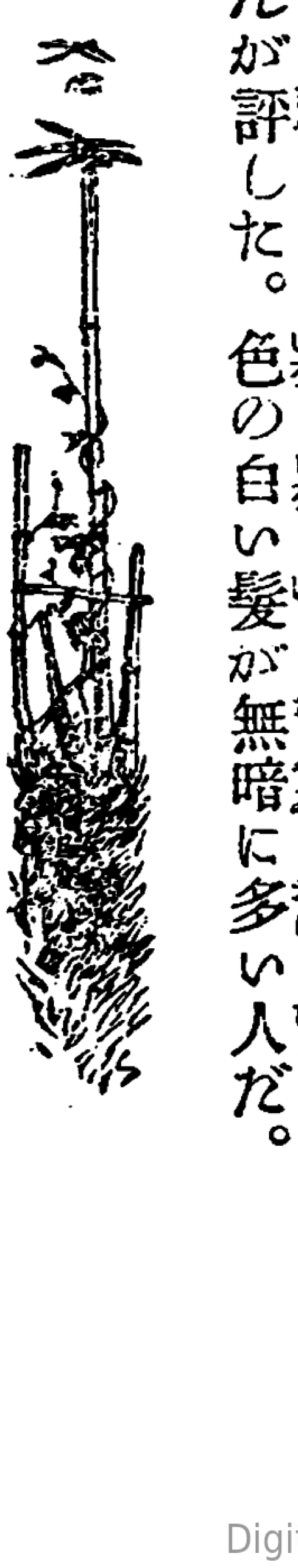
月謝を納めに行く時「稅金を納めてくる」と云つて居たKさんは退學して終つた。巣鴨邊に隱家が出來たとか云ふ噂がくる。あの人の芝居は人の爲でなくつて何時も自分の方で筋書を作つてかゝつてるから、見て居ても氣持がいゝ。それでもそれを批評して、今度はこんなに出て來てくれゝばいゝとか、もつと血の出る處を見度いとか云つて納つて居る、私共は、悧巧な樣で實際はみぢめなものかも知れない。（××日）

卒業する人達は嬉し相だ。今年は師範科生は大抵賣れ口が有る相で、卒業式がすんだら直に任地へ行くと云ふ人もある。Oさんは水戶、Kさんは金澤に極つたらしい。

「私田舍に行つて敎員がして見度と云つて、お父さんに叱られたわ」とだゝつ子で癇癪家のMさんが云ふのが可笑しいとSさんが笑ふ。でも學科は大して出來ないMさんが、實習では案外上手と敎員間の定評だと云ふから矢張り世の中は樣々だと云ふより外は有るまい「私は早く卒業して奉職して見度い。そして自分のとつたお金で好なことが仕度い」と私の前列に居るTさんは云ふ。やつと二十になつた許で、岡山の女學校出だ「可笑しい」とSさんと笑つたものゝ、これでもう三度「稅金を納めて」、論文一ッ書いて、敎育學や發音學を少し筆記して終へば、天下幾百の女學校の敎師になる資格が出來ると思へばお互にえらいものだ。（××日）

今日は藤村さんには美那子坂のとこで御目にかゝる「兄さん（操さん）は好い男だつたつて知つてた人が云つたけれど、あの人は見つともないわ」とNさんに何時か通り拔けに云はれて困つた事が有つた。質素な溫和し相な方だ、第二高女の秀才ださうだ。毎朝逢はないことはない。普通の時は神樂坂か見附で逢ふ。少し私が晩かつたら築土あたり、早ければ法制大學のあたりで屹度出逢ふ。お宅は九段に有る。私は九段を通つて、番町の學校に行く。

美那子坂もKさんが付けた名だ。北村透谷の未亡人の宅が坂の中程に有るからで。藤村さんの「春」に有る小さい令孃はもう十七八位、「一寸雛妓みたいね」とNさんが評した。色の白い髮が無暗に多い人だ。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

庭園の趣味

家族一同の娯む場所

子爵夫人　岩倉知子

庭園のお尋ねでございますか、何とお答申して宜しいか私共には能く分りませんけれど——。

大きな庭園には大きな庭園の趣味があり、小さいのは小さいで復趣味がでございます。庭園は大きいから好いと云ふわけでもなく、復お金の澤山かゝつた庭園が必ずしも趣味が深いといふ譯のものではございません。賤が伏屋の夕顔の



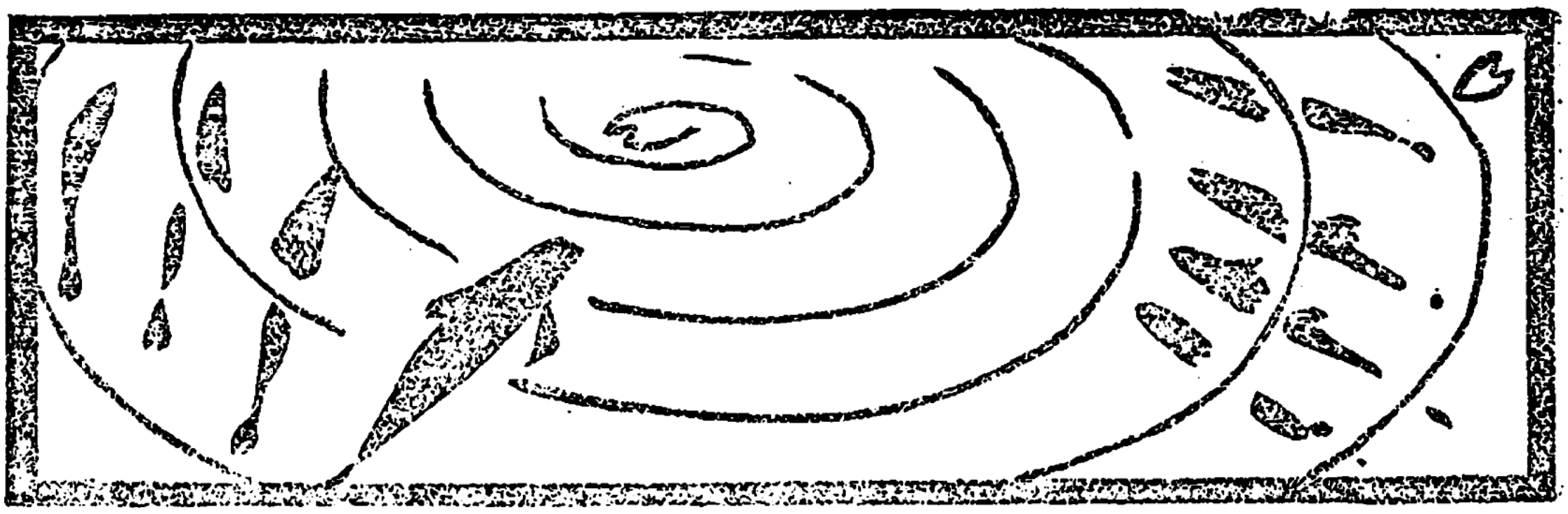
這ふ籬にも趣味はございます。

私共では夏の夕方、姑や、良人や、子供等と一しよに夕涼みの心持で、お庭へ出て娯しく遊んだり、語つたりいたしますが、此が何よりの庭園の趣味でございます、幾許お庭が良くても、住んで居る人々の、心々に不平や煩悶がございましたら、何にもなりません。近頃やかましく申します婦人問題とやら、ノラが何うとか、マグダが何うとか聞きますけれど、私のやうに家庭以外に樂天地があらうとも思はぬ者には、全く其等のことは別問題でございます。

否、お話が逸れましたが、庭園といふものは、自然に出來て居れば宜しいので、谷なら谷、流水なら流水、丘なら丘のやうに見せたいものです。廣野の景を見せた芝生の上へ、花菖蒲を植ゑたり何かしては、さつぱり埒もないものになりますが、野原の趣きを見せる爲には、菫、蒲公英など植ゑましたら、「すみすてし妹が垣根は荒にけりつばな交りの菫のみして」と云ふ歌の意にも適ひまして、面白からうと思ひます。從つて谷間ならば一つ葉とか、シダとか云ふやうな陰濕な植物をあしらふとか云ふ風に、自然に背かぬやう心を用ひたら結構だらうと思ひます。

兎に角庭園といふものは、家庭と離して見ることは出來ないものでございますから、家庭の娯樂と云ふことゝ相伴つてこそ、庭園の趣味も價値があるのでせうと存じます。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



忘れられたる別莊の庭

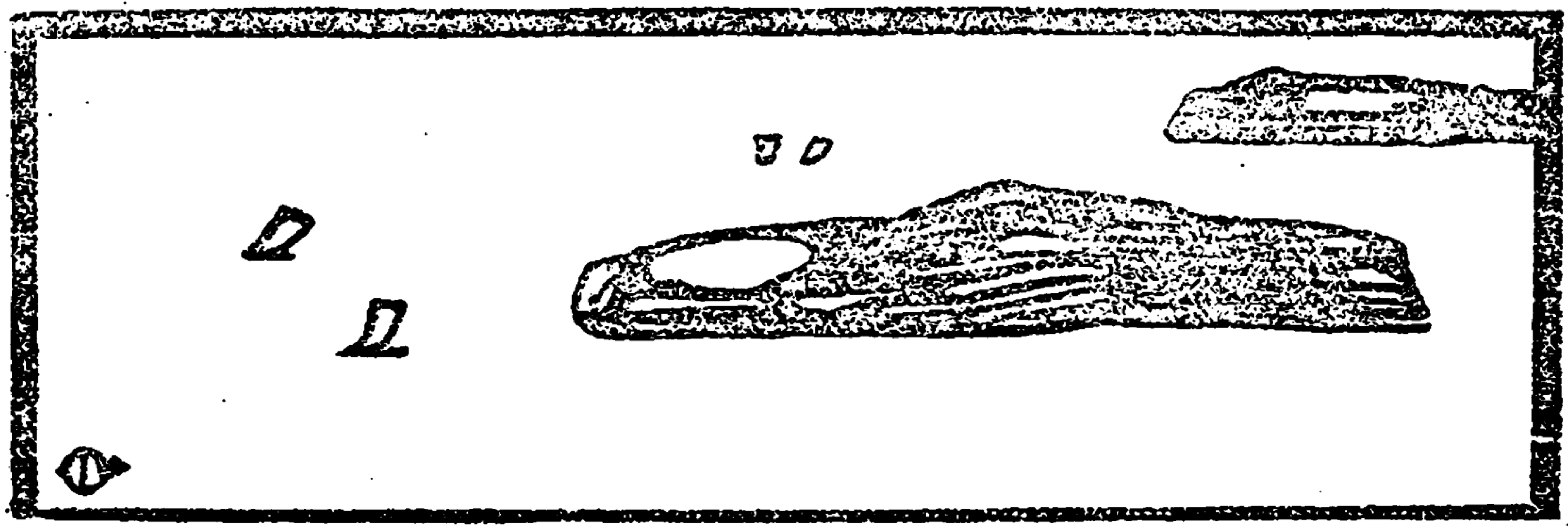
日向衆議院議員夫人　日向きむ子

庭園ですか、私は、主に忘られた別莊の庭とでも云つたやうな趣味のあるのが好きです、例へばですね、『不如歸』の中で、武男が横須賀へ行つた序に逗子の別莊に迷ひ込んだ時、老爺一人に守られてゐる庭のことが書いてあるでせう戸は悉く閉めて、手水鉢に水絶え、庭の青葉は茂りに茂りて、所々に梅子こぼれ、青々としたる芝生に咲き殘れる薔薇の花半は落ちて、ほのかなる香は庭に落ちたり、何處にも人の氣はなくて、屋後の松に蟬の聲のみぞ――。

また『源氏物語』の末摘花の中にある庭。

御車よせたる中門の、いといたうゆがみよろぼひて夜目にてぞしるきながらも、よろづかくへたること多かりけり、いと哀に淋しう荒れまどへるに、松の雪のみ暖かげに降り積る、山里の心地して、ものあはれなるを――。

庭園とは聊か違ひますけれど、『伊勢物語』の中の武藏野のことを書いた條など皆好きです。庭園に限りませず凡て自然は好きです、庭園なども成丈け自然に近い趣きを愛します。私は子供の時から田舍で育てられた爲でゞもあるのでせうか、好い自然に接しますと母の懷に眠るやうな、實に何とも云へない好い氣持になるのでございます。



花の中で好きなのは、白百合、睡蓮、月見草、勿忘草、就中白百合が好きです。

白百合は其形、其色、其香の凡てが喩へやうのない滿足を與へます。そして純潔、權威、謙遜の美德を輝きで現はしたやうな花です。一見して私は神と云ふ崇高なる念が起ります。

花に就いて一寸私の筆のすさみに書いたものを御覽に入れませう。

淸く澄んだ水の鏡に影うつす睡蓮、暗き水に星の樣に輝く花、銀のやうにささらさゞなみの歌にゆられて今日は向ふの岸に咲く花。

月見草は夜咲く花、心ない晝の日かげには萎れて、夕の空に浴してよみがへる花、黑ビロードの夜の闇を眞珠の光にやはらかく破る花、仇し世の人に見えじと思ひつゝわが咲くためにひとり咲く夜の花。

勿忘草、水色に小さい小さい花の姿は、このなつかしい花の爲か、名は花から出たてとのほか、忘れよとても忘れがたき花とその名。

白百合の歌。

ゆゑしらぬ胸の思ひや白百合の
　かをりたゝへし谷の朝風

花あはれみたらし鉢の苔水に
　ひたし忘れし白き花あはれ



日本趣味——禪味——山水

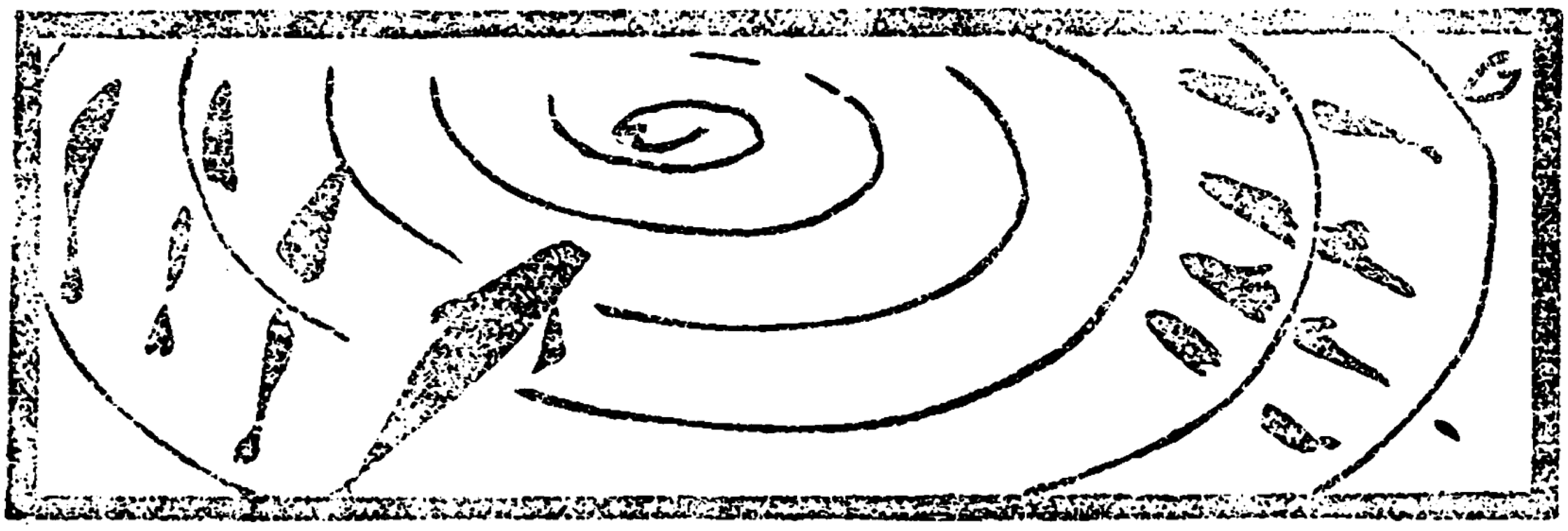
比志島陸軍中將夫人　比志島雪子

近頃はだいぶ西洋趣味の庭園も見受けますが、日本趣味の庭園と比較して見ますと、日本式の庭園には禪味を帶びて居ります。それですから庭園の構造も幾許か陰鬱の傾きがございます、然し陰鬱なものには自ら一種の幽邃とか、靜寂とか云ふ意味が含まれて居りまして、此點が日本式の長所で、また私共の好きなところでございます。

西洋趣味は凡て活潑ですが、日本趣味から見ますと高尚な處がなく淺薄に思はれます。公園で申しますなら、芝公園が日本趣味で、日比谷公園が西洋趣味でせう。

花一つにしましても、西洋人はつかみざしにしますが、日本人であると花の一輪毎にでも其見所を愛します。

西洋人は廣い平原を見熟れて居る所爲でせうか、平原を縮小したやうな庭の造り方をいたします、日本人は山水明媚なる風景を見熟れて居りますから、庭を造りますにしても、山もあり、河もあり、巖もあり、樹もあると云つたやうに、山水の景そのものを縮小したやうに造ります。それでございますから、庭



園と申しましても、何處か斯う或る風景の好い場所を一部分持つて來たやうな氣がいたします。

これからの庭の草花では、秋海棠が好きでございます、優しくて、あはれなやうなところに言ひ得ぬ趣がございます。

あつさりした趣味

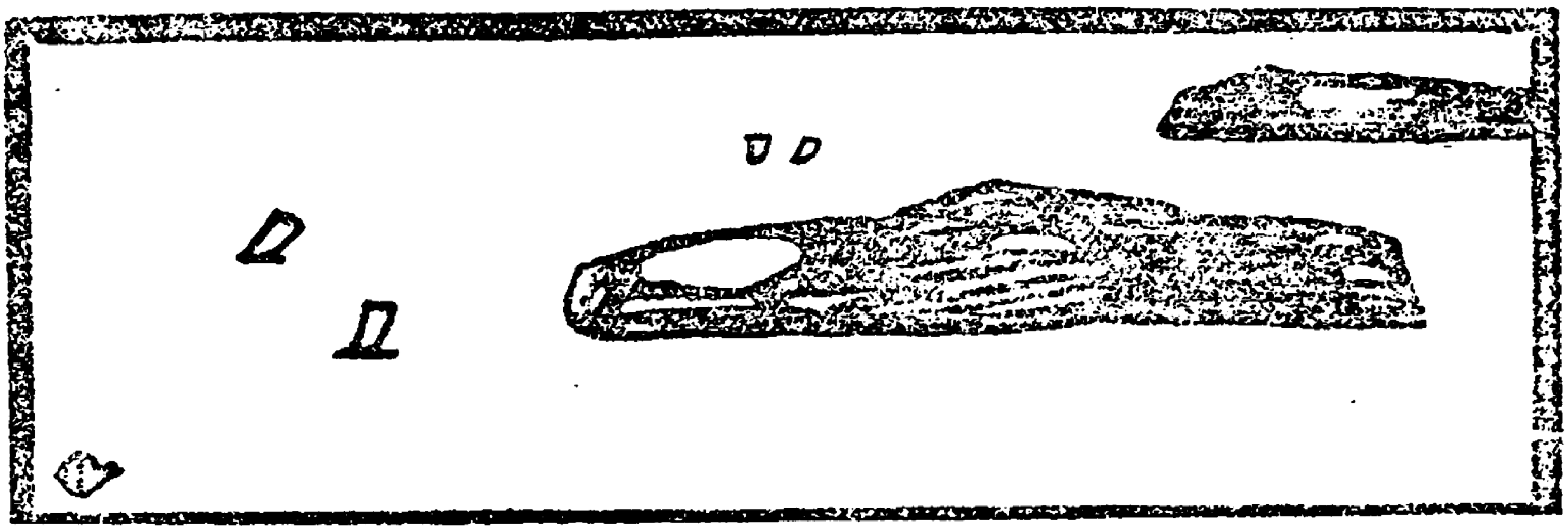
伊澤貴族院議員夫人　伊澤千勢子

私は庭園に限らず何でも淡雅したものが好きでございまして、庭の木を植ゑるにいたしましても、ごちや〳〵と澤山植ゑたからとて、深山幽谷の趣が出ると云ふものではございません、一つ間違ふと植木屋の植込のやうになります。一つの樹、一つの石でも、配置工合で、一鳥不啼山更幽の情景を表はすことが出來るものでございます。凡て物は足らはぬ處に趣の見えるもので、餘り欲張つて澤山ありすぎるのは趣味を損ふやうに思ひます。

城南の離宮の四季山には、言葉にも及ばぬほどの美しい景色を藏して居りますし、六條の河原院の林泉が、崇高優美の印象を與へますのも、庭園が美と云ふ目的を果してゐるものでございます。

城南の離宮や、河原の院のやうな貴族的大庭園でなくとも、私共の住む座敷

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



さきに造る手狹な庭園でも、一株の松、一個の石を以て、優に趣きのあるやうに造れます、却つて日比谷公園のやうに只だゞつ廣いばかりで趣味のない庭園よりは立優つて見えるのでございます。庭園の良否は、地面の大きいことや、樹の多いことでなく、美といふことの多少に由るのでございます。

私は又庭前に雜草を生やして置くのが大嫌ひで、少しでも草が生えますと、敵のやうに引きますが、此がなか〳〵大仕事でございます。

また私は庭園でも、樹木でも、自然のまゝに飾り氣がないのが好きでございます。人工には虛飾や、嘘があつていけません。私は中流以上の婦人達が、今少しく此嘘も虛僞もない自然に接して、心持を淸くせられるやうに望むのでございます。又地方の婦人達も、神の造つた自然を捨てゝ、人の造つた都會にかぶれないやうになされたいものでございます。

白い朝顏、白い薔薇

武富海軍少將夫人　武富友子

庭園は家屋の一部分であると申しても差支ございません、家あつてのお庭でお庭も亦家屋に添ふて其美を增すのでございます。何んなにお立派なお住居でもお庭がございませんでしたら、何うでせう、風情もなく趣味もなく、實に淋



しいものでございませう、殊に夏の暑い時などは、庭があつて蘇生るのでございます。

たゞ趣味の上からばかりでなく、庭園は私共の生活の必要上から見ましても大切なものです。庭園がありますと、周圍の空氣の清潔になるのは勿論、都會の塵埃を避けますから、衛生上からも大變によろしうございます。また火事の時なども、廣い庭がございますと、思はぬ災を免れることもございませうし、避難の爲にも都合がよろしうございます、風雨の害も亦多少防ぐことが出來ます。

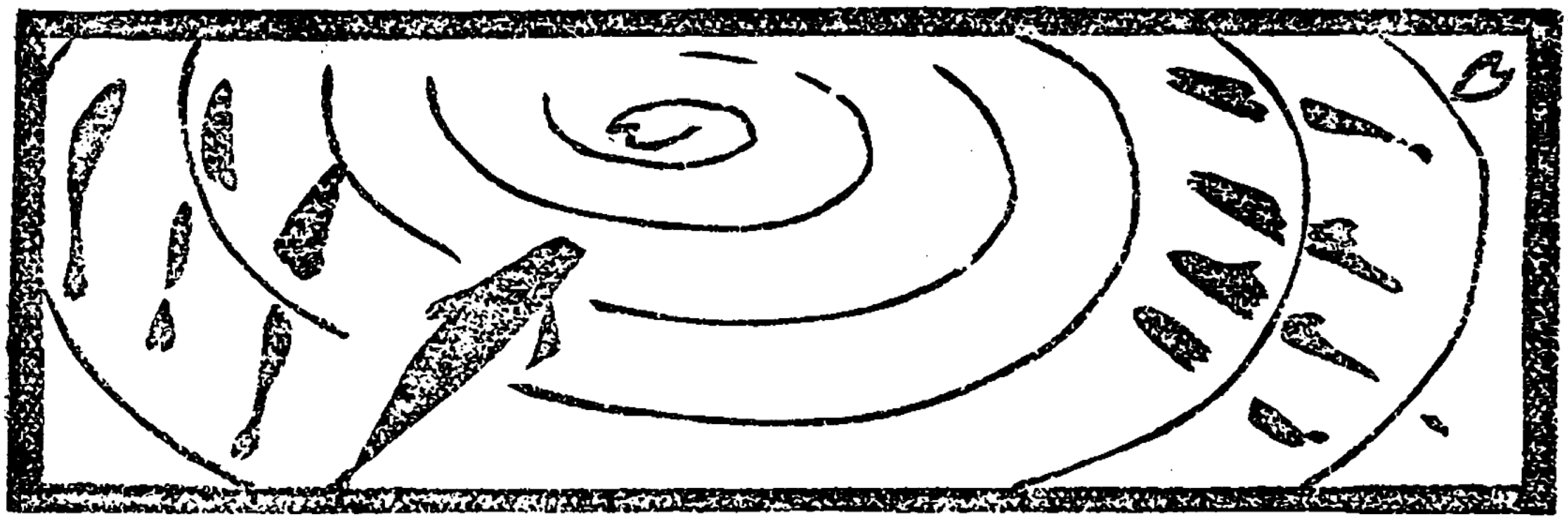
夏の庭園の植物では、楓、芭蕉、葉蘭などが、何より好きでございます、此等の樹木は夏の庭園に尤も適はしいやうに思はれます。

草花では、夏は撫子の類を愛して居ります、培養もいたします。尤も今年は病氣に罹りましたものですから、培養も出來ませんでした、たゞあそこにございますあれだけでございます。

白い朝顏、白い薔薇などの、白い花は凡て夏の庭によろしいやうに思ひます一見して涼しいやうでございます。

葡萄の青いのも、夏は好いものでございます、一寸生けましても、一種の趣がございます。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



樹では楓、草では野菊

故佐久間秀英舍監査役夫人　佐久間幸子

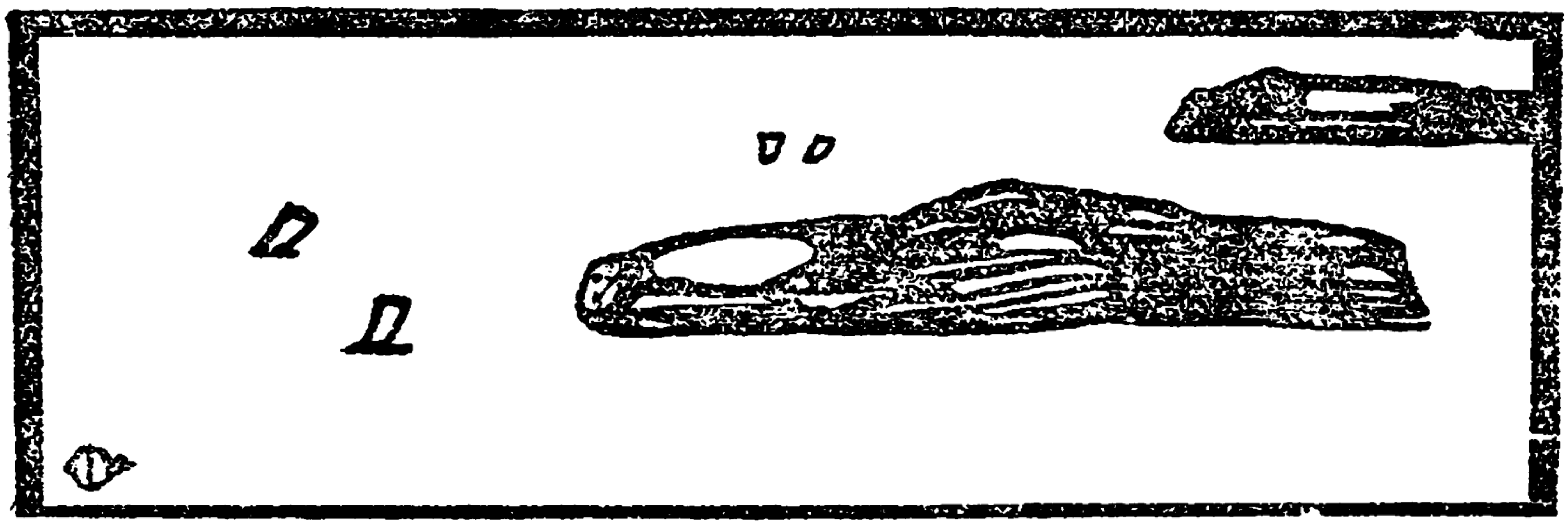
庭園に就いてゞすか、私は不斷から特別に庭園に就いて何も考へて居りませんから、格別お話し申すほどのこともございませんが——。

例へ猫の額のやうな庭でもよろしいから、出來る丈けの範圍で、樹を植ゑ、花を植ゑると云ふことは優しいことでございます。

庭の樹立の間からお座敷の障子の一部が見えたり、屋根の一部が見えたりするのは、私のやうな沒趣味な者でも何となく奥床しい感じがいたします。

私は樹の中では、梅が好きでございます。菅公が愛されたと云ふことは有名な話で誰でも知つて居りますが、私は梅の樹が、樹の中でも尤も早く花が咲き、葉となり、實を結ぶまで、恰度女の一生涯に思ひ合されて好きなのでございます。

夏は楓が第一でございませう、あのみづ〳〵と青葉の茂つた處を見て居りますと、全く夏の暑さを忘れてしまひます、少しの風もなくて、焦りつけるやうな暑中でも、楓の蔭へ床几でも置きまして涼んで居りますと、自づと涼味が起ります。



草花でございますか、近頃はダリアなどを賞め稱へる方もございますが、私は矢張日本の野菊のやうな花が好きでございます。あの細い莖から薄紫の花の咲くのは、上品で優雅ではございませんか。

御承知の通り昨年主人が逝去なりましてから、意思が弱いとでも申すのでございませうか、何彼につけても世の中が悲觀され、時々途方にくれることもございましたが、何と思つても返らぬことでございますから、此節では大分あきらめて居ります。それに姑が神經衰弱でぶら〳〵して居りますから、何か氣のまぎれるものをと思ひまして、先頃から姑に三味線を教へて、互に慰めたり慰められたりして居ります。何分八歳を頭に四人の子供を大きくして、完全な人間にせねばならぬのでございますから、これからも其邊の確信を抱いて參らねばならぬと存じて居ります。

四季の變化に注意せよ

森村組紐育支店長松原氏夫人　松原とよ子

庭園は廣い狹いに拘はらず、壁とか、塀とか、垣根とかを先づ四季ともに落葉のしない常磐木で隱すやうにいたしまして、自ら山林幽谷の趣をほのめかしたいものでございます。



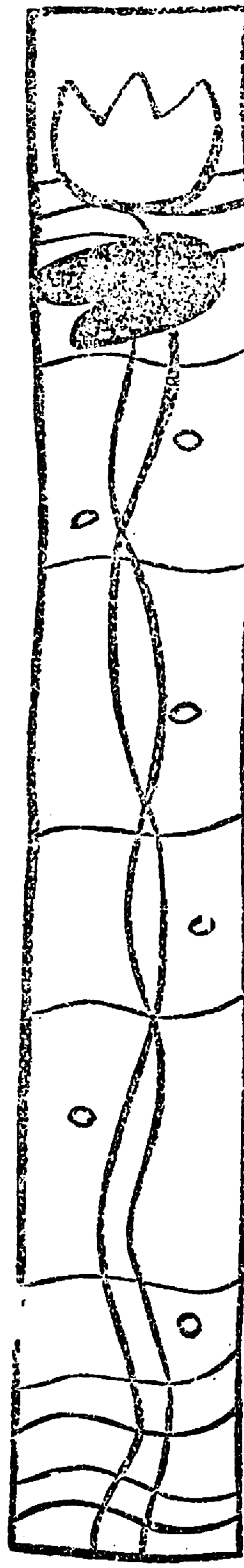
樹の植ゑ方、石の配り方なども、單調にならないやう、變化を求めて、同じ樹を幾本も植ゑたり、同じやうな石を幾個も据ゑたりしないやうに、石の大小樹の高低に應じて、それ〲配置を考へなければなりません。

變化を考へると云ふことの外に、今一つ注意すべきは、四季の移り變りでございます、松なら松を植ゑると同時に、紅葉のやうな色の變る樹も其傍に植たいものでございます。

春から夏へかけて、あを〳〵と青葉の茂つて居るのも、心持の爽かな好いものでございますが、それが夏去り秋來ると共に、眞紅になりまして松の樹の間などに交つて居るのを見ますと、宛然山林にでも行つたやうな心持になるのでございます。同じ庭園を造りますにも、此四季の變移と云ふことを心に置いて造らないと、趣が少うございます。

庭園に植る樹の中では紅葉が好きでございます。何しろ御覽の通り狹い庭ですから、此は斯うして彼はあゝしてと思ひましても、思ふやうな工合には參らないのでございます。けれども紅葉は好きなものですから、あゝして植ゑてございます、枝振といひ、葉の形と云ひ、いつ見ても飽きませんし、殊に夏向には涼しい樹でございます。

☆　☆　☆　☆　☆



地下一千尺の世界

紐育領事館青木新氏夫人　青木幸子

父が九州の三池炭坑に關係して居りますので、其地に暫く滞在して居りましたのを幸ひに、母や姉と一しよに炭坑を見に行きました。一千尺も下の地中で、數千人の人が作業して居る有様は、實に想像以外で、迚も短いお話では盡くされませんが、概略を申してみませう。

私共はすつかり防水支度をして、エレヴエターに乘つて坑内へ下りたのでございます、暗中を下るのですからエレヴエターにはカンテラの灯を點けてでございます、五百尺と技師の方に聲かけられて、半分下つたのかと思つて居ります内に、頓て一千尺の地下に着きますと、驚いたのは地上と同じやうに電車が通つて居ります、電車と申しましても、トロツコですが、恰度大きなトンネルの中を通つてゐるやうで、二間置き程に兩側に電燈が點いて居ります、此のトロツコで石炭を搬ぶのです。一方では又七十五頭からの馬が石炭を運搬して居ります、工場の全體は地上の物と同じやうに設備されて、數千の人々が各は其役に應じ、カンテラの灯で作業して居ります。此有樣を見た私共は、宛然話に聞いた地獄のやうに思はれて、何と慰めて宜いや

ら涙が出るやうでございました。

坑内には子供の預り場所がございますので、子供のある工夫の妻なども、子供を預けて置いて、夫と一緒に女相當の仕事をして居ります。炭坑の仕事は、一朝事變が起ると、大變なことになる例もございますから言はゞ生命懸の仕事なんですが、世間は方便なもので皆鼻唄をうたひながら面白さうに仕事をして居ります其等の工夫工女を一々慰めてやりますと、彼等も嬉しさうに『有りがたう』と云ひました、其時の『有りがたう』の意味は眞に深い印象を私に殘しました、私も嘗て斯んなに滿足した情を以て『有りがたう』を受けたことはございませんでした。

一度でも地下の別世界に働いてゐる彼等の生活を見ますと、贅澤なことは申されません。そこで急に思ひ立つたことがございますのです、御承知の通り學習院女學部に、卒業生を會員として組織された若葉會と云ふのがございます、幸ひ其會員の方で九州地方に家庭を持つて居る方も數十人でございますから、日歸りに出來さうな所に住居の方だけを招いで、私共の舍宅で若葉會を開いたのでございます、彼此十五六人の方がお見えなさいましたので、お馳走をしたり、お話をしたりいたしましたが、當日第一の御馳走は例のエレヴエターでございました、皆樣をおつれ申して地下一千尺の別世界をお見せ申したのです、矢張皆樣も私共と同感でございました。

若葉會員に限らず世間一般の方――殊に上流の婦人方などに、一度は其樣子をお見せ申したいものでございます、三井三郎助氏の奥樣も坑内を御覽になつて、工夫や工女をお慰めなされたさうでございます、兎に角一度でも見たものでなければ、到底想像がつかないだらうと存じます。

これから追々夏季の旅行期になりますから、皆樣方も各地へ御旅行なさいますが、只山を見るとか、海を見るとかの外に、斯ういふ別天地も御覽になつて、其美しい同情の涙をそゝがれたいものです、女の近寄れないやうな所でも、强て行て見ると爲になります。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



化粧瑣談　身だしなみの禮式

藤波芙蓉

○人性美を愛し、美を好む以上、化粧は遂に廢止さるべきでない。化粧の目的は、そが天禀美の缺點若くは不備を塡補すると同時に、更に一段の美を添加せしむるにある。卽ち化粧美發揚の全現、これ終極の目的であります。

○この目的を遂成すべく、如何にせば能く化粧美の發揚を遺憾なく全現さすことが出來るであらうか。

○先づ第一に心得べきは、自己を知ることであります。世に醜怪なるものを形容するに、鵜の眞似をする鴉といふ諺がある、これ自己を知らざるの致す所ではないでせうか、故に化粧の要義は所謂「らしくしてらしくせぬ」點に存すると申して差支ないと思ひます。

○自己はこれ何者ぞ、自己の階級は如何、年齡は如何、容貌は如何、風姿は如何等、自己の身分の如何より自己風貌の長所缺點を能く知悉して以て、娘は娘らしく茶屋女らしくせず、女學生は女學生らしく藝妓らしくせず、肥肉の人は肥肉にふさはしく、瘦軀の人は又瘦軀相應の化粧を施すてこそ、誠に自然に適順つた化粧美の發揚を、軈て全現せしむる所以であると存じます。

○或人は化粧を以て「お洒落の仕事」といふ。これ時勢の弊を穿つた半面の眞理を含んで居る評語と思ひます。等しく一水、牛これを飮めば以て人を養ふの乳となり、蛇これを啜れば以て人を害ふの毒となる。化粧も其仕方の心得如何によつてお洒落の仕事ともなり身節制の禮式ともなるので、卽ち令孃が茶屋女の眞似

をしたり、女學生が藝妓のやうな風をしたり、朝から晩まで鏡と首引をしたりするは、正しく化粧美發揚上の醜態化されたもの、正にお洒落の仕事であつて、私は斯る化粧を呪ふものであります。

○天下の事物、一として一體兩面の定則に漏るゝものはありません。鏡に表裏ある如く、眞の裏に僞あり美の影に醜あるは、事物自然の理數であります。「傀儡師胸にかけたる人形箱、佛出さうと鬼を出さうと」で化粧も人性の通理なる以上、其所に眞僞美醜の伴ふてとは蓋し免るべくもなき命運であると云はねばなりませぬ。而して其眞僞美醜の外象は、其眞僞美醜の內容の發現である關係の上から、眞に化粧美の發揚を全成することに於て、その精神の修養、少くとも自己を知る底の向上的優雅の心情を養成し蘊蓄するは、化粧道前提の第一要旨であると存じます。今茲に一個の婦人ありと假定して、その婦人が可愛き慈兒を顧みる時の溫雅なる容子と、其良人が一夜を紅樓に夢みて歸り來れる時に瞥る時の冷嫉なる顏貌とは、如何に其美醜を異にするでせうか、化粧美も精神美を閑却しては何等の意義もなさぬといふ理由は、この一事に見ても思ひ半ばに過ぎるではありませんか。

○けれども化粧は、もと肉體美發揚の方式を意味するので、精神成美の修養これを修神と云ふに對し、化粧を以て、淸の李笠翁は、その著「閑活偶寄」に於て之れを修容と云はれました。

○既に修神に對しての修容です。啻に精神美の修養あり、向上的優雅の心情を成蓄したのみにては、化粧美の發揚を全現さるべきではありません。如何にゲーテ、シエークスピヤーの詩情あるも、ゲーテ、シエークスピヤーの作詩的手腕なくば、吾人は遂にゲーテ、シエークスピヤーの詩美に憧憬する能はざると同樣、その精神美を發現すべく、これに伴ふ化粧的技能なくば、以て其美を添加化成することは出來ぬ筈です。故に化粧の術は、繪畫、音樂及び詩歌等と並伍して一部高尙なる美術であると云うて毫も差支ないと信じます。

○私は所謂眞化粧とは、斯の如き精神と斯の如き修

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

養とによりて施されたる化粧を意味するので、彼の「お洒落の仕事」と呼ぶ僞化粧に對し、「身節制の禮式」と申すべく、而して身節制は云ふまでもなく女德の一要素ではありませんか。

○論より證據、彼のお洒落的僞化粧を施した女性を御覽なさい、啻に初めより化粧せぬに劣れる醜惡の念を他に起さしむるのみならず、その品性の如何に下賤なるかを自家廣告しつゝあるではないでせうか。これに反して、世に良妻賢母と讃はるゝ婦人は、曾て其良人や我兒にすら、寐みだれ髮一筋の亂れさへも見せなんだと云ひます。

○蓋し化粧の發揚は、何もコテ〳〵塗りの厚化粧によつてのみ實現さるゝものとは限りませぬ。手腕のある畫家の一墨一點自ら繪美をなすが如く、老練なる詩人の一字半句又自ら詩美の横溢を見るが如く、ポット一つ打つ白粉にも、化粧美は添加さるべく、こゝが卽ち修容の美術たる所以であるのです。

○併し世の中の事、「阿彌から長老にはなれぬ」其所には幾多の苦心と工夫と習練とを要します。化粧の一事また此例外たるものではありません。

○されば人性美を好み、美を欲するのが本能であり至情である以上、化粧遂に廢絶することは出來ませぬ。而して其化粧美を發揚するには、その精神美の修養に兼ねて修容の技能を養蓄せねばなりませぬ。故に美を生命とする女性にとりては、如何に化粧美を全現せしむべきかといふことは、實に容易ならぬ大問題であると私は確信して居ります。

○要するに以上の化粧談は、題の如く瑣談であつて一貫した條理を立てゝ論議したのではありませんから、支離滅裂の談片に過ぎません。其全體に渡つての化粧の理論や方式に就ては、いづれ時期を見計ひ題を換へて、改めて御見に接するの榮を得やうと思ひます。で今日はこれで御免を蒙ることに致します。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

婦人は何んな心を持つてゐるか（上）

澤田順次郎

（一）男子の心理、女子の心理

婦人が男子の心を忖度することが困難なると同じく男子が婦人の心を推測することも困難です從來の心理學なるものは、多く男の手に依つて出來たもので、孰れかといへば男の心理學です。解剖とか生理とかであると、肉眼で、肉眼で見えぬものは顯微鏡で觀察することが出來ますから、兩者の硏究が能く届いて居りますけれども、無形の心は眼で見ることが出來ませんから、女の心は男の心と同じであるか、異ふかといふことは六かしいのです。それで教育でも、女の教育は男の教育と異つて居りますが、これは果して別にして宜いやら惡いやら、近來議論が多くなりまして、心理學上の疑問です。

さういふ事情ですから婦人の心理は、婦人でなければ、眞實のことは分りませんが、其の女の心理學者と男の心理學者との兩方面から觀察した心理學に基いて今婦人の心理現象を述べて見やうと思ひます。

（二）智的現象

女は考へることが困難

直觀　外界の事物が感官を刺戟して、意識中に一種の心的現象を生ずるものを直觀と申します。婦人は外物に對して常に敏捷に之れを受領する直觀を有しますけれども、永く之れを意識中に留め、隨つて之れを熟考することが困難です。

女が早口になる原因

觀念　とは刺戟の止んだ後、意識に殘つて活動を繼續する心的現象を申します。之れを言ひ換へれば、過去の知覺を心中に再現する現象でありまして、婦人の觀念の活動することは男子よりも急速です。それで婦人には談話の際に早口なるものが多く、お喋舌も婦人に多いのは、一の觀念を長く熟考して居ることが困難なる爲です。

内容の無い言葉

或る學者の說に依れば、婦人の言語は輕妙で抑揚に富めども、内容に注意することが尠ない。卽ち内容よりも形容を尙ぶ癖がある。それで女生徒などが學校で講義を聽く時に、餘り有益でないものでも、講義者の音聲が美にして、形容が面白かつたりすると喜んで傾聽し、然らざる時は、有益な講義でも、直ちに倦きて了ふ傾きがあるといふことであります。吃は婦人に尠なく、啞も婦人は男子よりも早く發育するに至ることは事實です。

内容の無い文字

右の理由で、文字は婦人の注意する所であります。手紙を書くに男は譯が分れば宜いといふ樣に、達意を主としますけれども、婦人は文字に重きを置き、意味は零なことがあります。婦人に能筆家は多くありますが、割合に文章家の尠ないのは理由のあることゝ思はれます。

月日だけ覺えて事がらを忘れる

記憶　以前の經驗を把持し、之れを其の儘に再現する作用を名づけて記憶と申します。これに器械的、理論的、思考的の三種あります婦人の記憶は器械的のものよく發達し、男の記憶は、理論的若くは思考的のものに富で居ります。例へば婦人は或る事件の生じたる年月日等をば、精密に記憶して居りますけれども、その事件の性質、原因等に就いては、却つて忘るゝことが多く、男の方は年月日の如きことは確かに記憶して居らぬけれども、事件の眞相

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

關係等は、明瞭に記憶して居るが如き、萬事此の例で推測が出來ます。

間違った想像

想像　既得せる觀念の變形連合に依つて新に觀念を構成する作用を想像と申します。謂はゆる天才とは此の力の能く發達したもので想像力の多少は吾人の生活上に直接の利害があります婦人は前に言ふ如く、直觀的で且つ感情的ですから



受動的想像に富み、常に實物と聯合して、想像の爲に觀念の引きつけらるゝことがあります。婦人に同情、嫉妬の深いのはこれが爲です。良人の無情を怨んで自殺するものゝ如きは、全く受動的想像力の結果です。

然るに男子は思考的であるから發動的想像力に富んで、大發明を爲すものが多くあります。由來大科學者、大詩人、大美術家などは男子に多くありま

して、女子に寡ないのは、全く想像力の性質が異ふからです。同じ想像力でも剃刀を手にしたり、川へ飛び込まんとするのと、騒がないで大創見をするのとは、比較になりません。本誌の讀者方には、さういふ人はありますまいけれども、萬一不幸に接しても、決して受動的想像に驅られない樣に願ひます。

然し男子が想像の爲に、その身を誤まることがよくあります。それは妄想で、男は婦人よりも妄想に耽ることが強いので、それが爲に失敗することが多くあります。

思考。意識的事實の間に、論理的關係を結合する作用を思考と申します。此の作用に概括判斷及び推理の三種があります。

女の不得要領

概括 とは、概念を作る作用であります概念とは個々の觀念を集めて、これを一個のものに構成する觀念のことであります。婦人は概括に當つて、事物の要點と不要點とを混同する傾きがあります。之れを換言すれば、枝葉と根本との見分けが不充分で、往々要領を得ざることがあります。

思ふと直ぐ言ふ考へて見ない

判斷及び推理 は共に婦人の短所であります。婦人は事物の判斷を輕々しく決し或は熟考せずして苟息に即斷する弊があります。それで反覆して其の理由を求むれば、粗雜にして不明瞭なることが多くあります。これは思考力の缺乏に基づくもので、婦人の得意は當意即妙なるにあります。それで婦人は熟考よりも判斷の方が先に立ち、再考よりも初考の方がよくあります。フヲグトと云ふ瑞西の學者の申すには、女學生を試驗するに當り、講義の順序に從ふ時は成績がよいけれども、其の順序を轉倒して問題を出すと、その成績は極めて不良であると。然るに男は事物の利害得失を考へ、然るのち判斷を下すので誤謬に陷ることは少なくあります。

(三) 感情的現象

感情 と申すことは、苦樂の情、快不快の感等で、或る觀念の聯想若くは感官に依つて、外界の事物と接

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

觸する際に生ずる心意の波瀾であります。感情はその起る原因によつて、種々ありますけれども之を大別して二種と爲すことが出來ます。本能的感情と智的感情とこれです。

本能的感情とは、智識の有無に拘はらず、すべて人の固有する感情で、多くは單純です、驚愕、勇氣、苦痛悲哀、後悔、憤怒、喜悦、羞恥等はその重なるものです。

女は大いに驚きやすい

驚愕とは豫期せざるものに、突然遭遇する時に起る感情で、之を受けた初めは未だ苦樂何れとも屬しませんけれども、その遭遇する事物が豫想より勝るものなる時は、一層の快樂を加へ之れに反する時は、苦痛を感じます。驚愕は恐怖を伴ふこと多く、婦人は神經病の原因となることがあります。一般婦人には驚き易く、些細なことにも喫驚し、激しき時は痙攣を起し、尚大なるときは氣絶することがあります。これは婦人の神經が鋭敏即ち弱いからです。

女は大いに恐れやすい

恐怖とは未來の苦痛若くは危險を豫想して心を悩ますことを申します、之れを反言すれば、自己の生存上豫防的に出づるもので、其の豫想の度によりて恐怖の度に大小がありますが、婦人の恐怖は男子よりも深くあります。又恐怖が甚だしければ精神を狂はし、自殺を導くことがあります。例へば下女が過失して、主人の詰責を恐るゝ場合の如きこれです。

極端なる勇氣

勇氣は恐怖の反對で、身體の健康、熱心希望等は勇氣を促すものです。極端な勇氣は婦人に見ることがありますけれども、一般に男子は勇氣に富んで居ります。婦人の苦痛に對する勇氣は痛覺が鈍いからで、眞の勇氣ではありません。

女は精神上の苦痛を感じる

苦痛に二種あります。一は有形の苦痛で他の一は無形の苦痛です。例へば腹痛、創痛等は有形の苦痛で、家運の衰頽、憂愁、家内の不和等より生ずる苦悶は、無形の苦痛です。婦人は身體上の苦痛は鈍くありますけれども、精神上の苦痛は鋭

くして害を蒙むることが男子よりも多くあります。

一時の悲哀と永遠の憂愁と

悲哀は必ず憂愁と伴ふもので、性質上より云へば、苦痛に屬するものです。然れども悲哀は多く一時的にして憂愁は多く永續する差があります。婦人は悲哀の感情が強く、激發する時は、死を以て之れに當ることがあります。例へば良人に別れたる妻が、悲哀に堪へずして、之れに殉するの類です、

女は深く先非を悔いる

後悔は過去に於ける失策又は不善等を發見したる時に、生ずる所の不快なる感情であります。婦人の後悔に對する感情は頗る盛んで、一度過ちたることは、深く心裡に留めて將來を戒しむること、男子より強くあります。失策を追回して之れに懲りるは婦人の通性で、男子は之れを追想するの念が薄くあります。それで犯罪に於て婦人の再犯は男子よりも少なくあります。

女は永く怒りを抱いてゐる

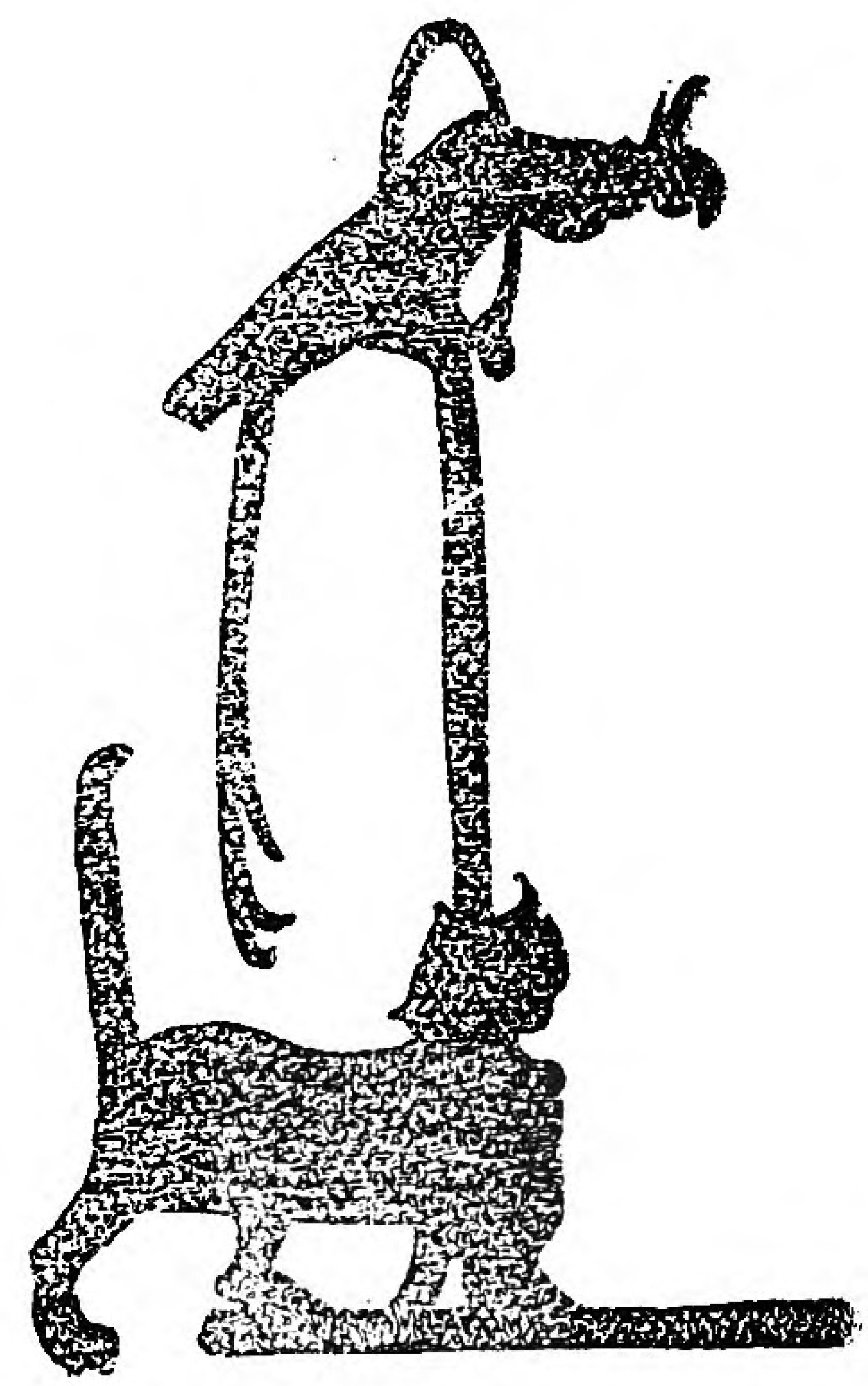
憤怒は不快若くは苦痛が、之を起したる原因の觀念・結合する時に生ずるもので、突然に發するものと、思考したる後に生ずるものとあります。前者は單純なる憤怒で、之れを形容すれば烈火の如しとか、霹靂の如しとか申しまして通常怒り易い氣質の人（膽液質の人、又は發質の初期）に多くあります。然るに後者は之れに反して、其の時は怒らぬけれども復讐して、鬱憤を晴さうとするのであります。

男女に於ける憤怒及び復讐に關する研究は未だ十分でありませんけれども、一時的の憤怒は男子に多く、思考的の憤怒は婦人の方に發達して居る樣に思はれます。蓋し憤怒は之れを爆發すれば消散するけれども、婦人はその憤怒を爆發せしむること少なく、之れを忍んで後に復讐せんとするは、性質の上に於て然ることと思はれます。

△夏の火は娘に焚かせよ（日本の諺）
△冬の火は嫁に焚かせよ（同）
△女房はかへるほど惡くなる（西洋の諺）
△女房は掃溜から拾へ（同）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

東京往來



（上）山の手と下町

外島涙之介

▼東京は樹木と、若い女が豫想以上に多い。そして流行がわからない。

▼東京は廣いだけに凡ての點から二大區分する程の特色がある。「山の手」と「下町」が卽ち夫である。

▼先づ地勢から區分すれば、三百年以前の江戸の郷、三田村、四谷の原、牛込郷、本郷、小石川村などが山の手で、徳川家康が政權を握り江戸城に據つて覇を全國に成してから、土地の狹小を感じ埋立工事を行つて出來た京橋、日本橋、神田をはじめ、其後漸次萱原を埋めて淺草、下谷などが出來たのが下町である。土地の高低、住む人の種類。町の形式などから、極めて概略的な分け方をすると三百年前の往來が今の山の手の端で下町の境であるけれど、先づ讀者が電車線路地圖を見て居るものとして、品川を出發して札の辻、三田、金杉、飯倉、西久保、櫻田、三宅坂、半藏、九段、飯田橋、水道橋、松住町、上野廣小路、坂本、金杉を通過する左側が山の手で、右側が、下町であると考へて大差がない。そして純然たる山の手とも云ふべきは赤坂、麻布、牛込、小石川の五區である。

▼下町の中で街の樣子が、山の手らしい心持のする處は、築地の元居留地附近、下谷で入谷、根岸、神田の駿河臺などで、純正の下町は日本橋、京橋、神田で、

次は淺草、下谷の一部分である。本所、深川は「川向ふ」と稱して獨立したる特色を持つてゐるが、無論地形上からは下町である。丁度糀町の有樂町、日比谷公園附近大手町等がどちらつかずである樣に、本所、深川は除外例にもなる。

▼山の手には山の手氣質があり、下町には下町氣質がある。緣日などに行つても、山の手では有髯の主人公が赤兒を懷いて、庇髮の妻君が後からついて行くと云ふ風、下町になると日本髮の娘同士とか、又は夫婦連であつても、內儀さんが植木をかゝへて旦那の後から行くと云つた風である。

嗜好も異ふ、譬へば植木でも山の手の人は草花の安値のを買つて花壇にでも植ゑる、下町の人は常盤木の盆栽でも買つて物干臺に置く、物干は下町の特色として、小自然の盆栽が屋根瓦と電線とに親んで居る、下町の人には一つの娛樂である。

▼食物でも山の手は西洋菓子や水菓子を食べるが、下町は、やはり從來の日本菓子で榮太樓の羊羹、空也の最中と云つた樣に古來から有名な物——むしろ家——を尊ぶ。

▼家の造り方でも山の手は、生垣、門構玄關附が大部分で、出入の人と云へば洋服の人、庇髮の妻君、袴、穿いた女學生、琴の爪箱かバイオリンを持つたお孃樣白粉の鹿子斑の下女などが眼に着く、下町は子供が多い、多いのでなく遊び場が無いのと家が狹いから自づと往來に出て遊ぶ。遊び方でも下町では電車の眞似などするが、山の手では兵隊の眞似をして居る。

▼下町の人は口と手が早い、つまり何でも早解りがする。是は男女に由て多少の差異はあるが共有性である

下町風と云ふのは、東京風卽ち德川風を承けた土地風であるとすれば、一般東京人は親切であるべきなのを世人は輕薄だと云ふが、實は地方人が東京は廣い、知る人もあるまい旅の恥は搔捨てだ、何でも狡猾にして利益を得やうと云ふ主義で近來殊に甚だしく跋扈して來たからだ。地方種の半江戶兒が多くなり、東京の良風を亂したのであつて、要するに下町の父祖傳來の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭は美しい空氣が充ちて居る。それ等の慣習は猶殘つてゐる。

▼下町の往來を見ると、日本髪の女が多い、山の手には白粉塗た人が多いが、下町では三十女の白粉塗た顔などは見られない、若い女は薄化粧をして居る萬事が意氣に出來て居る。山の手で空氣草履が流行する頃には、桐のまさ目の通つた下駄に足袋なしで、バイオリンの代りに三味線の撥を持つて居る。

▼三味線の稽古に行く下町の女は、あまり嫁入道具としての免狀を得る爲に裁縫女學校などへは行かない、



自習的な、實際的な仕立屋がある、親切に手を取つて敎へてくれる裁縫のお師匠樣がある。

▼下町の女は趣味とか嗜好とか云ふものが低い、郊外散歩するよりは新富座でも行きたがる。近代の小説よりは講談物がいゝとか、都新聞の續き物がいゝと云ふ。三面記事は正直に讀む、要するに趣味が低いと同時に正確に世間を見て居る、人間を主として居る。實際の世の中を見る事は山の手の女よりは鋭い。

▼山の手に行くと巡査の娘でも何子さん電車の運轉手の女房でも妻君と云ひ奧樣と云ふ、自分もそれが普通

の樣に思つて居る、然し下町では多額納稅者で町內指折の家の奧樣でもおかみさんと云はれて平氣で居る、娘は、何屋のお何さんが普通である。

▼時の流行といふものは今春、柳橋などの藝者町から起つておかみさんにうつり、奧樣に及ぼすと云ふ風で、山の手下町を問はず或一部の人は日々流行を逐ふて行が、吾人の眼に映り、新聞に現れる頃には、又別に新流行が行はれて居るのである。どれが眞の最新流行であるかは、往來の人を見て居たくらゐでは少しもわからない。始めに「東京には流行がない」と謂つたのは此意味である。

▼東京印象の中、女學校を除く事は出來ない。下町の代表者として虎門女學館がある、之は下町の女學生の粹を聚めたもので金力が充ちて居る。貴族式なのは謂ふ迄も無く學習院女學部で地位や體面を重じるのは勿論であらう。三輪田、山脇、跡見の如きは、富豪もあり貴族もあつて女學館や女學部に行く程でもあるまいと思ふ人が行く。それから中流の眞面目な部類として府立女學校、お茶の水などもあらう、其の他何々專修學校とか、何々裁縫女學校とか云ふ名は女學校でも、實は女學校でないが、地方から來て三四年で何かしたいと云ふ女學生の集まる處であるから數も多く、入學も仕易いので、人數も多く、從て新聞種の事故もまた多い。

▼朝から夕暮迄窓から見て居ると種々の商人が通る、必ず通るものゝ中特殊なものに、豆屋のすゞ、納豆賣の姿、豆腐屋の喇叭、八百屋、魚屋、酒屋の小僧、油屋、をわい屋などであるが、夏期に向ふと金魚屋、風鈴屋、朝顏賣などがある。

▼電車の乘換場所で女や子供が夕刊を賣る樣になつた之も東京風俗の一つであらう。

▼近來殊に若い女が、妻君であるかお孃さんであるかの區別が甚だ不明瞭になつたのは、山の手の女―半江戶兒―が華美になつて、臆面もなく若作りをし始めたからで、この傾向は下町には流行しない。

▼下町の地域は擴げやうがないので、二階作が多くな

つたは尤もだ、山の手は益々擴張される、それも蛸の足の樣に延びる。是は昔の街道に據つて延びるのである、卽ち品川が大森方面に擴がり、近く橫濱に續くかもしれない。芝、白金が下目黑へ、麻布が廣尾の奧へ、青山が澁谷へ、新宿が柏木、西大久保へ、牛込が早稻田、戸塚へ、小石川が雜司ヶ谷へ、本鄕が千駄木巢鴨へ、本所が龜戸へ、下谷が坂本、谷中へ、淺草が千住へ、延びて行く。その延びて行く初期は決して市街の形式を成して居ない、然し東京が郊外へ發展して行く處に新開町の特色がある。之が年月を經たものが山の手の一部分になるのである。始めは郊外としては比較的庭の無い鐵葉屋根の三室四室の家で、往來は不愉快な石炭殼で、夏は光線の反射の强い息苦しい安普請で、住む人は下層官吏や地方から來たての人、新世帶持の若夫婦などが住む。

▼是等の新開町が山の手になるので、山の手は一畫一畫になつた樣に所々に繁華な處がある。卽ち其等の代表的場所は、四谷大橫町、牛込の神樂坂、赤坂の一ツ木、小石川の傳通院、本鄕の三丁目、青山の大通りなどである。それらの商店の有樣を見ると、各々の山の手の特色或は半江戸兒の嗜好趣味などが明にわかる。

▼下町の模範は京橋、日本橋であるが、江戸の面影を忍ぶには、大傳馬町、通油町、馬喰町などで、光澤のいゝ黑塗の土藏が軒並にあつて、紺の暖簾の陰からお駒や才三が見てゐる樣な氣がする、その下町の屋根は勾配が急で、表通りは華麗だが、裏通は汚い。築地は家が低くておちつきがある樣に感じ、下谷は街が古く小さい家が多い、淺草は槪して飮食店が多い。

▼山の手では、本鄕は高地ながら濕潤した感じがし、小石川は坂と樹木が多く、四谷は汚く、赤坂はねむたい樣で、麴町は部分的に發達してゐる。本所、深川は川と橋と煙筒とで成立して居る。

▼同じ物を賣る家が集つて一つの町を成して居るのは下町の特色で、その著名なのを擧げると、魚がしの魚大根河岸の青物、白木屋裏の食傷新道の飮食店、神田多町の青物市場、柳原の古洋服、芝日影町の古和服、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

神田神保町の古本、馬喰町旅籠町の旅館、神田岩井河岸の駄菓子屋、古道具屋、十軒屋の人形、錦町の學校、猿樂町の下宿屋、湯島の醫療機械、駒込の寺、永田町の官署、木場の材木商、箔屋町の古道具屋、淺草松葉町、芝神明の佛具屋、本所の工場、深川の倉庫など其他擧げれば限りがない。

▼職業や階級を知るのには朝夕の電車を見るに限る、青山線は洋服の勤人と官吏が多く必ず二三の軍人を見る。築地廻りは商人、會社員、番頭、本所、深川は油嗅い古洋服の外は船頭で、新宿行、巢鴨行は腰辨に印半天、江戸川行は中腰辨に勞働者、神田、本郷の線は學生多く、下谷、淺草は雜然としてゐる。

▼婦人に就いて云ふと、純山の手は女學生、本郷は中等の奥樣に所謂妻君、小石川はたゞの妻君、牛込は自覺した樣な妻君と女學生、四谷は雜種、青山のはバニチーの強さうな軍人向の女、麴町は下女が多い。日本橋、京橋は所謂娘と子守女が多い、築地も然り、深川は肉付のいゝ、おつかあ、淺草、下谷は汚い女と、くどくどしい女が多い。

▼文士の住居は殆んど山の手に限つてゐる、下町には島崎藤村氏の淺草と、長谷川時雨女史の佃島と、外二三人數へるほどしかない、此頃北原白秋氏が越前堀へ來たのが珍しいくらゐだ。

▼山の手の物貰ひは、書生の落魄者、孤兒院の寄附、押賣的、物貰ひが多い、下町の物貰ひは、社寺の建立涉界節、巡禮、いざり、門附などが多い。

▼人道、車道を區別して、其境界に植ゑる樹木を街樹と云ふ　銀座とか、上野廣小路とか、市中の一部には昔から柳の樹が植つてゐる、また山の手の或る通り、殊に赤坂、麴町の一部には、道の兩側に櫻の樹が多い、是も自から街樹の觀がある、近頃市區改正が行はれて山の手と云はず、下町と云はず通行の多い通りの道幅が擴張される、擴張されると同時に、人道と車道の區別もつき、其處には街樹が植ゑられる。最近日本橋の大通りには銀杏の若い樹が植附られた、青山などの通りには碧梧桐が植られた、街樹は凡て落葉樹に限

やうだ、夏は葉が茂つて樹蔭を歩く人の涼しさうに、冬は葉が落ちて道が明るく且日光が能くさして暖かいやうに、落葉樹を選むのは至當の事である。

▼下町に有つて山の手に無いものは、橋、川（一二の小川は別として）新聞社、劇場など、山の手に有つて下町に無いものは、坂、林、トンネル、兵營など。

▼純下町の繪葉書屋には役者とか、藝者とかで持切つてゐるが、山の手になると、それよりも自然の景色が多い、また舶來のものも多い。

▼下町の女の兒は早くより帶を結び、山の手の女の兒は稍大きくなるまで、兵兒帶を結んでゐる。

▼凡ての遊覽、娛樂、料理屋、食物屋などは下町に限ること云ふまでもない、下町は東京活動の中心である山の手は閑靜であるが、實際的には活動してゐない、活動してゐる人の歸つて來て休むところ、また如何に活動すべきかを考へる場所である。

▼夜の山の手は暗い、灯はあつても勤人の邸宅が多いのと、樹立が多いのと、兎に角街は暗い、下町の夜は明るい、實に明るい、三越、白木、松屋などのショーウインドオの美しきは素より、勸工場や、大商店のイルミネーション、街燈、店の火、往來の火、何と云ふことなしに明るい。

▼併し暗い山の手よりも、明るい下町の夜の方が、いろ〳〵な犯罪の行はれることが多いのは、反對の現象のやうだが、惡いことをする奴は、明中暗を探るくらゐの機敏を持つてゐる。夜の東京中で一番明るい淺草奧山の活動寫眞館の密集してゐる不夜城のやうな土地で、尤も多く夜の罪が行はれるのだから、都會といふものは危險だ。

▼山の手には中心がない、一區々々獨立した調子があつて、一區々々には中心の繁華な場所はあるが、さて山の手を概括して、何處が中心かと云へば何處を指して中心と云ふことも出來ない。下町では土地から云へば北に偏してゐるが、繁華の中心は淺草であらう、兎に角いつでも人間の渦を捲いてゐるだけでも中心と云ふことは確かだ。



暴風の前

長曾我菊



一

手紙を書き續けて居た弟は襲はれた樣に顏を上げてさう云つた。音もない夜であつた。

『此の十日程の間があんまり靜かすぎた樣に思はれてしやうがない。何か出來事でもある前兆ぢやないかしらん……。』

と云つて其の眼の前の空間に何か凝視めるものでもあるやうに神經強く目を見据ゑるのであつた。此の聲を聞いた時私の心は大きく顫へた。何かあるのぢやあるまいか。さう云はれると此の半月の間の私達の生活はあまりに靜かに音もなく辷る樣にすぎて了つた。何だかあるべき事がなく、聞くべき事を聞かず、見るべきものも見ずに啞の樣に盲目の樣に「時」の上を辷つた樣な氣持がする、而して今も猶其の不安の上を辷つて行く樣な恐怖さを弟の言葉に見出したのである

此の變化のないと云ふ生活の不安は、森の中に風がちつとも吹かぬのと同じ不氣味な心持がしてならないよく地震などの襲はうとする前にある蒸される樣な靜肅のそれと同じである。

精神が鈍ければまあ何事もなくてよかつた。と云つたかも知れない、尖つた苛立つ心には、生溫かい靜かさの底に沈む氣味の惡い香が觸れて來る。

私は變化が欲しい。いつでも私は危い出來事と云ふものが欲しい。心を傷つける程の刺激が欲しい。私は自分の心を碎ける程投げ付けるものが欲しい。私の身

體がまた起つ事の出來ない程疲勞する事實に突き當りたい。

此の生温くい平和は私を殺すかも知れない。氣味の惡い靜寂は私の心を腐らせ盡すであらう。私は「危ふさ」の快樂を知つて居る。「無事」の苦しみに私は一日でも自分を押し付けて置きたくない。「無事」の底に孕まれて居る大きい不安に囚はれ樣と私はする。此れを救はねばならない。

弟は現實の生活に無事の不安を見るのであらう。私にはもつと深い內部の恐怖があるではないか。私は自分を救はねばならない。

『何事か今に起る樣な氣がして堪らない……。』

と弟はその暗から嚴しい宣告でもうける樣にわなわなした心持を眉に走らせて居る。

音もない夜の色の中に雫の滴る樣に赤くとまつたランプの光からも煙の樣なものが周圍にはびこる。光と其の煙の樣なものとが濃く交つて目の前に跳つて居る樣に感じられる。

私は襟に顏をうづめて身をちゞめて了つた。夜は音もなく更けていつた。

二

朝であつた。薄く絹絲の樣な水蒸氣が日光にさそはれて、地からそつと忍ぶ樣に上つていつた。彈かれた樣に起きて光に交つた空氣の中にある快さ。それにさはつた時に、胸が打たれる樣に苦しみを感じた。異しい！

それでも庭に下りて、踏みしめる樣に地の上を步いて居る中に、自分の口から血の逃れる樣に湧くのを覺えた。土地の上に其の血を吐いて見た。鮮やかに赤い血汁。毒花が咲いた樣な惡どい色であつた。

血が出た後の齒は少し痛んだ。痛みを舐める樣にしながら地の上の血を見つめてゐると、眼にそれが吸ひ付いて來る樣に刺激する。不快……不快と私は思はず云つた。

それからは何かをしようとしても心が埒もなく足ど

りを亂して、頭腦の中で狼狽てゝゐる。どうしたと云ふのだらう!!。

不安なこんな心持が何故起るだらう?じつと透き徹つた空氣を凝視つて居たがいつもの樣にあの男の顏……廣い額と高い鼻と、多い頭髮をもつた男の顏が明瞭と目にうつらない。私はどうかして居るのだ?。

何か其處に――私には見えない空間――に私を強くにらめて聳える樣に立つて居るものでもありはしないか。そうしたものが私の身體を摑んで、瀨戸物の碎片の樣に何かに投げ付けやうとするのではあるまいか。庭の隅には松葉菊が濡れを含んだ明紅い色に目も醒めるばかり瓣を開いて咲いて居る、其の明紅い瓣をむしつて私はじつと見つめて、自分の心を、盜む樣にうかがつた。

何としてかうなのであらう。

三

午後の二時頃の光線は洪水の樣に青葉の上にみなぎつて居つた。葉や梢がそよそよと動くのが光の勢に押し流されまいとして爭鬪ふ樣に見えるのであつた。私は其の木の下を歩いて居つた時、不圖もの影がきらきらと空間を走つて私の前に水の溜る樣にとまつたのをおぼえた。

もの影!!それは人の顏であつた。濃い眉の下に溫和な眼がある、長い頭髮の下に廣い額がある。あの男の顏であるのだ。あの若い男。

××さん。と私は其の男の名を呼んだ。もつと、私の心が其の顏にたはむれる樣に駈け寄つて行くと、跡もなく空に消えていつた。而して私の唇が今接吻から離れたものゝ樣に燃え立つ溫かみを點せられて幽かにふるえる。私の皮膚は搖られるやうに戰慄を覺えるのであつた。

どうかしたのぢやないか、私は其の男の事が、胸に一つの固結になつた。變つた事がありはしないだらうかと思つた時に不安に堪へられなくなつた。空を泳ぐ樣な心を、今一度もの影にもつれさせて見たかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



よそながらのお見送り

（與謝野夫人新橋出發の間際）

比志沼　志げ子

端午のお節句の日でした。

午後から春樣と二人で銀座へ買物にまゐりまして、色々と買ひ集めて居るうちに、夕方になつてしまひました。あ、そう／＼、晶子女史をお送りするんでしたね。

そ、もう、五時だから今から行つてゝも早過ぎはしないでせう。

えゝ丁度いゝ頃よ、もう行つてませう。と私共は一旦家へ歸つてから、出直すつもりでしたが、新橋ももう目の前ですし、赤坂迄歸つてからでは遲くなるかもしれないから、と其儘ステーションへ參りました。

まだ、早いので、おいでになる時刻ではありませんでしたが、私共は、歩き疲れたので、直に婦人待合室へまゐりました。室内には四五人の老人や夫婦者らしい人が居たばかりで、椅子はみんな空いて居りましたから、私共は、一番角の方の大きな海老茶色のアームチエーヤに、二人で、腰かけて休みました。軈て國府津行の列車が出るとの知せに、其人達は、殊更らしく急いで、信玄袋や四角な包など持つて出て行つてしまひました。と、入れちがひに、十六位の女の方が、四人の子供をつれて、這入つて來ました。三人は六ッか七ッ位の女の兒で、一人は四ッ位の男の兒でした。

四人とも大變よく似て居て、眼のクリ／＼した、活潑さうな可愛らしい、お兒さん達でした。其女の方許が他所の方なのでせう。三人の女の兒のうち二人は、小豆色の元祿袖を着て、前髮を右の方から左へ集めて濃い赤色のリボンで、キュッと結んでお下げにして居りました。一人は、美くしい友禪の振袖の被布を着て髮は普通に下げて居りました。

五人とも大變親しさうで、私共の隣の椅子へ二人に

三人と、別れて、睦ましさうに腰かけました。そして

自動車、おもしろかつてね。

ホントに、おもしろかつた。とお互に嬉々として、話して居ると、曉星中學の制服を着けた、十歳許の矢張り活潑さうな、愛らしい二人の少年が這入つて來て何か二言、三言、云ふと、直に出て行きました。

四人のお子さん達も室を出たり這入つたりして、面白さうに飛び廻つて居りました。

春樣と私は、若しや、晶子女史のお子さん達では、ないでせうか、と話して居りますと、其女の方が、一番小さい男のお子さんに、少し笑ひながら、そして、頭を撫でゝやりながら話しかけました。

お父樣のお名は？と、私共がよく小サイ兒に故意と年など聞く樣に、今更らしく聞いてます。

與謝野寛と、にこ／＼した顔でハツキリ答へましたので、矢張そうだつたのねと私共は顔を見合せました。

お母さんは？

與謝野晶子。

あなたは？

麟、りんちやん

お母樣どこへいらつしやるの？

ふらんす、ぱり、と何も知らないで、にこ／＼しながら答へて居りました。

りんちやん、お母樣がおたちになる時ね、から云ふんですよ、大きな聲で、お父樣によろしく／＼つてね、きつと、おつしやいよ、と云ふと、

りんちやんは、にこ／＼しながら入口の方を見て居りました。

其間にいろ／＼の人がこの室の前へ來ては、内をのぞいて行きました。

すると、鬚の生えた方や、眼鏡をかけた洋服の方、などが這入つて來て、

お、お早いこと、お母さんはまだですか、と聞くとは、もう、ぢきにいらつしやいます、只今、自動車が迎ひにまゐりましたから、と、其女の方が引受けて答へました。

其方達と入れちがひに、茶カシミヤの袴をつけた女の方が見えて、

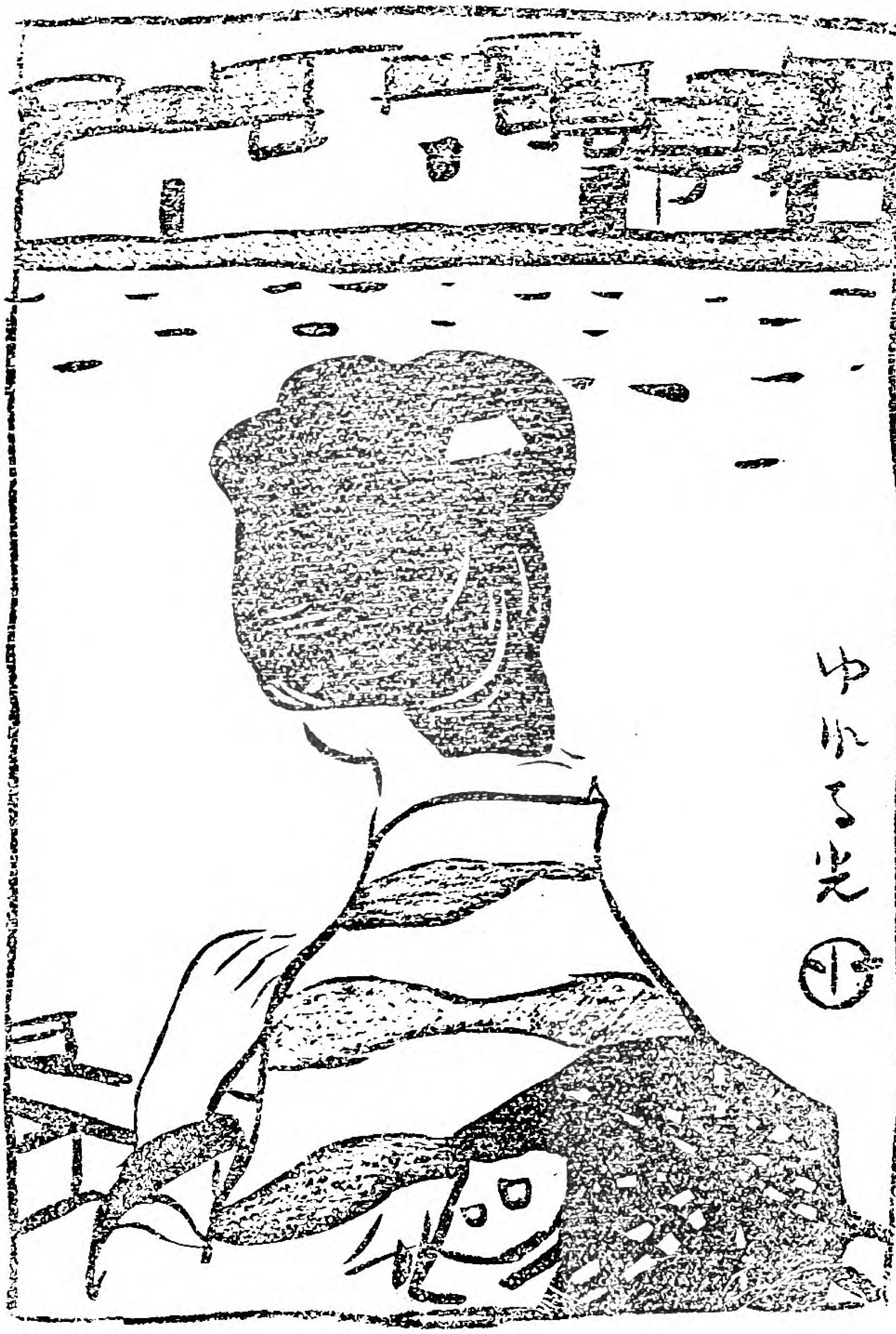
あの、先生は、まだでいらつしやいますか、と聞く。

は、もう、今にいらつしやいます、と答へました。

あ、そうでいらつしやいますか、と輕くうなづいて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

側の椅子へかけました。
　そのうちに、同じ樣な事を聞きに來る人がだん〱増えて、何となく騷がしくなつて來ました。來る方も來る方も私は、何だか知つてる方達の樣な氣がしてなりませんでした。でもきつと、お名前を伺つたら知て居るにちがひありませんもの、殘念でございました。
　するとさつきの少年が急いで這入つて來て、
　もう、お母さんがいらしつたよ。
と、告げると、りんちやんも女の方も、ゾロ〱と、



出て行つてしまひました。
　あ、もういらしつたんですつて、何だか變な氣がするわね、と春樣がおつしやる。私達も一緒に行かうと思ひましたが、きつと此室へいらつしやるにちがひありませんからと休んで居りました。
　ま、ほんとに、可愛らしいのね、と私が云ふと、
　え、全く、なんて活潑でせう、そして面白いこと一體、皆で、いくたり？と聞くので、
　六人だけ來てるわね、も一人あるんですつて、と云ふと、あら、そう、まだ小さいの、まあ、二ツですつて、まあ、と春樣は甚く意外なと云ふお顏をしていらつしやる。

なにしろ、エライわね。
えゝ、ほんとに、幾人でも洋行する人はあるけれど晶子女史の樣なお方は、眞實に、一人だつてないと思つてよ。
全くね、私もう、つくづく感心してしまつたの。
あの……何とか云ふお歌があつたんですよ、打ちつれて……あ、何でしたか私、一寸忘れてしまひましたが、何でもね、二人打ちつれて巴里の都に遊ぶ旅人と「うたはれてこそ、あはれ生き甲斐」と云ふんでしたわ
まあ、どうしてもエライわね、もうおいでになつた樣よ、と話して居りますと、軈て、大勢の話し聲や、跫音などがして、晶子女史が、お見えになりました。
ま、私、驚きました。自分が今まで想像して居りました女史とは、大變にちがつてゐらつしやるのですもの、何時ぞや、女子文壇の口繪に現代女流作家の寫眞が載つた時、私、晶子女史と云ふお方は、ごく昔風の日本髮にお結びになり、そしてお口を、キッとしめられて、歌でも想つてゐらつしやる樣なお方に、拜見致しましたので、今まで、さういふお方とばかり存じ上げて居りましたが、まあ、まだ、ほんとにお若くて、お髮なども、まはりのズンと脹らんだ形の好い束髮にお結びになつて、其上を、黒に近い程の濃い紫の、ごく薄い、ヴェールですつかりお包になり、鼠と藍の、いちまつの御召に桔梗色縮緬のお羽織を召して、蝶か何かの刺繡のある琥珀のパラソルをお持ちになり、お美しい眞白のお齒をお見せながら、ハッキリした氣持の好いお聲で、いちいち大勢の方々に御挨拶を遊ばしてゐらつしやいますので、思はず春樣を顧ると、春樣も、意外だと云ふお顏をしてゐらつしやいました。
寫眞の上のみでなく今、まのあたりお姿を拜見してお聲までも伺ふ事が出來ましたのです。
巴里には最も長く其他、英國、獨逸、伊太利、西班牙、の諸國にも廻り色強い文學の匂ひをも嗅ぎたく、進歩した芝居も見物致し、繪畫に彫刻に音樂に出來得る限りを見聞して歸りたいと、お望みになる、その、晶子女史が、今、直そこに、お出になるのです、私は腰かけて居ると云ふ事が失禮の樣な氣がして、立たうと致しますと、どう致しませう、勿體なくも女史は、私のすぐ側の椅子へおかけになりましたのです、私はどうしようかしらと、甚く惑ひました。若しも、こちらでも御覽になられたら、どう致しませう、たゞお辭儀だけでいゝかしら「先生御無事で……」と、申し上

げ度いけれど、私共などを御存じの筈はないし、もうたゞ、かげながらお送りするよりしかたがありませんのでした。あゝ若し御挨拶する事が出來たら……

あどけない六人のお兄樣達が、もう今日限りと、女史の袂に纒るけれど、人々への御挨拶の爲、うるささうでゐらつしやいました。

誰かゞ「もう切り始めました」と知らして來たので大勢の人皆、プラットフオームへ急ぎました。私共も後からついて、這入りました。

隨分のお見送りで私、とても數へきれませんでしたもう、いよ／＼時刻が迫つて、さよなら、御機嫌よう、宜しく、御無事で、の聲が聞かれた頃は、先生のお眼にも涙の輝くのが見られました。

斯樣に大勢の人々に送られつゝも、愛らしい七人のお兄樣方を殘されて、遠く巴里へお急ぎになるお心を思ふと、私は、わけもなく、胸がいつぱいになつて、もう、聲を出して泣き度い樣でございました。おかへりの日迄、その幾夜、懷しき夢路を辿らるゝ御事でせう。

よそながらも、お見送り申し上げる事が出來まして殊にうれしう存じました。

本號掲載 作物入選次第

一等 浴室の若葉…………太田 きし子（東京）
二等 奈良井河の畔…………百瀬 美水（信濃）
二等 私の心持を顛覆せしめたる大動機毒だみ（名古屋）
三等 カトリン湖上に泛ぶ…………花山院貴美子（東京）
三等 マグダの印象…………の り 枝（東京）
四等 顔の色を白くしたい…………悲しみ草（京都）
四等 歩きながら…………婁田 順子（土佐）
四等 赤い椿…………夕 闇（濱松）
四等 ぬれ衣…………ふゞき野（東京）
四等 女行商人…………平塚 白百合（東京）
四等 よそながらのお見送り…………比志沼しげ子（東京）
四等 十六歳の少女が丑の時參をした話……小畑 はる子（大阪）
四等 二百圓を持出した令孃の懺悔…………要司村 ふく（京都）
五等 お伊勢參り…………細野 鈴蘭（近江）
五等 比叡登山記…………三宅 すが子（京都）
五等 氣まゝ者…………宇田 菅（和歌山）
五等 癈兵院を訪ふ…………み さ を（東京）
五等 故郷の家…………梨 花（不明）
五等 怖い目…………戸田 百合香（東京）
五等 佐久の野…………世良田 優子（信濃）
五等 五月號の歌より…………坂田 青夏（神戸）
五等 犧牲の花…………紅 衣（埼玉）
五等 都下女學校花くらべ…………鬼あざみ（不明）

△無名婦人傳 △二等、壽賀子 △三等、松韮紫花外三人

耳袋（七）　猿丸太夫

▲博士鵜澤聰明氏に聞く、世界最古の法律はベルシヤのスザトにて發掘したハムラビー法典がそれである『創世紀』のアムラヘル是なり、バビロンの王にしてアブラハムに亡ぼさる。）四千二百年前に石に刻せし物にて全文楔形文字より成る。無論モーセ法典よりも古しと少しばかり女子に關する條を擧げよう。妻が夫と別れんとする時、公衆の前にて汝は予を有せざるべしと言へば離婚の手續は濟んだことになる。負債の爲金の代に債權者に渡さるれば、三年間貸主の家にて働く義務あり。四年目には自由を有す。負債有る女を娶りたる者は其負債を償はざれば妻たる身分を獲る能はず。妻他の男に通ずれば水に投ぜらるべし。人の妻にして、未男を知らず、（許嫁の意味にや）父の家に在る者と姦して捕へらるれば、男は死刑、女は無罪（これはどういふ譯か少しわからぬ、博士も說明してくれなかつた）他國に俘となれる男の妻にして家に蓄財あるにも拘らず他人の家に入れば水に投せらる。されど財産無き時は他家に行くを妨げられず。且其夫縱されて家に歸れる時妻は後夫の家を去りて元の夫に歸るを得。夫の家に住む妻にして其夫に顏を背くれば責任を負はさる、若し夫が予は彼女を棄てたりと宣誓せぬ限り女は婢として夫の家に住むべし。妻だらしなく金棒引を事とし家を荒し夫を侮る時は水に投ぜらる。妻は子を生まざる夫の妾を他に賣ることを得。妻結婚後に病めば夫は他の女と結婚するを得れど、病妻を棄るを得ず。病妻去るを望めば夫は其婚資を償ふべし以上。水に投ぜらるとあるはユウフラトあたりに投げこまるゝことである。

▲藤原佐太郎といふ京都盲啞院の卒業生が、大商店荒しを働き警察の手に捕まつたが、手では取調べる事が出來ないので、佐太郎にとつては母校の盲啞院から塚田秀苗といふ啞生部の先生が來て、手眞似口眞似して通譯した結果逐一自白に及んだ。塚田氏が手眞似口眞似して問ふにも中々苦心の程が思はれた、お前さんの家は何處と問ふ時には、兩手の指先を合して、三角形を目の前に示すと、佐太郎

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はウン／＼とうなづきながら、筆を持つて住所を書、此度は嘘をつかないで眞直にいへといふ時には、頬を膨らし人さし指でぽん／＼と叩くと、本人が判ると右手を挙して腹の中から申すといふ意味でツンと手を前へ出すのであつた。

▲小山六之助氏齡不惑に至つて、初めて伉儷を迎へ琴瑟相和す、壁間掲ぐる所の珍妙の圖あり、中央に一線を劃し右方には目尻の上れる隻眼を描き、左には目尻の下れる隻眼を畫いて、其下に數ヶの小圈點あり。一客怪しみてこれを問ふ。令閨たま／＼傍に在り喟然として訴ふるが如く「妾の方へばかりまるを附けるんですもの」先生微笑してそりやまた殖えた」直に筆を執りて左の眼の下に小圓一ヶを加へ、顧みて客に對つて曰ふ「これ二人の新發明に成る「癎癪と愚痴の表」也はじめて持つた細君なのでよほど可愛いと見える、溺愛の狀睹るが如し矣。

▲夜、大阪の空堀通を大荷物を背負てうろつく男があるので巡査が咎めると意氣軒昂、これを見よと、懷から姫路憲兵隊長‥中佐殿と上書した告訴狀を出して見せる、それによれば同人は兵庫縣美方郡熊次村藤澤高三郎長男又一郎と稱する豫備の軍人にて、最愛の妻ゆきに同村の敬次郎なる者が懸想せしかば、之を憤慨して告訴に及ぶなりとあり。其の文句の中には敬次郎との問答あり　又「敬次郎よ、何故汝は我がゆきを結婚前．懸想せざりしや　又「戀は曲者といふ程なれば仕方がなし　又．馬鹿を云ふな大馬鹿奴」などあり、戀は曲者、かういふ若い衆が村にあつては又一郎たる者發狂せざらんとすとも得べけんや。

▲ロシアの皇后陛下が、侍從を隨へマルツウオエ街を御散歩になつてゐた時、ふと行手に妙なものを見つけた、其處には闘牛戲の繪を畫いた天幕を張り、周圍には群集がワイ／＼騒いで、入口に巡査が嚴めしく突立つて群集を制して居る。皇后は物珍らしげに此光景を見て居られたが、軈て巡査の所へ玉歩を運ばれ「あれは何か」と御尋ねになると、巡査はハッタと皇后を睨めつけ「何だとは何だ、亞米利加渡りの活動寫眞ぢやないか、お前さんの首には目はついて居ないのか」と怒鳴りつけた。皇后は活動寫眞を御覽になつたことが無かつたので、侍從に案内する樣にと御命じになつた、侍從が先に立つて入口を這入らうとすると巡査が「今觀客が込み合て居るから順の來るまでお待ち」とケンもホロヽに突き退けるやうにした。（つゞく）



此の夏の流行界

三越呉服店飯野氏談

本年の夏の流行を色の方から申しますと、春以來持ち續いて居る藤色系統のものが、矢張用ひられる樣であります。藤色系統と申しましてもあまり紅氣の多くない、藍の勝つたものが一番流行の樣であります。尤も其の年輩によつて、多少の相違はございますが、矢張藤色を離れない範圍で藍氣の勝つた鼠の樣なものが質素むきとして、よろこばれて居ります。

一帶の色の濃い薄い好みから申しますと、昨年に比べて薄い方が望まれてをります。

模樣は此の兩三年以來流行の有職風のものがやはり行はれる樣で、其の趣味に少し寫生を交へて、寫生風の有職模樣がよろこばれる樣であります。

模樣のつけ方から申しますと主に江戸褄風にしてそれを更に後の方に引き延ばされる傾がありますそれは何故であるかと申すと、だん／＼模樣が高くなつて來て、江戸褄なぞや形取れないからであります。

地質を申しますと普通の縮緬、鶉縮緬、と云つた樣に例年に大した相違はない樣であります。たゞ本年あたりに珍らしいのは、紋紗縮緬、小波縮緬などであつて、是れ等は共縞、共絲の紋形になつて、一部が透けて見えます。

少しく暑くなつてから用ふるものとしては普通の絽、壁絽、小波絽、それから變つたものでは紋絽などで夏のものとして、それほど地質に云ふ程の事はない樣であります。

其の外に山繭のはひつた絽、縮緬共縞の縮緬等を選んで其れに、繡紋裾模樣を入れて、小紋縮緬の代用にしてお召しになる方もあります。

縞物はどんなものが流行してゐるかと云ふと矢張お召し類で、此の外には何もないと云つてもよい程であ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ります。

縞のお召しで地の變つたものでは普通夏むきとして、縞の一部が透けて見える樣になつて居ります。本年出來たものではもろはお召、優雅お召し等で、本年の新製品としてよろこばれて居ります。其の他に月花お召、橘お召し等と云つてあります。

少し薄いものになると明石縮が、流行してをります。此れは全體の地質の薄い上に縞の一部だけが厚くなつて居るので、全體の透ける地質に比べて、下の透け方が變化して面白いと云はれて居ります。數寄屋もそれと同じやうに、透し方に變化を持たせてあります。

それから縞物は、お召にしても絽にしても強い棒縞や横縞よりも、緩い竪縞が流行してをります。

夏の帶地と申しますと、正式の服裝に用ひるには、絽の唐織、絽錦、絽繻珍等が昨年あたりから流行して居ります。模樣は有職風の秋草と云つた樣なものがよろこばれて居ります、明石縮とか絽の着物には、紗の帶がいゝと云はれて居りますが、此の紗の中にも色々あつて、有職風の紋形や、縞を繻子であらはしたのや一面に刺繡をしてあるの等があります。

夏コートは近來流行の品でありますが此れは外出の時の塵よけの爲めと、一つは帶や着物の色を美しく透かせて見せようとするのでありますそれでなるべく能く透けて下の着物の縞柄や帶の模樣が美しく見える事が必要であります。此の方から考へてコート地としてよいのは紗縮緬、優雅織、紋紗お召、縞の紗お召し等で、色は無地がよいのであります。藍氣の鼠色を喜ばれる向もあります

夏のショールは此れも亦、薄色のよく下の透ける薄い縮緬、絹縮、シホン等がよろしく、長方形の上にあつさりした蝶の模樣や、花模樣のあるのは美しいものでありませう。

木綿物でも柄の優美なものが多く出來る、白絣に横絣をあしらつて、自然に立縞の筋通しとか棒立とか縞に織つたもの、或は又綿毛交織に縮をかけたものなどが、ぼつ〳〵現れて來た、此等は皆本年の新しい流行品である。(三越に據る)



五月號の歌のうちより

坂田青夏

諸嬢の苦心になつた作物を、私如きものが此所に抜き書きして、ほどもあらうに評釋などすると云ふ事は、或は折角の佳作を傷つけるやうなものですが、然し文藝好愛者たる私には、何うしてもこの事を許して戴きたいのです。

○

江森美子

小鳥等の聲をきゝつゝ安らかに
冬を眺むる日向ぼこかな

田舎の冬の終り頃。のどかな然し霜どけの濕つた郊外を、薄ら寒い風の渡つてゐる白日の午後二時頃、西向きの縁に出て、凡ての苦痛と疲勞を忘れて、のんびりと心を靜めて、弱いけれど暖かい太陽の直射を胸に受けて、唯茫然と冬枯の雜木の早萠芽しつゝある郊外を眺めてゐる小鳥は木から木に飛びうつつて、かしましく啼いてゐる。大方春の來るのを待つてゐるのだらう。

あゝ何んと云ふ心地のよい歌でせう。私等のやうな毎日々々あくせくと、生活難に追はれてゐる、殊に煙突の恐しく澤山立ち並んでゐる街に住んでゐる者には、到底恁うした感じを味はふ事は出來ません。幾度も繰り返してそのすらすらと詠んである、周圍の空氣の心よさに醉ひました。

○

同

あらいつか夢の一つは殘骸と冷
えてしりへに横たはり居ぬ

近い昔の事である。色々と自分の胸にはびこつた、その空想にかられた慾望や、やたらに人を擬して虚榮に憧れたその時分——その昔——はなやかな夢のやうたつたその當時——あゝそれは最早一個のみいらとなつて、自分の辿つて來た過去の懐かしい路に横はつてゐる。今はその夢より醒めて、尚一歩進んで新らしい夢の境週に入りつゝある。

優しい抒情詩であります。「あらいつか」と云ふ初句をついで、「夢の一つは殘骸と」と云ふ二の句は、調子もよく而もその意味を重く强めて來ました。何んでもないやうに思はれますが、此處に技倆が籠つてゐるやうに認められます。

○

同

何ゆゑぞ妻てふものを眺むれば
偶像のごとく力なきかな

夕方勤から歸つてきてがつかりとしたやうな身體をじつとするゑた時、長火鉢の前に、或は仕事に倦いてつくねんとしてゐる妻の姿を見て、何んとも云へない不愉快な感にうたれる。——何故あんなにうるほひがないのだらう——何故あんなに哀愁な面もちだらう——石膏のやうに——木像のやうに——と思へば思ふ程、自分はたまらなく悲痛に苦しむと云ふのである。

此の歌は男の歌ではないでせうか?私は是を讀んで靜かに胸にその心持を思ひ浮べましたが何うしても男子の立場だとしか思はれません。作者は自分を客觀したのでせうか。何んにせよ私には明瞭にその區別が解りません。斯う云う歌は多く今私が釋したやうな場合に歌はれる心持だと思ひますので、意味のとりやうが違うか何うかは知りませんが、思つたまゝ感じたまゝ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を書きつけて置きます。

○

原田寧子

戀すればうらはづかしさうら寒さ
　眞はだかとなりある如きかな

人間には男女に限らず、誰にも初戀と云ふものはあります、けれど人々の境遇と生活によつて、早い人と遲い人との區別がありますが、然しどちらにしてもその初めて戀を知つた時の感情は誰しも皆一緒だらうと思ひます。

この歌は作者が初戀の、嬉しい樣なはづかしい樣な心の奧の奧にひそんでゐる、その氣分を歌ひださうとしたものでせう。私は此の歌に就ては、わざ〳〵釋をつけるより、皆樣にも斯う云ふ場合はあつた事だらうと思ひますから、御自身の心持と能く引きくらべて、自分の過去を追懷して御覽なさい。そこに深い趣味はうかゞはれませう。

この歌には僅ばかりの缺點はないでせうか。私は第五句の「あるごときかな」がも少し何うかならなかつただらうかと思ひます。あのしまりでは何だか物足りない感じがしてなりません。

○

同

彼の君は袖の中にもいれてまし
　なほ此の君は胸に抱かまし

雨の夜も風の日も常に自分の心を占めて、一度もはた一時も忘れる事の出來ない、懷かしい親はしい戀人の顏、その柔しい心――あゝ意氣投合して成つた戀人よ――私は汝に離れたくない。一時も一秒も、常に自分は汝の側を離れたくない、いやはなしたくない。

と作者は得意な句調で歌ひ去つてゐます。總體に感じよく出來て、而も作者が戀人に對する心の奧の奧のはりきつた閃影が能くうかゞはれるぢやありませんか。

然し或る意味から云ふと、「彼の君は」と云ふのと「なほこの君は」と云ふので、二人の戀人を指すやうに聞え、勢ひ作者は多情家のやうに思はれます。作者はその心算で作つたのか何うかは疑問ですが――。然し私は作者が意味を强めるために、あゝ書いたのだらうと信じて此所にとるのであります。

○

三ケ島葭

くらがりに小さきものをさぐる
　ごとわがなす戀のもどかしき哉

自分は今戀と云ふものが解つた。そしてその戀――戀をした人――親はしい戀人よ――私は汝にこの胸にをどる熱い想ひを話したい、語りたい。然し幾度その機會を得ても、今ぞと云ふそれを語る勇氣が出ない。

はづかしい樣な、きまりが惡いやうなと云つても心の中ではわたちの樣な激しい浪がうつてゐる、詮方ない、遣瀨ない、然う云ふもどかしい想に日を送る、性急な作者の戀する有樣が、例によつて明瞭に顯はれてゐます。誰しも這麽場合はあつただらうと思ひます。

○

同

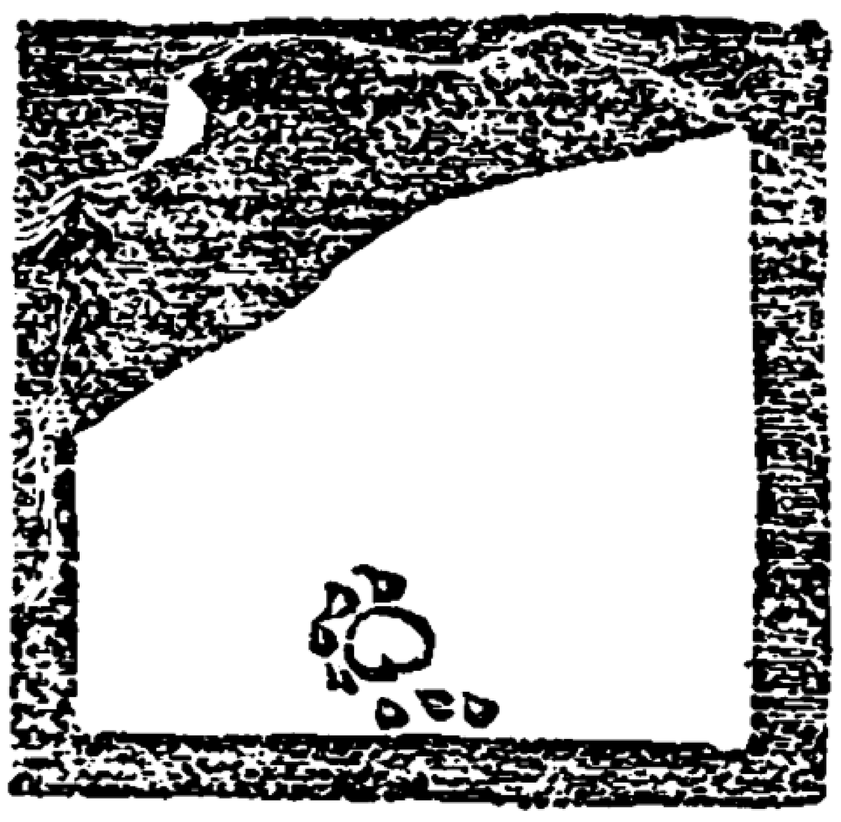
捧げんと君にちかひしその日よ
　りわれの心はゆたかになりぬ

自分の戀は成就して、もう戀人のためには何物も犧牲にして、心命をゆだねた。漸く自分の熱した想を語る事が出來た。何んとなく胸に寬ぎを感じて、心が頗に豐になつた。

此の歌は深く自己の内部にまで立ち入つて、作つたものではなく唯、ふつと頭に浮んだ何んでもない感情を歌つて來たやうに思はれます。最少し强い光澤ある感じを出して貰ひたく思ひました。

以上は皆諸孃の佳作のうちで殊に佳作だと思つた歌でありますが薄識の私には其の意味すら判然と取る事が困難で、從つて諸孃に評釋と云ふ立場として滿足を與へる事が出來なかつたのを深く謝します。

*　*　*　*



怖い目

戸田百合香

重い本を抱へて座敷に戻つた時幹さんは、「そこ：：」―と私の足元を指さす。「いつ落して？あつちへゆく時？」―「えゝ」。疊の上に落ちた丸めた手紙拾ひ取つて、引裂くとびつくりして、「どうしてお破きになるの？」ときく。「だつてあんまり口惜しいのですもの。姉のだけれど…、ねえ幹さん兄弟だつてみんな心がちがつてゐるのですもの、いつ迄もたよりになるものぢやなくつてよ、親がある姉があると思ふのはまちがひね、世の中をゆくのは自分許りなの――自分の心と肉體と…孤獨の世界なのね…。」

「まあ夕美さんはどうして其様な事仰有るの！強くおなりなすつたのね!!。」とぢつと私の顔を見つめる。

「えゝッ！私が強くなつて？どんなに？。」

「だつてねあなたはまへに寄宿舎にいらしつた時分はお兄姉やお友達から來た手紙を抱いてはよく泣いてゐらしつたぢやありませんかお家を戀ひしがつて…。小包紙の中の新聞だつて、お家から來たものは其儘捨るのが悲しいと仰有つてしわを丁寧に伸ばして古新聞の一字も見落すまいと讀んで、大切にしてゐらしつたあの優しいあなたが、今の樣な事を仰有つたりなさつたりするのは私にはほんたうに強くおなりなすつたと思はれますの」。

「強かあないの、だけれど…私孤獨なんだから…」胸がつまつて聲が出ないので唇をかみしめて…。

GIRL'S OWN ANNUAL の金文字の上に目を落す強かあないんだ、弱い心を悟られまいとして、強くよそほつてゐるものを…。あゝ女學校時代は優しい少女にちがひなかつた。お千い姉樣が重病ときいた時は遣瀨なき悲哀の涙が胸一杯になつて、樂しい筈の日曜の晝飯も頂かず、テニスもせず、優しく慰めて下さる室長さんの御膝に泣きふした―十五の夏…。其後も細々の御文手にしては悶々の姉樣が痛ましい御心に泣き明して、翌日の運動會――學生の最後の――さへ氣が進まず、元氣のない顏色を、とがめられた程だつたが、思つた事は充分に云へず、却て向つては我儘許りいふ私だつた故――姉樣を思ふ妹の眞の美しい情緒さ

へ――姉様は御存じあるまいけれど……先刻だつて、お千い姉様の御手紙よんで自分の心を了解して貰へない失望と離れた心を悲しんでそれでも懐かしいやうな氣がして忍び泣きに卓に伏してゐた處を、幹さんがいらしつたときいて、初めて丸めたりなんかして、袂に入れたのを強くよそほつて反抗しても弱い、そして人懐かしむこの心を、幹さんは知らないでと思ふと恨めしいやうな氣がする。

「でもね、―強く見えますよ此頃のあなたは！お怒りになつちやいけない事よ、ねえ？よくねこはい目して御覧なさるの、にらむやうな！、私ね怒つてゐらつしやるのかと思つてこはいの、どうしてあんな目なさるの？。」「あら私――怖い目して？うそでせう、私は優しい目も出來なければ怖い目も出來ませんの、いくぢのない子ですから……。怖い程強い目は、怒つた時でなくつても平常もちたいと思ふのですけれど……。」



唇が幽かにふるふ。常に暗きに引き入られたる心には優しい少女の媚ある目は勿論出來ないが、弱い心の自分には人に特別の印象を與へる――犯し難い力がある――怖い目も出來ないだらうと思つてゐたのに――人を冷視する事のまさりゆく故に望みし目にもなるのかしら？すきな目に――。

本社發行の『少女』は『お伽世界』と改題せり（廣告欄を御覧下さい）



故郷の家

梨花

私が學校を卒業したのは二十の春でした。

二十といへば、もう母さんになつてる、友もある。

それだのに、あまりに子供らしいと御笑ひ下さいますな、私の卒業後の一年間はそれは〳〵無邪氣なものでした。

五年の間住み馴れた寄宿舍や、父母の如く親しみたる師の君と、別れるのは悲しゆうでざいましたけれど上野から汽車に乘つて、さよなら、御機嫌よう、御手紙きつと頂戴よ、なんて、おきまりの言葉を交しながら、送つてくれた友の姿が見えなくなると、もう心は故郷に飛んでゐました。

田端、赤羽、大宮、聞き馴れた驛の名もなつかしく新町……と呼ぶ聲は、一際高く耳に響いた。

荷物は迎ひの者にとらせて、私は一人車に乘つた。

桑の芽の柔らかくふくらんだ野道！

赤城の山、淺間の煙もなつかしい。

車の進むにつれて、道はいよ〳〵狹くなる。桑園の盡きた處、淸い鮎川の流れに添ふて、さゝやかな村がある、それが私の生れた村！　戀しい父母の住む所ですの。

村はづれの一軒家、大きな欅の木の下に、緑に榮える、白壁も氣持よく、藏の屋根に遊んでゐる、百羽餘の鳩は年々にふえて行きます。

なつかしい思ひ出に、二里の道を夢のやうな心地で車にゆられて、いつか家に着いてゐた。わざと表門から這入らないで、東の木戸からそつと這入つた、そして、只今！と、突然大きな聲を出したら、皆驚いて飛び出した。

七十にもなつて、まだぴん〳〵してゐる祖母、可愛らしい三人の姪、父母も、義兄も、姉も、誰も〳〵にこにこ笑つてる、私は溫たかい眞綿にくるまつたやうな氣持で、姪達に手をとられながら座敷へ上りました。

それから私は離れの六疊を、自分の室として、一月ばかりは、お客様のやうに待遇されて居ました。

其内蠶は出る、蠶業學校別科生は入り込む、雇人はふゑる、家の中は急に忙がしくなつた。私も遊んでば

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かゝりゐる事も出來ないやうになりました。
朝早く、まだお日樣も出ない內から、十人もの女の中に交つて桑摘みに行つた、赤襷白手拭は人並だけれど、海水帽を冠つて、夏手袋をはめてゐる、着物の裾が露にぬれるので、皆はしよつてゐるから私も眞似をしたら、白いおこしが長いので、却つて汚れて仕舞つた。柔らかい、緑りの桑の葉の露に、朝日が輝く時、私はいつも桑摘む手を休めて、關東の平野の美にうつとりします。清い〳〵空氣をふるはして、美しい聲の俗謠は心地よく胸に響きます、私も謠つて見たくなつて、女達に教へてくれといふと、をかしがつてきやつきやつつて笑ふ。

晝の內は蠶室で働きます、暇さへあれば手紙を書く雜誌を讀む。りいの切手代はお前の働き賃よりも多いねと兄は笑ふけれど、何より樂しみなんですもの。

一日の內には、三時のお茶受が一番樂しみ、殘りの冷御飯でおすしをこしらへたりしますの。

庭の柏の葉が大きくなつたら、柏餅をこしらへるといふ約束を、姉として置いたので、小僧にとらして、一枚〳〵西の川で洗つてると、生徒は早くも見つけて喜んでゐる。母と、姉と、下女と私の四人がゝりでこしらへた餅は、山のやうに出來ましたけれど、美味しいの大評判で忽ちなくなつて仕舞ひました。

蠶が眠る每に草餅を搗いてお祝ひをする、大きくまるめたのを一人で十位づゝ食べるんですもの、寄宿舍では誰にも負けなかつた私も、家では頭が上りませんの。

蠶は出てから五十日ばかりで、美しい繭を作りました。上繭が四百貫も出來たといつて兄は大喜び、其れをすつかり乾燥して裏の藏に仕舞ひ込むとすぐに、蠶祝ひをする。四間の襖を取りはづして、呑む、歌ふ、踊る、私も無理に坐らせられて、盃をさゝれるので、仕方なしに呑む眞似をしては、皆明けて仕舞つた。

田舍の夏はほんたうに忙がしい。一方では麥を苅り入れたり、田植をしたりしなければならない。

一日田植の連中が、忙がしいから生徒さんに手傳ひして貰ひたいといふ。皆面白がつて飛び出した、私も物好きに出て見たけれど、氣味が惡くつて這入れなかつた。生徒が植ゑたのも、みんな植ゑ換へなければならないといつて、男達はこぼして居ました。

何も彼もすつかりすんでから農休みがある、二日つ

づいての休日は、村の人々には一年中の樂しみなのです、私は西の靏室の二階で、往來を見てゐると、白い浴衣、赤い帶、チックで光らした男、粉箱から飛び出したやうな女、何處へ行くのか、何をして遊ぶのか、暑いのに汗をふき〳〵、ぞろ〳〵と歩いてゐる。

農休みがすむとすぐに糸引、十五人の女は、一日に八升づゝも絲を繰りますの。私にも絲を引いて御覽と姉がいふので、始めて見たけれど私には三升位しか繰れません、暑いのに湯氣が顔にかゝつて、苦しくつて堪らないからやめて仕舞つた。母は、女のする仕事は何でも知つてなければなりませんつていふけれど、父は、りいに絲引されると、良い絲を無駄にするので、却つて損がいくから、まあ遊んでゝくれつて笑つて居た。それでも母はなか〳〵遊ばして置かない。それだや着物を洗張りして縫ひなさいといふ。裁縫は私の本職ですもの、得意になつて始めたけれど、一枚の着物を張るばかりで一日かゝる、それも其筈、張りかけては柿の木の下や、葡萄の棚の下に立つてるのですものホヽ、大きな體して見つともないからおよしつて姉は叱るけれど、子供にとつてやるんですよつてすましてゐる。やつと張り上げて、今度は縫ふのが袷一枚で五日かゝり、頭が痛いの、鼻が痛いのつて遊んでばかり居りますの。

いつか夏も過ぎて秋になつた。稻の實りもいゝので村の者も大喜び、今年は豐年だから、芝居を建てようといふ、年寄連も今年ばかりは反對もせず、若い者に任せて仕舞つた、早速家の東の畑に小屋を造つて、田舍廻りの何々連も乘り込むだ。

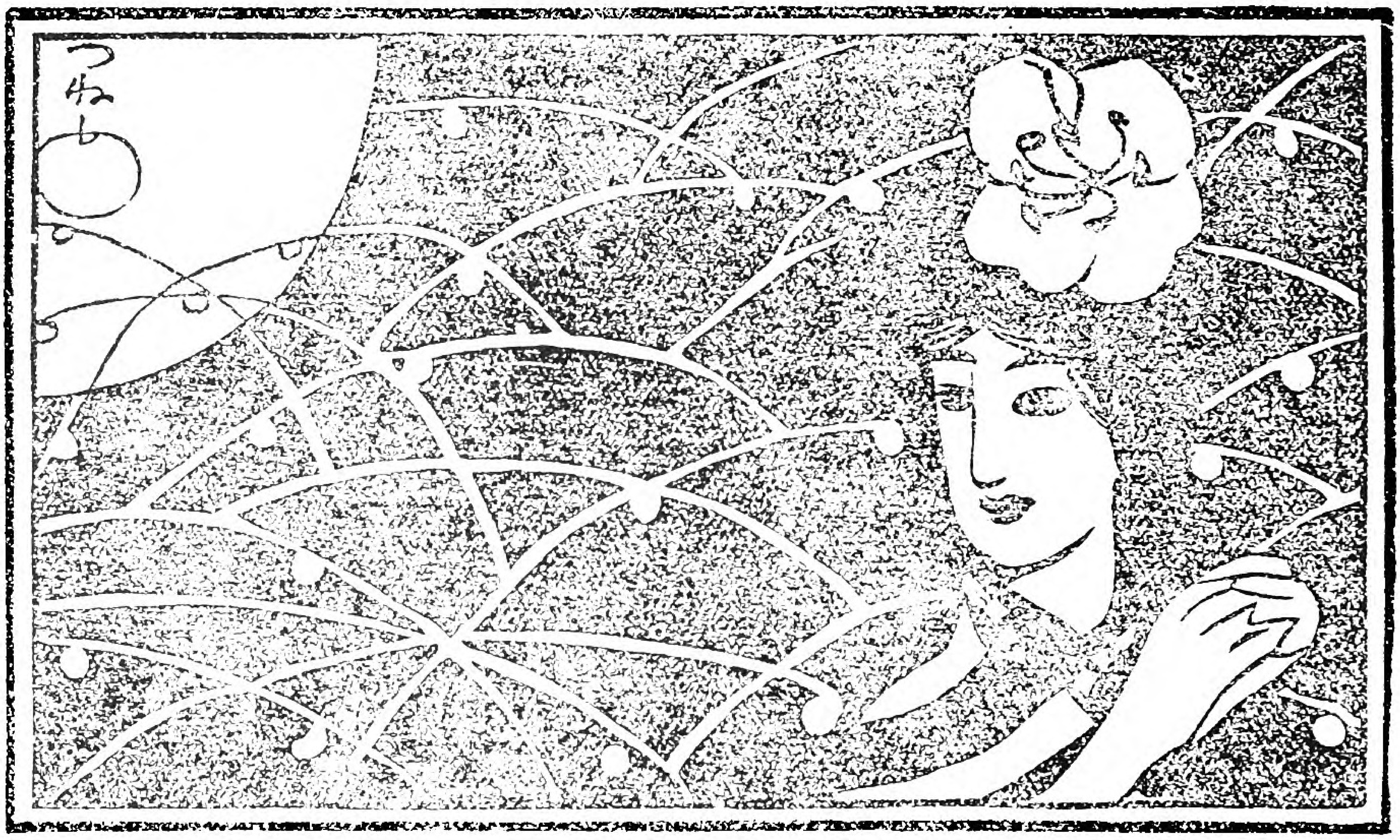
芝居は愈々始まつた、土間には筵を敷いたばかり、其處に一寸の餘地もない程ぎつしり詰つてゐる。

西の棧敷の眞中を占めて、家の客の待遇に私はなかなか忙がしかつた、果物の皮むきばかりでも指が痛くなるほど、ぐるりと思ひきりふくらました、大きな桃割れが目立つたと人はいふ、私は恥かしかつた。

役者が用ふ道具は大概家へ借りに來る、まゝたきの膳部から、判官の腹切の疊まで、おかるがつかふ懷中鏡もほしいといふ役者の癖に、懷中鏡位持つて居さうなものですのにね。

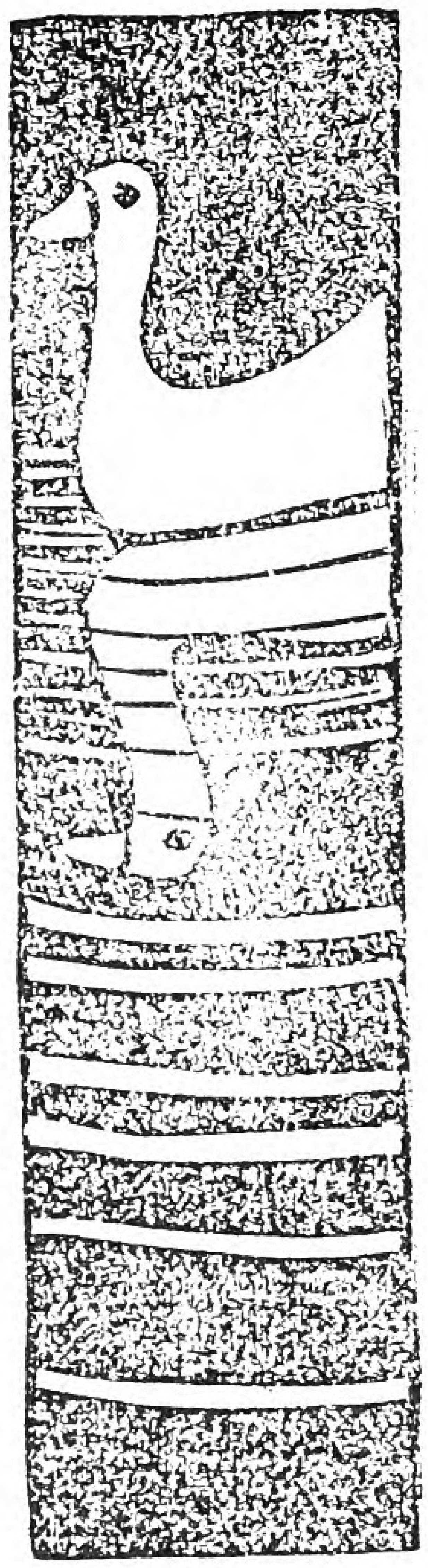
興業四日間で芝居も終りました、小屋は忽ちつぶされて、踏み荒らされた畑も、掘り返されて仕舞ひました、芝居の噂も、絲引娘の口から消えた頃、村人は、再び眞面目に仕事に、精を出すのでした。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



誌友欄

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



小説　　水野葉舟選

○おばさんと茶の間

横濱　月草女

二輛の車はカラ〱と威勢よく細い堤の上を走つて行つた。右手は清い大和川の流れ、所々にせきとめられた河原の上には晒らされた大きな菊模樣の友染が未だ柔かい初夏の風にひら〱とゆらめく。

左には廣く展けた青麥の畑で、早や穗を一ぱいつけたのが二尺許りもすく〱と延びたのが一と目である

都育ちのお俊の眼はもう恍惚として、かた〱と身體も氣持よく車の上でゆられて居た。前の車の上から丸髷姿の嫂のお千賀が時々振返つては面見合せて莞爾笑ふ。「あゝ私は今何も考へてない」とお俊は口の先まで出して云つた。胸は平和である。そつと兩手で押へた乳房の下の鼓動でさへ其靜けさは、まるで曉の湖水の樣。

何時迄も何時迄も此柔かい情緒が續けて行けるなら甚麼に好いだらうと彼女は思つた。否、此儘ソッと動かさずに玉蟲色の手箱の中にでも封じて終ひたいと思つた。

コトンと音がして梶棒が下りる。氣が付くと自分はいつの間にか大きな白壁の門の前に下されて居た。周圍には物珍らしさうに胸を、はだけて、嬰兒を横抱きにした村の女房や、うす汚ない女の子たちが何かガヤガヤと騷ぎ立てゝ居る。

「さ、お俊さん、這入りなはれや。」お千賀が手を取る樣にして、小刻みに石段を上ると、

「きれいやなア嫁はんや」と後の方で誰かゞ云ふ。

「まあいやな」口の中で云つてお俊は眞赤になつた。

「ようまあ、此れが東京の孃さんかや、さあ〱上りなはれ」幾人も出て來た女の中で四十五六の優し相な叔母さん、一と目見てお俊は此女が屹度お千賀の姉樣だと思つた。

「昨日からどないに待つたか知れえへん、もう〱淋しうてな」と此方を向いて「あんた、之から、ちとお越

しなはれや」いそ〳〵とお茶や草餅を運んで來た。お千賀は氣輕さうに手を振つて、「姉さんもう構ふとくれやすなお母様は？」「昨日から留守やだによつてな、どないに騒いだかて構めへん」お俊は何となく此姉さんが懐しかつた。三つの時、死別れてから眞の母の味を知らない暗い子は何かにつけてしく〳〵と泣いた。おど〳〵と隅に許り縮てまつて人慣れない彼女の胸に此叔母さんの口から漏れる言葉の一つ々々は不思議にもしんみりと浸み込んで行つた。縁の端には石の手洗鉢が置かれてある、其水の上に只一輪くづれかけたもう半ば黒ずんだ眞赤な椿が浮いて居た。黄色い八重山吹がムラ〳〵



天賞　賤の女　芝區　後藤明あさ子

と散る。

お俊は柱に凭掛りながら叔母さんの横顔をじいつと見詰めて居る内に淋しくなつて眼瞼に熱いものが滲み出た。一晩でもいゝから一所に寢てその胸にすがりながらしみ〴〵と母らしい、子らしい氣分を味ひたいと思つた。叔母さんは何にも知らない。

「潔はどこへ行つたのやろ」暫らくして獨言の樣に斯う云つて側の、くすぼけた茶色の襖を開けて中を覗いたが誰も居なかつたのらしく、頷いて仲の間の方へ出て行つた。

「姉さん姉さん」と嫂のお千賀もそれを追かけて行つて終つた。獨り取殘されたお俊は何共云ひ樣のない物悲しい氣分になりながらそつと半巾をだして眼瞼を拭いて居る中に、今叔母さんが閉めた其薄暗い室が覗いて見たくて成らなくなつた。あたりを見廻したが向ふの方から二人の低い話聲が聞える外は誰も居ないのでソッと立つて、其唐紙に手をかけたが、惡い事でもする樣に手がぶる〳〵と顫へた。が戻るには餘りに好奇心が勝つて居た。彼女は思ひ切つてつと閾を滑らした。

其處は四疊半の小さな茶の間だつた。『日照雨』の繪葉書が柱に淋しく掛つて居る外は何の裝飾もない、只片隅に据ゑられた小形の机には淡紫地の布がかけられて、其上に半ば開いたモオパッサンの『女の一生』が一冊と小さな白い蓮華草の一株それからガラス棚の本箱の上には赤い筋の入つた尺八が無雜作に立てかけてある。彼女は何がなしホッとした。自分の思つた謎の續きを此處で皆解かれて終つた樣な氣がした。ふと其前に坐るなり鉛筆を出して「白い水仙の……」と紙片に書き付けて其處に置いた。其後がまだ續かない内に人の足音がしたので、ハッとして元の坐に歸ると、又優しい叔母さんの笑顏に彼女の心は吸込まれて行つた。

燈火が點いても未だ室の主は歸らなかつた。小さな光る蟲がチラ〳〵と水の汀を飛び廻る頃、お俊は又元の堤の上を車にゆられながら「母さん」とでも、せめて云ひ度かつた叔母さんに默つて別れを告げて振返つた刹那の胸の渦巻や、未だ見ぬ人の姿やを思つて居た彼文句を尙書き續け樣とする迄に自分の心は彼の室の主とピッタリ合つて居ながら、逢はないで歸る寂しみをしみ〴〵味ひながら暗の中にポッ〳〵と浮いてみえる月見草を見詰めて居た。（天賞）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○死の前夜

横濱市　山崎都鳥

久潤でお久さんがひよつこり見えた、家では恰度母が行水を遣つて今上つた許り。尚銷えやらぬ暑さのべつとりと汗が滲むやうな身體へ輕く着流して、胸のふくらんだ乳房の邊をはたはたと團扇で煽つてゐた。

鮮な青い波を畝る疊が何處までも涼味を添へる。

見透せる裏手の一坪許りの庭に、箱庭やら、朝顔やら鴨足草などの格好よく配置されて、庭には過分の鬱然とした青桐がある。



地賞　淺草にて　澁谷　井上もと子

遣水した許りの鉢の樹の葉に光を持つた雫が眞珠の如に輝く簾から吊した種種色の硝子の風鈴が互に觸れてはチヤラ〳〵と音をたてる。

いくらか夏痩したお久さんの雙頰には、いつもの如に微笑が仄いてゐた。「お伯母さん隨分涼しさうなのね」。とお久は言ふ、

「さうぢやないけれど今行水を遣つた許りだから――お上りよ」と、母

は夏布團をすゝめて、お久の膝近くにじり寄る。
「お伯母さんとこは、家が廣いのに風透しが良くつて來る度に羨しいの——」と、お久は團扇懸から一本拔き取つて、袖から懷から肌觸りの良い風を流し込む。
火取蟲が高く吊した電球の周圍を、目まぐるしい程飛び廻つて、其からだをぶつつける、そして遂に燬けてお久の膝に落ちた、お久はその形骸を團扇で拂つて、裏から吹いて來る青桐の風に心地よささうに身を任せた、太く錆びた父の聲と、隣家のお伯父さんの聲が簾の蔭から響く、そしては盤面を擣つ將棋の駒の音が鋭く、手に取るやう。お伯父さんと、父といつもの如に縁臺の上で棋戰をしてゐるらしい。母とお久さんとの間には間斷無く言葉が交換されて、漸く內證事に及んで、姑とお久との不和の事まで語り續けられた。
「……姑とお前と折合が思はしく無い相だけれど、兎角長い者には卷かれろで、我慢をするさ」と、母は稍して言つた、「お母さんは無い人ぢやあ無いのですけれど、老人に有り勝な猜疑深い、拗ねる癖があつて、少し話が錯雜して來ると、奈何せ、俺あ邪魔者だからつて嫌味を並べるのでせう、それを聞くのが辛くつていつそ離縁で了ふと思はないでは無いのですけれど、又その中に折れる事もあらうと思ふて諦を附けてゐるの」とお久は怨めし相に、俯向勝に言つた。
勝氣なお久には無暗と、親の權を振り廻す姑の仕打が心憎らしく、時には思ひ切て言ひ捲つてやりたいと思ふ事もある、「お久！お久！」と、突つけんどんに呼び捨てる姑の口振を思ふと、腑甲斐無いやうな、遣瀨無いやら、悲くもあり、鳩尾のあたりを締めらるゝ如だ、母はお久の身を思ひ、境遇を思ひ、「さうもあらう」と、點頭いた、そして躬ら若い中の辛い事、悲しい事々を理解的に說いて聞かせた。
蟬時雨の礑と歇んで、隣の大きな椎をゆさぶる風が、碧梧桐の葉にどよみを打たして、お久の身體を包んだ將棋の音が絕えて、須臾して父が歸つて來た、又一頻り罪の無い話に語り耽つた。お久の胸はいつになく、晴々した、低調な草笛を吹くやうな蟲の聲が四方から騷しいまでに聞え出した、風鈴の音がけたゝましい。

* * * * *

それから三日許り經つた日の朝、突然お久さんの變死の訃が屆いた、家では驚くより、呆れて口が塞つて、疑懼の暗愁に鎖された、でも取あへず母が追悼やら、その理由を慥かめるために、死後のお久さんの暗い家

を訪る丶事となつた。

その日は暑さも昨日に較べると、めつきり殺げて、肌の皮膚へ柔い絹を纒ふやうな風が吹いてゐた。

變死——變死——と二三度繰り返すと、奈何しても、病氣では無いらしい、自殺——嗟自殺、お久さんは躬ら死んだに違ひ無い、平素から氣の狹い質だつたからけれど死なねばならぬ事情があつたか、如何かは疑問だ、一徹の量見から思ひ詰めたに違ひ無い。としか受け取れぬ」と、母は途上で思つてみた、すると心が何となく押し附けられるやうな、引力で吸ひ寄せられるやうな、何とも形容する事の出來ない、不安と疑惑が犇と堪える、母はお久が三日前の夜、歸るさに蟲の聲などを氣にした事を思ひ出して、それが前知魔の哀調であつたのかも知れぬと思つた。

　お久さんの家へ行つて、配偶者から聞くと、案の定毒藥を仰いだとのことであつた、遺言も無く書置も無く多分は精神に異狀を來したのであらうとの説であつた配偶者が夜歸つて來ると室で呻吟く聲が聞えたので、行つてみると、お久が血塗れになつて苦悶してゐた事や、のた打ち廻つて遂に絶命した事を掻いつまんで話した、その言葉の中には強い刺戟を持つてゐた、母は怖ろしい現象を眼前で暴露されるのを聞くに堪えぬ風であつた、母はお久さんの前夜の微笑を思ひ起さずにはゐられなかつた。その微笑を浮べた唇は眞紅の血を吐く唇となつたのだ、その最後の燃ゆるやうな眸の光は必と姑の上を射てゐたであらうと思つた。

「可哀想でしたねえ」と、母は自分の姪のお久の死を悼む熱情を罩めた一句を送つた、沈默が永く續く。涸れた大地へ吸ひ込まれる如な白い日光が寢棺の白い布の上へ、黒い蠅の影を落した。（地賞）

○日暮れ時

信濃　世良田優子

「遲くなりまして、何卒水を一杯下さいまし」砂と塵で固めた樣な汚い髮の毛をくる〱と卷き付けて、襟首の處で一寸止めて、袷か單衣か解らぬ樣な穴の明いた筒袖をだらしなく着て、それに上を向いた鼻がいかにも下品に見ゆる、眞黒いバケツを下げてキー〱水を汲んでゐる、車引のお内儀は皆なかうしたものだらう。

　おつか〱ヒー〱と子供が暗い家から顏を出して

泣いてゐる、「今行くだ待て」「どうも有難う御座いました」と薙刀草履をパタ／＼させて出て行つた「何で此子は泣くだとピシャリ頭を叩いた叩かれても子供は別に大きな聲で泣き叫ぶでもなし前と同じ樣にしく／＼泣いてゐる、叩かれるのが癖に成つてゐるので何とも感じないらしい、お内儀は一摑鉋屑を摑んで來て破け火鉢にボヤ／＼と火を焚き付けた、黑い鐵瓶がかゝつてゐる、家の中は人がゐなければ空家同樣唯だ黑く煤けた戸棚が隅に一つ有る計り、破釜や手の取れた鍋がそこらにごろ／＼してゐる、外から長男の政治が息せき卷いて飛んで入つて來た、そしていきなり「今夜活動にやつておくれお母」、「何活動だと餘ん戲けた眞似を云はねえものだ」「えーやつてくれや己あ行きてえな」――「何だつて今夜のお飯どうするのだ馬鹿云はねえものだ――」うん、「己行きてえや、おつか、やつてくれ――」「何だつてうるせえ今一度云つて見ろ」「お母行くせ」何つといきなり頭をピシャリ叩かれた、政治は暗い柱に捕つてシク／＼泣き出した、うるせえや、そんなに行きたけりやその代り家へ歸るな、寄せねえぞ今夜こそ家へ歸れば許さねえぞ――チヤラリと懷から五錢白銅出して投げつけた、いゝかその積りして出てゆけと云はれて政治はそれでも五錢手に摑んで泣きながらシブ／＼戸口を出た、母は後からよく覺えてゐろ今夜は寄せねえから――とどなる、火鉢の鉋屑は消えかけてぱかり／＼と暗い家を明くしては又消えかゝる煤けた障子がうす明るく浮いてゐる、又ヒー／＼小さい子が泣き出した、母はこのガキめと腹立ちまぎれに叩いた。

三十分も過つた頃政治はしほ／＼して歸つて來た敷居を慚々またいで「お母、おら行かねえや」「何歸らつともいゝや、出てゆけ」と暗の中からどなる、政治は母の暗に浮く顏をすかして見て「おら行かねえで豆一錢買つて來た」うんそうかと母は言葉を少し穩やかにして、どらおれによこせ、といぎたなく政治の持つてゐる新聞紙の小さい袋の豆をつまみ出して口に入れた、政治はそら遣るよと弟に分けてやつた、「お母に四錢やる――」「どらよこせ――」母は又チヤラリと懷の汚ない錢袋に入れた。政治は一粒づゝ豆を食べながら子供の心をそゝる樂隊の音を聞いて、母や姉に手を引かれてゆく外の子供の後姿を見送つて暗闇の戸口に立つてゐた。がしく／＼何思つたか泣き出して上り口に轉りとねころんだ、そしてボカリ／＼鉋屑の燃えるのを

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

見てゐたが政治はそこに寝つてしまつた、ガタンと風は寂しい音に一渡り過ぎた、母はフー〳〵火鉢を吹いてゐる。（入賞）

○忘られぬ面影

向島　小林高子

何かにつけて目の前に浮いて出る面影がある。

頰骨の高い、細い、くぼんだ目から、せり出して來て、顏總體を司配する空氣に次いで、いかつた肩のあたり煙に乘つた樣な妙に仙人めいた歩きぶりにまで及ぶ。此ぼろしの實體を重見先生と呼ぶ。私の居た學校の先生の一人である重見先生から私たちの組は譯と心理を習つた。



入選挿ゑの　芝區　村木萩子

私たちは其大恩を忘れた理ではなかつたが、先生に、イカボット、クレーンと云ふ名をつけてしまつた——譯でアービングのスケッチ、ブックをして居たので、イカボット先生が飢饉年のかゝし見た樣な風をして風に着物を吹きとばされながら歩いて行く所へ、來た時に、先生に似て居る樣な氣がしたので、急にうれしくなつて、イカボットと云ふ名を奉つてしまつたのである。

——それから後は私たちは重見先生と呼ぶ代りに、イカボット先生と呼ぶ事になつた。斷つて置くが決して惡氣ぢやない、其中で

も最も私が罪が淺い、皆の尻馬に乘つたばかりだから、心理の組でもいろんな事を教はつた。

皆で前から相談して置いて、其日の學課を始める前に誰れかゞ先生に世間話をしかける、先生が其答をして居るうちに、他の人が何か考へて又話しかける、かうなると話はそれからそれと廣がつて、丸で教科書と緣のない所まで行つてしまふ、それが文學談に落ちつく事もあるし、宗教政治に片付く時もある、かうして一時間中教科書には手もふれない事が度々あつたが、私たちには其方が面白いので、よく先生をつり出したものだつた。

或時壓感覺と云ふ事を教はつて居る時だつた、先生がこんな話をした。

誰れだつたかの公判の時に先生も行つたさうだ、裁判所の前は人の波で一ぱいである、先生も其波にまざつて其一部になつた、浪は後から〱制限なく增える、一番後に居た先生はちやうどまん中になつたさうだ、後から、前から、右から、左から、おされるので、先生の骨も肉も扁平になつて、氣管も食道もつぶれてしまひはせぬかと心配になる程壓されたさうだ、其時先生は非常に壓感覺を受けましたと云つた。

其時どうかした拍子で先生のむぎわら帽子がとんださうだ、かゞんで取ろうと思つてもひろふ事が出來ない、ひろへば人の浪につぶされさうだ、しかたがないから其儘にして置いたさうだ。さて法廷が開かれて一番先きの人から順々にはひる事になつた、先生の前の人がはひり終つて、先生が一歩進めようとした時、出來るだけの人を詰めて、此上は詰める事が出來なくなつた法廷は先生を入れる事を拒んださうだ。かくして先生は、Extra numbera の第一たるの不見識に遭遇して——むぎわら帽子は取れずに——家に歸つたさうだ、翌朝になつて新聞を見たら昨日の樣子が出て居て、しかもむぎわら帽子の行方まで出て居たさうだ。

其時先生は讀ながら自分のだなと悟つたと云つた。

此話を聞いてから先生の姿は忘れられぬ影となつて、私の目の前を往き來する、細い强い因果の絲でつながつた先生とむぎわら帽子が如何しても私の頭からはなれない。

いやしくも、アービングの名がつゞく限り、世間にむぎわら帽子の種のある限り先生の名と、先生の姿は私の胸に生きるだらう。（人豊）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

階上の書齋より

葉舟生

△今囘は投書の量が多かった。外にしづな子の「お小夜」、田枝子の「祭禮」とを受け取った。「お小夜」はこの人の一轉化を豫想させる作であった。細かな心理の推移を忠實な筆で書いてあった。副女主人公の姉と主人公の廣言を書く上に洞察の足りぬ事は、作者の人間に對する目の幼さを證するものである。自分は尙ほ不足を言ふと、女主人公の根本の生活に對する作の目が――即ち作者の足の立って居るポイントが少し通俗的すぎると思はれる。そこにある。缺點はこゝにある。自分に憶面なく言はせて下さるならば、凡ての人生に向つて、一層進んだ理解力、(洞察力)を持って居る事、一層特殊な感受の力がある事、大膽な批評がある事、これ等は作者としての資格の根本の要求である事を信ずる。これは又人間としても、誇る可き生活である。自分はこの點に向つて努力される事を希望する。「祭の夜』はこの作者のものとして、さう勝れた作とは信じられない。集中點の弱い作である。たゞ、この作を見ても、この作者も從來の道を一轉しつゝある事は明かである。從來の一調子で、ぐい〳〵書いて行く癖が、漸く轉じて、柔か味と、ふつくらした味とが加って來た。即ち、その周圍を一つの――たゞ自分の心持だけで、狹く見て居たのが、目を靜かに置いて、しみ〴〵見ようとする心持が生育し始めて來た事を信じられる。これはこの作者にとって祝す可き事であると思ふ。この作はさう言ふ面白味が加った事を感じられる。この作はしかし、この人のものとして、さう勝れたものとは思はれない。自分はこの姉妹の人の歩く道の廣い事を希望して止まない。八月號にはこの田枝子の作を紹介し度いと思ふ。



日和遲ざくら

△五月號には佐藤萬壽子氏の作が載せられて居る「破談」と言ふ作である。自分は作者が、或るレベルに停滯して居るのを感じた。甚だしく感情が樞に入って居るのが感じられた。六月號には小笠原貞子の「愛憎」が公にされた。前のに比べると、かなり重量のある作であった。少女の心理を細かに書いた點を感心した。しかし、底になって居る心がまだ眞に目を覺まして居るとは思はれなかったのを不足に思ふ。さて今囘の選評に移る。

△花の雫の「病」は極く普通な幼い作。泉梅代の「母」不愉快な程、センチ

メンタルな作であつた。一女の「卒業」は一寸面白かつたが、終りの處が新派劇式であつたので、啞然とした。世良田優子の「日暮れ時」は、面白い作である。この人の才能と同情とが勝れて居るのを見た。汚いものを汚いものとして書いて居るのが面白い。山崎京子の「堕落」と「死の前夜」との二篇がある。自分は後の方を取る。前の作にルーズな興味にまかせて書いたと言ふ點があるのを感じた。この作には、稍正直に書いてある點があつた。しかし大體この人のには、まだ古い句が殘つて居る。千鶴子の「若き妻」はこの人の前二三篇に見た面白い特殊な生活に對する描寫が無い爲めに、全體がたゞ巧みに書いてあると言ふに過ぎぬものになつてしまつて居る。特殊な生活を書くのがいゝと言ふ譯ではない。斯う言ふものを書いても、も少し光つたものになつて欲しい。長澤美也子の「ひと夜」はたゞ少女の或る心持が書いてあると言ふだけの作。粒木つねの「印象」、たゞ小器用に書いてあると言ふだけの作であつた。餘念櫻の「新女房」は、全く空想で書いたものである。これも、何處から流行につられて表はれたものゝ一つであらう。くじやくの「親しき友に」は一種の慇痴が書いてある。わかばの「瞳」底に横はつて居る心は極めて普通のものであるのに失望した。細かに周到に書いてあるが、この中心の値の乏しさの爲めに見劣りされる。花の栞の「病」はたゞごと。葵の花の「青葉の里より」今回のは極く單純なセンチメンタルのものであつた。この人のは一體地上にこびり付いたやうな映の無い、飛躍の無い作である。いづみの「虚榮心」は浮ついた考察の足らぬ作。小林高子の「忘られぬ面影」輕妙な自在な筆で書いてある。中々曲なキットのある作である。何事もない憶を書きながら中々明かな印象を殘す。蔦紅の「桐の花」古い文章の句が殘つて居る。心が低い地にこびり付いて居る。も少し、自在な目を養はれよ。葉蘭の「嫂」一寸よく書いてあつた。缺點はこの人々の基礎をなして居る生活が書けて居ない事である。酔花の「お京さん」はあやふやなやうな作であつた。たゞ素直な心持が見えるのがいゝと思つた。柔夕子の「破約」極めて幼い作だ。月草女の「おばさんと茶の間」この人も、從來の粗雜なげやりな域から脱して、或る確とした地の上に立つだけの處には入つて來た。しかし、まだ本當の境ではない。極く單純な感情の訴へにすぎぬ。こゝを更に一歩ふみ出す可きものと思ふ。矢澤榮子の「朝」落語などにある趣味で書かれて居る。それ以上に侵入して居ないのは拙い事だ。長谷川英の「岩さん」は因緣話に近い小説だ。舊派の作である。さすらひの「卒業」この人の作には中々しつかりした處がある。相當に考察の跡もあり、思考の力も確實である。この人は囑目すべき作者だと思ふ。泉梅代の「母」はだらしがない。明子の「途中」如何にあやふやである。齋藤葉香子の「暗い影」上手ではある。又世味を知つて居るとは思はれる。しかし、斯う言ふ作の同型の多いのにも飽きて居る。のり枝の「第一言」この人の作としては面白かつた。

△今月は餘り多忙であるから感想は書かずにすます。

○瞳

近江わかば

瀟洒な茶室風に建てられた六疊位の小座敷に、むせぶやうな若葉の香を嗅ぎながら、秀樹は餉臺の前に洋服の膝を崩してゐた。今迄窮屈ざましに飲けない盃を二三杯も重ねたと見えて、眉と眼の際だつて美しい、白い顔を少し昂奮したやうに薄紅くしてゐた。芳子は女中に導かれて青葉の植込の中を此處へ來る途中、理由もなく胸が躍いたが、さて斯うして相對して見ると、別に熱い血も頰に上らなかつた。若い男と斯うして向き合つてゐながら、斯んなに冷やかな、水のやうに粘りのない情緒があるものだらうかと、彼女は不思議に思つた。もうすつかり醒めて了つたんだなとつくぐ思はれる。芳子は二年前の二人の戀時代をつくぐと思ひ浮べて見た。其頃もう一度激しい戀をして、其破れた戀の痛ましい殘骸を抱いて、人知れず佗びしい日を送つてゐた芳子は、初めは無論自分が秀樹に戀し得られやうとは思はなかつた。死ぬ程戀した男を忘れて、又新らしい男を思ふことがあらうとは思はなかつたが、秀樹に對し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て何かしら物懐しい氣がした。その男に相對してゐると、暖かな血がゆるやかな響を立てゝ、自分の身體を廻るやうにも思はれた。しかし芳子はそれが戀だとは思はない、凡ての異性に對して感ずる女の情緒だと思つてゐた。戀ではない！戀ではない！と自分で否定してゐながらも、芳子の心は一歩づゝ秀樹に引寄せられた。そしては前の男を忘れるともなく忘れた。芳子の胸には前の男の影は漸々薄くなつて、秀樹の影が漸々と濃く色彩られて來た。遂には芳子の胸は、秀樹のみが領するやうにもなつた。荒野のやうに荒んだ芳子の胸にも、再び明るい春が來て、柔な戀が芽を吹いた。

けれど根が醒め易い芳子には、斯うした戀も長くは續かなかつた。男が勤めてゐる會社の都合で遠くへ離れてからは、その男もいつの間にか過去の人になつてゐた。湯のやうな涙を流して別離を惜しんだことも、其當座火のやうな手紙を送つたことも忘れたやうに、此頃では思ひ出すこともなくなつた。男の方からは恨むやうな文句も來た。責めるやうにもいつて來た。けれど芳子は相手にしなかつた。長い〳〵熱烈な手紙にも、三度に一度、五度に一度より返事を出さなかつた。それも時にはハガキで濟ますことさへあつた。其男の執着に燃えた激しい手紙が恐ろしくも思はれたし、又男らしくもないと餘計厭氣も射した。芳子は斯う云ふ風に、枝から枝へ飛び遷る小鳥のやうに男の胸から胸へと憩ふて、其間に何の未練も執着も殘さない、さつぱりと水のやうな戀をするのが、自分ながら不思議に思はれた。だが戀と云ふのは皆斯んなものぢやないかとも思つた。激しく燒き盡して了ふのものろ〳〵と燃やしてゐるのも、おそかれ早かれ何れは同じ運命が來るのだ。恐しい時の力！戀も涙も若い血潮も、凡ての物を過去に運び去る時の力！と彼女は染々斯んなことも思つた。此度秀樹が上京するに就いて、わざ〳〵當地へ來てわざと町から離れた秋月亭へ呼び出した時…芳子はもう逢ひたくなかつた。生中今逢つて男に執着を増させるやうぢや困るとも思つたが、又逢はないとすると、彼麼執念深い男の事だから、何麼ことをしやうも知れぬと其麼恐しさも混ぢつて進まぬながら出て來たのだつた。來る途中も斯んなことを思つて來た。もう約束の四時はとつくに過ぎてゐる。男が待ちあぐねて歸つて了へば、いつそ都合がいゝ、そしたら反つて此方から恨みをいつてやらうと、そんなことに興味を持つて來たのだが、しかし秀樹は待つてゐた。

先刻から自分を待ち佗びながら、未練らしく腰を据ゑて、女中を相手に浮かない顏をしながら、チビリ〳〵と無理に盃を含んでゐたのが、自分の姿を見て急に勢ひづいたかのやうに芳子には見て取られる。其昂奮した燃えるやうな眼を見ると、芳子の心は思はずじり〳〵とたぢろいた。スタ〳〵と廊下に小刻みな足音がして、女中が誂へ物を持つて來た。何か一言二言愛想を云ひながら、空になつた急須を持つて退くと、男は女の庭に反らす眼をじつと追ふやうにしてゐたが、ふと此方を向いた眼とハタと出逢はすと、男は思はずにつと笑ひながら、

「よく來て呉れましたね、僕はもう逢へないかと思つた」と相手をじつと見据ゑるやうにしながら、重い聲でいつた。其思ひ入つたやうな顏を見ると、芳子の心は、激しくぶる〳〵と顫へた。急に笑つて返すことも出來なかつた。女の白い胸に恨の刄をグサと突刺して、其迸しり出づる眞紅な血を見ながら、につと快心の笑を漏らした、男の面のやうに物凄く思はれた。

「妾ぁ氣ばかり急いたんですけれど、思ふやうに出られなかつたものですから」とわざと沁みりいつたが、急に開き直つて、「此度は御榮轉でお目出度うございます」と捉つた云ひ方をした。

「榮轉だかどうだか」と秀樹は苦笑しながら、

「僕は實際東京なんかへは、行きたかあないんですよ、渦巻のやうな都會を思ふと僕の身體が其激しい渦巻に巻込れて、粉微塵に砕けて了ふやうな氣がする」と暫く考へるやうにしてゐたが「實際僕はもう奮闘する勇氣がなくなつた」と吐き出すやうに云ひ切つた。其熱した顏からは漸漸血の色が逃げていつた。芳子はふと男を憐れむやうな心が起つた。男の心が自分の心に染むやうにも思はれた。しかし其れが戀慕の情にはならなかつた。以前よく二人は熱い血を迸しらしながら、しきりと人生觀なぞを論じ合つたものだが、今はもうそんなことにも觸れたくない。お互に氣まづいやうな思ひをして話もはづまなかつた。男も默つた儘巻煙草ばかり吸つてゐた。芳子は其碧い煙がゆら〳〵と、新緑の木立を靜かに縫ふて行く其行方をじつと見守りながらチロ〳〵と小やかに池に落ち

る筧の音に耳を澄ましてゐた。

「靜かですねえ」と秀樹も同じく耳を澄ますやうにした。

二年前の情熱に燃えてゐる頃なら、二人の甘い戀を語るには、どんなに適はしい背景であらうと、ふと芳子はそんなことを思つた。それにしても、今はもう跡方もなく醒めて了つた。自分の胸を探ぐつて見たら、眞白なパサ〳〵に乾いた灰ばかりが出て來よう。斯うした水と油のやうに入れ合はない離れ〴〵の二つの心が、斯うして膝を突き合してゐるのが芳子は堪えられなかつた。斯んな苦しい時間が早く經つて來れゝばいゝと願はれるのだつた。

「幾時に御出立なさるんです」と急かして立てるやうにもいつた。

「幾時でもいゝんです、遲くなれば今日でなくつたつていゝんです」と男は落俯いてゐた。

早く別離れやう〳〵と芳子は思ひながらも、餘り强いとも出來兼ねて長い日のとつぷりと暮れる頃迄二人はそうして相對してゐた。女中が太い蠟燭を點けた古風な燭臺を運んで來ると其れを機に芳子は、

「ではもう失禮致します、どうぞ御機嫌よく」と立掛けるのを秀樹は慌てゝ

「もう歸るんですか、まだいゝぢやありませんか、何も僕は、今夜出立なければならんと云ふんぢやないから、」

ちら〳〵と太く搖れる燭臺の火影に、男の瞳は獸猛のやうに光つて見えた。芳子は思はず身の縮むのを覺えた。

「ね、濟みませんけれど許して下さいまし、妾困るんですから、ほんとに困るんですから」芳子は我を忘れて哀願するやうにいつた。

男はじつと眼を据ゑて、不滿らしく口を閉ぢて居たが、やがて女中を呼んで俥を命じた。

たぷ〳〵と黑い水が岸を打つ湖岸を芳子を乘せた俥は町の方へ急いだ道端の蒸すやうな青葉の香や遠くにちらつく町の灯が丁度夢の中の出來事のやうにぼんやりと芳子の意識に入る。頭は混亂して今にもはち切れさうに渦を巻いてゐる、其激しい渦巻の中を男の瞳――今にも鷲摑みにせんと猛り狂つた、猛獸のやうな瞳が縱横に驅け廻つた。

○卒業

下谷さすらひ

風に柔かさと、暖かさとが加はつて行く、三月の十日過ぎ。午後の明るい日光に照らされて居る、櫻の蕾の紅みと、ふくらみとの增して行くのを、無意識に眺めながら、五年の生徒は恁んな話をして居た。

『最後十日ね、勉强するの、しないのつて言つてもね。』

『卒業は〳〵と待つて居ても、恁う目の前に明つきりと現はれて來ると何だか嫌やあね。』

期待して居た卒業が明つきりと濃い色に現はれて來る、それに伴ふ級友との離別を夢の樣に想像しながら、淡い悲しみが皆の眼に見えた。聞くともなしに四年の生徒は、是を耳にして。

『五年の方は羨しいわね。私達も早く卒業たい。』

と、櫻の方を見て私語た。青い色の多い、花壇を前にして居る、自分達の此群から避けて、ふゆ子は蒲公英の獨ポツリと咲いて居るのを弄つて居た。私は此蒲公英の樣だ。獨ぼつちだ。偶と恁んな事を考へて淋しくなつた。私には奈何しても皆の心が――五年の人の心と、四年の人の心と――解らない。奈何して、此學校と離れたいのかしら、規則的の生活から脫して、或程度まで得られる自由な生活。赤や、紫や、さうした華かな色を欲しながらも、學校と言ふ冷たい、大きな力に支配されてそれを達し得なかつた、それに對して、反抗的に學校を離れたがる。さうした意味かしら。

『皆樣と、お別れするのはいやですけれども。』

チラと、冬子の耳に入つた。冬子は嫌な感じがした。皆樣と、別れるのが嫌や?。それはほんの言解だ。義理の言葉だ。嫌な憎らしい言葉だ。五年の人の心は學校といふものに關係した、總べてから最離れてしまつて居るのだ。五年の人が憎くなつた。雖然、又四年の人の心は、冬子には更に解らなかつた。奈何して羨むのか、卒業しようとする人が、期待する樣な事を早く實現したいといふ意味か。それなら尙一層皆の心を呪いたい。學校といふ溫かい廣い愛の懷に抱かれて、先生といふ柔かいふくよかな情の手に把られて、步む道は單調ではある。色彩は淡い、雖然、

明るい正しいものではないか。束縛！。それは直接に感ずるだけに、割に狹くて淺いものだ。試驗の苦痛！。ほんの一時的のものではないか。學舍にまさる。正しい明るい表裏の少ない、何等の不安も恐怖も伴はない愛の懷が何處にあらう、先生以外に尊い善眞な情の手、何處に求めてこれに勝るものがあらう。冬子の心は、皆の心に對しての憎惡と反抗とで、緊張し誇張してしまつた。繼母の許を漸く脫れ出て、少し許りの希望を持つて、養母の手に渡つた、此處幾年、それは失望に終つたとは言ふもの丶僅かに情ある實兄の手で、學校生活をして居る冬子には、學校を信じ、人以上に懷しがつて居た。境遇に多く影響された。彼は總べて質素な事が好きだつた。先生達の質素々々といふ物質上の戒めは、彼れに何等の反抗も生じない、反つて周圍の人に對して、快く感じて居た。家庭の人に反抗し切つて、先生といふものを飽迄信じて居る彼には、先生の精神的の要求も、一々道理と聞いて、決して皆の樣に、束縛等といふ反抗も起さなかつた。其外あらゆる意味に於て、冬子は學校を尊び、先生を信じた、寧ろ信じ過ぎて居た一年の月日は流れた。冬子の眼の前には、卒業期が迫つてきた。自分の問題として。それだけ一層痛切で、深刻であるべきであつた。雖然、冬子は卒業を寧ろ待ち遠しと思つた。しかも悲しく遣る瀨無い心持で、彼は人以上に學校を尊び、先生を信じただけ、先生の信用



雨の日　山口縣　宮崎よし子

も厚かつた。先生との親しさが加はつた。從つて、職員室の內容は求めずして、彼の前に展開された。しかも、赤裸々に醜い姿で。そして終には冬子に、

『私も早く卒業い。恁んな學校は嫌や、一日も早く卒業い。何處の學校へも行くのはいや』

と言はしめた。雖然、冬子は

『それから、歸るべき家。』

と思ひ遂した時、心が淋しく、暗くなつてしまつた。あゝ、私の心、此身體、是からどこへ置から何處へ安心して置かう。かうした疑問と不安との爲めに、偶と去年の事を思ひ出した。私は何故、學校をあんなに戀しがつたらう。あんなに先生を尊いものに見て居たらう。自分を笑ひたくなつた。嘲りたくなつた。世間知らずであつた自分を、盲目であつた自己を、雖然、又、皆が先生を嫌がつたり、學校を早く卒業たがるのは自分とは全然、無關係の樣に思はれてた。そしてそれには少しも同情しなかつた。

『私も早く、卒業たい。雖然、皆の卒業を待つ心と私の心とはまるで異つてる。』

と、いつも自分で辯護し、又さう信じて居た。

◎若き妻

横濱市　千鶴子

文子は少々暖か過ぎるとは思ひながら、矢張お召の七分コートを平常の樣に着た、そして例の如に鏡の前に立つて、帶から腹部の邊を一度撫で廻した、大きな丸髷の横からのぞいてる赤い手柄と、むつくりと肉附いた肩の邊を眞面目に見詰た、何時とは無しに人妻と云ふ型に嵌つた其姿を平常に無く、しみじと見た、最一度腹部の邊を撫でた、そして輕く叩いた、玄關に立つた時夫に、

「ね貴夫お可笑しか無いでせうかしら」

と不安氣に媚びる樣に聞いた、彼れは亦かと云ふ風に、

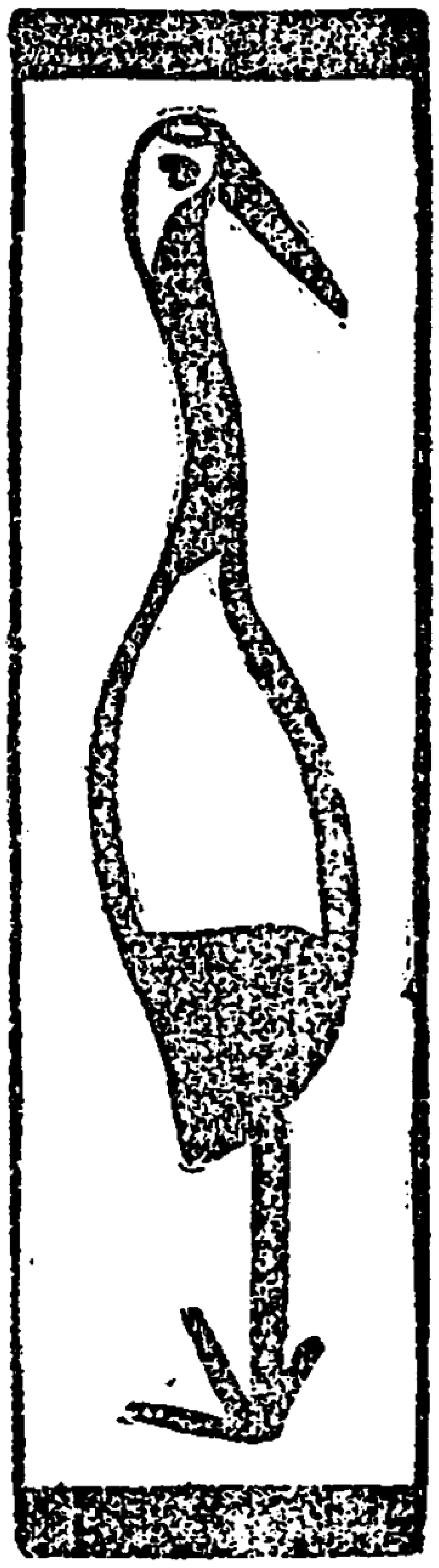
「馬鹿だな、お孃樣ぢやあるまいし、大手を振つて威張つて歩いたつて誰れも笑ふもんか」

笑ひながら穩殷しく云つた、其樣云はれても別に恥かしい氣もしなかつた、道路を二人で列むで歩いた、暖かい日は町中を包むだ、隅から隅までと。總ての物體は其色彩を發輝して、美しく、眼に寫つた、肩の高い瘦せた夫と、肥滿つこく小さな、自分との影が不恰好に長く斜に影つた。

何時の間にか伊勢佐木町に來た、ふと腹部に氣が付くと堪ら無く恥しい思ひに捕はれた、白粧比檨した賑かな町を二人で行くのが如何にも厭になつた、往く人と歸る人と、織り亂れてぞよくと通る、厚化粧に頰紅さした氣取つた女や、鳥打帽を阿彌陀に被つた紺絣の男や、絞りの三尺を腰の下方にぐるく卷いた突掛草履の市虎な男が、皆より亘く見樣とする眼差しで、八方に氣を配りながら、きよろくとして行く、とすると其視線が一時に皆自分の腹部に集まる樣に思へた、何故自分は此處に來たらうとつくぐ後悔した。

稼もすれば、後れ勝になる文子の樣子に、撫恤る樣にいたくし氣に見やつた、彼女は夫の樣子も、周圍の昌盛かな景氣も眼に入らぬ氣に、俯いて歩いてた。突然火の付く樣に啼きいる赤子の聲が、文子の耳に響いた、吐胸をつかれて見るともなしに見た、荒い銘仙の格子の布子袢纏の中で生れて間も無い赤子が、まだ顏に皺の寄つたまゝ眉毛も淡く、髮の毛も赤つちやけて撫でた樣になつてた、口を大きく開けて、眞赤な顏色を一層赤くして泣き入つてた。未だ自分よりは一二歲下らしい女が、さも困つた風によいくとあやしながら、口で種々の事を云ひながら外見も無く、身體を動搖してた、文子は其女の樣子や赤子の泣く顏が如何にも憎嫌に感じられた。つとめて其樣子を見ない樣に急いで其處を通り拔けた、が赤子の泣聲は追驅ける樣に、迫る樣に、一種異樣に文子の耳に響いた。

活動の樂隊は曲節面白く、人の心をそゝり立てるべく囃子立てゝる、其看板の油繪を沒念と眺めてゐる人や切符賣りの若い女の思ひ切つて出した庇が、如何にも呑氣らしく見えた「オイ活動でも入らう？」とずんく行く文子は袖を引止めて、看板を見上ながら云つた、「いやですよ」とそつけなく云ひすてゝ其處には目もくれなかつた。（つゞく）



和歌　　編輯局選

○（天賞）　山形縣　伊藤智惠子

涙さへつれなかりけり時の間に眸とづれば逃れてぞ去ぬ

○（地賞）　京都府　竹村槇子

たんぽゝのほゝけし丘の芝原に我袖近く山兎來ぬ

○（人賞）　埼玉縣　大鄕米子

別れたくなりてわかれぬ櫻ばな散りはてゝのち風の吹くころ

佳作

○　秋田　愛子

しどろなる吾が影ふみて春の宵忍びゆくかな初戀の野に

○　宮城縣　齋藤靜子

わが戀の燃えたつ時は山に入り冷き夏の石をこそ踏め

○　群馬縣　芝ことり

五月雨は悲しかりけり梅の果の青きをあまた土に落しぬ

○　城南の里　鈴枝

風吹く日砂ざら〱と室に入り素足にふるゝあぢきなさかな

○　金澤市　露の人

蟻と蟻はたとであひてさゝやきて別るゝごとし樹の蔭にして

○　伊豫　長井薫子

強き日に消えもや入らむ水にさく小さき花よ少女ごゝろよ

○　京都　しげ子

日盛りを夢の戸ゆらぐ釣床に聖者が戀の囁き聞きぬ

○　横須賀　ふさ子

誰にしも思はれずはた誰をしも思はず獨り海を眺むる

○　京都　壽賀子

悲しともはた淋しともおもほえでいとおだやかに春は暮れ行く

○　水戸市　小松崎文子

問ひよれどたゞ爪かみて物言はぬ君の後に牡丹くづる

る

○　豐後　吉田夕草子

わが吹けば君ふく聲のそれに似る夜の口笛の悲しなつかし

○　靜岡市　石垣靜子

さゝやかに燈火つけて樂しめるわれと妹の小さき住居よ

○　紀伊　宇田菅

かなしさは裏地の紅絹の手ざわりにはだのぬくみを知る心かな

○　王子　春子

薄く濃く紫の傘さしつれて青梅ひろひし夏木立かな

○　山口縣　椰良美那子

百人の男の子よ土に額伏して祈れよ熱き口吻を給ぶ

○　群馬　松風子

みどり葉のをのゝくさまはいとよけれ若き小さきうれひにも似て

○　千住　白妙女

此の心獄裡の内につながれて有るにもまさる淺ましさ哉

○　備中　中西りか子

冬の日の土くれのごと黄も青も枯れつくしたるかなしみに生く

○　岡山縣　入江曉花

初夏の夜羅衣まとひ紅さして躍る巴里の女を思ふ

○　周防　若葉

右手に鋭きメス持つ君にたぐらるゝ紅の絹絲白の絹絲

○　信濃　保科伊津子

はらはらと落つる花びら戸を打ちて悲しや月もくもりけるかな

○　信濃　山越　三千代子

喜びに胸をどる日もかなしみに泣く日も吾を去らぬまぼろし

○　信濃　細田草路

ほのかにも月見草さく夜となれば人戀しさの猶ますものか

○　下谷　白菊

旅路よりなつかし文の着きにけり開けばかをるフレジヤの花

○　信濃　長谷川　未女子

影畵してあれ玉うさぎをとるなどあやせば子等のいつか眠れる

○　神田　石田美子

遠人を思ふ心のやるせなさ戀歌流す朧夜の海

○　山口　宮原たか子

父もゐまし母もゐますに胸とぢてもろくも落つる何のなみだぞ

○　廣島縣　ゆふらん

雨の日や思ひわびては筆とりて君が御名のみ書きつゞけつゝ

○　高知　千枝子

思ひ出は寂しかりけりたそがれにほのかに匂ふオレンヂの如

○　金澤　目黒美子

たらちねよ汝の子はいつか戀を知りやすらはでぬぬ少女となりぬ
○　深川　矢澤榮子
野より街に初夏の風かをりきて路の木立の青きよろこび
○　横濱　月草
君をおきて獨り旅せば我がこゝろ愁ひいたみて死にもすべけれ
○　靜岡縣　壽賀
若みどり深き林の木がくれに茶つむ少女のうたきこゆなり
○　上毛　宮田ぬい
戀すれば何とはなしにわが母の繼しく見ゆるやるせなさかな
○　大阪　村田擴子
たそがれの月はかすかに流れいるやまのゆぶねに髮ひたすとき
○　むさし　桂のはな
初生りの草苺の實掌に受けぬ物珍しき初夏ごゝち
○　大阪市　河盛よしの
ばら色のわが頰に指の一つだにふれなば胸のちしほくるはむ
○　加賀　村田糸子
黃金にも勝るあたひのみ心にかはれし我の幸なるや
○　岡山市　石井明子
うすあかく開きしさくらたれよりも先づみたまやに奉るなり
○　鹿兒島　工藤泉子
泣く吾を腹立たしうも萬象は嘲笑ひをりかゝる世なるか
○　宇都宮　松井澄子
熱さめし朝のからだにおりてふむ庭の芝生の柔かさかな
○　芝　横山とし子
初夏の夕べを君と手を取りて池の汀を幾廻りしぬ
○　府下　冬子
見はる眼のかろきいたみもなつかしゝ梢を透きて横たはる窓
○　安房　吉田秋子
哀れなる乞食の子が門に立つ如くにわれも戀を求むる
○　小石川　靜香
物いへば泪いづるよみつむれば泪出づるよいかにやせまし
○　赤坂　しげ子
まぬらさば我があねうへの嬉ばん熟れて色づくかの梅の實を
○　大阪市　小泉貞子
橙の花夕暗に散る時はお染が泣きし戀もしたけれ
○　ますみ
みどり葉のかげにひそめる櫻んぼ小鳥つひばむ眞晝淋しき
○　信濃　世良田優子
あの蒼き水底にしも吾もてる愛の影を投げ入れんかな
○　群馬　秋水
御心强く弱しと覺えてし其れより心みだれ初めてき
○　京都　内田澄江
ゆくりなく歌の想を得たりけり君とわかれて加茂川べりに
○　哲
アカシヤの陰によりそひ夕暮はキスを思ひて君を待ちぬる
○　陸前　浮草子
徒に在る我が眼の前に命をもやきつくす迄燃ゆる紅葉は
○　木の花
こきみどり淺きみどりの葉を持ちて草にいこひぬ物思ひつゝ
○　周防　美女子
天地にあらん限りの力もて死は今吾を迎へんといふ
○　大阪市　寺井しぐれ
女の童春の野につむ花菫白きは神も愛で給ふ哉
○　伊豆　渡邊やす子
夏衣縫ふ指先をきずつけぬにじむ血汐は紅にして
○　麴町　牧野銀杏子
さりげなく行く水を見てたゞ二人かたりあひたる悲しさにぬぬ
○　德島縣　平岡淸子
ガタ馬車の過ぎにしあとの白々とほこり尾をひく晩春の野路
○　京都　ほづ枝
わが胸の飢ゑたる鳥がおほちかに夏の夜の灯になくが悲しき
○　前橋　みづ枝

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うら悲し頬にあてたるかみそりのつめたくも沁む初夏の朝　岡山市　淑子

○

なつかしき君待つ夕野の果に小さき花のふるえてありぬ　府下　野口はるみ

○

夏木立小川の上のハンモック晝うたゝ寐のゆめのすゞしさ　京橋　扇花

○

さりげなく涙かくして別れたる湖畔の夕戀しき夕　大和　都花子

○

もの思ふ胸にこたへてわりなきは目にいたくしむ蠶豆の花　山口縣　花の宴

○

春さびしこの水底に死せしてふ昔をとめの戀をし思ふ　京都　靜江

○

何故に絶え入るばかりもだゆるぞ心よわさのうらめしきかな　奈良縣　上田朝

○

歌もなく春と別れてゆく人の白き顔より淋しきはなし　奈良市　松岡ひで

○

花の座に舞ふ舞姫の簪のそれにも似たる野の蓮花草　札幌　幽香里

○

若き日の初戀をさへ人の飼ふ鳩に似たりと思ふはさびし　山梨　吉田くにえ

○

何ものか我がこの心うごかしてふかき淵には沈めむとする　足利町　飯塚米子

○

やるせなき此ものおもひ君とわれ歩み來し道わかれんとして　備前　勿忘草

○

獨り寢の寂しき夜は雨の音かすかに君が歌ふかと思ふ　大阪市　杉山はなえ

○

新町の軒並びつる紅行燈ものゝかなしき六月の雨　長崎市　永井圭子

○

狐啼く旅籠の裏の夕月にうすら影さす夕顔の花　中澁谷　佐藤露草

○

小說の終りの如く我が戀は只何となく物たらぬかな　土佐　橋田紫葉

○

野のみどり萠え出し芽のさ青なる若き心を我は喜ぶ　茨城縣　すみれ

○

新しく人とわかれて春雨の夕さびしく思ひやるかな　京都市　くれなゐ

○

明暗の心伴ふ君が心蝕みたるかげを疑ひ居れば　青森　長尾清子

○

五月雨のそぼ降る夜半に目さむればさびしき思ひはてもしらなく　札幌　さくら草

○

姉君のかたみとなりし紫の被布をみるとき泪ぐまれぬ　和歌山縣　生駒はま

○

赤道の如く熱せる我戀ををり〱さます風の吹くかな　福岡市　市川久子

○

潮めぐる小島に白き鳥むれて沖より白む玄海の灘　山口縣　田中鶴枝

○

今日もまた泣かんと森にゆきければわれよりさきに君のいませり　山口縣　宮原よし子

○

きら星の數輝ける大空の月の宮居は我があこがれよ　大阪市　坂口はつ子

○

古寺のいらかに生ふる屋根の草さやかに見えぬ月昇る時　福井　明星

○

山吹の黄なるを見ればまぼろしに姉の姿をおもひうかべぬ　廣島　荒れし花

○

世や寒き凭るにさびしき朝の窓何の傲りぞ緋葵のはな　中澤すみれ

○

小雨して冷たき風の身にふれぬ鷺草匂ふたそがれの窓　熊本　本島とよみ

○

女いふ白ひなげしのひそやかに散るはわが身の上に似たりと　淡路　清水夕月子

○

今は早あるにかひなく思ほすらん明日とは言はじ君よまちませ　佐渡　わくら葉子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かげろふのもゆる春日に美しき君を思はば心足らへり
○　奈良縣　のぶ子
夜となれば若葉のかげに泣くといふ君の言葉のなつかしきかな
○　佐賀　花の雫
片戀ふるわが身は熱き血のめぐる君にし逢へば心なごみぬ
○　日本橋　桑原仙子
友の身のやみぬと聞きしその日より川ぞひみちをひとりしてゆく
○　茨城縣　浮舟
斷崖のはづれに咲ける姫つゝじ手折らんといふ男なるかな
○　函館　藤本鳥羽子
ゑがひきのぼかしの如き朝もやの海をこぎ行くかつを船かな
○　高知市　北村美佐夫
いたづらに撞けば悲しきひゞきあり春の愁は鐘よりも湧く
○　群馬　隱の花
若葉風木の間〳〵を吹きとほり少女の胸もそゝりゆくかな
○　上毛　大川たけ子
夏の月町のわらべのつどひ來て琴彈きのあとはやして行きぬ
○　函館　藤本山鳩
瀨戸の社石のきざはし手をとりてきみとのぼりぬ新婚のなつ
○　神戸市　足立春子
湯あみして櫻色せる我が肌をつと抱かれし夢心地かな
○　栃木縣　花かつら
苗代田の小波よするまひるどき遠山脈は乳色なせり
○　水戸市　川崎春子
夢さめて消えにし人のかげを追ひ心は朝の空にたゞよふ
○　羽後　さぎ草
眠りたらぬ春の曉窓明けて手をさしのべる連翹の花
○　仙臺　橋本園花
眞紅なる花も好めり紫もなつかしされど白き花めづ
○　麹町　田内まさえ
一度は君が御手取り行かまほしうす紫の西京の町
○　相模　藤田君代
花やかにをとめさびする日さへなくわがこしかたのさびしさ思ふ
○　佐渡　中山かず子
逝く春に輪袈裟の人の西するを思ひてあれば木蓮のちる
○　信濃　三村綠雲
くれなゐの毒茸の色か人の世のこひてふものゝ美くし恐し
○　下谷　中澤はる子
春の灯にあへかに語る君もよし暮れゆく秋に泣く君もよし
○　吉備　小田美鳥
ニコチンに醉ひたるまゝに死なばやとうつゝに春の日をながめ居ぬ
○　宮城　長谷川東子
水無月のあつき眞晝の末の野のほこりの中の黃なる草花
○　伊賀　米田きよ子
夕顏の花いと白き山蔭の青葉の宿にたく蚊遣かな
○　橫濱　松子
檜葉色のメリンスをぬふわが指の白きも嬉し春雨の夜
○　上總　小谷あき子
沈丁花やゝ當たる森に來てゆるく息する物思ひかな
○　靜岡縣　北川和子
黑髮のゆらぐと思ふ一瞬を紅の蝶きぬ我胸のうち
○　大阪市　池谷紫草
わが胸の小さき海に火の舟を浮べてゆかむ君ある島へ
○　本所　かすみ
白壁に頰押し當てゝ我が戀の儚なさに泣きかみし唇
○　上毛　野中柳子
君去りて羊養ふ南國の明るさおもふ木蘭の花
○　金澤市　歌の宵女
湯の宿の廊の鏡に向ひあひ少女髮梳く白百合の花
○　京都市　うら野
鏡見る事とめられし其人の昔はなしの幸をおもふ日
○　大阪　名なし草

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

妻といふその名のもとにとらはれて悲みもなし喜びもなし
○　徳島縣　蔦　紅

鳥飛ぶや空に木の葉に葉の香に人を思ひてあこがれてゐる
○　京都　百合子

やはらかき胸に手をあて戀ふ君はおぼろ月夜を歸りゆきけり
○　伯耆　田村美子

新らしき淡桃色の振袖に花を包みし春は暮れ行く
○　仙臺　赤間げん子

ほろ〳〵と名知らぬ赤き花散れる野を迷ひ居ぬ夢ならずして
○　渡島　美津子

果しなき廣野にいでゝ君思ふ黒髪の香のなつかしきかな
○　石川　まさ枝

千ぶだうわれ喰む時は見も知らぬ南國の園のなつかしきかな
○　仙臺市　武村とも子

桐の花そぼふる雨に散りにけり愁に泣ける若人に似て
○　伊豫　高橋政子

御袖觸れて紅ばら一つこぼれけり夏はみどりの奥ふかき庭
○　水戸　久子

すみれつめどおくる人なし我はたゞ流るゝ水にのせてやりけり
○　茨城　田村はつ子

白百合に雨やはらかき朝の窓時を忘れて歌想ふかな
○　兵庫縣　大槻富香

葉櫻に銀絲の如きはるのあめそぼふるゆふべ山鳩のなく
○　信濃　月見草

ふたとせの昔語りに夜は更けぬ君乗る汽車の箱根過ぐ頃
○　播磨　うすみどり

もゆるごと君が言葉をきゝてよりわが世の味を知りそめしかな
○　新潟縣　ぎん子

わな〳〵と匂ひ冷たく打ちそよぐ午後の日蔭の鷺草の花
○　濱寺　高添緑

竹取のむかし語りの姫君の鉼ふらむ如き初夏の雲
○　千葉縣　鈴木ぺん

白蝶の翅の上にうた書きて君が邊にはなちやらばや
○　横濱市　百合子

新しき生命を吸はむ心もて君の手紙を我よみにけり
○　越後　芹田紫紅子

華かに古き日記のかきぬきをわれにのこして別れし君よ
○　神戸　平櫛たみ子

青みゆく山を朝毎見てはなほ涙ぞ多き五月雨のころ
○　福島市　遠藤喜美字

また一つ白百合咲ける雨の朝恨みの文を書く物憂さよ
○　福島市　吉岡直子

若草に雨やはらかうふりそゝぎ春の朝は煙るに似たり
○　福島市　蘂子

朝まだき襷かけたる若人の菜洗ふ見ゆ横川の里
○　久留米市　兒島歌乃

戀なくてたゞ徒らに粧ひしわが身よあはれおとろへゆくや
○　横濱市　夢織子

病める胸いだきて立ちぬなぐさめの言葉きかんと君が窓邊に
○　豊後　はな子

戀ならぬ吾や戀ひずる君の名は慕はしけれど戀はかなはず
○　近江　白蓮

みどり葉を握るが如き柔らかみ君におぼえて哀愁を識る
○　下關市　西村白蝶

今日もまた悲しきうたをうたふ子のみすぼらしきが窓に來てたつ
○　羽前　長澤美也子

塵多き町をはづれて野に立てばをりふし聞ゆ麥笛の聲
○　水口　ほたるぐさ

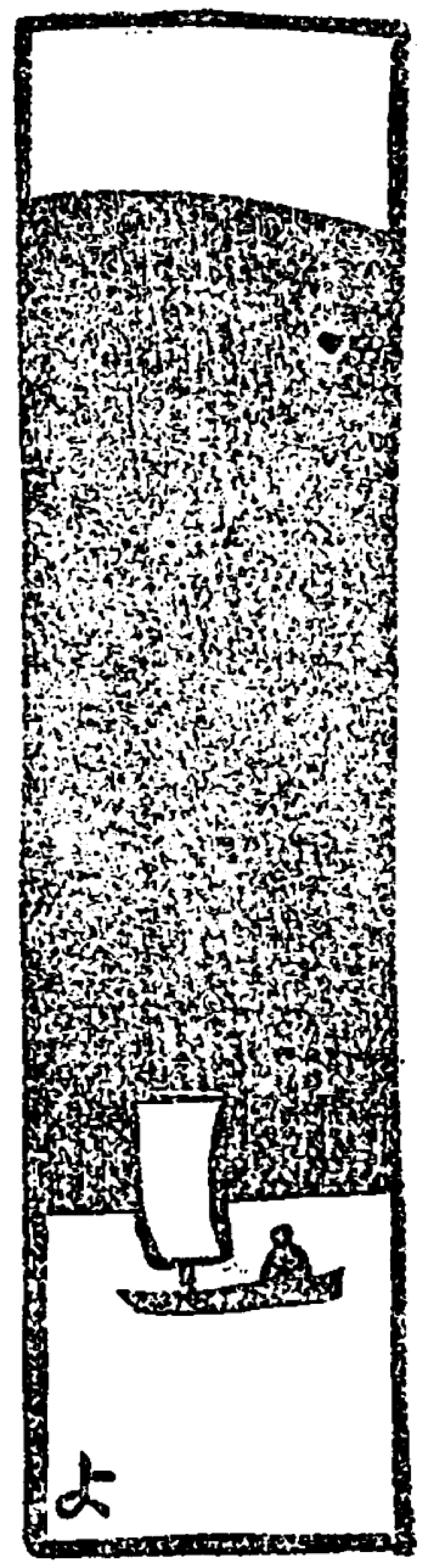
野に立てば里の子のふく麥笛の音もしみ〴〵と胸に入るかな
○　大阪　田野しか子

我が部屋にきこゆる琴のあはれさを身にしみてきく雨ふる宵よ
○　若狹　長谷川英

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

門いづる柳の下にうす紅と白と黄色のパラソルはよき
○ 備中　小見山春子
破障子ほゝと笑ひぬほつれ髪かき上ぐるさへ物憂き思
○ 岡山市　石井淨月子
一度は死ぬべき者と思ふ時心ひそかに泣きわらひする
○ 伊豆　渡邊やす子
少女子はふしめしてありなつかしきかざしの花は紅にして
○ 奈良縣　上田郁子
こゝろよき梅の香ひのみちわたり露やはらかく肌にしみ來る
○ 大和　戀紅女
人思へば心靜かにうれふなりつめたき夜のくさをふみつゝ
○ 四谷　しま笹
病む君の床に活けてしぼけの木にうどんげ咲きてよろこびしこと
○ 日本橋　桑原仙子
山里は梅もさくらもおそけれど都にしらぬよろこびもあり
○ 大阪　ゆかり
君をのみ思ふを知りて他をしらぬおろかなる身となりはてぬわれ
○ 深川　露草
戀は皆たのしきものと思ひけり十五の春のあはき心に
○ 大阪市　矢尾君子
夕雲は紅に燒け野のぬまは淋しき色に暮そめしかな
○ 東京市　藤本わか子
雨ふる日花が泣くとて乘ざる百合見てありぬ小さき二人
○ 大阪市　しま子
京の町三條通の寫眞屋は君によくにし姿あげたり
○ 青山　光露
海棠と吾と映れる姿見におどろく目するあうむもありぬ
○ 山城　崇の花
なつかしき君とたまさか夢に會ひ語らふ間なく夢はたさめぬ
○ 越後　落葉
彼の君をかひま見てより我胸はあさの如くに日に亂れゆく
○ 堺市　西村三千子
かばかりもすさみ果てぬるわが胸に折々うつる母の面影
○ 上野　竹村靜子
地の下に大鯰ゐて地震すると思へりし日は安かりしかな
○ 松前　佐藤美代子
今降りしごとおもはるゝ淡雪の消ゆるを見れば悲しみの湧く
○ 岡山市　立岡居之
舞扇かざす袂に黄と白き胡蝶もつれしわすられぬ日よ
○ 越前　山口あい子
あまりにもあぢきなかりし我が戀のそのおもひでにまつはれる人
○ 越後　さち子
よき菓噛めるが如き心地して朝の原より春の山見る
○ 上毛　冷花子
悲しきは日每〳〵に吾が廊下通ひし君の打ち絶えし事
○ 岡山縣　入江曉花
死したりと已を葬むるそのときに大聲あげて人騒がさむ
○ 仙臺市　藤村京子
初戀の甘きに醉へる我に似て明るく咲ける緋牡丹のはな
○ 橫須賀　美茝子
ふるひつゝ杏のはなを散らしたる春の光はわが胸に來る
○ 伊豫　黑田美沙子
淋しさに夜着の袂をぬらしけり戀人おもふ一人寢の閨
○ 備後　今井村子
盲目なる姉の泣くなり美くしくこの妹の嫁ぐ夕に
○ 近江　鈴蘭
しめやかに低くかろらに雨だれの音して春の夜は更け行く
○ 群馬　はゝ木
みごもりし身をはぢらひてうつむきし女見しとき涙おちにき
○ 備後　高次ミヨ
雪とけて遠山かすむ春は來ぬ又袖ぬれむ墨染の衣

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



自然（散文）　編輯局選

○落日

豊後　紅きはな子

私は母様と二人で、麥畑の端にあるお茶をつんでゐます。測候所からの電報によつて立てられる學校の旗は、赤だつたけれど、今日も空は美しう霽れてゐました。晴れた日の暮れて行く時、すべてのものは、私の心に寂寥を私語きました。

冬の日を、柔う綿雪の積んだ形に、ふうわりふくらんだ若々しい丸髷のお嫁さんでさへも「淋しい」と獨言つのですもの、況して戀はないとはいへ、花が褪せたといつては涙ぐむ若き子には、……。

彼の日、此の日と、幾日かの日を重ねても何の得るところもなく暮して行くべくさだめられた私は、今日も昨日と同じに午後からお茶を摘んでゐます。

若き葉の集つた木の中には、空虚になつた茶の實の皮と、可愛らしい櫻ん坊位の新しい實とが、寄り添つてすれ合つて、新綠の中から覗いて居ります、まあ一寸みて下さい、かたくした皮が、蒼白くゆるんだ老人の肉の暗い、細い、縞の着物から覗いてゐるやうに若い芽の隙から見ゆるぢやありませぬか、そしてそれが如何にも、物淋しげに五月上旬の落日に照らされてゐるぢやありませんか。私は急に悲しくなりました。

私は小聲で唄ひながら茶の木をはなれて、麥の中を歩いてゐました。

母ははじめと同じ音を立てゝ、同じ態度で入日にそ向いてつんでゐます。

日はだん〳〵淡うなつて、一つにならう〳〵とあせつてゐた二つの影をも伴れて行かうとしてゐます。

また新らしく茶の芽は香りました。（地宣）

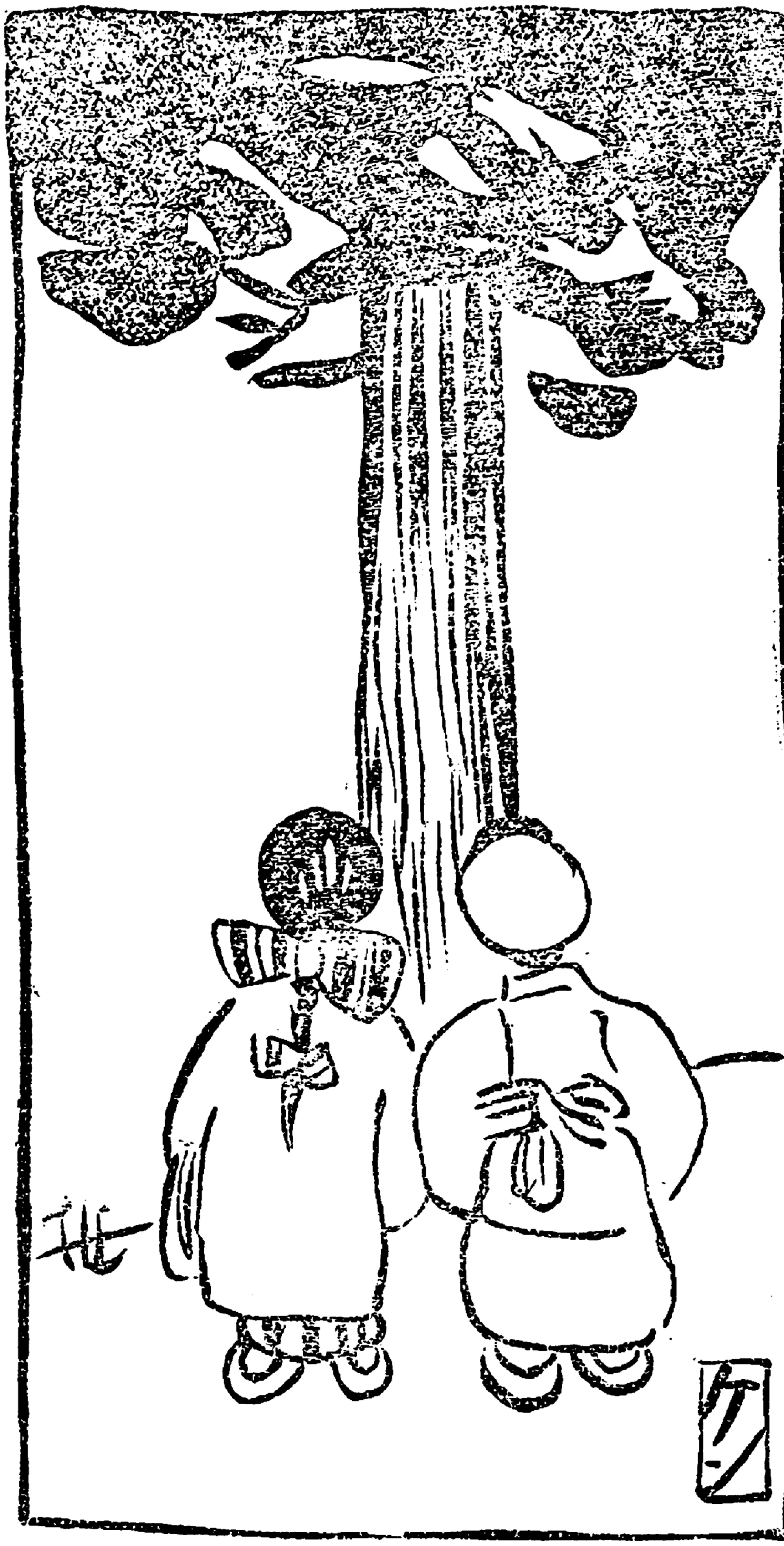
削り去つたところもあるが、また全體にだらしのないところがあるひきしめることを考へて貰ひたい。（評）

○若綠

信濃　美水

しめやかに降つてゐた春雨がやんだ。田の紫雲英がこんもりしげつて、小さい露の玉がホロリ〳〵と落ちる、ひときは靑さをまして、實に美しい。早や二つ三つ赤い花が見える、何處か草の中で雨蛙が、キュッキュッと鳴いてゐる、田麥は、ふさ〳〵とのびて、小さ

いいい風にもざわ〳〵と心好い音を立てる、濃緑の葉末の玉が、ハラ〳〵と散る。あせのほとりには春草の黄や白の小花が、咲き亂れてゐる。すべての木々に軟かい若葉が芽を出して、一雨毎に淺緑の色をましてのびてゆく。名も知れぬ夏草が、池のまはりや、小徑のほとりに、青々と茂り出した菜畑は、今花の眞盛り一面、眞黄である。蝶々も蜂も居らず、雨に濡れてうつむいたまゝ、顫えてゐる。ふきのとうは、ひよろひよろとたけが長くなつて、見苦しい白い花を、ぽつと咲かせ、そばの柳の美しい若葉の蔭には、黒く長く、きたならしくなつた花がくつゝいてゐる。上には、つまらないぐみの花が、がう〳〵と咲いてゐる。小流の水際に、へび苺の花が眞黄に咲いて夕方になると、その花の下でけらがそれは何とも云へぬ優しい低い〳〵聲で鳴きだす、私は、ぬき足さし足で其のそばへゆかうとすると、パッタリやんでしまう。さしも美しかつた櫻、桃、李、杏等の花も、おほかたは、散り果てた。家々をとりまいてパッと一時に毬



幼どち　秋田縣　小島けん子

のやうに咲いた時の美しかつたこと、實に何ともいへなかつた。が、それもたつた五六日の間で、夜のまの風に、一時に散り落されてしまつた、後へ出てきた若い葉は、日に日にしげつて益々美しくなつてゆく。垣根の緑葉の中の燃え立つやうな眞赤い火事花や、濃緑の葉の中の將に開かんとするりんでの赤いつぼみも美しい。わが家よりも少し北の方の小高い丘へ上つてみると、松林の中に、雲のやうに咲いた山櫻が、青葉がくれにチラ〳〵見える。雨の後、靜に其の中へ歩み入ると、松のみどりは一層濃く、絨氈をしいたやうな松苔には、露の玉が光つてゐる。淡紅の葉まじりに咲き匂ふてゐる山櫻は、風もないのに重とゝもにハラハラと、松苔の上へこぼれる。晴天の日には、蝶々もくる、蜂も虻も集つて花の中でブン〳〵うなりながら飛び廻るので、三ひら四ひら花びらが、たえずひらひらと舞ひ落ちてゐる。（入賞）

今度は少し全體に張りつめた力が足りないから、勢に乏しい、無論他の人々よりは忠實な自然の觀察者といふ態度は持つてゐるが、おちつきすぎて、あんまり取り濟ました態度が、却つて文章の生氣を殺いだ。（評）

○橋の上にて

大阪　はる子

暁の風が冷く顔をなでゝ行く、橋上の電燈は淡く光つて、ヒタ〳〵と岸邊によせる潮が黒くみえる。浪華は橋の多い所、うすくこめた霧の中に黒く長く、西に四つ、東に三つ數へられる。煤煙張る浪華の空も朝のまは、さすがに清く澄んで、消え殘つた星のまたゝきも寒さう、橋の上の自然？　それは小さくせまいものであるが、三歩の庭 ―― それも高き塀にさへぎられて、日光も入らず、ジメ〳〵した苔の外、青い草一本もみる事の出來ぬ ―― と枯れさうな植木とのみ、みなれた目には、いかになつかしう映つた事であらう。東向の縁に立てば、三里の眺望をあつめうる因幡の野を出る一年、夜毎の夢は久松山に松茸をさぐり、千代川に鮎漁りし昔に通へど ――

朝々、座敷の掃除するとて、雨戸くる毎に、新しい朝の空氣を心ゆくばかり吸つて、じつと雄大な山の姿野の樣に、見入るのが例であつた、庭先の緋桃が咲いても、山陽、山陰を、區切つた中國系の諸山には、雪が消えない、扇ノ仙にも、まだらに殘つて、禿山の松林は蛇のやうに、黒く長く、私等が因幡富士と名づけた山も、毎年栗取りに行く度毎に、あの山をまはつたら……と勞れた足を引きづる、頂に二本松のある山もみえる、うす墨でぼかしたやうな鎭守の森、幾年前から動かない、破れた水車、皆なつかしい思出の一つ一つである、野も山も我もの顔にとびまはつた私が、自然とは全く沒交渉な浪華の地に住むやうになつたのも不思議であるが、草蛙脚胖で男子方と一緒に、日に十里の道を行きて勞れたとも云はなかつたのが、わづか一年の中に、わづかに橋上十分の少さいせまいみぢかい自然をなつかしんで、立ち止る程になつたのは、只驚くの外はないのである。

周圍は變化しても、其かみの心境は失はざれ。（評）

○雨の後

京都　壽賀子

泣きつかれたやうに靈の聲はぴつたりやんだ、白い雲と雲とか幾層か重なつて、東の山の上にぢいつとして居る、眞空はコバルト色に晴れ渡つて心地がよい、雨にあきたやうに木の葉は勢よくなつて緑の葉が一入美くしい、吸ひ込まれるやうな濃い青葉の繁りとコバルト色の大空の强

い輝きは眼に痛い程つよい刺戟を與へる、じみ〳〵とした縁も氣もちよくからりとなる幾日も出來なかつた洗濯物を一包縁に出して白いものばかりたらひに入れて洗ふ。

石鹼をつる〳〵とつけてはもむ、石鹼のついたとこだけはつきりと白くなる、白いもの洗ふ中に上の木の葉がうつゝて美くしい、自分の顔が緑の葉の中に水の面にうつる、眞白に洗ひ上げたのを大きいたらひに二三度水をかへてはゆすぐ、高い物干竿にかけにしびれた足を縁にかける、縁に近い梅の木にかへつたばかりの毛蟲がうじ〳〵とかたまつてゐる、長い竿でたゝいて見たが氣持が惡かつた、よく繁つた葉と葉の重なり合つた中に豆つぶ程の少さい青い實がいくつもいくつもついてゐる少さい實をかみつぶしてみたらにがく中の種子がまだ眞白に柔かつた。この實の大きくなる頃には大分あまくなるだらう、物干にかけた白い布が日光に反射してまぶしい。

何事もない。(評)

○伏屋

羽前　長澤美也子

去年の秋此の山から材木を運ぶ人の宿る爲に建てた此の伏屋、私は好んでこの淋しい山中に來て見たのです。庭の戸の間から二三本の柔かいのび〳〵したわらびが生え出して居るけれど、折らうともしない。家に居る時なんたら直に走つて行くものを——此處に居ちや外へ出さへすれば百本や二百本はわけはないもの、つゝじの下へうづくまつて木の葉の香ひをなつかしんで居ると、山の子が少しのわらびを籠に入れてドンドン坂道をくだつて行く。あたりがひつそりすると今まで聞えなかつた葉づれの音も小鳥の聲も耳に入つて……寂寞！　寂寞！

とみ子樣であつたならきつと、此んな時は立派な詩でも出來たつたに相違ない——詩にとぼしい私、どう頭をひねつても作られぬのがなさけない、無駄にするのも惜しい！　がにぶい頭からは善い思想などの出樣筈はないのだから、もうあきらめた、蛙までもギヤア〳〵クッ〳〵とあざけつて居るんだもの——

低い家の中に入つて見たけれど、今まで強い光線にあてられて居た故か、眞暗で何も見えない、目をこすりながらよろ〳〵とあぶない足つきで座敷を通り机の所まで行つた。日はまだはつきりしない、机の上の「再訂」と書いた大きな字が紫になつて見える。

くる時携帶した物は皆見つくして終つたので、一時に淋しさを感じた始めは好んで來たのであるけれど何も作られぬので、知識のとぼしい者はこんな山の中へなぞ來たつてちつとも面白かあないのだ！

と私は始めて知つた姉樣の縫つて居る着物さへ出來上つたら一日も早く歸りませう。今日は天氣が好かつたけれど風が烈しい日であつた。

自ら言ふ通り知識に乏しく、宛字などを書くが、併し文品の好いのは何よりだ、つゞけてゆくことを希ふ。(評)

○我室より

城南の里　鈴枝

靄が薄れるに從つて、向ふの大森の方の家々や木立が繪の樣に浮き出して來る、小高い處に建てられてある私の室はもう太陽がぱつと射込むで心地よく暖かい、斯うじつとして針を運ばせて居てもお午頃からになると、額や襟の邊がしつとりと汗ばむで羽織が邪魔になる、寒い〳〵と思つてる中にいつか斯麼に暖かくなつた。お彼岸に種を蒔いたひなげしが今朝見たらもう細い針の先程の葉が二枚覗いてるのだもの、此時刻には屹度庭の梅に來て鳴いた鶯もいつの間にか來なくなつた、此頃は何處か高い處でよく啼がなく、

筋向ひに見下す××神社の櫻が灰色をして骨の樣だつたのが、やうやう木立全體紅味を帶びて來たと思ふ間もなく盛に散つてる、葩が日に輝き乍らめまぐるしく ひら〳〵舞つて可成遠くまで散つてゆく、鐘樓の屋根等は白い貝がらを積むだ樣だ。昨日は町の人らしい男女が十人餘りで

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

飲むやら唄ふやら大騒ぎだつたつけ。今日も落花を愛づる人達が可成來る誰も〳〵彼處へ來ると、仰向いて眺めるのが可笑しい。

豌豆畑と小川を隔てゝ丁度眞向ひの松の木が疎らに生えてる小山もすつかり裝ひが出來て、悠々と春の光を浴びて活々と輝いてる。冬枯の頃には人影も見えないのが此頃は紅リボンの人達や子守の群やが、日に幾組となく摘草に來る。男の子の戰爭ごつこか何かして居るらしい、赤と白の旗をたてゝ騒いで居るのが、こだまの樣に響いて來る。

山の後からムク〳〵と白い雲が湧いたと思つたのは汽車の煙だつた、木立の間を霞の樣に縫ひつゝ昇ると、ゆるく流れてゐる淡雲と見分けがつかなくなつて、蒼空に吸ひ込まれた樣に消えて終ふ。空は實に快く晴れてる、斯樣なよい日に外に出ないのは嘘だ。いつかゝら行つて見たいと思つてる小山のずつと右手に、常磐木に圍まれた白い洋館がある、何となく懐しい、彼處は又一段高臺だからこゝからは一寸しか覗けない海や、房總の山々がよく見晴せるに違ひない、時々オルガンだかヴワイオリンだか微かに聞えるのは彼處と決めて居る、窓の白いカアテンがふわふわしてるのを見るがつひぞ人が顔を出したのを見た事はない、瞳の碧い美しい人でも住むで居さうに思ふけれど。——一人では物足りなく外出ずる氣にもなれない、斯う誰か氣の合つた珍らしい友でも尋ねてくれたら、野でも山でも海邊でも歩き乍ら心ゆくまで語つて見たいと思ふけれど、來てくれるやうな人もない。……

目先がうるさくちら〳〵する、白い蝶が二匹狂ひ乍ら舞つて來たが、生垣を越してお隣の方へ行つた。蚋の群が四ツ目垣の上で上つたり下つたりして忙しく渦を巻く、あゝ眼がちら〳〵する、頭がボーとして上氣した耳に電車の響が夢の樣にきこえる。

描寫が正直すぎる、機轉と融通がない。（評）

○あらひ髪

信濃　長谷川　赤女子

サツパリと洗ひ落した髪を後へ長く垂して根元を白いリボンでちよつと假ゆはへして私は裏木戸からソツと畑へ脱け出した。

此間植ゑた葱の苗が昨日の雨で眞直に起きて上から押しなどしたら却て手が痛いだらうと思はれる位ツンとしてゐる、雪割りもホヤを便りに大さう伸びたスヰートピーに似てゐる、花の咲くのもぢきらしい、お菜も畝を作つてゴチャ〳〵と生えてゐる。

小道を境にした右の菓物の畑の日當りの少くない所には路がさぞ窮屈だらうと思はれる程重なり合つて生えてゐる、のぞいて見ると中は眞暗だつた、あのビロードの樣な柔い〳〵そしてつや〳〵した美しい毛の土鼠があの中でさぞ嬉しがつて鬼事をして居る事だらう、そんな事を思つて見る故か莖がしきりに動く。

私は後に垂らした髪の毛を前の方へ持つて來て、指に巻付けたりなどしながら、其中の細い道を歩いて行つた、ポカ〳〵と暖かい、そして柔かな春の陽が後からフワリと薄絹かけるやうに照らし掛けるので、何だか體が輕く成つたやうに思はれた。何處からともなく來る靜かな〳〵春風が——其中には若い芽の香やなつかしい新緑の香や野を流れてゐる水の香や雨上りの柔土から匂ふ土の香やもう凡てのなつかしい香を調和させて——襟のあたりから顔のあたりにゆるくまつはりて、サラリとした洗髪の六筋七筋頬に亂れた毛と戯れ、かすかに美妙な音を耳元で私語てはいつか黒髪の中を脱けて消えて行つて仕舞ふ、と其後から來る風も亦同じ樣に戯れては行く、何だか私は此柔かい陽と香に負はれてゐる者の樣に夢心地に其道をずん〳〵歩いてゐる内にいつか家の畑を出て仕舞て野を歩いてゐた。あたりには何の音も聞えないたゞ野飼にしてある牛がザクリ〳〵と草をむしる音が折々するばかりだつた。

私は其處に流れてゐる淺い小川の前に踞んでヂツと底の小石を無意識に數へてゐた、脊から滑り落ちた眞黒な毛は水に弄ばれて一所に集つたりまた分れたりして陽に光つてゐた。

普通の出來。（評）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○ひとりを好む

紀伊　紫陽花女

故郷を出て二年、私はひとりを好む女となりました。殊に寂寞な夜、ひとり部屋を脱け出でゝ、思ふ樣夜の自然を味はふのです淋しい淋しい村の夜はシーンとしてあるか無きかの風に、木の葉がサラ〱と摺れ合ふ音が靜に聞えます。田圃も林も森も一面に黒い中に、家家の藏の壁の白いのがはつきり分ります點々と燈火の見えるのは、終日勞働に疲れた人達が樂しく夕餉の膳に向つて居るのでせう、こんな時私はたまらなく、故郷を思ひます。

夕空はれて、秋風吹き——と口癖になつた唱歌を口ずさみながら、つひチョロ〱と流れて居る谷の傍まで來て終ひます。水の音と歌の聲とは一所になつて、靜に〱夜の空氣は打ふるふ。人が聞いたら氣狂だと思ふでせう。毎晩——。けども私は此間に、何とも言へぬ懐かしい心持になつて、ほしいまゝに色々な事を思ふのです。



風　　芝區　あさ子

長く連なつた長峰山脈の頂へ微かな月の光がさして、やがて大方圓〱なつた月が出て了ふまで立ち盡した事もあります。そんな時月の光にキラ〱と、棕櫚の葉が光つたり、小さな鈴なりに實のついた、畑の金柑が星の樣に輝いたりしてどんなに美しいでせう。

空の澄み切つた春の日、蓮華草の褥の上でひとり本を讀むのも好きです。まぶしい太陽は白い頁の上に流れて、和かい風が何かの草花の香りを送つて來ます。何處から

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

か蓬つむ娘の歌ふ俗謡がゆるう流れて、ほんとに長閑です。すぐ向ふの小學校の庭でテニスするのが手に取る樣に見えます。文字をたどる眼が疲れると、本を閉ぢて、ぢつとボールの行方を眺めて居るのです。四邊の山々は美しう紫色にかすんで、空には鳥の影さへ見えません、こんな時私はつく〴〵ひとりがいゝと思ひます。

自然を愛するものは何うしても人間に背くと云つたやうな心持がある、此君も亦其一人か。(評)

○朝の散歩

芝　奈香淦江　天流

朝五時起床　くもり

お天氣のせいか何となく地の底へでもめ入りこむ樣な氣持がするので、いつもより一足早目に家を出た。そして大門から淺草行の電車に乘つて、銀座でのりかへ日比谷公園の前でおりた。生れて始めて朝の散歩を味ふので何だか胸がをどる樣で其上氣がとがめる樣な變手古な氣がするけれどもわざと無意識に園内へ足をはこんだ。自分ながら何だか詩中の人の樣な氣がして何となくほこりたかつた。散歩する人が隨分多い。文壇を片手にパラソルを杖にしながら坂をのぼつて、綠の葉蔭のきれいなベンチをよつてやつと腰をおろした。そして大好きな女子文壇をひもといた。一句一頁ごとにはつきりと瞬にしみ渡りいつもより以上に面白く感じた。朝の清い空氣はひし〳〵と身にせまり何となく體がひきしまるやう。げに都大路の汚れた空氣とは雲泥の差。昨日の疲勞も、これでやつとかいふくする事が出來た。まばらに散歩する人の時々自分をのぞきこんでは通りすぎてゆく。おもに學生やら、夫婦づれ、子供をつれた人、おぶつた人、會社員などが多かつた。文壇を大切にハンカチにつゝみながら池の畔へ廻つた。此所にも人が立つて居る。お池の鵜が三羽噴水のしぶきを、さも心地よささうにあびながら身うごきもせずにつツたつてゐる。それからきれいなパンゼーや、虞美人草など其外名も知らぬ愛らしい、西洋花が澤山に配置よく咲いて居るのを眺めた。そして、あゝあの花を出來る事なればたつた一輪でもよい取りたいわ、そしてきのふ結つてもらつたひさし髮の少し上の方へかざしたらどんなによくにつくだらうと思ひながら、じつとしばらく見とれた。急に思ひ出して時計を出して見ると八時少し前なのでやつと安心した、あゝいつも今頃出勤する時分だ、こゝから室町までわづか故、電車で行くより、かへつて歩いた方がよいと思つたのでお堀端にそつてまつすぐ〳〵歩みをはこんだ。朝の散歩は實に氣持がよい。

つゞけば好いが。(評)

○田植

上毛　宮田ぬい

田植が直き來ます。あゝ面白い。去年の事を思ひ出さずには居られません。朝早く起きて田圃を見渡すと白々と明けて來て、其時小さい胸ながら思はず深呼吸をします。上天氣だと思ふと飯もいゝ加減に食べて仕舞ひます。朝飯時分は隣のお主婦さんや近所の朋友等がぞろ〳〵這入つて來ます。私は其人達の支度が今も目の前に見える樣です。私は其人達と一緒に田植をするのが待遠でなりません。愈よ露を蹴て田圃へ出ると水田には朝日がぴい〳〵と映つて居ます。第一番目に足を田に入れた時私は「いざ」と一寸した決心を持ちます。植ゑはじめると競爭になつて腰ものばさぬ位、そして擧足をとつたり冷かしたりして心も置きません。一つの田が了へると皆畔に突立つて腰をのばします。そして輕卒な事を言つたと云ふ樣にがつかりして居ます。午になると菅笠を脱いで合羽を草の上に敷いて廣い野を見ながら食べます。腹もすいて旨く御飯が食べられます。そして赤城山や淺間山や廣い野の菅笠等を見る時は汚ない泥や肥の事は決して頭に浮びません。たとへ思ひ出しても打消されて仕舞ひます。

晝休は一層樂しいのです、家にばかり居た連中が一年に一度田圃へ出て友達と一緒に働くのですから。そしてこんなに氣の廣々する時はあ

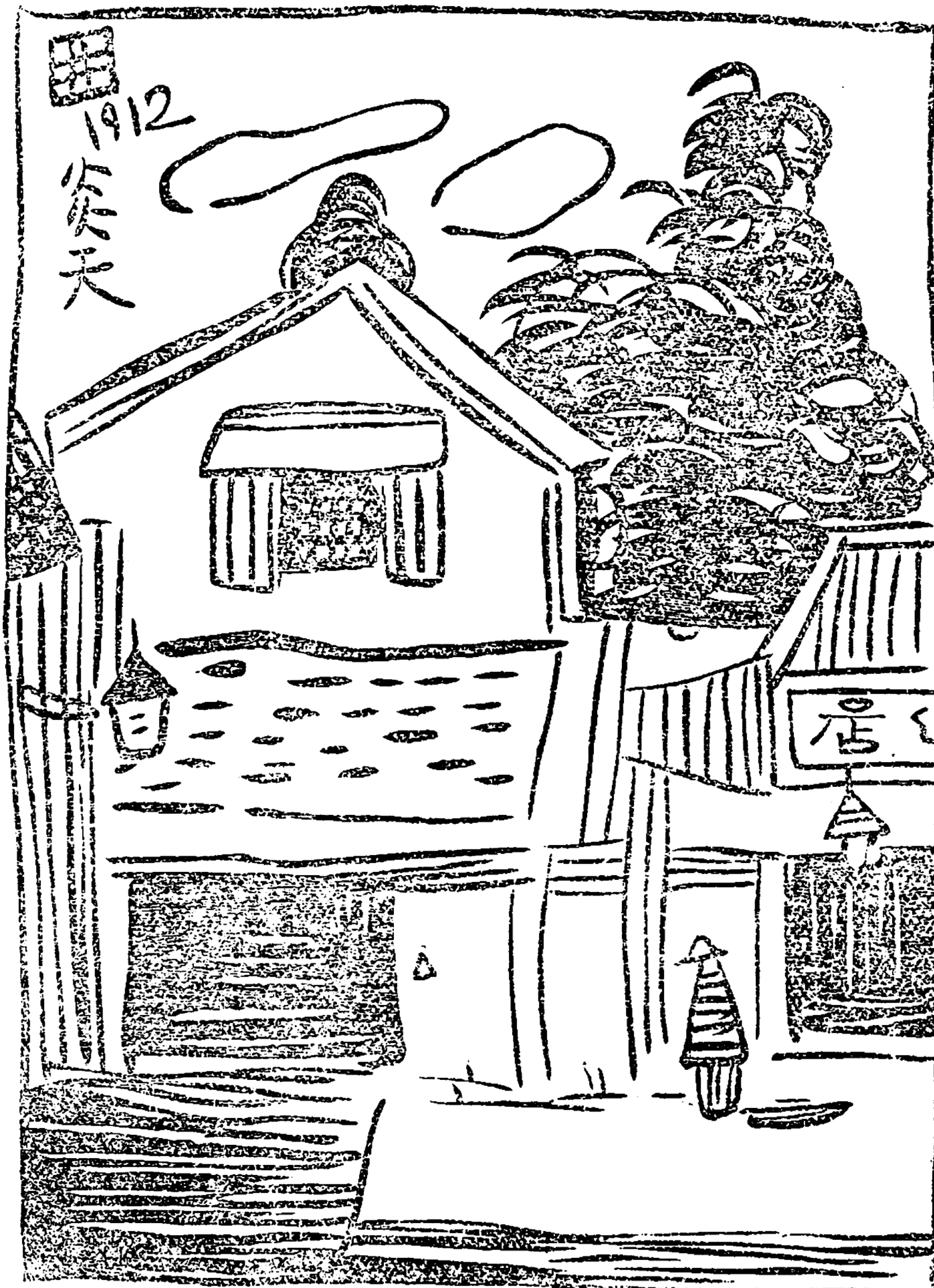
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

りません。

休がすむと又笠を被つて植ゑます。大食をして苦しい程です。だんだん日が傾くと馬は飽きるのか方々に馬が立つて居ます。水には美しい馬の影が映ります尚ほ低くなると、笠の裏にも夕日がさします。股眼鏡で見た景色は一層美しくなります。そろ〳〵人は歸りはじめます。歌も聞える、馬もいななきます。村では青い夕炊の煙が漂つて居ます。なんと平和的ないゝ景色ではありませんか或人は月並だと云つたが私は何でもかまひません。

私達も川水で手足を洗ひ、股引をすゝいで一緒に歸ります。手が白くなつて皺がよつて居ます。其夜の飯とお風呂とはどんなに結構でせう。今年ももう其時が來ます

ポツン〳〵と一句〳〵切つたところ、あまり上手でもない、正直には書けてあるが——。(評)



炎天　宇都宮　松井清子

○六時から七時まで

深川　矢澤榮子

夕燒の毬紅色の空は、シクシク——と泣きさうな顔して、靜かに——靜かに——消されて行く、ともなく、若い愁ひが湧いてくる。小名木川畔の紡績會社の笛が、ボ——ボ——と鳴りひゞいて、其の餘韻がいつまでもいつまでも、かすかにひゞいて、空氣から——空氣へ——波動する。

馬車がガラ——ガラ——と通つてから木工場の男等が、湯上りの赤い手や足を薄黒い夕暮のまゝの中からさらけ出して見える、長くのびた髪を、一世紀後れたハイカラ的に分けて、其のいやらしい髪を、そろひも、そろつて、人に見せつける様な姿で歩いて行く

八百屋の荷車が輕さうになつて、グルー――グルー――心地よくまはる、印ばんてんや、ボロ服着た色の黒い男等は、日一日つかれた手や頭をだるさうにのばして、それでも家へ急いで行く様に見える、そして五十錢銀貨二つとならぬ給料を、さも我一人は金を持つて居ると言はぬばかりのほこり顔して居る、どの人も、どの男も。

みだれた髮の女工も、夕飯の仕度いそがしい女房も、小僧も、皆んな忙しさうに歩いて居る。

せはしげな都會のたそがれ……。

斯うして窓に佇つて毎日私は、六時から七時までの、戸外通る人や馬や、すべて私の眼にうつゝた物を、ぼんやりと見て居る、そして考ても見る、けれども、それが樂みでも無い、悲しみでも無く、たゞ、亡き人がひそかに誘ひにでも來る樣な、沈鬱な夕暮がなつかしい、そして知らぬ間に黒い煙がたゞよつて、闇へ――闇へ――と泣きながら行く鐘の音がしたはしい、其の鐘の音が戀しい、入相の鐘の音を。

靈岸寺の鐘の音は淋しく――淋しく聞えた、榮さん御飯ですよ――榮子さん――

菊ちやんが茶の間から呼んで居る、けれども此の詩的多い夕暮の夢をすてゝあの青ガスの光の强い茶の間へ行つて、頬も髮も、明かにてらされながら、いつも同じ御飯をたべたいとは想はない。

フト外を見ると、すべての物が黒くなつて、弱い私の眼ではとても見る事が出來ない――あゝ斯うして自分もだん――だん――黒くなつて、たゞ、白い鼻と手と足とが、かすかに私の眼にうつるのであつた。

○雨後の山

秩父　桂のはな

雨霽れて後、總ての山を包んだ雲は、麓の方から次第次第に切れて行く、やがて山の峽から、山の後から、白い煙のやうな雲が立迷ひ乍ら天にかへつて行くと、其後にひよつこりと紫の裳長う現はれて、華かに微笑める山の姿の空々しさよ。

朝、雨戸を繰るといつも眞先に眼に入る山が、けふは鼠色の雲に覆はれて、しと〳〵と細い柔かな雨が降つて居た、素足の女が紺蛇の目の傘を傾けて、優しい雨に濡れながら新綠の下を行く艶な姿は、春と云ふ氣分にしつくりと調和して嬉しいけれど、懷しい山の姿が見えないのは何となく少しの間戀人にでも別れて居るやうな淋しい心地がする、それを知らず顔に、涙を含んだ眼でニッコリしたやうな美しさを誇つて居る雨後の山の晴姿が、堪らなく心憎う思はれて――。

其夕、始めて眞に赤裸々な遠山の姿を見た、大野峠あたりは夢のやうな淡い紫の色に暮れて、其向うの高い嶺に、夕陽が僅に終りの光を投げて居る瞬間、雨がにじんで少し黒味を帶びた山の肌に、若い木や、長く延びた雜草やが一面に生えて、處々に空虛な地が斑らに有るのがハッキリと見る事が出來た、其凹い處は光線が屆かないので、他の山と同じ樣な暗い色をして居た、彼の樣な別に行く必要のない山は、稀にも人の通ることはあるまいと思はれるけれど、度々山火事の出來る處を見ると煙草の吸殼を落して行く旅人の無いでもないと見える。

瞳をかへして武甲山を見ると、同じやうな斑な肌は、暗い夕の色に被はれて、まるで前の山とは別な色に見える、麓の農學校の天氣豫報の旗が赤のと鼠色のと違つて忙しく風に躍つて居る、と、濕つた空氣を透してチーンチーン秩父三十四番の觀音詣りの鈴の音が聞えて來る、旅から旅へ鈴の音と念佛の聲と傳へて行く身輕な道者達の姿がやがて私達の眼の前へ現はれて來るのであらう。綺甲斐絹の模樣に見る樣な薔薇色の空から、弱い日光を含んだ淡紅色の雲が靜かに下つて來て、輕う中腹に浮んで居る、左の肩のあたりから淡う右にうすれて――。

▲自然を描寫するには、忠實な見かたと、親切な同情と、深い理解力とを要す、而して極めて細かい注意が入る、只、机の上で考へて空想で描いたゞけでは、何うしても眞の自然が生きて來ない、女性は見聞が狹いから、自づと此方面の用意に缺けてゐるのは無理とは思はないが、出來る丈け廣く自然を見て、その美しい印象を描寫するやうにしてほしい、細かく描寫して、新らしければ屹度文章は生きる、諸女の文はあまりに苦なしに書けてゐる、もつと苦んで、もつと生々しい自然を捉えて來ないといけない。

――選　者――



詩

河井醉茗選

○雨

バンクーバー　池川むら子

シトくと
雨はふる、雨はふる
可愛小鳥の夢をぬらし
私の淋しい思ひ出をぬらして
しのび泣くよに
雨はしとくくとふりそゝぐ。

何故今夜はこのやうに
淋しいんだらうね
まあ私の眼の前で
Antony と Cleopatra が
雨にぬれ
風に吹かれて
Kissして泣いて居るよ
泣きぬれて居るよ。

シト・・・シトと
雨はふる、雨はふる
白い大理石の上へ
聲をふるはして
泣くやうに、むせぶやうに
たえまなくふりそゝぐ。

何故今夜はこのやうに
淋しいんだらうね。（地賞）

所謂刹那の感情を捉えて來て、其味ひをゆつくりと表はさうとしたもので、なつかしい心持の起る作だ。（評）

○林檎の花

羽前　美也子

たそがれの路を歩く時
野も、山も、森も
次第に黒くなつて
日は暮れた。

只林檎の花ばかり――
暮れるにつれて白くなる。
ほの白い林檎の花よ、
そんなに好い香ひは
・・・やがて・・・
清き戀がかなふやうにと
美しい夢を見てるのだらう。（人賞）

思無邪。（評）

○夕陽

神戸市　足立春子

夏の
夕陽は狂はしく
默せる鐵道線路に漂ひ
眞黒き工場の煙
ねずみ色にうすれ行かば
黒ずみし生の扉を押し開けて
蒼い瞳を光らせた一群が
悲しさうな唄を歌つて散つて逝く
・・・・・・・・
斯くてまた

堅く閉ざされし扉は
ほしいまゝなる夏の夕陽の物狂はし
く顫ふにまかせ
大なる建物は
にくましくも
高き宇宙にたてり。——

☆

我が神經は顫ひ
我が胸はなやむ・・・・
道の角
ペンキ塗りの窓際に
色白の男
夏の夕陽を脊に受けて
乳飲兒の初毛それば
驚きて泣く聲に
汗臭きわが神經顫ひ
からびたるわが胸惱む・・・・
夏の日の夕陽は
美くしき姿見に輝り反へり
理髪師の白き上着と
剃刀持つ手に
わが胸は恐れ
　わが瞳は痛む。・・・・

☆

我が心暗闇に置れ
我が心ずた〲に斬なやまされたり
思ふことの凡ては喜びなく
うら悲しき死人色の闇にのみ走り
朝の太陽はわれを哀み
われを冷笑ひ
また我をのゝしる・・・・
猶、斯くて
今は凡てのものに離れたれど
わが心
物の圓やかなるを願ひてあり。

(入賞)

『夕陽』は大ざつぱでいけない、次のは題材が眼に立ちすぎる、終の詩が三つの中で好い方だ。(評)

○草笛

越後　芹田紫紅子

瞳に溶け入る緑のうるほひ。
草の中に寢ころんで、
草笛を吹く。
紺碧の空と、野と、
その果に白い月が浮いてゐる。
濤の音。
草の匂。
こんな和みに、
我れ自ら吸ひこまるゝ草笛の稚い調べ。
すゞしい胸がゆれて、
わけもなく泣かれる。

單純には相違ないが、空しい聲ではない。(評)

○露

横濱市　百合子

小刀の樣な葉——
其葉の片縁に
十五ばかり露の玉が光つてゐる
一番下の玉がポタりと落ちる
と、柔かい土に小さい穴が出來た。
白いイスタリリーが一輪
蜂の後肢にかき亂されて
黄色い花粉がちる
と、露にぬれて
白い花瓣を少しよごした。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

囚はれない技巧はおもしろいが、これでは寫生文だ、詩らしい香がない。（評）

○三味線のうた

大阪市　杉山はなゑ

新町の軒並の灯、紅く
たゞれて悲しげに身慄
ひする六月の雨の夜よ
なまめかしい女のわざ
とらしい笑ひ聲と、
浮つ調子の三味線の音
が
濡れた軒から洩れて出
る六月の雨の夜、
そのむかし梅川と忠兵
衛が
物語りに更かした夜を
思ひ出させる
六月の夜の雨、
新町の軒の紅い灯よ
調子ばかりうはついた
哀れな
三味線の歌よ——。

雷同のみ、模倣のみ、更に自覺せよ。（評）

○矢車草

深川　矢澤榮子



田舍娘　長野縣　秋丘こずゑ

日を一日風は吹く
夜を一夜雨は降る
ダイヤの様な星も見えず

うなだれた花瓣の重みよ
涙にぬれて
泣けども……泣けども

矢車草は泣く
嗟嘆の聲を立てながら
たゞれたる……花瓣の色
甘き接吻をもとめる蟲も來ないで……。

雨は降る、闇き恐怖
紫色の矢車草の悲み……。
しびれた瓣は空を仰いで

ぶる……ぶる……と顫へる
絶望の悲境
疲れたる矢車草は沈默の呼吸す
痛ましき花のくるしみ……。

才氣はあれど投げやりを惜む。（評）

○闇

相模　藤田君代

もう、すつかり暮れた
針の目から洩れる程の光もない
二人きり……
大きな森の中に立つた

さてどうして……マッチもない
さわぐな聲がする
うそだ谷の水だ
さてこのさきを……力もないのに
手を、手を、
堅く、かたく、
たが相手の顔さへ見えない
濕つぽい草が裾をなでる
ゆけ、行け
暗黑の中を
森のつゞくまでは
二人の脈のあるうちは
でも手だけは
堅く、かたく

最後に僅の光に生き得るところまで。
最後の一行ありて僅に此詩も生く。（評）

○處女のつかれ

京都　ほづ枝

懐しい――　日の句

まろやかに沈みゆく野の夕暮……只一つ白き花雜草の中にすゝりなき哀愁と孤獨より逃れんとする我が魂は大空に力なう漂ふ乳色の雲と接吻す。あゝたへがたき處女のつかれ――見よ、踏切番の少女が振る眞白な旗は薄黑くけがされ――美しき色彩の追憶は、いたましき、處女のつかれの脊き愁に惱む。

○溫室の椰子

徳島　荒れし花

ぎらぎらと目まぶしく
眞晝の太陽の炎かゞやき
低く斜に削り立てたる
溫室のガラス板の反射のまぶしさよ。
その中の丈低き椰子樹よ、
深き怖ろしき沈默につゝまれ汝は夢をしく、
われ想ひ出でぬ砂眞黃なるサハラの砂漠。
渇にうゑ疲れたるキアラバンども
オアシスの面影に歩みさまよふとき……はた鈴の音をさめ、駱駝なかまり、渠等ほのかにも夢に入る時……。
反射つよきガラス板開き人入る。
土うるみ、葉末よりはぽとぽとゝ滴す……
むし暑き汝が吐く息と、外光との對照。
なやましき椰子樹、たゞ Gods' time をまもるたくひ……。

○紅の花

釜山　末永千代

御まへは又咲いたの、どうして?
もえるやうな色、眞紅の
やはらかい初夏の、光に浴したの?
なぜ笑ふ、まだ黃色な眸で笑つてゐる
かう悲しむ私が、なぜそんなに可笑しい
詩の世界にのみ、くらすおまへに吾現世の
悲哀も歡樂も、わかるまい……けど
おまへは私の、戀人ではないの?
紅の花よ!!
おまへは私に、其の赤い唇から
語つたではないか、其のローマンスを
私はわすれないよ、紅の花よ!!!
あれ、又みどりの、葉がくれに
おまへの子供が、あそんでゐる
けれどひとみは、まだあかぬ
それがあく時は、おまへは逝くのを知つてゐるの?
それでまだ笑ふの、紅の唇で
羨しいよ私は、死を了解する事の出來ないおまへがね!、……
輕い初夏の、夕風は
おとづれた、我が袂を
私は去らねばならないの、今宵は
紅の花よ!!!、おまへは永久に笑つておくらし
あゝ、歎き情緒のさけびよ!!!

○玩具屋の前

本所　かすみ

塵と芥にまみれたる
縁日の玩具屋の店頭。
憎悪なる彩色に、魅せられて、
並び佇む
幾人かの——小兒
の群集よ。
アセチリン瓦斯と
洋燈の油煙に
汚苦しく玩具の色
は惱し氣に見ゆ。
暗き面——あゝ惱
み並ぶ玩具の暗き
面よ。

○惱みの日

愛子

哀愁の雲に包まれ
し
はてしなき空より
降り來る雨のはや
さ
色褪せし花の上に
音なくそゝげば
淋しき記憶の顫ひ
起りて
しびれたる魂は慄き沈む
あゝ暗き影よ暗き生よ
吾が唇はかわけり
吾が足は疲れたり
求むれば悲哀の水のみ
あさましや
其の刹那にひらめく
吾が執着の思よ
淡き未來をゆめ見て
はかなき
生存の巷にさ迷ふ

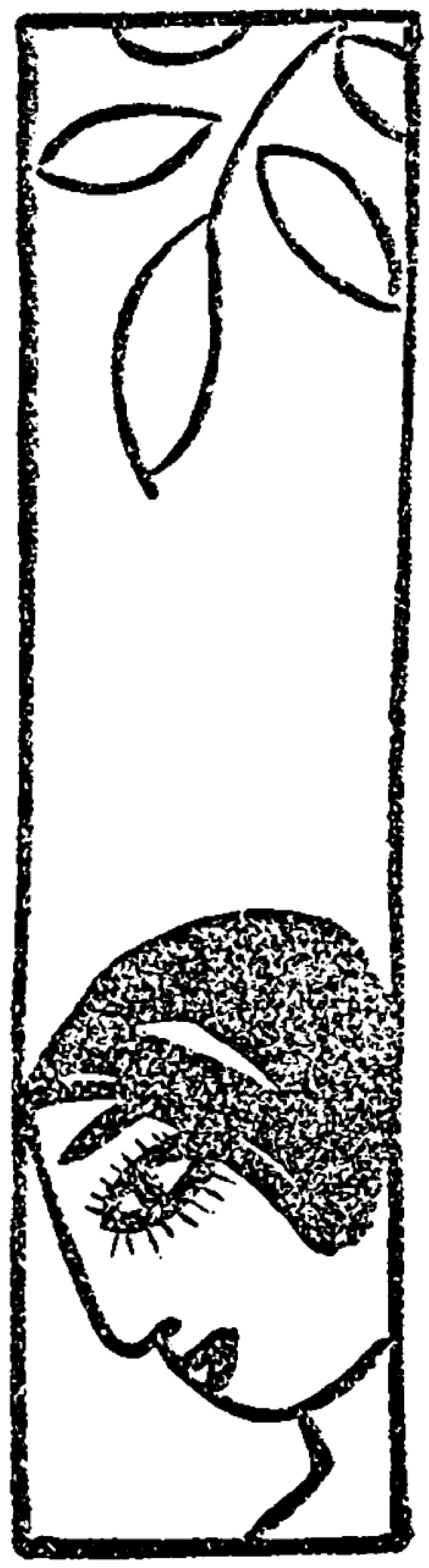


青葉の窓　伊賀　米田きよ子

○初夏

小石川　靜香

五月の日光が笑ましげにかゞやけば
まだ若い紅葉の葉は
浮氣な風にさそはれて
一時にドット重なり合
て笑ふ
つやゝかな厚つぽい椿
の葉は
上眼づかひに白眼して
あざ笑ふ……
やつとをさまつた笑を
又風は
行づりにからかひて
紅葉はくるしげに身を
もがく
ずみ渡つた大空は青い
目に
またゝきもせずジツト
眺める——
五月の朝の心。
雲のたゝずまゐ
風のすがた——見よ
輕い、うすものゝ
白くふくらんだ夏の心
持
熱い血は——
涼しい地下室の石たゝみに
冷されてゐる——しばしよ。



人事（散文）　編輯局選

○引越し

米澤ほゝづき

閉切つた家の中は夕方の様に薄暗い。長火鉢の傍にひろげた、紅染や黄木綿のあたりに不調和な鮮明な色が一層變な詫しい感じを與へる。屋根のズーッと上の方をゴーッと風の過ぎて行く音がして稍時をおいてカターンと雨戸が鳴る。

上からかぶさつた栗の木に包まれて一層生々と木地の白く見える此の小さい家！夕暮お歸りを待つて正を膝の上に乘せて門口にかゞまつてゐると、つひ足元の爪先にウソ寒さうに震えてゐる萠えた許りの草や、雨上の美しい旭と紺青の空を映した目覺しい露玉で綴つた巣の眞中にじつとしてゐる女郎蜘蛛や、私には皆離れがたい馴染である。

人見しりする子の様な私の心がかうしてこんな微さいなものまでもスッカリ自分のものにして、やつと落付いたと思ふ頃又捨てゝ去らねばならない‥‥。

烈しい日射がサッと、前髪から白い前掛に落る靴の跡の深く殘つた目の下の濕地がギラ〳〵と黄色く眼を刺す。そこの桐並木の下の溝道を飛びはね〳〵行く、背廣の少しかゞんだ背、ポケットに兩手をつゝ込んだ高い後姿、私はそれを毎朝正に乳ふくませながら此の窓際に坐つて見送る、そして「良人は子供見たいな弱い人だ、けれどその弱い人の影よりも薄い自分だ―」なんて悲しい様などつか懷しい様な感じを起して見るのが平板な毎日の唯一の刺戟であり慰めであつたのだ―あ、さつき出しなに一寸振返つてじつと見つめられた瞳を見た時、その無言の心の中もよくわかり、私の心には卽座に準備の順序も立つたのだつけ……私は決して不服をいふのではない。たゞかうして獨で氣の濟むまで愚痴を云つて名殘を惜んで見るだけ―。

「ウオ！ウオ」と私を呼ぶ。振返ると私の立つてる反對の小緣に正は、八重櫻の様なフク〳〵した足をバタバタ云はせてこつち向いてる。敷いた白メリンスの蒲團がうす青く見える。

私は取散された雜具の中にベタンと坐つて動かなかつた。（地賞）

小ざなホーム、其れをかたちづくるは男と女とそうして子供である。何といふ意味の深いライフであらう、家無き子は口でこそ自由といひ愉悅といふもそれは皆負惜みた人の子の母よ幸に健なれ。（評）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○湯同行

豐前　みね子

——二人は同じ程の脊恰好だつたので、相合傘で湯壺に行くにも氣が張らないで好かつた。——

薄うぼうッと光を含んだ灰色の空は、氣永う平氣で幾日も細い短い雨を降らす。白たゞけた様な明るみは、長い廊下の外に立てた硝子戸から影もなう這入つて、眠くなる程色のない日が續く。二人はいつも、竹の小さな籠に湯道具の入つたのを提げて、ドシッ！ドシッ！といかにもだる相な足音をさせ乍ら、二階を降りてくると五段目頃から、階段の眞正面に置いてある大きな姿見の上の方に、眞白い素足が浮く、薄納戸の着物が映る！赤い帶が……鏡の前に並んだ時、楠代さんの右の手はいつか前髪にいつて居る——又つと笑ふと楠代さんも又笑つて、たうとう聲を出して鏡の姿と笑つてた。

すつきりと、苦もなく見せる様な好い鏡でした。

一緒に居る内一度は苺取りに行きませうと、「輝照坊主」を軒に吊して、面白半分毎日祈つたが一日は愚か半日の晴れもない、焦々してるのに皆んなして「お信心が足りないのですよ」と冷評かされるので、何や彼や腹立ち紛れに前日の朝お坊主さんを引き捲つたら、午後ケロリといかにも明日發つのを嘲弄ふ様に雨はあがつた。地こそ水溜りや小石の洗ひ出されてるので長雨の名殘りはあるが、空は最う憎い程常の通りであつた。其夜、淋しい様に片付けられた部屋に、長崎の女と豐の女とは坐つた。縮れの多い乳色の花火屋を透して來る光は餘りに豐かで、餘りに艶で、青葉から流れ出る初夏の夜の空氣と、ともすれば分れ相で何となく心苦しい。

斜に走る、丸心の光は强くはないがサラリとして色も形も其まゝ見せる様で嬉しい。二人は終りの夜を心ゆくまで話した。硝子戸の少し開いた所から眞黒い影が流れ込んで、みがき上げられた星は向うの森の中にまで光つてた。柔らかな桃の若葉が細い風に震へてるのにふと思ひ出した。旅だつたから、旅だつたから、我の强い若い今の女の、一時でもあれ程までに心と心の融和したのを、見る事が出來たのだらう！　（入賞）

また湯治ですか。（評）

○高下駄

岡山　中西りか

シーツの掛つたまゝ干してある蒲團の上に、紅い唐縮緬の美知ちやんの枕が靜かに乘つかつてる。

「私てのかり（枕）もらひませう」と腰を下してもかんかん草を摘みためながら見むきもしない、可愛い子！！

うつとりとなりながら、臘揚な春の光のみなぎつた庭面に眼をうつすと、昨日お師匠さんが杖で、へのへのもへだの、××美知子だの、高草の裏手の溝のへりの家にて――だのといたづらしたのが、箒目の間々に殘つて居る。戸袋の横手に茶色の艶の出た杖と、齒の入替へした許りの、とんでもない高い下駄が皮の緒がゆるくすがつたまゝきちんと揃つて居る。

「何だつて盲目の方はあんな高い下駄をはくんでせう」「ほんとに危いわね、便利がわるい筈だのに」といふと横から「そりや物をふむからさ、あれだと何があつたつてかまふこつちやない、けりけり行けるからなあ」つて笑つたのであつた。

「御待遠樣、美知ちやんは?あら」と姉さんは簾の内で、爪の音をカチリとさせながら箱に入れる。行きかけてふつと机の上を見ると、御師匠さんを馬鹿に頭を大きくスケッチして、

　頭があんまり大きすぎて、身體が餘り小さすぎる羽織の紐の胸を越ゆる事一尺、青く光つた「××××」頭の後のだんだん――

「あのねえ、昨日××××は、長谷川の奥さんはピヤをよくお彈きなさるいふ話でしたが僞でがしたなあ」てんですよ。」姉さん薄笑ひしかけて、「「ピヤッて」「ホヽヽヽピアノをいふんですよ」「奇蹟」「ホヽヽヽヴアイオリン見た、あら聞いたでもなし、まあさうするんだわね、で、ないつてんでせう、出して上げるとね、こいきうのやうに膝の上に乘つけて、何だつて盲目なんかに産れるんでせう」「訊いて御らんなさいよ」「いやだ!松竹梅が上つちまふまでは怒らせないでおかないと損ですもの――」

　美知ちやんが嘗めちやつて、くちやくちやになつた爪袋を拭ひ拭ひお琴の前に坐ると、姉さんは忍笑ひして下りたつ。美知ちやんをくすぐつた時笑つたときのやうな、笑を浮べて聲をしのんでお師匠さんを見る。

(入賞)

××だらけなので、半分は不透明になつてる、ピヤノをピヤつて言つたのは誰か「あら聞いたでもなし」つて何のことですか。(評)

○櫛をやきて

邑智　白須彌雪

炬燵がくさい蒲團を上げると灰色の煙が一度にウワーと上る松やにくさい事は鼻の粘膜を刺す樣だ。刹那私の手はくづれかゝつた桃割の根元へ電氣に引きつけられた樣に……とうづまく煙の中から栗種色の美しかつた櫛があられもない灰にまみれて、櫛!櫛!と私の聲はあやしくふるへた。「なにッ」と母は云ひ樣ふとんをはねて十能で燒ける櫛を灰の中へ突込んだ。けれども灰色の煙は消え相もない、うづを巻いて上る――上る。早くどうかせねばとあせつてもあせつても灰の中で煙が立つけれども私は手を突込んでとる程の勇氣がない、何故突込まないんだ、自分の手と此櫛と比べてゐるべき場合ぢやあないのに、突込まなくちやあ熱くても………

父が這入つて來たくさい「なんだ」「櫛ですの」「エ櫛?どの櫛だ!!」

父の聲は鋭かつたハッとしながら「叔母樣のです」私の聲は小さくふるへてゐた「なに叔母樣?綾(父の妹)の形見か、ほほけた私の髮の毛を見つめる、父の目に涙がたまる。

私の頰にも知らずに「はやく引きあげろ、何を愚圖愚圖するんだッ父は狂氣の如く突然叫んだけれど私はどうしても熱灰の中へクリームの樣な手をつける事が出來ない。突込んだらきつとみにくくはれあがつてやがて引つぱり合つてぴかく光る樣になるんだらうとすまぬけれど僞らぬ私の心事だから仕方がない。從姉は不平らしく私の顏を一寸にらめて思ひきつた樣に煙の中へ——とその白い手の甲の少し



物問ふ人　廣島縣脇屋蒔滿

ばかりと齒の二三本殘つたばかりの櫛がふるへながら上げられた、見るのが辛いみるのが辛いみんなまアと云つたぎり二の句をつがぬ。

昔の俤いまやいづこ美しかつた栞種色は灰色のところや茶がゝつたところや眞黒くこげついたところや……私は古の勇士の末路を忍ばずにはゐられなかつた叔母の形見!桐の葉のばさりと淋しく搖れる秋の夕眞紅の血を吐きつゝみまかりしと云ふ若き叔母、父の妹……美しき人ともきいた私はよほど可愛がられたともきいた。みーやが大きになつたらこれをやつて……と云ひ置いたときいた吁その櫛罪!罪!こんな無慘な態にして置いて罪惡を感ぜずにおられ樣か許して下さい、叔母樣、父は紙へその理由をか

いてその燒殘の櫛を包んで大切にしまつとけと嚴しく云ひわたしたそのかほ、曇つたその聲、ピリ丶と釣り上つた美しい太い眉、思ふさへ身內がすくむ。私は泣き〳〵父の言葉を守るべく紙と筆とを用意したけれど思ひは散つてまとまらない淚ばかり熱く流れて……櫛よ櫛よ汝の無慘なその哀史！云ふにしのびぬ。

汝聲あらば末尾の淚をかたれ　吁

頭を炬燵に突込んでいらしつたのですか、それとも櫛は足のゆびにでもさしておたのですか、なみのアタリ方では櫛が炬燵の中へ落ちる筈が無い。（評）

膝栗毛に馬が二階に上つた話有り、櫛が炬燵に落る位何でもない。（一記者）

○蒲團

栃木町　吉屋信子

日曜の朝、柱によつてスコツチの玉を轉がしながら、靴下を編んで居つた私は飽きて來たまゝ外面に眼をやつた。日あたりのよい隣の二階の屋根には、華美なメリンスの蒲團が幾枚か干してある、日光に當つて心地よく張つてふくれて居る、あの上にふんわりと、身體を橫にしたらば―と、お君さんのらしい。

笹龍膽に矢車を紺地に赤と白で染拔いたもの、シーツは態と除けてある、三巴に緋牡丹をあしらつた大形のには黑天鵞絨の肩當、よらば白粉のうつり香がほのかにするであらう。

光にさらけ出された強い色彩に瞳が輕い眩暈を覺えた―緋牡丹の花がゆら〳〵と、葩が舞ふと、其下を黑い線がうねる―蛇だ！

牡丹の蕾を窄めるのか眞紅な絹絲のやうな舌を出しては動かす、徐々として這ふ。矢車にからまつて、くる〳〵と、めぐると見たら蜷局を卷いたので……。

カチツと音がして庭石に私の手から編棒が落ちた、銀色の銳い針がはねて地に一直線に立つた。此幽かな響と銀色の針を知つたのか、こゝる樣にうねつて瓦の間に入つた、尾が見えて、やがて、かくれる。

肩當の天鵞絨の上には白いノロが光つて、瓦の上にも續いて、私は部屋に入つて障子をピツタリしめた。

午下り、恐ろしいものを、のぞく樣に向の屋根を見た時には蒲團はもう無かつた、あの蒲團にお君さんが寢るのだ、白い腕に―黑蛇が搦まつて―、

晩やすむ時、母に「家では蒲團なんて、屋根に干さないで下さいね」と言つて私は二三度蒲團を振ふた。

これは借り物では無からうか。（評）

○筬うつ手

米澤　窓のをんな

朝床に目が醒めると、あゝまた夜が明けたかと、囚はれてゐる一日をおもふかなしさ。

けふもまたゆかねばならぬかと機場のさまを思ひうかべると、遣瀨なくなつて、あゝゆきたくないと叫びたいが、家にゐて母の淋しき顏を見るのは、なほ辛いのである。彼處にゐる多數の工女の口から聞くのは若い男の噂と卑調な俗謠よりほかない。自分もそれらの群にはいつてゐるのだと思ふと堪へ難くなつて、毎日通つてきたことを驚きながらけふもゆくよりほかはないのである。

貧しき家の犧牲にされた、わが若き春は再びと來ぬにかうして過ぎてしまうのだらうかと、いつも終りにわが年が數へられるのである。何時までもかうしてはゐられないと、心の底では叫ぶけれど自分は無學な弱い女であることも考へられる。

多くの女の笑ふにも語るにも自分ひとり一隅に群をはなれて、重い筬をうつに疲れると、路傍の窓に倚つて眞晝の光線の白く散らけてゐる街道をはるかな端れまで眺めやる時ばかり、軀も心もわづかのやすらひである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

細い一筋の絲の切れきずも、小指の先ほどの薄い汚點さへ、ゆるされぬ高價な機をよく織ろうとする苦心と不安は、かゝらぬ前に考へてゐたやうな容易いわざではなかつた。

人に顔見らるゝ厭さに、しまいとするけれど、思はず胸の底から出てくる深い吐息は癖になつてしまつた。

擦り硝子の高窓に落日の殘りの光も消えて、機面の細かい縞目がはつきりしないやうになると、開け放してた路傍の窓を閉めて、薄暮の町を歸り來る時わづかに甦つた心地がするのである。

夜はまた早くから睡氣がさしながら無意味だつた一日を葬つてしまうがいたましさに、何うするといふ事もなく晩くまで燈をみつめて起きてゐることもある。

かうして送りゆく一日一日の味氣なさ。あゝ充實した生活がしてみたい。

機織る女が、充實した生活など云ふことを考へるだらうか??。(評)

○夏物賣出しの日

紀伊　百合香

昨夜むりに一緒に行つて戴くやうに御願ひしておいたのに今朝起きてみると雨がザア〳〵……

お母さんはひそかによろこんでいらつしやる御樣子……つまらんのは私一人……憎らしい雨……

今日は市内の各呉服店が聯合して京都から來た高島屋に對する競爭的大賣出し……

私の運が開いて來たのか九時頃雨は小降りになつた。識る御母さんを誘つてたうとう雨用意で出掛けた。此の雨の降るのにまさか來る人はないだらう……まあ〳〵人の出ないうちに……好い柄でもよつておかうと思つて行つてみるとこはそもいかに……大いに豫はづれ……來る來る高下駄に雨傘でつめかけて居るにはあきれてしまつた。自分の馬鹿づれもあると思つて可笑かつた。最新流行とかで白地に墨で濃淡つけた百人一首の歌模樣……御召縮緬や……縞絽の單物……いうぜん縮緬見切品など山の如くつり下げたのもあれば積み上げたのもある、そうして盛榮深い女の心を惑かすやうに飾り付けてあります。

一圓二圓と正札のついた見切品を見てゐる子持女もあれば、田舍には珍らしくもマガレットに水色リボンのハイカラ孃さんが、しきりと切下げ髮のおばあさんに何かねだつてゐるらしい。若い新婚らしい二人連の幾組にも逢つた。丸髷の若い奥樣のうしろをあちらこちらへとついて行つては男の癖に反物なんかいらつて居る。いかめしいカイゼル樣の反物をいらつて居るのなんかは見られたものではない。

下女を伴れた人……子供をおぶつた人……母を伴つた娘……いづれも血眼になつて掘出し物をさがして居る。

出て行く人は皆なりの奇麗な人も穢い人もきつと大きな風呂敷包をかかへて行く……

「七尺二圓であつたら尺三十錢にもつかんのし」

「これねえ四圓ですつて安いこと御揃ひにしませうか」

なんてあちらでもこちらでも此種の會話が始まつてゐる、私はたうとうセルと白絽とを買つて戴いて皆のやうに片手に風呂敷包を提げて出ました、呉盛會の方へ行つてみると、いづこも同じこと大入……やつとの思ひで一反買つて、家へ歸つたのは午後の一時半……

でも今日だけは感心にお腹がすかなかつた。

これが女のいのち。(評)

○こゝろの色

東京　みつ子

紫や紅の濃い映の彩もあたりの緑いよ〳〵深まさる折なれば薄色のそれとふさふ卯月は木の櫻ちる頃春はもう逝くのである。

町近からぬ山の手の逝く春は一しほ靜に淋しいものと思ふ裏庭で鷄が

クツクと啼く、美しい手紙が欲しい時だ、それにしても暖かい日ざした自事分は何と言ふ事もなく眠氣がさして來た、雜誌でも讀むだらと取出したけれど格別面白い事も見出さず森田草平の「戀愛の後」と云ふのを又くり返して一氣に讀み通して仕舞つた。

ぽんと本を伏せると其まゝ頭の中で何か囁く戀の心を對手に表す言葉と文字と言ふ樣なとりとめもない囁きだ、此樣な徒然の時にこそあの古文庫の中の人の手紙繰り出して見樣かしらと思ふたが、何やら未練らしい樣だけれどあの恥らい勝な若やかな少女心に返るかも知れないと思ふと自分はふと思ひ浮べた。

あの暗い〳〵闇の色が四邊を籠めてまつ暗な時に私は一人野に立つてあの文がらを燒いて見たい。

ぱつと燃る火の色は！チラ〳〵と卷く焔の舌は赤に黃に紫に白に見えやう其色をすかし見て賜つた文の主のこゝろを知りたい。

赤なれば燃ゆる思、紫なれば褪せ易き心血潮湧く女となつてから文字に言葉にあまた度繰り返し〳〵見もし聞もしたけれど何れを眞の心ぞとも未だに知るよしもないものを！病む身には物思ひの絕ゆるまもないけれど二十一の春を孤り又も父母の許に惜しむ身となつて。

かつて才貌兩全の名をうたはれた君である、すべての女の爲るが如く君も結婚といふものをして、三年を駿河に在りて、病んでまた都の人となつたのだといふ、薄命なるいのちよ、君の乳になれし嬰兒は今いかに。（評）

築地にてを書いた千代子？！と題した捨小舟を初め、住所姓名無きため沒書に附したるもの多し、水野君も斷つたやうだが、住所姓名を書かずに評を求むる人は確に非禮である、それから平面描寫とか客觀的とかをまねて丸きり自己を沒して書いたのも皆捨てた、虎を描いて猫に類するみにくさの故に。

○暗い灯のもと

紀伊　夕涙

向ひあふて、坐つた友と自分との間へつるした、シンのほそいランプの暗い灯は、すべてを陰氣化して、おしつける樣な感じをあたへる。

疊の上には、みかんのかはが散ばつて坐のわきの板間には、七輪、土瓶、おはち、なぞがおいてある、つゝつぽを着て髮をみだした友は、白いすねをはたけて兒に乳を含ませ乍ら、見た事、聞いた事色々な世間話を語つて呉れる。

春の夜ながら冷あがる樣な寒さに幾度か、「寒いのね！」と言はんとしてふと座ぶとんのないのに心づいて、はつとしてやめた。

兒どもはいつの間に眠つたか、母のふところ深く顏をうづめて居る。

話がとぎれると寂まりかへつた夜氣がヒシ〳〵と身に迫るをおぼえる

自分は先刻から、つかれの見える友の顏をつく〴〵ながめては其心をはかつて居た。

自分は今夜ある事を思ひ乍らわざ〳〵此友を訪ねて來たのだが曾て見れば我思ひはそれて居る、自分の考へが足らなかつた、友には決して友人なぞと語るだけの餘裕がないのだつた、今の友の心を支配して居る、ある暗い影が自分にはつきりと判るだけ今更此の友に對する雜話が見つからぬ、自分の話はすべき人でないので只沈默を續けるより外はない、自分への愛想につとめて語る、友の話を心苦しくきゝ乍ら訪ねゝばよかつたと幾度か心に繰り返した。

嗚呼大なるは自然の力かくて人も己も遠く〳〵へだたるのか。

「吁大なる自然の力」が滑稽に聞える。（評）

○競馬場の一隅より

埼玉　福子

公園の周圍は人垣が造られた、中央には、數十本の梵天（五色の吹流

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しが立てられて、其美しい色々の布は、はたはたと風に翻つて居る、向う側に居る人達は正面に太陽の光を受けるので、まぶしさうに額に手を加へて居る、私達の前を、後を、人が、春の浪のやうに緩かに、それでもめまぐるしく動揺する、商店の番頭らしい紫の揃ひの手巾を頸に巻いた男の群子供を連れた夫婦づれ秩父の着物を着た娘達、握り傘を二つ並べたやうな銀杏返しにつぶし島田に、それ者らしい抜き衣紋の群、見るともなく眼にうつゝてそして何處へか消えて仕舞ふ今又子をおぶつたお婆さんが通つた濃紫の大柄なねんねこが只一つ印象を殘して、斯うして通つて行く人々は、一人々々此の路傍の人に對して冷やかな眼を投げて行くのが常であつた、其の頬はしさにつと眼をそらすと、其處に、公園と道路との間の名知らぬ木の下にねんねこを折り敷いて、幼兒に乳ふくませる若き母を見た、絶え間なく動揺する人の群の中に、白き乳房の半ばを見せて、幼兒に愛をわかつ世の常の人妻、あゝ其の刹那、私の胸の中を何とは知らず甘い哀愁の夢のやうに流るゝを覺えた。ドンドンと打ち鳴らす合圖の太鼓に、驚いて振りかへると、何時の間にか出發地點に並んだ四頭の馬は一團になつて馳け始めた、其の中に一人十四五歳の眞紅の服に白のたすきした顔白き子が交つて居た。一寸雲にかくれた太陽は、つと顔を出して、赤に、白に、黄にオリーブに馬上の人の服を射た、二週三週四週！一團は漸くほぐれ



木の下蔭　信濃　細田草路

て白き服着た人の馬は一番後になつた、あゝ彼の子は、少年は？二番目に居る、——弱者よ——五週目頃、彼はぬかれて三番目に落ちた、白は依然として最後の位置にある、七週の最半に於て彼は忽然一頭をぬいたオ、又一位のもぬいた、勢を得て顏は頻りにふるふ、……

二時間の後に私は綠の柱によつて、僅か一丁と隔たらない公園を眺めた、人垣は見る／＼崩れて、私の眼界にをさめられた三筋の道を思ひ／＼に歸つて行く、殺風景な公園を彩つた梵天や、種々な賞品は、勝負毎に減つてあまつた二三本を人がかついでいつて仕舞つた。白や柿色や淺黃の、屋臺店の日覆は疊まれて商人も歸り支度をする、日も餘程延びた、太陽はまだ山にかくれない。

色彩をもつと強く出して下さい。（評）

○片われ子

伯耆　ふみ子

何でもないのに、不圖、片われ子つていふ言葉が、胸に二三度呼びかへされた。

同時に、まざ／＼と、片われ子について、長い或る記憶を、たどらなければならなかつた。妾の心が……「片われ子よ」「双子の片われよ」

これは、妾が小學校時代、背の低い、比較的頭の大きい、よく肥つた孝太郎といふ男の子に對して、妾等女生徒がみんな言つた、侮蔑の言葉だつた。

裏屋敷の、白椿がポタリ、ポタリ、淋しい音を立てゝ落ちる日であつた。妾は、赤いくび玉、はめた小猫を抱いて、日當りの好い緣で、日向ぼつこりして居た妾の側には、あのなくなつた兄さんと、兄さんの友達の義雄さんと、妾と同じ年の其の時、六つの孝太郎さんと三人居た。そして、紫の繪具で、かぶとを被つた武者の繪を一心に書いて居た。

孝太郎さんは、先きの切れた古びたきたない筆を持つて、上手な兄さん達の描くのを眞似て、目の丸い、八の字眉の、入道みたいなものを、涎を流して描いて居た。

下腹の大きく、ふくれて居た孝太郎さんは、着物の衿がいつも、つきつぎになつて居た。其の日も、やつぱり、お臍や、すねを、全だしにして居た。

つゝましい性の、女の子の妾には、此の孝太郎さんのみだらな風が、可笑しくて、そつとお臍を覗いて見たりすると、お臍が五分位も飛び出て居た。

あまりの珍らしさに、そつと、繪具筆とつて、お臍に紫色で十の字を書いて置いた。

それから一週間程たつてから、また孝太郎さんのお臍を見た。紫の十の字は、消えて居なかつた。

果ては、學校にあがつて、物學びする頃になつても、まだ、紫のあとは殘つて居た。

「双子の片われだから丈が短いんだ、お臍が出て居るんだ」口の悪い女生徒は孝太郎さんの、姿を見ると、斯ういつも、からかつておた。

ほんとに、孝太郎さんは、双子の片われ子だつた。一人の方が死んで孝太郎さんの方が殘つたのだ。

いくら、人が冷笑つても、孝太郎さんは、平氣な顏で沈んだ樣子は見せなかつた。

小學校は、妾と同じ樣に終つた、それから妾は、女學校にあがつた。故山を三十里はなれた放浪の子となつて居た時、豐かだつた孝太郎さんの家は、父さんの狂氣に、兄さんの放蕩で破產して終つて、孝太郎さんは郵便の配達夫になつて居た。妾が、父母に出す手紙を丁寧に家に配つて呉れた。そして紫の十の字のあとは配達夫になつてからも、まだ、淡く殘つて居たとか、妾が、學びの業終へて歸つた頃は、孝太郎さんが姿は此の山里には見えなかつた。今年で二十二だ、もう紫のあとは、殘つては居まい。

住所姓名が書いてないから沒書にしようと思つたが片割子といふに引かされて止めにした。けれど臍へ書いた十文字がどうして消えなんだか、立木へつけた小がたなの疵ぢやあるまいし、大きくなるにつれてまで殘つてゐる筈がありますか。（評）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

答があります。かつて詰問したつて、あつて見れば仕方がないやね、多分お孃さんに書いて貰つたんだからといふので湯に入つても洗はず裸になつても拭かず二十何年か大事にして來たのだらうさ。（評）

○雨の記憶

和歌山　宇田菅

絲の様な細い雨がたえず傘をうつ。

毒々しい田舍饅頭を並べたうす暗い店や、破障子の汚ない蕎麥屋など、薄板一枚へだてゝ家より家へ話をしかける、どつとおこる荒い聲に何かと足を止めたのも二度ほどあつた。

小さな汚ないおもちやの様な路を幾曲りかすぎて、玉津島神社の中へ出た。濃緑な木立のために、雨たえずけぶるが故に境内はやはり暗かつた。

枝だれ柳の立木の間に、幾本かの瓦斯燈の柱に××樓内○○子、○○家内××子なまめかしい紅筆も、雨にぬれはえて優艶であつた。



老たる女と白い猫　　青森縣　稲葉たから子

「今日修身の時間に先生のおつしやつたこと、あなたどう思つて、少女世界へ投書してメタルもらつたと云つて、もうだらくでもしたかの様に」

と云つた三砂様を思ひ出した。

「答案を上手に書く者は、うかつに扱はれない」と云つた校長様の言葉は怒氣心頭にもえて、あれやこれやの不平が元で土曜から日曜へかけての外泊を舍監より許されて、引越してまもない姉の家を訪づれたのだつた。

女學校の先生程、自然の行爲とそれから得られる快樂を恐れるものはありますまい、正當な快樂ですよ、あたたかいから散歩に出れば不行儀だと云ひ、ぢつとして居れば不快活でつまらんことを、たくんで居ると云ふ、私たちが何氣なくおる話でも監督者の位置に立つものは必ず妙に理由をつける、理窟をつけて何かと意見しないと威力

が保てないと思つてゐるらしい、あの先生たちは若い夫婦が仲よい樣を見て美しいとおほめになりません、兄と妹が親しいのを見て心配する程です、打ちやつておいて下さい、若い女のことですもの熱情にかられては軌道を外すことはありませうともけれども夫は只好奇心で、行つた望に花なくば又元の位置にかへります、女だからつて、我と我身を亡ぼす樣なことはしませんものを、一體先生たちは神經質にすぎます。

けれど、外泊と云ふうれしさと、突然うるさい生涯からのがれ出た明日のない安心とは是等の不平を忘れしめて、うすにごりする川ぞひの街にあたらしい義兄の標札を見つけて、玄關の横の大きい丸窓がまづ氣にいつてうれしかつた。

和ちやんが、まる／＼として食べたい樣、姉は和夫の夏服と、帽子を自慢さうに見せながら、お天氣になつたら見に來て下さいよ、見事な鯉幟をたつたからと云つた。

片男波の松原に雨はけぶる、ぬれた土の上に眞紅の爪のかにが二つ三つ見えてゐた、かにの爪にも霧の樣な雨が。

女學校の教師は正直にいへば教育界の無能者である、冷たく固つた頭で、若い才ある女を觀察するのだからアブナガルのだ。(評)

○丸髷の人へ

大阪　小さき泉

お文さん、御手紙拜見いたしました。五月の十五日にわざ／＼入來つて下すつて？　それぢやおうらみよりもおうらやまれの方なのね、何にしても四月の十七日ですわね、一生ぢやない、死んだつて忘られないでせう、私以前から一度高髷のお姿が拜見したいと思つたのに、惜しい事をした、もうお丸髷でゐらすのでせう、たがために載せる特別大型の紺紙の綿包み、緋の御手柄も胸の色……脊の君、どんなにお嬉し相なお面をしてゐらすか、御同列のポートクラスが一度拜見願ひ度いものね、あたたかき胸に腕に抱擁せられ、華やかに笑める君は幸なる哉……つて羨むんぢやない、妬むんぢやないのよ、私は一日もそんな日の遠からんを願つてをりますの、でも初子さんの樣な姿を見せられちや若い女ぢやなくつても眉がひそむわ、可哀相にまだうら若い十八や十九で、愛の結晶だか、恨の固りだか抱いて泣顏してるのぢや結婚も決して祝福すべき者ぢやないと思ひますわ、何誰樣にはすまないけれど……お堅はお留守ですつてねそれはお氣の毒、でもあんまり密着いてゐらしつたら蟲齒に掛つてよ、砂糖が利きすぎて……、三田出の秀才、口と筆の人、大いにたゞさざるべからず。かくさずに仰云いよ、あんまりそう大切に藏つておくと陽氣の加減でかびがきてよ、文さん、四つの何やらがどんなにかお二人ともお待ち遠だか……、どつさりお馳走して待つてゐらつしやい。何にしろスヰートホーム式のスヰートホーム、どし／＼お甘い所を御發表遊ばせ、到底私等童貞の及びあたはざる御觀察、御感想も澤山おありで御ざいませう。一度御眼にかゝりたいものね。去夏、いらしつて下さる度、よく○○の停留所までよく御送りしましたつけ、浴衣の時分でしたわねえ、お太鼓の後姿が振ひ付きたい程可かつた。ほんとにお眼にかゝりたいわ、あゝ貴女はもうお丸髷ですのね、私は以前のまゝで……ハスの君樣によろしく御つたへを………。

淺いかな、未だ血を見るに至らず。(評)

○病床より

王子　大涙せい子

御手紙有難う、おゝたか子樣！

シト／＼と降る陰氣の梅雨は晴れても、私の病氣、噫未だ癒ゆる事は出來ないのでせうか、癒ゆべき時季が來ないのでせうか。

明けはなした四疊半の御座敷、其處にある白いベッドを見る度、たまらなく、くやしくなりますの、再び來ぬ處女の時代をたとへ一日でも空しく送つては口惜しいです、それを、三月に餘る病を得て多香子樣、貴女の妹は、古びた天井をにらんで呻吟して居りますのよ。

日に／＼衰へて行く我が身の、血の氣のない蒼い顏を人が見た時年が年だけ誰も肺だと思ふでせうね。

けれど私、胸も何處も痛くはありません、只ね、頭が重くて仕事するのが嫌でたまらないんですの神經衰弱なんてもうこり／＼です。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

評論

編輯局選

○虚榮

伯耆　田村美子

女子は虚榮の固りなりとの説はよく聞きます、私は之に付ていつも一種の侮辱を蒙つたやうな感が致します、虚榮々々と申しますと、女子の專有物で有て少しも男の方々には關係のないものと輕視されて居りますが私はかく迄も外見を飾るに至たのは畢竟女子の先天的性質によりませうけれど、今一つの原因は男子にあると思ひます、先達ある新聞に一紳士が妻君のあるにも拘らず毎夜遊びに出られるのです、友人が誡めましたけど聞きませんでしたのに、やがて何故か遊ぶ事をやめましたので、友は不思議に思つて問ふに、答へて曰く○○白粉の爲に美はしい女と成つたとの大々的な廣告を見て暫し感じました、至當なる一例で御座いませう、まあ現代の男子を御覽なさい、如何なる女を好むでせうか、多數の男子は精神的賢婦人卽ち心の美人を愛するよりも、容貌の美麗なる形の美人を愛する樣ですから、愛を受けない女子としては止むを得ず衣服に[illegible]夫は心を用ひて少しでも美しくせんと勉るのです、人生の一大事たる結婚問題と大なる關係が有ると思ひます、西洋の如く婦人の地位も高く敎育も進んで一個の人間としての自覺が有りますれば左樣な必要もないでせう、しかし我國のやうな專ら良妻賢母を主とした男尊女卑の制度にては結婚の配偶者撰擇權は男の方にあるやうです、先づ其必要條件として第一に容貌次に財産或は血統と云ふ順序ですから益々虚榮心は延びますけれど、致し方が有りません、日外帝大卒業の學士の稱號ある人が、其の妻君を迎へらるゝ時、媒介者から承はつて驚いた事が御座いました。彼の言葉に美人であればどんな馬鹿でもよいと、しかも高等學府に於て數年敎養せられたる徒の言かと驚かぬものはない程でした、千人の內一人位でせう、けれど皆あざけり笑ひましたのです、斯の如く虚榮の罪は男子にもありませうけれど、今一層女子に敎育を與へてしつかりした頭を作り身に付ける本當の價値を吹けば飛ぶやうな果敢なき飾りに代へて貴ぶやうにしたいものです、人の精神は外見よりも貴いものであると云ふ事が明かになれば女子なりとて、めかす事のみにうき身をやつす者ではないでせう、現今婦女子の虚榮のみ盛んなるはつまり敎育足らず見榮の外に示すべきものなき證據で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

すから、十分に教育をして、自からも熱心に精神を研きふはく〳〵したる男子に左右されないやうに女子としての品格を實現したいものです。(批賞)

女としては如何にも至當な言ひ條て、議論はイキ〳〵しないが、わりに間隙なく說いてある。(評)

◎そゞろ言

陸前　馥子

◎現代の婦人に結婚を厭ふわるい傾向がある、其の原因は先づ妊娠を恐るゝため、容色の衰ふるため云々と久しい前、某婦人雜誌上に於てさる名士が仰有つた樣に記憶する。生意氣の至りであるが甚だ首肯しがたい御說ではなからうかと思はれる。こゝろみに婦人雜誌を見て御覽なさい、其の良人、丸髷、妊娠、結婚、戀談の文字の多き、どうして結婚を厭ひ結婚を恐るゝ者の書き得る事で御座いませう。結婚を罵り獨身を唱ふるは過渡時代一時の感情である、いまだ其の口もかわかぬ中に妻となつて平氣なもの、若人の獨身主義程あてにならぬものはないのだ。概して婦人は結婚を無上の光榮幸福として居るもの、人口減少、人種滅亡の心配等は眞に杞憂である。餘り御心配なさるとおつむりが禿げます、お年を召した方のお禿げになつたのはあながちお立派でないとは申さないが、お若い方のつるりとなられたのはお氣の毒な程かんばしくないものだ。

◎丸髷と云へば今の婦人は丸髷を二となきマダムの寶冠と心得てるらしい。處女時代より丸髷〳〵と崇拜し妻となるを待ち兼ねる樣に之を頂く、重いも、苦しいも、戀慕の情骨髓迄沁み込んでる良き人に「似合ふね」とほゝゑまるれば忘れると云ふ、思へば女は罪のない者である。丸髷は眞によい髮、文明かゞやく今の世に全盛を極めて居るのは當然である。

◎男はよく女の心持程わからぬものはないと云ふ樣だ私は男の心持こそ解し難い者ではなからうかと思ふ。何故と云ふと女に結婚を厭ふ傾向があるとて慨嘆なすつてる君があると思ふと、二十以上の女に處女がない等と云ふ滅法な判斷をする本能兒もあるではないか、わからないは豈ひとり女の心のみではあるまい、はたち以上の女に處女がないとは何んと云ふ馬鹿らしい話であらうぞ、思ふに女は男の想像する程色情に富むものではなからうと信ずる、老いて益々盛也などとうたはれつゝ妾や藝者とうかれ舞ふてる老紳士や、婆を欲しいとねくだらすつて倅や孫を苦しめると云ふやもめ爺さんの事はまゝ聞くけれど、男狂ひしたり爺さんを欲しいと云ふたりすると云ふ赤い信女の事等は男にくらぶればまあ聞いた事がないと云ふてもよい位だ。小數の淫奔女を標準として女全體を猫犬的に看做して頂くまい、尤もかゝる君は女を侮辱してかく仰有るのかも知れないが、却つて御自分の下劣なる人格をさらけ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

出した者ではあるまいか。
◎令閨とは他人の妻の敬稱だ相だが感心の出來ない敬稱である、一體人妻を閨とは何事、人妻だとて閨に許り引つ込んでるわけではあるまい。
◎私は年少の時より新聞雜誌程すきなものはなかつた爾來十年、一日の如く其の熱情は變らない、否永久にさめないであらう。新聞雜誌は眞に我が唯一の友、唯一の慰藉、骨肉の次である。
◎新聞や雜誌にも各々特質がある、報知は交際家、朝日は學者、讀賣は文人、國民は粹士に適しはしないかと思はれる。
◎本誌は瞑想的、女學世界は光明的、婦人世界は實際的ではなからうか。
◎婦人世界は婦人雜誌中の大關である、本誌は關脇である。婦人世界には法性寺入道前の關白太政大臣と云ふのを足曳の山鳥の尾のしだり尾の長々しとはさても愚なり、これに疋に疋をかけた一息にはとても讀み得ない位な無暗に長たらしい題がよく見える。餘り長いのも感心されたものではない。
◎『くま犬』を拜見して隨分思ひ切つた手紙をかく方や泉氏を御存じない君があるのに少なからず驚いた。
◎女が他人に妊娠を語る手紙に、見るものを見ぬ樣になり等と云ふのを往々見たが他に適當な言葉がないだらうか甚だ下卑て居る。（入賞）

此の君の論文は面白さうに書いてあるだけ徳だ。（評）

◎運　動

牛込　さみだれ

隅田川には整調の聲勇ましい大學のボートレース、早稻田と三田のグラウンドにはパチングの響を聞かない日は無い位、其他柔道に、擊劍に全國至る處に中學では銃を肩にした生徒の雄々しい發火演習の練習振を見る、現代に於いて婦人の運動は社會に存在を認められるでありませうか。私は遺憾ながら婦人の運動が世の中から認識されて居ると云ふ事は現在の狀態では何んだか口幅たくて申されません。井口先生の瑞典式とやらの體操も一部の女學校に於ては採用せられて居ないではありませんけれども、婦人の體質及心神を健全に發達せしむるに完全無缺と云ふ程の運動方法でありませうか、疑問でございます。ダンスの軟化した樣な體操を以て日本唯一の運動方法として居る現代の婦人は、誠に歎かはしい次第ではありませんか、外國の婦人と比較して、體質や其動作に於て日本の婦人は一段劣るのも無理ならぬ事と思ひます。今後男子が海外に出て活動をする必要が有るなれば、婦人に於いても矢張海外に出る覺悟がなければならぬと思ひます。鎖國の時代ならいざしらず國の內外に出て自由に活動の出來る現今では、學識及交際術の必要な事は勿論ですけれども、亦體質の完備を備へる必要も大いにあるだらうと思ひます、私は婦人に銃やパチングを持てとは申しませんが、今一步進んで或る程度まで織に運動を奬勵せしめたいと思ひます。他人の手に縋り漸く步く樣な婦人は、一寸用たしに出るにも車夫の手を煩す樣な婦人は、果して健全な婦人と云ふ事が出來ませうか、私は思ひます虛弱な婦人を有する國は、遂に其國を危ふくし、健全な婦人を有する國は軈て其國を進步發達せしむるものではありますまい歟、私は斯う云ふ見地からして現代の婦人に織に運動を勵行せしめたいのです。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大波小波

☆

小林たか子

▲私は夏目先生の作品は皆大好きである、あつさりと浮世ばなれのした空氣が其全體に立てこめて居て、一種の靈氣をすかして下界を見る樣な感がする、私は幾度となく讀み返しては一人でよろこんで居るが、其中でも『草枕』が一番好きだ。

家の人等が皆遊びに行つて一人で留守をして居る時なんかは、私はきつと草枕を讀む。

――『草枕』は、春の日中に、のんきに留守居をしながら、春の日をあびて、春の風になぶられて、うと〳〵と讀むのに最も適當に作られた讀物である。

思ひ切つた、刺激を望むかと思へば、仙人になりたがつたり、隨分忙がしいものだと、我ながら感心する。

然し、ほんとにさう思ふんだから如何しようもない。

煙に乘つて見たがつたり、硏ぎすました短劔の切先で輕業をやつて見たがつたり、露ばかりで生きたいと願ふかと思へば、息づまる樣な血の香に飽きたいと願ふ、動とも、靜とも、迷ひとも、悟りとも片付かぬ。

かうして終には如何なつて行く我が心だらう

☆

岡山　中西りか子

▲餘り生活のいゝ方ぢやないけれど、いつも小綺麗におしまひしてくるお針友達があるんです隨分手も口もたつ方で、所謂口八丁手八丁で、ふしだらな屆してくる人達の惡口もよく出る方なんです。私は或日曜にきく事があるので訪ねた事がありました、そして出てきた友の樣子を見て私はほん〳〵に〳〵驚かされました。

いつもきれいなローマが形もわからぬ位めちやくちやにこんがらかつて、二三年も水につけないやうなてか〳〵に光る外張を引掛けて、平生は不遠慮に姉妹のやうに口利く人がまるで階級のちがつたもののやうにかしこまつて――私はほんとにはかなくて涙ぐまれたのでした。

私はそれからはせい〴〵外出と家に居る時との身仕舞に、あまりな懸隔を生ぜぬやうに心掛けて居ますの。

それと共に表裏のない人になりたいとばかり思つて居ますの。

▲宅にくると非常に快活で、人好きのする方なのが參上りますと『や』とばかり蟲喰つたやうな顏する男が居るのです、俗に内すぼみの外びらきつていひます。

私はそんな男の頰べたをそつと叩きつけてたげたい位憎らしくなります。それがためにすべての男子に對する私の心は極めて冷やかです。

☆

林口　和歌子

▲私の友に、五年前からの女子文壇の愛讀者がある。私が本誌を讀み始めたのも、その友に借りて讀んでからである。それからあまり長くもないし度々缺かした爲めに、ずつと前の事は知らないが、頭に殘つて居る文壇の印象は少なくない。始めて讀み出した頃は、小說欄の重鎭たる田中久子と言ふ人の訃音が誌上に傳はつた時であつた。同君の「一人限り」は今も記憶に存して居る。詩欄には太田喜志子の君の得意時代だつた。お伽噺や笑話欄もあつて、私は、こんなやさしいお伽噺位作れないか知らと思つて見たりした。詩や散文詩も意味が分らぬなりに、よく暗誦した、やう〳〵本誌に親しくなり出した頃菊地柳子樣、長曾我部菊子樣の心臟の血を絞つて書かれたかと、思はれる樣な抒情文に醉はされた。菊子樣の眞摯なそして熱血ほとばしるが如き文は一等好きだつた。夜雨先生だつたか「釣鐘」と言ふ樣な題で投書を拔書されて評をされたのも面白く拜見した。併し先生方のお口の惡いに少々い惱た事もある。原田琴子樣、本郷の千代子樣よくホームを語らるゝ方だつたと記憶する。增刊「新作家」で御寫眞を拜見した朝井千とせの君、細谷鏡子の君、月鏡子の君、三ケ島よし子君などお姿も文章も忘れられない。是等の方と前後して、西戸政江樣、荒川ます子樣等があつた。書簡文や短文、論文などが、散文欄へ加はる事になつてからは、まだ間もない。文壇には、まだ親しみの淺い私の記憶に殘つて居る人で、今杳として消息の絕えた君も少なくない。否現に小說に詩に散文に麗筆を揮ひ給ふ君達は大方新しく現れた人達である。前島儷梨子樣の如き百瀨美水樣、望月れい子樣の如き――。今後また文壇の內容も幾多の誌友も如何に變化しつゝ行く事だらう。否それよりも、古い〳〵ずつと前にはどんな人が活動しつゝ來たのでせう？。私は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

それが聞き度い。

☆

青森　長尾清子

▲何かの雜誌で見た通り、此頃の婦人の風俗の狀態と言ふてよいか、趣味の傾向と言ふてよいか知らないか、甚だ如何はしいと思ふ。

　なぜなれば何れの婦人雜誌を見ても、これは女優か藝妓の口繪だなあと思ふと、もつての外の間違ひ、××夫人××令孃と、堂々たる肩書のある令夫人御令孃であるのには、一見餘喫せざるを得ないのである。我が國の戰勝は大いに婦女子等の預かつて力のあるところだと思ふ。其婦女子等が戰後未だ幾年も經ないのに早や、榮華の夢に心醉し、其極として彼等上流の御婦人方からして、媚を賣る最も野卑な藝人等のする服裝や姿樣子を眞似好むとは、其下にたつ婦女子等は今更言はずもがなだ、實に慨歎に堪へざる次第である。

☆

安房　吉田秋子

▲批評と云ふものが、至つて六ケ敷い仕事であることは、今更私がこゝに申すまでもありません、時として他に對する批評が、暗に自己の短見淺慮や、幼稚なる思想や、淺薄なる趣味までもさらけ出して、自ら嗤笑を世間より招くやうな事もあります。殊に自己より大なるものゝ批評は、至難中の至難であります。

　例へば批評は、弓場に立つて的を射るやうなもので如何に其技に長ずる老練の士であつてもやはり誠心誠意と、細心なる注意とを怠つては、到底的確を得ることは出來ません。よし出來た處がそれは僥倖か、さも無くば妙技すでに神に入つたものであります。況して初心者流に於いては、尚更のことであります。

　今の世、文藝批評家と云ふものゝ多くは、何主義、何々派に屬してゐる作家であります。卽ち作家にして批評家を兼ねたもので、常に自己の主義を主張し、自己の流派を布衍せんとする考よりして、其一方の城壘に依つて、他の主義者を惡罵し痛論するが故に、其議論はいつも偏狹におちゐり、其批評は何れも的確を失つて居ます。げに愼むべきは、色眼鏡的の觀察であつて厭ふべきは不的確の批評ではありませんか。

　モット私達の思索をして、理想のさかひに導き、趣味をして高からしめんとするには、どうしても社會の上に、はた又文藝作家の上に、巍然として頭角をあらはしたる、崇拜するに足る眞の批評家がなければなりません。それにしても思ひ出づるは有名なる文明批評家であつた、高山樗牛博士であります。博士逝いてこゝに十年今やわが藝術の國は混沌として、私達後進の辿るべき道は、暗澹たるさまであります。

☆

多都子

▲四月の婦人世界に、山脇房子女史が「嫉妬の女癖を、男癖にあらためたい」といふ適切な御論を讀んで、自分の惡所を皆、女になすりつけてる男のふるまひを私は犇々と胸に感じました一つは昔の或る程度の女を標準とした、女卑的の行爲や言葉が基をなしてるのでせうけれど、それ程度し難く、養ひ難い女から育てられた男がどこがゑらいとなまいきか知れませんが申したくなります。酉の市の熊手に、お供でもしさうな御面相の私でさへ、不思議に男に虐待される性と生れついて來たらしいのです。近い例を擧げると宅の近所は廣いあき地に長屋があまた新築されつゝあります。一定の刻限にお稽古に出かけますと、顔を泥まみれにした左官も、鎚もつた大工も、瓦をはこぶ土方も、一度にトキの聲を揚げてあらゆる暴言をあびせます、それに人は私でも惡いとをしたかのごとくジロ〳〵と笑つて見てます。また少し行くと、某工場の職工等が煙突から、つき出したやうな顔をして通りすぎるまでそれは醜態を演じて見せます。あまた今朝もかと思ふと、ゾッとしてやめようと幾度思つたでせう。お芝居へいつても、貴女共でもなければ、ツー女は他人の妨害は致しません。いけすかないと思ふ女でも、眼引き袖引くくらゐが關の山です、それに引きかへ白い顔でもした、若い女が側にあつた時の、男の態度はどうでせう?、月のくらき夜一種のハチウ類に成り下る「錢取ルマン」は未だしも、堂々たる美髯に紋の付いたお羽織を召した紳士方が大聲で談笑し、俳優を冷笑し、人の火鉢から火をつけて、フーフーと女の顔に吹きつける人一倍煙草のきらひな私など、グラ〳〵と眼がまはつてきます。みかんの皮や南きん豆の皮を放ふる、スマシだとか、ヘナ子だとか、ジロ〳〵見る。これがひるまは堂々肩をふつて、大道を濶歩する官吏だから、口がふさがらぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

各地誌友評論（九）

一記者

▲信濃（中）

◎嚴正なる藝術の立脚地から見て、前島優梨子の態度は立派なものである。彼女の藝術に對する執着心の深いことは、『女子文壇』誌上稀に見る處で、近時頭角を現はし來れる小笠原貞子等二三の人達と共に若き作家中の異數である。

◎優梨子は善光寺の名と共に其名を知られた信州長野に生れ、嘗て東京に學んだこともなければ、大家に就いて小説を稽古したものでもない、早くより『少女世界』などに投書して優勝の譽は得た事もあつたが、要するに獨立したる一個の天才である。

◎彼女の作には著しい個性の閃きを認めないけれど、淺いながらも毎も間違ひのない處をねらつてゐる、誰が讀んでも成程と點頭かせる丈の用意を持つてゐる。

◎彼女は、若き女性相應の洞察力と、理解力と、同情とを人世の上に持つてゐる、それが彼女の藝術として表はれて來るので、松田姉妹其他の或る人達のやうに時代思想の影響を受けてゐると云ふやうな處も少い、極めて自然に、極めて普通に、人間の生を味はふ力を具へて居るので、それが表現される場合にも、女性と云ふなつかしさと、弱さと、優しさを帶びてゐる。影日向の眼立たない毎も同じ光線の下になるといふやうな態度が、女性らしさを思はせる。

◎隨つて彼女の作には刺戟がない、感動が薄い、けれども彼女が大成した曉には、其方が好いので、小さく狹く且弱く結晶して了へばそれまでだが、今一度彼女の持つてゐる型を溶解して了つて、更に大きな型、新しい型を作るならば、彼女の前途は有望と云はざるを得ない。

◎優梨子は本誌にも早くより顔を出して居たが、今遡つて其作を見るに、尤も盛んに作つたのは、昨年より本年にかけてのことで、つまり水野葉舟氏の選抜になつてからだ、風葉氏の見てゐた時、即ち明治四十二年には十一月號に美代子といふ作が入賞してゐる、外に入賞したものはない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

◎四十三年(第六年)四十四年(第七年)にはなか〳〵多くの作がある。

▲繼母。▲Kさん。▲寂しき家。▲轉宿。▲不平。▲お祖父さん。▲母と嫂。(以上第六年)

▲お稽古歸り。▲嫂。▲母。▲祖母。▲暖簾縫。▲本郷の兄。▲クラス會にて。▲結納。▲不安。▲復讐。(以上第七年)

▲お浚ひ。▲道代。▲犀川。▲お濱。(以上第八年)

◎これだけ紙上に出ると云ふことは、餘程の努力であらねばならぬ、而かも一作毎に進境を示してゐる、必ずしも一作毎に飛躍はしてゐないが、着々と地盤をかためて行く痕は見える。

◎初めの間は多く家庭の間に題材を取つたものだが、此頃では藝妓、師匠などの解放された或る種類の女を描寫するやうになつた。其手際は決して侮ることは出來ない、つまり優梨子は何んな題材を持つてきても相應に書き表はす技倆を持つて居る、之れ小器用で書いてゐるものとは違つた處であらう。

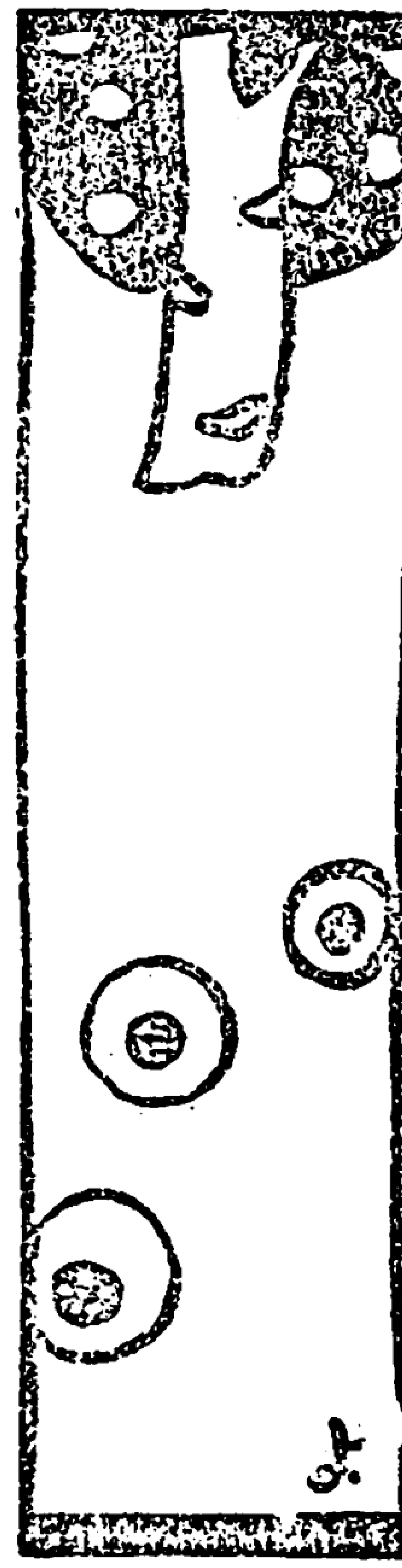
◎優梨子は女としては圓滿な好い感情を持つてゐる女であらう、作を透してみたる彼女の感情は、圓滿玲瓏盤上に盛つた露のやうなものだ。

◎優梨子のやうな人が都會に出て一磨き磨きをかけたら、藝術の方で更に勝れた結果があつたに違ひない。併し一方を顧みると然うするには餘程の犧牲を拂はなければならぬ、彼女が其英斷に出なかつた處に、彼女自らの性格を語つてゐる。

◎吾人は今までの優梨子に對しても、相當の尊敬を拂つてゐる、今後も亦爾くありたい、必ずしも東京に出なくとも、必ずしも獨身でなくとも、彼女自らの信ずる處をさへ枉げなかつたら、小さいながらも空の一方に輝く星の光は永く消えないであらう。

◎長野市からは今一人樋口優香子の名を以て、小說を投ずる人がある、最近に於て四五篇の作はあつたやうだが、まだたしかな技倆を認めるまでには到らない、普通には出來るが、一歩他に擢んづる處がない、更に奮勵を要するわけだ。

◎創作家としては實に優梨子が信濃を代表してゐる、終始一貫して其態度を改めない處も甚だ賴母しい、單に信濃の代表であるばかりでなく、本誌の上に於ても廣い意味の青年文壇の上でも、女性として之だけの力量を持つてゐる者は然う澤山はあるまい。



俳句

内藤鳴雪選

○（天賞）

兼好の心となりし落花かな　伯耆　田村美子

○（地賞）

氷室啓く日のほろ雨や夏寒し　横濱　山崎君子

○（人賞）

帝長に留む一詩や雲の峰　神戸　山村香枝

佳作

大原は我のみに春暮れにけり　上毛　阿久津しげ子

人病むや御苑の藤を散りはてゝ　京都　ほづ枝

わが戀は冷たき石の苔の花　宮城縣　齋藤萩香

君ならで誰か知りけむ月見草　久留米　兒島ひろか

月なくも都忘れなほとゝぎす　千葉縣　鈴木べん

湖に漂ふ聲やほとゝぎす　宮城縣　小林みさを

船頭や帽子冠りて汐干舟　佐賀　花の雫

花賣りて米買ふ人の羨まし　秋田縣　小島健子

シグナルにまなこかゞやく詩人かな　紀伊　宇田菅

或る君と別るゝ春戸や百合の花　大阪市　池谷紫草

花散るや一村の家皆白し　信濃　北窓女史

雨あがり蜥蜴の脊に夏ひかる　大阪　村田撥子

みまほしき琴の主や青すだれ　小石川　渥美滿壽子

三日月のなごりをしさや櫻花　那須　蒔井紫水子

肩揚のとれてはづかし暮の春　神田　近藤淑子

白百合や水音遠き暮の山　大阪　坂口はつ子

桐一葉人と語らふ中に飛ぶ　福井　明の星

涼みつゝ瀧に飯食ふ木樵かな　宮城縣　齋藤靜子

鴫啼くや門田は雨のうす月夜　淡路　清水夕月子

朝風の裳裾もかろし初袷　芝　仁八　八千代子

有明の月水にありほとゝぎす　下關市　西村白蝶

一つ家の軒の椿に夕日かな　信濃　保科伊津子

御先祖の鎧の汗や土用干　牛込　畑中小子

我が庭によく來る蜂や藤の花　逸名

春風をしなよくうけて藤の花　茨城縣　菫子

夕貌の下に鮓おす祭かな　京都市　くれなゐ

蚤まけや戀にねられぬ夜でもなく　群馬縣　福田嘉江

雨やんで月影青き木立哉　出雲　コスモス

もつれ合ふ蝶よ菜種の風の上　山形縣　伊藤智惠子

選集の沙汰まつ宵や五月雨　奈良縣　東本さゆり

青柳や砂に小鳥の足の跡　德島縣　平岡清子

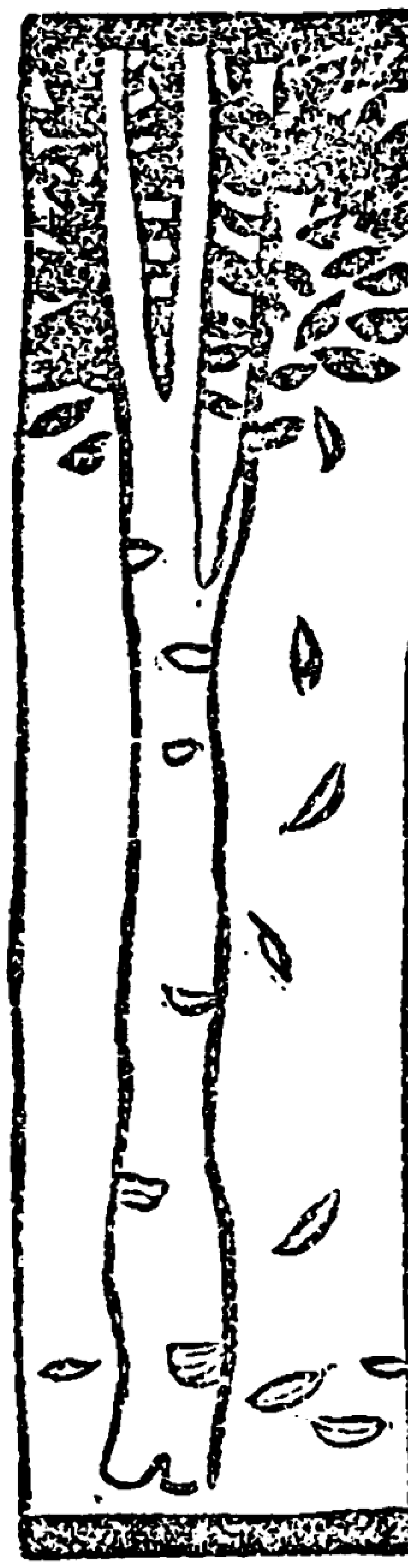
村百戸やすけき夜なりなく蛙　長野縣　小林美江子

新緑に雨をふらする玩具かな　信濃　美喜代子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

起て捲く青きすだれや虹見ゆる　信州　山越三千代子
木ゝかげに金魚うる人ねむりけり　前橋　みづ枝
鉢植の梅も櫻も若葉かな　神戸市　伊藤光子
大殿は扃れて薫風吹きにけり　下澁谷　小原あい子
ほとゝぎす啼いてうつろふ青葉かな　岡山市　桂木淑子
月出て草間に濡るゝ農具哉　小林政子
花あやめ米磨ぐ水も流れ來る　京都府　竹村槙子
卯の花や蝶々見たり朝の月　美作　橋本紫
木曾川の筏かげろふ日は高し　京橋　夢の夢
吾戀の名殘なりけり藤の花　王子町　露香
掬ふ手のしづく涼しや岩清水　東京府　野口春海
涼臺に妻と夫の蚊遣哉　奈良縣　ちか子
生籬の物の影あり蚊火の宿　奈良縣　上田都花
花相撲丘もつゝじの盛りかな　山口縣　花の宴
半島の若葉に白帆見え初めぬ　横須賀　美袖女
殘る雨の恐ろしき夜や時鳥　横濱市　三橋美都子
行春を閾引いて見る女かな　山口縣　島中花子
千金の家や一座の涼み臺　阿波　山ざくら
すまの浦に妓三千の納涼哉　山口縣　梛夏美那子
打ち水に風起りけり夏の庭　備中　千登世
五月雨や皷しめりし祇園町　廣島　幽蘭
春の川吾が姿見てほゝ笑みぬ　高知　千枝子
沖遠く和歌の浦ゆく初夏の帆や　伊賀　中村こま子
常盤津の師匠の傘やつばくらめ　大阪市　河盛よしの
垣のばら咲いてなつかし里の家　加賀　村田糸子

夏ぎくのやせし思ひも歸省哉　伊豫　長井薫子
袷縫ふ心に人の夏近し　下野　高村たき子
蝙蝠や十戸の村の黄昏を　芝區　前田豐子
花火見る端居も暫し病後かな　府下　浮島冬子
尼寺や灯細くさみだるゝ　安房　吉田秋子
山の壁雲湧く峰やほとゝぎす　大阪市　小泉貞子
春は逝く春は逝く夜の蛙哉　千住　白妙子
青柳の一枝動く水の面　みどり
川近き旅籠に聞くや時鳥　京都　村田ひで子
病いえて初夏空の安らけき　周防　重原美女子
圍碁に耽ける人の小窓や今年竹　大阪　寺井しぐれ
炎天や此學校にまゆ干して　越後　芹田紫紅子
水車場へ通ふ小路の螢かな　長野縣　細田草路
夕暗や螢數ふる椽の先　神戸　綠髮子
風薫る黑髮に美人の朝化粧　福岡市　好岡薫子
病む孔雀いたわりにけり小春人　岩代　一の花
淨瑠璃を聞く短夜の更けにけり　近江　白蓮
牛の泣く夕べを野らに螢狩り　羽前　長澤美也子
行く春を惜みし人も衣更　久留米　筑江
潮浴みに舞阪宿の人集ひ　大阪　田野しか子
よき墨の香に春惜む机哉　水戸　久子
行春や戀に痩せたる美少年　名古屋　井東こう
棕櫚の花盆栽の棚にこぼれけり　茨城　田村はつ子
涼しさや瀧の音する澤の奥　群馬縣　新井つま子
書筆とる兄の机に蚊遣りかな　京都　壽賀子



初作

編輯局選

○毎日のつとめ

米國紐育　きん

私のはたらいて居る店は紐育の極下町で、日本雜貨を開いてをりますの、店はあまり廣くはありませんけれど、なか〱美しくかざつてあります、店の一ト隅がアートルームになつて、屛風やら可愛らしい七寶のベースや、イスなぞが置いてあります。其のつきあたりがオフィスで、私は其の内で毎日の帳面をつけてをります、時には小僧と――、又多忙な時にはパツキング掛りにもなります。

私が兄と共に渡米しましたのは、もう五年の昔になります、此の家は私共の遠い縁者でして、兄は私を此の家へ置くとすぐ、市俄古のノースウエスタン大學へ入學しました、此の家へ來ました當座は大兄から毎月送つて呉れるお小使で充分でしたが、日に増し不自由勝になつて市俄古へねだつてやる時分には、私も此の店の用事がやう〱出來るやうになつて、充分なお小使を頂くやうになりました。

昨年の春いよ〱兄は卒業をしまして、只今は一緒に働いてをります其の外に松井さんと云ふ一昨年實業練習生で、政府から送られた人と、五十以上のパパと仇名のある前原さんと、芳野さんと云つて、國で道樂をしつくした人と、白人のヅライバーの六人です。主人公は時々店を見まはつて、ショーケースの上を、指で棒を引いてみて少しでもホコリがあると、「きたないよ」と云ふだけ。

あとは皆六人で朝から晩まで、氣樂な事を云ひ合つて、殊に芳野さんなんか、荷造りしながら金槌を傘のかはりにかざして「我がもの」を舞つたりします。誠に毎日面白く仲よくクリ〱立ちはたらひてをります。

(天賞)

ニューヨークから來た原稿だといふことが既に面白いのに、記事もわれわれには珍しく、何の苦もなくすら〱と書いてあるから、一層おもしろい。(評)

○お寺の空地

京都　うら野

お花ちやん何をする、行燈の影でな可愛男の帯くける、アラドン〱ドンコラドン〱ドン、うしろの正面どなた」廣い東願寺の境内で十計りの女の兒や男の兒が泥つて遊んで居ます、花ちやんと云ふ兒は七つ計りで、白い前垂れをして小さく折つた手拭を帯の間へ丁寧にはさんで居ます。

花ちやんは眞中にチヨチヨクバツて白い前垂れを顔にあてゝ澄乎して居ます、憎い程黑い房々した髪が白い前垂に振りかゝてフツクリとした頰が、可愛く食ひつきたい樣な氣をさせます、そのまはりを七人程の兒が楓の樣な手をつないで、唄つてまはつて居ます。唄が終ると花ちやんの返事を待つて居ます。

暫く考へて

「おとよちやん」と云ふと、皆が聲を揃へて、

「インエ〱一丁わきへ飛んでるわ」と云つてまはる、花ちやんは、

「惡ちやん」と云ふと、さゝれた、惡ちやんと云ふ男の兒は花ちやんの樣に中に這入ると皆が聲を揃へて、

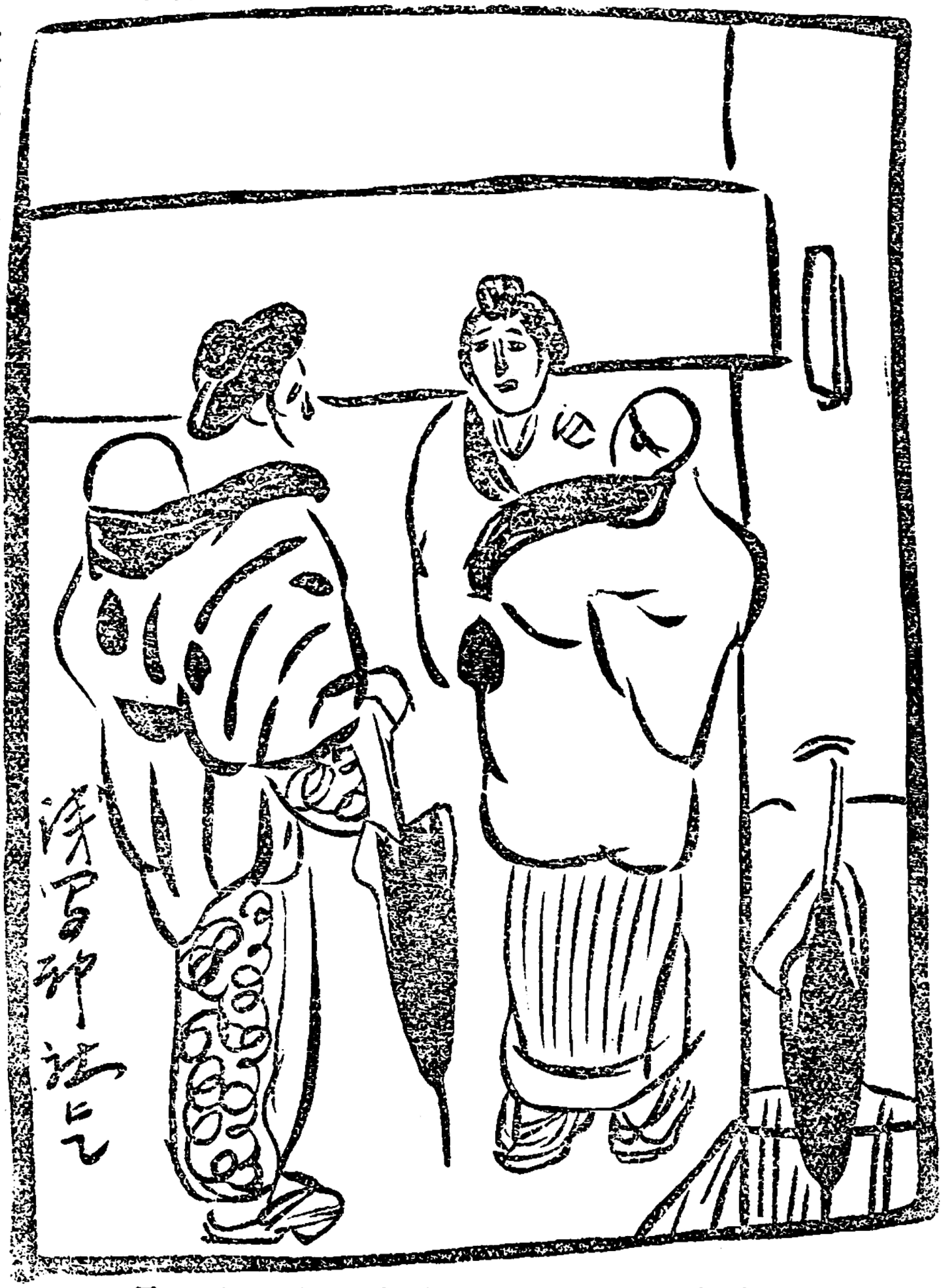
「惡ちやん何をする」と又唄ひ出しました。

高いく御影堂の屋根から吹いて來る初夏の風は、たあいなく遊んで居る兒を吹き渉つて行きます、銀杏の恐ろしく繁つた若葉の下には、鳩が遊んで居ます、

そこには乳母車が二つ並んであつてその下影に下女が三つ計りの兒を抱いて、二人話しながら鳩に豆をやつて居ます、鳩は澤山折りかさなつて集つて居ます、抱かれて居る兒は二人乍ら、面白さうに見下して豆をこぼすやうに、まいて居ました。下女二人は何かヒソヒソ話して居ます。

暫らくすると下女は二人共聲をそろへて、「鳩ぽつぽく、ぽつぽく」と唄つて兒を上手に守りして居ました。

お朝のおつとめが濟んだ鐘がガンガンと鳴り出すと、本堂からドヤくと人が出て來たので鳩がハットー時に騒いで逃げました。向ふに唄ふて遊んで居た兒も一處にかたまつて何かして居ると、總て人達が靜まると又元のやうに唄ふて遊び出しました二人の下女も又鳩を集めて「ぽつぽく」と唄ひ出しました。



たちばなし　靜岡市　高畠しげ子

空は美しく晴れて、こゝ三四日はお天氣が續くとお茶所で休んで居る人が話し合つて居ます。（地賞）

如何にも京都らしい心持が表はれてゐる。（評）

○郵便局の一時間

信濃　月見草

局待の電報發信してから三十分、私は汚れた待合室の片隅のベンチに返信の來るのを待つて居るのです。

爲替貯金と書いた下に當務者×××といふ小い札をかけて、五分刈頭のぽつてりとした中年の人、笑ひ止の顔でもしてあると見えて苦りきつては居るが引切

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なしの公衆に對して其取扱の上手なこと、年の功とでもいふのであらうか眼鏡かけた人、汽車路あけたハイカラさん、肩揚澤山の子供、窓口に鐵筆走らす人、ポン〱と急がしげな日附印の音、東京、大阪——名古屋——名古屋……郵便區分するのであらう、三錢切手五枚ですか？ハイ十五錢、五百三十匁の普通料が十六錢、是は廂髪の若い人、願ひましては三十四圓ト五十八錢也——次に二十九圓〇三錢、太い聲、三等とはいへ二千戸の町の局とて中々の繁盛、夜となく晝となく務に忠實なは郵便局員と聞いて居たが、今目前に此活動の樣を見てはなる程と感じないでは居られない、チリ〱ンと電鈴の音にハッとして立てば黑い事務服を着た青い顏の人が手に四角な小い紙をもって「貴女ですか、林さんとは」「ハ、私です有難う」日附印の音の亂れを後に外へ出た時、白地に〒の赤文字、旗立てた車を引いて勢よく局舍の横門から停車場さして郵便夫が走つた。(入賞)

餘りむだなことを書かずに能く其有樣が書けてゐる。(評)

○心つてどんなもの

兵庫縣　大槻富香

心つてどんな物なのでせう、何所に居るのでせう、世界中で何が分らないと云つても、心ほど分らないものはない。しかし分らない樣で、又よく分る樣で……一體何と不可思議な物なのでせう、誰がこんなものを心なんて云つたのでせう、誰が心なんて拵へたのでせう。

その心が皆違ふなんてこんな不公平な事を誰がしたのでせう、何だか神樣とか云ふ偉いものがあつて、こんな分らない心を拵へたのだといふ人があるが、分らないものが分らないものを作る、何てまあ分らないのでせう、心といふものは一生中に一度位は出て散歩でもしたらよからうに、せめては一度だけでもどんなものか見たい、心のお宿の體が死んでも、心は死なゝいとかいふ事を聞いたが、そしたら心はお宿無しでそこらにぶらついて居る筈だ。

そうして見るとその心つてものはどんな聲をするものだらう、太い音や、細い音や、きれいな音や、汚い音を出すのはこの心。又この心はどんな事をするのでせう、惡い事や善い事や平凡な事、皆この心。心は病氣になる事はないでせうか。あります。狂人や、神經衰弱といふものは皆この心の病氣です、どうも心は妙なものですね。

斯ういふ幼稚はおもしろい。(評)

○兩國から四ッ目まで

濱町　白い花

五月初めの、曇つた日の午後、何となくむし暑い袷の裾の快い日である。四ッ目の牡丹を見にと兩國から船に乘つた。船は小さい蒸汽船で乘つてる人も、私等二人と外に一人の男きりである、船の人が「出ますよう牡丹行は出ますようと」、長く引くと、カチカチ音をさせて乘場を離れた、河から吹いてくる涼しい風がベールをなぶる。

船は一週して河を横ぎつて行く、濱町川岸はだん〱と遠くなつて新大橋もあらかた出來上つたのがよく見える。井生村樓の所は病院と變つて、白衣の人が青色の窓から見て居る、竪川へ入ると一ッ目の橋を直にくゞると、兩方の岸には種々の荷を積んだ船が居て悠々と竿をおして居た。昨夜雨が降つた故か、水がきたない事、其水でお茶碗を洗つて居る人もある。電車の通る二之橋で二人男が乘つた、一人は袂から煙草を出して吸ひ初める。

竹屋の竿が幾束も立かけてあつて高い先の方は雲低い空につかへさうになつて居る。

龜井戸へ行く早船を追越してからは三之橋が見えてゐるやうで中々おそく「三之橋上りませんか」と窓から云つたまゝ船をやりすごしてしまつた。

「兄樣、牡丹には未だ中々なの？もう」、「直ぐだよ」。

「嫌になつてしまふわ。もう私」。「おきみ船で寢る者もあるぢやないか」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と「それはまたわけがちがふわね」と……。

いつのまにか橋をこして「四ッ目ですよ」と皆上つてしまふ。細い道を出ると牡丹の前、入口の藤が盛りだ事。

葭簀張の天井は低く如何にも陰氣な中に白い大輪の牡丹の花が目に立つて美しい兄様のお金拂ふ間待つて居る「お前初めてかへ此所がそうだよ」と私は「えゝ」と云つて敷石の上をかるく、後にそつて入つた。

これと云ふこともない。(評)

○歸り道

若葉子

美しい幕が音もなくすつと下りると、今まで二階にも下にも一ぱひになつてた人が皆追いたてられる樣にぞろぞろ出てゆく、コートを着ながらもいつまでも去るのが惜しい樣な氣がするので、じつと舞臺を見つめて居る、ふと氣がついてあたりを見まはすとゝう大方の人が出てしまつて、舞臺にも防火幕が下りてた、出のこつた人たちのあとについて、後からおされる程の事もなく、正面の玄關に出る。今日は根津の家で御厄介になる事になつてるので、其處でお叔父樣たちを御待ちする、ほどなく、お叔父樣千代子さんも見えられたので、お叔父樣から順に車に乘る外はいつか雨になつてるのだつた、車で勢よくお堀ばたを走る、折々柳の絲が車の幌をなぶる、とだえては又さやさやとなつかしい音を立てる、霧風なのでなかなかつめたい。根津まではづゞぶんこたえる、それに何うやら自分の車が一番前になつたらしいので雨はとさ



廣島にて　山口縣　花子

ちつらくあたる、身をちゞめて膝かけにくるまる、それでもまだ袖の處にひやつこい風がすつと入いつて、ぞつとする程寒い。ふと思ひついて、着物の廣袖の止め絲をとく、そしてハイ、カラーの樣にずつと立てる、あゝこれで少しはいゝと思ふと何だかねむい樣な心地になつて來る。うとくしながら思ひはいつか、はなやかな舞臺の上に!、生じめかつらに落ちついた色の着付けの武者姿―思ひは又あとを追ふて「十六年はゆめだ――」うれひのあるそしてりんとした聲が耳を去らない、雨は又一しきり強くザァッツーと音をたゝて幌をかすめる。

帝劇の歸り道にしては感想がハイカラらしくない。(評)

○讀み初め

澁谷の里　夢路の花

「光樣、あなたそう思はなくつて」「何のこと」「あのね、私此頃少女雜誌ばかり讀んでるのが子供らしく思はれるの!自分で自分のことが……」かう言つてみさを樣は長いまつげをふせて、恥かしさうにうつむかれました「あなたも?私もそう思ふことがあつてよ、かうして人はだんく大人になるんでせうか、つまらないわねえ」こんなことを話しながら、夕日のかげあざやかな青葉の庭をさまよひました。それから三日經つた後、みさを樣は袂の中に何かひそめて、裏庭に私をつれて行かれましたその時二人は深緑のかげに、言ひあはした樣に立ちました「何なの、みさを樣?」「これ」袂から出したのは一冊の本、紅の文字に女子文壇。「まあ」二人は顏見あはせてニツコリ、髮と髮をずれくにして、罪を犯す樣に、一枚、一枚、はぐりました。かうして私は愛讀者になりました。

そんなに遠慮することもないやうですが。(評)

○或る夜

水戸市　川崎春子

賑かな湯殿から、ポーとしたよい氣持で出て來ると食堂の上には、夢のやうな幽かな月がかゝつてゐた。

空合から月の光までが、恰度、活動寫眞で見るやうな色合である。

手拭さげたまゝ、そつと竹の寮の裏庭へ出た。夜の空氣は冷やかに、湯あがりのホテル頰に觸れて、何とも云へぬよい心地であつた。

舍監室の前から上つて、廊下をスリツパーの音輕くすつて、自修室へ這入ると、室員は一同中央のテーブルを圍んで、盛にリンゴをむいてゐた。

S子が、「姉さま、もう初めたのよ、あんまり遲いのですもの……」といふ。

K子が「さあ、どうぞ……」と席を開いてくれた。

私は坐りながら「一寸そとを歩いてゐたので失禮いたしました。何だか寒くなつて了つてよ」。かう云ふと、旁からS子が「姉さまは、此頃大層竹の寮の裏庭が、お好きになつたのね。夜でも菅谷の下宿の一本杉が見えまして?」と快活にいふ。

私は「またそんな……」と叱るやうに言ふと、S子は女同志でさへ惚れくするやうな表情で、「あら、怒つちやいや、私、これでも同情家なのよ……」。

室員一同どつと笑ふ。私も吹き出した。併し苦しいおかしみであつた。

J子が出すナイフを受け取つて、きれいなリンゴをむき初めた。手堪へのない柔らかさ……

一片、シャリく食べて見た。春の夜に頽れてゆく牡丹の花瓣を、五六枚重ねて、かみしめるやうな、淡い併もやるせない心地がした。

初々しくない。(評)

○思ひ出して

羽後　さぎ草

大きな青銅の阿彌陀樣が高く差上げた片手の中指と親指とで環を作つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て居た、ヒヨツと其指が離れたならば大變なく大水が出て、あの山影からほの見ゆる御寺の屋根も、後に見ゆる白狐山の丹塗りの鳥居も、皆水の下になるのだと誰やらが語つた恐しさに、目を瞑りながら一生懸命其前を馳けぬけた事もある。

　其所は分水嶺の山脈が重なり重なつてる北日本の寂れ行く小さな城あとのあるところ、御寺の裏道であつた。

　此の露佛の後には山に續いて七八枚の稲田がある、春五月雪の消えた頃、長い柄の赤い御椀で田螺を掬ふ人が田圃にたゝずむのが見えてた、小山は阿彌陀樣か



嫁と姑

山形縣　小池甲子

ら姥櫻を限りとして續いた、麓にはちよろ〳〵と水が流れる、夏は野薔薇の下をくゞり、冬は小笹の雪を落して何處までも〳〵流れて行く、左手の古い山門を眺めながら、露草や車前草を摘んだのは小さな私であつた、蛇苺の紅い中に草履ぬいで横に逃げ行く蟹追ふた事も覺えて居る苺とるとて刺さして小指洗ふた尺に足らぬ流れの彼方岸に小さな御堂があつた、赤いメレンスの涎掛してる眼直しの御地藏樣であつたさら〳〵と音たてる汀に白い一尺四方の布が彼方から此方へと懸つてる、如何かすると天幕形したのが二つも三つもあつて小さな柄杓

が添へてあつた、それで三度水をかけて水をかたばかり目につけて拜むものであつた、御寺參りの行き歸り御祖母樣に敎へられた通りかうはずるもの、何故だか知らなかつたが、屹度これを私位の少兒がなくなつた爲にと斷定したのは御向うの千代ちやんが死んだ折からである、布の四方の難かしい漢字を讀めなかつたとしか覺えて居らぬ。

今山の國を出でゝ五年通ふ枕の潮のねのあやしとも聞えざる今赤いおひしが下つてゐる御地藏樣を思ひ出す毎にあの小さな流の行衞を知りたくてたまらぬのである。

活氣はないが鄭重だ。(評)

○其夜の心

長崎　乙女星

「夜は何だか淋しい樣で都が戀しい樣な氣がする」と、いつかの夜Kさんは私に云つたが其時分の私はそんな氣はしなかつた。ある夕方私はKさんの事を思ひ出した、Kさんはなぜ夜は都が戀しいのだらうか？

こんな事を思ひつゝ私は窓に依つて窓外を眺めた、しづかに灰色に暮れて行く窓外の景色はブラ〳〵して居る私の腦を刺激する程の印象も殘さなかつた、と同時に私は短文を書いて見樣と思ひ出した、しかし短文にはどんな事を書いていゝのか、何をモデルにするのか？と云ふ疑問がわいて出た。けれど試に書いて見樣と思つて燈をつけて机の前に坐つて筆を取つたが。又前の樣な感じがして書けなかつた書けないので、止そうと思つて筆を納めると又「書いて見度い」と云ふ心がわいた、筆をとると、やつぱり書けなかつた、私は「短文を書いて見たい」と思ふ心から、はなれ樣と思つて、もがいだけれど「短文を書いて見たい」と云ふ心は私の胸から、はなれなかつた。

○ともし火のもと

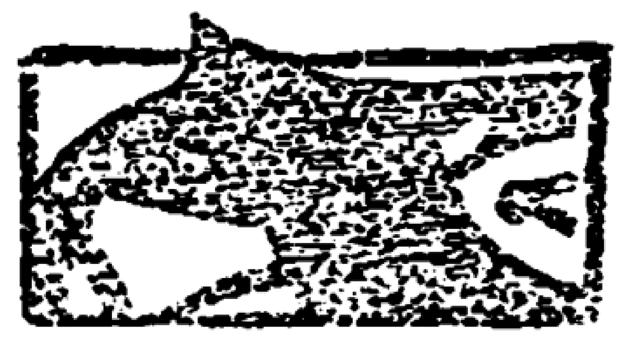
播磨　うすみどり

十時夜なべを終へた私は、思ひに思つて買つて來た女子文壇を開いたいつにかはらぬ皆樣の美しい文章を讀むにつけ、我身の不甲斐なさがつく〴〵恨めしい。何か書いて見たいと思つて筆はもつたものゝ、才なき淺學の身にどうして皆樣のまねが出來よう、小學を卒へた後は書物を手にした事もなく、筆取るのも只友への音信の時ばかり、文章も何も頭に浮ばない思つたまゝを書くことにした。樂しんでよむ文壇をさへ、昔人の母樣は、女に學問なんかいらない高等小學を卒業すればそれで澤山、雜誌なんか讀まなくともいゝとおつしやる。けれど〳〵私はどうしてもあきらめることは出來ない。それで母樣が寢られてからそつと出して見る。あゝ自分はなぜかう不幸だらう、いそがしいいそがしい内に日は暮れて、唯一の友と思ふ女子文壇をさへ意のまゝに讀むことが出來ぬ。人の身の上をうらやむのではないけれど、同窓に學んだ仲よしの誰彼は或は學びの舍に、或は敎への庭に、それ〴〵好む道を辿つて居られるのに私は私は老いた兩親の側で毎日針とにらめつくら、せめて二三時間づゝも勉強する余暇があつたならといつも思ふ。「そんなまづい文を投書して誌上へ出ると思つて居るか馬鹿者つ」と頭上で、誰かゞのゝしる樣に思はれる。おゝ自分はそんな高い望はないけれど、御情深い記者先生の手にふれお目にかゝることもあらばと、それぱかりを願ひにて。

筆を置いて時計を見上ぐれば十二時前、奧からはかすかな母樣のいびきがきこえるばかり、更け行く田舍の夜は、しんとして何の音もせぬ。母上が目を醒まされて、しかられぬうち早く寢ることにしよう。

▲初作とは初めて作つて公表しようと思つた作を云ふ▲初作は散文に限る、二十四字詰三十行以内のこと▲從來他の欄に登載されたる人は初作に投稿しても無効なり▲初作は出來得るかぎり初心者の作を採る方針なれば、其つもりにて初めて作つた諸孃は續々投稿あれ

―(選者)―



化粧問答

藤波芙蓉



○日に焦けぬ方劑に就いて　夏季になると日に焦ける、殊に日に焦ける機會が多い、日に焦けるとお化粧もよく出來ぬやうになる、皮膚もあらびるといふので、近頃になり日に焦けぬ方劑を敎へて呉れ、又は調製して貰ひたいと申込んで來らるゝ御方々が、時節柄とて頗に多きを加へて參りましたので、本社長も皆樣の御望みに同情し、この夏季だけに限り、日に焦けぬ方劑をおわけしてはと云はるゝので、兎も角五十ポンドだけを調製しました、精しくは廣告欄を御覽下されば御解りになります。

○解惑　毛髮發生の成否に關し、其人の體質上に於ける或秘密を調査する必要あり云々との私の搜因說は、讀者諸子の間に少からぬ疑惑の念を呼起させ申したものと見えて、「他にお洩らし下さらねば、何事でも打明けますから」とか、又「私は純潔なる處女ですが」とか、殊更に御斷りになつて御質問なさる御方も大部ありますが秘密と申しても、醫者などは、常に平氣で、大勢の前で尋ねもし話もする程の秘密、處女に限らず有夫の婦人にも同樣、何人にも所有してあらねばならぬ、云はゞ公然の秘密で、或はこれを秘密なんて云ふのが失當の語かも知れぬけれど御婦人の年齢を御尋ねするすら非禮と心得て居る私の頭腦は、他人に向つて聞くを憚らねばならぬことをば、一種の秘密と考へて居るので、何も處女としての純眞に關することゝか、よし他言されぬ所で困るといふやうな、その人の心行爲に關する女德上の秘密を意味するのではなく、只私自身として何となく、御聞きするを厭はしく思ふ程の人體生理上の秘密に過ぎぬのですから何卒その御つもりで。

問　（一）ホクロを取去る法と其藥名、但し跡なきやう。（二）頭髮全部の先が五厘程赤くなり、二つ三つに割れて居り、洗つて乾けば恰度燒けたやうになります、何と致したら。（山陰、山間の娘）

答　（一）ホクロの大小深淺によつて跡のないやうに取り去るといふことは、お請合出來ません、但だそれを取り去る方法としては、發煙硝酸をワテの先につけ、それを肉に觸れぬやう、ホクロの上に御つけになれば取れます。（二）髮先一寸ばかり切り去り、サルチル酸二匁、ベンヅイン三匁をオレブ油九十五匁に合せたものを頭皮に毛揚子ですり込みなさい。

問　顏にハタケが出來て、いろ〳〵な藥をつけても直りませんが。（澁谷の愛讀女）

答　クリサロビン一匁を黃色ワセリン二十匁にて煉り合せたものを御つけなさい。今貴女の御用ひになつて居るといふ其洗粉は斷然御よしにならんと又ハダケが出來ます。

問　（一）過酸化水素水を用ひますれば本當に白くなりませうか。（二）鼻の白粉の剝げぬ法とオデキのあとを取る法。（三）瘦せる法をお敎へ下さい（富山、色黒女）

答　（一）比較的有功だと申します。（二）お化粧なさる前に、お顏を洗つたら、直ぐお鼻の上に油酸亞鉛一匁、サルチル酸三分、澱粉八匁を合せた粉劑を御つけになればよろしい。（三）一寸茲で御答するには頁が許しません、精しくは來月の婦人畫報に「美容式體育術」と題し、瘦せる法も肥える法も併述致しますから、それを御參考願ひます。

問　私はキメは細かい方ですから白粉の剝げるやうなことはありませんけれど、顏が赤いため白粉をつけますと赤紫色になりますが、如何致したら綺麗にお化粧されますでせうか、又今日まで御化粧する時には美顏水を用ひて居りますが、少しも綺麗にならないですが、過酸化水素水はよいでせうか。（越後、愛讀女）

答　貴女は常にネリおしろいを御つかひになつて居らつしやりはしませんか、今後はコナおしろいで御化粧なさい、而してそのお化粧の仕方はキセロルクリームの適量に粉白粉の適量を加へて、よく混ぜ合せ、水を入れて適度の薄目にのばし、それをお顏にムラなく平らに御つけになり、その上に粉おしろいを化粧皮で極めて少しづゝ御打ちになるのです。御察しの通り過酸化水素水はよろしいかと存じます。因みに茲に適量と云ひ適度と申したにつき、どの位のが適量といふのか、どれ程のが適度と云ふのかと御迷ひになる事と存じますが、これが量定は其人々の皮膚の性質や色素によつて違ひますので、まのあたり御目にかゝつた御方でないと、どれ程の正確な量度を申上げることも出來ませんので、據處なく適量といふ曖昧な字を用ひた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

次第ですが、何人にも其適否のプロセントはあるものですから、兎に角右に申上げた方法で、御自身に其量度を御ためしなさつて御覽下さい

問　（一）アブラ性にコールドクリームを使ひますと益々脂肪が多くなるやうなことはございませんか。（二）二三年前まではそんな事もありませんでしたが近頃になつて顔のキメが荒くなつて毛穴があいてお化粧しても綺麗になりませんが。（三）新式化粧法と合せ鏡は何處で發行して居りますか。（田舍女）

答　（一）アブラ性にコールドクリームの單用は御察しの通りの事實を示すことがありますですから、このコールドクリームと共に、その姉妹劑としての艶肌劑を復用して下さいと申して居るのです、斯く復用することに於いて、アブラ性の方にもアレ性の方にも適合することになるのです。（二）右の姉妹劑を氣永におつけになれば大抵よくなると存じます。（三）新式化粧法は日本橋本町博文館（四十五錢）合せ鏡は京橋西紺屋町寶藥之日本社（三十五錢）で發行して居ります。

問　生際の拔け上つて居るのを發毛さす藥劑の調製法を。（深川女）

答　レソルチン五分、カンタリス丁幾一匁ヒマス油三分、ベルガモット油二分、酒精二十匁を合せ、一日四五回づゝ、その生やすべき部分へ御つけなさい。

問　（一）アブラ性の故か、白粉が直ぐ剝げて困ります、どうしたら永く保つことが出來ませうか。（二）毛を拔く藥と生やす藥とを御敎へ下さいますし。（茨城、寧子）

答　（二）加里石鹼で洗面して、重曹三匁、グリセリン十五匁、ラベンダー精十五匁を合せたものを塗り、その上に御化粧なさい。（二）脫毛劑として有力なのは雄黃三匁、石灰十六匁、澱粉四匁に水を加へてドロ〳〵となし、黑褐色を呈すまで煮沸させ、それを綿フランに厚くのばして拔くべき毛のある上に張ると、約三十分もすると奇麗に拔けます、毛生藥は其原因によつて一定しませんが素人にも調合出來るものとしてはレゾルチン、單寧酸各七分五厘、グリセリン一匁五分、バルサム油五十匁、酒精七十五匁の混和劑がよいでせう。

問　過酸化水素水を先生の御手許から御わけ下さることは出來ますまいか。（雪國の女）

答　おやすい御用です、直接私の方へ御申越し下さい。

問　顔のキメの荒いのは、どう致したらよいでせうか。（山口、はるえ）

答　（田舍女）さんに對する（二）の答を御覽下さい。

問　過酸化水素水は誰が用ひましても宜しいでせうか。（淺草、伺女）

答　アレ性の人には不適當です。

問　コールドクリームと艶肌劑とは誠によろしいやうでございますが、レートおしろいがどうもうまく化粧ばれ致しません、ねり製では駄目でございませうか、右の姉妹劑を用ひました上にふさはしい白粉を御敎へ願ひます。（尾道、京子）

答　（越後、愛讀女）さんへの答を御參考願ひます。

問　鼻口に小さな腫物が澤山出來、又鼻の兩側が赤く色どりて居りますが。（赤碕、多津子）

答　その原因を調べた上でないと解りかねます、むしろ醫師に見て頂いた方がよいでせう

問　艶肌劑と植物性洗粉の代價と郵稅を（山口、さくら子）

答　廣告欄に明記されてありますから、それを御覽下さい。（淡路、田舍女）さんも同樣に御承知下さい。

問　私は毛深い質で、顔や襟に濃く生えて困りますが、藝妓のやうに始終奇麗にする方法を。（二）齒の黑いのは、どうしたらよいでせうか。（神田、彌生）

答　（一）の御尋ねの主旨がよく解りませんが、その毛の生えないやうといふ意味でしたら、（茨城、寧子）さんへの（二）の答の通りなさるべく、藝妓のやうに云々とは、何としても意味が了りません。（二）相當の齒磨劑を御使ひになつて居らるゝのに、その齒が黑いとあつては、恐らく内臓に故障のあるものと思はれますから、早く醫師に見てお貰ひになつたらよいでせう。

問　（一）お蔭樣でニキビは全快しましたがアトが殘つて居りますので、これを取り去りますには如何致したらよろしいでせうか、（二）發煙硝酸でホクロを取りましたら、そのアトが凹みは致しませんか。（神戸、しづ子）

答　（一）姉妹劑を御つけなさつて御覽なさい、大抵は奇麗になる筈です、若しそれでいけぬとすると剝離法を應用せねばなりません。（二）多くは凹みます。

問　硫化ナトリウムと苛性加里は到る處の

藥店に賣つて居りませうか、又これを脫毛劑として使つても、あとで何の差支も生じないでせうか。(栃木、田舍少女)

答　硫化ナトリウムは化學用の藥品ですから、普通の藥店には特別に注文せぬと持ち合はして居りますまい、苛性加里は何處の藥舖にも必ずあります。無論何の差支もありませんけれど、その使ひ方に御注意なさらんと、一時皮膚をいためることがないとも限りません。

問　(一)三四年前から非常に肥滿して殊に腹部が大きくなつて困りますが、(二)アセモ等の豫防法と療藥を。(三原、田舍女)

答　(一)の御尋ねはよく聞かれる問題で、從來は田村氏の著書を紹介致し、本欄でも來月から婦人畫報に「美容式體育術」と題し、講述致す旨を御答申して置きましたが、餘り屢々大勢の方からの御質問故、なるべく簡單に其方法を茲に御答致すとにしませう。痩せたいと思召さるならば先づ食事に注意せねばなりません。それは只に種類のみでなく分量にも關係致しますが第一朝食に穀類や砂糖などは全廢なさるべく、概して甘味の物、菓子類、氷水、酒類、澱粉質の物スープ、牛乳、その他水氣の多いもの、西瓜とか眞桑瓜、又はキャベツの如き、汁液の多い水菓物や野菜類を食はぬやう、而して成るべく乾燥な物を食し、鹽と青菜類、海草類を食ふことになさい。世間にはいろく痩せる藥などいふものがありますけれど、一つも科學的に出來てるものがありません。次には適度の運動法で、之は精しく今後「美容式體育術」に述べるつもりですが、腹部の肥肉を減少せしむる方式としては、床上に仰向に長くなり、兩足をソロくと上げて胴を直角に立て、又ソロくと下げて床の上につけ、今度は踵を床の上につけて置いて、兩腕を胸の上に組合せ、ソロくと胴を起すのです、若しこれが困難でしたら兩腕を前方へ振りながら起きてもよろしうございます。それを引續き幾度も反覆して、今度は直立の位置を取りながら腹の上で兩手を振り合せ、胸を少しも上げぬ樣にして、グツト腹を縮め、又フクラますと六回而して後深呼吸を三回やつて休むのです。斯く日毎に連續して御やりになると請合つて痩せます(二)豫防法としては衣服身體を清潔に保ち、アセが少しでも發した時には入浴してよく洗ふことになさい、既に發したものには、サルチル酸一匁、澱粉五十匁、滑石五十匁を合せて御つけなさるがよい。

問　私は非常な脂肪性で、手足共に流れる程汗の樣な汁が出て、足袋などは一日に眞黑になり、白い物の裁縫は何も出來ません。何とかして直したいのですが、尙失禮ですが、先生の御宅を御知らせ願ひ度う存じます。(京都、なでしこ)

答　單寧酸一匁を酒精二百匁に合せたものを御つけなさつて御覽なさい、私の住所は牛込區赤城下町です。

問　(一)ベンゾールと申す藥品は何處で賣つて居りませうか、又その用法と効用とを。(二)キセロルオードトワレツトとキセロルビネーグルの用法と効用とを。(三)脂肪性にて毛穴が擴大にして鼻頭がボツくになつて居りますが。(四)口唇にソバカラの薄いやうな斑點があり且つ色が惡いのですが。(赤坂、すみれ)

答　(一)大抵の藥店にあると存じます。(二)兩品とも効用は似たもので、洗面盥に八分目程の微溫湯をとり、それに七八滴乃至十四五滴を注加して、それを洗面すれば、顏の脂肪を取り去つて奇麗になります。(三)は一度その狀態を拜見せぬと解りかねます、(四)は恐らく內部的原因によると思はれますから、その原因を突止めた上でないと、何とも申上げられません

問　(一)御社からおわけ下さる姉妹劑は代金何程で、如何なる方法をとれば御送り願はれますでせうか。(二)眉の濃くなる法と、まゆずみの適當なるものを御敎へ下さい。(三)過酸化水素水は少しも害がないでせうか。(土佐、愛讀者)

答　代價は廣告欄に示されてある通りですそれだけの代金と郵税とを添へて本社の代理部へ御申込みになれば御送りいたします。(二)ベンゾールを御つけなさい、眉黛には青桐を燒いた油煙が適當です。(三)必ずしも無害とは申されません。○長崎の妙子さん、岡山縣の安田花子さん、秋田縣のたみ子さんへ。直接私宅へ宛て御尋ね下さつた方が便宜です。

問　口の臭いのはどうしたらよいでせうか(日本橋、まさ子)

答　その原因を見出しての上でないと解りませんけれど、チモール一匁三分、硼砂二匁七分を三合の蒸餾水に溶かしたもので、度々口中を御洗ひなさつて御覽なさい。

問　外氣に觸れますと、おしろいがプチになつて、いくらよくしても奇麗になりません、どう致したらお化粧が奇麗につきますでせうか(山口、田舍女)

答　(越後、愛讀女)さんの御尋ねに答へた方法で御やりなさつて御覽なさい、若しそれでいけませんでしたら別の方法を申上げませう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

讀友くらぶ

○交際

▲はるかに太平洋の彼方より　上藤さみ子

Miss Samics Kamifuyi R. F. D.
I. Bot 50 Las Angeles Co Puent
Gealif U. S. A.

高等小學を中途で止しまして父の許へ渡航致しましたのは早十七年の昔になりました、今では當地のハイスクールに通學致して居りますが、何分私の居ります所は、ごく田舍でありまして、日本人の學友は一人もありませんから、さびしいのです、最も白人はたくさん居りますが、人の氣質がちがひますので、少しも話があはず面白い事も何にもありません、只だ本誌を又なき友と致して居る者ですが、諸姉様方に當地の英字新聞や繪葉書を御望の御方は、何品とでも宜しく御交換被下いませ、不束者ですが何卒永久の御交際を願ひ申します。○

Il yamamato no 345 Panelist
Ranesmer D.B.

▲加奈太より　山本秀子

私は晩香坡にての文壇愛讀者です、不束ながら誌友の皆々樣と御交誼を願ひます御手紙や、書物の御交換を御願ひ申ます、坪内樣の譯、ハムレット、ロメオトジユーレット及びオセロ等英文書御入用の御方は御交換被下度御願ひ申ます、御中越次第送ります。（山本秀子）○

Fram Sred ofume 1218 4th
Sueto cal U. S. A.

▲米國より　在米國　グレースより

私は文壇の趣味を以て異鄉に淋しさを忘れ、誌友の諸姉樣の御力に依つて樂しう日を重ねてあるのです、日本の事物について記憶淺き私は、此の上諸姉上樣の御筆によつて故國の事情に接し度う、其れを何よりの樂しみに存じて居ります、古里を慕ふ私の情御察し被下つて御交際を願ひます。○

▲樺太より　樺太西海岸眞岡春雨町一番地後藤みよ方　西島美女香

誌友の諸嬢よ私事は二とせの昔からの愛讀者よ、かく北海の地に空しく悲哀の内に暮す　あはれな少女あることを告げ、せめては皆々樣のうつくしいお玉章をお願しますわ。○

▲都の樣子が聞きたい　長野縣下伊那郡生田村百四十一番地　北林武子

私は一昨年此佗しい信濃の山里へ歸つてから自分の慰藉となるは本誌許りにて黄塵の都に住居した妾には淋しい涙を袖にうるほすの日は少くはありません、何卒都の樣子此山里へ御漏し下さい又他府縣の姉上樣達も端書やレターの交際を御願ひ致ます。○

▲三十八年以來　福井縣大飯郡佐分利村石山門野方にて　久麗香

の文壇愛讀者で御座います、はじめて淋しい田舍から誌友の皆樣に永久的な御交際を御願ひいたします。○

▲日光　下野今市　高村たき子

記者樣始め誌上の姉上樣日光も追々と賑やかに成つて參ります　何卒御見物旁々御涼みに御出で下さいませ。

○　群馬縣邑樂郡小泉町

三宅りう子

▲田舍の少女　私は亡く田舍のふつゝかな少女で御ざいます御同情ある皆様私をあはれと思つて御交際下さる御方が有りましたら下名へ御玉章おめぐみ下さいよろこんで御返事致します

○　大分縣速見郡中山香村

帶刀松枝、公惠

▲姉妹共に　本年からの愛讀者ですよ、皆様方何卒御交際なすつて下さい、お寫眞の交換もお願ひしますよ。

○　羽前國南郡柏倉門傳長澤得隣方

長澤美也子

▲淋しい程靜な山里　に住んで居るものです誌友の皆様がおなつかしうございます殊に北海道がなつかしくつて夏の夕暮などはいつも庭に出て北の空を眺めて居ります皆様お手紙下さい

○　山口縣山口町字長山弘中様方

福田芳枝

▲春葉の蔭より　妾は田舍に語る友もなく心淋しく暮して居るものです。御なつかしの御姉上様方よ御優しい美しい心から同情ある御交りを願ひます。

○　大分市江戸町二八九新納方

いせ子

▲大分より　當地の誌友諸姉様方私は先達つてね浪華からまゐりましたの、御友達はなく淋しくつていけませんから、おひまの折は御遊びにおいで下さいましね。それから特別號の和歌佳作及び俳句佳作に出ていらつしやる松﨑しま子さんねよう存じていますわ、私誰れだかあててごらんあそばせ。

○　靜岡縣磐田郡井通村氣子島

高須君子

▲御變りはございませんか　私は淋しい田舍に何の樂しみもなく暮して居りますが文壇のおかげにて澤山のフレンドが出來まして　ほんとにうれしうございます、今はこの燈火の下で文壇を友として居りますが昨年の今頃は不忍池の端にて納涼博覽會がありましたので夕方になると出掛けましてあの音樂堂のそばにある大きな石へ腰かけては池中の鯉をながめつゝ音樂を聞いて居りました今あのベンチには誰が腰かけていらつしやるでせうか？あゝあのベンチよ。

○　福岡市春吉雷橋畔百四十五番地三ノ三

中野榮子

▲音に名高き　荒澤山下の小田部の藤も今は早散りはてゝ青葉の蔭ぞ懷かしき頃とは成りましたが本誌愛讀者の兄姉様方には其後御變りも御ざいませんか「無學なる女ですけれ共此後よろしく玉章や繪葉書の交換を願ひます

○　東京市小石川區西原町二ノ二二西川方

栗原かね子

▲一月より　の愛讀者です、何うぞお手紙の交換をねがひます、返事は屹度！

○　越後中蒲原郡早通村字下早通石澤德次郎方

豊子

▲越後の片隅　に住む愚者なの一人でさびしく日をくらす少女です文壇を唯一の友としてをりましてレターや繪葉書の交換もしてくださいな、そしてあの美しい交際ならどんな方でもかまひませんわただし先着者一名には私の寫眞送る

○　東京市麻布區霞町六番地小作長造方

林

▲活動の時　おなつかしい皆様おふるひ遊ばすシーズンが參りましたのよ大いに活動遊ばせ妾は兄と二人淋しく表記の場所より通學して居りますのよ誌友の皆様レター下さい淸い淸い御交際をどうぞ……。

○　水戸局區内常磐村原區屠殺場内

瀧田のぶ子

▲四月から　女子文壇の愛讀者になりましたから御みすてなく永久に御交際をお願ひ致します、又御手紙や御寫眞の御交換も御願ひ致します、繪葉書もね、男の方は御ことわりします。自作の俳句などもおねがひいたします。

○　岐阜縣大垣郭町電信局北

舊井やゑ子

▲玉章　私は以前よりの愛讀者でございますが以來おなつかしいお姉様方と親しく御交際が致したいのです。

○　札幌

池田綠蔭

▲再び來る　暫らく事情のため皆様にも御無沙汰致して居りました私は一昨年まで淋しい淋しい山里に自然の美を愛し……女子文壇を唯一の友として居りましたが事情のために花なる都の春に參りました……何卒皆様一昨年に倍し御交際を願ひます。

○　靜岡縣濱名郡豊西村

松島順子

▲小説と　おなつかしい誌友の皆様小説と繪

葉書と交換して下さいませんか、どんな小說でもかまひませんよ、綿物お持ちのお方は化粧品などと交換して下さいませ。
先着五名にかぎり繪葉書五葉餘分に差上げます

岡山縣小田郡美川村市之邊
三宅正子

○

▲山の中より　私は淋しい山の中に住んで居る乙女です何卒なつかしい御手紙を下さい御返事はきつと致します、そして永久に又皆樣の御うつしゑを拜見致さして下さいませ。

姫路市上白銀町竹内三四二樣方
宮下靜子

○

▲悲しいかな　諸姉樣私は早くより父母にわかれ、今は淋しく姉上の御世話に成つて居ります。たゞ女子文壇を無二の友として暮すのみどうか御交際をして下さいね。

札幌　幽梨香

○

▲北米のお方に　北米加奈陀の伊勢埼ますゑ樣、同シャトルの田中千代子樣、米國加州の丘貞子樣妾は札幌の片田舍に住む果敢なき身の上の者ですが陰ながら、お三人樣をばお慕ひ致して居ります御返事を一日千秋の思ひでまつて居りますわ。

府下澁谷七四
小林しげ子

○

▲優しきお手紙　下さいました姉樣方どうもありがたうございました、こんな不束な私にどうぞ宜しく、でも誠に申しにくい事ですが地方の方は家庭で許しませんからお斷り申しますどうぞあしからず思召し下さい。

○

三重縣山田市宮川町二〇
飯村八重子

▲無號たのしみに　私は皆樣の御作を毎號樂しんで待つて居ます、なぜ私は文章が書けないのでしやう皆さまよろしく。

近江國坂田郡柏原村字小野
近藤常子

○

▲伊吹山の麓より　私は淋しく日を送つて居る者ですが四十年四十一年と愛讀致しまして今年六月號迄愛讀致す事が出來ませんでした、幸に六月號より愛讀致す事が出來るやうになりました姉上樣よ何卒御交際を願ひます又レターも頂戴な。

府下北多摩郡拜島村
高崎和江

○

▲草深き田舍に　語り合ふ友もなく淋しく暮す當文壇愛讀者の一人です何卒以後御心安くし又御手紙やしをりなどの交換を願ひます。

播磨宍粟郡河東村
杉尾つや子

○

▲北播揖保の河畔に　寂しいライフをして居るものでございます。いづ川の鮎がりのシーズンが參りましたからおあそびに御越し下さい倚また　レター御惠み下さい御返事いたします。

宇田小茴

○

▲紀伊の河畔にて　死んでも出すまいと思つてゐた誌友くらぶへ先月一寸出して見ました所調子はづれた奇妙な廣告がお氣に召して遠い國々のみな樣から、お手紙を下さいました。眞に苦しき日の連續、にがりきつたかほ　たまさかに湧く笑は皆樣の御手紙の上に落ちますかくして私は見知らぬ人々の胸に奇を好む人たちの心になほ生くるを許されて居ります　感謝せずには居られません。

富山市北新町衣笠方
稻木學

○

▲旅行中　紙上の諸孃樣レター澤山頂きまして有難うございました　私先月の始頃より某地へ救護旁々旅行しておきまして　御返事も出さず幾重にも紙上にて御詫申上ます惡からず御免し下さいネ諸姉樣此後御變り無く御交り下さいネ願ひますレター給はる時右記へ下さいネ。

京都市立美術工藝學校内
山家靜香

○

▲謠　諸姉樣私も愛讀者の一人ですよどうかお見すてなくレター下さいな、また謠のおすきなおかたは交換致しませう。

奈良縣北葛城郡高田町東口
喜治綠子

○

▲お手紙を　おなつかしい姉上樣不束な私をどうかおみちびき下さい　そして時折お手紙頂戴な待つて居ります。

紀伊海草郡和歌浦町明光通二丁目
中野濱子

○

▲誌友の諸姉樣よ　妾を何とぞあはれと御思召して御交り下さいませ又繪葉書や御玉章の御交換を特に願ひます　男子の方は堅く御斷りよ。

長野市大門町

○

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

前島とみ子

▲お仲間に　毎號皆樣の勝れし御文拜見致して居ります 誌友の諸孃樣私も御仲間に入れて下さいませ其して レター及美人繪葉書の御交換を御願ひ申します 其から御自筆の栞御送り下さいませ私も必ず差上げますから何卒。○

和歌山縣海草郡和歌の浦前田眼病院內　しぐれ

▲十五歳の少女　滿天下の御姉樣方私は去る四月からの愛讀者なのよ、御交際御願ひ申すは今はじめてなのよ 今年十五歳になつてよまことに無學者ですけれども誌友の皆さまよ何卒妹と思召して行末長く 玉章や繪葉書の御交際を御願申します キツトく御返事差上げますからネ。

下關市　德永治香

▲私も　御姉樣方私も本誌の愛讀者ですから御見ずてなく御交り下さいまし。○

常陸國新治郡下大津村　飯田靖子

▲暑中　おなつかしい姉上樣は、この長いお休みを樂しくお過しでせう、くれぐも御自愛遊ばす樣に祈ります 前にかはらぬ清き御交際を願ひます。○

名古屋　美佐子

▲名古屋　竹內ふみ子樣つて御なつかしいわ私も名古屋よ私しネ今 市立高女の四年ですわ貴女もどつか學校へいらしつて。又當地の山內清子さま貴女どこの學校教へて頂戴御交際下さいネ御二人とも。私しも淋しくく暮してゐますのよ 共に學びの道に通ふ身ですもの、仲よしになりませうネ、名古屋の學子さま 振つて頂戴、私も母校に通學する生徒よ。○

備後　名しらぬ子

▲人の性質　と相入れない私はいつも獨わしかたかく人の謡ふ少女の時代も 知らず苦しいハートを抱いて泣く而し思ふ丈は泣かれないはては自分がうたがはしくなる ああ意識する事の出來なくなるまで私は —— 山口縣の次子さま私に文才のないのを見て絶交なのですか、それも面白いでせう長い間の御交りを 感謝しますよまさきくおはせよさらば。○

下野ヴヰナス會

▲お斷り　長らく記者諸先生初め誌友の皆樣に御導を戴いて居りました 下野ヴヰナス會も首尾よく滿二ケ年の生命を全う致しました故會員內規に基きまして愈 來る八月下旬の第四回の總會と共に目出度く閉會式を擧行致します。就きましては今日まで會の事務所を經て會員と御交際下さいました御方樣は 今後は何卒會の方へは御手紙は一切下さらずに 直接各會員と御文通をなさつて下さいまし。然し私達は決して活動の機關を永久に捨てるのでは御座いませぬ 縣下の會員會友は群馬、茨城の二縣の 有志の御方樣と協議の上、より美しくより 高尚なアッサリとした單純な大團結を組織して 再び皆樣の御中間入りを致したい考で御座います。此事に就ては何れ機を見て發表します考で御座います 一寸おことわり迄に……。○

常陸下妻町　大久保みどり子

▲青葉の下戀ふる　シーズンとなりました折から麗はしの諸姉樣方相變らず御無事で入らつしやいますの 皆樣すぐる日はうれしいお手紙を頂きまして厚くく 誌上にて御禮申ます惡しからず……皆樣私は全く園藝を好みましてたくさん花を作りたいと思ひますの お願ひですからもし種子おもちの方はお送り下さいませ 必ず御返禮いたしましてよ。○

山口縣萩椿村　宮原よし子

▲二月から　愛讀者になりましたので何卒よろしく特に萩地方の愛讀者の方と御交際を御ねがひいたします。○

福岡市上新川端町一五ノ一吉屋　野見山輝

▲あらゆる國々の方々よ、其異なつた土地の姉樣方に御交際が願へるのは誠に嬉しう存じます以後御心安く御交際下さいましね 藹端書乃至玉章の御交換切望致します。○

鳥取縣鳥取市魚町九十八番地　矢島美代子

▲都の華やかさを　妾は今度本誌を愛讀致す樣になりましたの都の華やかさを夢見つついぶせき片田舍に住む一少女ですのよ何卒姉樣方やさしいレター御惠み下さいな……永久に。○

山口縣下關市東南部町　秋友織野

▲誌友が多勢　私は二三日前に田舍から轉住いたしました田舍と違つて此處では 誌友の方が大勢居らつしやるので 私は嬉しく存じますのよ

之から大いに奮發する覺悟で 御座いますず皆樣何卒よろしく御指導下さいませ、御暇の節は御遊びにお來で下さいませ 暑さおいとひ遊ばせ左樣なら。

○

佐賀縣東松浦郡切木村中尾
松本八千代

▲妾は今月迎へて十七歳 唐津開港場を去る一里餘の山岳中に只一人語るに友も無く淋しく暮して居る一少女です、長崎の 諸姉樣方御交際下さいませんか。

○

久留米市莊島町二十一番地
中島みき子

▲南より うら戀しやの皆々樣この暑熱に隨分と御用心遊ばせ 夏は私の地方は別して暑さに堪えないの 私は洋書道樂で親達を困らせる程好きですの、 皆樣お親しいレター頂戴よお禮には繪葉書を送りますから。

○

北海道石狩上川郡旭川町四、六、
右五 渡邊きち子

▲北國の端にて 私は未だ何も知らぬ田舍者ですが 清い誌友の諸姉樣永久に御交際を願ひます又繪葉書やレターの交換をもね。

○

越後國刈羽郡大洲村大字大久保
服部盛子樣內 長澤楓花子

▲前月から 本誌の愛讀者となりましたから一時的の交際でなく永久に趣味ある繪葉書やお玉章を下さいな 私もきつと差上ますから。

○

栃木縣佐野堀米町
片柳よし子

▲文學ずき おなつかしき誌友の皆樣御かはりもございませんか どうぞ姉に樣方の中文學好みの御方なにとぞ交換をして下さい又レターエハガキの交際もいたします 永久にね必ず御返事上ますわ。

○

新潟縣三島郡黑川村字南中
佐藤みゆき

▲私は師範の生徒 でしたが、昨年七月から病氣の爲め學舍にサラバを告げ故山に獨淋しく過して居ります!!! 青葉の頃新に誌友となりましたの……皆樣何卒レター頂戴な待つて居りますわ。

○

福井市佐久良下町七九
木村芳子

▲きつとね あの私……芳子つていふの昆寶ちの田舍つ子一人ぼつち淋しく〳〵……只々毎日の御業に文壇ばかり御友だちにしてるの、誌上の御姉樣私にレター繪葉書頂戴よね、きつとよ私嬉しく御返しするわね、きつとね……

○

東京市神田表神保町有恒館內
みつ子

▲短歌 寵から來た樣な風が吹いて來ます暑くなりましたお姉さまお變りはありませんか 短歌に趣味を持つていらつしやる方と 御交際願ひたう御座います。 尙お姉樣方の內で大日本短歌會發行の和歌講義錄お待ちの方がありましたらお讓り下さい。

○

橫濱市南太田町二、一六五
小田切錦子

▲歸濱と移轉 五月三十一日佐渡出發して一日無事歸濱致しました前には 二人でしたが今は子供がありますので右記の處へ移りました。

○

東京青山南町六丁目三五
志岐邸內 八重子

▲綠の下蔭 懷しき今日此頃愛讀者の皆樣御變も御座いませんか 私は青山の邊に淋しい月日を送つて居る者で御座いますが 御なさけ深い諸姉樣何卒御交際の程御願ひ致します。

○

神奈川縣三浦郡浦鄕村字船越一
六一 玉置千代子

▲私は 本誌の愛讀者で御座います何卒永久に御交り下さいませ、友達に 死なれまして今では淋しく暮して居るものです。

○

大阪市東區唐物町四ノ四七石川
方 中村夢月

▲世のうら若き 皆樣へ私は長のいたつきの身を橫たへて冷き床に只一人寂しき月日を送ります哀れな者ですア、友愛暖き皆樣よ何卒同情ある長き御手紙を下さいます 樣御願ひ申上ます

○

京都府紀伊郡吉祥院石島
三木たつ子

▲山城より 妾は當舍の不束者で一人淋しく暮して居ります 何卒あはれと思召して繪はがきレターの御交換を願ひます。

○

吳市和庄通り三丁目十二番地金
子樣方 マサ子

▲吳より 妾は近頃から皆樣の御仲間入をさせて頂きました者よ 初めて田舍から出て來て親も姉妹も友も皆國へ殘つてほんの 私は一人者よ何より妾の好きな文壇愛讀諸姉樣 永へに繪葉書寫眞や御手紙の御交際をね 御返事はきつと致します。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○

福岡市博多東中洲古川内

市川久子

▲誌友の花　私はね今度誌友諸孃樣の記念として一つの雜誌を思ひ立つて居ます、皆樣の御同情を寄せられまして出來たなれば大記念と成るでありませうと思ひます雜誌の名は「誌友の花」として美しく作る事に致して居ります詩、作文、和歌、俳句、水彩畫、書方、スケッチ等を皆樣に御願ひ申しますので　ございます、本月の末迄に送り居けて頂けばよいので　ございます、出來上りましたなれば皆樣に御廻送致しますす何卒御志の程導々も御願ひ申上げて置きます只今では近き處の御方は少々集つて居ます繪畫の外は半紙でございます畫は日本紙半枚の大きさであります。

個人消息

○

王子町　大浪せい子

▲下澁谷の小林しげ子樣　貴女は少女世界の愛讀者でいらつしやるでせうおなつかしゆう存じますわ。上十條の高木多香子樣先日は御邪魔いたしました私おかしくてく家へ歸つて一人で笑つて居ましたの、今度は貴女が御出でになる番ですよホヽヽ、敏ちやまによろしく!!!

○

大阪　小泉貞子

▲大阪の貴美子樣　仰の通り私は西區第一高小に居りました者で御座いますが、貴女は何誰で被居いましたか、どうしても思ひ出せませんの、どうか御知らせ下さいませ。

○

大阪　雅子

▲京都伏見の竹村槇子さま　おなつかしう存じます、私ねお稲荷さまへよく參詣しますのよ其度に御尋ね仕樣と思ひながら、いつも氣おくれがして……。何所邊で被居いますか、此度ゆく時、きつとかげ乍らなりともお姿を拜したいと思つてますからお所おきかせ下さいませ。

○

神戸市　足立春子

▲宮本こと子樣　歸國中に御尋ね下さいまして有難う御座いました、すぐ御手紙差し上げたく存じましたけれど御轉居先の番地が不明で失禮して居ます私は矢張以前の所に居ますから御立寄り下さいませ然しいつも失禮のみに過しましてほんたうに相濟みません　どうぞあしからず此頃は落葉子も淋しい田舍に這入つて仕舞ひましたため淋しう御座います。

○

京都　三宅白菫子

▲どなた？　京都婦人倶樂部支部として婦人くらぶ一冊を六月のはじめ私ゞ野菊さんと宛に御送り下さいましたのはどなたでしやう一寸もわかりません消印は七條局でした御返事申し上げるのも何所へ申してよいかわかりませんので困つて居ります何卒御手數ながら御知らせ下さいませ一寸誌上を借りまして……。

○

福岡市博多東中洲一七〇

古川内　市川久子

▲北米の三川樣　先達より美しい繪はがきを頂戴致しましてほんとに有難う厚く御禮申上げます早速御返事と思ひましたが殘念な事に御住所不明の爲めつひ失禮致しましたので何卒惡からず御許し下さいませ失禮ながら誌上にて厚く御禮申上げます此れからねくはしく御住所をね御知らせして頂戴ね。

○

岡山縣備中國玉島町

大西孝子

▲廣澤愛子樣　貴女は墓が御好きですと六月號で承りました御文中御休每に記載になつて居ます處から察しまして何れかへ通學遊ばす妙齡の處女君に居ます事と想像し得られますが夫れにしても寂寞しい墓所なぞ御好みになるとせば一時のヒステリーとは考へられません何か一つ其處に動機が御座いましやう私は强ひて御尋ずる必要は更にないのですが好墓の情に於て又ライフに於ける悲哀に於て稍々類似しては居ないかと考へられまして同情心より好奇にも一寸御尋したくなりましたのです私も此節は每朝五時離床上り約そ十町内外なる山上に伽藍訪ねてやがて古井に水浴し僧都の讀經に耳澄し暫し靜座に心清めて墓原散步き墓詣でして歸るを日每唯一と業とし居り最早四年餘り五年にもなりなんかと思ひますつきまとうて居ます寂しい影に何日打勝ち得らるゝかと女性ながらも奮鬪して居ますよ御同情あれば慰安を與へて頂戴。

野に山に霞める春ぞうらめしき
晴るを待たで花も散るらむ

○

東京市牛込區原町三丁目四番地

廣澤靜代子

▲金澤の廣澤愛子樣へ　まだ一度もお目にはかゝりませぬが金澤の御方と承りまして誠にお懷しう存じます私も暫らく上石伐町に住みまして野町小學校へ通ふて居りましたが……貴女樣のおらつしやいます所は淺野川のほとりではご

ざいませんか？もしお差し支へが御座いませんでしたらば不束者ですが御交際をお願ひ致し度う存じます。

○　信濃國上伊那郡南向村　細田草路

▲攝津のしな子樣　小包御送り申してより何のおたよりもありませんが、もしや御住所をお變へ遊ばしませんか。御地の白芙蓉に伺ひましたら御病氣だとの事もし御筆を取る事が出來ますならば一片のおたより給ひてよ。

○　高知縣宿毛町　野菊子

▲堺市高橋岸子樣　なりく\く御手紙を下さいまし高知市の皆樣御交りを御願ひします、津野千枝子樣御なつかしい御座いますわ、何卒誌上でお振ひあそばせな私たれだかわかりまして？

○　芝　すみれ

▲深川の鈴木美喜子樣　其後は思ひつゝ御無沙汰いたしましたが御變りもありませんか私誰だかわかつて丁度一年前に御手紙下さつた者よ只今では出京して都生活よ、やつぱり東元町に御住ゐなの誌上で番地を御知らせ下さいさらば。

○　東京にて　とめ子

▲本郷に居らつしやつた山田樣　如何遊ばして、月日の立つのは早いものね、また夏が參りました、私は近日中に信濃の國追分の里にある別邸へ參りますよ、どうか八月の誌友倶樂部で現住所御知らせ下さい、例により滯在一箇月を去年の樣に願ひたいと存じます、本年は他の名所用意致しおき御送り致しますから。

繪端書

○　京都市鉄屋町六角上る經田内　富貴子

▲風景　お慕しい姉樣方よ私は風景繪葉書に趣味を持つて居ます何卒御同感の方々は當地の繪葉書と御交換下さいませな。

○　岡山市下内田町石井内　洋月子

▲名所　誌友の皆樣に名所ゑはがきの交換を願ひます尙和歌に趣味お持ちの方に特に御交り願ひます。

○　京都府龜岡東町　谷口ふみ

▲肉筆　皆樣私は女學校卒業後つれぐ\なるまゝにヱハガキを書くのを唯一の樂しみとして暮して居ります何とぞ自筆ヱハガキの御交換を御願ひ申し上ます。

○　宇都宮市伊賀町　寺田まき

▲日光　私も愛讀者で御座います諸姉上樣御交際下れませ又繪はがきの御交換を是非御願ひ致したう御座います——私よりも日光なり宇都宮市のなりにて必ずおかへしをいたします。

○　茨城縣水戸局區内常磐村西原淺川方　古田土靜江子

▲四月號紙上で　御交際をお願ひ申しましたら十三名の方から御手紙下さいましたが筆跡の男子と思ふ方へはお返事上げませんでしたから不惡お願ひします今度は朝鮮、支那、樺太、米國の皆樣と繪はがきの交換をお願ひ致します特に故郷島根縣の方に永久にお交りをお願ひ致します。

記者より

▲北海道、俣野幽香里さんより香の高い鈴蘭の花を澤山頂きました、お禮を申ます▲土佐のかくれ草さんは、學校を御卒業なさいまして、本誌を御愛讀下さるとのこと、嬉しく思ひます、御尋ねの原稿の書き方、題や名や、種類は文章詩歌の初めの方へ、つまり誌上に出て居る通りに書けば間違ひはないのです▲大分縣の赤き花さんは別府の溫泉廻りをなされたさうで繪葉書を送つて下さいました、又臼杵の吉田夕草さんは、神經衰弱の爲め別府溫泉へ暫く行かれるさうです▲長野縣の妙舞さんへ。女優御志願の由、其の手續は只今一寸分りかねますが直接御問合せあつては何うでせう▲草子さんに、地方でも有名な方の寫眞は勿論其履書を書いて下さつてよろしいのです、また紙上にも優遇して出しますからお送り下さい▲金澤の千草さんに、誌友くらぶに不德な人があつて御迷惑なされたさうですがお氣の毒です、然ういふいけない人は片端から筆誅したいと思ひますから具體的に明確にお知らせ下さい▲紀伊の百合子さんに、然う落膽せずに投稿をおつゞけなさい、何分澤山な投書ですから多少運不運もありますが優れて好い作なら必らず出ます▲本誌前號誌友くらぶ欄一三八頁下段、名古屋山内清子とあるは活子のあやまりでした、御本人からも正誤の申込がありましたから正して置きます▲近江の近藤さんに、男子の方の投稿はいけません、例へお友達でも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

▲秋田縣の梅のやさん、長崎市の永井さん、お尋ねの件は、原稿は凡て同封は差支ないのです（以上記者）

○ 注意

福岡市東公園眞武内

まさ子

▲誌友の皆樣 本年四月號の本誌書籍交換欄で、攝津池田驛局區內丸橋、阪上惣右衞門方「白芙蓉」と被仰る方を見受られた事と思ひます、私は彼女に書籍代金二圓御送金致しましたんです處が又何とした事でせう、代金は受取つて置きながら約束の書籍はお送りにならないんですそれから幾度請求しましても何とも御返事のないのみか書籍も今日迄一ケ月餘りにもなりますが送つて來ませんのです、私は全く詐取されたのに相違ございません、貴重なる本誌に彼女の如き方があるとは實になげかはしい次第ぢやありませんか、皆樣の中にもしも白芙蓉と被仰る方のお名前御存じの御方は、何卒御敎へ下さいませ相當の御禮は屹度致します。

○

三重縣

和子

▲私は父の形見と歌集とを攝津池田驛前の白芙蓉樣の金色夜叉と交換する約束を致しまして、私は右二冊を四月の三十日にお送りいたしましたのに、何日立つても白芙蓉樣から送つて下さいません、それで私はついたか着かないかを御尋ねしたんですけれど、それも御返事が有りませんから、貴女が御一報下さいますれば、私はさし上げてもよろしうございますから、是非お藥書なりと下さいと云つてあげたんですけれど、此れもたうとうお便りが有りませんでした、所が今月の誌友くらぶの中に、所もお內の性も同じでお名だけ紫花として、書籍交換（私のお送りした父の形見も入れて）を望んで入らつしやいます私一人ならよろしうございますが、皆樣の中でも私見たいな方が有りましたら、ほんとにお困りだらうと思ひます、此女子文壇愛讀者の中にも此んな方があると思ひますと實になげかはしう思ひます。

○ 書籍交換

ビーシー州バンクーバア市郵函一七一二 池川むら子

▲不用の書。A BADBOYS. DIARY（いたづら小僧の原書）

THE MAID-AT-ARMS. 54—40 FIGHT.

THE MERRY MEN AND OTHER TALES AND FABLES

THE ROMANCE OF APOORYOUNG MAN

（以上小說）

及び以下雜誌；GREEN. BOOK. RED BOOK AINSLEE'S. LIPPINCOTT'S. CANADIAN. MAGAZIN. NEWSTORY. BLUE BOOK. THE LIFE.

△入用の書。歌集なきわらひ、坪內博士譯ロミオエンドジユリエツト、夜雨集、鷗外博士譯一幕物、史劇十二曲、及び以下雜誌アラ、ギ、美術新報、みづゑ、新潮シレエネ等其他太田三郞氏畫集等御送附下されし方へは美しき英文小說や英詩集を以ておれい致します。（P.O.BOX 1712 VANCOUVER.B.C）

○

神田區錦町一丁目二番地

鈴木富枝

△誠に申し兼ねますが皆樣の御內で本誌增刊今の婦人御所持の御方は、私の所持して居ります、娘時代か秀才文壇の增刊高潮號と御交換下さいませんか、さもなくば二日程、拜借さしていたゞきたいのでございますが御願ひ申します。

○

仙臺市空堀町井上方

妙香

△皆樣の內に藤村操の「煩悶記」「思ひ出の記」をおもちの方は何卒おかし下さいませんか御禮はきつといたします。それから藤村集も……。

○

大阪市東區森宮本町

阿部秋子

△入用の書。本年女子文壇一二三月號、昨年女子文壇一二月號、新婦人少しく古くともよし

▲不用の書。文學世界、文藝くらぶ、女子文壇の文壇の光、短編小說、新文章、其他の增刊又小說新體詩など古きものにてもよろしく御送り下され度御禮は必ずくいたします。

○

東京府王子町上十條高木金太郞方

小川百合子

△皆樣方の內で藤村詩集、藤村操の煩悶記、スヰートホーム、ホーネームン、御持ち合せの御方は

▲私の新金色夜叉、小姬君、旅硯、洋行奇談赤毛布、其他古雜誌等色々御座いますから其內いづれとも御交換を御願ひ致します。

○

宮城縣登米町

豐原春子

▲不用の書籍、「家庭の模範」「世界格言大全」「深山櫻」「新刊小學校令準據實用敎授法」「桂月

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

著、新體書簡」を御讓り申します外に本年の秀才文壇數冊、詩歌、女學世界、文章世界、數十册もあります、はがきにて申込の事。

△入用の書籍。五十嵐氏著實用新作文御所有の方は是非御讓り下さい願ひます。

○東京牛込早稻田鶴巻町二二三
須藤清平方　春江

▲私の手元に次の樣な本がありますから御望みの御方は玉章寫眞或は御手製の栞折又は附箋圖か又はりぼんを御送り下さいませ。日本座敷の飾り方、歌ものがたり、若き女の日記旅よりたびへ、水滸傳物語、西洋女大學、最新寫眞術精縫おさらひ、絹はんかち等ですから左樣御承知下さい。

○茨城縣新治郡高濱町
立川竹子

▲丸山晩霞先生著 水彩畫法御讓り申度し私丁寧の性一點の投所もなし 御望みの御方は御一報あれ。

○大分縣國東郡國東局區豐果園丸
小野　那珂萩子

▲持つて居る書物。妻、生、殘風纖風、新麗風纖風、新己が罪、不如歸、寄生木、琵琶歌上、思ひ出の記、春。

△讀みたき書物。伯爵夫人琵琶歌の下、白光、收穫。

右の書物と御交換ください 繪葉書やレターの交換も御願ひ致します。

○島根縣島根郡中の村
白須みゆき

△皆樣の內で今の婦人と若き婦人とをおもちのお方はお貸しあたへ下さいませんか御禮は必ずいたしますから。

○京都府紀伊郡上鳥羽村田中前四郎方
柴田さく子

△諸姉樣の內にコブシ中下、寄生木、筆子二、天うつ波の三四、お持ちでしたらしばらくおかし下さいませんか、お禮には、若き婦人、地方の婦人、日常生活の敎訓、花もみぢなどの當地方のゑはがきを添へてお禮致します。どうぞおねがひ致します。

○長崎縣諫早宇土
森みね子

△皆樣の內に「寄生木」「夢二畫集」藤波先生著の「合せ鏡」御不用にて候はゞ「不如歸」「金色夜叉の歌」「先坊消生花のしとり」其外今年の女學世界等と御交換下さいませんか 但しは二週間餘りお貸し下さいませんか 御交換か御貸し下さる節は何卒葉書を。

○大阪市西區九條通三丁目尾崎茂一方
板東まさえ

△去る四十二年十月二十七日より同年十一月十日迄、四十三年二月八日より二月十五日迄。同二月二十七日より月末迄、四十三年五月二十日より同年十一月九日迄 (但し此度は或部分を拔萃した後は御返し致します) の大阪朝日及大阪每日及東京時事及萬朝報御所持の御方は是非共至急御知らせ下さい 私の持つてゐる小說か文藝雜誌(古いのでも新しいのでも)と御交換下さいそれ共相當に讓つていたゞいてもよろしいから是非至急！

○市內麴町區飯田町二丁目四一
千代田方　村田ふさ子

△お姉樣方の內で歌集（どなたのでもかまひません）や和歌講義錄(大日本短歌會發行)をお持で被在いましたら皆揃つて居なくても二三冊でも宜しうございますから相當代價でお讓り下さいませ そうして便宜の爲めなるべく市內の方にお願ひ申し上ます前以てハガキで……。

○靜岡縣賀茂郡南上村毛倉野
菊地づさ子

▲持つて居る書物。種彥の一田舍源氏全」「文章組立法」「乙女の操」「我が散文詩」、大町桂月著「日本外史評譯」「吾が輩は猫である」「ツルケネフ」「散文詩」「紅葉集卷四」「花袋小說作法」。

△讀みたい書物。「眉山全集」「花袋叢書」「西鶴のもの」「藤村集」「二十八人集」、其の他詩歌集諸鞻の手紙必ず先にハガキを下さい。

○靜岡縣濱名郡笠井町金田類二方
鈴木京子

△讀みたい書物。スヰートホーム(內藤千代子)金色夜叉、追懷、若き女の手紙、寄生木、女の操、朝霧、食後、小姬君、女道樂、食道樂、其の他の小說。

▲持つてゐる書物。夜雨集、拾小舟、美文の錦、裁縫敎授法、家庭節用、瀧口入道、女子和洋禮式作法新書、夢二畫集、婦人世界、女學世界、女子文壇婦女界、婦人界、少女世界、少女の友、少女界、敎育敎科書は高等女學校使用の本ならば皆なございますどうぞ交換をお願ひいたします、繪葉書お好みならば上げます。

○大阪市東區寺山町五〇二ノ一小川席太郎內
清子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

▲持てる書物(ポケット我が散文詩、女の秘密、文のかきぶり、黄金窟、奮闘の青年、大和田建樹の美文女子記事文林、女子記事文、女學生消樂、婦人畫報、女學世界、女子文壇等。
△讀みたき書物。内藤千代子のスヰートホーム或は寫眞等にて交換致し申候。

○　常陸新治郡下大津村　飯田精子

▲所有物。「女學世界」「少女世界」以上古物、右の物不用に付左の物と御交換下さいまし 御情深き姉上様に御願ひ致します。
△入用物。繪葉書、婦人世界。
右いづれも御問合せてからにして下さい。

○　山口縣都濃郡富岡村廣谷　吉光千代子

▲不用の書。新書翰(薄田泣菫薄田鶴二共著)病間録(綱島梁川)悲劇ト番其他四十三年頃の女學世界、實用教授法要(小平高明)
△入用の書。「夜雨集」「新式化粧法」(藤波芙蓉)其他の書籍と御交換下され度 御望のお方は右記まで端書にて御知らせ下されたし。

○　山口縣大島郡蒲野村西水島内　ちゑ子

▲月見草咲く夏の夕の海邊は氣持ようございます「雪か螢か卯の花か、いとも涼しき夕まぐれ……」妾はコーラスならぬ低唱をひとり樂しんで居ます 此頃何かしら詩集に憧れてます又美しい物語も好みます 次の書とお換へ又は交換願ひます御知らせ次第此方から送ります「バイロン」「詩集」「新世帯」「山上より」「會話文範」「小品文範」其他雜誌種々。

○　東京神田錦町三ノ五金井トク方　田中春代

▲私の手元には次のやうな本がありますから皆様の内でみなさんの御寫眞又は玉章、リボン、枝折其他皆様御手製の品物或はハンカチを恵み下さいました御方に左の本の中何れでも差し上げます。
書籍、言海、己が罪、寄生木、思出の記、肉彈、樗牛全集(五、六、八、九)武蔵野、春、日用料理、眞澄ノ鏡、井上通女、花袋小品、女性と趣味、國華(四十三年中二、五、六)最新美人法、士、毒、筆子、金色夜叉、女子職業案、英文不如歸、雪月花、筆のしづく。
雜誌。女學世界(四十一年一月より四十三年八月まで)婦女界(四十四年全部)女子文壇　女學生　婦人畫報等。
機械。寫眞器、シンガーミシン、ハーモニカ、手風琴等。
以上の通りありますからみなさんの御好みの品をさして下さい。

○　金澤市高岡町千田方　千草女史

△皆様の内で正月號(本年度)の本誌及笑、秀才文壇御不用の方があつたら何卒讓つて下さいまし御禮はきつと致しますわ、深川の矢澤榮子様何卒交際して頂戴な。皆様もよろしくね。

○　神田錦町三丁目十六番地中川すゑ方　里谷草影子

△皆さまの御うちで竹久夢二先生の書集「都會の巻」「野に山に」「春のかわたれ」「見知らぬ世界」「櫻咲く島」及び柴田流星先生の「殘されたる江戸」以上御不用のお方は何卒御ゆづり下さいまし 失禮ですが先着御二方だけ倫敦寫眞帖を差上ます。

○　宮城縣亘理郡荒濱町本家武者家内　虫屋みね子

▲妾が不用の本。笛、家、緣、春、其他。
△求むる方。夜雨集、此一戰、火宅、荒野、新文林一巻七號、新聲十九巻四號二十一巻七號、青鞜本年四月號其他。

○　東京市外西大久保一〇七文學倶樂部内　太田義子

▲大概の雜誌は毎月十部以上づゝ入用で買ひますから一箇月後れで宜しければ文學書類と交換を願ひます、相當の標準を以て――前以て葉書でお知らせ下さい。

○　青森縣青森市新安方町八十四　松井方　長尾にしき

▲不用の本。「新選文藝全書」「美文斷錦」「花紅葉」「婦人世界」「朝日櫻上下」「なさけもの」「數學講義錄」半箇年分と
△望む物。「ハーモニカ」と交換致したいのですが若し交換して下さる方が御座いましたら御一報下されまし御願ひ申ます。

○　府下巣鴨村明治女學校内　野口方　大浪せい子

△皆様の中に藤村詩集、淑女かゞみの四月號を御持ちの方が御座いましたら御送り下さいましな、相當な物で御禮致しませう。

▲讀友くらぶ投稿歡迎！
▲投稿到着順に必ず出る！

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新刊

○模範故事熟語辭典　遠藤博士監修

文學博士遠藤隆吉氏の監修で、大島庄之助、小野機太郎兩氏の編輯である。世に辭書も澤山あるが此辭書は就中語數が多く、而して解釋が簡潔で要領を得てゐる、世間普通に使ふ熟語で無いものはない、六號活字二段組千百餘頁にぎつしりつまつてゐる、男女學生は勿論、新聞雜誌書物等凡て文字を讀む者には暗夜の燈火ほど大切な用を足す辭書である、而かも價の低廉なるは無比と云つてもよい。（定價金一圓二十錢、麹町區富士見町六丁目長風社書店出版）

○評釋伊勢物語　窪田空穗著

此書の體裁は初めに本文を置き、次に「釋」を置き、次に「評」を置き、また本文と云ふやうに一段〻〻然うなつてゐる。評も釋も空穗氏獨得のなだらかな、透徹した心持で書いてゐるから、他の學問一點張で、文字や章句の解釋にばかりこせ〻〻してゐる評釋類とは大いに違ひ、伊勢物語其もの〻思想を呑み込むことが出來る、國文評釋を新しくやらうとするには何うしても此方法でやらねばなるまい。（函入美本定價金八十五錢、神田表神保町二、中興館書店出版）

○續少女模範文集　溝口白羊編

先に出た少女模範文集の續篇である、作者は何れも花の如き少女達、文章はいづれも玉の如き自然の文、殊に編者は少女の文章詩歌に厚き同情を持てゐる唯一の人であるから編輯の上にもそれが表はれて、全卷に輝く一つの色調が見えてゐる、文を愛する少女達には嬉しき賜ものであらう。（定價金三十五錢、神田區南乘物町誠文館出版）

○マグダ（故鄕）　島村抱月譯

ズーダーマンのマグダはノラと共に近頃我國の劇界の評判となり、婦人界の問題となつた脚本である、内容はくだ〻〻しく云ふ必要はない、今回中澤弘光氏の挿畫（木版色刷）を加へ美しい函入の書物となつた、劇を見た人も、見ない人も一應は讀んで置くべきものであらう。（定價金九十錢麹町區平河町五、金尾文淵堂出版）

○若き女の日記　溝口白羊編

若き女の手紙が評判になつたのを當然だとすれば、本書も亦評判になるべきものだらう、手紙と日記だけの相違で、編者の用意萬端は少しも變らない、夢二氏の表紙口繪大いに氣に入つた（定價金四十錢淺草區下平右衞門町、岡村出版）

○哀花熱花　兒玉花外著

悲哀と熱情は詩人花外氏の生命だ、氏は珍しく詩人肌の生活を押通して行く人だけあつて、散文を書いても、詩を書いてゐる心持だから面白い、本書は現代文藝叢書の第十一編である。（定價金二十五錢日本橋通、春陽堂出版）

○追懷　紋島大浪著

初版再版瞬く間に賣切れ三版となつた、著者は事實だから面白からうと云ひ、讀者は小說だから面白いと云ふ、女が讀んではらくする小說なり。（定價金二十八錢麻布霞町、好文堂出版）

○雁のおもかげ　多田親愛書

女子用文章——即ちお手紙の習字の手本だ、多田親愛氏の書は有名なだけに、女の人の字を習ふには斯う云ふ書物を手本にすると上手になるだらう。日本紙摺和裝（定價金二十錢淺草區下平右衞門町、岡村盛花堂出版）

○アルネ　矢口達譯

ビヨルソン原作アルネの譯が出た、島村抱月氏が北方文學の代表的作者の譯が現れたのを欣ばられた如く、吾人も其意味に於て本書を尊敬する、殊に譯文のなだらかなのは何より好い家庭の讀物として世の婦人達に推奬する。（定價金六十五錢小石川高田豐川町、新陽堂出版）

○薄馬鹿大將　植松美佐雄著

現代を背景にした滑稽小說で、筆はすらくと能く暢達してゐる、一般向の書。（定價金四十錢本鄕東片町、本鄕書院出版）

○都會より　大橋醉月著

物のあいろも分らぬやうなドス黑い煤烟の中に呼吸してゐる大阪の現代人が、烈しい、恰ましい絕望の苦さを歌つた一種の散文詩である。「二十六の女」以下數篇、どれにも皆押迫つた、せつない都會生活の心持が現はれてゐる。これといふ舞臺を持たない悲しさに、世間では餘り注目してゐないが、近頃の大阪の若い人々の藝術品には、たしかに新しい香がある。小さい本だけれども、嬉しく讀んだ。——白羊（價三十五錢大阪南區鹽町通心齋橋北、矢島誠進堂發賣）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

雜報

皇后陛下の行啓

畏くも　皇后陛下には六月三日お茶の水なる女子高等師範學校へ行啓相成り、生徒の學業をみそなはせられた。當日は午前十時三十分御出門、同校にては中川校長以下職員生徒約一千九百名、御奉迎申上げた。陛下は御少憩の後、陳列せる生徒の成績品を御覧あり、午後は生徒の唱歌、朗讀、談話等を聞し召され、職員達にも畏き御諚をたまはり、午後三時三十分玉顔麗はしく御還啓遊ばされた。同校は開校以來、今回にて十一回目の行啓を仰ぐ次第なるが、誠に女子教育界の光榮と言ふべきである。

東宮妃殿下行啓

小石川なる日本女子大學校では、六月八日、東宮妃殿下御台臨の榮を得た、殿下には當日午前十時着御、職員生徒等に謁をたまひ、校長の御案内にて幼稚園を初め校内隈なく御巡覧あり午後は全校生徒代表者が交るく御前演習を爲し、校庭に於ける運動等を御覽に入れ奉る、殿下には紀念の爲め校の一隅に小松を御手植遊ばされ、午後四時御氣色うるはしく御還啓遊ばされた、私立の女學校に行啓を仰いだのは、之を以て嚆矢となす。同校空前の榮譽であらう。

晶子女史の着佛

與謝野夫人は西比利亞鐵道の旅程恙なく、六月十九日午後四時無事佛蘭西巴里の都に着いた同女の滿足は勿論、寛人寛氏の欣びも推して知るべしであらう。

博文館の祝賀

創立滿二十五年に達したる博文館は、紀念の爲め六月十五日帝國劇場に天下の名士名流約一千餘名を招待し、盛んなる祝賀會を開いた、大隈伯の祝辭、大橋館主の挨拶、其他餘興の女優劇等ありて近來の盛會であつた。

繪入雜誌

同胞を愛する姉樣達は

お伽世界

妹や弟の爲に之を與へよ

來る八月一日本社より發行する新雜誌

涼風

▲鐵道院では前月十五日より東海道の幹線を初め、汽車の發着時間に大改正をした、旅行する人達は注意して間違はぬやうにせよ。

▲藤田豊八、佐々政一（醒雪）、吉田熊次、藤井乙男の四氏は文學博士となつた。

▲南極探險隊の乘船開南丸は、小さなる船體を以て能く南極の遠きに到り、無事前月二十日品川沖に着いた、野村船長の熟練は世人の認むる處となつた。

▲一旦禁止された文藝協會の脚本マグダは或る一二箇所を改定して禁止を解かれ、大阪に於ても興行した。

▲雜誌「趣味」は復活した、此度は四六二倍の大形な雜誌となつた、坪内博士を初め大ぶ文士の顔揃ひである。

▲芝公園十四號の二女子木の花會では例年の通り婦人の富士登山希望者を募集してゐる、十五名限り、入會金五十錢、實費七圓位、申込は本月十日までなりと。

渡邊與平氏逝く

新進畫家渡邊與平氏は先年來病氣に罹つてゐたが、終に起たず、六月九日午前二時不歸の人となつた、行年僅に二十四歳、氏は青年の畫家として未來があつたのに惜しいことをした、夫人文子との間に一男一女あり、氏は長崎に生れ京都にも學んだ出京後は專ら修養に努め傍ら本誌を初め各種の雜誌に執筆してゐた、文部省展覽會にも出品して入選した、今や再び溫厚なる氏の風丰に接するの日はない、悲むべき哉。

『少女』の改題に就いて

本社發行の『少女』が『お伽世界』と改題されしに就いて、從來『少女』に投稿せられたる諸孃は『女子文壇』に投稿せられんことを希望す、記者は之を歡迎するに躊躇せず。

七月

愈よ夏になりました、強烈なる日光の輝きと火熱の焰のやうな空氣と、盛んなる夏が來ました、夏は暑いけれど、青春の人々には、活動を思はせる時です。

暑中休暇の初まると同時に、若き人々も海や山へ行きたいと思ふ、旅行のシーズンです、海へ行く人も多くなつたのですが、山へ行く人も決して少くありません、吾等はいつも山を想ひます。

山は富士山に限らない、富士登山も無論結構ですが、山の經驗もないかよわい婦人が、最初に富士へ登らうなど〻思ふのは聊か無謀です、山は何處でも好いから、お登りなさい、登山は見榮や流行ではないのです。

四萬六千日だの、草市だの、東京の街も賑やかな日が來ます、天神祭だの、住吉祭だの、大阪の街も遊ぶ日が來ます、田舍は半夏生、土用の入など、田植をしまつて一休みする時です、草引に、灌水に、夏日の勞働は直ぐ續くのです地方の人達はゆつくり遊ぶ暇もありません。

日曜　七日　十四日　二十一日　二十八日

▲注意　本誌は本年度より從來の增刊を廢し、年四回（一月、四月、七月、十月）定期號を特別三百頁の大冊として發行することになりましたなほ左の定價表を詳しく御覽下さい

○本誌投稿及懸賞規定

▲投稿は凡て女子に限る▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること▲原稿は凡て女子文壇社宛（未納税は斷じて受付ず）に送ること、▲小説と詩は振假名をつけること▲小説は二十四字詰八十行以内、散文は三十行乃至五十行、初作は三十行以内▲各種類每に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす、▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る▲別に本欄の原稿を募る長さは二十四字詰二百行內外とし總振假名をつけること▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め大さは二寸に三寸一人一枚限。

◉投稿は每月十五日到着を以て嚴に締切る

▲小說と散文は　▲天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す▲『詩』は天賞金貳圓地賞金七拾錢、人賞金四拾錢▲『和歌』『俳句』『圖畫』『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す▲『本欄』は金五圓以下壹圓以上正金にて呈す（但し短きものは此限にりあらず）▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す

女子文壇　定價　每月一日發行

四十五年一月より左の通り改定す

◉特別號一冊金參拾錢　送料貳錢

◉普通號一冊金拾五錢　送料壹錢五厘

◉半年分（特別二冊普通四冊）前金壹圓九拾錢　送料拾錢

◉壹年分（特別四冊普通八冊）前金貳圓八拾錢　送料貳拾錢

特別號は一月、四月、七月、十月號なり、其他の月は皆普通號です。

▲從前の定期增刊は無くなりました

申込注意

注文は總て前金のこと。振替貯金にて拂込の時は必ず雜誌代金の外に登記料金壹錢增しのこと、郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと。郵券代用は必ず壹割增のこと最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ

▼廣告揭載料　申込期限 發行前月十五日

壹等割引　一頁貳拾五圓（半頁廿四字三十二行）　半頁拾圓
貳等割引　一頁貳拾圓
參等割引　一頁拾五圓　一行四拾錢（一行五號字二十四字詰）

取扱所　博報堂。電報通信社。文明廣告社。弘報堂其他いづれの取次店にても取扱申候

明治四十五年六月二十五日印刷納本
明治四十五年七月一日第八年第七號發行

編輯兼發行人　野口竹次郎
印刷人　松本魁
印刷所　東京國文社

不許複製

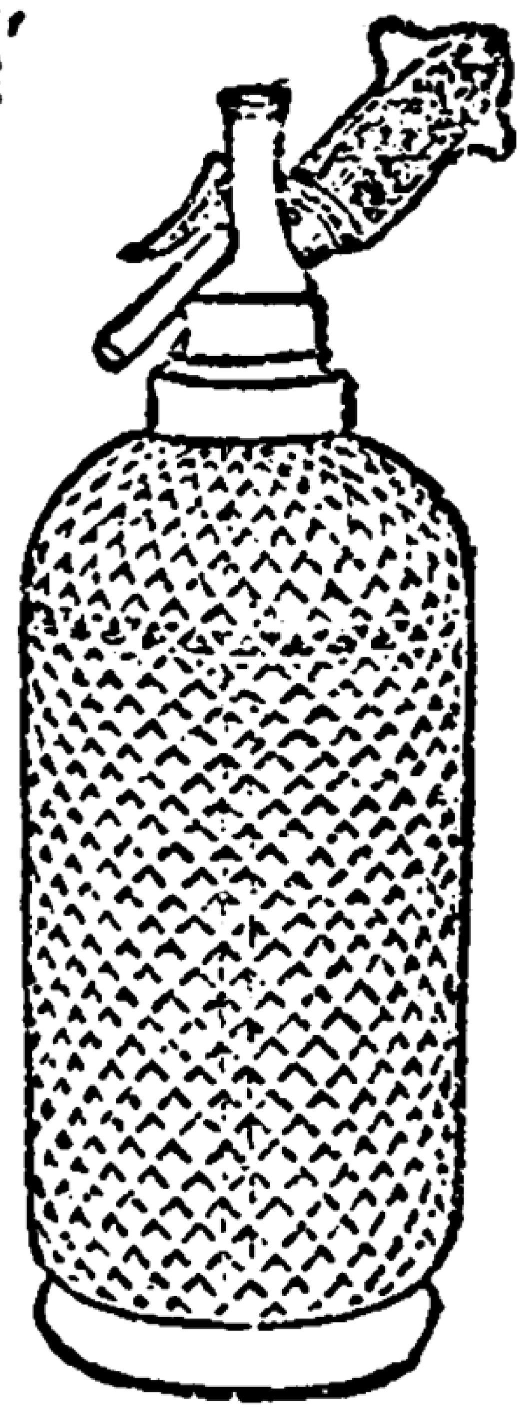
發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　女子文壇社
〒電話京橋六〇七番
振替東京壹七貳九番

特約販賣　東京堂、北隆館、上田屋、至誠堂東海堂、良明堂、大阪盛文館外

博通社 ㊕ 特賣品

◉中元贈答に精良品を安心して安く御求め出來るのは博通社に限る!!!

◉英國製サイホン器械



サイダー、ラムネ、オレンジ等を召し上る方は何時も其の選擇に迷ふは弊社の耳にする處である、如斯き不便を避くるが爲當社卒先して輸入したる器械で清水又は蒸溜水に自分の欲する味を付け發生瓦斯をネジコムときは其作用に由り極めて輕く且つうまく飲める事請合である殊に體裁頗る優美なるか故に中元の贈答用として最好適品なり

◉金網張サイホン器械 特價貳圓八拾五錢 發生瓦斯一打に付 金壹圓

▲荷造送料市内無料内地廿五錢臺樺清朝五拾錢

◉最新式アイスクリーム製造器械

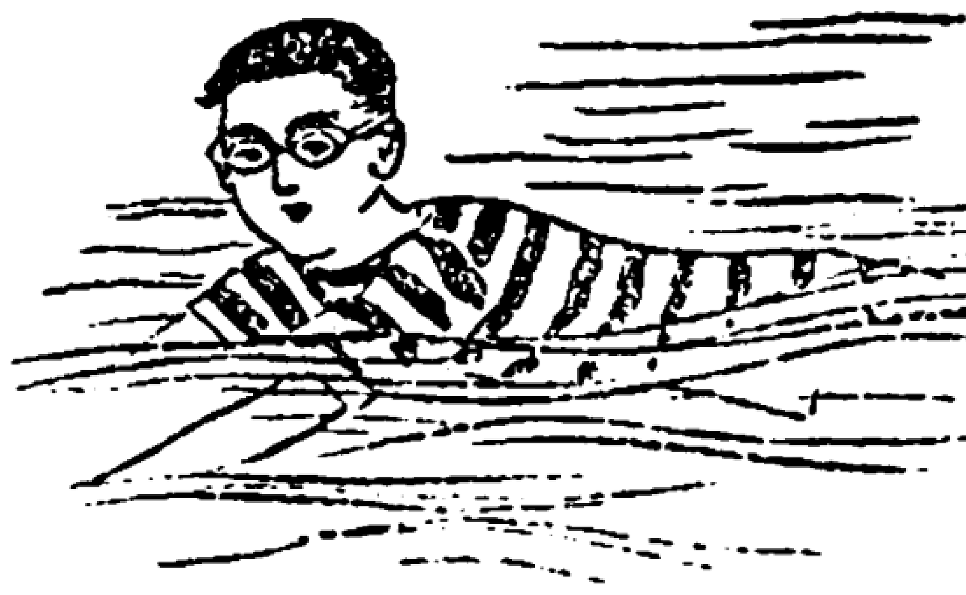


經濟と衞生を重んぜらるゝ家庭には是非共本器を求めらるゝ必要あり、素人でも添付の使用法を御一讀なされば必ず出來そこないなく頗る上等のアイスクリームを僅か十分間に召しあがる事が出來る而已ならず高價なる舶來品の半額で御求めが出來器械の堅牢なるは遂に本器に及ばず

◉十人前造家庭用特許アイスクリーム製造器械一臺 特價貳圓四拾五錢

▲荷造送料市内無料内地廿錢臺樺清朝四拾五錢

◉博通社の本領は誠實と迅速にあり!!!



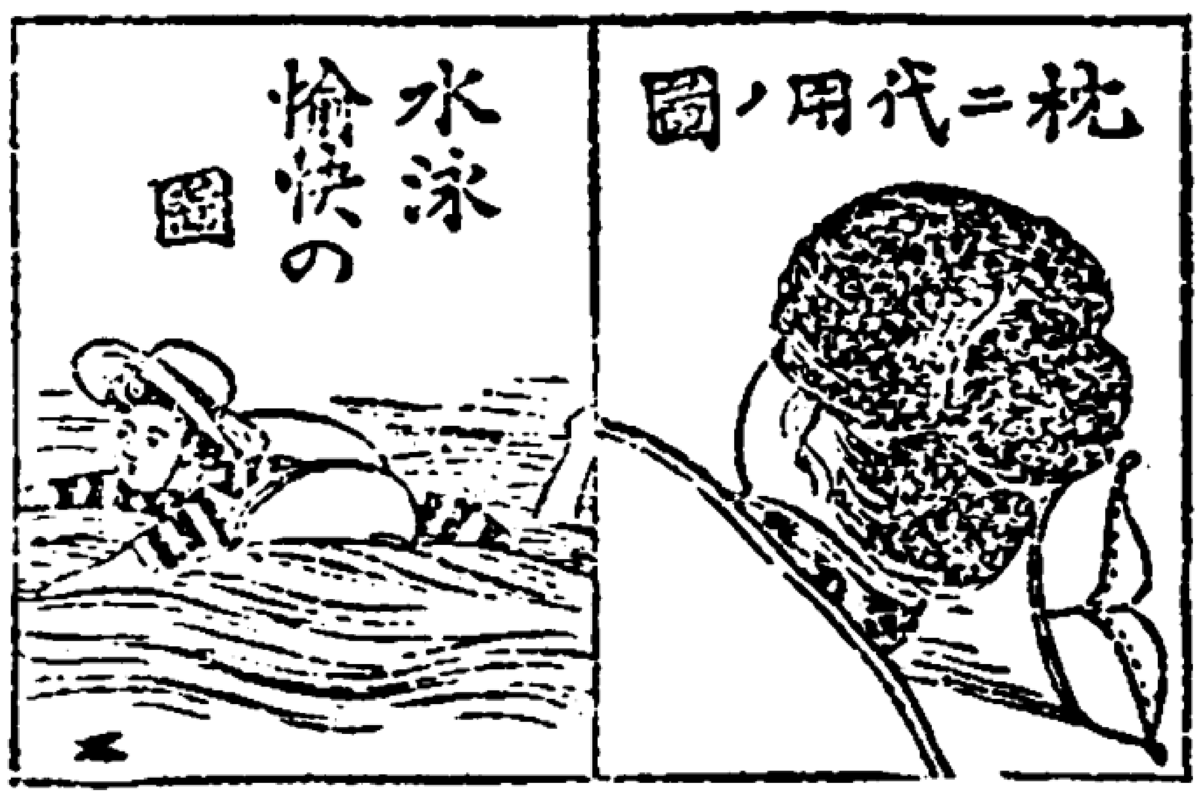
◉潜水眼鏡

衞生を重んずる人は本具の必要あり!!

本器は頗る精巧なるが故に目の部分へ巧妙に附着し決して水の浸入する事なし故に淡水海水を問はず水泳の節は必ず本具を使用するを以つて衞生上缺くべからざる要具となす

◎特製 特價九拾五錢
◎一號 特價五拾五錢
◎二號 特價參拾八錢
◎三號 特價參拾錢

▲送料内地臺、樺、清、朝凡て四錢



◉新案特許浮袋

二十貫の大人でも容易く浮!!!

善く泳ぐ人、泳げざる人を問はず生命を重んずる方は是非共本具の必要を認めます、入つてはブイとなり出でては枕となる天下如斯重寶なる遊泳具ありや

一具 特價九拾五錢

▲送料内地八錢臺樺清朝卅錢

博文館代理部

OHASHI MAIL ORDER BUSINESS

東京日本橋區本町一丁目

博通社

電話本局六百十四番
振替口座東京五〇番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

(明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可)

火の無い處に煙は立たぬ

婦人良藥中將湯が
山の奥から海の果てまで
御婦人の信用を一手に集め
婦人病なら中將湯と
一も二もなく仰せになるは
効顯の大と誠實なる營業の
二大特長あるが故

中將湯は子宮血の道より起る左の諸症を治す

- 子宮病　血の道
- 内膜炎　膣加答兒
- 下腹痛み　夜眠れず
- 難産流産　氣ふさぎ
- 月經不順　産前産後
- 胸先差込　腰足冷込
- 白血長血　こしけ
- 癇高ぶり　月經滯り
- 逆上頭痛　月經痛み

定價

四日分	三十五錢
一週間分	六拾錢
二週間分	壹円拾錢
三週間分	壹円六拾錢
五週間分	貳円五拾錢

本舗

東京日本橋通四丁目　津村順天堂本堂　振替口座六〇八番

大阪市堺筋大寶寺町　津村順天堂支店　振替口座四五六番

